

FAIRY TAIL 守る者

Zelf

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある青年が、FAIRY TAILの世界に転生して、大切な人達を守り抜く為に努力するお話

目次

序章（原作開始前）

第1話 守る者、始まり | 1

第2話 魔法のキツカケ | 9

第3話 化け猫の宿【ケットシエルター】 | 18

第4話 空から来た卵 | 27

ニルヴァーナ編

第5話 連合軍、集結！ | 35

第6話 六魔將軍【オラシオンセイス】現る！ | 41

第7話 少女と亡霊 | 53

第8話 優しい魔法 | 60

第9話 星霊合戦 | 72

第10話 破滅の行進 再起、クリステイナー！ | 79

第11話 天馬から妖精たちへ | 88

第12話 想いの力 | 96

第13話 たった2人の為のギルド | 106

日常編

第14話 新居建築 | 115

第15話 ドラゴノイド | 124

第16話 虹の桜 | 139

第17話 初めての大事な仕事と初めての…？ | 147

第18話 ロードレース | 160

第19話 ギルダーツ登場！ハートクロイツ社へGO？ | 165

エドラス編

第20話 アースランド | 174

第21話	エドラス	181
第22話	王都	190
第23話	大暴れ	198
第24話	作戦開始!	207
第25話	コードETD	217
第26話	連携(リンチ)	225
第27話	終焉の竜鎖砲	235
第28話	D R A G O N S E N S E	246
第29話	終わりの始まり	254
第30話	バイバイ、エドラス	266
天狼島編		
第31話	S級魔導士昇格試験	279
第32話	運がいいのは誰?	288
第33話	立ちはだかる壁	294
第34話	永久のキズナ	301
第35話	メスト	308
第36話	悪魔、襲来	317
第37話	竜と神	323
第38話	守る意思	335
第39話	ゴージュvs.ラスティローズ	340
第40話	ゴージュの過去①	347
第41話	さらなる波乱	354
第42話	瓦解の危機	360
第43話	逆転	366
第44話	チーム分け	371

第45話	V.S. ハデス 暴走	378
第46話	V.S. ハデス 紋章を持たぬ男	388
第47話	V.S. ハデス 決着	400
第48話	世界を超えた出会い	413
第49話	デジモンの謎	427
第50話	手をつなごう	438
第51話	X791年、妖精の尻尾	452
日常編 その2		
第52話	空白の七年	468
第53話	デジモン達の過去	476
第54話	魔法舞踏会	488
第55話	真の悪、ケツプリ団	506
第56話	透明ルーシイの恐怖	513
星空の鍵編		
第57話	父の遺品	520
第58話	怒濤の対決！ナツV.S. ラクサス	527
第59話	友の為に	539
第60話	敗北	552
第61話	全力の訓練	561
第62話	旅の仲間たち	571
第63話	計算をこえるもの	579
第64話	闇の力	590
第65話	光の聖獣	599
第66話	動き始めた刻	614
第67話	哀れな傀儡	623

第91話	リユウゼツランド	834
第90話	ウエンデイVS. シェリア	827
第89話	ラクサスVS. アレクセイ	821
第88話	伏魔殿	816
第87話	カグラVS. ユキノ	810
第86話	ミラジエーンVS. ジエニー	803
第85話	エルフマンVS. バツカス	797
第84話	戦車	792
第83話	一日目の夜	783
第82話	試合、決着	775
第81話	ゴーシユVS. ジュラ	767
第80話	隠密	760
第79話	新規ギルド	753
第78話	空中迷宮	746
第77話	大魔闘演武に向けて	739
第76話	取り残された者達	731
第75話	修行開始	719
第74話	海合宿一日目	709
第73話	そして俺達は頂上を目指す	701
大魔闘演武編		
第72話	笑顔のまま	691
第71話	呪いの解放	678
第70話	ミツシエルの正体	659
第69話	打開の策	652
第68話	暴走の痕	641

第92話	海戦	844
第93話	戻った記憶	853
第94話	ナツVS・双竜	861
第95話	改変への道	869
第96話	潜入	877

序章（原作開始前）

第1話 守る者、始まり

それはある日、もう丑三つ時といえる時間のことだ。仕事帰りにコンビニに立ち寄り、週刊少年マガジンに連載されているフェアリーテイルを立ち読みした後に買い物をして、自宅へと帰ろうというところだった。こんな夜中なのに、中学生くらいの子供が道路のど真ん中にいた。俺が住んでいる所は田舎でこんな時間に車が通ることなどほとんどない。だからといって、こんな夜中に車に轢いてくれという行為をしていいというわけではないので、車をその辺に路上駐車して降りその子供に注意しに行くことにした。

「おーい、君！大丈夫か？そんなところにいると危ないぞ」

近づくとその子供は少年で、フラフラしているのがよく分かる。誰かが酒でも飲ませたのかもしれない。とりあえずこのままここにいるのは危ないので、歩道まで連れて行こうと思いをかけた。が、その子供は何の反応もせずまた道路のど真ん中をフラフラと歩き出していく。誰だこんな状態になるまで飲ませた奴は。そう思いながら少年を追いかける。

道路の曲がり角に差し掛かったところでその姿が光に照らされる。それを理解した時、少年を助けようと動く。少年はきづいていないのか未だにフラフラと進んでいた為、少年を前に突き飛ばす。少年は転んでしまったようだがこれで轢かれる心配はない。問題は俺の方だった。別方向から来た車、というかトラックはブレーキをかけていないのが分かった。こんな夜中に飛び出してくる奴はいないだろうと思っていたのか、それとも電話か居眠りかしていたのかもしれない。

その後俺がどうなったかは…まあ、察して頂けたらう。俺の心残りには、まあ色々あった。まだ25年しか生きていない。結婚どころか恋愛という感情も抱いたことがなかったし、最後までゲームやアニメばかりの人生だったから他の趣味とかも新しくつくってみたかつ

た。友達も全然つくれなかったな。小さい頃はそんなことなかったと思うが、親が所謂転勤族だったから引越しばっかりで幼馴染と言える友達なんてできなかった。他人と話を合わせたり愛想笑いしたり：同窓会とかに顔は出すけど別に誰かと遊ぶこととかほとんど無かった。

このまま、俺は死ぬのか……？

家族は：怒るかな？それとも悲しむか。色々と迷惑ばかりかけて、結局親孝行と言えるものができた気がしない。最後に良いことをしたということ、許してほしいな：子供が先に死ぬんだから良いことではないか。後の心残りは：そういや、さつき読んだフェアリーテイルを最後まで読めなかったな：続き、読みたかった。

あ、そうだ。少年は無事か？転ばせちやっただけど、怪我はしてないかな：駄目だ。もう目が霞んでほとんど見えない。トラックの運転手も無事かな？人を轢いてしまったことになるから、逮捕されてしまうのだろうか：なんか、申し訳ない気がするな。これから一生この事実が運転手を苦しめるかもしれないと思うと。俺だったらもう一生が終わった気分になるだろう：まあ、実際もうすぐ終わるところだけだ。

長々と考えてたけど、走馬灯は見なかった。そして、段々思考することも億劫になっていく。死後って人はどうなるんだろう：天国とか地獄とかあるのかな。どうせだったら異世界いたりとか転生したりとか：ないかな？ないか。ってか割とフェアリーテイルの件がショックだ：なんでかな？やっぱ最後に読んだ漫画だから一番気になるのだろうか？

途中から目を閉じていたけど、光が見えてきた気がする。これは：救急車とか来たのか？だが不思議なことに助かるとは全く思わない。自分の体のことは自分が一番分かっているってこういうことか。でも、手を伸ばそうとしている自分がいる。

やっぱり、生きたいんだ………。

☆

X777年、フィオーレ王国。そこは魔法の世界。魔法は普通に売り買いされ人々の生活に根付いていた。この国には雪山や樹海などといった自然の驚異も少なからず存在している。季節関係なく様々な自然の驚異が存在しているこの国には、絶景と言える景色が数多く存在している。その国を旅する少年と少女がある草原を進んでいた。「待ってよ、ジェラルル〜！急にどうしたの？」

「あそこ、誰か倒れてる！」

「え!？」

杖や荷物を持った青い髪に顔に特徴的な模様を持つ少年―ジェラルルはうめき声のような音を聞きつけ駆け出し、後から追ってきたジェラルルよりも幼い藍色の髪を持つ少女―ウエンデイが倒れていた誰かを見て驚く。

そこには一人の少年がいた。いや、倒れていた。青緑色の短髪で、顔は少し中性的な顔立ちをしているが整っていると言えるだろう。まだウエンデイと同じ年ぐらいの少年ではあったが筋肉質な肉体を持っている。服装は…ほぼ全裸だった。パンツは履いているがそれ以外は何も身につけていない。荷物のようなものも付近には無かった。

「この子、どうしたの!？」

「…どうやら気絶しているだけみたいだ。おい、しっかりするんだ！」

「ううっ…」

「気がついた！」

少年が目を覚まし、辺りを見渡す。少年と少女を見て腕で目をこすった後、再度見て驚いた様子を見せている。

「君、大丈夫か？」

「え?…ああ、大丈夫です」

「どうしてこんな所に倒れたの？」

「倒れてた…ごめん、何も分からないんだ」

「…記憶喪失か」

「何もって…君、名前は？名前も分からないの？」

「ごめん…」

「そんな…」

少年は、実際は記憶喪失などではなかった。だが、話した所で信じてもらえらると思えない内容だったから話さないことにした。名前もきつとこの世界には合わないと思った。だから何も覚えていないことにしたのだが…ウエンデイの泣きそうな顔を見て申し訳なさそうな顔をしている。

「君は…これからどうする?」

「どうするって…?」

「ジェラルル、この子も連れて行つてあげようよ!このままここに置いて行っちゃうの、可哀そうだよ…」

「そうだね…君が記憶を取り戻すまで、俺達と一緒に来ないか?」

それは少年からすれば願ってもないことだった。なぜなら、この世界に少年の居場所なんてあるかどうか分からないからだ。いや、どちらかという無い可能性の方が高い。それならば、旅をしているこの2人についていった方がマシというものだ。それ以外の理由もあつたが。

「それじゃ…お願いします」

「良かったね!私、ウエンデイ!よろしくね!」

「俺はジェラルルだ。よろしく」

ジェラルルが差し伸べた手をとる。もう夕暮れが近かつたので3人は野宿できる場所を探すことにした。その夜、ウエンデイが少年を質問攻めにして「名前も思い出せないなら、何かあだ名でも考えようよ!うーん…髪が青緑色だから、ブルーとかグリーンとかはどうかな?」とポケ○ンでありそうなあだ名を名づけられそうになつたがジェラルルがそれを止めていた。

☆

ウエンデイが眠つたのを確認し、こつそり抜け出す。どうやらよく眠っているようだ。さっきは変なあだ名つけられそうになつて大変だつたけど…ジェラルルが止めてくれて助かつた。

近くの湖のほとりへと進んでいく。湖面にキレイな月が反射していて、こんなの元の世界で見る機会なんてほとんど無かつただろう

な。でもまさか…本当に異世界転生するとは思わなかった。トラツクに轢かれて死んだと思っただが、目が覚めたらこんな草原で、しかもフェアリーテイルの世界で、小さい頃のウエンディとジェラル（ミストガン）がいるとは驚きが連続だった。何より…

湖面を覗き映った自分の姿を見る。エメラルドみたいな青緑色の髪、見た所今のウエンディと同じ年ぐらいなのに筋肉質なのが分かる肉体、そして中性的に見えるけど整った顔…これは誰だ。同じ動きをするから僕、なんだろうな…なんで？まあこの世界では元の体だと即死する気がするしいいか。魔法が使えない可能性もあるし、それにこっちの方がカッコいいしね。

「眠れないのかい？」

「まあ、そんなとこ」

「…単刀直入に聞く。君は、本当は記憶喪失じゃないんだろ？」

「分かっててああ言ってくれたのか…正直言っただけ助かったよ。ウエンディに説明できる気がしなかったし」

まあウエンディなら信じてくれるかもしれないけど、いきなり「異世界から来ました」とか言ったら変な奴だと思われるだろうし。

「それで、君は一体何者なんだ？俺たちを知っているのか？」

「…僕、異世界から来たんだ」

「…なんだって？」

…変な奴だと思われるかもしれないけど、このジェラルルだけには話しておいた方がいいかも。このジェラルル、つまりエドラスという異世界からこのアースランドに来たジェラルルなら信じてくれるかもしれない。それに原作同様に進むなら、彼とはいずれ会えなくなる。それならある程度事情を話してもいいんじゃないだろうか？

「僕は…こことは別の世界から来た。どうやってきたとか分からないけど…でも、ジェラルルみたいに魔法を使える人間なんて…いや、魔法という力なんて存在してない世界から来た」

「…そんな世界があるのか」

「あ、別に2人を見たことがあるわけじゃないよ。僕がいた世界じゃあ、こんな草原みたいな場所がなかったから驚いただけ」

…嘘は言っていない。さすがにFAIRYTAILって漫画があるって話は避けた方がいいだろうと思った。これはこの世界では未来と言っているいい知識だから。未来予知ができるとか誤魔化してもジェラールには通用しないと思う。

「…すまない。話したくないことを話させてしまったな」

「大丈夫。ちよつと、気が楽になった」

「…そうか」

これも本当。この世界でやっていけるかどうか不安だったし、今ジェラールに話せたことで多少の事情を把握してくれている人ができた。少しは安心できた。

「だが、名前がないというのは少し厳しい嘘だったな」

「ああ…そこだけは後悔したよ」

「なぜ自分の名前を明かさなかつたんだ？」

「うーん…僕の名前、この世界と全然違う感じなんだよ。外国人って言えるかもしれないけど、他の国なんて行ったことないし」

「なるほど…では、今考えてみたらどうだ？」

確かに、今考えてしまえば朝にウエンディに名前だけ思い出せただって誤魔化せるしジェラールも考えてくれるかもしれない。僕はゲームとかで名前を付ける時長い時間考えて付けるタイプだから非常に助かる。このままだと下手したらウエンディに変な名前にされてしまう。少し鳥肌が立った。身震いした僕を見てジェラールが少し笑っていたので僕もつられて苦笑する。

しかし、名前か…こういう時って元々の名前をいじるべきなんだろうか？でも、いじるのもなあ…大体、僕は元の世界で死んだんだ。まだ生きているのかもしれないが僕は死んだと思う。この世界に来て別の体で転生している以上、もう別の人間になったも同然だ。ただ前世の記憶がある人間に過ぎない。だからあんまり元の名前とか考えないようにしたい。っていうか日本人の名前だし外人にも居そうにないんだよな、僕の名前。

…とはいえ、どうしよう。名は体を表すと言うし、適当なのはまずいよなあ…。

「うーん…」

「…最悪、ウエンディに決めてもらった方「それは絶対ヤダ!!」…そ、そうか」

ジェラールが若干面倒臭がっているように見えるんだけど。気のせいかな？まあ置いておこう。それよりどうしようかな。このままでは、ウエンディに変な名前を…！早く、考えなければ！

……………。

……………。

……………よし、決めた。

「ゴージュ…はどうかかな？」

「…うん、良い名だと思う。由来は？」

「俺の世界で【守る】って意味の言葉2つを合わせたんだ」

漢字で書くと護守。僕は、元の世界である少年を守れたのか分からなかった。だから、今度は誰かをちゃんと守れるようになりたいと思った。即席にしては頑張った。うん、僕にはもうこれ以上のものは思いつかない。ジェラールも良いって言ってくれたし。

「守る、か…合わせるならファミリーネームはガードナーでどうだ？

これも守る者という意味がある」

「ゴージュ…ガードナーか…よし、それにしよう！ありがとう、ジェラール！」

「役に立てたなら嬉しいよ」

良かった、ちゃんとジェラールも考えてくれていたようだ。おかげでそれらしい名前になった。そういえばこの世界、言語は日本語だけど基本読み書きは英語だったっけ…。これはジェラールに教わらないとな。あと、魔法も教えてほしい。きつと原作には出てきていない魔法も少なからずあるだろうから、ぜひ教わりたい所だ。

「ジェラール、僕このまま一緒に旅してもいい？行く当てもないし」「もちろん。いなくなったりしたらウエンディが悲しむよ」

「…そっか。それもそうだね。それで、明日から字の読み書きとか魔法について、教えてもらえないかな？この世界のこと全然知らないから」

「ああ、分かった」

「あ、ありがとう！良かった」

「…もう夜も遅い。ウエンデイの所に戻ろう」

…ホントだ。話に夢中になって気づかなかったけど、空の月の位置が結構動いてた。あれ、もしかして僕が名前考えるのに相当時間がかつちやったかな…？ジェラールに悪いことをしたかもな。

「そうだね。それじゃ、おやすみ！ジェラール！」

「ああ、おやすみ、ゴーシユ」

本当に、この世界で最初に会えたのがこの2人で良かった。しかも今はきつと、原作が始まる（ナツとルーシイが出会う）数年前…多分、X777年。根拠はウエンデイがまだジェラールと一緒にいるから。確かグランディーネがいなくなってジェラールと出会っていて、1ヶ月ぐらい旅してたんだっけ…？じゃあまだその1ヶ月の所だから、まだ原作開始まで7年弱はある。今は魔法のまの字も知らないが、それだけあれば魔法を覚えて戦えるようになってみせる！

決意を新たに、僕は眠りにつくことにした。ジェラールと話す前は不安が多くて寝つけなかったが、今度はすぐに眠れた。ここから始めるんだ。アニメ違うけど、0から始める異世界生活、スタートだ！

第2話 魔法のキツカケ

「ジェラール、朝だよ！ほら、ゴーシユも起きて！」

「ふああっ…おはよう、ウエンデイ」

「ん…あと5分だけ…」

「ゴーシユ、起きてってば！」

「わ、分かった！起きる、起きるから揺らすなっ！」

僕ことゴーシユがこの世界に来て1週間が経った。あれからこの世界についてとか、心配していた文字の読み書きに魔法と、様々なことをジェラールから教わっている。やっぱりこの世界でも言語が共通言語のようで、日本人だった僕は最初かなり苦戦していた。でも文法とかも全部一緒だったから、中学生・高校生の頃の知識を思い出すことで何とかなっている。

魔法は…正直言って全然うまくいってない。ジェラールが言うには魔法とは、内なる気と自然界の気の波長が合わさることで具現化されるもの、らしい。気、というのは恐らくエーテルナノのことだと思うのだが…僕はそれを何となく程度にしか感じる事ができない。やはり元々そんなもの無かった世界から来たから、だと思う。こればかりは時間をかけていくしかないか。

「もう、2人ともお寝坊さんなんだからっ！早く朝ごはん取りに行こうよ！」

「ああ、分かった。すぐに行くよ」

まだ朝の5時半だというのになんであんな元気なんだろう？それだけ空腹ってことかな…ウエンデイってそんな大食いってイメージなかったんだけど。いや、まだ幼いとは言え彼女も立派な滅竜魔導士だっただろうな。

朝食はその辺の果物や魚なんかを採ってきて、それを焼いたり生で食べている。僕は料理なんかできないし、ウエンデイも将来に期待。ジェラールもエドラスでは王子だったのでしたことがないんだとか。もちろんエドラスとか王子とかは僕の想像。料理はしたことないってことしか彼は話していません。

顔を洗ったりなどの準備が終わり次第、皆で昨日見つけた果物の実っていた木がある所へと向かう。数個だけ採って、今回は生で食べた。この世界の果物は基本生で食べても美味しい。っていうか、下手に焼いたりとかしない方が美味しいと思う。少なくとももな料理が作れる奴がないこの状況ではそう思う。だって焼き加減とか分かんないし。

僕はとりあえず2個だけ頂いた。元の世界でも朝は食パン1枚と牛乳だけで過ごしていたので、やっぱり朝はそこまで食べれる気がしない。小さい体ってことも関係してるかもだけど、やっぱり別の体でも前世の習慣というのは関係するんだなあ。ちなみにジェラルルは3個、ウエンディはよほど減っていたのか4個も食べていた。滅竜魔導士は伊達ではない。まさか5歳のウエンディがそこまで食べるとか最初は思っていなかったよ。

「今日はどこまで行くの？ジェラルル」

「そうだね…あそこの草原を超えるのを目標にしようか」

ジェラルルが指差すのは数十kmほど先だろう草原。昨日は2つ山を越えた所で野宿した。最初は結構ハードな道のりだなと思っていたけど、それは2日目で全く無理のない道のりだったということが分かった。この体のスペックがすごい高い。

ジェラルルやウエンディでも普通に楽々進んでいるからこれはこの世界では普通の人のレベル、もしくは少しウエンディや俺を気遣ってるくらいレベルだと予想できる。この世界の人ヤバいね。あー、確か魔導士じゃない人でも武器だけで魔導士と互角ぐらいに戦ってる人達いたつけ。確か…トレジャーハンター？だったかな？

「ゴーシユ？大丈夫かい？」

「あ、ごめん。何でもない。それじゃ…あの木まで競争だ！」

「あ、ずるい！待ってよー！」

「やれやれ、仕方ないな」

50mくらい先にある木をゴールとして駆け出す。僕とウエンディはほぼ同じスピードだ。それに余裕を持って追いつき、そして追い抜いていくジェラルル。それほどの荷物を持っているのに、そして

その中には走りずらいであろう長い杖が何本かあるのにめっちゃ速い!

「ふう…俺の勝ちだね、2人とも」

「はっ、はっ、くっそ…また負けか」

「はあ、はあ、2人とも速いよ…でもジェラール、すごいね!ゴースユを追い抜いて行っちゃうなんて!」

あれ、ウエンデイさん元気だね?体力回復早くね?僕はまだ少し息切れしてるんだけど。大分本気で走ったんだけどな。ウエンデイもやっぱすごいな…よし、もう落ち着いてきた。うん、数秒ですぐに呼吸が整うとか前の体じゃ無理だな。この体もやっぱハイスペックだ。この世界の人間は改造人間ぐらいかもしれない。

「それじゃ、いつも通り進んでいこう」

「はーい」

…今更かもしれないんだけど、僕完璧に5歳児の精神になってないかな?おかしくはないのかもしれないけど…精神的には25歳だから少し、いやかなり恥ずかしいような言動してる気が…うん、今更だ。こんな感じのノリでもう1週間も過ごしてるんだ、割り切ることしよう。

☆

何時間か進み続けて目標にしていた草原に入った。昼下がりだが特に疲れてないし昼食も火を起こして(ジェラールが魔法で着火)キノコやそこら辺をうろついていた豚を焼いて食べたから問題ない。このまま進めば1、2時間で草原を超えるかな。そんな時だった。

「…っ!アニマっ…!?!」

「な、何?どうしたの、ジェラール…?」

突然ジェラールが後ろの方を見てそう叫んだ。僕とウエンデイは一瞬驚いてジェラールの方を見た。ジェラールはそのまま深刻そうな顔をしながら俯く。少しすると「ごめん、何でもないんだ。さあ、行こう」とまた進み始める。

(ねえ、ジェラールどうしたのかな…?)

(さあ…)

ウエンデイが小声で僕に聞いてきたけど、それは未来に影響することだし僕が知ってるのも不自然だったから教えてあげられない。

そして、いよいよこの時が来てしまったと思った。僕がこの世界に来た日に2人にいつから一緒に旅をしているのかを1度尋ねたことがある。2人は3週間ほど前に出会ったと言っていた。つまり、もうウエンデイとジェラルルが出会って4週間…もうすぐ丁度1カ月だ。つまり…ジェラルルとの、別れだ。

☆

「イヤ!!一緒に行く!!」

「駄目だ。危険なんだよ」

数日後、ジェラルルが突然これ以上は連れて行くことはできないと言われた。もちろん僕とウエンデイに向けて言われた。もちろんウエンデイは納得できずジェラルルを説得している。

「ジェラルル、どうしても駄目なの?これからどこに行くつもりなんだよ?」

「…すまない。話すことは、できないんだ…」

「ジェラルル…」

「なんでなの!?!ジェラルル!」

「この先に行くの魔導士のギルドに着く。そこに君たちを預けていくからね」

「イヤあ!!」

「ウエンデイ…」

ウエンデイがジェラルルに抱きつく。…僕はまだいい。ジェラルルと出会ってたった1週間だから。でも、ウエンデイはグランディーネがいなくなった後にジェラルルと出会って1カ月近くも旅していたんだ。本当のお兄ちゃんのように思っていただろう。

結局、僕とジェラルルはウエンデイにどう声をかけたらいいのか分からず…今日はもう休むことになった。

☆

「やつと寝たか…」

ウエンデイが眠ったことを確認する。夕方、森に入ってあんな話があつてから微妙な空気になつてしまい、ウエンデイも眠る体勢になつてはいたけど寝つけないでいるようだった。丁度あの話が始めた時から雨が降り始めており、焚き火もすぐに消えてしまうので辺りはもう真つ暗だ。雨も小雨だが降り続けている。

「ジェラールがいきなりあんな話をしたからだぞ…」

「…すまない」

「…はあ。理由は聞かないよ。どうせ話してくれないんでしょ？」

「…ああ」

ウエンデイが起きないよう少しだけ離れて会話する。もしも起こしちやったら悪い。

「どうしても…行かなきゃ駄目なんだよな」

「ああ。このまま放置しておくことはできない。だが君たちには危険すぎるんだ」

「…だったら、僕が「ウツホオツ！」っ!？」

突然真横から動物、というか猿の鳴き声が聞こえた。森の中だからあり得ないこともないが、鳴き声を見た方を見ると3mくらいはある巨大な猿がすぐ近くまでいた。確か、こいつは…バルカン？いや、バルカンは雪山にいる奴だったはずだから…森バルカンって名前だったっけ？

「ここ、俺のナワバリ！お前ら、ぶっ倒す!!」

「ゴーシュ、躲すんだ！」

「ぐっ!?!うああっ!!」

「ゴーシュー！」

ジェラールの叫びで逃げようとしたが間に合わず森バルカンの攻撃をくらう。お、重い…！飛び退いた上に防御もすっかりしてたのに…！しかも、なんでこんな奴がいきなり出てくるんだ!?!しかも、さっきいた場所からいなくなっている。どうやら、木々を飛び移っているようだ…これはまずい！

「ゴーシユ、無事か!？」

「だ、大丈夫!それより逃げないと!」

「ウエンデイ!起きるんだ、ウエンデイ!」

「ん…ジエラール?どうしたの?」

「説明は後だ!早くここから…」

「ジエラール、危ない!!」

僕よりもジエラールの方が強いと判断したんだろう。ジエラールがウエンデイを起こしている隙にさつきよりも素早い一撃を放ってきた。しかもジエラールの死角からだ。それはつまり、僕からは反応できる方向からだった。

「ぐあっ!」

「ゴーシユ!!」

「ウエンデイ、ゴーシユの傍にいるんだ!俺が守る!」

さ、さすがに2発目は厳しい…!気づいたらジエラールたちを庇っていた。魔法さえ使えば、こんな奴…!ウエンデイが治療してくれているけど、やつぱりまだ幼いからかなり治療が遅い。5歳で天空魔法を不完全ながらに使えるだけすごいと思うけど。

倒れた僕と治療するウエンデイを守るようにジエラールが森バルカン警戒する。また死角からジエラール…ではなく、今度はウエンデイを狙って飛び掛かって来る。その瞬間ジエラールが杖を3本取り出し魔法陣を複数展開した。

「3重魔法陣・鏡水!!」

「ウホアッ!」

攻撃が3つの魔法陣によって跳ね返され逆にダメージを負った森バルカン。勢いのまま後方へと数mは吹っ飛んだ。これがジエラール、ミストガンの魔法か…!さすが、7年後にフェアリーテイルで数人しかいないS級魔導士になるだけのことはある。でも、まだ森バルカンは行動不能になっていない。まだ攻撃を仕掛けてくるはず…。

「ゴーシユ、動けるか?」

「…何とか、ぐっ…!」

「無理しちゃダメだよ、ゴーシユ!」

「動くのは無理そうだな…よし、このままここであいつを迎え撃つ。ウエンデイはゴーシユを治療してやってくれ」

「う、うん！」

「ごめん、2人とも…」

ジェラールはバルカンが吹っ飛んでいった方向を警戒し、ウエンデイは治療を再開する。ジェラールはともかく、ウエンデイはまだ魔力が高くないから治療1つでも消耗が激しいはずだ…すごく、情けないな、僕。

数分経ったけど、未だに森バルカンは襲ってこない。痛い目をみて逃げたかな？だけどジェラールは警戒を怠らない。もしかしたらまた辺りの木々を飛び回っているのかもしれない。ウエンデイはまだ治療中…でも、そろそろ限界だと思う。

「ウエンデイ、もう大丈夫。動けるくらいには回復したよ。ありがとう」

「う、うん…どう、いたしまして」

「ジェラール、あの猿は？」

「近くにはいると思うが…どうやらこっちの様子を伺っているみたいだ」

「ど、どうするの…？」

「もう少し様子を見よう。下手に動くのは危険だ」

そっか、ここはあいつが縄張りになっている土地だ。夜目が効かなくてもあいつは土地勘で動けるだろうけど、僕達はそんなことはないから下手に動いて奇襲をかけられたら大変だもんね。

「ウツホホオツ!!」

「きゃあっ!!」

「しまった！ウエンデイ!!」

ウエンデイが森バルカンに捕まる。こいつ、すごいスピードでしかもジェラールには見えない方向からウエンデイを捕らえにきた…！さすがのジェラールも一歩及ばずだったみたいだ。

「ウツホホオツ！オンナだ、オンナっ！」

「ジェラールっ!!ゴーシユっ!!」

「ウエンデイ…っ!!」

「ウエンデイを離せ！」

「お前、ウルサイツ！」

「ぐあっ!？」

「ジェラール!!」

あのエロ猿…!!ウエンデイを連れて行く気か!しかもジェラールに攻撃されないようにジェラルルの死角、尻尾で攻撃していった。

僕は…足手まといだ。このままではウエンデイは攫われてしましジェラールも怪我を負ってしまった…。

嫌だ。もう誰かを…仲間を守れないなんて、絶対に嫌だ!!

「やめろおおおっつ!!」

「ウツホ…!？」

「ゴーシュ…?」

「ウエンデイを…離せえっ!!」

「ウツホアツ!？」

一瞬だけど、バルカンの頭上に何かが出現した。その四角い何かはバルカンの後頭部に直撃し、すぐに消えてしまった。今のは、一体…?

「…眠れ！」

「ウツホ…?」

ジェラールが杖を一振りするとバルカンが突然眠ってしまった。そうか、ジェラールは対象を眠らせる魔法も使えるんだった。

「ジェラール!ゴーシュ！」

「ウエンデイ、怪我はなかったかい？」

「うん、うん…!」

「良かった…ゴーシュは、大丈夫か？」

「ああ…僕も、大丈夫」

「よし…それなら、ここをすぐに離れよう。こいつも少ししたら起きてしまう」

「うん…」 「了解」

夜中だし雨もまだ降り続けているけれど僕達は移動することにした。早くここから離れてしまいたい。もうこんな奴には会いたくないよ…。ウエンデイも泣いちゃっている…きつと、とても怖かったんだと思う。確かに、こんな変態猿に襲われたら怖いよね…。

そういえばあれは結局何だったんだろう…あの四角い物体は。魔法だと思っけれど…ジエラルかな？ジエラルなら色々な魔法を使えても不思議はないし。まだ小さいのに複数魔法を使えるなんてすごいな…僕も頑張らないと。もう、足手まといは嫌だから。

第3話 化け猫の宿【ケットシエルター】

森バルカンに襲われてから数十分が経過した頃、僕達は廃村のような場所にたどり着いた。周囲は森に囲まれていて建物はほとんどが壊れてしまっている…所々に刃物で斬りつけたような跡がある。

「ここまで来れば、あいつも追ってこないだろう」

「ジェラール、どこかで休もうよ。ウエンデイもゆっくり休ませてあげないと」

「それじゃあ…あの廃屋で休もう」

ジェラールが指差すのは、見た中で一番まともそうな建物。あそこなら雨宿りもできそうだし運が良ければ何か布団とかもあるかもしれない。ウエンデイは魔法を使った影響か森バルカンに捕まつてよっぽど怖かったのか、ジェラールの背中で眠ってしまったている。僕もちよつと眠たい。夜中とはいえまだ日付は変わっていないと思うんだけどな…

中に入ってみると、荒れてはいるけれど雨漏れとかはしていないかった。それだけなら喜んで休んでいたんだけど…中には、1人の老人がいた。あれ？この人は…

「こんな場所に人が住んでいるなんて…」

「なぶら…こんな所に旅人が来るとは、思わなんだ」

あ、やつぱりそうだ。この人ローバウルさんだよ。「なぶら」が口癖の、化け猫の宿のマスターだ。っていうか起こしちやつたかな？

「なぶら…お前さんたち、何の用でここまで来たんじや？」

「俺たちは旅の者です。どうか、この2人を預かって下さい!!」

ジェラールが真つすぐとローバウルを見つめてそう伝える。ローバウルさんはとても驚いたような表情をしていた。僕も、突然ですぐに反応できなかつた。

「…理由を聞かせてほしい」

「…俺は、これから危険な旅に出なければなりません。今すぐにでも行かなければいけないのですが…2人を、見放すことはできません」
「ジェラール…僕からも、お願いします！なんでもしますから、どうか

ここに居させて下さい!!」

「ゴージュ…」

元々、ジェラールはアニメを防ぐ為に旅をするつもりだったんだ。それを僕達がいたから、一時的にジェラールはその役割を中断していた。僕達はジェラールの邪魔をしていると言ってもいい。このままでは原作のマグノリアのように、アニメに吸い込まれてしまう町が出てくるかもしれない。

もし、このままウエンディの言うようにジェラールに無理にでもついて行ってしまったら…最悪の場合、リサーナと同じようにアニメに吸い込まれてエドラスに行ってしまう。さすがにそれはまずい。

「分かった。2人のことは任せておきなさい」

「!ありがとうございます…:…もう一つお願いがあるのですが、いいですか?」

「なんじゃ?」

「彼を魔導士ギルドにて修行させてあげてほしいのです。僕ができれば連れて行ってあげたかったです…:…お願いできますか?」

「:…分かった。儂にできることは何でもしよう」

「ありがとうございます…:…彼は1度だけ魔法を使っただけですが、自覚がありません。それがキツカケだと思うので詳しくは彼から聞いて下さい)…:…それでは、俺はこれで…」

ジェラールはローバウルさんに何かを耳打ちした後、そのままこの場所から離れていく。外に出て行ってしまったのを見て、僕は急いで追いかけた。どうしても、伝えておきたいことがあったから。

「:…ジェラール!!僕は、僕はもつと強くなる!!もう、どんな奴が襲ってきてても、ウエンディを守り通せるくらいに!!」

「:…ああ。ウエンディを頼んだよ、ゴージュ」

「たつた1週間くらいだったけど…:…本当に、ありがとう!!」

ジェラールは歩きながら振り向かず右手を上げて答えてくれた。

僕は、自分とジェラール…:…ミストガンに誓う。ウエンディを、仲間を守り続ける…:!!

☆

「…おじいちゃん、(こ)ど(こ)ど…」

「こ、ここはじゃのう…」

翌朝。ウエンデイが目覚め、あたふたしているローバウルさん。こればかりはどうにかしてもらうしかない。ジエラールはすでに1人で旅立っていったことを伝えている。最初は泣き続けてたウエンデイだったけど、ようやく落ち着いたところでこの質問だ。

「ジエラール：私を、私達をギルドに連れて行ってくれるって…」

「ぎ、ギルドじゃよ！ここは、魔導士のギルドじゃ！」

「ほんと!？」

「なぶら！外に出てみなさい。仲間たちが待っているよ」

お、おう：原作通りの会話に近いんじゃないかな？でも、ウエンデイさん、こんな廃屋でよくそんな話を信じたね？僕は普通信じないんじゃないかなー、とか思ってたんだけど。魔導士ギルドの建物を見たことがないのが幸いしたかな。

ウエンデイの後に続いて僕も外に出てみる。すると、さっきまで誰もいなかったはずなのに、何十人という人がいた。これが、ローバウルさんが造りだした、意思を持った幻…！

「お、お前たちが新入りかい？俺はマグナっていうんだ、よろしくな！」

「あら、可愛い子たちね！私はペペル、よろしくね」

外へ出た途端に沢山の人に自己紹介される。途中から覚えてないけど…何人か原作でも名前があった気がする。

「すごい…！ほんとに、魔導士のギルドだよ、ゴーシユ！」

「…ああ。そうだね」

「どうじゃ、2人とも。このギルドは、なぶら楽しそうじゃろう？」

「うん！」

「2人も、今日からこのギルド…ケットシエルター化け猫の宿の一員じゃ。名前を教えてくださいませんか？」

「私はウエンデイ、ウエンデイ＝マーベル！」

「僕は…ゴーシユルガードナーです」

「うむ。僕はマスター・ローバウルじや。ウエンデイにゴーシユ、よろしく頼むぞ」

こうして僕達は、化け猫の宿の一員になった。

☆

その日の夕方。僕とウエンデイが化け猫の宿ケットシエルターの一員になった、までは良かったんだけど…僕には、ある問題があった。

「お主、魔法が使えんのか…」

「そ、そうなんですよ…」

僕はこれからどうしたらいいんだろうか。魔法が使えないのに魔導士ギルドの一員ですとか恥ずかしくて言えないぞ…。ジエラールがローバウルさん…マスターに魔法を教えてもらおう言うってたけど…

「ウエンデイは使えるんです。あいつは天空の滅竜魔導士で、僕も怪我の治療してもらったことがあるんで。でも、僕は一度も…」

「? 僕は、あの若者から、君が一度だけ魔法を使ったと聞いたが…」

「…え?…」

僕が、魔法を…? じゃあ、森バルカンにウエンデイが連れて行かれそうになったあの時に出てきた四角い物体は…僕がやったってことか!?

「…どうやら、心当たりがあるようじやの」

「え、ああ…僕も今初めて気づきました」

「その時のことを教えてくれんかの? それは魔法を習得するキツカケに違いないからのう」

僕はあの時のことを事細かに説明した。つつても、あの時どうやってあれを出現させたのか分かってないんだけど…

「ふむ…そんなことがあったのか」

「ここに来る少し前の出来事ですな」

「ゴーシユ、君はどんな魔法を身につけたい?」

「どんな魔法、か…防御の魔法ですかね」

「ほう…その理由は？」

「僕、誓ったんです。ウエンディを…仲間を守り続けるって。だから、守る為の力が欲しいって思ったんです」

FAIRYTAILの漫画では、防御の魔法って少ないんじゃないかと思う。ソリッドスクリプト 立体文字とか術式に造形魔法…あとは妖精フェアリースライアの球とかぐらいじゃないだろうか。だから防御の役目は、妖精フェアリーテイルの尻尾ではフリードとかレヴィにグレイしかやってなかった…と思う。アニメからハマって、第2弾の映画も見えてないし漫画も買い揃えたいなー、と思ってたところで死んだから詳しくは分からないけれど。

とにかく、攻撃系の魔法が多いのに防御の魔法を都合良く覚えられないのかな、とか思ったわけだ。

「なぶら…それなら、君に合うかもしれない魔法に心当たりがある」「本当ですか!？」

「うむ。結界魔法…【バリアー】という魔法じゃ」

「結界魔法。それだ…!」

そんな魔法があつたとは…!それならきつと、ウエンディを守り通すことができる!

「マスター…その魔法、教えて下さい!」

「なぶら…いいじゃろう。明日から特訓を始めるぞ。ギルドの一員にその使い手がいるということにしよう」

「ありがとうございます!!」

僕はジェラルドと一緒に来た時にここがギルドではなかったことを知っている。だから、マスターもメンバーが本物の人間ではないことを僕に教えてくれていた。ウエンディを騙す形になってしまったのは心苦しいけど…仕方ないか。打ち明けるタイミングはマスターの判断に任せよう。

よし…燃えてきた!明日から頑張るぞー!

☆

「ムムムム…!」

「ゴーシュ、どう?」

「…うん、魔力の感じは分かってきた！」

あれから1週間。僕はまず魔力を高める訓練をし続けています。魔力を感じられないことには魔法を覚えることなんて夢のまた夢だからね。最近は1日中瞑想することに慣れてきた。

ようやく魔力を何となくではなくはつきりと感じるようになるようになった僕は、ようやく次のステップへと進むことができる。

「いい？結界魔法はただの防御魔法ではないの。生み出した結界に色々な効果を付加することで、様々な状況に対応することができるよ」

マスター・ローバウルが生み出した意思を持つ幻。つまりギルドメンバーの1人であるペペルさんに修行をつけてもらう日々。ちなみにウエンデイは簡単な依頼を他のメンバーと一緒に受けています。迷いネコ探しとかそんなのばかりだけど。まあ、できたばかりのギルドだから仕方ないよね。

「色々な効果…例えば？」

「例えば、そうね…バウンド弾性結界」

ペペルさんの手にオレンジ色のボールみたいな結界が現れる。それを地面に落とすと、スーパーボールのように跳ねていった。なるほど、結界に弾性という特性を組み合わせた結果がこれか。

「どんな効果を付加するかは人それぞれ。魔力が上昇すればより強力な効果を持つ結界や、様々な効果を組み合わせた結界も使えるようになるわ。でも、注意点が1つ。この魔法は使いたいタイミングで効果を付加するわけじゃなく、先に効果を付加した〈型〉をいくつか作ってそれを使用するの。だから、最初は3つだけ型を作りなさい。後は魔力が上昇してから少しずつ作っていけばいいわ」

「3つか…どんなのにしようかな」

「焦らず、ゆっくりとね。一度作ってしまうと、それはもう1つの型としてずっと残ってしまうから」

「分かった」

なんだか、HUNTER×HUNTERの念能力のスペックの話みたいだ。能力を複数作れないとか、そんなところが。

でも、悩むな…どんな効果を付けるかでどれほど戦えるかが変わって来る。しかもそれが一生に関わるのだから、なおさら重要だ。

「…とりあえず、1つは決まってるんだけど」

「早いわね。それじゃあ、まずはそれでやってみて。あ、型はできるだけ細かく設定した方がいいからね。どんな形かとか、名前とか…色を決めるだけでも出しやすくなるわ」

「分かった。よし…それじゃ、いくよー!」

結界魔法と聞いて、最初に浮かんだイメージをそのまま当てはめる。細かく、明確に…よし、なんか上手くいけそうな気がする!

「来い…デイフ防衛結界!!」

目の前に、四角い形をした青緑色の結界を出現した。少し小さいけれど…これは、ひよっとして…!

「ペペルさん!」

「…驚いたわ。成功よ」

「よっしやー!」

やっぱり一番最初に思い浮かんだイメージは、結界師だった。結、滅!つてアレ。でもこのデイフ防衛結界(名前はそのままにした)はアレと違って、形状は自由に変えられるようにしてる。上手く扱えるようになれば、攻撃にも利用できるかもしれない。

「どんな能力を付加したの?」

「とりあえず、固いものが良いと思ったんだ。攻撃を防げる結界が一番イメージしやすくてやりやすかったから」

「そつか…でも、これなら後は大丈夫そうね」

「何が?」

「ここから先は君に任せるわ。君の思った通りに、自由にやってみなさい。というか、これ以上は教えようがないんだけどね。しいて言うなら、付加するイメージは実際に見たことがあるものの方がいいかな。見たことのないのに特殊な能力を付けようとする、中途半端な効力しか見込めないからね」

「そうなんだ…分かった、後は自分で頑張ってみるよ!ありがとうございしました、ペペルさん!マスターにも伝えておいて!」

「ええ。頑張つてね」

ペペルさんはマスターの元へと去つていった。でも、意外とあつさり成功したなあ。他の能力はどうしようかな。さつきペペルさんに見せてもらった弾力のある結果、弾性結界^{バウンド}って言ったかな。あの能力も持つておきたいなと思つたから1つはそれにするとして…いいや、もう1つは後で考えようつと。

「おーい！ゴーシユ〜！」

「あ、ウエンディ！お帰り〜」

「うん、ただいま！魔法の修行、どう？」

「ようやく一歩進んだつてところかな。そつちは仕事上手くいった？」

「そうなんだ！やつたねゴーシユ！私の方は大丈夫！マグナもナオキもいてくれたし！」

ウエンディは元気そうに振舞つてはいるけれど、まだジェラールがいなくなつてしまったことが辛いと思う。まだ、夜に泣いている時が多いから…。それでも、依頼をこなしていけばジェラールにも、もしかしたらグランディーネにも会えるかもしれないと思つて頑張つてみたい。

ちなみにだけど、どうやらこの1週間でギルドメンバーが評議員にギルドを結成する為に必要な書類を提出しておいたらしい。依頼なんかも最初はギルドメンバーのお願いを聞いてあげるくらいのをやつていたけれど、最近は近場の町まで行つて依頼をするってケースが多い。もちろん依頼をやつていたのはウエンディだけだけど。僕もやろうとしたけれど、まずは魔法を覚えなさいというマスターからのお達しだ。

ウエンディにこのまま遅れをとるわけにはいかない。早く結界魔法を最低限まで習得して追いつかないと！

「そつか、早くマスターに報告してきなよ！初めての町での依頼だったから、少し心配そうにしてたからね」

「うん、それじゃ行つてくる！また後でね！」

「うん、後でなく」

ウエンディは向こうで待つてくれていたマグナとナオキの元に行つて、そのままギルドへと入つていった。

よし、それじゃ修行再開といくか！まずは防御結界をディフェンド何度もやってみよう。さつきは成功したけど、何度も連続で成功させないと習得したとは言えないからね。慣れてきたら形も変えてやってみよう！まだまだ先は長いだろうけど…頑張るぞ！

第4話 空から来た卵

X778年。僕達がここに来てから約1年が経過した。

僕は大体1カ月くらいで結界魔法の能力3つを習得した。最初成功したのはどうやらたまたまだったみたいで：まず防御結界を完璧に出せるようになるまで1週間、他の能力2つを開発するのに2週間くらいかかりました。

そして1年かけて魔力を上昇させる為に修行していたおかげで、あれからさらに能力を1つ増やすことができた。最近習得したからまだあまり試したことはないけれどね。そして魔力の上昇があまり見込めなかった：これは、まだ体が幼いからってことかな？成長期はまだ先みたいだ。

仕事も大分こなせるようになってきた。まだ僕もウエンデイも幼いから誰かの仕事についていくだけなんだけど：いつ頃1人で仕事をできるようになるのかな？まあ子供だけで仕事ができるのは依頼主は思えないだろうから仕方ないよね。今も、ギルドメンバーのバスコの依頼について行ってギルドへと帰ってきたところです。

「ん？なんかギルドが騒がしいな…」

「ホントだ：…なんだろう？」

「ちよつと急いでみるか、ゴーシュ」

「うん」

少し小走りでギルドの前まで行くと、さらに騒がしい声が聞こえてきた。何かあったのかな？いつも賑やかなんだけど：今は余計に騒がしい。中に入ると、ウエンデイがやたらと大きな卵を持って喜んでた。

「ゴーシュ、バスコ、お帰りなさい！仕事は上手くいったみたいね」

「うん。ただいま：えつと、あの卵は何？」

「あなたたちは少し長めの依頼に行ってたから知らないわよね。ウエンデイがね、大きな卵を拾ってきたのよ。本人は空から降ってきたとか言ってたけど…」

あゝ：そういえば原作開始した時ってハッピー達まだ6歳だった。

つまり生まれたのが丁度今の時期ってことか。じゃあ、シャルルが生まれるのももうすぐなんだ！

「ウエンデイ、ただいま」

「あ、ゴーシユ！お帰りなさい！見て、卵だよ卵！」

「ウエンデイ、あんまりはしゃがない方が…」

「え？きやあつ?!」

ウエンデイが転び、卵が宙を舞った。僕は咄嗟に弾性結界^{バウンド}で卵を守る。

「ほら、言わんこつちやない」

「ご、ごめんなさい…」

「で、この卵どこで見つけたの？空から降ってきたって聞いたけど」

「すぐ近くの森にいたら、空から降ってきたの。空を見たけど鳥さんも何もいなかったから…」

「なるほど…で、マスターは何て？」

「育てたいって言ったなら、大事にしなさいって！」

「良かったね、ウエンデイ！僕も何かあつたら手伝うから」

「うん！ありがとう、ゴーシユ！」

こうして、卵をお世話することになりましたとき。空から降ってきたのを、よくキャッチできたな…と思ったら、キャッチしたわけじゃなくて地面に落ちたけど割れるどころか傷一つもなかったらしい。エクシードの卵、すごいな…一歩間違えれば凶器だよな、コレ。

☆

「あ、動いた！」

「お、いよいよか」

数日後、卵がようやくコロコロと動き始めた。もうすぐ孵りそうだし…！コロコロと転がり…ピシツつと罫が入った。そこからどんどん罫が広がっていき、ついに中から…白猫が現れた。

「猫…?」

「可愛いっ！初めまして、私はウエンデイ！あなたの名前はシャルルよ、よろしくね！」

「…ちよっと、やめなさいよ」

名前はすでに考えていたようだ。ウエンデイが名づけたシャルルの名前はどうしてすっかりしているんだろう…と思つて、ウエンデイにネーミングセンスについてさりげなく聞いてみたんだけど、前に僕に名前をつけようとした時はあだ名のようなものだったし、名前を思い出すまでしか使わないだろうからと冗談で言っただけらしい。本当は結構ネーミングセンスはあるみたい。

なんかボーつとしてた白猫だったけど…ウエンデイが抱えようとしたら羽が生えて飛んで逃げていった。

『ね、猫が喋った〜!?』

「猫が飛んでる…」

「すごいー!」

ギルドの人達が喋つたことに驚いて、僕はこんな小さいのにもう翼【エーラ】の魔法を使って飛んだことに関心して、ウエンデイはただ喜んでた。猫はそのまま外へと飛んで行ってしまった。

「あ、待つてー!シャルル〜!」

「あ、ウエンデイ!」

ウエンデイがシャルルを追いかけて行って、それを僕も追いかけていく。ウエンデイ、ほつといたら転んじやうから誰かがついて行かないと…。気がついたら化け猫の宿を一望できる崖の所まで来た。そこまで行った所でウエンデイが案の定転んでしまった。

「…また転んだ」

「うう、うえ〜ん…!」

「ウエンデイ、大丈夫?」

「うん、大丈夫…ぐすっ」

あらら…膝を擦りむいちゃってるよ…。つていうかこれ、転んだの1回じゃないんじゃないかな…明らかに傷の数が多すぎると思う。よくこれだけの傷で走れるな…

「なんであんなたちは、私をほつといってくれないの?」

「だつて…私たち、友達でしょ?」

「友達…?」

「うん、友達！ね？ゴーシユ」

「いや、僕シャルル？とは初対面だし…初めまして、僕はゴーシユ
ガードナーです。よろしくね、シャルル」

「え、ええ…よろしく」

なんかシャルルがすごい戸惑ってる…これ、原作を思えばレアな光景だよ…目に焼き付けておこうっと。そういえばシャルル、さつき俺もシャルルをほっとかなかった人認定してなかった？ただウエンデイを追いかけていただけなんだけど…？いや、多分ほっとかなかったとは思うけどね…？

「…私は、あなたたちの友達にはなれないわ」

「なんで!？」

「だって、私猫だし…人間じゃないし」

「そんなの関係ないよ！種族が違ってても…友達になれるもん!!」

「…そうだよ。今からでも、僕たちは友達になれると思うよ」

「…」

シャルルは少し考え込んだ後に、今来た道に戻っていく。お、これは…

「シャルル…？」

「…何してるのよ、2人とも置いていくわよ！」

「う、うん!!」

「…素直じゃないなあ」

「ゴーシユ、なんか言った？」

「いや、なんでもないよ！」

シャルルさん、デレました。

冗談はともかく、どうやらシャルルと友達になれたみたいだ…きつとシャルルはさつき、エクシードの使命の記憶を予知してしまったんだと思う。それでも、ウエンデイと友達になることを選んでくれた。僕がいることで原作が変わってしまう可能性もあると思ってたから、本当に良かった。

原作か…最初の頃、少し考えたことがあった。僕がいることで何か変わってしまうのなら、それは仕方がないと思う。もうそれは不可抗

力だから。でも、原作で皆がピンチに陥っていた時：そんな場面に遭遇したら、僕は皆を守ることにした。その為に習得した魔法だし、多分原作だからって放置することが僕にはできないと思う。だから、原作にはこだわらないで、皆を守っていくことにした。

「ご、ゴーシュ！」

「ん？」

「あ、あれ……！」

ウエンデイが少し離れた所にある森を指さす。そこには、奴がいた。ここに来る前にお世話になった：森バルカンだ。

「何よ？あの猿」

「森バルカンだ：前に僕達はあいつに襲われたことがあるんだ。ここは僕に任せて」

「気をつけてね、ゴーシュ……」

「大丈夫。あの頃とは違う：あの時のリベンジ、してくるよ！」

ウエンデイとシャルルには岩陰に隠れてもらって、僕一人で奴に近づいていく。奴も僕にようやく気がついたようだ。不意打ちすることもできたけど、僕はそれで納得できない。

「ウツホ……お前の匂い、知ってるぞ！」

「驚いた……あの時と同じ個体か」

「ウツホアツ!!今度こそ、お前らを食ってやる!!」

そう言い放ち殴りかかってきた森バルカン。見た所、1年前より強くなっているようだ。あの時より強くなった僕が、あの時より奴のスピードが速くなっていると感じたから間違いないだろう。でも：負ける気がしない!

「防御結界・壁！」
デイフエント ウォール

「ウツホ!?!いったあつ!?!」

「これで終わりだ! 防御結界・柱！」
デイフエント トーテム

「グホオアツ……!?!」
デイフエント

青緑色の結界：防御結界の壁を出現させて攻撃を防いだ後、柱のように大きな細長い形状にした防御結界で奴の腹部を突く。森バルカ

ンは吹っ飛んでいき、何本か木をへし折って気絶した。

「よし、リベンジマッチ勝利！」

加減はしたから死んでないとは思うけど……これで、森バルカンがうちのギルドに手を出すことはないだろう。野生の動物だったら、弱肉強食ぐらい分かっているだろうからね……ふう、スツキリした！

「おーい、ウエンデイ！ シャルル！ もう大丈夫だよー」

「え、ええ……」

「どうかした？ 2人とも」

「あ、あんた……結構やるわね」

「すごいよゴーシユ！ あの森バルカンを一撃で倒しちゃうなんて！」

「そうかな……？ あんま実感ないけど……ありがとう」

でも、これぐらいあの頃のジェラールでも余裕だったんじゃないかな……いや、あの時は俺とウエンデイがいたから巻き込んだじゃないかな。大きな魔法を使えないし、ジェラールもこっちの世界に来て1カ月間魔法を使ってたの見たこと無かったし……そんなこともなかったのかもしれない。

「それじゃ2人とも、ギルドに帰ろう」

「うんー」

「ええ」

俺達3人はそのままギルドへと帰った。とりあえず、シャルルが本当に友達になってくれてよかったと思う。あとの問題は……6年後の、オラシオンセイイス六魔將軍だな。

☆

X784年。俺とウエンデイは一人前の魔導士になった。俺は境界魔法を全部で7つ開発し、盗賊団の討伐など過激な仕事も1人でこなせるようになった。ウエンデイやシャルルとも一緒に仕事することが多く、ギルドでもトップレベルの仕事量をこなしていると思う。そんな時。町で手に入れた新聞で重要な情報を手に入れた。

闇ギルド・鉄アイゼンヴァルトの森によるララバイ事件、楽園の塔へのエーテリオオラシオンセイイスン投下などのニュースが書いてあった。つまり、もうすぐ六魔將軍討

伐が始まる。

「ウエンデイ、ゴーシユ、シャルル。ちよつといいか？」

「はい、なんでしようマスター？」

「何の用？」

マスターが僕たち3人を呼んだ。マスターが呼びつけることなんてほとんどない。

「お前たちに、ある仕事を頼みたいのじゃ」

「ある仕事？」

「妖精の尻尾、青い天馬、蛇姫の鱗…そしてこの化け猫の宿で連合を組むことになったのじゃ」

「連合…何の為によ？」

「闇ギルド、バラム同盟の一角である六魔將軍の討伐じゃ」

来た…！いよいよ、原作介入か…！ウエンデイやシャルルも驚いている。急にこんな話をされたらそりや驚くよね。

「いつですか？」

「1週間後じゃ」

「1週間後…」

「化け猫の宿からは…お主ら3人に参加してもらいたいのじゃ。もちろん強制はせん。なぶら、他の者に回すぞ」

「私、やります！」

「ウエンデイ!?何言ってるの!相手はバラム同盟の一角よ!？」

「分かってる。正直、怖いけど…妖精の尻尾には、私と同じ滅竜魔導士で火竜のナツさんがいるはず…その人に会えば、グランディーネがどこに行つたのか分かるかもしれないし」

「だからって…!」

「シャルル。ウエンデイはこうなつたら聞かないよ」

ウエンデイは意外と頑固なところがある。それでシャルルと口喧嘩になることも結構あったり、それを僕が仲裁したりってこともしばしば。

「…そうね。じゃあ私も参加するわ」

「僕も参加します」

「2人とも…無理についてこなくてもいいんだよ？今回は危険なんだし…」

「僕は誓ったんだ。仲間を守るって…こんな危険な任務に行くのに僕だけ残るなんてできないよ」

「私はウエンディをほっとけないもの。ゴージュはまだ大丈夫でしょうけど」

僕の魔法は、これからの為に習得したんだ。今更怖気ついてしまうなんてあるわけない。もしここで行かなかったら、僕はずっと後悔すると思う。きつと、シャルルも同じ理由かな。

「なぶら…それでは3人とも、よろしく頼んだぞ！」

「はい！」「ええ」

こうして、ケットシエルター化け猫の宿からは僕たち3人が参加することになった。ここまで、長かったけど…準備は怠らなかつたつもりだ。絶対に仲間を…ウエンディを守って見せる!!

ニルヴァーナ編

第5話 連合軍、集結！

六魔将軍オランオンセイイス。ファイオーレ王国に数多く存在する闇ギルドを束ねているバラム同盟の一角。六魔将軍はたった6人だけのメンバーで構成されているギルドだ。その6人だけで闇ギルド最強と言われるバラム同盟の一角を担うというだけで、実力は相当なものといえる。

その六魔将軍オランオンセイイスが何やら動きを見せているらしく…無視はできないということになり、正規ギルドのいくつかが連合軍となつて討つことになった。妖精の尻尾フェアリーテイル、青い天馬ブルーベガサス、蛇姫の鱗ラミアスケイル、そして僕達のギルド化け猫ケットシエルターの宿の4つだ。

連合軍になつた理由は2つ。1つは、ただ1つだけのギルドで討てるとしても、後にそのギルドだけがバラム同盟残りの2つに狙われることになるから。もう1つは…相手が強大すぎるという判断からだった。

「2人とも、もうすぐよ」

森の中を進んでいくと、シャルルがある建物を指さす。さしずめ森の洋館つてところかな。マスターに聞いた話だと、連合軍の集合場所は青い天馬「ブルーベガサス」のマスター・ボブの別荘なんだとか。別荘どころか家も持つてない僕には想像もつかないけれど、どれだけお金がかかるんだろう…？ギルドが1つの村と化しているから、いくつもある家の1つに住んでるし、基本狩りとかで食べているからほとんどお金がかからない。かかるとすれば服の材料くらいか。

ウエンデイやシャルルは原作通りの服装をしているけど、これも化け猫ケットシエルターの宿のメンバーが仕立てたもの。僕が着ているものもそう。正直言つて僕はコーデイナーとか良く分からないから、ウエンデイに選んでもらった。できるだけ戦いやすそうな服にしてと伝えただけ…：なんか、猫の顔の刺繍が所々にあるから、少し恥ずかしい…

「ねえ、やっぱりこの服変じや」「似合ってるって」「…ハア」

やっぱり化け猫ケットシエルターつてくらいだから猫推しなんだろうか…何となく

ナツがいつも着てる服に似てる気もしてきた…

「もう皆さん着いてるみたい、急ごう！」

「ちよつと、ウエンデイ！」

「走ると転ぶって！」

ウエンデイがどんどん走って建物の中に入って行く。中にいる人達、ウエンデイに気づいてない…あ、転んだ。だから言ったのに…でも、ウエンデイにしては長距離走れた方だ、うん。ウエンデイが立ち上がって、お辞儀している。自己紹介しているところかな？

「ウエンデイ、怪我は？」

「あ、ゴーシユ。うん、大丈夫」

「もう1人も子供…」

「皆さん初めまして。同じく化け猫の宿から来ました、ゴーシユ。ガードナーです。よろしくお願いします」

「…これで全てのギルドが揃った！」

「話進めるのかよ!？」

おお、これがあの聖十大魔道せいてんだいまどうの1人のジユラ。ネエキス…!アニメでも何人が言ってたけど、やっぱりその頭を見てるとジャガイモが…いやいや、これは失礼なことを考えてしまった。でも、聖十大魔道というだけはある…すごい魔力を感じる。

「それにしても…」

「この大掛かりな作戦にこんなお子様2人を寄越すなんて、化け猫の宿はどういうおつもりですか？」

「あら、2人じゃないわよ? ケバいお姉さん」

水色の髪をしたすごい細長い目をした男性。リオンと、ケバ…じゃなくて、赤紫色をした髪がすごい盛っている化粧が濃いめの女性。シエリーがこちらを見て怪しんでいる。すると、後ろから聞き慣れた声。わざわざそんな登場の仕方しないのに…

「猫…?」

「だな…」

「ハッピーと同じだ!」

「喋ってる…」

「ひどいですね、ケバいだなんて…」「そつち!？」

「シャルル!」

やっぱりエクシードは多くないから珍しいみたいだ。今の段階ではアースランドには100人しかいないんだっけ…向こうで青い猫—ハッピーが衝撃的な表情をしている。これがハッピーが恋をした瞬間か。それよりも、向こうで緋色の髪をした鎧を身につけている女性—エルザに踏まれているなんか太った男性—一夜はほつといいいのだろうか？

「ちゃんと自己紹介くらいしてよ、シャルル」

「…ふん」

「ハア…皆さん、この子はシャルルって言います。悪い子ではないのでよろしくお願いしますね」

「あんたはいつから私の親になったのよ」

「ちゃんと自己紹介しないからでしょ」

「プイ!」

「「猫!」」「今頃!？」」

変なポーズをそれぞれ決めながら今更驚くイケメン3人組—ヒビキ、レン、イヴで構成されるトライメンズに対して鋭いツツコミをする金髪の女性—ルーシィ。この短時間で2回もルーシィがツツコミを繰り返している。苦勞が絶えないだろうなあ…。

「キュピイイン…!!!」

シャルルがハッピーの方を見ただけで、ハッピーからそんな声が聞こえた。なんかエコーかかってない?あ、シャルルがそっぽ向いた。シヨックを受けたようだったけど、ルーシィに尻尾を振りながら何かを頼んでる…根性逞しいなあ。

「シャルル、惚れられたんじゃないか?」

「…プイ!」

随分ご機嫌斜めみたいだ。わざわざ声に出してそっぽを向くのは逆に可愛らしいと思うけど。

「あ、あの!私、戦闘は全然出来ませんが、皆さんの役に立つサポートの魔法は、一杯使えます…。だから、だから…仲間外れにしないで

下さい…！」

『…』

なんかずつとアワアワしてたウエンデイがそんなことを皆に伝える。どんだけ不安だったんだよ…。

「そんな弱気だから舐められるの、あんたは！」

「ご、ごめん…」

「だからすぐ謝らないのっ！」

「ごめん！」

「ハア…」

「ウエンデイ、リラックスリラックス！」

「ごめん！」

「…だめだこりゃ」

緊張しすぎてわけわかんなくなってるね、この子。とりあえず落ち着くまで様子を見ておくしかないかな。

「すまない。少々驚いたが、そんなつもりは毛頭ない。よろしく頼む、ウエンデイ」

「うわあ…！エルザさんだあ…本物だよ、シャルル！」

「思ったよりいい女ね」

「2人とも…本人を目の前にそんな話したら失礼だよ。すみません、緊張してテンションがおかしくなってるみたいで…」

「なに、気にするな。ゴージュだったな？君もよろしく頼む」

「はい、よろしくお願いします。エルザさん」

エルザさんの手をとり握手する。2人はテンションがおかしなことになってるし…普段はちゃんと礼儀正しい子なんだけどな。あ、ハッピーがまたシャルルにアタックしてる。そしてまたそっぽ向いてるし…シャルルはいつも通りか。おかしくなってるのはウエンデイだけだね。このシャルルへの猛アタックってこれからずっとやっていくつもりなんだろうか？

「あの子、将来美人になるぞ…」

「今でも十分可愛いよ」

「さ、お嬢さん。こちらへ」

「あ、あの…」

ウエンデイが連れて行かれた。まあ、別に危険なわけじゃないだろうし：ほっといいいかな。本人は助けてほしそうな目で見てたけど：まあ貴重な経験だろうから、手を振って送り出す。シャルルもちやつかりついて行ってるし、大丈夫だろう。

でも、ナツさんがいて良かった。ウエンデイは彼に会いたくて来たわけだし。あ、ウエンデイがシャルルになんか言われてる。そろそろパニックになりそうな気がするし、助け舟を出しといた方がいいかな？

「あのく、ウエンデイが困ってるみたいなんで、その辺にしておいてあげて下さい」

「ゴーシユ君の言う通りだ！遊びに来たんじやないんだから、すぐに片付けろ！」

「「かしこまりました、お師匠様!!」」

「メエーン…」

めつちや動くの速い…！セツトがあつという間になくなった。今更だけど、なんだこの茶番…？ブルーベガサス青い天馬つて変な人が多いよなあ。

「さて…！全員揃ったようなので…私の方から作戦の説明をしよう」

「そのポーズって必要なのかしら…？」

「まずは六魔將軍…オラシオンセイスが集結している場所だが…」

お、やつと話が進んだか。

「と、その前にトイレのパルファムを…」

「おい！そこにはパルファムってつけるな！」

「「さすが先生!!」」「また呼び方変わった！」

僕達が来てから話進んでないよね…？さすが原作…濃いキャラが多いなあ。ちなみに、パルファムっていうのは香りという意味です。

そういえばこの後、一夜さんがエンジェルに奇襲されてしまうんだよな…どうしよう？僕はこの建物のことを良く知らない。そんな僕がトイレに向かってエンジェルの攻撃を防いだら不自然だ。うーん…仕方がないかな。ここでもし奇襲を防いでしまうと作戦説明の前に全員でここを攻め込んで来る可能性もあるし…ごめん、一夜さん。今

回は許してください…

第6話 六魔將軍【オラシオンセイス】現る！

「ここから北に行くと、ワース樹海が広がっている…古代人たちはその樹海に、ある強大な魔法を封印した…その名は、ニルヴァーナ」
「だからポーズはいらねえんだよ…」
「ニルヴァーナ？」

ようやくトイレから戻ってきた一夜から説明が始まった。黒髪で額に切り傷のような跡がある男性——グレイもツツコミが忙しそうだ。桜色の髪をした鱗のような白いマフラーを巻いた男性——
——ナツとルーシイが首を傾げている。一夜の言い方が変なのももうツツコまないようだ。

「聞かぬ魔法だ」「ジユラ様は？」
「いや…知らない」

「ニルヴァーナって知ってる？…つか魚いる？」
「結構」

ハッピー…ちゃんと話聞こうね。それにしても、聖十せいじゅうの称号を持つジユラさんでも知らない魔法…まあ、400年くらい前の魔法だから当然か。

「古代人が封印するほどの破壊魔法…ということだけは分かっているが」

「どんな魔法かは分かってないんだ…」

「破壊魔法…」「なんか、嫌な予感が…」
「…」

「六魔將軍が樹海に集結したのは、きつとニルヴァーナを手に入れる為なんだ」

「我々はそれを阻止する為…」

「二」「六魔將軍を、討つ!!」「二」

「やっぱりポーズ…」
「俺はもうツツコまねえぞ…」

青い天馬の人達って皆あんなポーズするのかな？
一夜さんに至っては何かを担いでるようにしか見えないんだけど…

「こっちは13人。敵は6人」

「だけど侮っちゃいけない」

「この6人が、またとんでもなく強いんだ」

さつきまでふざけてた人達に言われても、説得力がなあ…

ヒビキさんはパソコンのようなものを出現させて操作し始めた。

古文書アーカイブという魔法で、情報を圧縮する魔法。なんでも最近になって開発された魔法なんだとか言ってたっけ。

「これは、最近になってようやく手に入れた奴らの映像だ」

僕達の目の前に、大きなスクリーンのようなものが入り込んで表示される。これ、元いた世界にあつたら超便利だよなあ。授業とか辞書とか、全部これ一つで済みそう。

毒蛇を使う魔導士―コブラ、その名からしてスピード系の魔法を使うと思われる―レーサー、大金を積めば、1人でも軍の一部隊も壊滅する魔導士―ホットアイ、心を覗けるといふ女―エンジェル、情報が少ないいつも眠っている男―ミッドナイト、そして指令塔―ブレイン。こちらは数的有利を利用して各個撃破を目指す。

「あのー、あたしは頭数に入れないでほしいんだけど…」「私も戦うのは苦手です…」

「ウエンディ！弱音はかないのー！」

「まあ、最後まで聞こうよ」

ルーシイさんもウエンディも、どんだけ戦いたくないんだ。そしてなぜこの作戦に参加したんだ。戦うことになるって分かっていたはずだけど。ウエンディ、あの時の決意に満ちた表情はなんだったんだ？

「安心したまえ！我々の作戦は戦闘だけにあらず…奴らの拠点を見つけてくれればいい」

「拠点？」

「ああそうだ。今はまだ補足していないが…」

「樹海には奴らの仮設拠点があると推測されるんだ」

「できることなら、奴ら全員をその拠点に集めてほしい」

「どうやって…」「殴ってに決まってるんだあ！」「結局戦うんじゃない…」

ナツさん、殴ることしか考えてないね。仮設拠点っていうのは、原作でウエンディが連れ去られたあの洞窟のことかな。ここは、原作とは違う。だって、僕がいるから。必要とあれば、原作を変えて見せる…！その為に魔力を高めて、結界魔法を強化してきたんだから。

「集めてどうするのだ？」

「我がギルドが大陸に誇る天馬：その名もクリステイナーで、拠点もろとも葬り去る！」

「おお…」「それって魔導爆撃艇のことですか？」「人間相手にそこまでやる!？」

「そういう相手なのだ!! いか! 戦闘になっても、決して1人で戦ってはならん。敵1人に対して、必ず2人以上でやるのだ!!」

ジュラさんの発言に、全員が頷く。ルーシイさんとウエンデイは涙目になってるけど：ウエンデイはシャルルに叱られっぱなしだなあ

「よっしゃ、燃えてきたぞ! 6人まとめて、俺が相手にしてやらあゝ!!」

ナツさんがすごい勢いで飛び出していった：作戦、聞いてないね。建物のドアを破壊していく必要ないし……。ナツさんに他の皆が続いていく。あれ、どこに向かっているんでしょうか？

「ウエンデイ、ゴーシュ、私達も行くわよ！」

「う、うん!」「ああ」

「待ってよ、置いてかないでよ〜!」

ハッピー：まあいいや。3人には悪いけど、そのまま先に行つてもらおう。

「ゴーシュ君：君は行かないのかい？」

「ええ、まあ。ジュラさんと一夜さんを連れて行きますよっ!」

「メエ〜ン!!」

この場に3人だけになったのを確認してから、ディフェンド 防御結界・スクエア 立方で一夜さんを攻撃する。突然だったからか、ジュラさんは驚いた様子でこつちを見る。

「いきなり何を!？」

「ジュラさん、あれは多分：本物の一夜さんじゃないです」

「何!？」

「：まさか、気づかれるとは思ってなかったゾ」

一夜が飛ばされた方の草むらから、さつきヒビキさんに見せても

らった映像にあった女性…エンジェルが現れた。

「…どうやって気付いた？ ジェミニのコピーは完璧だったゾ」

「いや、あなたの位置が分かっていただけですよ。青い天馬ブルーベガサスの中でトップレベルの魔導士と言われる一夜さんの近くにずっといた。…それほど魔導士なら気づいてもおかしくはないほど近くに、ずっとね。だから思ったんです。一夜さんが裏切ったのか…もしくは偽物なんじゃないかって」

「…正解だゾ。あの汚い男なら倒してコピーさせてもらったゾ」

「な…!？」

原作で連合軍に合流したらまず最初にすべきこと。それは、エンジェルの不意打ちで一夜さんとジユラさんが攻撃されるのを防ぐことだ。一夜さんはさすがにタイミング的に守れなかったけど…

「間抜けな奴らだけだと思ってたけど、ちよつとは歯ごたえがありそうだゾ」

「ジユラさん!」

「うむ」

「私の目的は果たした…ここは逃げさせてもらおうゾ! 開け、彫刻具座の扉・カエルム!」

「防御結界・壁!」ディフェンドウォール

機械のような形の星霊の攻撃を防ぐが、足元近くの地面を狙っていたらしく。砂煙が舞い、止んだ頃にはエンジェルは姿を消していた。「逃げられた…」

「ゴーシュ殿。どうやってあの者の潜入に気づいたのだ？」

「僕の魔法…結界魔法は、防御だけでなく様々な効果をもつ結界を扱うことができるんです。その中に、周囲の物体を感知する結界があります」

索敵結界サーチ。透明な結界で、HUNTER×HUNTERの念能力の応用技・円を参考にしたものだ。効果もほとんど一緒。目を瞑っていても周囲に何があるのか分かるというもので、短い範囲であるほど魔力の消費が少なく、また範囲内の対象にも気づかれにくい。今はまだ10mくらいしか伸びないから、最初から知ってないとほとんど気づ

かないけどね。

「結界魔法…珍しい魔法だな。だが、奴は目的を果たしたと言っていた…」

「あれって星霊ですよ？一夜さんがトイレに行った時に入れ替わったんでしょうけど…」

「それでは、作戦を我々に話していたのもあの星霊ということ…まさか、あの星霊はコピーした者の記憶を読み取れるのか！」

「じゃあ、先に行った皆は…」

「待ち伏せされている可能性がある！私は一夜殿を探してから向かう！ゴーシユ殿は先に皆の元へ！」

「はい！」

すごいな…たったあれだけの情報ですぐに相手の能力を見極め対応する。膨大な戦闘経験がなければ成しえないことだろう。いや、感心してる場合か！早く、皆の元へと急がないと！

☆

上空にあつた魔導爆撃艇クリスティーナが樹海の方へと墜落したのが見え、少し先で魔力のぶつかり合いを感じる…！ようやく到着すると、エルザさんが毒蛇に噛まれた所だった。……できれば、その攻撃だけは防ぎたかった…！

「ウエンディー！シャルル！皆！」

「ゴーシユ！」

「あんた、どこ行つてたのよ！」

「一夜さんが偽物だったんだ。ジユラさんは本物の一夜さんと一緒にもうすぐ来ると思うけど…」

「ウエンディー…」

敵の親玉、ブレインがこちらを見て呟く。しまった、気づかれた…！

「どうしたブレイン？」

「知り合いか？」

「間違いない。ウエンディー…天空の、巫女だ」

天空の巫女。つまりブレインは、ウエンデイの魔法について知っている。ウエンデイは天空の滅竜魔導士だ。それを知っていないと、天空の巫女なんて言葉は出てこない。

「こんな所で会えるとはな……これは良い物を拾った。来い！」

ブレインの持つドクロの杖から、禍々しい魔力が放たれた。手の形を作りだし、ウエンデイを掴もうとする。

「防御結界・匣！」

「何!？」

ウエンデイを箱型の防御結界が包み、伸びてきた手を弾く。絶対に、ウエンデイを連れて行かせるもんか！

「お前たち、目的はなんだ!?なぜウエンデイを狙う！」

「……うぬには関係ないことだ。コブラ、レーザー！」

「おう」「聴こえてるぜ」

「防御結界・円蓋！」

レーザーが消えたと思ったら、すでに真後ろに回られている。だがそう動くと思っていた僕は自身の周りに半球状の結界を展開して防いだ。その直後、コブラも攻撃してくるがレーザー同様に弾かれる。

「中々展開が速い結界だ。速えことはいいことだが……」

「ああ、かなり固い結界だ。破るのは骨が折れるぜ」

「私に任せる、デスヨ！リキッドグラウンド!!」

「くっ……弾性結界！」

立っていた地面が柔らかくなる。ここまで柔らかくなってしまうと立っているのも難しい……!咄嗟に弾性結界を足場にして上空へと跳ぶ。

「中々頑張ったが……」

「弾性結界！」

「無駄だ!!」

「ぐっ！」

レーザーが目の前に現れ、弾性結界で方向転換したもののコブラの毒蛇——キュベリオスの尻尾で地面へと叩きつけられる。さすがに多対一はきつい……!

「ぎつぎのお返しだゾ！カエルム！」

「デイフエント防衛結界・ボックス匣！」

「ちっ！」

危なっ……叩きつけられた直後にビームとか鬼かよ!?何とか防いだけど……防戦一方だ。このままじゃ……!

「ウエンデイ、後ろ!!」

「え……きゃああっ!!」

「ウエンデイ!!」

「シャルル、ゴーシュ!!」

ブレインの奴、あの禍々しい手の形した攻撃をホットアイが作った攻撃の跡に這わせて……ウエンデイが捕まったけど、まだ間に合う!

「防衛「遅え!!」……くっ!!」

レーザーがしつこく攻撃してくる……僕に魔法を使わせない気か!このままじゃ、ウエンデイが……

「待ってて!オイラが助けるから!」

「何しやがる、この……」

「金に上下の隔てなし、デスネ!」

『ぐああ!!』

ナツさんたちも防ごうとしてくれたけど、ホットアイの攻撃で身動きが取れなくなってしまった。魔法を使う隙があれば……!

「シャルル!!」

「ウエンデイ!!」

ウエンデイが必死にシャルルに手を伸ばす。シャルルもウエンデイの手を掴もうとし、ウエンデイは……ハッピーの手を握った。

「あれ……?」「ちよ、あんた!!」

「きゃあー!!」「ナツ!うわあ〜!!」

禍々しい手に引きずり込まれ……ブレインの目の前で、2人は消えてしまった。くそ、間に合わなかった……!!

「ハッピー!!」「ウエンデイ!!」

「うぬらにもう用はない……消えよ!常闇回旋曲!!」ダーククロンド

「伏せろー!!」

ブレインが禍々しい魔力のエネルギー波を放ち、それが僕達連合軍へと降り注ぐ。……まずい、範囲が広すぎる!!

「岩鉄壁!!」

ディフェンド
地面から迫り出してきた柱が攻撃を防いだ。良かった……。僕の防御結界は僕を含めて5人程度しか守ることができない。つまり今いた仲間たち全員を守れるほどの広範囲は無理だった。本当に助かった…

「ふう…間一髪」

「ジユラ様!」「おおっ!」

「:助かりました、ジユラさん」

「すごいや!」

「ありがとう、助かったよ」「あんたも何気に、ありがとう…」

ヒビキさんはルーシーさんを、リオンさんはシェリーさんを咄嗟に庇っていた。それにしても、さすがはジユラさんだ…あれほどの広範囲を防ぐことができるとは。僕ももっと精進しないと。

「くそっ…!!あいつらは?!…あれ」

「消えちまったか」「んだと、コラー!!」

「ウエンデイ…」

「完全にやられた…」

「あいつら強すぎるよ…手も足も出なかった」

オラシオンセイイス

「六魔将軍…なんて奴らだ」

「たった6人だというのに…集めた情報以上の魔力だった」

「頼りのクリステイナーまで…」

皆、奴らの強大きさに驚いているようだ。…やっぱり、6人揃っている時に挑んでも駄目だ。各個撃破していかないと勝ち目は薄い、というかほぼ0%だろう。

「うむ…あの女の星霊の力だ。恐らくコピーした者の記憶を知ることができのだろう。我々の作戦は全て知られていたということだ」

「星霊…そうだ、あの船の中の人は!」

「それなら心配ない」

「クリステイナーは目的地まで遠隔操作で向かうからね」

「仮設拠点が判明した後で、僕達が乗り込む予定だったんだ」

「そうなんだあ、良かった…」

無人艇…クリスティーナつてもしかして、いやもしかなくても超高性能なのでは？どれだけの人と財力が使われているんだろう…

「ジュラさんも無事で良かった」

「ゴーシュ殿のおかげだ。彼が敵を発見してくれなければどうなっていたか…感謝する、ゴーシュ殿」

「い、いえ！大したことはありませんよ…そういえば一夜さんは？」

「痛み止めのパルファムで一時的に痛みを和らげられているようだ」

「六魔将軍め…我々が到着した途端に逃げ出すとは…さては恐れをなしたな…」

「あんたボロボロじゃねーか!!」

確かに。そこまでボロボロにやられているのは一夜さんだけです。

「これしきの怪我なんでもない…皆さんにも、私の痛み止めのパルファムを!!」

一夜さんが辺り一帯に痛み止めのパルファムを撒き散らす。おかげで怪我の痛みも和らいできた。僕も一応回復系の結界があるけど、効果がかなり薄いし1人ずつしか治せないので素直にありがたい…変なポーズとルーシイさんのツツコミは健在だ。

「あいつら…！よくもウエンディとハッピーを…！どこだ！どこ行つたコラー!!」

「ナツ、どこ行く気!？」

「ぐぎやあ!？」

飛び出して行こうとするナツさんのマフラーを掴み転ばせるシャルル。今、ナツさんの首も締まってましたけど？普通に止めようよシャルル…

「全く、少しは落ち着きなさいよ」

「羽?」「羽ですわ」「猫が飛んでる」「すごいや!」

「これは翼エーラっていう魔法。ま、初めてみたなら驚くのも無理ないですけど」

「…ハッピーと被ってる」「なんですって!？」

「あんたが驚いてるじゃないの…」

全くだ。シャルルは何を得意げに話しているのか…しかも同じエクスードなんだから、ハッピーも翼^{エーラ}が使えるのは当然だろうに。

「…とにかく、ウエンデイとオスネコことは心配だけど…闇雲に突っ込んで勝てる相手じゃないって分かったでしょ?」

「シャルル殿の言う通りだ。敵は予想以上に強い」

「メエーン…」

一夜さんはいつまでそのポーズしてるんですかね? 痛み止めのパルファムはありがたんですけど、ポーズはもういいと思いますよ…? いや、真面目な話でもずつとこんな感じの人だったねこの人。僕も頑張つて慣れることにしよう。

「それに…」

「ううっ…」

「エルザ!」「しっかりして!」

「毒蛇の毒…」

エルザさんが右腕からの毒を必死に抑えている。やっぱり、あの時の攻撃を防ぐことが出来なかったことが辛い…防げていれば、エルザさんも最初から一緒に戦うことができたのに…!

「一夜様!!」

「分かっている…マイハニーの為に、痛み止めのパルファム! 香り増強!!」

痛み止めのパルファムがエルザさんの周りを漂うけど、和らぐどころか余計に苦しんでいる…どうやら駄目みたいだ。

「メ、メエーン…」

「しっかりしろ、エルザ!!」

「僕にやらせて下さい」

「ゴーシユ…」

「大丈夫だよ、きつと」

エルザさんに近づき、結界を展開する。これは戦闘に使う結界ではなく、ウエンデイの天空魔法を参考にしたものだ。黄緑色の結界で、^{ホーリィ}聖結界という。状態異常を回復させることができる。だから、きつと

毒にも効果があるはず…！

「…どうですか？エルザさん」

「ああ…少しだけ楽になった」

「…シャルル」

「ええ…やっぱりウエンデイじゃないと駄目なのね」

「どういうことですか？」

「僕の魔法は結界魔法^{バリクサー}。防御とか、こんな風に色々な効果の結界を使えます。これは、ウエンデイの魔法を参考にしてるんです」

「ウエンデイ？あの小さい子が解毒の魔法を使えるの!？」

「解毒だけじゃない。解熱や痛み止め、傷の治療もできるの」

「な、なんか…私のアイデンティティが脅かされているような…」

俺の中では、一夜さんって力のパルファムを使っている時の印象が強いんだけど…どっちかっていうとアイデンティティはあつちの姿じゃないのかな？

「でも、治癒の魔法ってロスト・マジック…失われた魔法じゃなくって？」

「まさか、天空の巫女っていうのに関係があるの？」

「ウエンデイ…あの子は天空の滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}。天竜のウエンデイ」
「滅竜魔導士…!!」

皆驚いているけれど、ナツさんが一番反応してるな。できればこの話はウエンデイから直接話すべきだと思っただけ…状況が状況だから、仕方ない。

「ウエンデイの魔法を参考にしたこの聖結界^{ホーリー}なら、エルザさんの毒を軽減はできます。でも、完治はやっぱりウエンデイじゃないと無理みたいなんです」

「私達に今、必要なのはウエンデイ。だけど敵も目的は分からないけれど、ウエンデイを必要としている」

「となれば…」

「やることは一つ」

「ウエンデイを助けることです」

「ハッピーもね！」

「よし、やるぞー!!」

『おおー!!』

こうして、連合軍は一丸となった。

第7話 少女と亡霊

ワース樹海の奥——ここはかつて古代人の都があった場所。周りを岩壁と滝に囲まれており、その岩壁を削ってつくられた洞窟は村の神事の際に巫女が籠り、神の言葉を聞いたという。

現在、その洞窟の中には悪しき者たちがいた。そう、連合軍が相対したバラム同盟の一角を担う、たった6人しかいない闇ギルド・オランオンセイブス六魔将軍である。彼らはこの場所を仮拠点としていた。彼らの傍には、連合軍に参加していたウエンディとハッピーの姿もある。

「ぎやあつー」「うわあー！」

オランオンセイブス六魔将軍に捕まり、洞窟の奥で地面へと投げられる2人。

「乱暴するな！女の子なんだぞ！」

「ハッピー……」

「……」

「っ！やめて!!」

ブレインはハッピーの頭を掴み、力を入れようとする。ウエンディがそれを止めると、ハッピーは再度地面へと放られた。ハッピーは目を回している。

「ハッピー、大丈夫？」

「あ、安心してウエンディ。オイラが絶対逃がしてあげるからね」

「ハッピー……!」

ウエンディにとってハッピーのその言葉は、少なからず心の支えとなった。1人だけで攫われていたら、すぐに心が折れてしまっていたかもしれない。ウエンディはハッピーを優しく抱きしめた。

「ブレイン、この娘はなんなんだ？」

「ニルヴァーナに関係してんのか」

「そんな風には見えないゾ」

「そうか！売ってお金にするつもり、デスネ!!」

「おめえは他のこと考えらんねえのかよ」

「金さえあれば愛でも手に入りますネ!!」「ああ、そうかい……」

オランオンセイブス六魔将軍のブレイン以外のメンバーは、彼女が何者であるか分かつ

ていないようだ。連合軍を全滅させた時にブレインが独断で捕縛したのだから当然ではあるが。

「こやつは天空魔法…治癒魔法の使い手だ」

「治癒魔法だと！」

「ロスト・マジック失われた魔法…」

「忘れ去られた古代の魔法か」

「これは…金の匂いがしますネ」

「ふん、こんな小娘が…！まさか…」

「その通り…奴を、復活させる!!」

『!!』

ブレインがウエンディを連れ去った理由。…それは、ある男を復活させることだった。それが、オランオンセイイス六魔将軍の目的達成の為に最善だと考えたからだ。

「奴って誰だ！」

「よ、よく分かりませんが…私、悪い人達に手は貸しません!!」

「貸すさ、必ず。うぬは必ず奴を復活させる」

ハッピーとウエンディが警戒する。が、その警戒も無駄だと言わんばかりにブレインがそう言い放った。ブレインは、ウエンディとその男との関係を知っていた。完全に把握していたわけではなかったようだが、それはウエンディも同じだった。

「レーサー。奴をここに連れてこい」

「遠いな…いくら俺でも1時間はかかるぜ」

「構わん」

「なるほど…あいつが復活すれば、ニルヴァーナは見つかったも同然。そういうことかブレイン」

「コブラ、ホットアイ、エンジェル。貴様らは引き続きニルヴァーナを探せ」

「でも、あの人が復活すればそんな必要はないと思うゾ」

「だから、誰を復活させようとしてるんだよ!!」

ハッピーが叫ぶが、誰も聞く耳を持つとうとしていない。彼らに必要なのはウエンディであって、ついてきてしまっただけの猫はどうでも

いいということなのだろう。

「万が一ということもある。私とミッドナイトはここに残ろう」

「ミッドは動く気がないみたいですが」

「じゃあねえ、行つてくるか」

「ねえ、競争しない？先にニルヴァーナを見つけた人が「賞金100万J（ジュエル）!!乗った!!」：デスネー」：100万は高いゾ」

レーザーはその男の元に、コブラたちはニルヴァーナ捜索にそれぞれ出て行く。この場にはウエンディとハッピー、ブレインと、ずっと眠り続けているミッドナイトのみとなった。

「ねえウエンディ…こいつらさつきから何の話をしてるの？」

「わ、分かんない、私にも。……一体どんな魔法なの、ニルヴァーナって？」

「光と闇を、入れ替える魔法だ…」

「…？光と闇が…」

「全然意味わかんないよ…」

ウエンディとハッピーの疑問にブレインは答えることもなく、ただ静寂が場を包んでいった…

☆

皆がウエンディとハッピーの救出に行った。本当なら僕も助けに行きたかったけど、エルザさんの毒を治すことはできなくても遅延させることはできるようなので、ヒビキさん、ルーシイさんと一緒に残ることにした。

「ゴーシユ、どう？」

「やっぱ僕には遅らせることしかできないみたいです。…2、3時間は大丈夫だとは思いますが」

「そつか…ウエンディとハッピー、大丈夫かな…皆、急いで…」

「焦っても仕方がない。ゴーシユ君が遅延させてくれているおかげで少しだけ猶予がある。僕らは、僕らにできることをするしかない」「できることって？」

「向かう者、留まる者。僕達は即席の連合軍だけど、チームとして機能

しなければ奴らには勝てない」

その通りだ。各個撃破するにしても、2人以上でなければ相手にならないと思う。奴らは魔力も高いし、正規ギルドよりも戦闘慣れしているだろう。そんな相手に1人で挑むなんて無茶だ…まあ、エルザさんとかジユラさんなら大丈夫だと思うけど。

ヒビキさんが古文書アーカイブで何かを始める。ヒビキさんは留まり、皆に情報を与えてサポートする方が向いている…あれ、なんで最初飛び出していったんだ？六魔の奇襲を知らなかったとはいえ、いきなり前線上げに行った気がするんだけど…

「ジユラさんがその魔法…古文書アーカイブって言ってたけど」

「そう、これで皆の動きを確認できるんだ。君は行かないの、ルーシイ？」

「エルザを置いては行けないでしょ？それに、どう考えてもあたしが一番戦力にならないし…」

そっか…この頃のルーシイは魔力切れっていう決定的な弱点があるんだっけ。7年後は第二魔力セカンド・オリジンの解放でそんなことはほぼなくなっただけど。星霊魔法って魔力消費が激しいのかもしれない。

「またまた謙遜を…噂は聞いてるよ？3mのゴリラを19匹も倒したとか、フアントムとの戦いでは素手であるマスター・ジョゼを再起不能にしたとか…アカリファじゃあ闇ギルドを相手に1人で1000人と戦ったとか！」

「尾ひれつきすぎ…」

えっと、ゴリラの話はマカオさんのことだし、幽鬼フアントムロードの支配者との戦いでマスター・ジョゼを倒したのはマスター・マカロフだし…アカリファの件はどうだったかな？あれも最強チームでやってたことだった気がするから、雑魚1000人くらいなら余裕かもしれない。

「でも、ルーシイさんはここに居てくれないと困ります」

「え？なんで？」

「僕の魔法は攻撃よりも防御寄りだし、ヒビキさんの古文書アーカイブもサポート寄りだし…もし今この場で敵に襲われたら、こっちの攻撃手段はルーシイさんしかないと思うんですよ」

このままだったら、恐らく僕が原作に介入するのはエンジェル戦。僕が介入することで防御面はカバーできるはずだから、ルーシイさんに攻撃に専念してもらえば原作より楽に勝てるかもしれない。

「確かに、あれだけの実績を持つルーシイが一緒だと心強いね！」

「あんたねえ…でも、そういうことなら任せておいて！これでも妖精の尻尾の魔導士なんだから！」

出た、名言！いいな…そんなこと言う機会なんてほとんどないし。僕も言える時が来るといいなあ。

まあヒビキさんの冗談で言ってると思うけどね。

「そういうあんたは行かないの？」

「傷付いている女性を置いては行けないよ」

「へえ、意外と優しいんだ…週ソラの記事で読んだのとは印象違うなあ」

週ソラっていうのは週刊ソーサリーっていう雑誌のことで、彼氏にしたい魔導士ランキングとか彼女にしたい魔導士ランキングとかそんなものが掲載されている。このヒビキさんはその週刊ソーサリーで彼氏にしたいランキングの上位ランカーらしい。

「というより、攻撃系の魔法がないか、あっても弱いからじゃないですか？」

「す、鋭いねゴーシユ君…」

「なあんだ、台無し」

「僕の魔法は、皆にこの位置を知らせることができる。ウエンデイとハッピーを救出しても、この場所に帰れなかつたら意味ないからね」

「…結構色々考えてるんだ」

「一夜様の教えを、守っているだけさ」

僕つてもしかしてお邪魔？なんだかいい雰囲気になっっている気がする。

「ナツ君たちは…ここか」

そういえばシャルル、大丈夫かな？ナツさんとグレイさんと一緒に引っっちゃったけど…まあ彼女はしっかりしてるから問題ないか。

ウエンデイと一緒に、帰って来てくれよ…

☆

「ふう…参ったぜ。思ったより時間がかかっちゃまった。こんなに重けりやスピードだつて出ねえつてもんだ」

「何を言うか。ぬしより速い男など存在せぬわ」

「あれは…」

「棺桶…？」

約1時間半が経過し、レーザーが大きな十字架のような形をした棺桶を持って仮拠点へと戻ってきた。棺桶には鎖が巻かれている。

「ウエンデイ。お前にはこの男を治してもらおう」

「わ、私、そんなの絶対やりません!!」「そうだそうだ！」

「いや、お前は治す。治さねばならんのだ」

ブレインがそう言い放った途端、鎖についていた錠が外れ、棺桶の中身が姿を現した。中には、所々が結晶のようになってしまった青髪の青年がいた。顔には特徴的な模様があり、ウエンデイはその顔を知っていた。

「…!!」

「この男はジェラール…かつて評議員に潜入していた」

「そんな…そんな…！」

ハッピーもジェラールのことを知っていた。ナツたちは以前楽園の塔という場所で、ジェラールと対峙したことがあるのだ。彼は黒魔導士ゼレフを復活させるべく、R ^{リバイブ}システムという蘇生装置を8年かけて建築し、評議員に潜入してエーテリオン——超絶時空破壊魔法と言われる兵器を利用した。しかし、ナツたちの活躍で彼は倒され、生死不明の状態だった。

「評議員に潜入していたということは即ち、ニルヴァーナの場所を知る者」

「ジェラールって、どうしてここに!?なんで生きているの!？」

「ジェラール…」「知り合いなの!？」

「エーテルナノを浴びてこのような姿になってしまったのだ。……だ

が、死んでしまったわけではない。元に戻せるのはうぬだけだ。この男は、お前の恩人なのだろう？」

「ええ!」「…」

ハッピーが知るジエラールと、ウエンデイの恩人であるジエラールは別人である。が、そんなことを知る者はこの場にはいない。ウエンデイとハッピーは、ただ混乱していた。

第8話 優しい魔法

「ふう…」

「大丈夫、ゴーシユ？」

「ええ…まだ、大丈夫です」

あれから2時間は経ったかな…さすがに魔法を使いつぱなってしまうのはきつい。消耗が少ない魔法だとしても、これだけ使い続けていたらいずれ枯渇してしまう。でも、こんなこともあるのかと作っておいた結界魔法がある！

「あーん…」

「ゴーシユ君、それは？」

「譲渡結界ラランブルって言って…簡単に言ったら魔力が入った飴玉です」

もちろんトナカイ船医さんをリスペクト。魔力が重要な時に枯渇してたら意味ないと思って、ふと思った。余裕がある時に魔力をあらかじめ溜めておけばいいんじゃないかと。転生者である僕だから、他のアニメの知識もある。参考にするには十分だった。

この譲渡結界ラランブルは僕の最大魔力の10分の1を溜めていて、食べた人はその分の魔力が回復し、さらに魔力の自然回復が少しだけ早くなる。色もランダムで、味も変わるようにしてあるから複数食べても飽きたりしない。魔法だから腐るとかそういう心配もないし。これの前もって20個くらいは作ってポーチに入れて持ってきておいたから、枯渇しそうになったら舐めてれば大丈夫。しかもこれのいい所は、他の人にも渡せることだ。仲間の魔力が切れそうになったらこれを食べさせておけば少しは回復するだろう。

「そんなものまであるのか…結界魔法バリアーのことは古文書アーカイブで見たことがある。確か色々な能力を付加できるとか…使い方によってはそんな能力も付けられるんだね」

「まあ他にも色々あるけど…どれも不便だと感じるところはありますけどね」

「それでもすごいじゃない、六魔將軍オラシオンセイブと戦ってた時も、相手の攻撃をほとんど防いでたし！」

「まあ、防御がメインの魔法ですからね…攻撃系が少ないのが難点ですが」

今の僕の魔法だと、防御とサポートがほとんど。攻撃手段といえばディフェンド防御結界を相手にぶつけるくらいしかできない。防御結界は固いのディフェンドが取り柄だから、当たったら大体気絶してくれるけど。それに、オラシオンセイブ六魔将軍の攻撃はどれも強力だった。…これは、警戒レベルを引き上げなければ。

「それより、ヒビキさん。ウエンディとハッピーはまだですか？さすがにもう遅延できなくなりそうなどころまで毒が…」

「それが…誰とも繋がらないんだ」

「そんな!？」

「でも、安心してくれ…必ず、繋いでみせる」

そうか、ニルヴァーナの影響で念話が繋がりにくいんだっけ。今のエルザさんの毒の進行具合は、もうすぐ肩から胴体の方まで伸びてきた所。今は腕だけで範囲が狭いからこの程度の消費で済んでるけど…胴体までいったら魔力消費がさらに激しくなるだろう。その前に、早くウエンディを…!

「…この反応は…」

「どうしたの?」

「ちよつと待ってくれ…ナツ君、聞こえるかい?」

ナツさん…ということとは!

『お前は…』

「僕だ。ブルーベガサス青い天馬のヒビキだ。良かった、誰にも繋がらないから焦ってたんだ」

『おお、どこだ?』

「静かに…敵の中には恐ろしく耳の良い奴がいる。僕達の会話は筒抜けしている可能性がある。だから、君の頭に直接語りかけているんだ。ところで、ウエンディちゃんと猫君は…」

『ここにいる…気絶してっけど。あー、ハッピーは起きてるぞ』

「そうか、良かった!さすがだよ!これからこの場所までの地図を、君の頭にアップロードする。猫君はダメージと魔力の低下で繋がらな

いようだが…とにかく、急いで戻ってくれ」

『ああ？アツプルがどうした？何言ってやがんだ…お？おお！』

どうやらナツさんがもうすぐウエンディを連れてここまで来るといいたい…良かった。でも気絶しているってことは…多分、ジェラールを復活させたんだ。

「ゴーシユ、もうすぐだからね！」

「はい！ヒビキさん、ナツさんたちはどれくらいでこっちに？」

「このスピードなら、到着まであと10分ってところかな」

「それくらいなら大丈夫。十分持ちます」

だったら譲渡^{ランブル}結界食^{ブル}べなくて良かったかも…ちよつともつたいないことしたな。まあ、自然回復が一時的に早くなるだけ良しとしよう。

☆

「何、今の音…!？」

「爆発…?」

どこかから、大規模な爆発が聞こえた。原作通りだとすれば、今はレーサーの最後の足掻きの自爆用魔水晶^{ラックリマ}だ…どうか、原作通りであってほしい。グレイさんも、リオンさんとシェリーさんも無事でいてくれ。

「…ヒビキさん、何か分かりますか？」

「いや、ダメだ…何かの魔力で妨害されているらしい」

やっぱり無理か。ニルヴァーナがある限り、念話や情報は期待できないな。

「…!」

「…」

「よつと…着いたー!!」

「ナツ！」

草むらが動き出し警戒するが、飛び出してきたのがウエンディとハッピー、シャルルを抱えたナツさんだったのでホッと息をつく。複数人いるなら、本物だと思う。ジェミニは1人だけしか変身できないからね。

「どうなってんだ？急に頭の中にここまでの地図が…」

「それより、早くウエンディちゃんを」

「そうだ！起きろ、ウエンディ！エルザを助けてくれ!!」

「落ち着いてナツ！」

「う、うう…」

ナツさんがウエンディの肩を持ってすごい勢いで揺さぶる。起きた時気持ち悪くなってそうな起こし方だな…でもその甲斐もあってウエンディが目を覚ましそうだ。

「ん…！あわわわ…!!」

「？」

「ごめんなさい、私…!」

ウエンディが目覚めると、ナツさんから距離をとる…この反応、やっぱりジエールが今この樹海の中にいるのか。謝って、頭を抱えて怯えているのが証拠だろう。

「今はそんなことどうでもいい!!エルザが毒蛇にやられたんだ…助けてくれ、頼む!!」

「毒…?」

「僕の魔法じゃ遅延が精一杯…ウエンディ、いけそう?」

エルザの状態を確認するウエンディ。もう胴体の方まで差し掛かっている。これ以上遅延させるのは難しい。…でも、ウエンディも天空魔法を使っているから魔力を消耗しているだろう。

「六魔將軍オラシオンセイブスと戦うには、エルザさんの力が必要なんだ」

「お願い、エルザを助けて!!」

「頼む…!!」

「も、もちろんです!はい、やります!!」

ウエンディはやる気に満ちた目でそう答えてくれた。思ったより元気そう…これならまだ譲渡ランブル結界は必要ないかな。終わってからいくつか渡そう。

「良かったあ…」

「いつまで伸びてんのよ…だらしない」

「あい…」

「いや、シャルルもさつきまで伸びてたでしょ」

「…プイ！」

「ハア…それじゃ、ウエンデイ」

「うん…！」

ウエンデイと交代し、エルザさんに天空魔法をかけ始める。毒の進行は遅らせることができたと思うけど…少しでも魔力の消耗を抑えられていればいいな。

そして数分が経ち…エルザさんの顔色も良くなり、毒に侵された箇所も消えていく。

「終わりました…エルザさんの体から、毒は消えました！」

「…え…？」

ナツさんたちが緊張した面持ちでエルザさんを見る。穏やかな顔で、呼吸も乱れていない。ウエンデイの言う通り、成功したんだろう。まあ、ウエンデイがやることになった時点で治るのは確定だったけどね。

「…よっしゃー！」

ナツさんたちがハイタッチして喜んでいる…ハッピーとシャルルもちやつかりハイタッチしていた。なんだ、仲良いじゃないか。

「ウエンデイ、ゴーシュ」

「あ…」「はい」

「ありがとなー！」

ナツさんが僕とウエンデイに手を向ける。ウエンデイは申し訳なさそうにしているけど、ちゃんと2人揃ってハイタッチをした。

「僕は遅らせただけですから…ウエンデイ、お疲れ様」

「…しばらくは目を覚まさないかもしれないですけど…もう大丈夫ですよ…！」

「すごいね…本当に顔色が良くなってる。これが天空魔法…」「近すぎ!!」

ヒビキさん…エルザさんに顔数cmつてところまで近づけている…それ、エルザさんが起きたらぶつた切られるんじゃない？

「ウエンデイ、これ食べておいた方がいいよ。ナツさんたちもどうぞ。」

魔力が少し回復しますんで」

「お、サンキューー！…うめえなコレ！ブドウみたいな味がすんぞー！」

「あい！オイラのはメロン味だ〜」

「あ、ありがと…」

「遠慮なくもらつとくわ」

「ルーシイさんとヒビキさんもどうぞ」

「あ、ありがとー！…ホントだ、おいしい！」

「ありがたくもらつておくよ」

全員に譲渡結果を配る。これで少しは回復するだろう。でも、ウエ
ンディはこれでも回復しきらないだろうな…前に魔力がゼロになっ
た時に7個ぐらい食べて全快だったから…あと2個くらいあげとい
た方がいいかな？いや、空気を食べれば回復できるか。ちなみにルー
シイさんは欲しそうにしてたからあげた。最初の戦闘で魔力が少し
は減っているだろうし。

「後はエルザさんが目覚めたら反撃の時だね」

「うん！打倒、六魔将軍【オラシオンセイス】！」

「おー！ニルヴァーナは渡さないぞー！」

次の瞬間、辺りを光が覆った…ま、眩しい。これはまさか…

遠くで真つすぐに上へと、黒い光が昇っていく。その光の根元から
は、ブレインの魔力とは違うけど、黒い不気味な魔力がいくつもうご
めいており、やがてそれは真つすぐに昇っていた光と混ざり合っ
ていった。

「な、何!?!」

「黒い光の柱…」

「まさか…!」

「あ、あれは…ニルヴァーナ!?!」

「まさか、六魔将軍オラシオンセイスに先を越された!?!」

「あの光に…ジェラールがいる!!」

「…!ジェラール…?ナツ!ジェラールって、どういうこと!?!」

「ジェラール…ウエンディ」

ナツさんが飛び出して行ってしまった。ルーシイさんも驚いてい

るが、ナツさんは聞こえていないようだ。ウエンデイの方を見ると、今にも泣きそうな…体が震えていて、怯えた目をしていた。

「わ、私の…私のせいだ…」

「ナツ君を追うんだ！」

「ナツ、ジェラールとか言っただけでなかった？」

「説明は後！それより今はナツを…「ああー!!」…!？」

「どうした、シャルル？」

「エルザがいない!」「え!？」

「あ、ああ…」

シャルルが指差す方を見ると、さつきまでそこで眠っていたはずのエルザさんがいなくなっていた。意識があったんだとすれば、今頃…

「何なのよあの女！ウエンデイに一言の礼もなしに！」

「エルザ、もしかしてジェラールって名前聞いて…」

「どうしよう…私のせいだ…」

ウエンデイがさらに涙目になっている。このままじゃ…まずい。ヒビキさんがウエンデイをずっと睨んでいる…!

「私がジェラールを治したせいでニルヴァーナが見つかって…エルザさんや、ナツさんが…!」

「…ヒビキさん、ちょっと待ってください」

「ゴーシユ君…?」

仕方ない。マスターにはできるだけ話すなって言われてたけど、発動してしまったならこのままではウエンデイが墮ちする。それだけは絶対にダメだ。

「ウエンデイ」

「わ、私のせいで、皆が…」

「ウエンデイ!!」

「つ!!ご、ゴーシユ…?」

「ウエンデイ…何があつたの？さつきから、変だよ」

「私…ジェラールを、治しちやつたの…ブレインって人に命令されて…ジェラールは、ニルヴァーナの場所を、知ってるって…それで…!」
泣きながら、そう話すウエンデイ。自責の念に囚われるのも仕方な

いとは思う。でも、ウエンデイがしたことは間違いなんかじゃない。
「ウエンデイ：たとえジェラルルをウエンデイが助けなかったとしても、奴らがニルヴァーナの場所を探し当てるのは時間の問題だった。ナツさんたちがいなくなったのは、きつと自分の意志で動いただけだ。それをウエンデイのせいって思うのはお門違いだよ」

「で、でも私…」

「確かに、ジェラルルが動いたことでニルヴァーナが早く見つかったのも事実だと思う。でも、ウエンデイがジェラルルを治さなかったら…僕は、ウエンデイを許さなかったよ」

「え…？」

「だって、ウエンデイは優しいんだ。君の魔法は、優しい魔法なんだ。僕達は、ジェラルルに助けられた…恩返しをして、何が悪いんだ！」
「ゴーシユ…！」

安心させるようにウエンデイに近づき頭を撫でる。

「君は、何も悪くない。君は、ジェラルルを救っただけなんだから」
「うん、うん…！ありがとう、ゴーシユ…！」

そう言つて、ウエンデイは僕に抱きついてきた。み、皆が見ているからそこまでしなかったのに…まあ、安心させることができたなら、いいかな…？僕はウエンデイの背中に手を回して、できるだけ優しく抱きしめた。

☆

「で…いつまでやってんのよ」

「!!」

シャルルの眩きと同時に、ウエンデイから離れる…あれ、僕どれくらいウエンデイを抱きしめていた？そこまで長い時間は抱きしめてなかったと思うけど…やばい、恥ずかしくなってきた。しばらく、ウエンデイの顔を見れないかも…

「どうえきてるうう!!」

うわ…そのセリフ実際に言われるとイラつとするな。ウエンデイも赤面して下を向いてしまった。ウエンデイが可哀そうだからやめ

てあげて下さい。僕らはただの幼馴染ですよ？

「そ、それでヒビキさん！もう、大丈夫ですよね？」

「あ、ああ…ゴーシユ君、君はまさか…」

「はい。多分ヒビキさんと同じです」

「ねえ、さつきから2人は何の話をしてるの？」

「僕は…ニルヴァーナという魔法を知っている。ゴーシユ君も、だろ？」

「はい。マスターから聞いてます」

「マスターから…？」

嘘ではない。作戦開始の数日前に、マスターに呼び出されて聞かされている。さすがに自分がニルビット族だつてことは教えてくれなかつたけどね。

「なんで私達に教えないのよ！」

「それは…性質上、話せなかつたんだ」

「そう、ニルヴァーナという魔法は、意識してしまうと危険なんだ。レンもイヴも、一夜さんも知らない。僕だけが知っている」

「どういうこと？」

「光と闇を入れ替える…それがニルヴァーナなんだ」

「光と…」「闇を…」「入れ替える？」

「ブレインも言つてた、そんなこと…どういう魔法なの？」

ニルヴァーナは、本当に質が悪い。もし知ってしまった状態でニルヴァーナの第一段階でも起動されたら…もし、ウエンデイがこれを知っていたなら。今頃ウエンデイは、確実に闇に堕ちていただろう。

「…とりあえず、移動しましょう。ナツさんを追いかけるからでも話
はできる」

「そうだね…それじゃ、行こう」

とにかく、今は時間をもつたいたい。ウエンデイを落ち着かせるのに少し時間をかけてしまったから、急いでナツさんを追いかけないと
!

ニルヴァーナ。それは、善悪反転の魔法。封印が解除されると、まず始めに黒い光が立ち昇る。まさに、今の状態がそれだ。第一段階は、光と闇の狭間にいる者を、逆の属性にする。怒りや憎悪、自責の念といった強烈な負の感情を持つている光の者は闇に堕ちてしまう。だから、さつきのウエンデイの状態は闇に堕ちてしまってもおかしくなかった。反対に、闇の者はこれまでの行動を反省し善人になる。

ナツさんの場合、エルザさんの為の怒りだから…まだ負の感情だとは言えないんだと思う。誰かのことを思つての行動だから。

この魔法は、意図的にコントロールできる。光の者だけに使えば、たちまち殺し合いが発生する。逆に言えば、闇の者だけに使えば善人だけの世界にできるだろう。

と、というのがヒビキさんの考え。実際は善人にした分だけ悪人が増えるようにバランスをとっているのだけど…これは僕もマスターからは聞かされていないから、話しようがないな。

「補足するなら、ニルヴァーナは超巨大な建造物だとか…」

「超巨大…それなら、広範囲に一気に使用できるだろうね」

「なら、尚更止めなきゃ!!」

「ねえ…2人はジェラールと知り合いなの？」

「ええ…僕とウエンデイは7年前、ジェラールに助けられたんです」

「7年前…? あれ？」

「どうしたんですか、ルーシイさん？」

「ちよつとおかしくない? ジェラールって確か、8年間ずっと楽園の塔にいたはず…」

「ジェラールが2人いたってこと? ほら、評議員に潜入してたって」

「思念体ってこと?」

「でも、思念体ってそんな長い間出現させられるんですか? 私達、1カ月近く一緒に旅してましたけど…」

「いや、思念体は実体を持っていないはずだから…どういうこと?」

まあ、普通考えないよね。異世界から自分とよく似た人間がやって来たなんて。平行世界が存在しているだけでも夢物語なのに、それを行き来できるなんて誰が思うか。

「あれ…ナツさん？」

「グレイもいる！」

ウエンデイの向いている方を見ると、ナツさんが筏の上でグロツキー状態で…グレイさんが氷で攻撃しようとしている。明らかに異常だ。

「まずい、もしかしたら彼も闇に…！」

「開け、人馬宮の扉！サジタリウス！」

「であるからして…もしもし！」

馬の着ぐるみ？を着た男性が出現し、弓でグレイさんの氷を的確に砕く。グレイさんもこつちに気づいて攻撃してきたけど、それも全てサジタリウスが撃ち抜いた。

「何してんのよ、グレイ！」

「オイラたちだよ〜」

「であるからして…もしもし！」

「ル、ルーシイ…うつぶ」「名前呼んでから吐きそうになるの止めてくれないかしら!？」

「つていうかひどいよグレイ！いくらなんでもやりすぎだよ！魚横取りされたとかなら分かるけど！」

「それも大概だと思おうよ、ハッピー…」

「ふん、うっせーんだよてめーら。うぜーつての…こいつ片づけたら相手してやるから、邪魔すんじゃねーよ」

グレイさんってそんなに口悪かったっけ…いや、そんなことより…

一応、索敵結界^{サウチ}を展開しよう。範囲内であつてくれ…！

「ナツ、今助けっ…！」

「オスネコっ！」

「ハッピーに何すんのよ！」

グレイさんは何かをブツブツ呟いている。これは情報収集しているんだ…早く、本体のエンジェルを探さないと…グレイさんが攻撃してきたけど、ヒビキさんが防いでくれた。ありがたい…索敵結界^{サウチ}を展開している間は、他の結界の扱いが乱雑になってしまう。

グレイさんが突然ルーシイさんへと変身した。まずい、情報収集さ

れる前に攻撃しないと！

「見つけた！対岸のあの木の陰です！ルーシイさん！」

「え、ええ！サジタリウス！」

「了解であるからしてくもしもし!!」

サジタリウスの矢が木に直撃。エンジェルは木の陰から姿を現した。良かった、まだジェミニに操られる前に攻撃できた…！

「全く、お前は本当にやりづらいゾ」

「最初にコピィを見てるんだ。警戒しないとでも？」

ついに六魔將軍オランオンセイヌの一人：星霊魔導士のエンジェルとの戦闘が始まった。

第9話 星霊合戦

「私、君が持つてる鍵が欲しいの。君を始末して星霊を頂くゾ」
「そうはいかないわ！開け、宝瓶宮の扉！」

「ジェミニ閉門」「ペリーー！」
「アクエリアス！」

ルーシイさんが水瓶座の星霊アクエリアスを呼び出す。その直前にエンジェルは呼び出していたジェミニを閉門した。アクエリアスはこつち諸共やろうとしてる…まあ、大丈夫だけどね。

「ルーシイさん、援護します」

「ゴーシユ、ありがとう！」

「ウエンデイとヒビキさんはハッピーを連れて逃げて下さい！」

「僕も戦うよ。女性を置いて逃げることはできないからね」

「わ、私も！」

「…ウエンデイは魔力が少ないだろう。それにハッピーがああ状態じゃ巻き添えを食う…逃がす役目が必要だ」

「それはゴーシユも…！」

「僕なら大丈夫だから、早く!!」

「!…分かった。無茶しないでね…シャルル、行こう！」

「ええ！」

ヒビキさんとはかく、ウエンデイもシャルルも魔力を消耗しすぎている。讓渡結界を食べていても、あれは気休めにしかない。もう少し時間が経っていれば大丈夫だったかもしれないけど。…それに、目の前で転がってるハッピーに当たってしまうかと思うと僕らも思いつきり戦えない。

「弾性結界!…ウエンデイ！」

「はい！」

「行くわよっ！」

弾性結界で弾ませた凍り付いたハッピーをウエンデイが抱え、彼女をシャルルが掴んで飛んでいく。後で必ず合流する。…行き先を覚えておかないと。

「アクエリアス、あたしたち諸共で構わないから！」

「最初からそのつもりだよ」「最初からって…」

「ルーシイさん、こつちへ！」

「全員まとめて吹き飛びなあ!!」

多分かなりの広範囲の無差別攻撃をするつもりだ。高波でも呼ぶんだろうか…だったら、周囲の木々が全部流されてしまうのでは？守り抜く自信はあるけどさ。近くにいてくれれば、結界で守り切れる。

「開け、天蝸宮の扉！スコープオン！」

「ウィーアー！イーイー！」

「スコープオン♡」「はいく!?!」

うわ…さつきまで全部吹っ飛ばすとか言ってたのにいきなりデレた…さすがにその変わりようはひくわ…スコープオンとアクエリアスは恋仲で、スコープオンの前ではキャラを作っているわけだ。ルーシイさんが小声で脅された後、一緒に星霊界へと帰って行ってしまった。

「星霊同士の相関関係も分からない小娘は、私には勝てないゾ！」

「ディフェンド 防御結界・ウォール 壁！」

「あ、ありがとう、ゴーシユ！」

「チツ…本当に邪魔くさいゾ」

エンジェルがルーシイさんに蹴りを食らわせようとしていたのでディフェンド 防御結界で防ぐ。その隙にルーシイさんは少し後退した。

「ルーシイさん、他に星霊は？」

「えつと…そうだ！開け、獅子宮の扉！ロキ！」

「王子様、参上！」

「レ、レオ…！」

「ふふ…言わなかったかしら？大切なのは星霊同士の関係。開け、白羊宮の扉！アリエス！」

「ごめんなさい…レオ」

「あれは、カレンの…！」

「カレンの星霊、アリエス…どうしてここに？」

以前、獅子宮の星霊であるレオ…ロキさんと白羊宮の星霊であるア

ブルーベガサス
リエスは、青い天馬の星霊魔導士であるカレンと契約していた。しかしカレンは星霊の扱いが悪く、リエスはよく虐待じみた扱いを受けていた。それを見かねたロキさんはカレンに考えを改めてもらう為に人間界に留まり、カレンが星霊を召喚できないようにした。ロキさんはリエスとの契約を解除して反省してくれればすぐに星霊界に戻るつもりだったが、カレンはそのまま依頼を受け、魔法が使えずに…命を、落とした。

ロキさんとリエスは、複雑な関係だ。カレンのことは事故だ。ロキさんはただ考えを改めてほしかっただけなんだ。星霊は生きているんだって、星霊にも感情があるんだって…それが、不幸な結果を呼んでしまっただけなんだ。でも、カレンさんが亡くなってしまった理由は、それだけじゃない。

「カレンを始末したのは私だもの。これはその時の戦利品だゾ。あの女、大した魔力もないのに二体同時開門をしようとしてね。自滅だったゾ。ま、止めを刺したのは私だけだ」

「カレンを、この女が…」

エンジェルがカレンを殺した。そして確か、カレンさんはヒビキさんの恋人だった。だから、カレンさんの仇が目の前に現れたと知ったら…ニルヴァーナを起動されている状態では、闇に堕ちるかもしれない。

「ヒビキさん！落ち着いてください！」

「ゴーシユ君…ああ、ありがとう。闇に堕ちるわけにはいかないからね」

まだ、危険な状態だ…表情に出ている。やっぱりどうしても、カレンさんのことを考えてしまうのだろう。だったら、早くエンジェルを倒すしかない！

アリエスとロキさんが戦いを始める。ルーシイさんは涙を流し、エンジェルは楽しんでいる。分が悪いと判断したのか、あの機械のような星霊を召喚した。これは、アニメでもあった無差別攻撃…！

「カエルム、今よ！」

「デイフエント
ウォール」

「防御結界・壁！！」

「またお前か……!」

「信じられない……! あんたねえ……星霊をなんだと思っっているのよ!! 痛みもあるんだ、感情もあるんだ! あんたそれでも星霊魔導士なの!」
ルーシイさんが感情のままに叫ぶ。でも、エンジェルはただ笑っているだけ。2人はの抱く星霊の価値観がまるで違う。友達と、ただの道具。それぐらい価値観に差がある。

「アリエス閉門」

「ロキ!!」

「任せて!」

「ジェミニ!」

「やめて、ロキ……」 「なっ……!」

「隙ありっ!」 「ぐっ……すまない、ルーシイ……」

「ロキっ!!」

ジェミニがルーシイさんへと変身し、ロキさんの前に出現させる。頭では分かっているのだろうが、やっぱり攻撃を一瞬ためらってしまった。その隙に武器化したカエルムを持ったジェミニに攻撃を食らわせる。

「くっ……開け、金牛宮の扉! タウロス!」

「俺のナイスバディを泣かせる奴は許さんっ!!……モオ?」

「おいで、モーモーちゃん♡」

「モオっ!! ルーシイっさくん♡」

「いやっ!!」

ジェミニがまたルーシイさんへと変身し、お色気のようなポーズをとる。それだけなのに、タウロスはジェミニへと突き進んでいき、武器の様に変形したカエルムでふっとばされた。

「一丁上がり!!」 「モオっ……!!」

「タウロス……っ……あれ?」

「大して魔力もないのに、星霊をバンバン使うからだゾ」

「そんな……」

さすがに僕の結界でも、近接戦闘中の味方を守るのはまだ無理……近接戦闘でも結界で防げるようにするには、瞬間的に正確に敵と味方の

間に結界を出す鍛錬が必要だし、仲間と連携できるだけの結束もない……くそ、これじゃほとんど原作と同じじゃないか……!

「ディフェンド 防御結界・匣!!」

「ゴーシュ……」

「丁度いいゾ。このまま攻撃してお前も戦闘不能にしてやるゾ!」

カエルムを持ったジエミニの攻撃を防ぎ続ける。ルーシイさんを結界の内側に入れることができたけど、正直もう魔力の限界に近い。カエルムでの攻撃が、こんなに重たいなんて……!原作でルーシイさんは、こんなのを何発も食らってたのか!

「あ、アリエスを……解放して。あの子、前のオーナーに虐められて……ロキと一緒に居させてあげたいの!」

「人にものを頼む時は何て言うのかな?」

「お願い、します……!星霊と一緒にいさせてあげることがするのは……あたしたち星霊魔導士だけなんだ……!!」

ルーシイさん……魔力切れで意識を保つのも辛いはずなのに……こんな時でも、星霊のことを想って……

「ふうん……タダで?」

「なんでもあげる……鍵以外なら、あたしの何でもあげる!!!」

「じゃあ、命ね……ジエミニ……ジエミニ?」

ジエミニからの猛攻が、止まった。

「きれいな声が、響くんだ……でき、ないよ……ルーシイは、心から愛しているんだ……僕達、星霊を……!!」

「ジエミニ……」

「くっ……消えろ!!……この役立たずが……!!」

「ルーシイ……」

「ひ、ヒビキ……?」

ヒビキさんが、後ろからゆっくりと近づいていく。途中、カエルムが変形して撃ったビーム攻撃の流れ弾で少し傷を負っている。

「まさか、闇に堕ちたかこの男!フハハハ!!」

「ゴーシュ君……開けてくれ」

「……任せますよ!」

闇に囚われそうになつていたヒビキさんだったが…目を見て、僕は結界の一部を開く。原作を知っているから開けたわけじゃない。僕の消耗が思ったよりも激しかったのと、ヒビキさんの目が、光を持っているように感じたから。

「じつとして…僕の魔法、古文書が、君に一度だけ…超魔法の、知識を与える!!」

「な、何?頭の中に…知らない、凶形が…!!」

「危ない所だった…僕はもう少して、闇に堕ちていた。だけど君と星霊との絆が、僕を光で包んだ…君なら、この魔法が…!」

「おのれ…カエルム!!」

「させない!!」

「貴様、どこまでも邪魔を!!」

カエルムがビームを乱射してきたけど、絶対に攻撃は通さない!魔力も残り少ないが…持つてくれ!!

「全天88星…光る!!」

「ゴーシユ君!!」

「弾性結界!!」

「ウラノ・メトリア!!」

「ギャアアアアア!!!」

弾性結界^{バウンズ}を踏み、横方向へと移動する。その直後、エンジェルにルーシイさんの魔法が襲い掛かった。な、なんて威力…エンジェルが空中で踊っているかのように、連続して様々な方向から攻撃が当たる。全てがヒットした後、エンジェルは力なく川に沈み、ルーシイさんは突然降ってきたエンジェルに驚いていた。

「ヒビキさん、今の…」

「ルーシイなら使えると思つたんだ…星々の超魔法、ウラノ・メトリア」

「な、何これ…魔力が…」

「負け、ない、ゾ…六魔^{オランオンセイイス}將軍は…負け、ない、ゾ」

「!?」

「防御結界…僕も魔力切れ!?」

く、大事な場面で……ルーシイさんもヒビキさんももう魔力が尽きた。讓渡結界ランブルを食べる暇もない……ナツさんもまだ筏で伸びてるし……こうなったら！

「ゴーシユ!？」

「仲間は……やらせない!!」

「一人一殺……朽ち果てろおー!!」

カエルムのレーザーが、目の前まで迫ってきた。……が、直前であらぬ方向へ曲がり、後ろにあった木に直撃した。

「お前まで……!」

「ウウツプ……!」

「ナ、ナツ!!」

丁度ナツさんが乗っていた筏を止めていた木に当たったらしく、筏が少しずつ流されていく。あ、やばい……結界も使えないし、このままじゃナツさんが流されてしまう!ルーシイさんはナツさんの手を握ろうとしている……こうなったら!

「手を伸ばして、ナツ!!」

「オオアアツ……!」

「ルーシイさん、受け取って!」

「へ?これって……きやあつ!？」

ルーシイさんが讓渡結界ランブルを1つ受け取る。そしてナツさんの手をルーシイさんが握った直後に筏が急流に差し掛かり、2人とも流されて行ってしまった……できれば複数渡したかったけど、仕方ない。渡せただけ良しとしよう。

「ヒビキさん、大丈夫ですか……?」

「ああ……すまない、魔力の消耗が大きくて動けそうにない……」

「とりあえず、これを飲み込んで下さい。僕が背負って移動します」

「ありがとうございます、ゴーシユ君……」

自分とヒビキさんの分の讓渡結界ランブルを取り出し、ヒビキさんの口の中と僕の口の中に入れる。その後、ヒビキさんを背負って一旦岸へと上がることにした。少し休んでから移動しよう……

第10話 破滅の行進 再起、クリステイナー!

エンジェルとの戦闘から数時間経ち、今は夕暮れ。僕はヒビキさんを運びながらウエンディたちを探していた。僕の結界の1つ、浮遊結界パルーンにヒビキさんに乗せて移動しているの、崖を登る時とかも問題ない。っていうか僕も乗るし。近くに高い岩山がいくつもあるの、ウエンディたちもそこにいる可能性が高い。どこかの岩陰に隠れていた方が安全だしね。

「おーい、ゴーシユ〜!!」

「ハッピーー!」

浮遊結界パルーンに乗って浮いていると、どこかからハッピーがやって来た。良かった、氷はもう溶けたんだ。

「オイラがウエンディとシャルルの所に連れて行くよ!」

「それじゃ頼むよ。この結界を押しで行って」

「あいさー!!」

ハッピー…というかエクシードがいてくれると助かる。浮遊結界パルーンは少しずつしか移動できないから、エクシードが押ししてくれば移動も楽だ。

「これ、すごい軽いね!!オイラ、1人しか持つことできないのに」

「浮かせているだけだけどね。シャルルにも押ししてもらったことあるけど、その時は5人くらいは乗れたよ」

「へえ、ゴーシユの魔法って便利だね!」

まあ試したのギルドメンバーでだし、一回しかないけどね。

「あ、見えてきたよ!」

「ホントだ。おーい、ウエンディ!シャルル!」

「あ、ゴーシユ!無事だったんだ、良かった〜!」

「遅かったわね」

「とりあえず、ヒビキさんを起こさないと…ヒビキさん、起きて下さい」

「う、うう…」

ウエンディたちと合流できて良かった。…もう、ニルヴァーナの光

の柱が黒から白へと変わっている。もうすぐ、ニルヴァーナが姿を現すだろう。

「ゴーシユ君…ウエンディちゃんたちも…」

「あんたたちが無事ってことは、あのエンジェルって女は倒したのね？」

「ああ。苦戦したけど何とかね…ルーシイさんとナツさんが流されて行ってしまったけど」

「ナツとルーシイが!？」

「これからどうするの?」

「ゴーシユ君、ニルヴァーナは…」

「さっき、光の色が白くなりました。多分、もうすぐ…」

次の瞬間、大きな地響きが起きた。これは、ついに来てしまったか…!

「な、何?！」

「地面が、揺れてるよ!!」

「皆、一先ず乗って!」

ウエンディたちが浮遊結界パルレンに乗り、ハッピーとシャルルに押しもたせて移動する。直後、地面から巨大なもの…ニルヴァーナの足が複数現れ、さっきまでいた場所が崩れ落ちた。さ、さすがは移動都市…すごい大きい。そこら辺にある山よりもでかいんじゃないか…?

「ついに、ニルヴァーナが…」

「ハッピー、シャルル! あっちの足まで行ってくれ!」

「どうして!？」

「多分あの川の付近から現れた足の所に、ナツさんたちがいるはず! 一度合流した方が「いや、待ってくれ」…ヒビキさん?」

「ゴーシユ君は僕と一緒に来てほしい。ウエンディちゃんたちはナツ君たちの所へ向かってくれ!」

「…分かりました。それじゃ、3人はこのまま行ってくれ!」

「でも…」

「ウエンディ…ナツさんたちを手伝って、ニルヴァーナを止めるんだ! きつと君の魔法も必要になる…大丈夫、ウエンディならできるよ」

！」

「…うん！」

「それじゃこのままオイラが押していくよ！」

もう一つ浮遊結界を作り、ヒビキさんと一緒に飛び移る。シャルルがウエンデイの膝の上に乗る、ハッピーに浮遊結界を押しもらって移動していった。

「それでヒビキさん、どこに行くんですか？」

「ニルヴァーナが起動してしまったということは、どこかに発射するつもりだろう。発射された時に照準をずらす準備をしておかないとね」

「ずらす準備？」

「ああ…クリステイーナの墜落地点へ向かってくれ！」

「なるほど…了解！」

原作通り、クリステイーナの爆撃で照準をずらす考えなんだろう。確かに、船体を安定させるなら僕の魔法はピツタリだ。ニルヴァーナが移動し始めている…やっぱり、方角は僕たちのギルド…ケットシエルター化け猫の宿だ。

「ヒビキさん、そういうえば念話は？」

「ちよつと待つて…ああ、いけそうだ！どうやらニルヴァーナが最終段階に入ったことで、念話の妨害が薄くなつてきている！」

「じゃあ繋がる人全員に繋げて下さい！クリステイーナの破損が激しかったら、僕の魔法でも支えきれないかもしれない。あと、ニルヴァーナの止め方も調べることはできますか？」

「分かった。任せてくれ…ニルヴァーナの止め方も、必ず見つけてみせる！」

そう言えば…クリステイーナはどうやって破壊されたんだろう？ エンジェルから情報が流れていたとはいえ…ブレインか。あいつなら時間差で破壊する魔法とかも使えそうだ。一夜さんに変身してたのが痛いな…クリステイーナは青い天馬の魔動爆撃艇だから、停泊していた場所もバレてしまったんだ。今はとにかく、クリステイーナに急がなきゃ…破損が激しくありませんように！

☆

クリステイナーナの墜落した場所へと到着すると、人影が見えた。

「レン、イヴー！」

「ヒビキ！」

「無事だったんだね！」

「2人だけですか？」

「ああ。だが、これはひどいな……」

レンさんがクリステイナーナを見てそう呟く。船艇に片翼…甲板もほぼぶつ壊されている。でも、まだ魔法で支えれば浮かせられそう
だ。

「あとはリオン君たちか……」

「俺達はここにいるぞ」

「リオンさん！シエリーさんも無事でよかった！」

「それで、念話で話していたことは本当ですか？」

「ああ、本当だ。僕達でこのクリステイナーナを、また空へと浮かせるんだ！」

ヒビキさんが段取りを説明している。少し遠くにあるニルヴァーナから、さきほどからすごい爆発音が聞こえる。これはきつと、ナツさんとコブラが戦っているんだ。急いで向かわないと……！

☆

「これ…私達のギルド、ケットシエルター化け猫の宿に向かっているわ」

「え……？」

「なんでウエンディたちのギルドに?!」

シャルルがそう呟く。でも、ホントだ…このまま進んでいくと、私達のギルド、ケットシエルター化け猫の宿がある…！なんで、私達のギルドに？ニルヴァーナに入る前に合流した 그레이さんとルーシイさんも驚いている。

「…それも含めて、あのブレインとかいう親玉をとつちめて聞き出さうぜ」

「うむ…化け猫の宿より近いギルドなどいくつもある。わざわざウエンディ殿達のギルドを狙うからには理由があるはずだ」

グレイさんとジュラさんがそう言うってくれる。そうだ、あのブレインって人を倒せば、ニルヴァーナも停止するかもしれない。だったら、あの人を問い詰めた方が早いよね。

「ウツプ…!!」

「おい、いたぞ!」

「ナツ!どうしちゃったの?」

「これ、乗り物だから…」

「うううく…皆く」

「ハッピー!」

「猫殿も無事だったか」「猫殿?」

ナツさんとハッピーが倒れてる!しかも、ナツさんはあのブレインって人に引きずられてる…どこかに連れて行こうとしてる?でも、なんでナツさんを…?

「ナツを助けて…連れて行かれちゃう…!」

「六魔も半数を失い…地に落ちた。これより新たな六魔をつくる為、この男を頂く」

「いつか来るとは思ってたが…本当に闇ギルドにスカウトされっとはなあ…」

「ナツは、あんたたちの思い通りにはならないんだからね!」

「ニルヴァーナがこやつのを闇に染める…私の手足となるのだ…」

「なるかつ!!」まだそんな力が!!」

「ナツさん!!」

ブレインに抵抗してナツさんがブレインの左腕に噛みついていて、けれど、地面に叩きつけられてしまった。

「…体調が、悪そうだな」

「あいつは乗り物に、極端に弱えんだ」

「乗り物酔い?」

「そうなの…ハッピーとかは大丈夫なんだけどね」

「情けないわね…」

「ごいつ、早く倒し、て……これ、止めてくれえ……!」

そうだ。この人を倒すことが出来れば、ニルヴァーナもきつと止まる! そうすれば、私たちのギルドも助かるんだ!!

「お前の為じゃねえけど、止めてやるよ!」「うん!」「はい!」って、お二人ともひどくないですか……?」

「止める……? ニルヴァーナを? できるものか。この都市はまもなく、第一の目的地……ケットシエルター化け猫の宿に到着する」

「やっぱり……」

「そんな……」

「ウエンデイとゴーシユとシャルルのギルドだ……なんで?」

「目的を言え。なぜウエンデイ殿のギルドを狙う」

「超反転魔法が……一瞬にして光のギルドを闇に染める……楽しみだ。地獄が見れるぞ」

そんな……ひどい。そんなことの為に、私たちのギルドが……! 絶対に、止めなきや……私達のギルドを、守るんだ!

「聞こえなかったか……? 目的を言え……!!」

「ひっ!?!」

じゅ、ジユラさんからすごい魔力を感じる……! すごく頼もしいけれど、ちよつと怖い……でも、あのブレインって人は怯むどころか高笑いをはじめた。それほど自分の力に自信があるってことなの?

「困った男だ……まともに会話もできんとはな……」

「消えろ……ウジ共が!!」

「ぬんっ!!」

ブレインが杖で魔力を高めて攻撃してくる。ジユラさんがそれ目掛けて飛ばした沢山の大きな大岩がブレインの至近距離でぶつかり合い、爆発した。す、すごい威力……近くにいただけで吹き飛ばされちゃいそう……!

「な、なんだ……この魔力は……」

「立て。ケットシエルター化け猫の宿を狙う理由を吐くまでは寝かさんぞ」

ほ、本当にジユラさんが味方で良かった……オランオンセイヌ六魔将軍も最初は怖かったけど、今はジユラさんの方がちよつと怖い……。

「ひええ…」

「な、情けない声出さないの！」

「しゃ、シャルルに怒られちゃったけど…こんな戦いを見せられたらそんな声も出ちゃうのは仕方がないと思う。それほどに、すごい戦いだから。」

「そういうえば、ナツさんとハッピーは…？」

「…あそこね。さっきので吹っ飛ばされたみたい」

「…今のうちに治療しに行こう」

「こんな戦いの最中に!?無茶よ!!」

「ジュラさんなら、ブレインも気が抜けない相手だろうし…きっと大丈夫だよ」

「俺も行く。戦闘の余波が来たら守ってやるよ」

「あ、ありがとうございます、 그레이さん！」

「 그레이さんと一緒に、ナツさんとハッピーの元へと向かう。思った通り、ブレインもジュラさん相手じゃあこつちに気を向ける余裕もないみたい。 그레이さんも守ってくれるみたいだし、これなら治療に専念できる！」

「ナツさん！ハッピー！今治しますからね！」

「ありがと、ウエンディ〜」

「ウップ…」

「ナツさんには、バランス感覚を養う魔法もかけてあげますね」

「 乗り物酔いだったら、トロイアをかければ大丈夫かな？」

「霸王岩砕!!」

「うおっ!!な、なんつー威力だ…リオンがさん付けで呼ぶわけだ…」

「ぶ。ブレインを…」

「倒しちゃった…!!」

「これが、聖十大魔道に選ばれた魔導士の力…！ブレインも気絶しちゃったみたい…化け猫ケットシエルターの宿を狙う理由は分からなかったけど…ブレインを倒せたんだから、これでニルヴァーナも…！」

☆

「よし、高度はこのまま…皆、頑張ってくれ！」

ようやく、船体が安定してきた。このまま行けば、もう少しでニルヴァーナに追いつく。ほぼ同じ速度で進んでるから、じれったく感じられるけれど…壊れた船で向かってるんだ、そこは仕方ないか。

「でも、本当なのかい？ニルヴァーナが化け猫ケットシエルターの宿に向かっているって」

「ええ…間違いないです。あと数十分つてところでしようか…もうすぐ見えてくると思いますよ」

空から見た限り、ニルヴァーナの燭台が1つ壊れているのが確認できる。つまり、コブラとの戦闘は行われたのが確定になった。王の間にも魔法陣が展開されていないことをみると、ブレインも倒された可能性がある。

「ニルヴァーナが発射される前に、爆撃で足を破壊できればいいのだが…」

「いや、ヒビキさん。攻撃はニルヴァーナ発射直前にしましょう」

「何!?!お前、自分の仲間がどうなってもいいのか!?!」

僕の発言に怒るレンさん。まあ、そりやそうか。確かに、今攻撃して確実に停止させて再起不能にできるならいい。

「今発射しても、もしかしたら損傷した箇所を修復してまたニルヴァーナが動き出すかもしれない…なら、ニルヴァーナ発射直前に足一点に集中攻撃して、確実に軌道をずらす方がいいと思うんです」

「確かに…魔導弾の数も限られている。ゴーシュの言う方が確実だろう」

「うん…発射できるのは、多分1回分しかない」

「そ、そうか…すまん、ゴーシュ。言い過ぎた」

「いえ、大丈夫です。それより、脱出用の浮遊結界バブル結界はもう準備しておきましたから」

船の後ろに、少し大きめの浮遊結界バブル結界を作っておいた。これなら、5人を乗せて脱出することも可能だと思う。

「あなた…本当にやるつもりですね」

「はい。魔力も回復できましたし、何より…ウエンディが心配ですか

ら」

「これぞ愛、ですわ〜」

「妬けるね〜ゴージュ君」

「い、いいからほら！速く真上まで移動しましょう！いつ発射されるか分からないんですから！」

そう、いつ発射されるか分からないんだ…いつでも軌道をずらすことが出来るよう、待機しておかなければ！

第11話 天馬から妖精たちへ

僕とシェリーさん、レンさんが魔法でクリステイナの船体を支え、リオンさんは壊れた片翼を造形魔法で補ってもらおう。イヴさんは魔導弾と雪魔法を融合して発射する役目だ。ヒビキさんには引き続きナツさんたちと念話ができないか、そしてニルヴァーナを止める手段を検索してもらっている。

「よし、この辺でいい。狙うは砲台側の前足のどつちかだ」

「イヴ、準備はできているか？」

「うん、大丈夫だよ」

「しかし、これは中々……」

「厳しいですわ……」

「あと少し、頑張りましょう！」

ここまで来れば、あとはイヴさんが魔導弾を発射。船体が持ちそうにない状態になったら、僕の浮遊結界パルンに全員乗り込んで脱出する。エクシードの力を借りずに5人も乗り込めばさすがに重さで高度が下がって来るだろうけど、ゆっくりだから問題ない。

「見えた……皆さん、あれが化け猫ケットシエルターの宿です」

ついにここまで来た……チャンスは一回のみ。頼むから、上手くいてくれよ……

さつき、王の間の部分で爆発のようなものが見えた。あれは、ブレインのトラップだ。原作通りなら、ジュラさんがナツさんたちを庇って行動不能になってしまう。でも、確か魔力を使い果たしたただけだったから大丈夫だと思う。その後、どこからか鐘の音が響いたと思ったら、その王の間の内部で更なる戦闘のようなものがあった。気づかれないようにかなりの高度から見下ろしている形なのでよくは見えないけど……恐らく、ブレインのもう1つの人格……マスター・ゼロが目を見ましたんだ。

ブレインには、知識を好む表の顔と破壊を好む裏の顔が存在する。いわゆる二重人格って奴だ。ブレインはその裏の顔が危険すぎる為、生体リンク魔法で6つの鍵をかけ封印していた。六魔将軍オラシオンセイブスは、6つの

柱。それぞれの強い祈りが、封印の鍵となっている。六魔が全て倒された時、ゼロは解放される。

彼は形ある物が全て塵になるまで破壊する。ナツさんたちが相對しているとしたら…想像を超えるくらいの攻撃を受けてしまっているかもしれない…

「おい、あれを見ろ！」

「あれが、ニルヴァーナ…」

「感じたことのない魔力だ…」

「イヴさん!!」

「任せて…必ず、成功させる!!」

砲台に魔力が収束し始める。いよいよ、発射するつもりだ…!

「…今だ！魔導弾、投下!!」

イヴさんの雪魔法と融合した魔導弾が、ニルヴァーナの足に直撃する。わずかに軌道をずらすことに成功、その直後にニルヴァーナが発射される。軌道がずれた砲撃は化け猫の宿のわずか上を掠るのみだった。よし、成功だ…!

「誰か、聞こえるかい！誰か…無事なら返事をしてくれ！」

『この声は、ヒビキか!』

『ヒビキさん!』

『私も一応無事だぞ…メエーン』

「エルザさんにウエンディちゃん！それに先輩も…無事で良かった」

どうやらエルザさんたちも無事みたいだ…そういえば一夜さんはどこにいたんだ？あれ、原作でどうなってたっけ…なんか棒に縛られていたのは覚えているけど…

『どうなっている？クリスティーナは、確か撃墜されたはず』

『樹海の入り口辺りで、あいつらにあっさり落とされたのよね?』

『まだ飛べたんですね』

「ああ、何とかね…僕たちは即席の連合軍だが、重要なのはチームワークだ。船体はゴーシユ君とレン、シェリーさんが、奴らにやられた方の翼はリオン君の造形魔法で補っている。さっきの魔導弾はイヴの雪魔法さ」

「でも、そろそろ皆限界です…船ももうすぐまた落ちる」

「でも、最後に聞いてくれ…ようやく古文書の中から見つけたんだ！
ニルヴァーナを、止める方法を!!」

『本当か!?!』

ヒビキさんが説明を始める。ニルヴァーナは足のようなものが6本ある。それが地面から魔力を吸収するパイプの役割をしている。その働きを制御する魔水晶ラクリマが、各足の付け根付近にあり、それらを同時に破壊しなければならぬ。1つずつでは、他のラクリマが破損部分を修復してしまう。

「僕がタイミングを計ってあげたいけど…それまで念話が持ちそうにない。だから、君たちの頭にタイミングをアップロードした。ニルヴァーナが次に装填完了する直前だよ」

『20分?』

「君たちならきつとできる…信じてるよ」

『無駄なことを…』

突然知らない声が頭の中に響いてくる。いや、これは知っている。あのブレインの声…いや、ブレインのもう1つの人格。マスター・ゼロの声だ。

『俺はゼロ。六魔將軍オランオンセイヌのマスター・ゼロだ…まずは誉めてやろう。まさかブレインと同じ古文書アーカイブの魔法を使えるものがいたとはな…』

ヒビキさんと同じ魔法をブレインも使用できる…古文書アーカイブでニルヴァーナの存在を知ったんだ。魔法開発局にいたって話があったから、最近の魔法を使ってもおかしくはない。

『聞け、光の魔導士よ!手始めに、仲間を三人破壊した…滅竜魔導士ドラゴンスレイヤー、氷の造形魔導士、星霊魔導士…ククツ、それと猫もか』

「ナツ君たちが!?!」

『そんなの嘘よ!』

『てめえら、魔水晶ラクリマを同時に破壊するとか言ったな…俺は今、その6つの魔水晶ラクリマの、どれか1つの前にいる!フハハハハハ!俺がいる限り!6つ同時に壊すことは、不可能だ!!』

「ぐっ…!ゼロとの念話が切れた」

ナツさんたちがやられたか…いや、まだだ。きつと、立ち上がって
くれる！

『ちよつと待って、魔水晶ラクリマを壊せる魔導士が6人もいないわ!!』

『私、は、破壊の魔法は…使えません!ごめんなさい!!』

『こつちは2人だ…他に動けるものはいないか!』

『マイハニー…私がいるではないか。縛られているが…』

『僕も、攻撃の魔法は使えません…』

『あと3人…ゴーシユは無理なのか?』

『…?あれ、僕の声聞こえてますか?』

『…ゴーシユ君の声だけ、皆に届いていない?なんでだ…すまない、
ゴーシユ君。僕の魔力が後わずかだからかもしれない。僕が代弁す
るよ』

『…すみません、お願いします』

なんでか僕の声だけ聞こえていないみたいだ。いや、今はそんなこ
とを気にしている場合じゃない…このままでは6人揃う前に念話が
切れてしまう!もし僕とウエンデイも加わったとしても、まだ1人足
りない…

『グレイ…立ち上がれ。お前は誇り高き…ウルの弟子だ!こんな奴ら
に負けるんじゃない!』

『私、ルーシイなんて大嫌いですわ。ちよつと、可愛いからって、調子
に乗っちゃって…馬鹿でドジで弱っちいくせに、死んだら、嫌いにな
れませんわ…後味悪いから、返事しなさいな…!!』

『ナツさん…』

『オスネコ…』

『…ナツ!』

リオンさんが、シエリーさんが…ウエンデイとシャルル、エルザさ
んが…皆が、立ち上がれと言っている。そうだ…こんなところで倒れ
るナツさんたちじゃない…!!

『ぐっ…!ハア…ハア…』

『これ…!』

『聞こえるかい?僕たちの声が…』

『き、こえ、てる…!』

『6個の、魔水晶ラクリマを…同時に、壊す…!』

『運が良い奴は、ついでにゼロも殴れる…でしょ』

『あと18分…急がなきゃ。シャルルとウエンディとゴーシユのギルドを守るんだ!』

『も、もうすぐ念話が切れる…頭の中に、僕が送った地図がある。各魔水晶ラクリマに番号を付けた。全員がバラけるように、決めるんだ…』

『1!!』

『2!!』

『3に行く!ゼロがいまませんように…!』

『私は4に行こう…ここから一番近いとパルファムが教えている』

『教えているのは地図だ。『そんな、マジで突っ込まなくても…』私は5に行く』

『エルザ、元気になったのか!』

『ああ…おかげさまでな』

『俺は…』『お前は6だ』

『他にも誰かいるのか…?今の誰だ?』

『どうやら、原作通りだ…つまり、ナツさんが行く1番魔水晶ラクリマにゼロがいる!』

『ぐっ…!』

『ヒビキさん!大丈夫ですか?』

『ああ、だが…すまない、念話が切れた…』

『よし、それじゃ急いで向かわなければ…!残り16分、時間がない!』

『皆さんは急いで浮遊結界バルーレンに!!』

『ああ。ゴーシユ君、頑張ってくれ!』

『…はい!!』

降下し始めているクリステイーナから飛び降りる。ニルヴァーナが丁度真下にくる位値だったので、ここから方向転換をしていけばすぐに…!あれは…ウエンディとシャルルに、ジェラール?

『弾性結界バウンダ!』

クッションのように使いながら勢いを殺し、落ちる場所を調節していく。ウエンディたちが1と6の間にいたので、少し話をしてもすぐに向かえば大丈夫だろう。

「ウエンディ、シャルル!!」

「え?…ふ、ゴーシユ!?!」

「あんだ、どっから来るのよ!?!」

何とか弾性結界で着地に成功。最初はあまりいらぬ能力かなと思っていたが、やっぱり作っておいてよかった。浮遊結界ではこんな速く降りられないし、方向転換もすごく遅い。空中戦ではこれは必須だな。

「えつと…空から?」

「なんで疑問形なのよ…あんだ、念話で声が聞こえなかったから何かあったんじゃないかって心配してたのよ!?!」

「いや、ヒビキさんたちと一緒にいたんだけど、僕の声だけなんでか届いていなくて…って、今はそんなことはいいよ。クリスティーナの皆は浮遊結界で脱出してるはずだから、安心して」

「そうなんだ。良かった〜」

やっぱり、ウエンディは気になっていたようだ。あの念話では、クリスティーナに乗っていた人がどうなったか分からないだろうからね。やっぱり僕の声は聞こえていなかったらしいし。

「君は…?」

「ジェラルル…」

「待つてゴーシユ! ジェラルルは記憶が混乱してて…私たちのことも、エルザさんのことも…分からないんだって」

「…そっか。ジェラルル、僕はゴーシユ。ウエンディと同じように、7年前にあなたに助けられたんだ」

「ゴーシユ…君も、俺の知り合いだったのか」

「無理に思い出さなくていいよ。それより今は、ニルヴァーナを! マスター・ゼロは何番にいるか分かる? 僕はゼロと戦うことになる人の援護に行く!」

ヒビキさんがアップロードしてくれたタイムリミットは…残り1

4分。急がないと、間に合わなくなる。それに…見れば見るほどあのジェラールと同一人物に見えるけど…この人は、僕らを助けてくれたジェラールじゃない…。

「エルザさんが言うには、ナツさんの所だつて。…ナツさんは鼻が良いから、分かつてて選んだだろうって」

「つていうことは1番魔水晶ラクリマか…よし、それじゃ「待ってくれ」…ジェラール？」

「ウエンデイ、ゼロと戦うことになるナツの体力を回復できるか？」

「えつと…それは」

「何言つてんのよ!!今日だけで何回治癒魔法を使ったと思つてるのよ！これ以上は無理！元々この子は…！」

「そうか…では、ナツの回復は俺がやろう」

「え？」

「思い出したんだ…ナツという男の底知れない力、希望の力を。君達は俺の代わりに、6番魔水晶ラクリマを破壊してくれ」

ジェラールはこれからナツさんの所に行つて残つた全魔力を炎に変えて回復させるつもりだろう…ん？君達？

「ちよ、ちよつと待つてよ、僕も？」

「ああ」

「いや、僕もナツさんの所に行くよ！攻撃魔法は使えないけど、防御だけなら少しは役に立てるはず！」

「ゴーシュ…君の言う通りだと思う。だが、恐らくゼロの攻撃は…君の魔力では太刀打ちできない」

「そんなのやってみなきゃ…！」

「君の魔法で、六魔の攻撃は防げたか？防げたとしても…彼らの全力の攻撃を、完全に防げるほどでなければ…」

「!!そ、それは…」

六魔の中で僕が戦つたのは、エンジェルのみ。エンジェルの攻撃力は、六魔の中ではお世辞にも強い方とは言えないだろう。だがそのエンジェルの攻撃でさえ、僕は重たいと感じた。あの時防ぎきることができたのは、僕の魔力がなくなる前にルーシイさんが倒してくれたか

ら。つまり、あのまま攻撃をくらい続けていたら…

「…君は、ウエンディを助けてやってくれ。君たちは、昔からの付き合いなんだろう？君がいれば、ウエンディも不安が少なくなるはずだ」
「ゴーシュ…」

「…分かった。本当に、すごく、悔しいけど…：ジェラルルの言う通りだ。僕は、ウエンディと一緒に6番魔水晶^{ラクリマ}へと向かうよ」

「よし…それでは頼む、2人とも」

ジェラルルはそのまま1番魔水晶^{ラクリマ}へと向かっていく…その背中を見送るだけしかできない自分が、嫌になる。でも、このまま追いかけることの方が…邪魔になることも、分かっていた。

「ウエンディ、シャルル…行こう。6番魔水晶^{ラクリマ}へ」

「ゴーシュ、いいの？」

「…うん。大丈夫。ここで無理やり行って行って、足手まといになったら…それこそ、僕は後悔する…なんて、ただの臆病者かな？」

「そんなこと…ゴーシュは、臆病者なんかじゃない。仲間を守ることが出来る、優しい魔導士だよ」

「…ありがとう、ウエンディ。よし、急ごう！」

「うん！」

「ええ」

当初の目的とは変わってしまったけれど…これも重要なことだ。ナツさんとジェラルルを信じて…僕達は僕達にしかできないことをするんだ。

第12話 想いの力

「魔水晶ラクリマの破壊を、私が…!？」

ウエンデイとシャルルと一緒に6番魔水晶ラクリマへの通路を進みながら、攻撃はウエンデイがやることを伝えるとすごく驚かれた。

「そう、滅竜魔法っていうのは、本来は竜迎撃用の魔法…なのにウエンデイだけ攻撃用の魔法がないなんておかしいと思わない？今更かもしれないけどさ」

「確かにそうね…ナツの方が滅竜魔法ってイメージにピッタリだと思うわ」

「ひ、ひどいよシャルル…」

「た、ただの感想よ。そんなことで泣かない！」

シャルルはウエンデイを持って飛んで進んでいる。僕はもちろん走って。今はウエンデイの魔力を温存しておかないといけないうし。

「見えてきた…」

「これが…」

「6番魔水晶ラクリマね」

通路を抜けると少し開けた場所に出た。床が半球状にくり抜いたような形状をしていて、その中心には灰色の大きなラクリマがあった。

「私…本当にできるかな？」

「大丈夫。ジエラールだって、そう思っただけで託したはずだ。それに、僕もただ見てるわけじゃない」

「具体的にはあんた何すんのよ？」

「残り少しだけど…譲渡結果を全部砕いて魔力をこの空間の空気に満たす。後は…ウエンデイが攻撃した瞬間が僕の頑張りどころかな」

「…？譲渡結果は分かるけど、あんた他に結界魔法あったの？私知らないけど」

「私も。ディフェンド、バウンド、ホーリー、ランブル、バルーン、サーチ…6種類じゃないの？」

「まだもう1つあるんだ…まあ、任せて。とりあえず、僕はもう少し

譲渡結界ランブルを作っておくよ。ウエンデイも、魔力を高めておいて」

残り後3分。今の魔力を考えて…5個は作れるか。合わせて10個しかないけど…あるだけマシか。他の皆も、今頃魔力を高めていることだろう…ナツさん、大丈夫かな。あと心配なのはルーシイさんと一夜さんかな。ルーシイさんには気休めだけど譲渡結界ランブルを1つだけ渡したから大丈夫であってほしい。一夜さんもこつちに着陸する時にできれば助けてあげたかったんだけど…外には見当たらなかった。

そして…残り、1分。

「できた…ウエンデイ、準備は？」

「大丈夫！…グランデイーネ、力を貸して…!!」

「そろそろ時間よー!」

「よし…いくよ!!」

今持っている全ての譲渡結界ランブルを空中に投げ、それらを防御結界・柱デイフエント トーテムを小さく細長くして貫く。全てが破裂し、空間に魔力が漂う。その空間の空気をウエンデイが食べる。数十秒して、ウエンデイが全てを食べ終えた。

「すごい…私の中に力が溢れてくる!!」

「後10秒!!」

「ウエンデイ!!」

「うん…天竜の、咆哮おーっ!!」

「反射結界!!」

ウエンデイが口から竜巻のようなブレスを出し、ラクリマに直撃した瞬間に赤紫色の球状の結界が展開される。ウエンデイの咆哮が結界内に入っていくが、ラクリマ側からは出られずにいる。つまり…結界に当たった竜巻が小さくなりながらも跳ね返り別方向からもラクリマに直撃していく。様々な方向からブレスが直撃し、ラクリマは粉々に粉碎された。

反射結界リフレクションは、ジエラール…ミストガンの魔法を見た時のことを思い出して作った結界。これは片面が魔法を反射し、もう片面は何でも通り抜ける。本当はエンジェル戦でも使いたかったんだけど、この結界は防御結界デイフエントより魔力の消耗が大きいし、反射する方向も定めら

れないからあの時は使えなかった。使ったらエンジェルだけでなく、戦闘中の星霊たちや少し離れていたヒビキさんにも命中していただろうから。

「よし!!」

「他の皆は…!?!」

ラクリマが破壊され、屋根や壁も崩れ始める。そもそも、ラクリマが修復されないということは…!

「止まった…! ウエンデイ、ゴーシユ! 止まったわよ!!」

「うん…! ニルヴァーナが、止まった!!」

「僕達、やったんだ…!」

結界魔法と天空魔法。どちらも、攻撃には向かない魔法だったけど…僕達だけで、やり遂げたんだ!

「つてまずい! 早く脱出するよ、2人とも!!」

「え!?!」

「ウエンデイ、早く! 脱出しないと、ニルヴァーナと一緒に心中よ!」
「う、うん!」

急いで来た道に戻る。ニルヴァーナを支える魔水晶ラクリマを破壊するごとに成功したということは、ニルヴァーナが崩れ去るということだ。…正直言つて崩れることを忘れていたよ。

「きやあつ!」

「ウエンデイ!」

「危ない!!」

「岩鉄壁!」

ウエンデイが通路で転び、少しだけ距離が離れる。そうだ、ウエンデイのドジさを忘れていた…ウエンデイの頭上に岩が落下してきて、防衛結界ディフェンドで防ごうとする前に岩の壁がウエンデイを守った。つていうか、僕も一緒に抱えられてるんですけど?

「ジユラさん!」

「あんた、無事だったの?」

「魔力の回復に時間がかかってしまった。とにかく、急いで脱出せねば!」

「僕は降ろしてもらいたいんですが…」

「気にするな。これぐらい、どうということはない」

ジュラさんがそのまま僕達を抱えたまま脱出してくれた。それがいいんだけど、その…近かった。いや、そこは気にしないでおこう。脱出すると、すでにエルザさんやグレイさん、マツチヨ状態の一夜さんとルーシイさん、ハッピーがいた。後は…ナツさんとジェラールだ。

「皆無事だったか!」

「ついでにオスネコも…」

「ナツさんは?ジェラールは!」

「見当たらん…まだ中に?」

「そんな…」

「ナツ…!」

「あのクソ炎、何してやがんだ…!」

…あれ、ナツさんたちはどうやって脱出してたっけ。確か、この場面でいたのは…あ。

「ハッピー、そこどいた方が…」

「へ?フギヤ!」

「愛は仲間を救う!デスヨ」

ホットアイ、いやリチャードがナツさんとジェラールを抱えて地中から現れた。リチャードが地面を柔らかくしてここまで進んできたんだ。出てきたのがハッピーの真下だったけど。地面が盛り上がり始めてから言ったから遅かった…

「つたく、ヒヤヒヤさせやがる…」

「ナツさん!!」

ウエンデイがナツさんに抱きつく。これは、名シーンって奴だな。アニメではオープニングでも使われてたシーンだから、すごく印象に残ってる。

「本当に…約束、守ってくれた…!ありがとう、ギルドを助けてくれて…!」

「皆の力があつたから、だろ?」

「皆の？」

「ウエンデイの力もな」「私の…？」

「今度は、元氣よくハイタッチだ！」

「…はいっ！」

本当に、ギルドを守れて良かった。ナツさんとウエンデイがハイタッチする姿を見て、そう思った。

☆

「全員無事で何よりだね」

「ヒビキさんたちも無事に脱出してますし、周辺にいるのではないかと」

「皆、本当によくやった！」

「これにて作戦終了ですな…」「きもっ…」

六魔も全て倒せし、ニルヴァーナも破壊した。これで今回の連合軍の作戦は成功だ。というか誰一人として犠牲が出なかったのだから、これ以上の成功もないと思う。

「で…あれは誰なんだ？青い天馬ブルーベガサスのホストか？」

「さあ…あんな人いたっけ？」

「…ジェラールだ」「何!?!」「あの人か!?!」

「だが、私たちの知っているジェラールではない」

「記憶を失っているらしいの…」

「いや、そう言われてもよ…」「うん…」

グレイさんとルーシイさんはジェラールを見たことがないんだ。正直言つて、原作の細かいところは覚えていない。…何せ、こつちに來てからの7年間は修行と依頼で手一杯だったからなあ…。

「大丈夫だよ！ジェラールは、本当はいい人だから！」

「僕は以前、ジェラールに助けられたことがあります。それに今回も、ナツさんを助けてくれましたし…記憶喪失というのも本当みたいですから、今だけは信じてあげて下さい」

「そう、なのか…完全に信じたわけじゃないが…」

「一緒にニルヴァーナを壊してくれた、仲間なんだよね…」

まだ不信感はぬぐい切れないみたいだけれど、どうにか今回のことだけは信じてくれたようだ。

「ゴージュ殿、まだリオンたちを救ってくれた礼を言っていないかったな」

「ビビキ達を救ってくれたこと…私からも礼を言わせてもらおう」

「いえ、僕がいなくても脱出はできたと思いますし…仲間なんだから、当然です」

「でも、クリステイーナから飛び降りるなんて…無茶にも程があるわよ」

「飛び降りた!?」

「え…だって僕も何か手伝いたかったし」

「だからって飛び降りるのはやりすぎだよ!もつと自分を大事にしな」と駄目!」

「ご、ごめんなさい」

まさかシャルルだけでなく、ウエンディからもお叱りを受けるとは…そこまで無茶だったかな?2人とも弾性結界バウンドがあることを知っているんだから、そこまで心配することないと思うんだけど…

「ゴージュ、まだ納得いかないって顔してるね…?」

「へ…そ、そんな顔してました?」

「お前、わかりやすいな…」「思いつきりしてたわよ」

「はあ…心配するこっちの身にもなつてよ」

「え?」

「いてメエーン!!!」

ウエンディが何かを呟いたと思ったら、一夜さんが声を上げた。

あ、しまった…このイベントがまだあった…!

「どうした、オッサン!」

「トイレの香り《パルファム》をと思ったたら、何かにぶつかつた!!」

「何か、地面に文字が…」

「これは…」

『術式!?』『メエーン!!トイレが…!!』

術式とは、ローグ文字という特殊な文字が使用されていて、それが

刻まれた範囲に入った者にあらゆるルールを課す設置型の魔法のこと。設置に時間がかかるけど、罫としては最適な魔法だ。これも結界魔法の1つなんだけど…僕は、文字が覚えきれなかったから扱えてない。いつかは習得したいと思う。

ともかく、その術式が僕たちの周りに展開されている。一夜さんが出られなかったことから、多分ルールは『術式に入った者が外に出ることを禁ずる』とかか。外に出るには術式を書き換えたりとか…あとは圧倒的な力で破壊するとかかな。

「いつの間にな!?」「どうなってるんのか!?!」

「これが術式…初めて見た」

「ゴーシユ、そんなこと言ってる場合じゃないよ!」

「フリードのあれと同じか…同等、いやそれ以上の魔力かもしれないねえ」

「閉じ込められちゃった…!?!」「誰だコラーツ!!」

あ、ナツさんようやく復活。さすが、危機にさらされた時には頼りになるな…でも、今回は敵じゃない。そろそろと沢山の人が僕達を取り囲む。

「な、なんなの?」「漏れるう…!」

一夜さん…そんなに限界だったのか。

「手荒なことをするつもりはありません。しばらくの間、そこを動かないでいただきたいのです」

「誰なの!?!」

「私は新生評議員、第4強行検束部隊隊長…ラハールと申します」

「なっ!?!」「新生評議員!?!」「もう発足してたの!?!」

評議員っていうのは、秩序を保つためにルールを取り決めている機関のこと。検束ってことはおそらく、違反を犯した魔導士を検挙・拘束する権限を持つ魔導士部隊の隊長ってことか。

ちなみに新生っていうのは、前にジェラールに利用されエーテリオンを使われてから大きく人員の入れ替えが行われたかららしい。

「我々は、法と正義を守る為に生まれ変わった。いかなる悪も、決して許さない」

「どういうこと?」「オイラたち何も悪いことしてないよ?」

「お、お、おお!!」「そこはハッキリ否定しようよ…」

いや、ナツさんたちの考え方がおかしい。なんで自分たちが悪いことをしたみたいになってるんだ。…評議員にお世話になったことがあるってことか…?

「存じております。我々の目的は、オラシオンセイイス六魔將軍の捕縛。そこにいるコードネーム・ホットアイを、こちらに渡してください!」

「待ってください!!」

「いいのデスヨ、ジユラ」

「リチャード殿…」

ジユラさんがリチャードを庇おうとするが、それをリチャードが止める。

「たとえ善意に目覚めても、過去の悪行は消えませんが。私は一からやり直したい…。その方が弟を見つけた時に、堂々と会える…デスヨ!」

リチャードがお金に固執していた理由。それは生き別れになってしまったたった一人の弟を探す為。ニルヴァーナの影響を受けたのは心の中ではずっと悪いことをしていると思っていたからで、こうしてニルヴァーナが破壊された後も善人でいられるのは…心の底から、やり直したいと思っているからだと思う。

「ならば、私が代わりに弟殿を探そう」

「本当デスカ!」

「弟殿の名前を教えてください」

「名前はウォーリー。ウォーリー!!ブキャナン」

「ん?」

「ウォーリー…!?」「四角く!?」

「あいつは…ウォーリーは、本当に素直で優しい弟デシタ」

オラシオンセイイス六魔將軍は元々、ブレイン以外は楽園の塔にいたことがある。ジエラルドとつながっていたブレインは、それを利用して彼らを引き入れたということだ。魔力が高く、自分と生体リンクを繋げることができ、る者を探していたんだろう。

先ほど話にあったウォーリーというのは、エルザさんが楽園の塔に

いた頃の仲間だ。以前に確か争ったことがあつたはず。でもジェラルドに騙されていたことが分かつてからは、和解できていたはずだ。

リチャードは楽園の塔に連れてこられる前の話をしてくれた。元は枯れ果てた土地で野菜を育てようと頑張っていた2人だった。枯れ果てた土地でも諦めずに育て続け、ジャガイモが1つだけ実った。最初はウォーリーがかじりつこうとしていたが、お腹の調子が悪いからと言つて、半分ずつにしてくれただと言ふ。ウォーリーはお腹の音をずっと鳴らしていたので、説得力はなかったらしいが。

「…あの時のジャガイモの味は、未だに忘れられないデス」

「その男なら知っている」「な、なんと!」

「私の友だ。今は元気に、大陸中を旅している」

「オ、オオ、オオツ!!これが、光を信じる者だけに与えられた、奇跡というもののデスカ!!ありが、とう…ありがとう…!!」

ちよつと、うるつと来てしまった…。リチャードがエルザさんの顔を見て、涙を流しながら崩れ落ちる。きれいな月明りに照らされていて…これが、奇跡なんだと思つた。

リチャードが落ち着いた後、彼は罪人護送用の馬車に連れて行かれた。なんか可哀そうだけれど、これが、彼がウォーリーと堂々と会う為に選んだことなのだ。

「も、もういいだろ!!術式を解いてくれ!漏らすぞ!」「やめてー!!」

「いえ…我々の本当の目的は六魔將軍オラシオンセイイスごときではありません」

『!?!』

おい…僕達がこんなに頑張つてやつつけた六魔將軍をオラシオンセイイスごときつて…じゃあお前ら、残りのバラム同盟どつちも捕えろよ?六魔ごときつていうぐらいの強さを持つてるんだつたらやれよ?と、他の皆は本当の目的とやらについて考えている瞬間に僕はそう思いました。

「評議員への潜入・破壊…エーテリオンの投下。もつととんでもない大悪党がそこにいるでしょう。…貴様だ、ジェラルド。来い!抵抗する場合は、抹殺の許可も出ている」

「そんな!」「ちよつと待てよ!!」

「その男は危険だ。…二度とこの世界に放ってはいけない。絶対に」
それを聞くとジエラールは…ただ無言で、ラハールの元へと歩いて
行った。

第13話 たった2人の為のギルド

「ジエラールⅡフェルナンデス。反逆罪で、貴様を逮捕する」

ジエラールの手に手錠がかけられる。ジエラールは抵抗することもない。多分、ジエラールは記憶がないとしても自分が罪を犯したという事は理解しているんだと思う。だから、大人しく捕まろうという事だろう。

「待つてください！ジエラールは、記憶を失っているんです！何も覚えてないんですよ!」

「刑法第13条により、それは認められません…もう術式を解いていぞ」

いや、記憶喪失が認められないって言われても…何がなんでも、ジエラールを捕らえるつもりか。

「でもー」

「いいんだ…抵抗する気はない。君達のことは、最後まで思い出せなかった…本当にすまない。ウエンデイ、ゴーシユ」

「…この2人は昔、あんたに助けられたんだって」

「そうか…俺は君たちにどれだけ迷惑をかけたのか知らないが、誰かを助けたことがあったのは嬉しいことだ…エルザ。色々、ありがとう」

「…」

エルザさんが震えている。ジエラールはそのままさつきリチャードが入っていった牢馬車へと連れられて行く。…このままじゃ、ジエラールは行ってしまう。記憶がないのに、悪いことをしたのは操られていただけなのに…!

「…他に言うことはないか？」

「ああ」

「…死刑か無期懲役は、ほぼ確定だ。二度と誰かと会うことは出来んぞ」

「そんな…!」「いや…」

「行かせるかあー!!!」

「ナツ!!」「ナツさん…!」「相手は評議員よ!？」

「貴様…!」

ナツさんがジェラールを連れ戻そうと動き出していた。本当にこの人は…どこまでも真つすぐで、本当にカッコいいよ、ナツさん。連れ戻そうとしたナツさんを、検東部隊の評議員が取り押さえようとしている。

「どけ、そいつは仲間だ!連れて帰るんだーっ!!」

「ナツさん…」「よせ…!」

「取り押さえなさい!」

さらに人が増えた…こうなったら、仕方ない。

「行け、ナツ!!」「援護します!」

「グレイ!」「ゴーシユ!？」

「こうなったら、ナツは止まんねえからな!気に入らねえんだよ…ニルヴァーナを防いだ奴に、一言の労いの言葉もねえのかよ!!」

「そうです!!いくら罪人だからって、功績を無視するのはおかしい!!」

「それには一理ある…その者を逮捕するのは不当だ!!」

「悔しいけど…その人がいなくなったら、エルザさんが悲しむ!」

「もう、どうなっても知らないわよっ!!」「あいさー!!」

「お願い、ジェラールを連れて行かないで!!」

やっぱり、皆思っていたんだ。こんなの、間違っているって…いくら無期懲役を免れないって言っても、ニルヴァーナを止めた功績は認められるべきだ。なのにこの人達は、それを無かったことみたいに…納得、できない!

「来い、ジェラール!お前は、エルザから離れちゃいけないえ!ずっとそばにいるんだ、エルザの為に!だから来い!!俺達がついてる…仲間だろっ!!!」

「全員捕えろ!!公務執行妨害、及び逃亡補佐だ!!」

くっ…数が多すぎる。こっちはニルヴァーナの破壊と六魔との戦いでボロボロだっというのに…!!このままじゃ…全員捕まるだけだ。

「もういい!!そこまでだ!」

『!』

エルザさんの声で、全員が動きを止める。

「騒がせてすまない。責任は…全て私がとる。ジェラルルを…連れて行け」

「エルザ!!」

「座つてろ!!」「はいっ!!」

評議員の人達は、ジェラルルを連れて馬車に乗せようとしている。その時、ジェラルルがこちらを…エルザさんの方を見た。

「そうだ。…お前の髪の色だった」

「!!」

「さよなら…エルザ」

それを最後に…評議員とジェラルルは、姿を消した。

☆

「エルザ…どこ行つたんだろう」

「しばらく、一人にしてあげよう…?」「あい…」

皆、納得はしていない。でも、一番ジェラルルと親しかつたであろうエルザさんがあ言った以上、何かをする気にはなれなかつた。

「ウエンディ?」

「ちよつと…風に当たつてきます」

ウエンディはそう言つて、その場から離れていく。姿が見えなくなつてから、僕とシャルルも立ち上がった。

「僕らも…ウエンディの様子を見てきます」

「ええ…」

ウエンディはあれから、ずっと涙を流していた。何も言わずに、ただずつと…それだけで、胸が痛くなつた。

「…どうするつもり?」

「何も、しないかもね」

「何もつて…」

「ほら…あれ」

空は、きれいな緋色に染まる。朝焼けが、空を一色に包んでいる。まるで、エルザさんの髪の色のように。そんな中、ウエンディは岩陰

に隠れて何かを見ていた。その先には…涙でくしゃくしゃになった、エルザさんがいた。僕とシャルルはそれを見て、皆の所へと引き返すことにした…。

☆

「こんな服初めて着たぜ」「俺もだ」

「2人とも…ちゃんと着てから言ってくださいよ。この服は、ギルドの皆が作ったものなんです。集落全体がギルドで、織物が特に盛んなんですよ」

「へえ、そうなんだ」

「一夜さんたちは着ないんですか？」

「我々はこの格好が正装なのでね。気にしないでくれたまえ」

「…さすが先輩！」「メエーン…」

おお、なんか久しぶりに見た気がするぞこのやり取り。ともかく、今は連合軍皆で化け猫の宿ケットシェルターの集落に来ている。あれからビビキさんたちも合流し、一度落ち着ける場所に行こうということになったんだ。

「ニルビット族に伝わる織り方ということか」

「多分、そういうことなんだと思います」

「あれ？ゴーシユは知らないの？」

「僕とウエンデイ、シャルルは後から入ったんだ。それ以外のメンバーは前からずっと一緒なんだって」

「それより早く行こうぜ！宴だ宴！！」「あい！」

ナツさんたちが先に出て行ったので、全員がついて行く。きっと、マスターも待っていてくれることだろう。

「…ゴーシユ殿」

「なんですか、ジュラさん？」

「先ほどから、何かを気にしているようだが…」

「そんなこと、ないですよ？それよりほら、早く行きましょう」

何かを気にしている、か。ジュラさんの言う通りだ…この後起きることを考えると、どうしようもないって分かっているのに、どうにか

したいと考える自分がいる。駄目だ。以前から分かっていたことじゃないか…どうにも、ならないんだ。

☆

フェアリーテイル「妖精の尻尾、ブルーベガサス青い天馬、ラミアスケイル蛇姫の鱗…そしてウエンデイにシャルル、
ゴーシユ。よくぞ六魔將軍《オラシオンセイス》を倒し、ニルヴァーナを止めてくれた。地方ギルド連盟を代表して、このローバウルが礼を言う。ありがとう…なぶら、ありがとう」

「どういたしまして、マスター・ローバウル！オラシオンセイス六魔將軍との、激闘に次ぐ激闘…楽な戦いでは、ありません、でしたが！仲間との絆が我々を…勝利に導いたので…す!!」

「…さすが先生!!」「メエーン…!」

いや、二回はいいや。つていうか、一夜さんはほとんど拘束されていただけだったのでは?まあ、ニルヴァーナの破壊には貢献してくれていたからいいか。

「終わりましたのね〜」

「お前たちも、よくやったな」

「…ジユラさん」

「この流れは宴だろ!!」「あいさー!!」

その一言と共に、一夜さんの掛け声でトライメンズが踊り出す。それにつられて、ナツさんたちも踊り出すけど…ケットシエルター化け猫の宿の皆は何も反応しなかった。それによって、主に一夜さんが大きなショックを受けている。

「皆さん…ニルビット族のことを隠していて、本当に申し訳ない」

「そんなことで空気壊すの〜?」

「ぜんっぜん気にしてねえのに…なあ?」「あい!」

「マスター、私も気にしてませんよ?」

「マスター…」

僕は知っている。知ってしまっている。この後、マスターが何を話すのか。このギルドの正体も。

「うむ…皆さん。これからする話をよく聞いて下され」

マスターは一から話してくれた。自分がニルビット族そのものだということ。400年前にニルヴァーナを作ったのがマスターだということ。どうしてニルビット族が減ってしまったのか。

ニルヴァーナは無制限に闇を光に変えることはできなかった。バランスをとるだけだった。一時代を築いたニルビット族に変えた分の闇がまとわりつき、殺し合った。生き残ったのは…マスターだけ。今はマスターも思念体に近い体なので、すでにニルビット族は全滅しているとも言える。

「儂の代わりにニルヴァーナを破壊してくれる者が現れるまで400年、見守ってきた…今、ようやく役目が終わった…！」

「そ、そんな話…！何これ、皆!？」

「あなたたち!？」

「マグナ!?ペペル!？」

「どうなってるんだ!?人が、消えていく…!？」

「イヤよ、皆…！消えちやイヤアアア!!！」

「皆…っ」

ギルドメンバーが、次々と消えていく。7年一緒に過ごしてきた皆が、次々と消えていく…分かっていても、涙が出てきた。ウエンデイも涙を流し、シャルルも涙目になっている。

「騙っていて…すまなかつたな。ギルドのメンバーは皆、儂が作り出した幻じゃ」

「なんだとっ!？」「人格を持つ幻だと!」「何という魔力なのだ…」

「儂は、ニルヴァーナを見守る為に、この廃村に一人で住んでいた」

「マスター…そこからは僕が」

「ゴーシュ…!？」

僕は話した。7年前にジェラルルと一緒にマスターと出会い、ウエンデイと共に預けられたこと。その後、マスターが幻を生み出したことも。ウエンデイとシャルルを、ずっと騙していたことも…

「そんな…!？」

「あなた、そんな大事なこと…!!」

「ウエンデイ、シャルル。ゴーシュは何も悪くない。彼を口止めして

いたのは儂じや。それに…彼を見れば、お前たち同様…ギルドのメンバーを家族同様に思っていたのが分かるじやろう。このギルドが、お前たちの家になることが出来ていたのなら…これほど嬉しいことはない」

「ウエンデイとゴーシユの為につくられたギルド…!!」

「そんな話聞きたくないっ!!バスコもナオキも消えないでっ!!」

「ウエンデイ、シャルル、そしてゴーシユ。もうお前たちに偽りの仲間はいらない。本当の仲間がいるではないか」

マスターが笑顔をつくり…そのまま消えていく。それでさらに、目から涙が溢れる。ふと、左腕の前腕部にある化け猫ケットシエルターの宿の紋章を見ると…徐々に、消え始めていた。

『お前たちの未来は…始まったばかりだ』

「マスター!!」

「マスター…!」

ウエンデイがマスターに駆け寄り、僕はその場で崩れそうになるけど何とかこらえて、少しずつ歩き始める。どうしても、言わないといけないことがあるから…マスターに、伝えたいことがいっぱいあるけど…言い切ることができそうにないから、たった一言にそれらを込める。

「…ありがとうございます…マスター・ローバウル…!!」

『…皆さん、本当にありがとうございます。3人をどうか、頼みます…』

「マスター…!!!うああああ!!!」

僕はウエンデイの横で深々と一礼した後膝から崩れ落ちた。ウエンデイは天に向かって慟哭していた。それからどれくらい経ったのか分からないけど…エルザさんが、僕とウエンデイの肩に手を置いた。

「…愛する者との、別れの辛さは…仲間が、埋めてくれる。来い、妖精フェアリーテイルの尻尾へ…!」

これが、僕達が妖精の尻尾に入ったきっかけだった。

☆

連合軍は、それぞれのギルドへと帰ることになった。

一夜さんやヒビキさんは今度青い^{ブルーベガサス}天馬のギルドへ遊びに来るように言ってくれた。リオンさんはグレイさんに脱ぎ癖を治すように言っていたけれど、そう言った時既にリオンさんは上半身裸だった。そしてレンさんとシェリーさんがなんか互いに言い合っていたけれど…あれはツンデレ同士が好き合っているとしか思えなかった。

そして妖精^{フェアリーテイル}の尻尾の皆とウエンディ、シャルル、僕は近くの港からハルジオンという港町に船で向かうことになった。

「ゴーシユ、ちよつといい？」

「ウエンディ…うん」

船が来るまで少しだけ時間があつたので、その間は自由行動となつた。僕は、化け猫^{ケットシエルター}の宿の皆がいなくなつてからウエンディやシャルルと顔を合わせられなくなつていた。今も責められて嫌われるんじゃないかって怖いけど…ちゃんと話し合つておかないといけない。

その後シャルルも合流し、近くの海が一望できる場所までやってきた。少しの間、僕達は話すことなく静寂が流れていたけれど、ウエンディが話し始めた。

「ずっと…ゴーシユは、知ってたんだよね？マスターたちのこと」

「…うん。僕とジェラールがマスターに初めて会つた時、明らかにそこは廃村で他に人がいるようには見えなかった。マスターも僕が変に思っていたことを気づいていたみたいで、ウエンディが依頼に行っていた間に聞いたんだ」

「そつか…私、皆のことが大好きだったんだ。マスターも、バスコも、ナオキやマグナにペペル…皆が、本当の家族みたいに思つてた」

やつぱり、すぐに許してもらうのは無理…かな。多分あの頃にウエンディに皆は幻なんだって言つても、信じてもらえないかジェラールやマスターに恨みを持ってしまうこともあるんじゃないかと思つて思つた。だからウエンディを傷つけない為と思つて、ずっと隠し通してきたけれど…それが、今のウエンディの心に深い傷をつけてしまった。

「…あ、違うの。ゴーシユが黙つてたことを責めてるわけじゃないん

だ。だって、ゴーシユは私達をいつも守ろうとしてくれているのを知ってるから。ね、シャルル」

「…そうね。確かに驚いたけど、連合軍ができる前にマスター達が消えたら、私たちはただ途方に暮れるだけだったと思うわ」

「そう言ってもらえると…助かるよ」

僕が暗い顔をしているのを見て、ウエンデイとシャルルがそう言うってくれた。それだけでも、本当に救われた思いだ。

「ゴーシユは、本当に優しいから…自分を責めてるでしょ？私達を傷つけたって」

「そんなことは…」

「あんた、本当に嘘下手ね」

「うっ…」

「ふふ…ゴーシユ、私達は大丈夫。悲しかったけれど…誰も悪くないって、分かってるから！」

「ウエンデイ…シャルル……ありがとう」

ウエンデイとシャルルの気遣いに、僕は本当に救われた気持ちになった。僕は、これからも2人を…大切な人達を、守り通す。あなたから教えていただいた魔法で、必ず守り通して見せます。だから見守っていて下さい、マスター。

日常編

第14話

新居建築

「ん〜、船って潮風が気持ちいいんだな〜」

「良かったね〜、ナツ〜」

僕は妖精の尻尾フェアリーテイルに入ることになり、船が出航してから2時間くらい。ナツさんはウエンデイに乗り物酔いに効く魔法・トロイアをかけてもらったおかげで、船の上を元気に駆け回っている。そういえば、そろそろ効果が切れる頃だったような…あ、ダウンした。

「ウエンデイ…もう一回かけて…ウツプ」

「連続で使うと効果が薄れるんですよ」

「ほつとけよ、そんな奴」

「あははっ！」

「本当に三人とも妖精の尻尾フェアリーテイルに入るんだね〜」

「私はウエンデイが行くって言うからついて行くだけよ」

「素直になればいいのに」

ハルジオンまであと1時間弱ってところかな。それまでナツさんはこのままか…頑張って、ナツさん！

「そういやゴーシュ、お前その魔道二輪は…」

「これ、以前に頑張って貯金して買ったんです。残していくにはもったいなくて…」

「俺はてつきりあのレーザーって奴のかと思っちゃったぜ」

「そっか、グレイと戦った時に魔道二輪で攻撃してきたんだっけ」

やっぱり、自分で依頼をこなしてお金を貯めて買った物だと愛着がわくもので…せっかくだから、持っていくことにした。余談だけど、これのSEプラグでの魔力消費を修行に利用したりしてました。少ない魔力で走ってくれるけど、スピードを上げようとするとあんまり長続きしないんだよね、コレ。だから魔力を高める修行にはもってこいだっただけ。

そういえば何も考えていなかったけど、家はどうしよう…？

☆

「というわけで、ウエンデイとシャルル、ゴーシユを妖精の尻尾へ招待した」

「よろしくお願いします！」

やってきました、マグノリア。そしてギルド・妖精の尻尾！中には人がすごい沢山いて、100人以上いるんじゃないかと思う。エルザさんが紹介してくれたので、ウエンデイと一緒に頭を下げる。シャルルはもちろん照れているかの如く視線をそらしている。っていうか、ウエンデイに視線が…

「可愛い〜」「ハッピーのメスがいるぞー」「お嬢ちゃんいくつ〜？」

「…ウエンデイ、ちよつと下がって。シャルルも」

「う、うん…？」

「何する気？」

「いや…何となく危険ななって」

このまま男性陣の中に2人を置いておくのは危ない気がする。誰か、止めてくれ。

と思っていたら、突然床が浸水し始めた。なんか、さっきまでその辺にいた男性陣だけでなくグレイさんとかも流されているんですけど。

「私、グレイ様が心配で心配で…目から大雨が…」

「グレイ止めろー！」「なんで俺が〜!!」

水を大量に発生させて浸水させているのはジユビアⅡロクサーさん。グレイさんのことが好きで、いつも猛アピールしている。以前は妖精の尻尾と敵対していた幽鬼の支配者の幹部、エレメント4の一人だ。っていうか、グレイさんに早く止めてもらいたい。このままだとジユビアさんの水でおぼれる人とか出そうだ。

そして少し落ち着いたら、ナツさんたちがそれぞれ今回の件について語っていた。落ち着いたので見計らって来てくれたのか、一人の女性がこちらへ近づいてきた。この人は原作知識以外で、この世界の雑誌とかで見たことがある。S級魔導士でありながら、ウェイトレス

や雑誌のモデルの仕事なんかもやっているミラジエーンⅡストラスさんだ。

「初めまして、ミラジエーンよ」

「うわあ〜！本物のミラジエーンさんだよ、シャルル！」

「だからウエンデイ…」「あ、ごめんなさい…」

「いいのよ、気にしないで」

確かエルザさんに初めて会った時と同じことをしていたので、横でジト目をして見たらちゃんと伝わったらしく謝っていた。ミラさんもこういうことが多いのか軽く流してくれた。

「シャルルは多分ハッピーと同じだろうけど…ウエンデイとゴーシユはどんな魔法を使うの？」

「ちよつと!!オスネコと同じ扱い!?!」

「僕は結界魔法を使います。主に防御が得意です」

「私は天空魔法、天空の滅竜魔導師です！」

『!?!』

ウエンデイの言葉で、周囲のざわつきが静かになった。それを見て、ウエンデイは少し落ち込んだような様子を見せる…信じてもらえないとか、思っているんだらうな。

『うおー！すげー!!滅竜魔導師かー!!』

「え？」

「ナツと同じか！」「ガジルもいるし、このギルドに3人も滅竜魔導師が!!」「珍しい魔法なのになー」「ゴーシユも珍しい魔法だなー」「防御系の魔法とかこのギルド全然ないからなー！」

皆口々に喋っていたから、あんまり聞き取れなかった。でも、ウエンデイの魔法のことは信じてもらえたらしい。それが分かり、ウエンデイは笑顔になった。良かったね、ウエンデイ。シャルルは反対に不貞腐れてしまったけれど…その内収まるか。

ガジルっていうのは、ジュビアさんと同じく幽鬼の支配者に所属していた鉄の滅竜魔導師のガジルⅡレッドフォックスさん。当時は幽鬼の支配者でマスターの次に強い魔導師だったらしい。ナツさんたちともいい勝負だと思う。

それから宴が始まった。皆それぞれ飲んで、騒いで、歌ったり踊ったり：すごく楽しそうだ。

「楽しい所だね！」

「私は別に…」

「うん、すごい賑やかだ」

僕達の歓迎会は、夜通し続いた。途中で僕は寝ちやっただけだね。

☆

「うーん…」

「どうしたんじゃ、ゴージュ」

「あ、マスター…いや、まだ住む場所が決まってなくて」

このギルドにやってきてから三日、僕にはまだ住む家がなかった。できることなら、借家とかアパートとかじゃなくて一軒家を買いたいけれど、贅沢は言ってられない。船での移動時間とかも含めて、この一週間は物件探ししかしてない。幸いギルドでご飯とかは食べさせてくれるし、ベッドとかもあるから寝泊りさせてもらっているけど：さすがにそろそろ決めないと。

「お主、金はあるのかの？」

「まあ、貯めておいたのが100万Jくらい：でも、マグノリアってどこも部屋空いてないんですね」

妖精の尻尾フェアリーテイルが有名だからなのか、この町のアパートとかも全て探したんだけどどこも部屋が空いていない。こうなったら、どこかの宿屋を拠点にするしかないか…？

「フム：少し足りんが、心当たりがある」

「本当ですか!？」

「町の外れでちよつと遠いしボロボロの小さな一軒家じゃが：それでも構わんのなら儂が町長に話しておく。金も肩代わりしとくぞ」

まさかのマスターからそんな情報が聞けるとは！しかも、一軒家！これはもう決定だ。そのボロボロだという家を我が家にしよう！

「あ、ありがとうございます!!場所は？すぐ行ってみたいんですが」
「ほれ、この辺りじゃ」

マスターに地図で教えてもらい、住民票みたいな必要な書類を書いてマスターに託してからその場所へと向かった。

☆

「ここが…」

マグノリアの町の本当に端っこ、多分ギルダーツシフトでも動くことがないんじゃないかって場所。すぐ傍には森、反対側には町が広がっている。そんな場所にあった我が家は、本当にボロボロだった。とりあえずナツさんの家よりは小さい。しかも窓は割れているし屋根も穴が空いている。中の床はギシギシ言うし蜘蛛の巣とかたくさんあるし…テンプレみたいなボロ家だ。

「掃除、大変そうだね」

「他に家無かったの？」

「お金無かったし…っていうか、なんで2人ともいるの？」

「ゴーシユの住む場所がようやく決まったって聞いたから」

「様子見に来てあげたのよ」

「…それはどうも」

ウエンディはともかく、シャルルはからかいに来たっぽい。まあ来てもらったからには手伝ってもらおうけどね。

「中は…家具みたいなのはあるけど」

「案の定ボロボロ…やっぱり、全部出すしかないか」

家の壁とか床とかに使われている木材も腐っている部分が多々ある。これは一度ぶっ壊して立て直した方がいいかもしれないって感じだ。

「さて…頑張るか」

「うんー」「仕方ないわね…」

何も言わなくても手伝ってくれるから本当に大助かりだ。これ絶対一人だと面倒くさいことこの上なかっただろうなあ。

☆

昼に始めた大掃除が終わるころには既に日が傾いていたが、ウエン

デイたちの手伝いもあって、思ったよりも早く終わることができた。一人でやっていたら、きつと終わるのは夜中か明日の早朝になっていたと思う。

「よし、今日はこれで終了だ！」

「でも、まだ色んな場所に穴が空いてるけど…」

「いや、穴っていうよりほぼ何も無いじゃない！これもうただの廃墟よ!？」

「ま、まあ僕の結界で塞げばいいし…。後は木材で少しずつ直していかないから、僕一人で何とかするよ…」

えっと…まあボロボロだった部分を全部引っぺがして使える所だけ残した結果、シャルルの言う通りほぼ廃墟になってしまった。中の家具とかも全て出し、水道とかはなぜか普通に使えたのでそのままにした…もちろんできれば取り替えたいけど。これを結界で塞いだらもう結界の家だな。

「誰かに手伝ってもらった方がいいんじゃない？」

「…誰かいるかな、ちゃんと壊さずに直してくれる人」

「…ああく…」

フェアリーテイル
妖精の尻尾のメンバーだと、ほぼ全員破壊者ってイメージが…これを直すってなると、複数人いるでしょ。つまり相性とかも考えないと駄目だから…どうしたものか。

☆

次の日。

「ここがゴーシュの家か」

「本当にただの廃墟ね…」

「いや、これぞ漢の家!!」

「ちよつと意味が分からないんですが…」

「ったく、なんで俺が…」

「嫌ならついて来なくていいのに」

「皆さん、よろしくお願いします」

エルザさんにルーシイさん、エルフマンさん、ガジルさん、レビイ

さん呼びました。ウエンデイとシャルルもいます。木材とかも買ってきた：僕の貯金は無くなったから、エルザさんのお金で。昨日は結局ここで寝るのはまだ無理だというウエンデイたちの説得？により、ギルドで寝泊まりさせてもらうことになった。

それで朝にウエンデイたちとこの家について話しているとエルザさんが任せろと言ってくれて、力仕事にエルフマンさん、設計図を作製してくれたルーシイさんとレビイさん、そしてなぜかついてきたガジルさんが集まった。早く仕事でお金を稼いで、マスターと皆に恩返ししなくては：エルザさんは遠慮するかもしれないけど、おいしいケーキとか数十個単位であればもらってくれるだろう。

「よし、では早速作業に取り掛かるぞ！」

『おー！』

エルザさんの指示の元、次々と家が組み立てられていく。土台とかは僕の結界で枠を作って、ガジルさんとエルザさんが木材の長さを調節し、エルフマンさんとタウロスが次々と枠の通りにはめていく。釘の打ち付けなんかもガジルさんがやってくれた。レビイさんとルーシイさんとウエンデイとシャルルは塗装をやってくれている。僕は主にガジルさんのサポートだ。

そして数時間後：とうとう、僕の家が完成した。

「中々の出来だな」

「塗装もバッチリ！」

「これぞ漢！」

「だから意味わかんないって」

「ガジルさんも、ありがとうございました」

「ギヒツ：今度なんか奢れよ」

「うっ：お金貯まってるからでもいいですか？」

「皆さくん、お昼ご飯出来ましたよ」

なんとということでしょう。本当に新築の素敵なお家が出来上がった。結局水道とかも取り替えたから、廃墟だった痕跡がほとんど無くなった。午前中に始めて、今は正午。ウエンデイとシャルルが一旦ギルドへ行って、ミラさんと一緒にお弁当を作ってきてくれた。せっかくだ

から中に入って食べることになったけど、まだ家具は何もないので、床に座って、皆でご飯を囲むようにして食べる。

「やっぱり広めに設計して正解だったね！」

「うん、これならそこそこ大所帯でも入るしね！」

「あの、二人とも？ここ僕の家なんですけど」

「細かいことは気にするな」

「そうだ！細かいことを気にしていたら漢になれんぞ！」

「イカれてるぜ」

「ホント、騒がしいわね」

それぞれがご飯を食べながら談笑する。シャルルのそのカップはどこから持ってきたんだろう。6年くらい一緒のギルドで過ごして気づいたんだけど、シャルルはダージリンテイーが好きみたいで、おやつの時とかよく飲んでいる。

「皆さん、まだ沢山ありますからね」

「なんかウエンデイがお母さんみたいになってる」「え？」

しばらくの間食事と談笑を楽しんで、夕方頃に皆帰っていった。明日から仕事、頑張らなくては。ルーシイさんほどではないけど、しばらくはお金を頑張って稼がないといけないな…。

☆

数日後、初めての依頼を終えてギルドへ戻ってきた。最初は誰かのアシスタントとして行くのが普通との事だったので、雷神衆の皆さんと一緒にいかせてもらった。なんで雷神衆なのかというと、フリードさんの術式を見てみたかったから。突然のお願いだったけど、三人とも快く引き受けてくれた。仕事も山賊の討伐だったので、簡単だった。雷神衆が強いつていうのもあるけど。ウエンデイに最初は一緒に行こうって言われてたけど、中々決めてくれないからまたの機会にすることにした。

「あれ、ナツとハッピーじゃない？」

「ウエンデイもいるぜ」

「初仕事ですかね？」

「かもしれん」

入り口に着く前にナツさんとウエンデイ、ハッピーにシャルルがどこかへ出かけて行った。ウエンデイたちもようやく初仕事かな？

「雷神衆の皆、お帰りなさい！ゴーシユ、初めての依頼はどうだった？」

「雷神衆の皆さんのおかげで問題なく終えられました！」

「ま、それほどでもあるけどね」

「あれぐらい大したことないぜ」

「ゴーシユも見どころがある。簡単な依頼なら、次から一人で行っても問題ないだろう」

フリードさんに褒められて少し照れる。本当に大したことはしてないんだけど…まあ早く一人前になりたいと思っていたから良かった。メタいことを言うと、早く一人でお金稼げるようにならないといけないしね。

「そういえばナツさんとウエンデイたちが出て行くのを見たんですけど…依頼決まったんですか？」

「ううん、違うの。西の荒れ地にあるっていう、ライズって宿。そこにドラゴンを見たって人がいるんだって噂があつてね」

「なるほど…その人を探しに行ったのか」

話を聞きに行くだけだったらそんなに時間もかからないだろうし、丁度レビイさんもいるから、フリードさんにもお願いして術式教わろうかな。二人とも教えるの上手そうだし。まだ今回の依頼とこの前の評議員の時ぐらいしか術式を見ていないから、まだよく分からないところが多いし。

そう考えて、二人に術式を教わりながらウエンデイたちを待つことにした僕だったが、何時間待っても二人が戻って来ることは無かった。

第15話 ドラゴノイド

「ルーシイ、一緒に来てくれ。他の者はギルドを守ってくれ！」

「エルザさん、僕も…」

「いや、お前の魔法は一番守りに向いている。ウエンデイたちのことが心配だろうが、我々に任せてくれ」

「…分かりました。どうか、お気をつけて」

ギルドでナツさんたちを待っている、エルザさんが町で襲われたという話を本人から聞いた。マスターの判断で警戒するだけでいいということになったのだが、ナツさんたちが夕方になっても帰らず、グレイさんまでいなくなったことに何かあったと判断したエルザさんは、ルーシイさんを連れて西の荒地地にある宿、ライズへと向かった。

「僕はそのダフネという人物について調べる。皆は引き続き襲撃者に注意せよ！」

「我々はギルドの周囲に術式を張るぞ、レビイ、ゴーシユ」

「うん！」「はい」

マスターはそのままギルドを出て行った。フリードさんとレビイさんのレクチャーのおかげで術式の修正くらいはできるようになった僕は、二人のサポートに入ることにした。

☆

ギルドの周囲に術式を張り終わった頃、辺りは暗くなり始めている。

「これくらいいいだろう」

「うん、修正も大体終わったし」

「皆、マスターから伝言！ダフネって奴のことが分かったよ！」

カナさんが教えに来てくれた。どうやらダフネという人物は音無しの町の出身で、住人たちを何らかの方法で行方不明にした張本人。そして、人工ドラゴンを作るマッドサイエンティストらしい。グレイさんはそのダフネと接触していたことが分かった。

グレイさんがギルドを裏切ったとは思えないけど……マスターの命令で、エルフマンさんとマカオさんとワカバさんがグレイさんを連れ戻しに行ったそうさ。

「おーい、皆〜!!」

「ルーシイさん、ウエンデイ！無事だったんだ、良かった……ナツさんは？」

「その話は後！町の皆を避難させないと！」

「人工ドラゴンが、こっちに向かって来ているんです！」

ナツさんは、ダフネの人工ドラゴン……ドラゴノイドに取り込まれてしまい、動力源にされているらしい。グレイさんはナツさんを罠にかけたんだとか。……それで、グレイさんはエルフマンさんたちがもうすぐ連れてくるらしい。

「ギルドへ町の住人を避難させよう。術式も書いた、他の場所よりは安全だ」

「ルーちゃんとウエンデイは、そのまま誘導して！」

「分かった！」「はい！」

ルーシイさんとウエンデイはハッピーとシャルルに抱えられながら町の方へと向かった。僕らは一度、ギルドに戻ることにした。早くこのことを皆に知らせないと！

☆

それから約1時間後。マグノリアの町の住人たちの避難がほとんど終わった頃、西の方角に巨大な影が現れた。あれが例のドラゴノイドだろう。あの中に、ナツさんが……エルザさんも、あそこで戦っているに違いない。

「エルフマン！」

レヴィイさんの声を見ると、エルフマンさんがボロボロのマカオさんとワカバさん、そして気絶したグレイさんを背負ってやって来た。

「レヴィイさん、ミラさんを！ウエンデイ、僕らは治療を！」

「分かった！」「うん！」

僕の聖結界^{ホーリィ}でワカバさんを、ウエンデイがマカオさんを治療し始める。グレイさんはただ気絶しているだけのようだから、とりあえず寝かせておく。

「エルフマン！何があったの？」

「ねえちゃん…後は頼む。ナツを、助けてやってくれ…あいつは…」

「…分かったわ。後は任せて」

「頼む…ぐっ!!」

「エルフマン!!」

「私が、天空魔法で治します！」

ウエンデイはもうマカオさんの治療が終わったのか…！すぐさまエルフマンさんの治療に取り掛かるが、そんなペースではすぐに魔力を枯渇させてしまう。僕も早くワカバさんの治療を終わらせなくては！この中で一番軽傷なんだから、早く…！

「…っ」

「！おい、起きてんのかグレイ!!一体何がどうなってんの!!答えないと…！」

「やめてください！グレイ様が妖精^{フェアリーテイル}の尻尾を裏切るはずがありません!!ジユビアは信じてます…たとえ誰が何と言おうと、世界中を敵に回しても、ジユビアは…！」

「ジユビア…もういい。じいさんの所に連れて行くんだろ？グズグズしている暇はねえはずだ」

カナさんがグレイさんに問いただそうとするが、ジユビアさんが必死にそれを止める。グレイさんはジユビアさんを止め、アルザツクさんとビスカさんに連れられてマスターの元へと向かった。

「…ワカバさんはもう大丈夫。ウエンデイの方は…」

「エルフマン！」

「もう大丈夫です！あつ…」

「ウエンデイ！」

やっぱり無理をしたようで、エルフマンさんの治療が終わるとウエンデイは倒れ込みそうになり、ルーシイさんに支えられる。

「大丈夫です…まだ、魔法も使えます」

「止めなさい！これ以上天空魔法を使うとあんたの命も危なくなるわ！！」

「…私のことはいいの！」

「良くないわよ！！」

「私は役に立ちたい！！そしてちゃんと妖精の尻尾フェアリーテイルの仲間になりたい！！」

「ウエンデイ、君が倒れたら意味ないよ…ほら、これ食べて。二人とも興奮しすぎだよ」

「ゴーシュ…うん。シャルル、怒鳴ってごめんね」

「全く、頑固なんだから…」

「皆お願い！！力を合わせて、ナツを助けて！！」

ルーシイさんの一言で、皆が一丸となる。これまで、ナツさんはギルドのメンバーに勇気を与えてきた。今度は自分たちが助ける番だと、皆気合いが入っている。

「待つんじゃ！！妖精の尻尾フェアリーテイルはマグノリアの町と共に生きるギルドじゃ…このまま町の崩壊を止めないわけにはいかん！！」

「マスター…あれを攻撃するんですか!？」

「あの中にはナツがいるんだよ!？」

「全妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導士にマスターとして命令する!!手段は問わない、ドラゴノイドを食い止める!!なに、あいつなら大丈夫じゃ!!頑丈な体しとるからの！」

どんな手を使ってでもドラゴノイドを止める。マスターの命令通り、できるだけ町を壊させずにドラゴノイドを止めてナツさんを助けるんだ。マスターと負傷したエルフマンさんたち、そしてグレイさん以外の皆はドラゴノイドの元へと向かった。

☆

ドラゴノイドの元へとたどり着くと同時に、それぞれが攻撃を仕掛けていく。僕は辺りが壊れることがないように弾性結界バウンドで周囲の建物を1つずつ守っていく。これ以上、破壊されることがないように。多分防衛結界だとすぐに罫が入るだろうから、クツシヨンの様に衝撃ディフェンド

を吸収できた方が良いはず…って言っても、弾性結界を足場以外の用途でこんな大きくしたの初めてだから上手くいくか分からないけど。「ドラゴノイドの破壊が最優先…それがマスターの決定だと言うのか。ナツのことは？」

「頑丈だから大丈夫だって…」

「そうか…ナツ！マスターの命令に従い、我々は全力でドラゴノイドを止める！その前に、お前の意志を確かめたい！声を聞かせろ!!」

『へへ…ああ、聞かせてやんよ…いいか、耳の穴かっぽじってよく聞きやがれ！こいつを…俺ごと、ぶっ壊せ!!』

ナツさんがそう叫ぶ。それはつまり、ナツさんを気にせず全力で破壊しろってことだろう。

「そんなことしたら、ナツはどうなっちゃうんだよ！」

『四の五の言ってるじゃねえ!!俺のせいでマグノリアがボロボロになっちゃったら、寝覚めが悪いだろうが…!』

とは言っても、すでに何人が攻撃をしているけれどほとんど効果がない。ただ歩いて進んでいるだけだというのに。僕の結界は予想通り衝撃の吸収は出来ているけど…思ったより攻撃の威力が大きすぎる。食い止めるだけでも精一杯だ。…このままじゃ、全部壊される。

「ナツさん、我慢してくださいね…! 防御結界・柱！」

『うおっ!?!』

このまま町を守っていてもすぐにまた結界が破られてしまう。こうして体の間に柱を通してあげば力が上手く入れられず動きを制限することができるはず。これで建物を守っている弾性結界への負担も少ないだろう。

「とりあえず、動きはこれで制限できるはずですよ」

「よくやった、ゴージュ」

『はっ!…こんなのただの時間稼ぎにすぎねえよ!!このパワー…あの時と同じ、ドラゴンのパワーがあればなあ!!』

ダフネは語り出す。自分は本当にドラゴンを見たことがあると。だが、ドラゴンは気まぐれでいつ会えるか分からない…だったら自分

で造ってしまおうと考えた。ナツさんもダフネに向け、ウエンディやガジルさんもドラゴンに会いたいんだと叫ぶけど、ダフネは聞く耳を持たなかった。こいつは、ハッピーの言う通りマッドサイエンティストって奴だ：手始めに町を破壊するとか言ってるし。ってか、ナツさんの声が複数聞こえるんだけど…？

「グレイ！」

「まったく、俺も読みが甘かったぜ…手短かに真相を話す！信じるも信じないも、お前らの自由だ！」

グレイさんは今回の件について話してくれた。ダフネの出身地である音無しの町。ナツさんはイグニールを探して、グレイさんはナツさんがイグニールの捜索で夢中になって問題を起こすことがないように気づかれないよう後をつけて行った時に、その町を訪れた。そこでナツさんは、ドラゴンを操る者を倒してくれという住人の声を聞いて約束を結んでいた。

グレイさんは数日前にダフネの噂を聞いてその事を思い出し、ナツさんがドラゴノイドを破壊するように仕向けた。なんでも、ドラゴノイドは内部から滅竜魔法でしか破壊することができないとか。だけどグレイさんも、ナツさんが破壊できないでいることは想定外だったらしい。

「わ、忘れてたあ？そんな大事な約束を？」

「全く…相変わらずにも程がある！」

「良かったあ…!!ジュビア、グレイ様を信じてました…!!」

ジュビアさんが天に召されそうに見えるほど喜んでる。まあ、ナツさんがした約束も数年前のことみたいだから、忘れるのも仕方ない気もするけど…そこは気にしないでおこうかな。

「こうするより他に方法が無かった…だが、今はあのデカブツを止めるのが先だ！」

「何とかするったって…」

「あ、誰か倒れますよー！」

「あれはケーキ屋の…」

「逃げ遅れたんだ！」「カバーしろ」「助けに行くぞ！」

パティシエみたいなおじさんが道端に倒れている。それをジエツトさんとドロイさんが助けに行こうとするが、それよりも前にドラゴノイドが動きを見せた。

『ハイハイハイハイ!!リザードマン ver. 3. 1 放出!!』

「チキショー、キリがねえぞこりやあー!」

ドラゴノイドの周囲から魔法陣がいくつも展開され、ヒト型のトカゲ——リザードマンが現れる。ギルドの皆が応戦してくれている間に僕とエルザさん、ウエンディとシャルルがケーキ屋のおじさんの所へ駆け寄る。

「こんな時に何をしていただの!」

「店、踏み潰されちまって…何とか、これだけは…」

「これを、わざわざ…」

「新人さんたちを、迎えてやるんだろ? あんなデカブツに、負けんなよ…」

おじさんはケーキを一つエルザさんに差しだす。どうやら、エルザさんが注文していたものらしい。残ってそれを作り続けていたのか

…

「私、治療します」

「ちよつとウエンディ!! あんたもう魔力が…!」

「大丈夫、ゴーシユから譲渡結界ランブルもらったし」

「僕も一緒に」

「頼むぞ…ウエンディ、ゴーシユ」

僕の聖結界ホーリィは回復が遅いけど、その分魔力の消耗は少ない。僕も治療に加われれば、少しだけウエンディの負担を抑えられる。

「その…私、梅干しが苦手で」

「梅干し?」

「はい、弱点なんです。どんなものにも必ずあるはずですが、弱点って。私、まだ妖精の尻尾フェアリーテイルに入ったばっかりで、何もかも始まったばかりで…もつと、もつとナツさんと笑ったり、皆と笑ったり泣いたり怒ったりしたいんです。…もう一回、ナツさんとハイタッチしたいんです!」

「…ウエンディ、ストップ」

「え？……あ」

「ウエンディ！」

ウエンディが倒れそうになるのをエルザさんが支える。治療は何とか終わったから、もうケーキ屋のおじさんは大丈夫。ウエンディはしばらく魔法は使えないだろうな。

「ウエンディ、譲渡結界ランブルをもう何個か渡すからゆっくり食べて回復を。シャルルはウエンディと一緒にいて」

「分かったわ」

「ゴーシユ……ナツさんを、助けて……」

「うん。僕だって、皆と、ナツさんと一緒にいたい。僕ももう一度、ナツさんとハイタッチするんだ！」

とはいえ、現状は厳しい。何とかまだ結界は壊されていないみたいだけど、弾性結界バウンドも所々に罅が入っている。それにリザードマンの集団も現れたから、それを殲滅しなくてはいけない。

「エルザ、じいさんは俺に秘策を……」

「だと思っていた。皆まで言うな。お前たちは全力をあげてリザードマンを排除しろ！私はドラゴノイドを倒す！」

「でも、エルザ！」「ナツはどうするのさ!?!」

「それがマスターの、つまりは妖精フェアリーテイルの尻尾の意志だ。いいか！この町は何としても守る！ギルドの、私達の魂と誇りをかけて!!」

天輪の鎧に換装したエルザさんはそう言い放つ。ハッピーはまだ、相棒のナツさんを攻撃することに躊躇いがあるみたいだけど……それでも、皆は覚悟を決める。

「…ジュビア、俺について来い」

「え？」

「天輪・繚乱ブルーメンブラットの剣!!」

エルザさんがドラゴノイドに攻撃を始める。グレイさんとジュビアさんはどこかへ走って行ってしまった。多分ダフネが出したりザードマンの軍勢を一網打尽にするつもりだろう。だったら、僕もできるところを！

まず罅が入り始めている弾性結界を一度解除しよう一度展開していく。これでもう少しの間だけ周囲への被害は最小限にできる。この間にエルザさんがドラゴノイドの弱点を見つけてくれればいい。後は…エルザさんはリザードマンを倒せて言ったけど、ウエンディとの約束があるから…僕もドラゴノイドを！

「デイフエント 防御結界・立方!!」
スクエア

「今のは…ゴーシユか!」

エルザさんに向かって振るわれた尻尾による攻撃を、四角く展開した防御結界で弾く。エルザさんはやっぱり弱点を探っているようで、全体的に攻撃をしていた。

「僕も、一緒に戦わせて下さい!ウエンディと、約束したから…!!」

「分かった。サポートは任せるぞ!」

「はい!」

『後3%…もうすぐね。邪魔なネズミ共!!このドラゴノイドの力を、見せてやるわ!!』

ダフネの声が聞こえた直後に、ドラゴノイドの動きを制限していた全ての防御結界・柱に罅が入る。まさか、さっきまでちゃんと抑えることができていたのに…!?

「ゴーシユ、離れる!」

「くっ…!」

『言ったら、こんなの時間稼ぎにしかならねえってよお!!』

僕らが離れた瞬間に結界は粉々に破壊されてしまった。デイフエント 防御結界は僕が今持っている結界では一番強固な結界。それが破壊されたことなんて、今まで一度もなかった。でも、さっきまでは問題なかったはずなのに急に力が強くなったのはなんで…?

『全部ぶっ壊してやる!!じゃなくって、俺ごとぶっ壊してくれ!!』

「…ナツさん?」

どうもさつきから、ドラゴノイドから聞こえるナツさんの声がなんか変だ…言っていることがちぐはぐだし。ドラゴノイドもその言葉に合わせて動いているような気がする。

「おい、ナツの魂がその人工ドラゴンと一体化しかかってんぞ!!」

ビッグスローさんが仮面を外してそう叫ぶ。ビッグスローさんはセイズ魔法という、人形に魂を宿す魔法の使い手。彼の目を見た者は人形に変えられて自由自在に操られてしまうらしい。

「一体化…エルザさん、早くしないとー！」

「ああ。それに、グレイたちの方もそろそろだろう」

「グレイさん？…っ！冷たっ！」

『冷てえー!!』

背中になんか冷たいものが…！今は、雪…？空を見上げると真上にオーロラというか、氷のカーテンのようなものがあつた。これは、グレイさんとジュービアさんの合体魔法だ…！氷の刃と化した雨が広範囲に降り注ぎ、リザードマンが次々と消えていく。しかも、ドラゴノイドにも少しだけダメージがあつたみたいだ。

合体魔法《ユニゾンレイド》は、別々の魔法を一つにして威力を高めることができる。でもそれは本当に息が合った者同士でないと発動すること自体困難で、中には一生習得することができない人もいる。

「ゴーシュ!!」

「っ、はいっ!!」

エルザさんの声に反応して咄嗟に防御結界・立方をスイングするイメージで動かし、エルザさんがそれを足場にして勢いよくドラゴノイドへと接近していく。

「換装！黒羽の鎧!!黒羽・月閃!!」

「僕も…！防御結界・柱!!」

『いつてえ…何しやがる！じゃなくて、そのまま壊せ!!』

『こんの、勝手に動くな…!!』

エルザさんの一撃と僕の結界が胸のコア付近に直撃する。するとドラゴノイドがその場でジタバタし始める…ナツさんの動きと被つて見えてきた。これも一体化とやらが進んでいる証拠か。でもエルザさんの攻撃でもダメージがないわけじゃないし、ダフネの声を聞く限りだと制御もできなくなっているんじゃないか…？

「聞こえるか、ナツ!!」

『グレイ!?』

「手も足も出ねえのか、情けねえ……この口先だけのツリ目野郎が!!
デカイ図体にとけ込んでいつまで一人漫才やってやがる!!」

『んだとコラア!!』

「どうしたんだよ、ひどいよグレイ……あー!」『?』

グレイさんが挑発するようにナツさんを怒鳴り散らす。ハッピーが静止するような言葉を言うけど、ハツと何かに気付いたような様子を見せた。

「てめえが交わした約束を忘れやがって!!それでも妖精の尻尾の魔導士か!!そんなドラゴンもどき、とつとどち壊せ!!」

『あー!』

『ハイハイ、それが狙いだつたのね、グレイ・フルバスター。でももう手遅れ、サラマンダー火竜は魔力と一緒にその意識もほとんど吸収されてるんだから』

『壊せりやあとつくにやってんだよ!あんな垂目野郎ぶつ潰してやんよ!』

グレイさんが更なる暴言を言い放つ。それでルーシイさんもハツピーと同じ反応を見せているけど……ナツさんがさつきよりもさらに怒り始めた?

「オイラ、ナツを見損なつたよ!どんなピンチだつて切り抜けてきたじゃないか!!俺ごと壊せなんて、聞きたくないよ!!」

「そうよ!皆が、フェアリーテイル妖精の尻尾皆があんたを必要としてる!!だから必死に頑張ってるのに!!仲間の想いに答えないナツなんて、ナツじゃないよ!!」

『ハッピー、ルーシイ……てめえら……!!』

「皆の言う通りだ!!手もなく捕らえられたまま、お前は簡単に諦めた!!」

『俺がいつ諦めた!!いや、諦めろ!じゃねえつーの!!』

「俺ごと壊せと言ったな?その言葉が諦めだと言っている!!そしてそれは、弱音以外の何物でもない!!ならば望み通り、その巨体ごと葬り去ってくれる!!」

ルーシイさんとハッピー、エルザさんが立て続けにナツさんを罵っていく。ナツさんの怒りがどんどん大きくなって、ドラゴノイドの動きが活発になっていく…。足元がもう滅茶苦茶だ。僕の弾性結界のクツシヨンなんてすぐ破壊されてしまった。：ルーシイさんたちの言葉辺りで。

『やってみろやコラー！！！！！…うおっ！』

「ちよっ…!!?」

ドラゴノイドのコアから炎が出始め、口から特大の火竜の咆哮が放たれた。：パワーがおかしいよね？明後日の方向だったから良かったけど、もし町に向かって放たれていたら僕の結界なんて役に立たないレベルの攻撃なだけど…？

『ハイハイ、リザードマンは全滅したけど、このパワーさえあれば：！』

『すげえ…！』

「：自らの命を小さく見る者は、フェアリーテイル妖精の尻尾には必要ない！」

『んだとコラー！』

マジか…エルザさん、あれを見た後にあんなこと言えるのか…：もしかして、今のレベルの攻撃も金剛の鎧なら防げるのかな…：確かジューピター魔導収束砲も防げるんだし、あり得ない話じゃないか。僕ももつと強くないと…

「そんな中途半端な者に、気高き竜は会いたいとは思わんぞ！会って懐に飛び込んだところで殴り返されるのがオチだ!!」

『ふざけんな…!!このパワーがあればエルザに勝てんじゃねえか!?：はっ!!?面白れえエルザ!!今日こそお前に勝あーっ!!』

一人漫才でエルザさんと戦う気になったナツさん。しかもエルザさんも攻撃力・防御力が共に高性能の煉獄の鎧に換装している…：どうするんだろうか、コレ？

『だから、ちよつと！勝手に動くな!』

『オラア、ビビったかエルザ!!』

「貴様という奴は!!ゴージュ!!」

「は、はいっ!!」

「はああっ!!」

『うおお〜っ!? やっぱこええ〜!!』

ドラゴノイドがまた足をジタバタしているけど、そんなことを気にも留めずさつきと同じ要領でエルザさんがコア部分に剣を振るう。今までエルザさんに喧嘩を売ってボコられてきたナツさんからすれば、トラウマモノなんだろうなあ…あ、僕も段々現実逃避してる気がする。せめて僕は町を守ることに徹しようかな。原作ってこんな感じだったっけ？

「どうした、そんなもんか!!」

『うおおおっ!! ふざけんなコラアアア!!! どいつもこいつも、好き勝手言ってるじゃねえぞーっ!!!』

最後のグレイさんの声が効いたのか、今まで溜めこんできた怒りが噴き出すかの如くドラゴノイドの体のあちこちから火柱が立ち上る。ナツさんの怒りで生み出された炎に耐え切れなかったようだ…。これにも対応されていたら、どうするつもりだったかとかは聞かないでおこう…。

「まったくイカれてるぜ。せつかく忠告してやったのよ…暑苦しい奴がさらに暑苦しい姿になりやがって」

「ガジル!」

「手間かけてんじゃねえ!! 滅竜奥義! 業魔・鉄螺旋!!」

どこからか現れたガジルさんがドラゴノイドに向かって大きく飛び上がり、両足を巨大なドリルにしてコアへと突っ込んでいく。ナツさんの発する内部からの炎で脆くなっていたのか、すぐにコアが粉碎された。僕達があればだけ頑張った意味は…?

「ガジル…?」

「ギヒツ、俺もまだまだだな。ドサクサに紛れててめえをぶっ潰してやろうと思っただのによ」

「…ってめえ!」

「ルーシィ!! あの馬野郎を呼べ!! ありったけの炎をここにぶち込め!!」

あ、これ離れといった方がいいね。後はもう、流れに任せよう。マツ

ドサイエンティストだし同情なんてしないつもりだったけど…ドンマイ、ダフネ。きつといいことあるさ。お前が考え方を改めたらだけど。

今更だけど、原作変えるのって難しいね…これ、後々の悲しい出来事を減らそうとしてる僕には大問題だなあ……。

☆

崩壊したドラゴノイドの残骸の中から今回の事件の犯人であるダフネを捕らえ、評議員に引き渡す。その時に、意識を取り戻してからほとんど喋っていなかったダフネが僕を見ながら呟いた。

「お前……あの時の…?」

「…? 僕?」

「ゴーシユを知ってるの!」

「…あの人形が、こんな感情豊かになるなんてね。魔法が解けたのかしら? まあ、もう関係ないけどね…」

ダフネはそれだけを言い残して評議員に連れられて行った。…僕のことを、知っている? この世界ではイレギュラーと言ってもいい存在。本当は存在しないはずの僕を…? それに、人形って…? どういうことだ?

「ゴーシユ…行かせちゃって良かったの?もしかしたらゴーシユの両親が見つかるかもしれないよ?」

「ゴーシユの両親? ウエンディ、どういうこと?」

ウエンディが皆に、僕にX777年より前の記憶がないことを説明している間に、僕はただ考えていた。そういえばだけど、この世界での僕の両親はどこにいるかとかは考えたことがなかったな…。今更だけど、僕はなんで5歳の姿で転生したんだろう? でも、ダフネに聞いても多分教えてくれなさそうだからなあ…。

「うーん…確かに気になるけど、僕は親の顔なんて覚えてないし…それに、今はギルドの皆が家族だから、いいよ」

「でも…」

「本人がいいって言うてんだから、ほっとけよ」

「そうです。それより、早くギルドに戻りましょう！エルザさんが買ってくれたケーキを食べたい人がいるみたいですから」

「わ、私はそんな……！」

「そうだな、早く頂くとしよう!!」

「エルザ!? それ、2人の為に買ったケーキでしょ!?!」

エルザさんが用意してくれたケーキで、また僕達の歓迎会がギルドで行われる。多分また大騒ぎになるのは、間違いない。ダフネの言葉が気になるけれど、考えたって仕方ないし今は目の前の皆が一番大事だから：気にしないようにしよう。それに、原作を改善させるって目標もあるし。とにかく、修行あるのみ！これからも、壮大すぎる物語が続くんだから！

第16話 虹の桜

桜の季節が、マグノリアにもやってきた。つまり、マグノリアの虹の桜が開花する時期。前世にそんな桜は存在しないし、ギルドの全員で花見なんてしたことがないから、僕は心なしか浮かれ気分になっているのを自覚する。そして、花見の前日。

「開け、時計座の扉！ホロロギウム！」

「ううう、私またここに薄着で来ちゃった…寒すぎる〜！と、申ししております」

「さ、寒いですね…」

「何よこれくらいで。だらしないわよ」

「なんでシャルルは平気なんだ？毛皮のおかげ？」

「毛皮って…寒さなんて心構え一つでどうとでもなるものよ」

「ウエンデイもおいでよ、風邪ひいちやうよ！と、申ししております」

「そうですか？じゃあ、お言葉に甘えて」

妖精の尻尾の最強チームと元化け猫の宿組の僕達は、明日の花見の

ビンゴ大会の景品を入手するためにハコベ山へとやって来た。この

ハコベ山は一年中雪が降り続く山で、春だからということ薄着で来

たルーシイさんとウエンデイはとても寒そうだ。僕は行き先が分

かった時点で寒いのは分かっていたから少し厚着してきたけどね。

「空模様も落ち着いてきたな」

「腹減ったなー、どっかに火でもねえかなー」

「暖かい！うう、早く帰りたい…と、申ししております」

「…二人以上入ると、誰が何言っているのか分からなくてややこしいね」

「くそ、こんだけ積もっていると歩きづれえな…」

「それ以前に服を着ろ」「うおっ！」

見てるだけで寒そうな人が他にいた…。いや、グレイさんは氷の魔導士だから寒くはないのか。でも、パンツ一丁で雪山を歩かれるとこつちが寒くなってくる。

「ねえナツ。そんな便利な薬草って本当にあるのかな？」

「さあな。依頼書に書いてあったんだからきつとあんだろ」

そう、今回はその依頼品を多く採って来てビンゴの景品にするつもりだ。なんでも、お茶に煎じたりケーキに練り込んで食べれば魔導士の魔力が一時的にパワーアップするという薬草らしい。どうも胡散臭い話だけれど、本当にあつたら魔導士にとつては嬉しいことだ。

「だってほら、旨い魚には毒があるって言うでしょ？」

「それを言うなら旨い話には裏がある、だ」「エルザに突っ込まれた!」今更かもしれないんだけど、こういう日本の諺とかってなんでこの世界に存在するんだろう?元々漫画の世界だからと言ってしまえばそれまでなんだろうけど…。この世界の東方の国の人が、このフィオーレ王国に広げていったんだろうか?だとしたらご苦労なことだな。

「効果はともあれ、依頼はこの山にある薬草の採取だ。ついでに多めに採るようにな。皆喜ぶぞ」

「おーい、薬草!いたら返事しろー!」「するかよ、バーカ」「んだとコラーっ!」

「思ったこと何でも口に出せば良いってもんじゃねえだろ、しかもてめえのは意味分かんねえし」

「やんのかこのカチコチパンツ王子!」「うぜえんだよこのダダ漏れチヨロ火野郎!」

「まあまあ二人とも…」

「止めんか!!」「あーい!」

おう…。やっぱり喧嘩の仲裁はエルザさんに任せるべきか。平和的に解決することはできそうにない。それにしても、その薬草の効果が本当だったら、もしかすると譲渡結界ランブルの改良には持つてこいかも知れない。六魔との戦いで、あれには多少問題があることが分かった。魔力回復の量を多くするか、もしくは新しい結界を作る必要があると思う。とはいえ、大分先の話だと思うけど。

ルーシイさんとウェンデイが明日の花見について盛り上がっている中、残りのメンバーは探索を続ける。途中バルカンに出会って、僕が必要以上に攻撃してしまってグレイさんやエルザさんが止めてく

れたりとか、そのバルカンたちをナツさんがさらに攻撃して薬草について聞き出そうとしたりとか色々あったけど未だ薬草は見つからず。というかルーシイさん、一度も花見したことがないのにメツチャ語ってる…。ホロロギウムが代弁するのを止めるくらい。

「時間です。ではごきげんよう」

「！寒いっ！！」

「おいおい…」「お前たちもちゃんと探さないか！」

「そうだよ、二人とも。早く終わらせたいならちゃんと仕事しなきゃ」

「だつて〜！」

「お！匂うぞ…これ絶対薬草の匂いだ！」

「相変わらずすごい鼻だね」

「つていうか、あんたその薬草の匂い嗅いだことあるわけ？」

「いや、嗅いだことねえけど間違いない。行くぞハッピー！」

「あいさー！」

ナツさんが勢いよく走って行ってしまった…。相変わらず猪突猛进というかなんというか。そしてこのナツさんだけ走って行っちゃうの、なんかデジャヴ。

「ちよ、ちよつとー！」

「つたく、せつかち野郎め」

「とにかくついて行くことにしよう。あいつの鼻は侮れないからな」

「ウエンディは分からないの？」

「そういえばさつきから不思議な香りがするけど…。これがそうかな？」

「何かしら。すごく嫌な予感がするんだけど」

「シャルルの勘は良く当たるもんね」

すでに無自覚で未来予知をしているせいなのか、シャルルは予感とかデジャヴとか、何度もあるらしい。連合軍に参加する時もすごく嫌な予感がするって言ってたし。

「あつた〜！」「あい〜！」

「はやっ…」

「速えことは良いことだ」

「さすがだな」

「ナツさんすごい！」

「まるで野生動物……」

「同感。というより獣ね」

まあそのおかげで早く依頼が達成できるならいいことだけど。と
いうか、シャルルの嫌な予感は何だっただんだろう。珍しく外れたか
？と思ったら、山の頂上に上ったナツさんとハッピーが白いワイバー
ンに襲われているのが見えた。ごめん、シャルルの言うことは正し
かったよ……。急いで頂上へと向かうと、白いワイバーンが依頼の薬草
を守るように立ち塞がっていた。

「まさか、こいつって草食？」

「あの薬草が好物なのね……」

「何っ!?!」「独り占めする気だ!！」

「確かこういうのを一石二鳥とか棚ぼたって言うんだよな……白いワイ
バーンの鱗は高く売れるって知ってたか？」

「よし、薬草ついでにこいつの鱗全部剥ぎ取ってやんぞ!！」

「ここは私達に任せて、ルーシイ達は下がっている。私達があいつの
注意を引き付ける。その隙を窺ってルーシイ達はあの薬草を採取す
るんだ」

「はい!」「仕方ないわね」「なんで偉そうなのさ……」

「ええ!?!なんか一番危険なポジションではないかと……」

「た・の・ん・だ」「ええ、やります喜んで!！」

エルザさんが雷帝の鎧に換装しそう告げる。ルーシイさん、口答え
は無意味です。

「僕も戦闘に参加します!！」

「よし、行くぞ! ナツ、グレイ、ゴーシユ!！」

「おうよ!」「はい!！」

多分ルーシイさんの言うように薬草を採取するのが一番危険だと思
うんだけど、ボコったら終わりだと思っから先にこいつを倒すこ
とにする。それに、こいつの鱗をより多く剥ぎ取っておきたい。早く
マスターや皆に家の件でお礼したいから。

戦闘が始まり白ワイバーンの攻撃を躲しつつ、こっちに注意を逸らすように攻撃しながら、ルーシイさんたちが少しずつ薬草に近づいていくのを確認する。白ワイバーンが空に飛んでいき、ナツさんが追撃する体勢に入る。

「火竜の焔炎！」

「え？」

「ナツさんの炎が！」 「風圧で跳ね返された!？」

デイルフエンド ウォール
「防御結界・壁！」

「ゴーシユ、ありがとう！」

「いいから、早く採取を！」

ま、まさかナツさんの攻撃を撥ね返すとは……このワイバーン、中々強いかもしれない。僕はできるだけサポートに徹するようにしておこう。離れていた方がウエンディたちを守りやすいし。

アイスメイク ソーサー
「氷造形・鋸！」

デイルフエンド スクエア
「また!? 防御結界・立方！」

「これならどうだ！」

「おい……！」 「待てコラ……！」

デイルフエンド ドーム
「ちよつ……！ 防御結界・円蓋！」

「馬鹿者！ ゴーシユに頼るな！ ちゃんと避けないか！」

「つーかあれだな……」 「先に謝れつての！」

グレイさんの攻撃も弾かれたのでそれを横から攻撃してルーシイさんに当たらないようにして、エルザさんの上空からの雷攻撃も白ワイバーンは飛んで回避。今度はナツさんとグレイさんに当たりそうだったのでそれも防いだりと中々忙しい……。もしこれから最強チームと一緒に仕事をすると、周囲への被害やフレンドリーファイアを防ぐことの方が多そうだ……。

「ぐっ！」

「意外と強敵だ……！」

「皆！ よーし、あたしだって負けてられない！」

エルザさんが雷で白ワイバーンの攻撃を防ぐと、また上空へと逃げていく。あいつ、このままヒットアンドアウェイで仕留めるつもりか

!

「デイフエンド トーテム 防御結界・柱……グレイさん！」

「任せろ！オラア!!ナツ、エルザ!今だ!!」

「おうー!」 「任せろー!」

「てやあ!!」 「火竜の鉄拳!!」

グレイさんを狙って降りてきた白ワイバーンの動きを柱で封じ、グレイさんが足元を凍らせて飛ばなくさせる。そこにエルザさんとナツさんの止めの一撃が入った。

「採ったー!!見て見てー!私だって、フェアリーテイル 妖精の尻尾の最強チームの一人なんだからー!……ん?雪崩く!!」

「ルーシイさん! デイフエンド ボックス 防御結界・匣!!」

雪崩に飲み込まれそうになったルーシイさんを覆うように結界を張ったけど、間に合ったのか分からない……。僕はナツさんたちと気絶した白ワイバーンに乗って雪崩をやり過ぎ、ウエンデイはシャルルに抱えられて退避する。

「皆、無事か!?!」

「ウツプ……」

「そりゃあんだだけ暴ればこうなるか……」

「あれ?ルーシイさんは!?!」

「ルーシイさんならさつき雪崩に飲み込まれた。結界が間に合っればその辺に……」

「ルーシイ、どこー!?!」

その瞬間、すぐ近くにルーシイさんの薬草を持った手が現れた。

「さ、寒い……!」

ボックス 匣で多少防げてはいたけど、足元が崩れて結局飲み込まれてしまったルーシイさんの姿があった。

☆

翌日。

「へ、ヘックシー!」

「大丈夫かルーシイ?」

「な、なんとかか…」

花見会場にて、妖精の尻尾の皆で花見をしている。そこには、ルーシイさんの姿もあった。

「ルーシイさん、やっぱり休んでいた方が…」

「だ、大丈夫！ウエンデイにも魔法かけてもらったから平気だってー！」
風邪をひいてしまったけどまだ微熱程度しかなかったからか、ルーシイさんは無理をしてまで参加していた。僕やウエンデイも止めただけど、昨日すごく楽しみにしていたからそこまで強く止められなかった。原作よりもひどくはなさそうだけど…倒れたりしないように祈ろう。

「それではこれより、お花見恒例のビンゴ大会を始めます！」

『ビンゴー!!』

「今年も豪華な景品が盛り沢山じゃ！皆気合い入れてかかってこーい!!」

『おーっ!!』

それぞれで飲み食いしてたけど、ミラさんとマスターからビンゴ大会の開始が宣言され、ほぼ全員が集まっていく。ビンゴの機械も魔法が組み込まれているから、数字が出る時に派手なエフェクトが出る。最初にビンゴになったのは…。

「ビンゴだーっ!!」

「マジか!」「ノリノリだな」

「初ビンゴはエルザね」

「運も修練の賜物だ!で、景品はなんだ!?!」

「はい、コレ!一時的に魔力もアップすると噂の薬草です!」

「何!?!これは私達が採ってきた物…!しかもすでに枯れている…!?!」

「急に暖かい所に持ってきたからかの」

残念なことに、一等はすでに枯れてしまった薬草だった。エルザさんは運があるのかないのか分からないな。枯れていても、お茶に煎じるくらいはできるだろうか?

「ビンゴ!!」

「やりましたね、ルーシイさん!」

「うん！行ってくるね！…ヘックシ！」

「…ルーシイさん、なんかフラフラしてない？」

「うん…。もう休んだ方がいいかも…」

ルーシイさんのビンゴの景品は、光ペン全72色セットだった。リーダスさんが持ってきた物らしい。でもルーシイさんも持っている物が何色かあったらしいので一本もらった。これ、3Dお絵描きとができるのかな？

「ビンゴです！」

「ウエンデイもか…僕も早くビンゴしないかな」

「私は当たらない気がするわ」

「シャルル、ドンマイ…。あ、当たった！」

「最後はゴーシユね！景品は…なんと、アカネリゾート高級ホテル二泊三日のペアチケット！」

「あ、ありがとうございます…こんな豪華な景品、いいんですか？」

「気にせんで良い！お主の運が良かっただけじゃー！」

ま、まさか最後にそんな景品があるとは…！でも、どうしようかな…。これ、期限はないみたいだけど…。まあ、その内使い道があるか。

「ルーシイさん!？」

「おい、しつかりしろルーシイ！」

結局、ビンゴ大会が終わると同時にルーシイさんがダウン。ナツさんとウエンデイがルーシイさんの家まで運ぶことになった。その日の夜、虹の桜の木がマグノリアの川を流れるという不思議な事件が起こった。

第17話 初めての大事な仕事と初めての…？

「うーん…」

「中々これって言うのがないわね」

「確かにね」

「お帰り。もう次の仕事探してるの？ウエンディとゴーシユも大分慣れてきたわね」

「って言っても、この町の中の簡単な依頼しかあんたが受け付けられないじゃないの」

「ちよつとシャルル！」

前の仕事が終わってすぐにまた別の仕事を探していると、ミラさんに声をかけられた。まあシャルルの言う通り、誰かと一緒にでない限りはそういった仕事ばかり。簡単な仕事ばかりだとお金が全然貯まらないから早く大きな仕事をしたいなと思うことが多い。

「でも、小さな仕事で経験を重ねるのも大事だと思うから」

「でもよ、そろそろでつかい仕事やってみてもいいんじゃないか？」

「だな。遠くの町からの依頼とか」

「私、早く大きな仕事が出来るようになって皆さんのお役に立ちたいんです！」

もちろん僕だってそうだ。…借金が全部返済できれば、そう心から思えるんだろうなあ。

「皆の役に立ちたい、か」「頑張れよ」

「こういう素直で健気な子を見ると、応援したくなるねえ」

「頑張ります…！」

皆に褒められて少し照れてるウエンディ。そしてカナさん、あなた言っていることが大分年上のお姉さんになつてますよ？確かまだ十代では？ちなみに、この国では15歳以上で飲酒できるのでカナさんは十代で立派な酒飲みだ。

「でも、留守にしている奴らが帰ってきたら驚くだろうなあ。こんな小さな子たちがいて」

「だな、ギルダーツとか」

ギルダーツという人物の話題になり、ナツさんとカナさんが少し暗い顔になる。ナツさんは彼のことを第二の父親みたいに思っていただろうし、カナさんにとつては実の父親なんだから三年も帰ってこなかったらそういう表情になるのも仕方ないだろう。

というかりーダスさんの言葉で思ったけど、僕もウエンディと同じく小さな子なんだろうか？確かにウエンディと身長は同じくらいだけどその内大きくなるし。なんだろう、前世は身長が180くらいあったからあんまり思ったことがなかったけど、身長が小さいことがここまで悔しいことだとは…。

「そういえば、丁度良い仕事があるわよ。心を癒してくれる魔導士を探してるんだって。報酬はそこそこだけどピッタリじゃない?」

「何々?…オニバスの町か」「どんな依頼だ?」

「えつと、ありがとうございます…?」

ウエンディが依頼内容を読み上げていく。どうやら劇団?をやっている人らしく、役者たちに逃げられて心が廃れてしまい元気つけてほしいんだとか。いきなりお礼とは、変わった人だな。ナツさんたちはどうやらこの依頼主と以前会ったことがあるらしく、止めた方がいいと言われたけど…。駄目だ、ウエンディは諦めていない。

「私も反対よ。嫌な予感もするし」

「シャルルの予感は良く当たるけど…。でも、私で役に立てるなら…」
「ウエンディ、僕も他の仕事の方が良いと思うよ?ナツさんたちの話だと厄介な人みたいだし」

ナツさんたちはブンブンと首を縦に振っているので間違いないだろう。余程こき使われたんだなあ…。初めての大事な仕事そんな面倒な人じゃなくても良いと思う。というか、普通の依頼人だったら何でもいい。

「あんたは人が良すぎるのよ。大体、行ったこともない町で大きな仕事なんて、あなたにはまだ無理よ」

「そんなことない!私だってちゃんと依頼を果たして見せる!」

「なら、好きにするといいわ!私について行かないから!」

「ちよつとちよつと!なんであんたたちが喧嘩になるの!?!」

「あく…。放っておいて大丈夫です。いつものことですから」

いつもこんな感じで喧嘩するけど、少しするとまた仲直りしてるんだよね、この二人。どっちが謝ったわけでもないのに仲直りしているから不思議なんだよな。大半は僕が仲裁に入ればそこまで大きな喧嘩になることはないんだけど、今回はもうシャルルがウエンデイの地雷を踏んでしまう発言をしたから手遅れ。僕が仲裁に入っても意味はない。ウエンデイは自分にはまだできないと誰かに言われると、むきになってしまうことが結構あるからね。

「私…このお仕事、引き受けます!!」

「ちよつと待って、まさか一人で行くつもり？」

「はい！何事も経験ですから！」

「待て待て！ウエンデイもようやくこのギルドのやり方に慣れてきたばかりじゃ。いきなり一人で遠くにやるわけにはいかん！前も行ったことがある者、そうじゃな…。ハッピー！」

「オイラ!？」

「うむ…それにフリード！お前も手が空いておったな？ついて行ってやれ！」

「マスターのご指示とあれば」

『なんでフリード!?!』

「あの…僕は？」

完全に忘れられている気がする。

☆

「それじゃあ、行ってきます！」

「マジで気をつけな！」

「フリード、ウエンデイのことちゃんと守ってあげてよ？」

「心配は無用だ。任せておけ」

「必要以上の手出しはいかんぞ。ウエンデイの勉強にならんからな。そっちも同様になー！」

「はい、分かっています」

ウエンデイはオニバスへフリードさんとハッピーと一緒に、僕はア

ルザックさんとビスカさんと一緒にガルナ島という島へと行くことになった。ウエンデイの依頼は依頼人を励ますことで、僕の依頼は島民たちの安全確保だ。

シャルルはウエンデイが心配そうだったので誘わないことにした。まあマスターの判断で、あまり同じ人とはかり依頼に行くのは良くないとのこと、一緒に仕事をしたことがない人と組むようにと言われていたからこの組み合わせになったんだけど。

「それじゃ行ってきます。ウエンデイも気をつけて」

「ゴーシユも気をつけて。お互い頑張ろうね！」

「うん！」

ウエンデイとハイタッチした後、それぞれ出発する。ウエンデイたちは駅へと向かい、僕達はまず港町のハルジオンへと向かう。今回は僕らの依頼は、島民の安全確保。つまり戦闘系の依頼だ。

☆

ガルナ島は以前ナツさんたち最強チームがS級任務に勝手に行った島で、グレイさんの兄弟子であるリオンさんが月の雫ムーンドロップの実験を行っていた島だ。島民の皆が人間に変身する魔法を扱う悪魔で、呪われた島という噂もあるが実際は平和な所らしい。

この島での依頼は、島民の安全確保。ここ数週間で何度もトレジャーハンターがやってきていて、月の雫ムーンドロップの在り処について何度も聞いてくるので困っているそう。なんでも恐喝紛いのことをしてムーンドロップくることが多く、怪我をした人も少なくないんだとか。どうやら月の雫は相当レアなお宝らしい。

「そのトレジャーハンターがやって来るのはいつ頃なんですか？」

「奴らはいつも夜にやって来る。俺達は悪魔だから怪我をしてもすぐ治るけど、彼らには手を焼いている状況だ。是非とも、またあなたたち妖精フェアリーテイルの尻尾の力を貸してくれ」

「分かりました！依頼を引き受けたからには、しっかりとこなしますー！もうすぐ日が落ち始める頃合だ。奴らも何度も島と港を往復しているわけじゃないだろうから、きつとこの付近に仮拠点のようなもの

があるはず。探し出して止めさせなくては。それにしても村長の息子さんがいてくれて本当に良かった。村長さんとは本当に話ができなかった…。なんかずつと月を壊してくれとかそんな話ばかりだ。多分まだ混乱が残っているんじゃないだろうか？

「アルザックさん、ビスカさん。これから周囲を手分けして探ろうと思っんですが」

「奴らを見つけたらどうするの？」

「二人は信号弾のようなものはありますか？」

「ああ、持ってるよ。ゴーシユの分も貸そうか？」

「ありがとうございます！それじゃもし緊急事態になったらそれを打ち上げましょう。でもまずは奴らを見つけ出します。もし見つけても攻撃しないで、日が沈む頃にまたこの村へ集まりましょう」

「分かった。それじゃ探す範囲を決めようか」

三人で簡単に打ち合わせをして、それぞれ担当した方角を搜索し始める。僕も漫画で見たことがある場所だし、月の雫は確か岩山の方で行っていたはずなのでそっちの方角を探索してみる。：あれ、違ってたっけ？もうこの世界へ来てから7年、正直言って前世の記憶が薄れている。前世の自分の話し方とかも分からないし、アニメとかもじっくり見返したわけじゃないからガルナ島での話はほとんど覚えてません。

「…あれは…」

岩山の麓って言えばいいのだろうか…。登り口と言える場所に五人ほどこいる。近くに剣とか槍とかもあるから、多分あれがトレジャーハンターだろう。腕とか肩とかに同じ紋章があるから、ギルドに属しているのか。

うろ覚えだけど、原作でナツさんたちが太陽の村に行った時にトレジャーハンターのギルド、風精シルフラピリンスの迷宮と戦っていた。武器になんか特殊な能力がついていたりした気がする…。これは打ち合わせ通り、一度村に戻ってアルザックさんとビスカさんに合流した方がいいな。

そうだ、向こうはこっちに気付いていないんだから、術式を書いておいて動きを封じておけばいいか…。よし、そうと決まれば早速書い

ていこう。奴らが動くのは夜だし、まだ時間はある。まだ簡単な術式しか書けないし遅いけど間に合うはず。

☆

術式を一時間くらいかけてようやく書き終わり、村に戻ることにした。集合時間まであともう一時間くらいあるので、やっぱりまだ二人は戻ってきていなかった。まあ、それは予想していたことなので問題ない。なんで奴らを監視せずに村に戻ってきたかというところ、一つは他に仲間がいなかったか確認する為。いるとしたら偵察している奴がいるんじゃないかと思った。もしくは、先に月の雫ムーンドロップを探している人達がいるんじゃないかと思う。僕は出会わなかったから、アルザックさんかビスカさんが出くわしているんじゃないかな。

もう一つは……滅悪魔法の手がかりがないか探す為だ。

「ゴーシュさん！奴らは見つかりましたか？」

「ええ、まあ……。動きを封じる魔法を気づかれないうちに書いてきたので一先ずは大丈夫だと思います。後は二人と合流してから行動します」

「そうですかー！さすが妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士ですね！」

「あの、少し村の中を見て回ってもいいですか？実は僕、まだまだ見習いのようなものでして……。出来れば、魔法についての詳しい資料とかあれば嬉しいのですが」

「もちろん構いませんが……。ただ、この村の歴史なんかも記載されている書物もございますので、私も同行させていただきますのでよろしいですか？担当している者に話を通しますので」

「分かりました、よろしく願いますね」

「では、こちらへどうぞ」

今回の依頼主であるボボさん（村長の息子さん）とそんな会話をし、アルザックさんとビスカさんを待つ間に図書館？に案内してもらうことにした。実際迷ってしまうこともあり得たから、ボボさんがついてきてくれるのは助かる。間違って閲覧禁止の本を読んでもうとか嫌だし。

「ここが村中の書物が収められている建物です」

「他の家と変わらないんですね…」

外から見ても違いが分からない…。きつと、カモフラージュだと思う。今村を襲っているトレジャーハンター達みたいな連中から村の情報を守る為だろうな。悪魔の村の書物というだけで物珍しさに狙う奴はいるだろうし…。

中に入ると、思ったよりも図書館風だった。入り口の所に司書さんみたいな方がいたので、ボボさんが話を通してくれた。ボボさんは村長の代理としての仕事があるらしいので帰って行った。

「魔法関連の書物はこちらですね」

「ありがとうございます—」

「いえいえ、私は近くにいますので何か聞きたいことがありましたら私に声をかけて下さい」

司書さんはそう言うときまた元の位置に戻っていった。さて、何か有力な手掛かりがないかな…。

なんで滅悪魔法について知りたいと思ったのかというと、冥府タルタロスの門編とかアルバレス編とかで出てくる魔障粒子対策が必要だと思ったから。魔導士にとって魔障粒子はまさに毒そのものだ。しかもウエインデイみたいな治癒の魔法でも治せない。でも、グレイさんの氷の滅悪魔法で空気中の魔障粒子を凍らせることができた。

このガルナ島は悪魔が住む島。もちろんエーテリアスではないけれど、彼らも一応は悪魔だ。ここなら、滅悪魔法について知ることが出来るかもしれない。ただ問題は、僕がそれを使いこなすことができそうにないこと。だからせめて滅悪魔法について知って、似た特性を持った結界を作れば…。

「意外と多いな…聞いた方が早いかな？」

思っていたよりも魔法に関する書物が多い。多分これら全てを読むのは一日かけても無理じゃないかな…？よし、聞こう。悪魔の人に滅悪魔法とか聞いて大丈夫なのか分からないけど、このままじゃ日が暮れる。

☆

30分後。まさか本当に滅悪魔法の情報を手に入れることができるとは…。しかも別の使えそうな魔法もいくつかあった。さすがにもらったりは気が引けたので、その本の内容を頑張っつて覚えた。たつた一つだけだったけど、十分十分。問題はどうかやっつて習得するか…。僕が習得するのは、多分無理。結界魔法だけで手一杯だし、術式も使えるようになったからそっちを使いこなしたい。かといって習得しないままにするのはなあ…。誰か覚えられそうな人、ギルドにいたかな…？

「ゴーシュ、ここにいたのね」

「ビスカさん！早かったですね」

「ええ、怪しい奴を見つけてね。捕まえてきたの」

ビスカさんに引きずられて現れたのは、金髪のショートヘアな少年だった。ビックリしたのはその幼さ。どう見てもまだ10歳にも満たないと思えるほど幼い顔立ちだし、ロメオ君と同じくらいじゃないだろうか？そして、何よりすごく怯えていた。ビスカさんを思わず見つめてしまったけど、首を横に振っている。そして彼の右腕には、僕が見つけたあの岩山付近にいた連中と同じ紋章がある。

「この子は、どこで捕まえたんですか？っていうか、滅茶苦茶怯えられてますけど…？」

「村の方でウロウロしていたのを見つけてね。トレジャーハンターのギルド、シルフラピリンス風精の迷宮の紋章があるから当事者だと思って銃を構えたら、ずつとこの様子でね…」

なるほど。どうやらこの子はまだ見習いなんだろうな。銃をとうか、武器を自分に向けられるのも初めてなんじゃないかな。なんだか、前世で銀行強盗とかに人質にされた子とかがこんな表情してそうだな。っていうか、これがシルフラピリンス風精の迷宮の紋章だったのか。

「…君、名前は？」

「ひっ…!!ど、どうか命ばかりは…!!」

「大丈夫。僕らは別に君を傷つけようとしているわけじゃないんだ。まずは、深呼吸して」

「え…う、うん…。すうー、はあー…」

良かった。まだ幼いからか、今日会ったばかりの僕でも言うことを聞いてくれた。…でも、何回するんだろう？深呼吸してとは言ったけど、これももう10回ぐらいやってない？

「落ち着いたかい？」

「あ、は、はい！」

「えつと…。まあいいか。僕はゴーシユ、フェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士。君は？」

「妖精の尻尾の…!?ぼ、僕はイーロンって言います！僕、フェアリーテイル妖精の尻尾の大ファンなんですっ!!」

「え？」

「サイン下さいっ!!そつちの銃のお姉さんもぜひっ!!」

「え、ええ…」

急にハイテンションになったな、この子。まあでもそういう人はたまにいる。僕も前にエルザさんの付き添いで行った依頼先でエルザさんがそういうフアンの人に囲まれていたのを眺めていた経験がある。実際僕もこのギルドに入っていなかったらフアンの人達に混ぜられていたかもしれないし。

「えつと、とりあえずそれは後にして…。君、シルフラピリス風精の迷宮のメンバーだよね？」

「あ、はいっ！って言ってもまだ下っ端なんですが」

「実はこの村の人からの依頼だね。トレジャーハンターが恐喝紛いのことをしてきて困っているからどうかしてほしいっていう依頼で僕達は来たんだ」

「あ…：そ、それは多分、僕達のことです。…：す、すみませんっ!!」
「いや、僕に謝られても…。謝るなら、ちゃんとこの村の人に謝ってほしいんだ。もちろん、君と一緒に来た人たちもね」

多少怪我人が出ているけど、まだそこまで大事には至っていない。僕達の依頼はあくまで村の人の安全を確保することで、トレジャーハンターたちを倒したり捕まえたりが本来の目的ではないんだ。だから、彼らがここでの活動の仕方を改めたりお宝を諦めてくれればそれ

で済む話だと僕は思う。

「えっと、それが、その…先輩方は、ギルドで一番の問題児って言われてまして、ちよつとそれは難しいんじゃないかと」

「よし、じゃあ悪いけど君たちを評議員に突き出すから」

「えっ!!?そ、それはご勘弁をっ!!」

評議員は魔導士関連のことにしか首を突っ込まないかと言われるばそうでもない。今回みたいに魔導士ギルドが依頼を受けて、その解決の為に加害者を捕まえるというのは意外とよくある話。捕まえられたのがギルドのメンバーだったら、そのギルドの評判はガタ落ちだろう。

「そもそも、君はなんでそいつらの仲間になつてているの？話している印象だとそんな横暴なことしないと思うんだけど」

「それはっ…。僕、本当は魔導士になりましたかっただんです。でも、先輩達が魔法に詳しい奴は使えるからって、無理やり入れられて…。いつも、こんな見張りとか偵察とかに行かされてて…!」

…そうか。この子を見てるとなんだかほつとけない気がしていたけど、以前の僕に似てるんだ…。前世の頃、自分の意志表示も出来ずにいた学生の頃の自分に。遠い記憶だけど、この子を見てふと思いつ出した。…っやっぱり、ほつとけない。

「…ビスカさん、アルザックさんが戻ってきたらこの子の仲間の所に行きましょう。僕がもう術式を張ってるんで捕まえたも同然ですから」

「そうね」

「お、お願いですっ!どうか、評議員に突き出すのだけは…!」

「ずつとそうやって怯え続けるつもり?」

「…!?!」

「君が本当にやりたいことを、やってもいいんだ。嫌なことは、嫌つて言っているんだ。その先輩って人がどれだけ恐ろしくても、自分が今に満足していないのなら声を出すんだ。じゃないと、何も変わらない。…言いたいこと、分かるかい?」

「……………はいっ。僕、先輩達にちゃんと伝えます!ちゃんと、声を

出して、自分の気持ちを、正直に！」

「ちよつと……行つちやつた……」

「すみませんビスカさん、僕先に行きます！」

「ゴーシュ!？」

あの子がちやんと言えるのか、傍で見えてあげたくなつた。焚きつけちゃつたのも僕だしね。

☆

さつきの場所へ行つてみると、術式に囲まれて身動きがとれなくなっているトレジャーハンターたちと術式の外で彼らを見て震えながらも向き合っているイーロン君がいた。

「おい、イーロン!! さつさとこの魔法どうにかしろよ!!」

「む、無理ですよっ！これは術式といって、そんな簡単に解除できるものじゃ……」

「はあ!? 使えねえなお前!! さつさと解除しねえとぶちのめすぞ!!」

「早くしろよ泣き虫野郎が!!」

あいつら……。同じギルドの仲間なのに何言ってるんだ。早く出て行って僕がボコボコにしてやりたい……でも、まだだ。彼がちやんと勇気をだせるまでは我慢だ我慢。

「そ、そんな……」

「おい、てめえをギルドに入れてやったのは俺だよなあ？ 恩返ししてくれるんだよなあ？」

「………ぼ、僕は、こんなギルド入りたくて入ったんじゃないっ！も、もう、もう、お前らの道具になんてなりたくないっ！僕は、フェアリーテイル妖精の尻尾に入るんだっ!!」

フェアリーテイル「妖精の尻尾……お前がねえ。いや、無理だろ」

「えっ……!？」

「お前みたいな泣き虫が暴れん坊集団の魔導士ギルドに入れるわけがねえよ。もしギルドを止めたとしてもお前は孤兒なんだ、生きていけるわけがねえだろうが」

「そ、そ、そんなこと……」

「無理なもんは無理。いいからさつさと——」

防御結界・柱がさつきまで罵っていた恐らくこのグループのリーダーであろう男の顔面に直撃する。もちろん男は気絶。他の奴等やイーロン君もポカーンとしている。

「よく頑張ったね、イーロン君」

「ゴ、ゴーシュさん：!？」

「お前たちに言いたいことが三つある。まず一つ、この村の人達を傷つけすぎた。僕達魔導士ギルドに依頼まで出ているほどだ。評議員に捕まることは覚悟しておいて。次に二つ目、お前たちは偉くもなるともないんだから偉そうにするな。少なくとも今の状況でイーロン君に怒鳴り散らす行動はただのバカだ。そして三つ目。……同じギルドの仲間も、もつと大切にしろよ。……って、その気絶した男にも伝えておいてね」

その後アルザックさんとビスカさんとも合流した後、評議員に彼らを任せて僕達はボボさんから報酬を受け取ってギルドへ戻ることになった。そして——

☆

「……大丈夫？」

「は、ははは、はい！ たた、ただ、きき、緊張してしまつてっ……」
帰りの船の上、僕らの他にイーロン君も船に乗っていた。あの風精の迷宮のメンバーを評議員に引き渡した時には僕のことを怖がっていたけど、今はなんともない……のかな？ 緊張しているのが大きいのは分かる。

「ほほほ、本当にいいんですかね、僕なんかあの妖精の尻尾フエアリーテイルに入つても……？」

「もちろん。妖精の尻尾のマスターもきつと良いつて言ってくれるし、皆良い人ばかりだから安心して。……ちよつと喧しいくらい賑やかだけど」

僕は今回の初仕事、成功なんだろうか……？ 最後は合流していくべきだったと自分でも思う。二人にも怒られちゃったし……またしばらく

は一人で大きな仕事は無理かな。

そういえばなんだけど、一応月の雫ムーンドロップも探してみたんだけど見つからなかった。風精シルフラベリンスの迷宮がいたからてつきりこの島で手に入れたんだと思っていたんだけど…。どうやら違ったらしい。

「でも、本当に「良いって。来るんでしょ？妖精フェアリーテイルの尻尾に。じやないと、何の為にギルドを抜けてきたのさ」…！は、はいっ！」

正確に言うといーロン君は風精シルフラベリンスの迷宮の見習いってことでまだ正式にギルドに入ってはいなかった。紋章もただシールを貼っていただけだし、さつき通信用魔水晶ラクリマでマスターに連絡をとっていたけどあっさり許可してくれたって言ってたし。なんか謝罪もされたって言うってたか。本当に問題児の集まりだったんだらうなあ、彼ら。

「これからよろしく、いーロン！」

「これでまたギルドもより賑やかになるわね。あなたと同じくらいの子もギルドに出入りしているの。ロメオって言ってね、きっと仲良くできると思うわ」

「は、はいっ！よろしくお願いします、アルザック兄さん、ビスカ姉さん！」

「そんな堅苦しくしなくても…」

「それはゴーシュには言われたくないと思うよ」

「そうね」

「そうですかね？」

「ゴーシュの兄貴も、よろしくお願いします！」

「兄貴…？」

こうして初めての大事な仕事が終わり、初めての後輩ができました。

第18話 ロードレース

ウエンデイの方も初めての大事な仕事が無事に終わったようで、皆に褒められていた。どうやら、心配してついでに行ったりした人が何人もいたようだけど、結局ウエンデイが一番役立っていたらしい。なんでもダウンした人が結構いたとか。…元々は依頼人を励ましてくれて、という依頼だったような…？

イーロン（君付けは止めてくれて言われた）もまだ仕事はできないけど妖精の尻尾の仲間として迎えられた。今は僕の家と一緒に住んでいる。すごく舎弟みたいな動きをすることがあるのでそれは止めるように言っているんだけど…。しばらくは直らないかもしれない。もしかしたらずっとこのままかもと思いはじめたので、少し諦めかけている。

で、僕らが帰って来て数日後。

「本当にこのギルドはイベントが多いね…」

「でも楽しそうだよ？」

「兄貴ーっ！頑張って下さーいっ！」

僕達妖精の尻尾の魔導士全員が、虹の桜の木の前に集まっていた。今回は大きなゲートのようなものが設置されている。そのゲートには、24時間ロードレースと書いてある。実況に週刊ソーサラーの記者のジェイソンさんがいて、すごいハイテンションな実況をしている。そして今回、イーロンは参加していない。まだ見習いだし、魔法が使えないのに魔法使用可能のこのレースに参加するのは危険だからね。僕はイーロンに向かって手を振って応える。

このレースは毎年、チームシャドウギアの一員であるジェットさんが優勝しているらしい。仕事じゃ冴えなくてもこれでチャラとの噂とか、ジェイソンさんがただの誹謗中傷をしている。…まあ、あんまり冴えないのは事実だとは思うけどね。

「それにしても、随分気合いが入ってるんだね皆」

「オスネコの話だと、罰ゲームがあるらしいわよ。去年は酷かったて」

「罰ゲーム…!？」

「まあビリにならなきゃいいんだよ、きつと」

『静かにせえい!!妖精の尻尾フェアリーテイルの諸君!知力・体力共に強くあつてこそ魔導士だ!今日は存分にそのパワーを競い合つてほしい!』

「知力なんかいるかあ?」「どう考えても体力だけだよなあ」

確かに。エルフマンさんとグレイさんの言う通り、今回は体力だけだと思ふけど…。何かクイズみたいなのあるのかな?

『ルールは簡単!ここをスタートした後に決められたコースを激走し、イボール山を目指せい!今回は頂上に、ワイバーンの鱗を置いておいた!この鱗を持って24時間以内に折り返してここに戻つて来るのじゃ!脱落は認めんぞ?妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導士たるもの、完走してこそ明日の仕事につながるという物じゃ!』

…あの、完走して次の日の体力残っているんでしょうか?イボール山つて結構遠かつたような気がするんですけど。

『さらに、多くの魔導士の要望を受けて新たなレギュレーションを設けた。それが飛行魔法の禁止じゃ!それ以外の魔法は使用無制限じゃ!』

ハッピーとシャルル、あとエバーグリーンさんは渋い顔してそう。エクシード達は飛べなくなったら大変だろうな。完走できるのかな? ?

『例によつて、最下位になつた者には世にも恐ろしい罰ゲームが待つておるぞ!!』

内容は教えてくれないのか…。どんな罰ゲームでも、最下位にならなきゃいいんだ。絶対最下位にはならないようにしなくては!

『それでは、いよいよレーススタートだ!全員、スタートラインについてくれ!』

「ウエンデイ、早く行きなよ」

「うん!それじゃあ、頑張ろうね!」

ジェイソンさんの声で、僕らはスタート準備に入る。それにしても、妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導士つてこんなに多かつたっけ…。随分と多く感じるんだけど。それにしても、運がないなあ。僕はスタートラインか

らずつと後ろの方から。こればかりはくじだから仕方ないけど。ウエンデイとシャルルは最前列なのに…。

『よーい、ドン！』

「うわっ!？」

マスターのスタートの掛け声と同時に前方で砂煙が上がる。というか、前の方の人達が全員吹っ飛ばされた!？」

『スタートと同時にぶっちぎったのは、今年もジェット!!』

あ、これジェットさんの仕業なのか…。これ、自分は最速で進める上に他の人の妨害もできるって、レースだと反則的すぎないか…？

「うおおっ!!」

「ナツさん!？」

「どうだ、見たか！これぞ秘密兵器、火竜の鉄拳ブースターだ!!」

…ただ忍者走りで、両手に火を灯しているだけにしか見えないけど確かに速い！ジェットさんの後に続いて一気に進んでいっている。急がないと、他の人に先を越される可能性の方が高い！

「ウエンデイ、シャルル、お先!」

「ゴーシュ!？」

「結界でさっきの防いでたのね…」

シャルルの言う通り、さっき砂煙が巻き上げられた瞬間にディフエンド ウォール防御結界・壁で守っていた。ほとんど反射で出していたけど、おかげでナツさんに続くことができた。

すぐ後ろには 그레이さんやエルザさんがいる。僕はそこまで足が速くないからすぐに抜かされてしまおうけど、頑張って走って行こう。

☆

アイスメイク フロア
「氷造形・床!」

「うわっ!」

町を抜けて岩場に入ったあたりから、皆が妨害を開始する。リーダーさんがピクトマジック絵画魔法で落とし穴を書いていたけど、ガジルさんがリーダーさんをその落とし穴に突き落としとしていた。その後に 그레이さんが

地面を凍らせてきて、僕はそれを回避できず転んで滑っていく。

「ゴーシユも皆も、悪く思うなよー」

「ピーストアーム！うおらあっ!!」

「ぐはっ！」

「グレイ様!?!」

グレイさんが先にスケートのように滑って行ったと思ったたら、エルフマンさんにリアットされて戻ってきた。そのままかなり後ろの方まで滑って行ったようだ…。これが、策士策に溺れるってことか。

「…！今度は、術式？」

「その通りだ」

「フリードさん！」

「本来ならここでは知力を試す所だが…。ゴーシユ、お前は自力で術式を解いてみる。今のお前になら可能なはずだ」

「ちよ…！ああ、くそ！」

フリードさんはそれだけ言うと言った。いくらマスタワーが知力と体力って言うていたからって、ここまですなくても…。術式に引つかかってしまったものは仕方ない。それに、これは新しい結界を試すいい機会だ。

☆

スタートから半日が経過。森を抜けて岩山を進んでいく。新しい結界も無事に完成させることができたし、少し時間がかかったけど抜け出せてよかった。皆もう頂上に着いている頃かな？

「見えた！あれがワイバーンの鱗！」

何とか手に入れられた…。よし、あとは降りるだけか。ここから浮遊結界で行きたいけど、そもそも飛行魔法は禁止だしなあ…。そう
だ！

「弾性結界！」

弾性結界を空中に作っていき、それを足場にして進んでいく。これなら飛行しているわけじゃないから問題ない！遅れを一気に取り戻さなくちゃ！どうせだから麓の森の出口までこれで行こうっと。

☆

一夜明けてほぼ全員がマグノリアに入った頃、僕はトップ集団には入れなかったけど、何とか中間くらいには入っていた。トップはナツさん、グレイさん、ガジルさん、エルザさん、そしてなぜか後ろの方からやって来たジェットさんが争っていた。

「ウエンデイ！シャルル！」

「ゴーシユ！後ろにいたの？」

「いや、まあ…二人とも、速いね」

「妨害を一度も受けなかったのが幸いだっただわ」

そしてトップ集団がゴールしようという所で、誰かが転んだのか五人全員クラッシュ。そこにやって来たのは…まさかの、ハッピーだった。続いて、ウエンデイとシャルル、その後に僕がゴールした。よし、これで最下位は阻止！ショットカットができたのが良かったみたい。

結局、最下位は元々のトップ集団からエルザさんを除いた四人だった。彼らの敗因は、ハッピーが優勝したことに気を取られてゴール直前で硬直し、罰ゲームを逃れようと必死になって走ってきた後続メンバーたち全員に足蹴にされたことだった。罰ゲームは…再来週に発行される週刊ソーサラーで超恥ずかしいグラビアを飾ること、らしい。良かった、本当にビリにならなくて。罰ゲームを聞いた四人は、走り去ってしまった。そりゃ逃げたくなるよね…。

第19話 ギルダーツ登場！ハートクロイツ社へ
GO？

「ウエンデイたちも大分このギルドに慣れてきたみたいね」

ウエンデイとシャルル、イーロンと一緒にギルドの一角で話していると、ルーシイさんからそんな言葉がかけられる。

「はい！」

「女子寮があるのは気に入ったわ」

「ぼぼぼ、僕はまだそこまではっ…！」

「僕達より後だからね」

相変わらず緊張で言葉が詰まるイーロン。数日しか経っていないからか、ギルドのメンバーでまともに話せるのは僕とウエンデイ、あとはハッピーとシャルルにロメオ君くらいか。やっぱり同年代だと話しやすいんだと思う。

「そういえばルーシイさんはどうして女子寮じゃないんですか？」

「女子寮の存在、最近知ったのよ。ってか、寮の家賃って10万Jなのよね…。もし入っていたら払えなかったわ今頃」

あれ、ルーシイさんが女子寮の存在を知っているってことは、OVAの話があつたのかな？まあ女子寮での話だから、男の僕は関われないししようがない。そういえば何日か前にギルドについているプールで覗き穴が見つかったって誰かが言ってたっけ。

「た、大変だ!!」

「何？」

「鐘の音？」

「ななな、何が起きるんですかっ!？」

「イーロン、落ち着いて」

入り口の方からそんな叫び声が聞こえたと思ったら、町の方から鐘の音が聞こえてくる。しかも鳴らし方が変。意図的に鳴らし方を変えているみたいだ。これは、ついに…!-

『ギルダーツだあっ!!』

「ギルダーツって…。あたし、会ったことないんだけど何者なの？」

ギルドの皆がそう叫び、乾杯している。ルーシイさんが知らないから、ウエンデイとシャルルとイーロンも何が起きているのか分からない。僕は内心では同じように騒ぎたいけど我慢している。ついに、あのギルダーツさんに会える…。ギルド最強の男に直接会えるのを、実は結構楽しみにしていた。

「…ゴーシユ?どうしたの?」

「え…?」

「なんかニヤけてるけど…」

「そ、そんなことないよ?」

「兄貴って表情に出やすいんですねっ!」

いかんいかん、どうしてか僕は表情に出やすいらしいから、気持ちをもっと抑えるようにしないと。

「どうでもいいけど、この騒ぎようは何?」

「お祭りみたいだね、シャルル!」

「ホント騒がしいギルドね」

「皆が騒ぐのも無理がないわ。三年ぶりだもん、帰って来るの」

「三年も…?そのギルダーツって人、何してたんですか?」

「S級クエストの上にSS級クエストっていうのがあるんだけど、そのさらに上に10年クエストって呼ばれる仕事があるの」

「10年クエスト?」

「10年間、誰も達成した者はいない。だから10年クエスト。ギルダーツはさらにその上、100年クエストに行っていた」

「100年クエスト!?100年間、誰も達成できなかったってこと!」

僕からすれば途方もない話だ…。S級やSS級のクエストが軽く思えてくる。S級を受けられる魔導士の少なさを考えれば、10年クエストと100年クエストがどれだけ困難なのか、それに行くことができる魔導士のすごさが分かる。

『マグノリア、ギルダーツシフトに変えます。町民の皆さん!速やかに所定の位置へ!』

「それにしても、騒ぎすぎじゃないかしら?」

「なんでだろう?」

「マグノリアのギルダーツシフトって何?」

「外に出てみれば分かる」

外に出てみると、建物が地面ごと移動していく。しばらくすると、マグノリアがきれいに真つ二つに割れてしまった。でも、いくらギルダーツさんがクラッシュユ——触れた物を粉々にする魔法を使うからってこれはやりすぎなのではないかと思っちゃうけど…。こんな大工事をするお金より、ギルダーツさんが壊した物の修理費の方が高かったんだろうなあ。

町が割れたことよってできた道を、ゆつくりと歩いてくる人影が見えてきた。数分すると、入り口にギルダーツさんがたどり着いた。

「ふう…」

「ギルダーツ、俺と勝負しろ!」「いきなりそれかよ!」

「お帰りなさい!」

「お嬢さん、確かこの辺に妖精の尻尾フェアリーテイルってギルドがあつたはずなんだが」

「ここよ。それに私、ミラージェーン!」

「ミラ…? おおー、随分変わったなお前! っていうか、ギルド新しくなつたのかよ!」

「外観じゃ気づかないんだ…」

ま、まあ三年もいなくなつたらそうなる…か? 外に妖精の尻尾フェアリーテイルの紋章があるから分かるはずだと思うけど…。それだけポーっとしてたつてことなんだろうか。だったらどんだん町が壊れていくのも納得か。それで町を改造するのはおかしいとは思うけど。

「ギルダーツ!!」

「おお、ナツか! 久しぶりだな!」

「俺と勝負しろって言ってるんだろー! …ぐはっ! どわあっ!？」

「また今度な」

飛び掛かつたナツさんを片手で受け止めて、そのままナツさんをぐるぐると回して天井にぶん投げた…。あのナツさんが軽くあしらわれるなんて、実際に目で見るとやっぱり驚く。ナツさんはナツさんで

笑ってるし。

「あ、あ、あの人、サラマンダー火竜のナツ兄さんを、片手でっ……！」

「……イーロン、君はまずその上がり症をどうにかしなきゃね」

「変わってねえな、オツサン！」

「漢の中の漢!!」

「いやあ、見ねえ顔もあるし本当に変わったな……」

「ギルダーツ！」

「おお、マスター！久しぶり！」

「仕事の方は？」

「ん……ガハハハッ……！駄目だ、俺じゃ無理だわ」

「あのギルダーツが……」「クエスト失敗!」「嘘だろ……」

「オツサンでも駄目なのか……」

ギルダーツさんの失敗の報告に皆驚いている。僕も原作知識だけど、ギルダーツさんの強さを少しは分かっているつもりだ。あのギルダーツさんでも無理だった100年クエストって、どういうものなのか……。そういえば、原作でも語られていないような。そしてルーシイさんがエルザさんに注意されている。まあ前科があるから仕方ないのかな……？

「そうか、お主でも無理か……」

「すまねえ。名を汚しちまったな」

「いや、無事に帰ってきただけで良いわ。儂が知る限り、このクエストから帰ってきたのは主が初めてじゃ」

「俺は休みてえから帰るわ。ふいふ疲れた疲れた。……ナツ！後で俺ん家来い。土産だぞ！じゃ、失礼」

ギルダーツさんが壁に向かっていたので、僕はギルダーツさんの前に行つて目の前を塞ぐ。いきなり出てきたからか、ギルダーツさんは驚いていた。

「なんだ？お前も見たことねえ顔だな」

「ゴーシユールガードナーです。最近このギルドに入れてもらいました」

「そうかそうか！いいギルドだろう？」

「はい、すごく楽しいギルドです。…あの、入り口はそつちですよ?」
「ん? おお! すまんすまん、また壁を壊しちまうとこだった。サンキューな!」

「いえいえ」

ギルダーツさんが入り口から出て行った後、僕に向かって皆が迫ってきた。

「ゴージュ! お前、あぶねえことすんじゃねえ!」

「へ?」

「クラツシユのことは話したろう!」

「ギルダーツの目の前に出るとか、粉々にされちまうぞ?!」

「…なるほど」

グレイさんやエルザさんがそう言うのだからそうなんだろう。僕は単純に壁を壊しそうだったから教えてあげるだけのつもりだったんだけど…。周りから見たら自殺行為だったらしい。これまでは暗黙のルールで周りが気を遣っていたんだ?

「土産って何かなく、楽しみだな! 行くぞハッピー」

「あい!」

そして何事もなく出て行くナツさんとハッピーを見て、図太いなと思っただ。よく考えたらナツさんも危ないことしているのでは? と思っただけど、あれはちゃんとギルダーツさんに認識されてから仕掛けられているから大丈夫なのかと自己解決した。不意打ちした方が粉々になるって…。それ、どんな化け物だ。

「ナツとギルダーツってそんなに仲が良いの?」

「ああ、ギルダーツはナツのこと気に入っているみたいだな」

「でも、たまにしか帰ってこないんでしょ?」

「ああ、よく土産話とか聞かせてるみたいだぜ」

なるほど、ギルダーツさんはよく遠い場所にクエストに行くから、その分ドラゴンのことを聞く機会が多いってことか。まあギルダーツさんに喧嘩を吹っ掛けるから仲良くなったっていうのもあるだろうけど。

そういえばルーシイさんが話しかける前にウェンディとシャルル

に呼び出されたから一緒にいたんだけど…。

「そういえば、さつき何か用があるって言ってなかった？」

「あ、そうだった！ゴージュにね、一緒に来てほしいの」

「一緒について、何かの依頼？」

「ううん、そうじゃなくって」

「？」

「ウエンデイの姉御！僕もついて行ってもいいですかっ!？」

「え？あ、うん。イーロン君も来てくれる？」

イーロンも一緒についてことは、仕事の話じゃないのか。なんだろう？

☆

目の前の魔道四輪を追って、僕も魔道二輪で走っていく。マグノリアを出て、やがて周囲が緑豊かな自然に囲まれた大きな建物が見えてきた。魔道四輪も止まったので僕もその近くに止める。魔道四輪からはウエンデイとシャルルとイーロン、運転席からはエルザさんが降りてきた。

「ここが…」

「ああ。ハートクロイツ社だ」

ハートクロイツ社は服飾専門の会社で、よくルーシイさんが着ている服もハートクロイツ社製だ。最近はいンテリア方面にも手を広げているので、今回はウエンデイの部屋と僕の家家具を買いに来た。エルザさんは全ての武具を、この会社に特注で作ってもらっているらしい。…本来、武具は専門外らしいけど、無理強いされているのかな？

エルザさんが入り口付近の傭兵に軽く挨拶し、中へと入っていく。僕らもエルザさんの後について行くと、中のエントランスがすごく豪華だった。シャンデリアとか宝石とか、少し目がチカチカするくらいだ。

「エルザさん、今日はどんな御用でしょうか？」

奥にあつた大きな階段から、スーツを着た男性がこちらに慌てた様子で近づいてきた。まあアポとつてないみたいだし、エルザさん、待たせると何するか分からないしね…。

「今日は家具の注文に来たんだ。こいつらはギルドの新人でな、住む場所も決まったばかりなんだ」

「誰かを連れてこられるなんて、初めてですね。クロノアⅡハートクロイツです。どうぞお見知りおきを」

「どうも…」

「なんか、この人は青い天馬ブルーベガサスに居てもおかしくないと思う。実はつながりがあったりして。」

クロノアさんに案内してもらい、様々な家具が並べられているスペースにやって来た。どれもこれも高そうだけど…。イーロンとも同居しているわけだし、そろそろ最低限の家具は欲しい。マスターや皆は余裕が出来てから借金を返してくれればいいって言ってくれていたし、生活を安定させることを優先することにした。ここ数日、少し急いで稼ごうと頑張ったからか多少の出費もやむを得ないと考えるようにしよう。

「こちらがカタログになります。どうぞ」

「ありがとうございます。…やっぱり高いね」

「その分、性能は良い物ばかりですよ」

「うーん…シャルル、何から買った方がいいかな?」

「そうね…」

ウエンディはシャルルと相談して買うようだ。二人は女子寮のフェアリーヒルズで同居している。元々化け猫ケットシエルターの宿でも同居していたし、ウエンディは多分一人暮らしできないと思う。だって食器とか良く割ってるし。いつか大火事とか起きそうだから、シャルルがいてくれないと怖い。

「イーロン、欲しい物とかある?」

「い、いえー! 兄貴にお任せしますっ!」

まあ、6歳の男の子に聞いても分からないことが多いか。どうしようかな…。生活必需品つてなると、まず冷蔵庫でしょ? 掃除機に、洗

濯機に、絨毯に、ベッドに……。あ、料理器具とかも欲しいな。あれ？絨毯はまだいらぬか？いやでも足元寒いのは地味に辛いし……。

「…ゴーシユ、ちよつと貸して」

「え？ウエンデイ？」

「だって色々買っちゃうでしょ？」

「え……いや、そんなことは……」

「そうね。前のあんたの部屋、ひどかったものね」

それは認める。だって魔法が使われている家具とかあったら買っちゃうよ？面白そうだから。それにゲームとか大好きだからそれにも魔法が使われていたら買っちゃうよそりゃあ。…途中から使わなくなつた物が多いけど、捨てるのもつたいない気がしてそのままにしていたからどんどん積み重なつていったけどね。

「私とシャルルで決めちゃつていいよね？使い方も分からないこと多いんだし」

「…はい。それじゃ任せます…あ、できるだけ安いのにしてね」

「分かつてるわよ」

そこまで言われたら口出しできません。もう二人に任せることにしよう。

「私はこれからクロノアに話があるので行くが…ゴーシユ、イーロン。お前たちも暇なら来るか？」

「どこにですか？」

「奥に武器注文の部屋があつてな。私も世話になつている」

「当社では武器は扱っておりませんが、エルザさんがどうしてもとおっしゃるので他社のカタログを参考に作らせていただいております」

あ、やっぱりエルザさんが無理強いしているんだ。ちよつとクロノアさんが可哀想に思えてくる。でも、魔法の武器か……。興味あるな。もしかしたら必要になる場面もあるかもしれないし。

「それじゃあ、ついでに行つていいですか？」

「ちよつと、あんたは残つてなさいよ」

「え？…居ても意味くない？」

「自分の家具なんだから、自分好みの方がいいでしょ？参考に聞くこともあるから」

「ああ、そっか…。じゃあ、イーロンは行ってきなよ」

「い、いいんですか？そ、それじゃあ、お願いしますっ！」

「ああ、こつちだ」

「ちよ、ご案内しますよ！」

エルザさんが慣れた足取りで向かい、イーロンもそれに続く。そういえば、エルザさんの武器や防具って全部でどのくらいあるんだろう？当然原作では使われていない物もあるだろうし。確か換装の魔法空間に入れられない分はフェアリーヒルズで5部屋借りて収納しているんだっけ。…1部屋で月10万Jだから、合わせて50万Jも払っているんだよね確か。

「こつちの方がいいかな？」

「どつちもありね…。ほら、ゴーシュ出番よ」

「あ、うん。えっと…。もうちよつと質素な物がいいかな」

「そうかな？可愛くていいと思うけど」

「僕、一応男んだけど…」

それから数時間、僕はウエンディとシャルルの質問に答えながら家具を決めていった。途中から可愛らしい物を勧められすぎて感覚がおかしくなったせいかな、途中からはウエンディとシャルルの巧みな誘導に乗せられてしまったけど。

エドラス編

第20話　アースランド

「777年7月7日？」

「私やナツさんに滅竜魔法を教えたドラゴンは、同じ日にいなくなっているんです」

「そういうえば、前にナツがガジルの竜も同じ日に姿を消したって言うてたかも」

「どういうことなの？」

「遠足の日だったのかしら」

「ルーシイさんも、たまに変なこと言いますよね…」

「はい、皆。飲み物もらってきたよ」

「ありがとー！」

ミラさんからもらったジュースを、皆に配っていく。ルーシイさんはもうお酒が飲める年齢なんだけど、苦手らしいからジュースにした。まあ、酔っぱらった所をOVAで見たことあるから飲ませようとも思わないけど。

「火竜イグニール、鉄竜メタリカーナ、天竜グランディーネ…。皆、今どこにいるんだろう…？」

「シャルル〜！これ、オイラが獲った魚なんだ！シャルルにあげようと思って」

「いらないわよ。私、魚嫌いなもの」

ハッピーは今日もシャルルにアタックしている。でもハッピー、紅茶飲んでる所に生の魚持つてくるのはどうかと…。せめて紅茶に合った食べ物とかなら受け取ってもらえるんじゃない？

「そっか、じゃあ何が好き？オイラ今度…「うるさい！」…！」

「私に、付きまとわないでー！」

「ちよつとシャルル！」

シャルルはそのままギルドの外へと向かっていく。ハッピーはすぐく落ち込んでしまった。

「何もあんな言い方しなくても…。ねえハッピー？」

「シャルル！ちよつとひどいんじゃないの!？」

「待って、シャルル〜！」

ウエンデイの言葉でシャルルは一旦足を止めるけど、またすぐに歩いて行ってしまった。それを見たハッピーはすぐさま追いかけていく。：事情を知っていたら、シャルルの行動もしようがないって思えるんだけど…。ハッピーじゃなくて、シャルルの方が特殊なんだけ。

「なんかシャルルって、ハッピーに対して妙に冷たくない？」

「どうしたんだろう…」

「…たまたま機嫌が悪かっただけかもしれないよ。少しそつとしておこう」

「うん…」

「兄貴っ！ご飯持ってきましたっ！…あれ？シャルルの姉さんは？」

「ちよつとね。ほら、ウエンデイも食べよう？」

今更だけどイーロンはなぜか僕のことを兄貴と呼ぶし、ウエンデイのことを姉御と呼ぶ。他の人は名前の後に兄さんと姉さんをつけるだけなのに。完全に舍弟みたいになっていて、ちよつと気が引ける。

「私…：やっぱり探してくる！」

「姉御!…：行っちゃいましたね」

「…僕も行ってくる。イーロンは先に食べてていいから！」

「え、ちよつと兄貴!？」

「これ、どうするの？」

ルーシイさんのそんな呟きが聞こえた気がした。

☆

「シャルルー!どこにいるのー！」

「ウエンデイ、いた？」

「ううん…。こんな天気なのに、どこ行ったんだろう…」

僕らがシャルルを探しに出てから少しすると、雨が降り始めた。段々と強くなってくる雨にうたれながらも、ウエンデイはシャルルを

探すのを止めようとしないので一度ギルドに戻って傘とタオルを借りてきた。

「あー！」

「シャルル！やっと思つた！」

「ウエンデイ…。あんた、びしょ濡れじゃない」

「シャルルもでしょ！…シャルル、私達ギルドに入ってそんなに経つてないんだから、もっと皆と仲良くしなきゃ駄目だと思うの」

「必要ないわよ！あんたがいれば、私はいいの。…ついでにゴーシユも」

「僕はついでか…」

「もう…。またそういうことばかり…ん？」

ウエンデイに渡した傘を預かり、ウエンデイがシャルルをタオルで拭いていく。ウエンデイがどこか別の方向を見始めたのでどうしたのかと思っていると、水たまりを歩く音が聞こえてきて…全身をローブで包んだ、彼がいた。

「誰？」

「…ウエンデイ、ゴーシユ」

「え？その声…」

「それに、その杖は…！」

「まさか君達がこのギルドに来るとは…」

その言葉の後、彼は顔に巻かれたマスクだけを取って見せた。青い髪に、特徴的な模様…ジェラールと同じ顔だ。

「っ！ジェラール!？」

「ど、どういうこと？あんた確か捕まって…！」

「それは私とは別の人物だ」

「でも、どう見てもジェラールじゃない！」

「私は、妖精の尻尾のミストガン。7年前は、この世界についてよく知らなくて、君達にジェラールと名乗ってしまった」

「え…？まさか…！あなたが、7年前の、あの時の、ジェラール…？」

ウエンデイの目から、雨とは違う大きな雫がこぼれ落ちる。ウエンデイはグランデイーネだけじゃなく、ジェラールの行方も気にしてい

た。もちろん僕も気になってはいたけど、ウエンディはたまに一人で涙を流していることもあった。

「ずっと…ずっと、会いたかったんだよ!？」

「会いに行けなくて、すまなかつた…。だが、今は再会を喜ぶ時間はない。今すぐ…今すぐ、この町を、離れるんだ…」

「ジェラール!？」

ジェラールが突然、膝から崩れ落ちる。それを見て僕は聖結界ホーリーをジェラールにかけ始めた。ウエンディも一緒に治癒魔法をかけているから、これで少しは楽になってくるはず。

「大きくなりすぎたアニメは、もはや私一人の力では抑えられない…。間もなく、マグノリアは消滅する」

傷で苦しんでいるだけではなく、その悲しんでいるようなジェラールの表情が真剣さを物語っていた。

「どうということ…。全然意味わかんない!？」

「終わるんだ…。すでに消滅は確定している。せめて、君達だけでも…!？」

「妖精の尻尾は!?ギルドの皆はどうなるの!？」
フェアリーテイル

ジェラールはそれに言葉を失い、目を閉じている。

「…ジェラール、はつきり言ってくれ。マグノリアは、どうなるの?」「全員、死ぬということだ…!？」

それを聞いたウエンディは、ギルドの方へと走ろうとする。

「ウエンディ!？」

「皆に知らせなきゃ!？」

「行つてはいけない!君達だけでも、町を出るんだ!？」

「私だけなんてありえない!…私ほもう、妖精の尻尾フェアリーテイルの一員なんだから!？」

「!？」

ジェラールに向かって声を荒げてそう伝える。ジェラールは驚いて言葉を無くしてしまったようで、その間にウエンディはギルドの方へと向かってしまった。

「ジェラール…。僕も、ウエンディも、もう子供じゃないんだよ」

「…そのようだな。ウエンデイが、あんなに強くなるなんて思わなかったよ。ゴージュも、魔導士になれたようだな」

「うん…。マスター・ローバウルのおかげだね。…ねえ、ジェラール。本当に方法はないの？」

「ああ…。もう、消滅は免れないんだ。…もしかして、君ならウエンデイを救えるか？」

「どうかしら…」

ジェラールはシャルルに向かってそう告げる。シャルルは僕とジェラールに背中を見せながらそう呟き、ウエンデイを追いかけかけた。

「ゴージュ、君だけでも逃げるんだ。ウエンデイなら、きっとあの子が救ってくれる」

「嫌だ。たとえば、ウエンデイとシャルルが無事だとしても…。僕は、仲間を置いて自分だけ逃げるなんてしないよ…! あれは…」

「アニマが…!」

「…ジェラール、その場を動かないでね」

「ゴージュ…?」

空にできた大きな穴から光が溢れ、それが地上に…マグノリアに降り注いだ。

☆

空の穴から、光が溢れ出す。さつきギルドや町の皆が吸い込まれてしまった時とは違い、一定のリズムで光が出ている。あの大きな穴に向かって飛んでいった二つの影、ナツさんとハッピー、ウエンデイとシャルルがエドラスに向かったんだ。

「ハア、ハア…ジェラール、大丈夫？」

「ああ…本当に強くなったな、ゴージュ」

「僕は、守る者だからね…でも、魔力をちよつと使い過ぎたかな」
「無理もない。あのアニマを防いだのだから」

ミストガンと僕を、術式が書かれた紫色の結界が包み込む。以前、ロードレースで術式に捕まった時に完成した結界だ。これは

制限結界^{リミット}。この空間内では、設定した魔法と、それと同じ属性を持つ魔法を封じることができる。例えばナツさんの魔法を設定した場合。炎属性と滅竜属性、二つのどちらかの属性を持つている魔法をこの空間では封じることができる。だから、同じ滅竜属性を持つウエンディやガジルさん、あと炎属性を持つマカオさんとかもこの空間では魔法を封じられてしまう。

この結界には発動に条件がある。それは、設定する魔法はこの結界の範囲30m内にいる者の使用した魔法だということ。この使用した魔法というところが肝だ。一方的に相手の魔法を封じることとはできない。今回だと僕の結界魔法。まあこれは制限結界^{リミット}を発動しているから自動で設定できる。結界魔法^{バリアー}は空間魔法の一種だから、この空間内では空間魔法の類を封じられる。アニマも空間魔法だから、この結界内になればアニマは効かない。まだ使い慣れていないからか、魔力の消耗が激しいけど。術式を覚えていないとできなかっただろうな。

「ゴーシユ、動けるか？」

「うん…。ねえ、さっきの光はウエンディたち、だよな？」

「ああ。アニマの残痕から向こう側の世界、エドラスに行ったのだらう」

讓渡結界^{ランブル}を口に放り込み、ジェラールからエドラスについての説明を聞きながら辺りを歩く。アニマから逃れた人がいないか探している。確かナツさんたちと同じ滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}のガジルさんとか、ホロロギウムで逃れたルーシイさんとかがいたはず。

少しすると、人影が見えてきた。あれは…ルーシイさんだ！

「ルーシイさん！」

「ゴーシユ！無事だったのね！それにそっちの人は…」

「私はミストガンだ。ルーシイ、無事で良かった」

あ、いつの間にかジェラールがまたマスクで顔を覆っている。まあややこしいことになるから、それが正解だと思う。

「それでは、ゴーシユ。これを渡しておく」

「これは？」

「エクスポールという、向こうの世界で魔法を使えるようにする丸薬だ。半分ほど持つていくといい」

「ありがとうジ…じゃなくてミストガン」

ミストガンに中身を半分ほどもらい、それをミストガンが持つていた袋に入れてもらった。これさえあれば、原作みたいにナツさんたちと合流した後に王国軍と戦うことになっても苦戦することはない。

「ちよつと、これどうなってるの!?! 私状況がよく分かってないんですけど!?!」

「それは後でゴーシユに聞いてくれ。では、任せたぞ!」

「うん! ミストガンも、気をつけて。…行つてきます!」

「ちよ、ちよつとく!?!」

僕はジェラールにそう伝えた後、ルーシイさんと共にエドラスに転送してもらった。早くギルドの、町の皆を助けないと!

第21話 エドラス

ミストガンに、アースランドからエドラスへ転送してもらった僕とルーシイさん。現在、大ピンチに陥っていた。

「ル、ルーシイさん…。大丈夫、ですか…?」

「大丈夫だけど、ゴージュは大丈夫なの!？」

「な、何とか…」

今、僕達は岩壁に掴まっている状態。僕がルーシイさんの手を掴んで、もう片方の手で岩壁を掴んでいる。両手が使えないからエクスポールも飲めないし…。しまった、こんなことなら先に飲んでおくべきだった…。

「ル、ルーシイさん…!僕のポケットに入ってるエクスポールが入った袋、取れますか…?一つでも取って飲んでくれれば助かるかも…!」

「う、うん!もう、少し…!あつ!」

ルーシイさんが僕のポケットから取り出そうとした時に、袋が引つかかって中身がどんどん零れ落ちる。これは、まずい…!

「中身が…!ルーシイさん!」

「…ごめん、少ししか取れなかった…」

「十分です…。い、いいから早くして下さい…!」

「う、うん!あむっ…よし!開け、処女宮の扉!バルゴ!」

「お仕置きですね、姫」

「早く、あたしたちを助けて〜!!」

ルーシイさんが飲み込んだ後バルゴが出てきて、僕達を助けてくれる。でも、エクスポールを落としたのは厳しい…。ナツさんたちの分があればいいんだけど…。

☆

ルーシイさんが回収できたエクスポールは四個。その内二つは僕とルーシイさんが飲んだから、残りはたったの二個だけ…。せめてもう二個あれば、ナツさんたち全員に飲ませることができたんだけど

…。こればかりは仕方ないか。

何とか近くの町にやって来た僕達は、情報収集するために探索をすることにした。

「ごめんね、ゴーシユ…」

「大丈夫ですって！あれは仕方ないですよ」

ルーシイさんはさっきのことで落ち込んでしまっている。先に飲んでおかなかった僕が悪い。

そういえば、ナツさんたちとはいっ合流できるんだろう？確か、こんな感じの丸っこい建物がいっぱいある町は見たことがある気がするんだけど…。どこだっけ？来てすぐに会えると思っっていたけど、もしかするとこのまま何日も彷徨うかもしれないのか…。とりあえず、王都に関する情報を集めよう。皆もそこに行くはずだ。

「いたぞー！」

「へ？」

ふと後ろからそんな声が聞こえてきて、振り返るとそこには兵隊さんらしき人が沢山いた…。あれ、王国軍では？

「お前たち、妖精の尻尾だな！大人しく投降しろ！」

「ちよつと、離してよ！」

「ごつちに来い！お前はルーシイだな！お前は…見かけん奴だな。だがその紋章、妖精の尻尾の一員だろう！」

いきなり囲まれて、取り押さえられる僕達。僕の顔は分からなかったらしいけど、左腕前腕部にある紋章で捕まったらしい。長袖の服を着てくるんだった…。

「確かにルーシイだけど、何なの一体！」

「…ルーシイさん、やっちゃいましたようか？」

「そうね…でも、いいのかしら？」

「今回の敵は王国そのものですし、捕まったら何されるか分かりません」

「分かったわ。開け、天蝸宮の扉！スコープオン！」

「ウィーアー！サンドバスター！！」

『ぐああっ!?!』

サソリの尻尾があるテンションの高い星霊、スコープオンが砂嵐を起こして王国兵たちを一掃していく。王国兵は全員どこかへ飛ばされて行ってしまった。

「俺っちこれからアクエリアスとデートなんで、んじゃ!」

「相変わらず嵐のような星霊ですね…」

「アハハ…」

「ルーシイ…」

「皆!会いたかった!!って、あたし!!?」

良かった、無事にナツさんたちと合流できた!それにこっちの世界、エドラスのルーシイさんも一緒にいる。本当に同じ顔だ…。なんだか鏡か何かをみてるみたい。

「ゴーシユ…!」

「ウエンデイ!シャルルとハッピーも、無事で良かった!」

「いたぞ、あそこだ!!」

「話は後回しにしましょう!」

「このままじや捕まっちゃおうよ!」

「デイフエンド スクエア」
「防御結界・立方!」

「ぐわあっ!」「固いっ!」「魔法なのか!」

また王国兵が群がってきたので、先手必勝とばかりに僕は結界を叩きつける。見たことない魔法だからそれだけで驚いているようだ。この世界だと魔法は道具と一体化している物しかないから、仕方ないとは思うけどね。

「ルーシイさん、どうにかできますか?」

「任せて!開け、白羊宮の扉!アリエス!」

「あ、あの、頑張ります。すみませくん…!」

「なんだこれは!」「人が現れた!」

「アリエス、あいつら倒せる?」

「は、はい!やってみます!ウールボム!」

羊の星霊、アリエスの手から羊毛の爆弾(?)が放たれ、王国兵達がピンク色一色に包まれていく。なんか癒されている奴が何人もいるみたいけど…。まあ、戦えなくできるならそれでよし。

「ウールショット！からの、ウールウォール!!」

「皆、今のうちよ!」

「こ、こんな感じで良かったんでしようか…。すみませくん…」

「モコモコ最高ー!」「ナーイスルーシィー!」

「あく、あたしも気持ちいいかも〜!」

「これが、アースランドの魔法…」

王国兵が羊毛の壁に阻まれて動けなくなっている間に撤退する。
途中、王国兵の方から「もっとやって〜」だとか「やられているのに気持ちいい〜」とか聞こえてきたけど…。喰らった相手をマゾに変えるとか。…アリエスの魔法、恐るべし。

☆

町を出て、普通の木々とは変わった色をした森の中で一度休憩をとることにした僕達。大分遠くまで来たから、見つかることは恐らくないだろう。

「しっかしお前ら、どうやってエドラスに来たんだ?」

「私達、ルーシィさんもゴーシユも魔水晶ラクリマされちゃったと思って心配していたんです」

「ホロロギウムに助けてもらったの」

「僕は新しい結界で。こっちの世界には、ミストガンに送ってもらいました」

皆にここに来るまでの経緯を話していく。エクスポールのことを話す時にルーシィさんが暗いオーラを纏ってしまったけど。

「で、あんたたちを探してたってわけ」

「それじゃ、それを飲めば俺らも魔法使えるようになるのか!?!」

「でも、残り二個しかないんじゃない?」

「単純に考えて、戦力にならない私とオスネコは飲まなくていいわね」シャルルの言葉により、ナツさんとウエンデイがエクスポールを飲むことになった。まあ、ハッピーとシャルルはこの世界でも使えるようになるはずだから、間違いではないだろう。

「てめえら、本気で王国とやり合うつもりなのか?」

「当然！」「仲間の為だからね！」

「…」「本当にこれ、あたし？」

これで魔法を使えるようになったから、よっぽどのことがない限り負けることはないはずだ。…これはフラグではない。

☆

ナツさんたちと合流した日。ルーエンの町を出て王都へと向かっていき、次のシツカという町で宿をとる。確かあと三日くらいかかるんだっけ。飛空艇に乗るより、エドラスのナツさんの魔道四輪に乗せてもらうのが最速だったはず。原作通り乗せてもらった方がいいけど、魔力が戻っているナツさんたちだったら飛空艇を奪おうとするよね…。どうしよう？

「おい、見ろよ！あいつとあたし、身体まで全く同じだよ！」

「うわあ！そんな恰好で出て行くなく！」

「エドルーシイさん!?ナツさんとゴーシユもいるんですよ!？」

「僕は後ろ向いてるから、早くどうにかしてくれ」

「別にあたしは構わないんだけどね」「構うわっ！」

ルーシイさんとエドルーシイさんがいないと思っていたら、一緒にお風呂に行っていたらしい。二人ともバスタオル姿で出てきた。

「賑やかだねダブルシイ」「それ、上手い事言ってるつもりなの?」「んゝ…」

「何だナツ、見たいのか?」「止めてゝ！」

これ、アースランドのルーシイさんからすればひどい罰ゲームだね。勝手に自分の裸見せられるのと同じようなもんだし。

「ぶふっ！」

「何がおかしいのよ!そうか、あたしよりエドルーシイの方がスタイルが良いとか、そういうボケかましましたいのね?」

「自分同士で、一緒に風呂入るなよ！」

「…言われてみれば!」

やっぱりルーシイさんはどこの世界でもルーシイさんらしい。ツツコミで振り回されている所とか、全く変わらないと思う。

「本当に見分けがつかないほど瓜二つですね！」

「まさかケツの形まで一緒とはなく」「止めてよー！」

「お！鏡の物まね芸できるじゃねえか！」「やらんわ！」

「息もピツタリ！」「悲しいわね」

「つていうかジエミニが出てきたみたい！」

確かに。ジエミニじゃないとここまでツツコミとかも合わせられないだろうな。

「ジエミニ？」

「あたしが契約している星霊よ！開け、双子宮の扉！ジエミニ！」

「じゃーん、ジエミニ登場！」

…もう後ろ向いてるのも面倒になってきたから、こっそり部屋から出て行く。どうせ振り向いたら後でウエンデイからお叱りをもらうことになるんだから、これが一番安全だ。

外に出てみると、目の前には夜の世界が広がっている。空を見ると月のような光を放つ球体がいくつも存在していた。色も違っているから、すごくきれいだ。

「魔法が有限の世界、か…」

元々、魔力自体が存在していない世界で前世を過ごして、魔力が無限の世界で10年以上過ごした。それだけで、魔力がどれほど便利なものかが実感できる。最初は魔力を感じることはできなかった僕でも、こうして魔導士として生活していくことができるようになった。そんな魔導士を生業としている人達が、魔力の枯渇に怯えながら毎日を過ごしている。それを思うだけで、なんだかきれいだと感じたこの夜の景色が、哀しく儂いものに思えてきた。

☆

「何よこれー!!信じらんない!!」

「朝っぱらからテンションたけえな…」

「どうしたの…?」

翌日、僕達はルーシイさんの声で目が覚めた。髪が長いのでアースランドのルーシイさんだ。昨日の夜エドルーシイさんはキャンサー

によって髪をバツサリ切ってもらっていたからもう見間違うことはない。

「エドラスのあたしが、逃げちゃったのよ!」

「王都へは東へ三日歩けば着く。あたしはギルドへ戻るよ、じゃあね幸運を…」

「手伝ってくれるんじゃないの!? もうどういいう神経してるのかしら!!」

「ルーシイと同じじゃないの?」「うるさいっ!」

ルーシイさんがここまで怒るのも珍しい気がする。確かコレ、逃げたわけじゃなかったよね。というか、不器用だなあと思う。素直にギルドの皆を説得してくるって書いておけばいいのに。

「仕方ないですよ、元々戦う気はないって言ってましたし」
「だな」

「あたしは許せない! 同じあたしとして、許せないの!」

「まあいいじゃねえか」「良くない! ムキーツ!!」

これはしばらく放っておいた方がいいか。それよりお腹減ったな…。

☆

「フフン♪」

「もう機嫌治ってる」「本屋さんで珍しい本見つけて、嬉しいんだろうね」

「何の本買ったんだよ、ルーシイ」

「こつちの世界の歴史書! あんたたちも、この世界について知りたいでしょ?」

ルーシイさんがノリノリだ。というか僕は、アースランドと通貨が一緒ってことに驚いた。まさか手持ちのお金で買うことが出来るとは思わなかったな…。服も買えたから着替えられたし。ちよつとカンプーっぽい服だけど、特におかしくはないだろう。

「この本が物語っているわ! この世界って面白い! 例えば、エクシードって種族がいてね!」

「私も聞きました、すっごく恐れられている種族らしいですけど…」
「…皆、隠れて！あそこに王国兵が！」

王国兵が前方に集まっているのを見て、僕は咄嗟に皆を物陰に隠れさせる。着替えたとはいえ、こっちは顔バレしている人もいるから気を付けるに越したことはない。…話を盗み聞く限り、やっぱり巨大魔水晶ラクリマの魔力抽出は明後日らしい。歩いていったら三日かかるから間に合わないし、魔力抽出が始まったらマグノリアの皆を二度と助けることもできない。丁度その時、飛行船が降りてきた。

「あの船、奪うか！」

「ナツが乗り物を提案するなんて珍しいね」

「ウェンデイのトロイアがあれば、乗り物など怖くないわ！」

「でも、あれ操縦できますか？」

『あ』

おい。全員考えてなかったってことだよな？思わずため息をついてしまった。この中で僕以外乗り物の免許を持っていない。しかも持っている僕でさえ魔道二輪だ。前世の知識を使っても四輪車までしかできないから、飛行船なんて操縦できない。

「誰か、ロープか何かありますか？」

「あそこにロープあるよ！」

「どうするつもり？」

「警備さえどうにかできれば上手くいくはず」

「よし、ゴーシュに任せるぞ！」

「あ、ちよつとナツ！」

え、まだ作戦伝えてないんだけど…。まあ、勢いで行っちゃうのがナツさんか。そう思って僕達も隠れるのを止めて飛行船に向かっていく。でも、できれば飛行船が離陸する直前が良かったな。

「火竜の翼撃！」

「天竜の咆哮！」

「防御結界・柱！」
ディフエント
トーチム

「開け、獅子宮の扉！ロキ！ってあれ!？」

立て続けに攻撃を仕掛けていく中、ルーシイさんだけが王国兵に取

り囲まれていた。原因はおそらくロキさんが出てこなかったこと。だつてどう見てもあれは、ロキさんじゃなくてバルゴだったから。

「ちよつと、なんで!？」

「お兄ちゃんは今デート中ですので、召喚できません」

「お兄ちゃん?」

「はい、以前そのように呼ぶようにとレオ様から」

「バツカじゃないのあいつ〜!」

「ルーシイさん、危ない!」

「えっ!？」

ルーシイさんだけでも捕らえようとしたのか、王国兵が背後から近づいていく。攻撃されそうになっていたその時、赤い魔道四輪が王国兵達を轢いてルーシイさんの目の前に現れた。

「妖精の尻尾の紋章!」

「つてことは味方?」

「ルーシイから聞いた。乗りな」

その言葉を聞いて、僕達は急いで魔道四輪に乗り込む。魔道四輪は、また王国兵を蹴散らしながらあつという間に逃げ切ってしまった。良かった、原作通りになって。僕の考えでは、飛行船のどこかにロープを巻き付けて、それを僕の浮遊結界バブルに結び付ければいいんじゃないかと思っただけけど、こつちの方が速いから断然良い。速いことは良いことだつてね。

第22話

王都

シツカの町を抜け、物凄いスピードで周囲の景色が流れていく。ここまで速い魔導四輪は乗ったことがない……でも、おかげで……。

「ウツプ……!」

誰か、助けて下さい。隣がもうリバーす寸前です。今までの乗り物酔いのレベルじゃなさそう。普段乗り物酔いをしない僕でも少し気分が悪くなっている。もしこれで事故を起こしたりしたらと思うと、気分が悪くなってくる……。このスピードにナツさんが耐えられるのだろうか……。

「ウエンデイ、トロイアかけれる?」

「う、うん。ちよつと待つ……!……!……ごめんなさい、ナツさん」

「ウエンデイ!」

なぜだ。まさかあの慈愛の心に溢れているような性格をしているウエンデイが、ナツさんを見捨てるとは……。しかも、間の長さからしてこれはかなり葛藤した上での決断……!この乗っている間にトロイアをかけてもらうのは無理そうだ……。いや、本当になんで?」

「……あんだ、鈍いわね」

「え……?シャルル、どういうこと?」

「自分で考えなさい」

……駄目だ。これはいくら考えても分からないパターンだ。たまにこういうことがあるんだよなあ……。ウエンデイが不可解な行動をして、シャルルはそれがどうしてそうなったのか分かっている。だけど僕はその意味がさっぱり分からない。ごめんナツさん。少しの間だと思っから我慢してください……。

「後ろの奴等、元氣だな」

「あ、すみません。助けてくれてありがとうございます」

「本当助かったわ!」

「……王都へ、行くんだろ?あんなオンボロ船よりこっちの方が速えぞ。妖精の尻尾最速の男……ファイアボールのナツとは俺のことだぜ」

「ナツ……!」

「お、俺く…!?」

「ゴーストを外すとナツさんと同じ顔があった。…実際に見ると、隣で極度の乗り物酔いのナツさんが運転している姿とか、不思議な光景だ。こんなのアースランドだったら絶対にありえない光景だもんね。」

「こつちの、エドラスのナツ?!」

「ルーシイが言ってた通り、そっくりだな。で?あれがそつちの俺かよ、情けねえ」

「こつちのナツさんは、乗り物が苦手なんです」

「それでも俺かよ…。こつちじゃ俺は、ファイアボールって通り名の運び屋専門の魔導士なんだぜ?」

「そういえばこの魔道四輪、SEプラグ付いてないよ?」

「こつちじゃ人が体内に魔法を持たないからじゃないかな」

「車に関しては、アースランドより全然進んでるじゃない」

SEプラグとは、セルフエナジープラグの略。運転手の魔力を燃料へと変えてくれる装置だ。エドラスの人達は体内に魔力を持っていないからそれは必要ないわけで、こつちの魔道四輪は完全な魔力だけで走っている。これはアースランドではまだ確立されていない技術だ。と、その時、エドナツさんが急停車した。か、慣性の法則が…! 「ちよつと、何よ急に…!」

「…そうとも言えねえな。魔力が有限である以上、燃料となる魔力もまた有限…。今じゃ手に入れるのも困難だ。だから、俺が連れてってやるのはここまでのだ。…降りろ」

「なっ!?」

「これ以上走ったら、ギルドに帰れなくなるんだ。あいつら、また勝手に場所を移動したからな」

「うおおーっ!生き返った〜!」

「もう一人の俺は、物分かりが良いじゃねえか。…さ、降りた降りた!」

魔導四輪から放り出され尻餅をつく。今どうやったのか分からなかった…。それはともかく、目の前に広がる景色を見て僕は驚いた。ここまで大きいとは思ってなかったから。

「王国とやり合うのは勝手だけどよ、俺達を巻き込むじゃねえよ。今回はルーシイの…お前じゃねえぞ、俺達が知ってるルーシイの頼みだから仕方なく手を貸してやった。だが面倒は御免だ。俺は…ただ走り続けてえ」

このナツさん、六魔のレーサーと仲良くなれるんじゃないだろうか。さつきから似たようなセリフばかりだなと内心思った。

「おい！お前も降りろ！」

「バツ、てめえ、何しやがる!？」

「俺も同じ俺として、一言言わせてもらおうぞ」

「や、やめろ！よせ！俺を…降ろすなっ!!」

「お前…何で乗り物に強え？」

「そんなことかい！」

「あうっ…！ご、ご、ごめんなさい…。僕にも、分かりません…！」

…ああ、そうだった。本田さんと同じ体質だったっけ、こっちのナツさん。突然ビビりになってしまったエドナツさんに、他の皆はポカーンとしていた。

「お、お前…。本当に、さつきの俺？」

「は、はい！よく言われます…。車に乗ると性格変わるって…！」

「こっちが本当のエドナツだろ!？」

性格変わるといふか、もはや二重人格の域だと思っただけだね。

「ひい…！大きな声出さないで…！怖いよ…！」

「…鏡の物まね芸でもする？」

ルーシイさん、悪い顔してる。ナツさんがひきつった顔を見て、昨日のお返しについてことだ。ルーシイさんって時々SなのかMなのか分からないよね…。というか、このエドナツさん見るとイーロンを思い出すな…。

「ごめんなさい、ごめんなさい！僕には無理です！僕はただ、ルーシイさんの頼みだからここまで来ただけなんです…！」

「いえいえ、無理しなくていいですよ？」

「こんなのいても、役に立ちそうにないしね」

「シャルル、それは言い過ぎだよ」

「…もしかして、ウエンディさんですか？小っちゃくて可愛い！そつちがアースランドの僕さん？」

「どこにさん付けしてんだよ」

「オイラはハッピー！こっちはシャルルだよ！」

「あたしは、もう知ってると思うけど」ひい！ごめんなさい!!何でもします!!」…」

「お前さ、もっと俺に優しくしてやれよ」

エドナツさんって動きがすごい速いんだね…。今の魔道四輪の物陰に隠れるスピードが異常だった。もしかしたら怯えて逃げる時のエドナツさんのスピードはレーザーに匹敵するのでは…？

「僕はゴーシユです」

「え…!?ゴ、ゴーシユってあの!?」

？なんかすごい怯えられてるような…？そういえば、こっちの僕はどんな人なんだろう？妖精の尻尾にはいなかった気がするけど…。

「ゴーシユを知ってるんですか？」

「ゴ、ゴーシユって確か、王国で有名な研究員にそんな名前の人があった気が…!」

「それじゃあ、まさか…」

「こっちの僕も、ここにいてるってことですね？」

エドラスのエルザさんと同じように、エドラスの僕も王国軍にいるらしい。研究員ということは、バイロとかの部下ってことかな…。原作に僕はいないんだから、僕がいることで大きな変化がなければいいんだけど…。

僕の言葉で、他の皆もようやくこの都市―王都に到着したことに気づいた。

「これって…!」

「もしかして王都!?!」

「大きい…!」

「何だよ、着いてんならそう言えよ!」

「うわあ、ごめんなさい!!」

ここに、マグノリアの皆の魔水晶ラクリマがある。確か、原作だと…。

「皆、あれ…」

「ん?…何あれ!？」

「まさか、あれが…!？」

「多分、そう…。きつとあれが、マグノリアの皆の魔水晶^{ラックリマ}だ」

遙か上空に、超巨大な魔水晶^{ラックリマ}があった。やっぱり、ここからでも十分見える位置にあった。まああんな巨大な物を隠すなんてできないだろうけどね。かなり遠いはずなのに、巨大すぎて全然遠くにある感じがしない。

「あんな上にあるなんて…。どうするの?」

「オイラたちが魔法使えばなあ」

「もしかしたら、王都に行けば移動する方法があるかもしれないですね」

「…いいぞ!…こんなに早く着くとは思わなかった!皆の場所も分かっ
たしな!」

「さつきと行くわよ」

「ちよつとシャルル!」

シャルルが駆け出したのを見て、僕達も後に続いていく。

「じゃあ、ありがとな!」「あたしによろしく!」

「あ、あの!…本当に、王国と戦うの…?」

エドナツさんが、ナツさんを引き止める。彼らからすれば、僕達は無謀な戦いを挑みに行くようなものだ。優しそうなエドナツさんが、止めようとするのは当然とも言える。

「さあな。俺達は仲間を救えばそれでいいんだけど、タダで帰してくれねえようなら…。そりやもう、やるしかねえだろ!!」

「!……………お、王国軍になんて、勝てるわけないよ」

「へへっ!」

「あ…」

エドナツさんは、ただこつちを不安そうな顔で見ているだけだった。

☆

王都に入ってみると、人が大勢いた。まるでお祭り騒ぎだし、ここ

では建物の色んなところに魔法が組み込まれているようだ。この世界の全てをほぼ統一しているらしいから、ここまで栄えているんだろうけど…。他の町とは、別世界だ。

「なんか、向こうの方が騒がしいですね」

「パレードとかやってんのかしら？」

「よーし、様子を見に行ってくるか！」「あいさー！」

「あんたたち！遊びに来たんじゃないのよ！」

「行っちゃったね…。僕らも行きましょう」

ナツさんとハッピーが群衆の方へと向かっていくので、僕らもその後を追いかけていく。

「なんだなんだ？」

「待ってよナツ！」

「うわあ、すごい人混み！」

「ウエンデイ、はぐれないでよ」

「あ…！」

「どうかした？ウエンデイ」

「シャルル…！う、ううん！何でもないよ！」

人混みをかき分けて、最前列の方へと向かって進んでいく。この人の多さだとウエンデイははぐれてしまうような気がしたので咄嗟に手を掴んでおく。…嫌かもしれないけど、ここでいつものドジをされたら本当にはぐれてしまうから勘弁してね。

「ったーちよつと、急に立ち止まらないでよ…え!?」

最前列まで行くと、そこには大きな魔水晶ラクリマがあった。空にあった物ほどではないけど、高さ10m以上は確実にある。

「魔水晶…!？」

「じゃあ王都の上にあったのは何なの？」

「これ、一部分ね。切り取られた跡があるわ」

魔水晶ラクリマの前にある演説台のようなものに、一人の老人が上がる。あれが、この国の国王…。

「エドラスの子らよ。我が神聖なるエドラス国は、アニマにより十年分の魔力を生み出した」

「何が生み出しただよ……！オイラたちの世界から奪ったくせに！」

「……落ち着きなさい、オスネコ」

「共に歌い、共に笑い、この喜びを分かち合おう」

その言葉で、周囲の人々が歓声をあげる。中には涙を流して喜ぶ人や屈託のない笑顔を浮かべている人もいる。魔水晶ラクリマがマグノリアの皆だと分かっている僕らから見ると、人間を資源として喜んでいいることが異常だと感じる。ほとんどの人々が真実を知らないと分かっている。

「エドラスの民にはこの魔力を共有する権利があり、また！エドラスの民のみが未来へと続く神聖なる道を、我が国からは誰も魔力を奪えない！！そして、我は更なる魔力を手に入れることを約束しよう。……これしきの魔力が、ゴミに思えるほどのな」

「……！！」

エドラス国王は、そう言いながら魔水晶ラクリマを持っていた杖のような物で罅を入れ、崩れた部分が地面へと落ちた。

「我慢して……！」

「出来ねえ……！あれは、あの魔水晶ラクリマは!!」

「お願い！皆、同じ気持ちだから……！」

「……滅竜魔導士の魔力は、この世界でも特殊な物らしいです」

「ゴーシュ……？」

ミストガンにその説明も受けていたけど、敢えて伝えていなかった。原作通りに進んだ方が先の展開が分かるし、僕という異物が居てもそれほど変化が出ない方がいいんじゃないかと思っていた。実際、六魔将軍との戦いはほとんど原作通りだったから上手くいったような気がするし。……でも、魔水晶ラクリマを、仲間を傷つけられた瞬間を見て、抑えられなくなった。

「ミストガンの話だと、魔水晶ラクリマにされた皆を元に戻すこともできるらしいですよ」

「今ここで暴れる気!？」

「……本当はもつと後で伝えるつもりでしたけどね。仲間が傷つけられたのを見て、黙ってられなくなりました」

「ゴーシユがそんな荒っぽいことするなんて、珍しいね」

「僕だって、感情的になることぐらいあるよ」

ウエンデイは隣で笑顔を浮かべた。それもすごく嬉しそうに。他の皆も、やる気に満ちた目をしている。

「皆、いいですか？」

「仕方ないわね、もう！」

「やろう！」

「うん！」

「逃げることも考えなさいよ！」

「仲間の為だったら、世界だろうが敵に回す！それが妖精の尻尾だ!!」
「ナツさんのその言葉で、僕達の大暴れが始まった。」

第23話 大暴れ

「火竜の咆哮!!」

「ぐわあ!」 「で、敵襲だー!!」

「ディフェンド 防御結界・壁!」

ナツさんの火竜の咆哮が王国兵たちを蹴散らし、その余波で見物人が傷付かないように僕が防御壁を張る。一度騒ぎが起きれば、見物人も下がっていくはず。

「開け、人馬宮の扉! サジタリウス!」

「であるからしてくもしもし!」

サジタリウスの矢が、ナツさんの火竜の咆哮を回避していた王国兵を次々と射抜いていく。狙撃だつたら守る必要ないな。被害の小さい数少ない魔法だと思う、うん。これで王国兵はほとんどいなくなつた。

「ウエンデイ、今のうちにラクリマ魔水晶を!」

「うん! 天竜の咆哮!!」

ウエンデイの魔法がラクリマ魔水晶に直撃する直前で、突然かき消される。

これは、まさか…!

「貴様らがアースランドの魔導士か」

「エルザ!」

エドラスのエルザさん…エルザ! ナイトウオーカー。確かこの人の魔法は、テン・コマンドメンツ。RAVEの主人公のハルと同じ効果の槍を使っていたっけ。今のウエンデイの天竜の咆哮をかき消したのは、斬れない物を斬ることができる槍・ルンセイブ封印の鎗か。

「この魔水晶は我々の貴重な資源だ。手出しはさせんぞ」

「その魔水晶は僕らの仲間です! 連れて帰らせてもらいます!」

「知ったことか。魔力を得る為ならば、多少の犠牲は止むを得ん」

「てめえら…! 命を何だと思ってるんだ!!」

「貴様らには分からんさ。…魔力が無くなる恐怖はな!」

ナイトウオーカーがナツさんに斬りかかる。この人と戦うには、どの形状がどの能力なのかを把握しておくべきだ。

「ディフェンド 防御結界・匣！」

「…なるほど。貴様は防御系の魔法が得意らしいな」
「なっ…!？」

ナツさんに結界が張られたのを見た瞬間、僕にターゲットを変更してきた…!？」

「バウンド 弾性結界！」

「シルフアリオン 遅い！音速の鎗!!」

「ぐあっ！」

「ゴーシユ！サジタリウス、援護よ！」

「了解であるからしてくもしもし！」

「メルフォース 真空の鎗！」

「きやあっ!？」

咄嗟に弾性結界で回避したと思っただけ、速度が増したナイトウォーカーの一撃で吹き飛ばされ、サジタリウスの矢も風で跳ね返されてしまう。つ、強い…。やっぱり同じエルザさんだからか、状況判断が速すぎる…！

「火竜の…！あぶねえ！」

「ほう…。これを躲すとは中々やるな」

「敵がもう一人…っていうか、猫!？」

あれは、パンサーリリー…！彼も近くにいたのか！でもナイトウォーカーが「アースランドの魔導士」と言っていた。ということは、今回の行動はエクスタリア王女のシャゴットに予知されていたということ…？

「…僕達のことをどうして知っているんですか？」

「答える必要はない。やれ」

「はっ！」

「ディフェンド 防御結界・円蓋！」

王都魔戦部隊の隊長格が二人も…！僕達の周囲を、王国兵達を取り囲んでいき、銃のような形状をした武器から粘着弾が発射される。結界で防ぐことは出来ているけど…。このままじゃ、捕まるのは時間の問題だ。

「ゴーシユ、俺を結界の外に出してくれ！」

「ナツさん、でも今外に出たら…」

「俺に作戦がある！」

「わ、分かりました！結界の色が変わったら飛び出して下さい！こちらからは通過します！」

「おう！」

「いきますよ！リフレクション反射結界！」

「火竜の剣角!!」

ディフェンド防御結界・ドーム円蓋の内側にリフレクション反射結界を張る。ディフェンド防御結界・ドーム円蓋だけを消したことで、纏わりついていた粘着弾が全て反射され王国兵に襲い掛かった。その瞬間、ナツさんの炎を纏った一撃がパンサーリリーへと襲い掛かる。けど、パンサーリリーは空へと回避してしまった。

「お前もハッピーと同じ魔法使うのか!」

「ハッピー…?そこの任務を完遂しアースランドから帰還したエクスードのことか」

「任務を、完遂…!」

「嘘!シャルルとハッピーはその任務を放棄してるはず!」

「いや、任務を果たしたも同然さ」

「シャルル…」

「…!ハッピー、シャルル!ディフェンド防御結界・ウォール壁！」

「無駄だ。ルーンセイブ封印の鎗！」

「くっ…!」

動揺したシャルルと困惑している皆。その隙をついたパンサーリリーがハッピーとシャルルに急接近し二人を捕らえてしまう。防御したけど、ナイトウォーカーにより結界を真っ二つに斬られてしまった。魔法だったら何でも斬れるのか…!?

「ハッピー！」

「シャルル！」

「リリー。お前はそのままエクシードをお連れしろ」

「ああ」

「ナツ!皆く!!」

「ウエンデイ〜!!」

「させるか!…くっ!」

「それはこちらのセリフだ」

ナイトウオーカーの攻撃を防ぎながらじゃ、パンサーリリーを止めることができない…。少しでも隙があれば、制限結界^{リミット}で逃げられないようにしたりとか妨害できるのに…!あれだけ上空に逃げられたら僕の結界じゃ届かない。

「火竜の鉤爪!」

「爆発の鎗!」
エクスプロージョン

「っ、強い…!さすがはエルザってことかしら…」

「このまま長引いたら不味いですね…」

「え?」

「多分他にもエドラスのエルザさんと同じ魔戦部隊の隊長がいるはず。その人たちがここに加勢しに来たら…」

原作では各個撃破で倒していた。だけどこうして連携されたら、僕らに勝ち目はほとんどない…。特に一番厄介だと思っていたナイトウオーカーとパンサーリリーが最初にやって来たのが厳しい。他の隊長格だったら何とかかなりそうだったのに…。

「ナツ!」

「おうよ!火竜の咆哮!」

「無駄だと言っているだろう。封印の鎗!」
ルーンセイフ

「ウエンデイ、今だ!」

「う、うん!天竜の咆哮!!」

「真空の鎗!」
メルフォース

「防御結界・壁!!」
デイフエンド ウォール

ナツさんの火竜の咆哮を目くらましにしてウエンデイの天竜の咆哮を別方向から魔水晶^{ラクリマ}を襲う。やっぱりエドラスのエルザさんも瞬時に対応してきたけど、僕が結界でウエンデイへの攻撃を防御。ウエンデイの攻撃は魔水晶^{ラクリマ}に直撃した。

「貴様らっ!!」

「サジタリウス!」

「であるからしてくもしもし!!」

「火竜の煌炎!!」

「くっ!」

「リフレクシオン反射結界!!」

ナイトウオーカーの一瞬の隙について、ルーシイさんとナツさんが追い打ちをかける。僕は以前ニルヴァーナの魔水晶ラクリマを破壊した時のようにリフレクシオン反射結界を展開する。別方向から複数の攻撃が加わったことで、魔水晶ラクリマは砕かれ、そしてついに魔水晶ラクリマが光を放った。

「なんだと…!」

「…!ここは…?」

「グレイ!エルザ!」

「ルーシイ…?お前たち、何をしているんだ?」

「皆さん!!話は後です、ここは一度撤退しましょう!」

「でも、ハッピーとシャルルが…!」

「そうだ!仲間攫われたんだ、黙って逃げれつかよ!」

「今は二人を助ける為にも一度立て直さなきゃ!」

「くっ…!」

魔水晶ラクリマが徐々にその姿を変え、グレイさんと僕らの仲間のエルザさんが姿を現した。これで目的は達成した。ここですつと戦い続けていたらその内取り押さえられてしまうのは目に見えている。グレイさんとエルザさんが魔法を使えばまだ戦えると思うんだけど…。やっぱりエクスポールがないのは辛い。ナツさんは納得していないようだけど、今は逃げるべきだ。

「鉄竜の咆哮!!」

『ぐわあっ!!』

「今度は何事だ!」

「ガジル!」

「まったく、てめえらがいきなり暴れ始めるもんだから、遅れちまっただろうが…。目的果たしたんなら、さっさとずらかるぞ!」

「ウエンデイ…」

「…大丈夫。絶対シャルルたちを助けるんだ!」

「サジタリウス閉門！開け、天蝸宮の扉！スコープオン！」

「ウィーアー！俺つちに任せな！サンドバスター!!」

「覚えてやがれ〜！」

砂嵐で視界を奪いながら、ガジルさんの誘導で僕らは逃げ切ること
に成功した。ハッピー、シャルル…！必ず、迎えに行くから！

☆

ガジルさんはどうやら、逃げ遅れた見物人達の救出と退路の確保を
していたらしい。本当はすぐに加勢するつもりだったらしいけど、ナ
イトウオーカーが現れたのを見てそうしたんだとか。入り組んだ王
都の城下町の路地を上手く使い、一つの建物に逃げ込む。あれだけ複
雑に進めば簡単には見つからないだろう。

「どうやら間に合ったようですね、僕さん」

「ああ。当初の目的は果たしたみてえだしな」

「ガジルが二人…!?!」

「どうなってやがる!?!」

「ガジル、任せた！」

「おい」

退路の確保、つまりこの建物を用意してくれていただろうエドラス
のガジルさんを見て、グレイさんとエルザさんが驚きの声を上げる。
まずは二人に事の顛末を話さないと。それはダブルガジルさんに任
せることにして、僕らはハッピーとシャルルが攫われた理由について
考えることにした。

「ハッピーとシャルル、大丈夫かな…」

「あの鎧を着た黒猫が言ってたわよね…。任務を完遂したエクシー
ドってどういうこと？」

「二人の話じゃ、シャルルたちはその任務を放棄しているんじゃない
かった？」

「ああ。シャルルがそう言ってたからな」

「その任務って？」

「…分からないの。詮索はしないって約束だったから」

どうやら原作通りに進んでいたらしい。だとすれば、シャルルの任務っていうのは滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}を抹殺することだったはず。で、任務は途中で変更されたんじゃないか。なかつたわけ。

「シャルルたちの知らないうちに任務が変わっていたんじゃないかな。だったらあのシャルルの動揺ぶりも納得できる」

「じゃあ、知らないうちに任務を達成しちゃってたってこと？」

「そんな…」

「後は二人がどこに連れて行かれたのかわかってことだけ…」

「それはおそらく、エクスタリアでしょう」

グレイさんたちへの説明が終わったのか、エドラスのガジルさんがこっちの会話に加わってきた。彼はこの世界では記者をしている為、時には情報屋としても活動することがあったはず。

「エクスタリア？」

「エクシードの住む国です。王国とエクスタリアは何か密約があるのではと一部で噂になっているのですよ」

この世界の人々は、人の死を決めているとされるエクスタリアの女王シャゴットの力を恐れている。その為同じ種族であるエクシードのことも。本当はエクシードには翼^{エーラ}という魔法があるだけで、シャゴットも未来予知ができるだけで未来を決めることができるわけではないけど。

「その国はどこに？」

「さすがに場所までは…。ですが、王国軍のレギオンで行き来しているという話です」

「そこにハッピー達がいるんなら、行くつきやねえだろ！」

「あたしたちの大切な仲間だもんね！」

「まずはあの城だな。そのレギオンって魔獣じゃねえと行けねえんなら奪うしかねえ」

「よし、囀班と潜入班に分かれるぞ。囀班は正門から乗り込み、潜入班がそのレギオンの居場所を探るんだ。空を飛ぶ手段があれば、皆を救うこともできる」

なるほど。それなら城内を探ることができれば、もしかすると竜鎖

砲も破壊する方法があるかもしれない。…ん？確か竜鎖砲を操作する部屋って特殊な扉になっていて魔法が効かないとかなんとか…。それじゃあまずはその扉を開ける方法から探さないと。

「滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーが三人もいるなら、数日もあれば戻せるはずですよ。後はアースランドに帰る方法ですね」

「それなら、あのアニメって魔法をまた発動させればいいんじゃないか？」

「我々ではうまく起動できるか分からんな…。誰かを人質に捕らえた方がいい」

エルザさんの言う通り、僕らが起動して誤作動でも起こしたら大惨事だ。下手をするとさらにアースランドの町が吸い込まれてしまう可能性もあり得る。だったら人質を捕まえてその人にやってもらった方がまだ安心というものだ。

「そうだ！国王ならアニメの使い方知ってるのよね？」

「ええ、恐らく。それに研究員も把握しているはず」

「それがどうかしたのか、ルーシィ？」

「ジエミニよ！ジエミニはコピーした人の考えていることまで分かるの！だから国王とかその研究員をコピーしちゃえば、皆でアースランドに帰る方法も分かるはずよ！」

そっか、確か原作でもそんな流れだったっけ。国王か研究員に接触できれば帰る方法の心配もないわけか。

「そういえば、 그레이さんとエルザさんは魔法が…」

「その心配はねえ。ガジルにエクスポールもらったからな」

「おいゴーシユ。てめえも持ってたはずじゃなかったか？ミストガンの奴に聞いたぞ」

「それは、ちよっとした事故で落としちゃいました…」

良かった。ガジルさんが残りのエクスポールを持っていたらいい。もし僕が全部持ってこの世界に来ていたら、最初に全部落としていた可能性もあったし…。ミストガンの言う通りにして正解だったな、ホント。

「それでは班決めをしよう。まず囃班だが…」

「俺がやる！こっちのエルザにやられっぱなしだからな!!」

「俺もそっちの方が性に合ってる」

「ギヒツ。俺も行くぜ。…あの猫にまた会えるかも知れねえからな」

「それじゃあ潜入班が僕とウエンデイとルーシイさんですね」

「頼んだぞ、三人とも。あくまで最優先はハッピーとシャルルの救出だ。魔水晶ラクリマの魔力抽出はまだ猶予があるようだからな」

「任せて！」

「はい！」

「了解！」

これは、もう原作は考えない方がいいだろうな。だって展開が全く違うと言っているんだから。潜入時はナツさんたちが暴れることになるから王国兵はそっちに行くはずだけど、魔戦部隊の隊長が全員行くとは思えない。とにかく状況を見極めながら最善を尽くそう。

第24話 作戦開始!

エドラスのガジルさんに聞いた道を進んで、王都から少し離れた廃坑の入り口までやって来た。ここから宮殿内部に入ることができないらしい。何となくだけど僕もこのことは覚えていたので間違いないはず。グレイさんたちを元に戻してからほとんど時間は経っていない。まだ日も高い内に行動するとは相手も思っていないだろうという事で、すぐに行動を起こすことになった。

「ここがこつちのガジルが言ってた坑道ね」

「早く行きましょう。囷班の皆が待ちきれなさそうだし」

エドラスのガジルさんに明かり用の魔水晶ラクリマを借りてきたので、真っ暗でも問題なく進める。地図も作ってもらったから、迷うこともない。

囷班の皆は宮殿の付近に潜伏している。宮殿は一つしかない城門以外に外部から侵入する術はない。エクシードみたいウイザードキャンセラーに飛んで入ることができるともかく、壊して入ろうとしても対魔戦用魔水晶ラクリマという魔法を無効化させてしまう魔水晶ラクリマで出来ているので魔法では破壊できないんだとか。

なので、少し離れた場所だけこの坑道を使うことになった。確か原作だとここを進んだ先で王国軍の待ち伏せにあって捕まってしまうはず。でも今回はハッピーとシャルルがすでにエクスタリアに連れて行かれてしまったので、シャゴットの未来予知による先読みもされてはいないはず。まあされていて魔法が使えるからどうともなるだろう。

「ここ、行き止まり? しかも魔法で塞がれてるわね…」

「賊が侵入しないように塞いだのかもしれないですね」

「壊せそうですか?」

「やってみる! 開け、金牛宮の扉! タウロス!」

「モオ~~~~!!」

「頼んだわよ、タウロス!」

「お任せあれ、ルーシイさん!!」

タウロスが塞がれた岩壁を素手で殴って崩していく。何回か殴ると道が開通した。さすが黄道十二門、素手でかなりの厚さの岩壁を破壊してしまうとは。でも、その背負っている斧を使った方が早いんじゃないだろうかと思うのは、僕だけ？

「ありがとね、タウロス」

「モオ〜!?それだけですか!？」

「え?それだけって?」

「もつとご褒美を…」

「そのエロい目は止めてっいたら…。行きましよう、二人とも」

「はい!」

さらに先に進んでいくと、少し開けた場所に着いた。光るキノコのような物がそこら中にある。光源には困らない。離れた場所だけど、螺旋状の階段のような物が見える。きっとあれが宮殿の内部に続く道だ。

「上手くいったわね!」

「それじゃあ、囚班の皆に知らせますね」

僕の防御結界は強固な結界。広範囲に展開することは出来ないけれど、逆に言えば小さい物だったら遠い場所でも展開できる。それに一度展開した物だったら、自分で解除するか遠くに離れすぎて解除されてしまうか、あとは破壊されるかしないと無くなることはない。

それを利用して、小石サイズの結界を二つ作り、エルザさんに渡しておいた。たった数cmのサイズであれば、王都の端から端まで位なら展開し続けることが可能だ。多分戦闘で使えるサイズだと良くても100m位だろうか?今度実践してみよう。

とにかく、エルザさんに渡しておいた結界の片方を消す。一つは丸型でもう一つは四角。成功の場合は丸型を、失敗の場合は四角を消すことにしている。今回は成功なので丸型を消した。あとは外が騒がしくなっただけから潜入するだけだ。

☆

ゴージュからの合図を受け取った囚班は、潜入班が無事に宮殿内へ

たどり着いたことを知る。エルザに合図が来たと同時に、ナツが城門へと飛び出して行った。

「おい、ナツ！」

「あのバカ……！」

「止まれ、何者だ！」

「ハッピーとシャルルを返しやがれ!!火竜の咆哮!!」

「て、敵襲だー!!」

ナツの炎が城門を守っていた兵士達を飲み込んでいく。ナツはわざと炎を狭めており、魔法の直撃を逃れた兵士が敵襲の合図を出す。それによって兵士が次々と現れた。

「仕方ない。私達も行くぞー！」

「おう！氷造形・槍騎兵！」

「鉄竜棍！」

「換装！循環の剣！」

「火竜の翼撃!!」

次々と群がってきた王国兵を蹴散らしていくが、それでも物量の差は埋まらない。ほぼ全世界を統一したこのエドラス国に所属する王国兵の数は計り知れない。もはや、全世界を敵に回しているようなものだ。

「氷造形・大槌兵！」

「ン、冷たいね……」

「何!？」

ピンク色の鎧に全身を包み込んだリーゼントと顎割れが特徴的な男、魔戦部隊隊長の一人——シュガーボーイ。彼はグレイが造形した氷の巨大なハンマーを、一本の剣で防いだ。氷のハンマーはその剣に触れた途端に融けた様に液状になってしまう。

「鉄竜剣！」

「ふっ！」

「……中々やるじゃねえか」

「ようやく現れたか。アースランドの魔導士」

鉄の剣に変化したガジルの右腕の一撃を容易く受け止める。先の

戦闘でも現れた、人間の成人男性並の体躯を持つ、左目に傷のある黒いエクシード——パンサーリリー。彼の持つ両刃剣・バスターマームは大きさを変化させることができ、全長が彼自身の数倍になることもある。それを軽々と使いこなす彼の腕は、エルザと比較しても後れを取らない。

「おく怖え！アースランドの魔導士って皆こんな狂暴なのかよ！」

「ああ!?やんのかコラ!!」

「効かねえよっ！」

ナツの前には、白いメツシユの入った髪に矢印のような眉毛が特徴的な、見るからにテンションが高そうな喋り方をする青年——ヒューズが立ち塞がっていた。彼はナツの火竜の鉄拳を、地面を操り壁を作り出して防御する。そして彼も接近戦に持ち込まれることがないように距離をとる。

「…やはり自分の顔を見るのは妙な物だな」

「それに関しては同感だな」

そしてエルザの前にはこちらの世界のエルザ、エルザIIナイトウォーカーがいた。だが戦闘に入ろうとはせず、怪しむようにエルザやナツたちの様子を窺っている。

「確か、まだ仲間がいたはずだ」

「さすがに覚えられていたか」

「全力ではないとはいえ、私の攻撃を全て防いだんだ。印象にも残るさ。あの青緑色の髪の少年はどこだ？」

「お前に話す必要はない」

「…まあいい。残念だが見当はついている。他の仲間は城内へと潜入しているんだろう。あのエクシード達のことを仲間だと思っているようだからな。ここは他の三人に任せるとしよう。音速の鎗！」

「待て！お前たち、ここは任せるぞ！換装、飛翔の鎧！」

「おい、エルザ!？」

魔戦部隊隊長三人と妖精の尻尾フェアリーテイルの中でも上位に位置するであろう三人の魔導士が、それぞれ戦闘を繰り広げる。二人のエルザは高速で城内へと入っていった。

☆

およそ十分後、宮殿の方から走るような音が聞こえてきた。ナツさんたちが暴れ始めたんだ。

「そろそろかしら？」

「…はい、大丈夫です。今は近くに人はいません」

ウエンディ、というか滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーは皆感覚が鋭い。すごい遠くの物が見えたり、普通の人では聞こえないだろう小さな音を聞き取ったり、数日前の匂いをたどることが出来たり。そんな異常なほどの感覚を持つウエンディが大丈夫と言ったのなら大丈夫だろう。上に出てみるとどこかの倉庫のようだ。

「ここからどうしますか？」

「僕達の第一目的はレギオンの搜索。レギオンはかなり大きいらしいから、いる場所も限られるんじゃないかな」

「それじゃあそのレギオンって魔獣がいそうな場所を探しましょ！高い所から見た方がいいわね」

それにしても無駄に広い。いくら宮殿だからってここまで大きくしなくて良くない？王都の城下町も大きかったけど、ここはさらに大きい。城壁を偵察するだけでも時間がかかるってエドラスのガジルさんに言われたけど納得。これはちよつと大きすぎる。

とにかく上の方を進み、現在は高さ的には大体半分くらいといったところか。もうここですでに高い。それにここより上は建物が狭まった構造なので探す意味はなさそうだ。ということは、ここより下のフロアにレギオンがいるはず。

「でも、そのレギオンって生き物がどれくらいの大きさなのかしらね？」

「家くらいはあるって言うてましたよ？」

「ちよつと想像出来ませんよ？」

魔獣と言っても姿かたちは様々だからね。僕は何となく覚えてるからいいけど、二人は明確にイメージ出来ないみたいだ。

「まあ人が複数乗れるのは間違いないみたいですし、後でナツさんた

ちをそのレギオンで回収しに行けば……！ウエンデイ、伏せて！」

「えっ……きゃっ！」

ウエンデイの頭を押さえて飛んできた粘着弾を回避する。飛んできた方向を見ると進行方向と反対側、つまり後ろの方に王国兵が何人も待ち構えていた。このままでは一番後方を歩いていたルーシイさんが危ない。さらに粘着弾がいくつもこちらに向けて飛んできたので防御結界・円蓋ドームで二人を守る。僕は、もう間に合わなさそうだったから。

「残念だったな」

「ぐっ……！」

「ゴージュ！」

「こいつを殺されたくなければそのまま動くな」

「エルザ！」

ナイトウォーカーに背後をとられ鎗を突き付けられる。最初のウエンデイを狙った粘着弾は囷だったらしい。結界を使おうとした瞬間に背後から急に殺気が近づいてきたから、間に合わないと判断して二人だけ囲むことしかできなかった。挟み撃ちか……。これはまずい。ここは廊下とは言っても片側は外が見えるようになっていいる。幅もそこまで広くはない。

「お前の魔法は厄介だ。一対一ならともかく乱闘ならば尚更。先に始末させてもらう」

「止めてエルザ！エルザは無抵抗の人にそんなことしないでしょ!？」

「私はお前たちの知るエルザじゃない」

「あなたは確かに違う人かもしれない！でも、根の部分は同じ気がするんだ！」

「ルーシイさん……」

この世界でもし同じ名前、同じ顔の人に出会ってもそれは別の人。でも、パラレルワールドの自分ということでもある。多分、この世界で自分に会ったことのあるルーシイさんは、根の部分は同じなんじゃないかと感じたことがあるのかもしれない。僕だって、エドラスのナツさんやガジルさんを見て詳しくどこがとは言えないけれど、やっぱり

りこの人達もアースランドのナツさんとガジルさんと話している時と同じだと感じる事があった。それでも、このナイトウォーカーには説得とかは通じないと思う。だって、あの強い意志を持つエルザさんと同じ人なんだから。

「あなたは、人の不幸を笑える人間じゃない！」

「黙れ。：私は人の不幸など大好物だ。妖精狩りの異名通り、フェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士を何人も殺した」

「…！エルザの顔で、エルザの声で、そんなこと言うな………！」

ルーシイさんの瞳から涙が流れる。：もし、根の部分が同じなんだとしたら、あのエルザさんがここまで変わってしまうほど、魔力が無くなることは恐怖なのだろうか。

「二人とも、後で落ち合いましょう！…ウエンデイ、ごめんね」

「ゴーシユ？」

「…っ！ゴーシユ、止めて！」

「…貴様、今の状況が分かって…」

ナイトウォーカーがそこまで言ったところで、僕はバウンド弾性結界を大きめに展開して、僕ごとナイトウォーカーや王国兵達を押し出した。

☆

「ゴーシユ!!」

ゴーシユがオレンジ色の結界で外へと押し出された。私達じゃあのエドラスのエルザさんには敵わないと思ったんだと思う。だから自分を犠牲にして私とルーシイさんを守ったんだ。しかも、私たちの反対側にいた王国兵達も押し出してる。

「結界が…」

私達を守っていた青緑色の結界が解除された。敵がいなくなったから意図的に解除したんだと思う。急いで落下した先を見ようとしたけれど、いるのは王国兵だけ。こっちのエルザさんは…？それに、ゴーシユも見当たらない。うまく逃げたのかな…？あれだけ、無茶はしないでって言ったのに…！

「ゴーシユ…」

「ウエンデイ、大丈夫？」

「はい…。でも、ゴーシユが」

「ゴーシユは大丈夫よ！後で落ち合うって言ってたじゃない！」

「…そうですね。今は、レギオンを探さないと！」

確かに外に押し出される前にゴーシユはそう言ってた。つまり自分が犠牲になったわけじゃなく、一旦別行動をするつもり。だったら、私たちはゴーシユが落ちた場所と違う場所を探すべきだ。

「ルーシイさん、私達はあつちを探しましょう！」

「ええ！」

「ルーシイク!!」

「ハッピー!？」

「シャルル!!」

動き出そうとした時、ハッピーとシャルルが空から飛んできた。翼エーラの魔法を使って。でも確か、二人はまだエクスポールを飲んでなかったはず…。それに、服装も変わってる。

「二人とも、無事だったのね！そういえばあんたたち、魔法が…！」

「…心の問題だったみたい」

「良かった、二人とも無事で…！」

「…怒ってないの？私達のせいで捕まりそうになったのよ？」

「どういうこと、シャルル？」

「…オイラから話すよ。あのね…」

ハッピーが、自分達に与えられていた任務について話してくれた。エドラスからアースランドに送られたのは、滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーを抹殺する為だったこと。でも任務が変わって、知らないうちに滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーを連行することに変更になっていたこと。二人はそれを聞いて、エクスタリアから脱走してきたってこと。その脱走の時に優しい夫婦のエクシードに助けってもらったんだってこと。

「今ハッピーが話してくれた通りよ…。だから、私達のせいでこつちの世界に来ちゃったのかもしれないのよ」

「でも、二人は知らなかったんでしょ？だったら二人は悪くないよ！」
「それに、こうしてあたしたちの所に戻って来てくれたじゃない！」

「ごめんね、ルーシイ、ウエンデイ…」

「だからいいって！ね、ウエンデイ！」

「はい！それに…」

私はシャルルを抱きしめる。安心していいんだって精一杯伝えられるように。不安だったはずのシャルルの心が少しでも癒されるように。

「私は、シャルルが任務より私を選んでくれたことの方が、ずっと嬉しいよ」

「ウエンデイ…」

そういえば、さつきハッピーのことちゃんど名前で呼んでたような？…そっか。ようやく、シャルルも妖精の尻尾の仲間になれたんだね。

「そういえばさつき、ここら辺から声が聞こえた気がしたんだけど」

「そうだ、ゴーシユが落ちたのよ！こっちの世界のエルザと王国兵と一緒に！」

「え!?それじゃ助けに…「待つて！」…え？」

「ルーシイさん、私達はそのまま王様の所を目指しましょう」

「…いいのね？」

「…ゴーシユなら、きっと大丈夫です！」

「分かったわ。それじゃ行きましょう！」

次の目的、アニマの発動方法を探ることを優先しよう。元々ハッピーとシャルルを助ける為にレギオンを探していたわけで、こうして二人と合流できたんだからもう必要ない。あとは皆でアースランドに帰ればいいだけなんだから。ゴーシユも、きっとそうするはずだも

ん。

「！シャルル、あれ！」

「まだ追って来てたのね…！」

「何あれ、猫がいつぱいいる!？」

「エクスタリアの近衛騎士団だよ！オイラたちを追ってきたんだ！」
ハッピーとシャルルが見てる方向に、鎧とかを着たエクシードの軍団が見えた。あれだけの数で襲われたら大変…！」

「とりあえず、逃げるわよ！」
「はい！」

第25話

コードETD

宮殿内でエルザⅡナイトウォーカーと王国兵に見つかり、僕はルーシイさんとウエンディを守る為に弾性結界^{バウンド}で外へと自分ごと押し出した。ナイトウォーカーに勝つことはできないと思ったからだ。で、上空へと押し出されたナイトウォーカーや王国兵は落下していった。僕は弾性結界^{バウンド}を使って落ちる方向を変えて離れた所に着地した。

「何とかなつた…かな？」

二人には後で落ち合うと約束した。多分宮殿内では厳戒態勢になっていると思う。ナイトウォーカーは無事だろうし、もう潜入班がいることを知られているはず。だったら、目立つところにいるのは危険だ。

「…どうしよっかな。構造よく分からないしなあ。…!あれは、エクシード？」

今までいた場所を探していると、上空にエクシードの軍隊がこの宮殿に向かって来ているのが見えた。なんかサイズがデカイ奴とかもいるけどエクシードなんだろう。まあパンサーリリーに比べればまだ規格外とは言えないか。

なんだろう、嫌な予感がする…。このまま彼らを放っておいたら行けないような気がするな。原作知識かな…?よし、まずは彼らの所へ向かってみよう!

「弾性結界^{バウンド}！」

前にクリステイナーナからニルヴァーナに飛び降りたあの時の応用で、足元から弾性結界^{バウンド}を作って大ジャンプ。それを空中でも繰り返し返していってエクシード達に接近していく。

でも、なんでエクシードの軍団が…?思い出せ、思い出すんだ…。えっと、原作では確かナツさんたちは皆捕まってる、ルーシイさんとハッピーとシャルルが一緒にいたのは覚えてる。つまり、ハッピーとシャルルがもう近くにいる…?だったら、もうすでに第一目的は達成したも同然だ。後はアニマの使用方法だけか。でも王国の研究員を捕らえるにしろジェミニでコピーするにしろ、エクシード達は第三勢

力として邪魔してくるだろうな……。だったら、僕は足止めをするのみ！ちよつと手荒になるけど勘弁してね！

デイフエンド ウォール
「防御結界・壁！」

「いてメエーン!!」

…え？なんか、聞き覚えがあるような…。それに他と服装の色が違う黄色いこのエクシード、見覚えが…？

「貴様、何者だ！」

「えつと…。僕はゴーシユ。あなたたちは何しに王都の宮殿まで？」

「我々は墮天を追って来た！貴様、青毛と白毛のエクシードに見覚えはないか？」

墮天…？でもやっぱり、青毛と白毛のエクシードっていうのはハッピーとシャルルのことで間違いないはず。じゃあ二人は上手く逃げ出せたのか！

「…そのエクシード達は僕らの仲間です。彼らをどうするつもりですか？」

「何？貴様、まさかアースランドの魔導士か!？」

いや、魔導士っていうのは塔の一番上の屋根にいるんだから察してほしい。ここ、普通の人は登ってこれないと思うんだけど…。

「彼らに危害を加えるのなら、僕が相手になりますよ」

「ニチャ様、どうしますか？」

「我々エクシードに逆らう者は誰であろうと容赦はせん！皆の者、かかれ！」

『はっ!!』

ニチャ…？そうだ、この猫一夜さんにそっくりなんだ！そうか、この世界の一夜さんってエクシードなのか…。ちよつとやりづらいけど、彼は別人だ。割り切らないと！

デイフエンド スクエア
「防御結界・立方！」

ドラゴノイドとの戦闘時にエルザさんのサポートをした時のように結界を振り回し、エクシードたちを蹴散らしていく。でもやっぱりエクシードたちは空中を自在に飛べるので、空中戦では不利だ。

「コードETD!!発動せよ!!」

「何事だ!？」

「あれは、国王…?」

一度地上に降りようかと考えていた矢先、宮殿の方からそんな声が聞こえてきた。見ると国王や背の低い老人、あと小さな女の子と、少し背の高めな青緑色の髪の青年がいた。他にも王国兵が塀の上などに配置されている。国王の号令でなのか、大砲がいくつもこちらに照準を向けている。…嫌な予感が強くなる。

「防御結界・壁!」
ディフェンド ウォール

「コードETD!!発動!!」

直後、大砲から光線が放たれる。狙いはどうやら僕ではなく、エクシード達…?僕は結界の位置をずらしてエクシード達の前に移動させる。光線が結界に直撃した瞬間、結界が消えた。いや、消えたというか、結界のあった場所に小さな物体が現れた。あれは、魔水晶…?
「え!？」

「ぐああつ!？」

「何のつもりであるか、人間ども!!」

エクシード達は苦しみだし、次々と姿が消えていく。これは、まずい!
「弾性結界!!」
バウンド

「メエーン!？」
「「ぐはつ!？」」
バウンド

弾性結界でニチャと呼ばれたエクシードとその近くにいたエクシード達を吹っ飛ばす。僕もその方向に弾性結界で跳んでいき、彼らの元へと向かった。やがて光線の光が弱くなっていき、後ろを振り向いてみる。そこには、巨大な猫型の魔水晶ラクリマがあった。弾性結界も無くなっている…。さつきと同じだ。

「な、何を「ちよつと黙ってて」むぐつ…!？」

「他の三人も一度ついてきて。…隠れた方がいい」

運がいいのか、宮殿の廊下にたどり着いたのですぐに近くの部屋に隠れる。入ってすぐに僕はニチャを離し、ドアに近づいて聞き耳を立てる。

「この世に神などいない!!我ら人間のみが有限の魔力の中で苦しみ、

エクシード共は無限の魔力を謳歌している…。なぜ！なぜこんな近くにある無限を、我々は手にできないのか！支配され続ける時代は終わりを告げた！全ては人間の未来の為、豊かな魔法社会を構築する為！我が兵士たちよ、共に立ち上がるのだ！！コードETD―
エクシードトータルデストラクション
天使全滅 作戦を発動する！！」

王の演説の後、兵士たちからは歓声が聞こえてきた。これは、人間とエクシードの戦争だ。

「人間共め…!!女王様に早く報告せねば!!」

「えつと、ニチャさんだっけ。今は出て行かない方がいいですよ。捕まってしまうのがオチだ」

「貴様、ニチャ様に対して無礼だぞ！」

「構わん。人間よ、名を教えて頂けるか」

「ゴーシユルガードナー。分かっていると思うけど、アースランドのフェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士です」

「私も改めて自己紹介しよう。エクスタリア王国近衛騎士隊長のニチャだ。この度は命を救っていただいたこと、感謝する」

ニチャさんが僕に向かって深々と一礼する。やっぱりアースランドではお世話になった一夜さんに見た目も中身もそっくりだからなのか、なんだかこそばゆい気持ちになる。ニルヴァーナの時は一緒に戦った仲間だったし。なんか勝手に敬語が出てしまう。

「ゴーシユ殿、何故我々を助けたのだ？貴殿に無礼を働いた我々を」

「だって、目の前で危険な人…。今回はエクシードだけど、助けられないには行かないですよ。助けられる人が目の前にいるなら僕は助けます」

前世の記憶の名残かもしれないけど、人を殺すことなんてやりたくない。元々自分や仲間が傷つけられないように結界魔法を習得したようなものだ。助けられる命ならできる限り助けたいと思う。

「…なんと寛大な！このニチャ、この御恩忘れませぬ！」

「いや、気にしないで下さい。それより周囲に人の気配が無くなったら、エクスタリアへ行つてこの事を伝えて下さい」

「良いのか？我々は人間共を見下してきた。たとえ別世界のことだと

しても、ゴーシユ殿にとつても不敬な話だろう」

「さつき言った通りですつて。助けられるなら助ける、それだけです」
「…重ねて感謝する、ゴーシユ殿」

ニチャさんつて、すごいな。今まで人間を見下して生きていたのはエクスタリアではそれが当たり前だったから。もはや文化の一つだと言つても過言じゃない。近衛騎士団の隊長ともなれば文化を守ることは手本として当然だ。部下が見ている前でこうやって人間の目の前で頭を下げるだけでも恥さらしと思われても仕方ないだろうに…。

「あ、そうだ。エクスタリアに向かう時は隠れながら行って下さいよ？見つかったら魔水晶ラックリマにされてしまうでしょうから」

「ゴーシユ殿はこれからどうするのだ？」

「僕は、仲間を助けに行きます。そのためにここに乗り込んだんで…。そろそろ、良さそうですね」

「では、我々はエクスタリアに帰還する。お前たち、行くぞ！ゴーシユ殿も武運を祈る！」

扉を開けてみると近くには兵士の姿がなく、それを確認したニチャさんたちは通路を低空飛行で隠れるようにして飛んでいった。一刻を争うことだからすごい急いでいたのは分かったけど…。多分、一旦城の外まで隠れながら行くのかな？兵士達は上を警戒しているだろうし。

「さて、と…。僕はどこ行けばいいんだろう…？」

レギオン探しはもう意味がない。ハツピーとシャルルはもうこの宮殿にいる可能性の方が高い。だったら後は王を探せばいいんだけど、玉座つてどこだ？ゲームとかだとこういう城の玉座は大体上の方にある印象だけど…。高い建物が多すぎて、どこから探せばいいのやら…。仕方ない、手当たり次第に探すしかないか。

「…今のは…？」

その時、遠くで爆発音のような音が聞こえてきた。どこかで、戦闘が始まっているのか…？よし、とりあえずそっちに行ってみよう。誰かは必ずいるはず。できるだけ隠れながら行かなきゃ…！

☆

爆発音が近づいてきた。さつき聞いた音だ。それに金属がぶつかり合うような音も聞こえてくる。間違いない、誰かが戦っている。

「あれは…エルザさん？もう一人は、ナイトウォーカー…！」

戦闘しているであろう部屋を覗くと、二人のエルザさんが戦闘を繰り広げていた。やっぱりあれくらいじゃ倒すことなど無理か…。でも、正門の方で囷をしているはずのこっちの世界のエルザさんがなんでここに？しかもこれは…。

「ゴーシユ、こっちよ！」

「ルーシイさん！と…。 그레이さん！なんでここに…？」

後ろを振り返ると、ルーシイさんと 그레이さんがいた。あれ、作戦は…？ガジルさんと ナツさんはいないけど、たった一人じゃ囷なんて意味がない。それにウエンデイやハツピー、シャルルもない。どうなってるんだろうか…？

「途中までは上手くいったんだがな…。魔戦部隊の隊長って奴等が全員こっちに行っちゃまってよ、俺らも追って来たんだ」

「じゃあナツさんとガジルさんも？」

「ガジルは今ハツピーと上空の魔水晶ラックリマを破壊しに行ったわ。ウエンデイとシャルルはエクスタリアに危険を知らせに向かったの。ナツは…」

「おーい、皆！こっちに面白そうなモンがあったぞ！」

僕が来た方と反対側の通路からナツさんが走ってやって来た。魔戦部隊隊長が宮殿に逃げ込んでしまうとは思わなかったな…。多分コードETDが発動されたからか？それとも僕ら潜入班のことがバレたからか…。どちらにしろ、これじゃ作戦どころじゃないな。

「ハツピーはなんでガジルさんと？」

「ああく…。ルーシイ達と合流した時、ナツは一緒にいなくてな。皆の魔水晶ラックリマを探すってどっか行っちゃまってたんだ」

それで今どこから帰って来たのか。ウエンデイは危険を知らせに行ったってことは、コードETDが発動されていることは知ってい

るはず。でも、具体的にどう攻撃するのか分からないのにそこまで急ぐことかな…？

「ゴーシユは何してたんだ？」

「僕はエクシード達を助けてました。一夜さん似のエクシードが魔水晶ラクリマにされそうだったので…」

「ついて…。まあゴーシユらしいわね」

「そういや、こつちのお前に会ったぞ」

「エドラスの僕？」

「ルーシィと合流する前にな。俺達を見た瞬間ビビりまくって勝手に計画をペラペラ喋っていきやがった。捕まえようとしたんだが、こつちのエルザに邪魔されちまって逃げられた」

計画というのは、エクスタリアに妖精の尻尾の皆の魔水晶ラクリマをぶつけて永遠の魔力を生み出すこと。それを聞いたウエンデイがシャルルと一緒にエクスタリアに飛んで行ってしまったということ。具体的にどうするのかというと、竜鎖砲という兵器を使うつもりなんだとか。聞いた感じ原作通りな気がするけど、竜鎖砲って確か滅竜魔法が必要じゃなかったっけ…？

「とりあえずナツの方に行ってみましょう！ここは危険だわ…」

「だなー！」

「そういやゴーシユ、お前いつからいたんだ？」

「さつき合流しました」

ナツさんが先導し僕らはそれを追いかけていく。エルザさんにはそのままナイトウオーカーを抑えておいてもらうしかない。正直言ってナイトウオーカーと戦うのは苦手だ…。嫌な攻撃を的確に狙ってくる感じが特に。

「ほら、これだこれ！」

「え…？ええ…!？」

ナツさんが入った部屋に着くと、そこは遊園地だった。確かに城にしては広すぎるような気はしてたけど、まさか中に遊園地を作っているとは…。これ、需要あるのかな？…そういえば原作でもここを見たことがあるような…。

「ん、実に楽しいね〜！ハッハッハッハ！」

「…何ですかね、あの人」

急にメリーゴーランドが回り始めたと思ったら、顎割れのピンク色の鎧を着たオジサンが一人で乗って楽しんでいる。明らかに変人だ、絶対そうだ。っていかメリーゴーランドに一人で乗っていて楽しいのかな…。

「気をつけろ。そいつは隊長格の一人だ」

「こいつが!?!」

「って皆さん、後ろ！」

後ろから巨大な船が迫って来て、ぶつかりそうになった所で下がっていった。このアトラクション、なんて名前なのかな？前世で見たことある気がするんだけど…。よく見ると、船の先端には青年が立っていた。この人も見覚えがある…。ということは、同じく隊長格の一人…！

「このスッゲー楽しい魔力がさ、この世界からもうすぐ無くなっちゃうんだ…。あんたらにその気持ち、分かる？」

「ん、俺達は永遠の魔力を手に入れる。…たとえば、どんな手を使ってもね」

「こっちは必死なんだよ。…誰にも邪魔はさせねえ！」

第26話 連携（リンチ）

ヒューズが指揮棒を振るおうとする。彼の魔法は無機物を操るというものだったはず。つまりこの場所、遊園地の遊具が多くあるこの場所は彼に地の利があると言える。でも、この世界の魔導士はアースランドの魔導士よりも戦闘向きではないんじゃないかと僕は思う。

「ディフェンド トーテム 防御結界・柱！」

「痛っ!?!」

「ナイス、ゴーシユ！」

「火竜の剣角!!」

「ちよっ…!?!」

小さな棒のようにした結界をヒューズの指揮棒を持つ手に当てる。彼はそのまま指揮棒を手放してしまい、その隙についてナツさんの炎を纏った一撃が彼を瞬く間に包み込んだ。この世界の魔導士は所有ホルダー型しかいない。即ち、何か道具を使うタイプの魔導士しかいないということ。魔力の宿った道具を敵の前で見せるなんて、僕らを甘く見過ぎている。こんなふうになんかそれを弾かれたらおしまいだ。

「ン、ン…。まさかヒューズがこんなあつさりやられるなんてね…」

「よそ見してんじゃねえよ！氷刃、七連舞!!」

「ンンッ!?!」

ヒューズの方を向いていたシュガーボーイの背後に回ったグレイさんが、両腕に氷で作った刃を纏って流れるような連撃を放つ。背中に攻撃をまともに食らったシュガーボーイは、そのまま気絶してしまった。

「なんだ、こいつら大したことねえな」

「早く王様んとこ行くぞ！」

「うん！」

「はい！」

あれ、もつとこの二人には苦戦していたような気がするけれど…。まあ、いいか。消耗しないで倒すことができるならそれに越したことはないしね。これで残りの魔戦部隊隊長はパンサーリリーとナイト

ウォーカーの二人だけ。ナイトウォーカーはエルザさんと戦闘中だから、残る敵は実質。パンサーリリーだけだ。こつちにはまだナツさんやグレイさんもいるし、倒すのに時間はかからないはず。

「ねえ、あれ!」

「道が三つも…」

「分かれて探すか。ゴージュはルーシイと一緒に行ってくれ。ナツは…」

「俺はこつちに行く!残りは任せたぞ!」

「つたくあいつは…。それじゃ俺はこつちに行く。後で合流しようぜ」

「うん!ゴージュ、行くわよ!」

「あ、はい!」

道なりに進んでいくと正面と左右に道が続いていて、ナツさんが正面でグレイさんが左の道、僕とルーシイさんが右の道へと進むことにした。もしパンサーリリーがこの宮殿内にいて、僕らが真っ先に出くわしてしまつたら…。よし、その時は逃げよう。僕らじゃ多分火力不足だし。

「それにしても広いわね、この遊園地…」

「ですね…。なんでこんなもの作つたんですかね?」

「さあ…。この町の人を楽しませる為つてことかしら?」

もしかしたらさつき倒したヒューズつて人の魔法を最大限に使えるようにした結果なのかも。こんな遊園地でも遊具を操ることができたら兵器だらけの場所と一緒だ。できるだけ兵器だと思わせないように作り上げたつてことだと思う。

「あうっ!」

「ルーシイさん、大丈夫ですか?」

「う、うん…。つていうか、あんた誰?つて、足どうしたの!?!すごい怪我じゃない!」

「うう…。もう走れないよ…」

また十字路に差し掛かり、ルーシイさんがピエロみたいな衣装を着た女の子と曲がり角でぶつかった。確かこの子は王の側近の、ココっ

て言ったかな？ルーシイさんとぶつかるともデジヤヴのような感覚があるし、原作で似たようなことが起きていた気がする。と、ココが走ってきた通路の方から小さな老人がやってきた。あの人も見覚えがある。バイロって研究員だったと思う。アニメではなんか滑舌が悪くて聞き取りにくいなって思ってたな。

「ココ、待たぬか！」

「！た、助けて…！これを…！」

ココが右手に持っていた大きな鍵を僕らに渡そうとして、何かに気づいたような反応をした。そして困ったような顔をしながら鍵を大事そうに抱える。これは竜鎖砲の始動に必要な鍵だったはず…。原作と違って滅竜魔導士の魔力を抽出できていないはずなのに、なんで…？

「ハア、ハア…。は、早く鍵を渡せ！」

「!?あんなんかに鍵は渡さないわよ！」

「…ルーシイさん？多分鍵ってそのことじゃ…」

「大丈夫、あたし達でやつつけましょう！」

多分、ココの持っていた鍵をよこせとバイロは言ったんだと思うけど、ルーシイさんは星霊の鍵を狙われていると思っただけ。まあこいつを倒すことには賛成だ。このバイロって人を気絶でもさせておけば、竜鎖砲の発動に時間がかかるはず。この人が一番偉い研究者だったはずだから。そうだ、この人から竜鎖砲について聞き出せば何か分かるかも。そうになったら、尚更この人を倒しておかないと！

「お前はアースランドの魔導士！ヒューズとシュガーボーイはどうしたのだ！」

「その二人ならやつつけましたよ」

「なんだと!?おのれ…！早く鍵を渡さんか！」

「あんなんかに渡さないって言ってんでしょ！ゴーシユ、サポートは任せるわよ！」

「了解です！」

もう勘違いしていることは放っておこう。倒してから話せばいいや。

「開け、金牛宮の扉！タウロス！」

「モオ〜!!」

「なんじゃこりゃ、牛!？」

「この前のご褒美がまだですな！」

「あいつをギャフンと言わせたら考えてあげる！」

あ、地下通路でのこと根に持つてたんだ。でもこれ、タウロスがあっさりやられるフラグに聞こえなくもないような…？

「ギャフンと、言え〜!!」

「ヒイ！」

「意外と素早い！」「ヒイじゃなくてギャフンと言え！」

タウロスの一撃を軽やかに躲した。もうかなりの年齢だと思っただけど、まさか簡単に避けられるとは思ってなかった。バイロは懐から薬品か何かが入った瓶のような物を取り出す。

「小癩な！フレイムリキッド！」

「モオ〜!？」

タウロスに赤い液体がかかった次の瞬間、かかった場所から突然発火しタウロスを包み込んでいく。ああ、やられるフラグだったか…。どうやらカナさんとかレビイさんと同じように、属性を変えて戦うタイプらしい。

「タウロス！何、今の魔法？」

「その液体に気をつけて！」

「ストームリキッド！」

「ルーシイさん、こつちに！ディフェンド 防御結界・ドーム 円蓋！」

バイロが薬品を放つ前にルーシイさんとココを守るように結界を展開させる。直後、青い液体が竜巻となり僕らを包み込んだ。

「開け、処女宮の扉！バルゴ！」

「また別の何かじゃと…！まさか、アニマと同じ原理なのか…？」

「お仕置きします！スピカホール！」

「ぬわあ〜！」

バルゴが作り出した穴に落ちていった。これならいくら元気な老人だろうと登ってこられないだろう。変な薬品持つてなければ大丈

夫だ、うん。…フラグ、じゃないと信じたい。でも少し嫌な予感がする。

「ナイスです、ルーシイさん！」

「す、すごい…！」

「姫！お仕置きですか？」

「なんでよ！」

「あの、ココって言ったっけ。足を治療するからちよつと見せてくれる？」

「え？あ…」

ルーシイさんとバルゴがいつもの漫才に入ったので、僕は聖結界をココの足に展開する。一応、痛みを和らげることくらいはできるはずだ。

「ところで、あの老人の狙いつてその鍵だよね？」

「…！そ、それは…」

その時、何か大きな音と地震のような揺れが起こった。…しまった、やっぱりさつき思ったことはフラグだったか。

「何？この揺れ…」

「お腹の音ですか、姫？」

「あのね…」

「皆、これに乗って下さい！」

地面が揺れるってことは、さつき穴に落ちていったバイロが何かしているはず。だったら地面から攻撃が来るだろうから浮遊結界を展開してココとルーシイさんとバルゴ、そして僕が乗り込み少しずつ浮かんでいく。

「ぎゃあー！」

「ったあ…。何あれ!？」

「タコの足です、姫」

「そこじゃなくって！」

「あ、危なかった…」

地面がひび割れて、巨大なタコの足が出現する。その内の一本が浮遊結界を攻撃してきたけど、狙いが逸れたのか掠る程度でなんとか

割れずに済んだけど…。もう少し遅かったら直撃だった。

「オクトパスリキッド、自らあの薬を飲んだのだ！これで妙な魔法を使っても効かんぞー！」

「ど、どうかしらね…？」

「姫。効かないと思います」

「なんでタコなんだろう…？もつとカツコイイ生物にすればいいのに。」

「やる前から諦めてどうすんのよ！」

「つて、そんなこと言ってる場合じゃ…！」

僕らを叩きつけようと、巨大な足を振り下ろしてきた。ルーシイさんはバルゴが抱え、僕はココを背負って、跳んで回避する。浮遊結界バレルは元々簡単に壊れる結界だったけど、相手の巨大さもあって、下にあった建物ごと押しつぶされるようにして破壊されてしまった。

「ココを渡せ！そして貴様らも振り返ちにせんと気が済まん！」

「根に持つタイプ!?」「男運ないですね、姫」

デイフエンド
「防御結界・匣！」

相手の攻撃から身を守る。ルーシイさん達の方にも同じ結界を作っておいたから、これでとりあえず大丈夫だけど…。このまま食らい続けられれば数分で壊れてしまうだろう。

「姫、これを」

「何これ？」

「伸縮可能な星霊界の鞭、エリダヌス座のエトワールフルグです」

「星の大河…？」

「役立てて下さい。効かないと思いますが」

「なんでそんなにマイナス思考なのよ！やってみないと分からないでしょー！」

「二人とも、あんまり長く持ちませんよ！」

「分かった！バルゴは一回戻って！」

「それではご健闘を、姫」

「なんでか分からないけど、ルーシイさん達の方だけ攻撃が激しい。どんだけさっきのことが悔しかったんだよ…。しかも思ったより攻

撃力が高い…！もうルーシイさんを守る結界に罅が入り始めている。

「解除しますよ！」

「行くわよ！」

「なんじやそりゃ。そんなものは効かんぞ！」

「やあつ！」

ルーシイさんが真正面から、鞭を振るって攻撃する、けど…。残念、効果はいまひとつのようだ…。まあ、あんな巨大な化け物相手では効かないんじゃないかと思つてたけど。

「痛くも痒くもないですなあ…！」

「弾性結界・球！」
バウンド スワイア

ルーシイさんに向けて、また巨大な足による攻撃をしてきたので、弾性結界バウンドでルーシイさんを包み込む。バイロの攻撃により弾かれ、建物と建物の間をバウンドしていきやがて床を転がり止まった。

「ルーシイさん、大丈夫ですか!？」

「ちよ、ちよつと酔つたかも…。でも、なんとか、大丈夫よ…！」

僕も結界を解いて、ルーシイさんに近寄る。目を回しているけど、本当に大丈夫なんだろうか…？弾性結界バウンドのこの使い方は止めた方がいいかもしれない…。

「ルーシイさん、それを使ってあいつの攻撃を封じることができませんか？」

「…そつか！うん、いけるわ！」

どうやら僕のやろうとしていることが分かったみたいだ。ルーシイさんが星エトワールフルレクの大河を足に巻き付け、ターザンのように移動する。その間に僕はココを背負いながら見晴らしのいい場所へと移動を開始する。

「あんた、あの子がいるのになんでそんな攻撃ができるの!?!巻き込まれるわよ！」

「あれは我が軍の物だ。貴様には関係なからう！」

「仲間なら、守るべきものでしょ!?!」

「…っ！」

「ええい、儂の体でチョロチョロするな!!」

ルーシイさんは攻撃を紙一重で躲していく。少しすると、攻撃の手数がほとんどなくなり、それを見計らってルーシイさんが絡まってくる足に鞭を巻き付ける。

「そんなことも分らない人に、負けられない!!ギルドの人間として、絶対に!!」

「あ、足が…!いつの間に…!?!」

「その通り。そしてこれで、終わりです!!ディフェンド防衛結界・トータル柱!!」

「ぬああくっ!!?!」

ルーシイさんが時間を稼いでくれたおかげで、結界を展開することに魔力を注ぐことができた。超巨大な柱を生み出し、それをバイロへと突き立てる。これで、動くことは出来ないはずだ。

「ま、まだ負けるわけには、いかんだ…!」

「まだ意識があるのか…!」

「…!大丈夫よ、ゴーシユ!」

「え?」

「火竜の咆哮!!」

「アイスキヤノン!!」

「ぐはあっ!!?!」

バイロが僕の結界を動かそうとしている隙について、炎と氷の一撃が別々の方向から放たれ、バイロはあらぬ方向へと吹っ飛ばされてしまった。…なんだ、結局おいしい所は持ってかれてしまったわけだ。

「ナツ、グレイ!」

「大丈夫か、お前ら!」

「なんでここに?」

「そりやお前、こんな面白そうなタコがいたら向かうつきやねえだろ!」

なんともナツさんらしい。ただ面白そうだからこっちに戻ってきたと…。グレイさんの方を見ると視線を逸らしたので、グレイさんも同じ理由か。

「で?その子は誰なんだ?」

「あ、そうだった!ごめんね、背負ったまま話し込んで」

「…」

とりあえずココをゆつくりと降ろし、話を聞こうとしたんだけど何も話さずにただ鍵を見つめている。多分、葛藤しているんだろうな…。鍵を僕らに渡せば、永遠の魔力とやらは手に入らない。けど王様に渡してしまつたら今魔水晶ラクリマの元にいる仲間が巻き込まれてしまう。というかこうして鍵を持ってココが逃げ出しているということは、多分原作通りに魔水晶ラクリマの元へパンサーリリーが向かっているのかな。

「どうしたの？」

「腹でも痛いのか？」「なんでよ」

「これは、あなた達の仲間が死んじやう装置の鍵…」

「これが、竜鎖砲って奴の鍵ってことか！」

「あいつの言つてた鍵って、こつちのことか！」

「ルーシイさん、やつぱり勘違いしてたんですね…」

「私は永遠の魔力より、皆で仲良く暮らしたいよう…！だから、この鍵、壊して…！」

泣きながらココはこちらに鍵を差し出す。この子みみたいな人もちゃんとこの世界にはいるんだな…。魔戦部隊とか王国軍の人って、目的の為なら簡単に人を傷つける人ばかりなのかと思つていたけど、ちゃんとこの子みみたいな人がいて良かった。

「ありがとう。君のおかげで、僕らは仲間を守ることができてる。ナツさん、任せていいですか？」

「おっし、任せておけ！火竜の鉄拳！」

ココから鍵を受け取り、ナツさんに鍵を渡す。ナツさんの炎で少しずつ鍵に罅が入り、やがて粉々に崩れた。

「それで、これからどうする？これで竜鎖砲とやらが起動することはなくなつたんだろ？」

「いえ、まだ鍵を破壊しただけです。装置自体は破壊できていない」

「そうね…。また鍵を作られていたら竜鎖砲を起動されてしまうってことだもんね」

「そういえば、竜鎖砲って滅竜魔法で動くはずって聞いた気がするん

ですが…」

「えっと、私も詳しくは分からないんだよう…。バイロとゴーシュが言うには、滅竜魔法じゃなくても動けるようにしたらいいの」

「ゴーシュって、こっちの世界のゴーシュか？」

「あのビビリ野郎だよな？あいつも研究員だつてのは聞いていたが」

「ゴーシュはバイロの上司なんだよう」

「…マジで？」

…なるほど、こっちの僕がいることで竜鎖砲が改良されて、滅竜魔法以外の動力でも始動できるようになってしまった、と。僕というイレギュラーがいることで敵に有利になってしまったっているようだ。でも、バイロより役職が上だとは思ってなかった…。この世界の僕、どんだけ頭いいんだろう？

「それじゃあ、目的通りその竜鎖砲を探すぞ！」

「おっしやあ！その装置ぶっ壊して、王様とつちめてやんぞ！」

「ココって言ったつけ？あんた、道案内頼める？」

「うん、もう走れるよう！」

会話中もずっと聖結界^{ホーリー}で治療していたから、ココも走れるくらいにはなったようだ。これで装置さえ破壊してしまえば、もう何の懸念もなくなる。

「お前たち、こんなところにいたのか」

「エルザ！」

「いや、待てー！こいつは…！」

服装がいつもの鎧姿ではなく、露出の多い黒を基調とした装備を纏っている。つまり、このエルザさんは…エドラスのエルザさん？

「俺達のエルザが…負けたのか…？」

ナツさんが、吹っ飛ばされた。

第27話 終焉の竜鎖砲

ここは竜鎖砲制御室。部屋を対魔戦用魔水晶ウイザードキャンセラーという魔法を無効化してしまふ魔水晶ラクリマで覆っている為、魔法を使って破壊することは不可能とされている。その部屋へと向かうエルザさんと、捕縛されているナツさんとグレイさん。

「ご無事ですか、ナイトウォーカー隊長！」

「バカ、どこが無事なもんか！そのお怪我は、どうされたのですか？」

「大したことはない」

「その者たちは？」

「竜鎖砲の鍵だ。陛下は中か？」

「は、はい！」

門番によつて扉が開かれていく。よし、作戦通りエルザさんたちが内部へと進入した。

「…よし、行こう。ココ、頼むよ」

「うん！」

僕達の前に現れたエルザさんは、アースランドのエルザさんだった。ナツさんは失礼な発言をしたので吹っ飛ばされてしまったけど。なんか似たような装備があつたので変装していたんだとか。で、エルザさんがナツさんとグレイさんを連れて竜鎖砲を破壊するという作戦になった。僕とルーシイさん、そしてココはレギオンの元へと向かう。竜鎖砲を発射されてしまった場合、レギオンの体当たりなら軌道を逸らせるかもというココの案だ。

「にしても、やけに広すぎない？この城」

「竜鎖砲がそれだけ大掛かりな装置ってことですかね？」

「王様が造らせたんだよう」

これ、城全体が変形するんだろうか？どうだっけ…。ヤバイ、マジで覚えてない。最近僕の前世の記憶があやふや過ぎるな…。さっき、エルザさんのこともアースランドの方だと気づけなかったし。それでいてたまに覚えていることもあるから困る。

「エルザさんたち、上手くいけばいいんですけど…」

「ナツがいるから不安よね…」

ナツさん、勝手に暴れないといいんだけどね、ホントに。エルザさんは上手くやるとは言ってたけど、不安は無くならない。

その時、地面が揺れ始めたのを感じた。これって地震じゃない…よね？

「城が変形してる!?!どうなってるのよ!?!」

「始まっちゃったんだ…!竜鎖砲が、起動しちやったんだ!」

「ま、まるでギルダーツシフト…。どこのおバカさんがこんなこと考えるわけ!?!」

「王様だよう!」

「つていうか、早すぎませんか!?!」

エルザさん、上手いかなかったのか…!?!やっぱりナツさんが下手なことをしてしまったとか…?」

「あれ!あれがレギオンだよう!」

「お、思ったよりデカっ!?!」

「早く乗りましょう!ココ、どの子?」

「あの子だよう!レギピョ〜ン!」

ココの声に反応して、レギオンの一体がこちらに近づいてきた。ルーシイさんの言う通り、実際に近くで見ると予想以上にデカく感じる。なるほど、これが百聞は一見に如かずってことか。…使い方違う気がしなくもないけど。とりあえず大急ぎでレギピョンに乗り込むと、竜鎖砲の起動音が少し小さくなった。

「これ、もしかしてエルザたち?」

「きつとそうです!急ぎましょう!」

「レギピョン、お願い!」

竜鎖砲が起動されたと同時に迸った巨大な赤い光の柱の元へと飛び立つ。一度発射されそうになって出力が下げられたということは、エルザさんたちが上手くやったってことだ。でも、起動しているんだからまだ安心はできない。いつ隙を突かれて起動させられてしまうか分からないんだから。

「いや、待って!あれは…!」

光の柱の出ている部分から、骨の竜のような物が現れる。ついに、起動されてしまった。勢いよく飛び出した骨の竜は空高く伸びていき、遙か上空に浮遊する巨大魔水晶ラクリマに、接続された。ていうか接続早っ!?あれじゃ体当たりとか無理だ…。

「間に合わなかった…!」

「ココ、あそこに突撃できる? ナツさんたちを回収しないと!」

「うん! レギピョン!」

レギオンが頭から制御室へと突っ込み、部屋の内部へと突入する。中にはナツさんたちとナイトウオーカー、国王、そしてこの世界の僕——ニチャさんたちを魔水晶《ラクリマ》に変えようとした時にも見かけた青緑色の髪の青年がいた。

「皆! 乗って!」

「ルーシイ!」

「どこだ?」

「お前…こんな姿になっちまったのか?」

「ごちやごちや言つてないで早く乗って!!」

王国軍がレギオンに気をとられている隙に、ナツさんたちがこちらに駆け寄って来る。…僕は、こっちの世界の僕の元に行ってみることにした。近くで踏まれそうになってたから、ナツさんたちが乗るまでに話くらいは出来そうだ。

「エドラスのゴーシユ!!」

「え!? お、俺か!」

「僕はアースランドのゴーシユです! 単刀直入に聞きます! 今からでも竜鎖砲を停止させられますか!」

「そ、そんなこと無理だ! 起動したらもう、止まらない! そもそもそんなことしたらどうなるか…!」

…なるほど。なんか気の弱い人だ。…少し、似ている気がする。前世の僕に。前世での記憶はもうほとんどないけど、ただ周りに流されて過ごしていたのを覚えている。周りの目を気にし続けながら過ごしていたのを覚えている。…人と関わりたくない、関わるのが怖いと思いつながらビクビクしていたのを、覚えている。

「…貴方は、それでいいんですか」

「な、なんだ突然…」

「貴方は、本当はこんな非人道的行為は許されないと思っているんですよ!?! だったら、ちゃんとそれを周りに伝えてよ!! 怖いかもしれないけど…。 伝えないと、何も変わらない!」

「…お、俺はそんなこと…:ぐはっ!」

「言葉で巧みに取り繕わないで。同じ僕だから、言ってるんです。勇氣を出して下さい」

殴るつもりはなかったんだけど…。 でも、何となくこうしないと伝わらないような気がしたから。 後は、彼自身が変わってくれることを期待しよう。 僕が言った通りのことを考えているという保証はないけど…。 違う所も多いのかもしれないけど、この世界の人は本質は変わっていないと思う。 だったら、僕だってそうだと思いたかった。

「お待たせしました」

「いや? 少しスッキリしたぜ」

「殴るとは思わなかったけどね!」

「よし、魔水晶ラクリンマの元へと向かうぞ!!」

「皆を、助けるんだ!!」

どうやら話はまとまっていたらしい。 早く止めないと…!! マグノリアの人達と、エクシード達を守るんだ!!

☆

あいつは何者なんだ。

俺と同じ名前、小さい頃の俺と同じ顔、俺と同じ声。 それでも別人だ。 こことは別の世界から来た、アースランドの俺。 彼は俺に何を伝えたかったんだろう? いきなりこの制御室にレギオンを使って突っ込んできて、去り際に俺に言いたいことを言って、最後にぶん殴って飛んでいった。

はつきり言って、腹が立った。 こいつに俺の何を分かるんだって。 でもそれもあいつの目を見て失せてしまった。 力強いけどどこか悲しそうな目。 どうしてそんな目をしているのか分からない。 こつち

の世界の俺がこんな臆病だから哀れに思ったからとかそんなところか。でもあいつの言葉はまるで、俺の心の声みたい感じた。

「レギオン部隊、出撃！」

エルザが髪を短く切り兵士にそう命じる。あのエルザがここまで傷付いている姿を、俺は初めて見た。たった数人のアースランドの魔導士。奴等がそれほどの実力者だとも言うのか。

「俺も行こう。ゴージュ、ドロマアニムを用意させよ」

「なっ……陛下、あれは禁じられた兵器です！あれを使ったらこの世界は……！」

「用意せい!!!」

「……っ！わ、分かりました……」

陛下の殺気の籠った血走った目に恐怖を感じる。恐怖で体は動かなくなり、俺はただ言いなりになるしかない……。やっぱり、無理だ。俺がこの人に逆らうなんて……。竜鎖砲のスペアの鍵を作ったのも、ほんの少しでも滅竜魔法を手に入れることができればそれを増幅させることができる装置を作ったのも、この人の命令だ。その装置が魔力を膨大に消費することは分かっていたが、この人にはそれを気にする素振り一つない。肉を切らせて骨を断つ、ということだろう。この作戦が成功すれば永遠の魔力が降り注ぐのだから。

勇気を出せだと……？それは俺にとつて、最も難しいことだ。周りの人間を信用してこなかった俺には、それは崖から飛び降りるのと似たようなものだ。そんな、こと……。

ドロマアニム。あれを起動させたらこの世界は終わりだ。少なくとも魔力が消耗され、やがて全て無くなる。この世界が、終わる

……

☆

夜の闇の中、猛スピードでエクスタリアへと向かう、僕らに乗せたレギピオン。竜鎖砲が繋がれたマグノリアの魔水晶ラックリマは徐々に加速しているが、この調子であれば激突する前にたどり着けるはずだ。

「急げー!!ぶつけるわけには、いかねえんだーっ!!」

ナツさんの声に反応するかのようになり、さらにスピードを上げるレギピオン。よし、もう目の前にエクスタリアが見えているけど先回りすることができた！

「頑張つてレギピオン!!」

レギピオンが魔水晶ラクリマに頭から突っ込む。けど、やはり質量の差なのかスピードが全然落ちない。

「駄目だ、一向に止まる気配がねえ！」

「私達も、魔力を開放するんだ!!」

「お願い、止まつてーっ!!」

「うおおおっ!!止まれーっ!!」

ディフェンド
ウォール
「防御結界・壁!!」

皆が魔力を開放している中、僕はレギピオンが少しでも踏ん張れるように結界で足場を作る。エクスタリアには、ギリギリまだ触れていない。後は、僕も魔力を開放する！

「ナツーっ!!」

その時、聞き慣れた声が聞こえてきた。青い影がナツさんの元へと急接近し、すぐそばで止まった。ハッピーを久しぶりに見た気がする。

「オイラ、あのさ……………」

「ああ!!手伝えよ、相棒!!」

「…!あいさーっ!!」

ハッピーも不安だったんだろう。でも、そんなことは関係ないとかかりのナツさんの言葉で、ハッピーに笑顔が戻った。でも、このままじゃまずい。このままだと衝突は免れない。

「ぶつかるぞ!!」

「結界が…!」

「くっそーっ!!」

「皆さーん!!」

結界が壊れ、エクスタリアの岩壁に足がつく。絶体絶命だが、今聞こえた声で僕は少し安堵した。聞き間違えるはずもない。だって、僕はこの世界に来てからずっと彼女と一緒にいるんだから。

「ウエンデイ!?」

「シャルル!」

「こいつは一体…!?」

「エクスタリアにいる、全エクシード達です!!皆、この危機に立ち上がってくれたんです!!」

…こんな危機的な場面だけど、エクシード達の翼が光を放っていて、この夜の空に沢山の光の川が出来ているようでとても幻想的な光景だ。でも、タイミング的に違和感がある。違和感を感じるということとは、原作と何かが違うってことか?

「ウエンデイ、シャルル!二人とも、よくエクシード達を説得してくれた!」

「ニチャってエクシードのおかげよ。あいつが来てくれなかったら多分、ひどい目にあってたわ」

「ニチャさんが?」

だからか。僕がニチャさんを助けたことでエクシード達の説得が早まっていたってことだろう。

「おい、話は後だ!!今はこの魔水晶ラクリマを止めるぞ!!」

「ガジル!?なぜ早く魔水晶ラクリマを元に戻さなのだ!早くしないか!!」

「黒猫が邪魔すんだよ!!」

「どつちにしろ、今からじゃ間に合わねえ!」

「止めるしかない!!てか、絶対止めるんだからっ!!」

ガジルさんにウエンデイ、そしてエクスタリアに住む全エクシード達。これだけいれば、止められる。いや、絶対に止めて見せる!もう結果を出せるほどのスペースはないけど、魔力をその分開放させれば
んー

「ココ!?なぜお前が…」

「リリー!気づいちやった!私、永遠の魔力なんていらな…永遠の笑顔がいいんだ!」

「なんて馬鹿なことを!早く逃げろココ!!この島は何があっても止まらないんだ!!」

「止めてやる!体が砕けようが、魂だけでも止めてやる!!」

「うう……あいさーっ!!」

皆が魔力を開放し、巨大魔水晶^{ラクリマ}を必死に食い止める。人間もエクシードも、全員が必死に。自分たちの生きる場所を、仲間たちを、家族を守る為に。

「シャゴツト、そんな翼では無理じゃ!」

「いえ、私も……!」

遅れてきた老年エクシード達の中に、片翼の白いエクシードがいた。彼女は確かエクスタリア王女である、クイーン・シャゴツト。彼女は生まれつき片翼で、代わりに未来を予知する力があつた。その能力を使って人間たちに自分が人間の死を決めていると思ひこませていたということを、今思い出した。だが、片翼ということは、魔法を満足に使うことが出来ないということ。

「きやあつ!」

「シャゴツト!!」

とうとう魔力が尽きたのか、シャゴツトの翼が消え、落下を始める。だが、黒いエクシード——パンサー・リリーが、彼女を途中で受け止めた。

「女王様。嘘をつくのに、疲れたのかい」

「……ごめんなさい。私……」

「…俺もさ。どんなに憎もうとしても、エクスタリアは俺の国なんだ!」

「リリー……!」

もう、原作をほとんど覚えていない僕には思い出せないけど、確かにパンサー・リリーは元々エクスタリアを追放され墮天となったエクシードなんだろう。だから王国軍に所属していたんだ。

「皆すまねえ……俺なら止められた!人間たちを、止められたんだ!!」

「思いは……」

「っ!女王様……?」

「思いは必ず届くわ!」

シャゴツトが、こちらを向く。僕達ならそれを照明できると言っているような気がした。…やってやるさ。妖精^{フェアリーテイル}の尻尾は、最強なんだか

ら！

「止まれーっ！！」

「みんな頑張れ！」「俺達ならできるぞ！」「押せーっ！」

「負けるかよ！！」

「諦めて、なるものか！！」

「うううっ…！」

「うおおっ！！」

「止めるんだから、絶対！！」

「私達も押すのよー！」「あいさーっ！」

さらに魔力を開放し、一つの大きな光となる。それが段々と大きくなっていく、巨大魔水晶ラクリマにもエクスタリアにも負けなくらい、いやそれ以上の巨大な魔力の塊となる。

「はあーっ！！」

「メエーン！！」

「あいさーっ！！」

『あいあいさーっ！！』

「頼むから…！！」

「お願い、止まってーっ！！」

そして、ついに巨大魔水晶ラクリマは、逆方向へと移動を始めた。よし、と安堵した途端に、周囲が光で包まれた。

「な、何っ!？」

エクシード達も僕達も、光に近づくこともできず反対側へと身を投げ出される。が、エクシード達は翼エーラがある為空中で体勢を立て直し、僕達全員を受け止めてくれた。

「シャルル！」

「あれを見て」

傍にウエンデイを受け止めたシャルルがいることに気づき、シャルルが指差す方向を見て唾然とってしまった。なぜなら、マグノリアの皆が消えてしまっていたのだから。やがて繋がれていた竜鎖砲も消滅を始め、巨大魔水晶ラクリマは完全に消滅してしまった。何が、どうなったんだ…？

「魔水晶が…」

「竜鎖砲の鎖も…。一体、どうなったの…?」

「アースランドに帰ったのだ」

僕達がいる場所よりもさらに上空から声が聞こえた。そこには、白いレギオンに乗った、ミストガンの姿があった。

「ミストガン!」

「全てを元に戻すだけの巨大なアニマの残痕を探し、遅くなったことを詫びよう。そして皆の力がなければ間に合わなかった。感謝する」

「おおつ!」 「元に戻したって…」

「そうだ。魔水晶ラクリマはもう一度アニマを通り、アースランドで元の姿に戻る。…全て終わったのだ」

「やったのか…?」 「俺達、エクスタリアを守れたんだ!」

皆が歓喜の叫びを上げる。そうか、さっきの光はアニマが展開された時に発せられる光だったんだ。危なかった…。一歩間違えれば、このタイミングでアースランドに送り返されてしまうところだった。…まだ、帰るわけには行かないんだ。いくら僕が原作知識をほとんど覚えていなくても、嫌なことが起こるタイミングや原作が外れた時の違和感は分かる。…今は、嫌な予感の方だ。

「リリー。君に助けられた命だ…。君の故郷を守れて良かった」

「ええ…。ありがとうございます、王子…!」

「王子が帰って来たよう…!」 「王子!」

「…ゴーシュ?どうしたの?」

「ちよつと、ね…」

嫌な予感がすることと、今の現状で残っている不安要素を考えると…後の問題は、王国軍?まさか、ここに向かって来ているのか…?

「…!!」

そう考え王都の方を確認すると、レギオンが何体もこちらに接近しているのが見えた。…そして、先導しているレギオンの頭から光線が放たれる瞬間も。

「防御結界・壁!!」

誰を狙っているかまでは把握できなかつたので、出来るだけ大きめ

に結界を展開して守る。光弾は結界に直撃し、何とか防ぐことができ
た。当たった場所からして、狙われた人物は。……りりーだ。

「今のは、攻撃か!？」

「皆、気をつけろ!!」

これを取り切れれば終わりだという、そんな確信に近い予感があっ
た。エドラス王国軍との、最終決戦だ。

第28話

DRAGON SENSE

「皆さん！王国軍はエクシード達を魔水晶ラクリマに変える武器を持っていきます！エクシード達を守って下さい！」

ナイトウォーカーとレギオン部隊がこちらに接近しているのを確認しながら、皆にそう伝える。

「裏切り者め。所詮は墮天、元エクシード。王に救われた恩を忘れ刃を向けるとは」

「リリー、大丈夫!？」

「ああ、大丈夫だココ。…すまない、助かった」

「いえ、それよりも早く散開しましょう！このままじゃエクシード達が危ない！」

「あの野郎、よくも俺の猫を狙いやがったな！」

ガジルさん、まだあなたの猫ではありませんよ？

「スカーレット!!」

「ナイトウォーカー…!」

「お、重い…!」

あとごめん、シリアスな場面なのは分かっているんだけど、エルザさん換装して自分で飛んで下さい。鎧姿のエルザさんを持っているエクシードがめっちゃくちゃ辛そう。

「待て、エルザ。…エドラス王国王子であるこの私に刃を向けるつもりか、エルザ!!ナイトウォーカー!」

「王子?!」「ぐっ…!」

ミストガンの王子発言で、ナイトウォーカーに躊躇いが生じる。そのせいかナイトウォーカーが率いていた部隊にも戸惑いが見られ、膠着状態になった。このまま相手が何もしないなら、急いでエクシード達を…

『フハハハハ！王子だど？笑わせるでないわ！儂は貴様を息子などとは思っておらん!』

「王様の声だ!」「え、どこにいるの?」

辺りに声が響く。でもどこから響いているのかが分からない。あ

の王様もレギオンに乗って…？いや、王様がわざわざこの部隊の誰かのレギオンに乗っているとは考えづらい。もし乗って来るんだとしたらそれはナイトウォーカーとだろう。それにこの声、どこか機械的というか、スピーカーで話しているかのような…？

『七年も行方を眩ませておいて、よくもおめおめと戻ってこれたものだ。貴様がアースランドでアニマを塞いで回っていたのは知っておるぞ？売国奴め！貴様は自分の国を売ったのだ!!』

「この声、どこから…？」

「まるで、地の底から聞こえてくるみたい…」

「おい！姿を現せ！」

「そーだそーだ！」

「あなたのアニマ計画は失敗したんだ。もう戦う意味などないだろう」

その時、ある場所が光を放ち始める。王都ではなく、どこかコロシムを思わせる廃墟の中央、その地面からだ。

『意味？戦う意味だと？』

「なんだ、この音？いや、これは…！」

「魔力で大気が震えてるんだ！」

世界全体が揺れているような感覚。エクシード達が僕達を掴んで飛んでくれている現状で地震はあり得ないから、ルーシイさんの言う通り大気が震えているとしか考えられない。…これほどの魔力を、初めて体感した。

『これは戦いではない。王に仇なす者への報復！一方的な殲滅！』

「何よあれ!」「魔導兵器か!？」

光る地面から徐々にせり出したそれは、一見銀色の卵のようにも見える。だが鎖で所々繋がれていて、まさしく封印されていた物が出現したって感じた。恐らく王様はあの魔導兵器の中に入っているんだろう。

『儂の前に立ちはだかるつもりなら、たとえ貴様であろうと消してくれる!!跡形も無くなあつ!!』

「父上…」

『父ではない。僕は、エドラスの王である!!そう、貴様をここで始末すればアースランドでアニマを防げる者はいなくなる!また巨大な魔水晶ラクリマを作り上げ、エクシードを融合させることなど何度でもできるではないか!!』

「あれは……」

変形を繰り返し、やがてその姿はドラゴンを模しているような形となった。以前マグノリアで見たドラゴノイドを彷彿とさせるその姿だがその魔力はドラゴノイドより遙かに上だ。ナツさんの魔力を増幅したドラゴノイドと、エドラス中の魔力を集めたあの魔導兵器では、比べようもないのが当然とも言える。

『フハハハ!!王の力に、不可能はない!!王の力は、絶対なのだあつ!!!』

ただの叫び。それだけでさらに大気の震動を感じる。そして本能なのか、あいつに近づいてはならないと警告が鳴っているように感じる。

「おお……。あの姿、あの魔力……」

「ま、間違いない……」

「な、なんとということじゃ……」

「あ、あれは……」

「ドロマ、アニム……」

老エクシード組とクイーン・シャゴットが絶望するかのように口々に呟く。

「ドロマ・アニム、こっちの言葉で竜騎士の意味……!ドラゴンの強化装甲だど!?!」

「ドラゴン……!」

「言われてみればそんな形……」

「強化装甲?」

「強化装甲って、何……?」

「対魔戦用魔水晶ラクリマ・ウィザードキャンセラーが外部からの魔法を全部無効化させちゃう、搭乗型の甲冑……!王様があの中で、ドロマ・アニムを操縦してるんだよう!」

…魔導士用の初見殺しじゃん。そんなのに襲われたら魔導士には一溜まりもない…。

『我が兵達よ！エクシードを捕らえよ!!』

「はっ！」

「まずい、逃げるんだ!!」

「皆、散って!!何が何でも、生き延びることだけ考えて!!」

先に魔水晶ラクリマに変える武器の存在は伝えている。これだけでエクシード達も、一塊になって逃げるより、散開した方がいいということに気づいてくれるはずだ。

「逃がすな！追えーっ!!」

「マジカライズキャノン、充填完了！」

「させない！防御結界・柱!!」
ディフェンド
システム

「何っ!？」

あの武器は、どうやら充填するための時間が必要らしい。だったらその間に、全部ぶっ壊せばいい！

「皆さん、あの武器は充填している間を狙いましょう！」

「よし、エクシードを守るんだ！」

「うん、そうだね…：：：そういえばナツ、あんたこのレギオンに乗ってても酔わないけど…。乗り物酔いに効くトロイアでもかけてもらったの？」

「なぬっ!?!こいつだって仲間みたいなもんだろ…！乗り物扱いすつか、フツ…？引くわー」

「そ、そうね、ごめんなさい…。なんかこのやり取り、すっごい久々な感じ…」

「無駄話はともかく、あのデカブツはどうする？」

「無駄とか言うな！」

…ナツさんたち、余裕そうだね？こっちはあのマジカライズキャノンとかいうのを壊してるんだからちよつとは手伝ってほしいんだけど。

「相手にするだけ無駄だよ。魔法が効かないんだから」

「躲しながら行くしかない！今のエクシードは無防備だ。俺達が守ら

ないとー！」

「よーし、行くぞー！」

「…話まとまったんなら手伝って下さい」

ちよつとジト目気味に言ってしまったけど、僕は悪くないと思う。途中から会話に夢中になりすぎです。ちゃんと手を動かして、ホントに僕だけが疲れるから。

「わ、わりい…アイスメイク…氷造形・ランス槍騎兵！」
「エトワールフルク星の大河!!」

レギピオンが移動を始め、辻斬りに近い形で兵士が持っている武器を破壊、もしくは強奪していく。それに加えて、デイフェンド防御結界を小さく大量に作り出し、放たれたエネルギー弾にぶつける。こうすればエクシード達の身代わりとなってくれるから。これで逃げ切れるといけど…

『躲しながら？守る？クハハハハハッ!!人間は一人として逃がさん!!全員この場で塵にしてくれる!!消えろっ!!』

「防御…っ！」

レギピオンに向かってピンポイントに放たれたドロマ・アニムの口撃。それはやや低空を飛んだ瞬間に狙われたこともあり、あつという間にすぐ目の前へと迫って来た。結界を展開しようとした瞬間、ミストガンと彼が乗っている白いレギオンが庇うように目の前に現れた。

「ミストガンー！」

『ミストガン…？それがアースランドでの貴様の名前か、ジエラール？』

「…ぐっ！エルザ！今のうちに行け!!」

「しかし…「行くんだ!!」…！」

あのドロマ・アニムという兵器、思っていたよりも威力が高い。このままではミストガンは撃ち落されてしまうだろう。だが、ミストガンには小さい頃に僕らを守る為に使ったあの魔法がある！

「三重魔法陣・鏡水!!」

『何!?!撥ね返した!?!』

ミストガンの目の前に三つの魔法陣が現れる。するとドロマ・アニ

ムから放たれた一撃がその魔法陣に触れた途端に真逆の方向、つまりドロマ・アニメへと反射される。自分の攻撃をそのまま撥ね返す魔法。これなら少しはダメージがあるはず…

「やったかー」

…グレイさん、フラグ回収されちゃうよそれ。強敵相手にそれを言ってしまうと必ずその敵は無事ってフラグ。

「すごい…これがミストガン」

『クハハッ！チクチクするわ！』

ほらあ…。元々漫画なんだから仕方ないのかもしれないけど、そういうフラグは止めてホントに。現実となった今ではフラグを恨んでしまいそうなレベルになっている気がする。…意外と余裕あるな、僕。

「傷一つねえぞ！」あれが…！」

『そう、これがウィザードキャンセラーの力！魔導士ごときがいくら足掻こうと、ドロマ・アニメには効かん！』

再びドロマ・アニメから攻撃が放たれる。さっきの口撃よりも広範囲を攻撃するように放たれた光線は、ミストガンの方へと伸びていく。でもこれくらいなら…!?

「うわああっ!!」

「ミストガン!!」

ミストガンへと直撃した…!?!いや、それよりも今のは、どういうことだ!?今、気づきにくかったけれど確かにミストガンはわざと攻撃を食らった…。小さくジャンプして自分から当たりに行つたように見えた。証拠に彼が乗っていたレギオンには攻撃は当たっていない。自分だけが当たるようにしたとしか思えない。でも、何の為に…?

そのままミストガンは重力に従い地上へと落下していった。

「王子!!」

「黒猫!!」

その後を追ってリリーがミストガンの元へと向かった。…今は考えていたって仕方ない。理由なんか後で聞けばいいんだ。全員無事に帰ればそんなこといくらでも聞けるんだから。

『クハーハツハツハツ!! 貴様には地を這う姿が似合っておるぞ。そのまま地上で野垂れ死ぬがいいわ!!』

まずい。ミストガンを撃墜したことで士気が上がったのか、兵士達の攻撃でエクシード達が徐々にその姿を魔水晶^{ラクリマ}へと変えられ始めている。あのドロマ・アニメの攻撃もエクシード達を魔水晶^{ラクリマ}に変えることが出来るようだ。しかも威力が高いのか、僕の結界など無かったみたい……!

「くそっ! あれを躲しながら戦うのは無理だ!」

「レギピョン頑張つて!」

「でも、どうすればいいの?」

「ルーシイが囷になればいいと思います」

「鬼くっ!」「猫です!」「ほら、話の腰を折らないの!」

段々あのどんな状況でもいつもの調子でいられることが羨ましく思えてきました。

と、次の瞬間。

『な、何?!』

ドロマ・アニメの背中部分から突然爆発が起こり。

『ぬおっ!』

続けざまに強烈な一撃をもらったかのようにバランスを崩し始める。

「天竜の…咆哮!!」

「ぬうっ……! 貴様らはっ!」

ドロマ・アニメが見つめる方向には、三人。

「やるじゃねえか、ウエンデイ」

「いいえ、二人の攻撃の方がダメージとしては有効です」

「どっかのバカ女と同じだな。ドラゴンの誇りを汚しやがる」

ナツさんとガジルさん、そしてウエンデイ。三人の滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}。

「ナツ!」「ウエンデイ!」「ガジル!」

ハッピーとシャルル、ルーシイさんがそれぞれの名前を呼ぶ。

「行け。猫たちを守るんだ」

「……そっちは任せたぞ!」

「でも、あんなの相手に三人で大丈夫なの？」

「問題ねえさ。相手はドラゴン、倒せるのはあいつらだけだ。ドラゴン狩りの魔導士——ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士！」

「…ウエンデイ!!」

「…うん！」

ウエンデイに向けて両手でガッツポーズをつくる。頑張れ、ウエンデイ…! 僕らは、エクシード達を守りに向かった。

正直に言つて、ナツさんたちの加勢に行きたい。でも、六魔將軍オランオンセイブとの戦い。ゼロと戦うナツさんの加勢に行こうとした時と一緒だ。アースランドのジェラルに諭された時と一緒だ。…信じてるよ、ナツさん。ガジルさん。ウエンデイ。

第29話 終わりの始まり

ドロマ・アニメからの攻撃で足止めをくらったせいで、王国軍がエクシード達の元へと接近するのを許してしまった。あそこまで近づかれたら躲すのも難しいだろう。エクシードの身代わりにするため展開していた小さな防御結界も、ドロマ・アニメの一撃でほぼ全て消えてしまった。今からエクシード達を守ろうにも、ここでは遠すぎて魔法が届かない。

「ああ……大変だ！」

「ここまで悲鳴が……」

「追いついた！王国軍だ！」

「しかしなんて数だ」

「どうする？」

「……行くしかないですね」

「ああ。私達がやらねば、エクシードがやられる！」

どれだけ多勢に無勢であっても、行かなければならない。エクシードを守る為には、王国軍を蹴散らすしかない。少しはマジカライズキャノンも破壊出来ているし、今からでも過半数のエクシードを助けることくらいはできるはずだ。

「オイラも戦うよ！」

「ええ。私達の故郷を、守るのよ！」

何より、ハッピーとシャルルの故郷であるエクスタリアに住む、同じ種族の仲間たちだ。二人の為にも助けてあげたい。初めての里帰りがこれじゃひど過ぎるし。

「待っていたぞ、スカーレット」

後方から一体のレギオンがやって来る。その上にはナイトウォーカーの姿があった。

「待っていただと？」

「まずい、罠だ!!」

「伏兵!?」

「レギピヨン、避けて!!」

目の前にはレギオン部隊が、後方からはナイトウォーカーが向かって来ていた。レギオン部隊が持っている武器はマジカライズキャノンではない。あれは攻撃用の武器だ。

レギピオンが高度を上げ上空へと逃げるが、この嵐のような銃撃から逃げ続けるのはほぼ不可能だ。

「デイフエンド防御結界・スワイア球!!……………くっ」

「ゴーシユ、防ぎきれるか!？」

「な、長くは持ちません……!どうしますか!?!このままじゃジリ貧です!」

レギピオンを包み込むように結界を展開する。一発一発は大したことがなくても、これだけ物量差で攻められると厳しい……。

「皆はエクシードを守れ!」

「エルザ!」

「私はナイトウォーカーを引き受ける。皆は一度地上に降りた方がいい」

「それはそうだが……!」

「…分かりました。もしナイトウォーカーがエルザさんと同じくらいの実力なんだとしたら、太刀打ちできるのはエルザさんだけです!」

「…気をつけてね、エルザ!」

「ああ、お前たちもな。任せたぞ!」

そのままエルザさんはレギピオンから飛び降りた。

「よし、俺達は地上に降りるぞ!」

「レギピオン、お願い!」

ココの指示に従いレギピオンが地上へと急降下する。僕の結界が持っている間は攻撃の心配はないから、一気にスピードを上げていく。

そうして地面にぶつかる瞬間にレギピオンが体勢を整え、地面を滑るように着陸することに成功。だけど…

「…いつら……。もう待ち伏せしてやがる」

周囲には少なくとも百人以上はいるんじゃないかと思ってしまうくらいに王国兵。それに少し離れた所にはレギオンも何頭かいる。

「皆、もう止めてよう！」

「やるしかないわね」

王国兵達は僕達を取り囲み、攻撃の隙を窺っている。と、ある一点が光を発していることに気づいた。これは、マジカライズキャノンか！

「デイフエンド 防御結界・壁！」ウォール

「ありがとう、ゴーシユー！」

結界に命中し、小さな魔水晶ラクリマに変わる。やっぱり不思議だ…。一体どんな原理で生物や魔法を魔水晶ラクリマに変えているんだろう…？

それはともかく、今のは明らかにハッピーとシャルルを狙っていた。やっぱりエクシード狙いなのか。

「ハッピー、後ろよ！」

「うわっ！」

「野郎っ!!」

別方向から撃たれたが、今度は 그레이さんが氷壁を生み出し防御する。

「二人とも、伏せて！」

「うぐっ！」

「何なのよ！」

さらに別の方向からハッピーとシャルルに向かって光線が放たれるが、僕が言った通りに伏せて躲すことが出来た。

「なんでハッピーとシャルルばかり？」

「逃げたエクシード共も、すでに過半数が魔水晶ラクリマに変わった。残りのエクシードも別部隊が変えているだろう」

「残るはこの二匹のみ！大人しく我が国の魔力となれ！」

「……………くそっ」

エクシード達を守り切れなかったという事実には、悔しさと怒りを感じる。ドロマ・アニムの攻撃が凄まじかったのもあるけど、もう少しやりようがあったんじゃないかと思えてしまう。

「自分たちの魔力の為に、エクシードはどうなっても構わねえってのか…！それが、この世界の人間なのか!!」

グレイさんの氷欠泉が、目の前に向かって来ていた王国兵達を飲み込み凍らせていく。いつもより魔力が上がっているように感じる。それだけグレイさんも怒っているってことだろう。

「仲間はやらせねえぞ、クソ野郎ども!!」

「ハッピー、シャルル!こっちに!」

「う、うん!」

奴らの狙いは二人だ。僕が傍にいれば、あの光線はいつでも防ぐことが出来る。それに僕の魔法は、後方支援に向いていると思う。これは僕が妖精の尻尾に入って、何度も仕事に同行させてもらい気づいたことだ。周囲を観察して敵の攻撃を防ぎ、仲間たちがカウンターで敵を倒す。何度もそんなパターンがあった。

「開け、獅子宮の扉!ロキ!」

「待たせたね!」

「うりゃーっ!」

ロキさんが現れ、拳に光を宿し敵を次々と殴り飛ばしていく。ルーシイさんも星の大河を入手したことで一人でもできる戦闘の幅が広がった。ココも顎に飛び膝蹴りを食らわせたりと肉弾戦で少しずつ相手の戦力を削っている。

「撃て!」

「魔法弾!」

「任せて下さい!反射結界・壁!からの、防御結界・柱!」

王国兵が銃を構え準備しているのは分かっていたので、敵が発射する瞬間に目の前に反射結界を展開。跳ね返った魔法弾によって敵は次々と吹っ飛ばされていく。そして銃を手放した所を防御結界・柱で破壊した。少しずつでも、これで敵を無力化できる。

「ナイスだよ、ゴージュ!獅子王の輝き!」

「氷雪砲!!」

獅子の光と氷の大砲による一撃が、さらに王国兵たちを蹴散らしていく。これで地上にいる王国兵の半数近くは一掃したはず。でも、ここからが問題だ。

「グオオオッ!!」

「レギオンが、三頭……！」

巨大な生命体、レギオン。それが一気に三頭。他にも何頭かいたはずだが、恐らく残りはエクシード達を捕獲しに行っているのだろう。その体格のもつ突進力は途轍もない。なんせ竜鎖砲によって加速させられた自身の体の何倍もある巨大魔水晶ラクリマの速度を、わずかとはいえ単騎で抑えたんだ。それだけですごい力だと僕は思う。

「レギピヨン、お願い！」

「グオオツ!!」「グオツ……!!」

デイフエント
「防御結界・柱!!」

トーテム
「グオツ!」「グオアツ……!!」

でも、その強大なレギオンは味方にもいる。レギピヨンが敵レギオンの横っ腹に突進攻撃を仕掛けたことで一頭がダウン。残った敵レギオン二頭は、結界を体の隙間に通すことで動きを阻害する。ホント、ドラゴノイドや白ワイバーンとの戦闘が役立っていると思う。

「先にレギオン達を気絶させましょう!あいつらに好き勝手にやられたら勝てません!」

「グレイ!!」

「おう!一頭任せるぞ、ロキ!!」

「ああ!!」

今なら残り二頭のレギオンたちは攻撃することも防御することもできない。そんな無防備な状態にこの二人の一撃を叩き込めば……!

「レギオンは、お腹が弱点だよ!」

「分かった!氷造形アイスマイク・大槌兵ハンマー!!」

「獅子王の輝き!!」

ココの助言を受けた二人の攻撃が、急所の腹部に命中。そのまま二頭とも気絶した。人間で言う所の鳩尾なのか……。僕がしたわけじゃないんだけど、めっちゃ痛そうだから何となく罪悪感。で、でもこれで残るは地上の王国兵だけだ。彼らを倒せば、もしかしたらウエンデイ達の加勢に行けるかも……!

「皆、上!!」

「クソ……これじゃキリがねえ!」

「そんな……！」

上空を見上げる。……合わせて十頭のレギオンがこっちに向かって来ている。しかもその背中には一頭に対して王国兵が十人近くは乗っている。つまり……王国兵も戦力大幅増強ということか。対してこっちは今の戦闘だけでもかなり魔力を消費している。これは……詰み、か……？

「このままじゃ……！」

「……あたしは、諦めない！」

「ルーシィ……」

「ナツたちやエルザだって、まだ戦ってるはず！あたし達だけ、先に諦めたりなんてできないよ!!」

「そうだ……！ナツたちだけにいいカツコさせてられねえ!!」

「所有者オーナーが諦めてないんだ。星霊が先に諦めるわけにはいかないよ！」

「レギピョン！まだ戦えるよね？」

「グオウツ!!」

ルーシィさんの魂の籠った言葉で、皆に再び闘志が戻ってくる。ああ、そうだ……。前世で、アニメで見ていた時もそうだった。ルーシィさんだけじゃないけど、妖精フェアリーテイルの尻尾の皆の不屈の心が、すぐくカツコイイと思つたんだ。自分も、こんな風になりたいって。

「皆さん、譲渡結果ランブルを！少しでも回復して下さい！」

皆に譲渡結果ランブルを2，3個ずつ投げ渡す。即時回復とはいかないけど、戦闘中に少しずつ回復できるかもしれない。

「よし、行くぞ!!」

「うん！あたし達は負けない！だってあたし達は、妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士だから!!」

次の瞬間、この状況を逆転する出来事が起きたんだ。

☆

ドロマ・アニメ黒天。ドロマ・アニメの最終形態であり、エドラス中の魔力を無尽蔵に吸収しエネルギーへと変換してしまう。それは

魔力が有限であるエドラスの世界には大きすぎる代償であり、魔力の枯渇を恐れ人間たちが、自ら禁式としていた。

そのドロマ・アニム黒天の目の前に、三人の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーが倒れ伏していた。

『アースランドの魔導士。尽きることのない永遠の魔力を体に宿す者たち。その中でもこ奴らの、ドラゴンの魔導士のでたらめな魔力！跨越せ、その魔力を！世界はこ奴らを欲しておる！フハハハッ！地に堕ちよ、ドラゴン！』

途中までは三人が圧倒していたが、この最終形態を発動させたことでドロマ・アニムの能力が上昇し、形勢が逆転した。もはや三人には、魔力がほとんど残されていない。

『絶対的な魔法兵器、ドロマ・アニムがある限り、我が軍は不滅なり!!』

「ううっ……」

「ぐっ……!」

「ぐ、ぐっ……!」

『まだ起きるか！大したものだ。その魔力、素晴らしい！我が物となれ、ドラゴンの魔導士!!』

「うあっ!!」「ぐおっ!!」「きやあっ!!」

ドロマ・アニム黒天が、三人にさらに追い打ちをかける。三人は打ち上げられ、数m先に落下した。これではほとんど死体撃ちにも等しい。もつとも、国王であるファウストは多少のパーツの破損は仕方ないと考えて攻撃している為、死体どころか機械か何かのように考えているようだが。

『もつと魔力を集めよ！空よ、大地よ！ドロマ・アニムにもつと魔力を集めよ!!』

ドロマ・アニム黒天がその右腕に取り付けられた巨大な槍を掲げると、魔力が視認できるほど膨大に流れ込んで来た。魔力を吸収された大地の植物は枯れ始めている。だが、ファウストは止まらない。目の前ドラゴンスレイヤーの滅竜魔導士を捕らえるまで。

『おお……！感じるぞ。この世界の魔力が尽きようとしているのを！だからこそ、こ奴らを我が手に!!』

「サラマンダー火竜……！ブレスだ！ガキ、お前もだ！」

「三人で同時に……？」

「何が起こるか分からねえから控えておきたかったが……。やるしかねえー！」

「よし!!」

「分かりました!!」

三人はそれぞれ、魔力を収束させる。自分達はもう立っているのもやっつとだ。これで決めるしかない。三人は最後の力を振り絞る。

「火竜の……」

「鉄竜の……」

「天竜の……」

『おお、まだ魔力が上昇するか!』

「**「咆哮!!」**」

三人の同時に放たれたブレスが混ざり合い、その威力が増している。そしてそれがドロマ・アニメ黒天を包み込んだ瞬間、大きな爆発が起こった。

「やったか……？」

『まさか、これを試すことになるとはな』

「なっ……!?!」

「そんな……」

ドロマ・アニメ黒天の目の前には、青緑色のバリアのようなものが展開されていた。本来ならドロマ・アニメ黒天の驚異的な跳躍により躲かされているのだが、ファウストは敢えて受け止めた。それはエドラスのゴーシュが作成した防護壁発生装置を試すためである。ドロマ・アニメに新しく取り付けられたその装置により、ドロマ・アニメは完璧に守られていた。この結果にファウストは満足そうな笑みを浮かべる。

『あの男もやるものだ。短期間でこれほどの装置を生み出すとは……』

「三人同時の攻撃が、防がれるなんて……」

「もう一度だ!!」

『させんよ！竜騎拡散砲!!』

「ぐっ!!」「ぬお!!」「うあつ!!」

吹き飛ばされ、地面に何度も叩きつけられる。砂煙が晴れると、そこには先ほども見たような光景。

『世界の為、このエドラスの為！儂と貴様らの違いはそこよ！世界のことなど知らぬと貴様は言ったな？この世界で生きる者に必要なのはギルドなどではない！永遠の魔力だ……民が必要としておるのだ。貴様と儂では背負うものの大きさが違いすぎるわ』

「ぐっ………かはっ」

「まずい……もう、魔力が……」

『尽きたようだな？』

「はあ、はあ………」

ナツはまた立ち上がろうとするが、バランスを崩しまた倒れた。

『いくら無限の魔導士と言えど、一度尽きた魔力はしばらくは回復せんだろう。大人しく我が魔力となれ。態度次第では、それなりの待遇を考えてやつてもよいぞ？』

ウエンディは思った、もう駄目だ、と。立ち上がる力もないのだ、どうしようもない。

ガジルは思った、ここまでか、と。魔力が尽きたのだ、回復するまで待ってくれはしない。

だがナツは……少しずつ、力を込めた。

「諦めんな………」

「……」

「まだ、終わってねえ……!!かかってこいや、この野郎!!俺はここに、立っているぞ………!!!」

やがて立ち上がり、ナツの叫びが辺りに響き渡った。

☆

ナツさんの声だ。ナツさんの声が聞こえた。少し前に大きな爆発もあったので、かなり大急ぎでここまで来たけど、さらにスピードを上げる。

あの王国兵とレギオン部隊に囲まれた危機的状況で、タイミングを

見計らったかのように現れたこちらの世界の唯一の闇ギルド・フェアリーテイル妖精の尻尾が駆けつけてくれた。ギルドの建物が大木で出来ているからか、地面から現れた時にレギオン達を根のような触手で巻き付け行動不能にしてしまった。

その後、王国兵達と戦闘中に、エルザさんがナイトウオーカーと共に浮遊島ごと落下してきたのにも驚いたけど、どちらも戦闘不能のようだった。そしてそのタイミングで現れたのはなんと、こっちの世界の僕だった。

彼はドロマ・アニメにある装置を取り付けたと言っていた。で、僕にある物を渡してドロマ・アニメを止めてほしいと頼んできたのだ。グレイさんやエドルーシーさんもここは任せろと言ってくれたので、僕は今、ナツさんたちの元へと向かっている。

「やつと、着いた……!! ナツさん!!」

息も絶え絶えになってしまったが、ようやくドロマ・アニメを発見した。でもドロマ・アニメが見ている方向を見ると、ガジルさんとウエンデイが倒れていて、ナツさんも立ってはいるけどフラフラだ。その姿を見ただけで体は疲れを忘れたかのようにさらにスピードを上げ、ナツさんたちの元へと駆ける。

『ええい、どこまでも強情な小僧じゃ!』

「ふぐつ!!」

「ナツさん……」

「馬鹿野郎……。魔力がねえんじやどうしようもねえ……」

「捻りだす!!」

ナツさんがドロマ・アニメに踏みつぶされたように見えるけど、ウエンデイやガジルさんが話しかけているように見えるし、まだギリギリ踏ん張っているんだろう。急いで、ナツさんたちに譲渡ラッシュ結果を渡さない。あの様子、魔力が尽きてしまっているはずだ。

「明日の分を、捻りだすんだ!! うおおおー……!!!」

「……うそでしょ?」

魔力が尽きているんだと思ったんだけど……? ドロマ・アニメが……ナツさんに逆にバランスを崩されて倒された……!?

『身分を弁えよ、クソ共が!!儂を誰だと思っておるか!!……ぬっ!!』
「力を合わせる必要なんかねえ!!力は、願いは!繋げればいい!!」
『足を……!?!』

ナツさんは下からの爆撃により高く打ち上げられてしまったが、その間にガジルさんがドロマ・アニムの足を殴り、地面と足を縫い付ける。

「ロックした!これでもう逃げられねえ!!」

『おのれ……!』

「行け、サラマンダー火竜!!お前しかいねえ!!お前がやれ!!」

「っ!!ウエンデイ、俺に向かって咆哮だ!!立ち上がれっ!!」

「は、はい!!!」

『小癩な!!だがまだ防護壁があるのだ、貴様らの攻撃は効かんぞ!!』

ナツさんが宙を舞い、ウエンデイはナツさんの声に応えようと魔力を練り上げる。この攻撃を、防がせたりなんかしない!

『何!?!防護壁が、発動しないだど!?!』

「いけ……!ナツさん、ウエンデイ!」

「うううう……!!天竜の、咆哮——っ!!!」

「うおおっ!!火竜の、劍角——!!!」

ウエンデイの天竜の咆哮の回転を利用して放たれたナツさんの渾身の一撃は、ドロマ・アニムの胸に穴を空け、中にいた国王を引きずり出した。二人は勢いのまま地面に叩きつけられる。

「ぬうっ……!?!」

「……………」

国王がナツさんたちの方をしばらく見つめる。表情は見えないけど。……ナツさんの表情は見える。あれは怖いよ……。強大な力を見せられた後だと尚更。やがて国王は気絶したようだ。

「ダーハッハッハ!!王様やつつけたぞ!こういうの何て言うんだっけ? チェックメイトか!」

「それは、王様をやつつける前の宣言ですよ」

「ギヒッ、バカが」

どうやら、無事に終わったようだ。僕?途中参加しただけで他は見

てるだけだったよ？今回エドラスの僕がドロマ・アニメに変な装置つけてなかったら、僕がここに来る必要なかったし。……心配はもちろんしてたけど。

「な、なんだ？」

「まさか敵の増援……？冗談じゃねえぞ、流石に魔力が空っぽだぜ」

「違います、あれ！」

「浮いている島が、……落ちてきた？」

空を見上げると、浮遊していた全ての島が落下を始めていた。それが示すのは。………魔力の、喪失だ。

第30話 バイバイ、エドラス

大地から、武器から、魔水晶ラクリンマから、魔力が抜けて天高く昇っていく。その先には巨大アニマ。エドラス中の全魔力が別世界——アースランドへと流れていく。幻想的だけど、すごく寂しい光景。それが今僕らの目の前にある。

「皆さん、大丈夫ですか？」

「ゴーシユ！」

「ああ。ボロボロだけどな、サラマンダー火竜とガキが」

「俺はまだ戦えるっての！」

「魔力も残ってねえクセに何言ってやがる」

「お二人とも、元気ですね…」

うん、やっぱりこの三人はいつも通りだ。思ってた通り、僕がドロマ・アニムの防護壁発生装置を停止させたこと気づいてないみたい。まあ、何とかなったみたいだからいいか。緊急事態なんだから、ほどほどにしてもらわないと。

「二人とも、今は喧嘩してる場合じゃないですよ」

「そうですね！早く王都に戻りましょう！町の人達が心配です！」

「こっちの俺ならなんか分かってるかも知れねえ。ってなわけで、決着はまたにしてやるぜ。ギヒツ」

「こっちのセリフだってーの！急いで向かうぞ！」

…この二人、体力無限なんだろうか？

☆

大急ぎで王都に到着すると、ナデイが僕らの元へとやってきた。ミストガンとリリーの会話の内容を聞いてしまった彼は、僕らに悪役になつてくれないかと頼んできた。また、魔力を体内に持つ僕達もアースランドへと強制的に帰されるという話も聞いた。

手っ取り早く一般人に悪者だと認識されるには、まず気絶しているエドラス王を見せつける。縄で縛っておくだけでいいだろう。そしてこっちの仮の目論見を分かりやすくすること。世界滅亡とかそん

なものを宣言すればいい。あとは…

「おらあつ!!」

「ギヒイツ!!」

「あゝあゝやり過ぎ、じゃないかなあ」

「二人とも、壊しすぎですよ〜…」

ナツさんが建物の屋根の上に捕縛したエドラス国王を引つ立てた後、二人そろって建物を派手に破壊。まあ壊すのは得意だろうけど、もう十件近く破壊している気がする…。ジェラルル、リリー、早く来てくれ。あ、ウエンディと僕は参加してません。外見的に僕らは悪者には見えないから効果はほとんどないだろうし、やっておきたいこともあったから。

「よせ、ナツ!!」

「俺様は大魔王ドラグニルだ!」

ナツさんがさらに破壊をしようとした時、城の方からジェラルルの声が響いた。良かった、やっと来てくれた…。ナツさんの悪役がかなり幼稚に見えるけど、こんな危機的場面でパニックになっているのも手伝っているのか、民衆も悪人だと思ってくれているようだ。

「馬鹿な真似はよせ!王は倒れた!これ以上、王都に攻撃など…!」

「ファイアー!!」

「…危なかった」

「あ、ありがとうゴージュ」

ナツさん、いきなり火竜の咆哮を僕ら含めた民衆の方に使うんだもんな…。ちゃんと威力は抑えられているけど、咄嗟にディフェンド防御結界で防いでしまった。…良かった、皆気づいてないみたいだ。

「よせ!!」

「お前に俺様を止められるかなあ?エドラスの王子さんよ!」

ナツさんの発言で民衆がざわつき始める。これで唯一悪に立ち向かうエドラスの英雄という構図になった。それにしても、エドラスのガジルさんの誘導が巧みだと思う。こっちの意図もガジルさんとのアイコンタクトだけで分かってくれたみたいだし。

それでも、まだジェラルルのことを信用しきっていない。でも、こ

れでナツさんを倒した所を見せつけなければきつと……!

「ナツ、そこを動くな!!」

「ナツではない。大魔王ドラグニルだ」

ジェラールがナツさんの元へと飛び出す。町の中を駆け抜け、ナツさんを射程に収めると、魔法を使おうと杖を振るう。が、その瞬間に魔力がアニメに吸収された。

「魔力が……!」

「どうした!魔力がねえと怖いか?そうだよなあ?魔法は、力だ!!」

「ナツさん!やり過ぎですよ!」

「いいんだよ。これで強大な魔力を持つ悪に、魔力を持たない英雄が立ち向かう構図になるんだ」

「もう十分だと思うんですが」

ジェラールがナツさんの元に到着するまで、何軒破壊しているんだろうか……。もうすぐ三十は超えるかも……

少し離れた位置からナツさんとジェラールの攻防を見る。何かを話しているみたいだけど、民衆が応援したりしているから全然聞こえない。ただの殴り合いにしか見えないけど、僕は何だか涙が出そうになった。

ナツさんはナデイの話を聞いた時、真つ先に悪役を引き受けた。ラストボスをやってみたいとか言っていたけど、一番の目的はミストガンの壮行会をする為だろう。……最後の、倒れる時のナツさんが、すごく満足そうな笑顔をしていた。言いたいことを全部言えたんだ。

「……!始まった……!」

「さーて、派手に苦しんでやるとするか!お前らも、さつきと用事済ませてください」

「……はい!行こう、ウエンデイ」

「うん!」

僕とウエンデイは民衆の波を潜り抜けて、ジェラールの元を目指す。その為にナツさんとガジルさんだけに悪役をやってもらったんだ、急がないと。

「ジェラール!」

「…ゴーシュ、ウエンディ？」

「お別れを、言いに来たんだ」

「お別れ…？」

「僕達はもうすぐ、逆展開されたアニメによってアースランドに帰る。その前に、ジエラルルに伝えておかなきゃいけないと思って」

「私達、ジエラルルには沢山お世話になったから…。本当に、ありがとう、ジエラルル…！」

ウエンディが涙目になっている。…大好きだった、お兄ちゃんみたいな人ともう一生会えないんだ。僕だって、多分涙目になっていると思う。一緒に過ごした時間は短かったけど、色々なことを、ジエラルルから教わった。僕にとっても、兄と言える人。それがジエラルルだ。優しく、魔法を使う時とかもカッコよくて、強くて…。この世界に来て初めて会ったのがこの人で、本当に良かったと思う。

「ウエンディ…。あんなに泣き虫だったのに、ドロマ・アニムを倒してしまうほど強くなった。君と再会するまで心配していたが…もう大丈夫だと、安心できた。君は君のまま、頑張れ。妖精の尻尾の皆と明るい未来を過ごせるよう願っているよ」

「うん…。うん…。私、もつと頑張るから！ジエラルルに負けなくらい、強くなるから！」

「ああ」

「ジエラルル…。僕は…」

「ゴーシュ、大丈夫だ。君は立派な魔導士になった。君の力はアニメすら防ぐことが出来た。これからも、大切な物を守るさ…でも」

「でも？」

「ウエンディはもう、守られるだけの存在じゃない。以前に聞いた君の誓いはもう、必要ない。ウエンディや妖精の尻尾と共に助け合っていくんだ。…いつか、君の秘密も分かち合える時が来る」

「…うん！ジエラルル、ありがとう！」

最後の方は僕へ耳打ちして、ウエンディには聞こえないようにしてくれた。僕の秘密、か…。いつか、皆に話せるといいな。

「体が…！」

「もう会うこともないだろう。だが、君達は俺の家族だ。世界が違っても、繋がっている」

「元気でね、ジェラルル……！」

「ありがとう……。さよならー！」

体が地面を離れ、空へと昇っていく。僕とウエンデイだけじゃない、ナツさんやガジルさん、近くにいたらしいルーシーさんやグレイさんの姿もある。…ナツさんとガジルさんは苦しんだフリをしているから、なんだか少し笑ってしまった。

「ゴーシユ、あそこー！」

「あれは……」

ウエンデイが指差した場所には、こっちの世界の僕がいた。民衆を避けるように、建物の屋根に座り込んでいた。

「頑張れ、こっちの僕……！」

「ゴーシユ、そんな小声だと聞こえないんじゃない？」

「いいんだ。きつと伝わってるよ」

僕が呟いた言葉にウエンデイがそう言ってきた。けど多分大丈夫。同じ僕だから、伝わってる。こっちの僕の表情を見て、そう思ったんだ。

☆

アースランドからエドラスに来た時は一瞬だったし、すぐに岩壁に引っかかったから何も思わなかったんだけど、アースランドに来た途端、感じたのは浮遊感だった。まあエドラスに転送されたときも最後は浮いていたけど、今は落下していた。

「うわ~~~~っ!!」

「ハッピール、シャルル！僕達を一か所に！」

「ええー！」「あいさーっ！」

二人が翼で僕らを掴んで少しずつまとめていく。少し時間はかかるけど、ここは遥か上空。地面に激突するまでまだ時間がある。

「ゴーシユ、これでいい!?!」

「ありがとうー！それじゃ…浮遊結界!!」

「きゃっ！」

「た、助かった〜」

「おお！サンキューゴー……ウツプ！」

「助かったぞ、ゴーシュ」

「ナツさん、大丈夫ですか？もうすぐ地面ですから」

「降ろしてくれ：ウツプ」

「情けねえな、クソ炎」

「全くだぜ、ギヒツ」

全員集まるとやっぱり賑やかだな、なんて考えながら浮遊結界の高度を落とし、地面と接したところで解除する。

「帰って来たぞーっ！」

「復活早っ！」

ナツさんも元気になったみたいで何よりだ。

天気は雨。そういえばアニマが発動する前も雨が降っていた……。僕達がエドラスにいた数日、こっちの世界では時間ってどれくらい経ったんだろう？異世界だし、時間の経過が違ってもおかしくない。デジ○ンのない。

「おお！元通りだ！」

「マグノリアの町も！」「やった！」

「待て、まだ喜ぶのは早い。人々の安全を確認してから……大丈夫だよ！……!?!」

エルザさんの言葉を遮るように聞こえたその声の方を見ると、沢山のエクシード。エクスタリアに住んでいたエクシードが勢ぞろいしていた。

「一足先にアースランドに着いたからね！」

「色々飛び回って来たんだ！」

「ギルドも町の人達も無事だったよ！」

「皆魔法水晶ラクリマに変えられたことすら知らないみたい！」

「アースランドってすげーな！魔力に満ちてる！」

「……どういふことよ。なんでエクシードがアースランドに!?!」

シャルル以外の皆が啞然としていた。僕はそりやそうだよねと

思っていたけど。ナツさんたち三人は気づいてなかったのか。エドラスで唯一魔力を体内に持つエクシードも、アースランドに流されたってこと。

☆

「冗談じゃないわよ！こいつらは危険、エドラスに帰すべきよ！」

エクシード達に一度近くに降りてもらってすぐのシャルルの一言。シャルルとハッピーは利用されたことから、好感を持ってないのも無理はないと思うけど…。エクシードってそこまで危険かな…？どつちかというところがあまりない種族だと思うけど。…リリー以外ね。

「まあまあ」

「エクスタリアだって無くなっちゃったんだよ？許してあげようよ」
「嫌よ」

…即答だ。ハッピーとウエンディの言葉に聞く耳持たず。エクシード達も口々に謝っているけど…。シャルルは、そんなことはどうでもいいと言った。…シャルルがここまで怒っている所を初めて見た気がする。

「あんたたちは私に、ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士を抹殺する使命を与えてアースランドに送り込んだ！」

「そうさ！女王はオイラたちの卵を奪った！忘れたとは言わせねえ、かあ〜っ!!」「あなた…」

「あ、おじさん！」

なんか、白毛で眉毛が太いエクシードがシャルルに続いて物申している。ハッピーの知り合い？傍にいる青毛のエクシード、ハッピーにそっくりな気がするけど…。

「でもよお、帰れと言われてもなあ…」

シャルルは俯いたまま黙っている。エクシード側にいるシャゴツトも同じ反応だ。…この二人も似てる、と思う。

「まだきちんと説明してませんでしたな」

「これは、六年前の話になります」

シャゴツトの近くにいる老エクシード達の話によると、ある日シャ

ゴツトの未来予知でエクスタリアが大地に堕ちる光景を見た。それを人間達が暴挙に出るのだと考えたシャゴツト達は、卵を回収してアースランドに逃がすことにした。表向きには、滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーを倒すという目的で。

「もちろん、滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーに恨みがあつたわけではありません」

「分かってます。そういう設定が必要だったってことですよね」

「それに本当のことを公表していたら、パニックになっていたと思うわ」

「だな」

「…人間のアニマを借り、私達の作戦は成功しました。しかし、たった一つだけ計算外のことが起きたのです。それは——シャルル、あなたには私と同じような予言の力があつたのです」

「え…？」

「しかし、それは無意識に発動しているようで…。貴女の記憶を混乱させたのです。避難させた百人のエクシードのうち、貴女一人だけが…」

「そんな…」

「恐らく、断片的なエドラスの未来を予知してしまった。そしてそれを使命だと勘違いしてしまったのです」

「じゃあ、オイラは…？」

「元々そんな使命は無かつたのですよ。本当に不運に不運が重なり、貴女は自分の、ありもしない使命を作り出してしまった…」

「…」

シャルルは、呆然としてしまった。でも、予言の力に関して思う所があつたのか何も反論することはなかった。

「ぼきゅ達は君が自分の力を知らないのをいいことに、さも自分たちが操っているように言ってみただ。ごめんね」

「全ては女王様の威厳を演出するための猿芝居。…本当に申し訳ない」

ナデイとニチャさんがシャルルに謝罪した。なぜかナデイを怖いと思つた記憶が何となく残っていたけど、その時のことかな？目が死

んでるように感じたんだよな…。

「沢山の不運と、民や人間に対する私の虚勢が貴女を苦しめてしまった。…いいえ、六年前に卵を取り上げた全ての家族たちを不幸にしました」

やっぱりさつききの白毛と青毛のエクシードは、ハッピーのご両親…？じゃあ、シャルルはシャゴツトの…!?

「だから私は、貴女に剣を渡したのです。悪いのはエクシード全てじゃない…。私一人です」

「うお〜っ!!メエーローン!!」

「それは違いますよ!女王様!」

「女王様の行動は、全部私達のことを想ったこと…!」

「俺達だって、自分たちの存在を過信してたわけだし…」

「せっかくアースランドに来たわけだし、六年前に避難させた子供たちを探そうよ!」

エクシードのうちの一人が言ったその言葉に、他のエクシード達もそうだと声を上げながら空を飛ぶ。新しい目標だと、人間とも仲よくすると言っているエクシードもいた。

「前向きな奴等だな!」

「皆…」

「新しい始まり…!素晴らしい言葉ではないか!」

「……………いいわ。認めてあげる」

「……………シャルル…!」

やっと、シャルルが根負けしてくれたか。この流れでまだ、いいから帰れるなことを言い出したらどうしようかと…。

「でも、なんで私にあんたと同じ力があるわけ?」

「ど、どうしてかしらね…?」

「ねえおじさん!」

「おう?」

「女王様とシャルルってなんか似てない?」

「そうかい?」

「ほら、動きとか?」

「動きだあ？」

「な、なんだこれ…？え、まさか二人とも気づいてないの？二人とも、今自分の親と会話してることに気づいてないの？嘘でしょ？…：…：これ、教えてあげるべきなのか？いやでも、シャゴットとかあの白いエクシードとか誤魔化してるっぽいし…。うん、やっぱり本人が自分で気づくまで待つべきか。その方がいいよね。」

「とりあえず、無事に終わって良かったな！」

「はい！」

「おい、感染ってんぞナツ！」

「あんたもね…」

ナツさんとグレイさんがナデイと同じように右手を動かし始めたり、エルザさんがニチャさんに拳を叩き込んだりしたけど、エクシード達は今いるマグノリア郊外の森の近くに住むことになった。別れ際、シャゴットはシャルルを抱きしめる。ハッピーも自分の両親にいつでも遊びに来ていいって言ってもらえたみたい。いつか、自分の親だつて二人とも気づけるといいな。

「おーしっ！俺達もギルドへ帰るぞ！」

「皆にどうやって報告しよう？」

「いや、皆気づいてねえんだろ？今回の件」

「しかし、ミストガンのことだけは黙っておけんぞ」

「皆、手…」

ナデイ化が進んでいるようだ。ツツコミしたウエンデイと僕はやってないけど。あとガジルさんが慌てたように辺りを見渡しているけど、どうしたんだろう？

「ちよつと待て！」

「どうしたガジル！お前も真似してえのか？」

「楽しいですよ！」

「それに価値があるならな！」

「価値があつたらやるんだ…」

「リリーはどこだ！パンサー・リリーの姿がねえ!!」

「リリー？」

「あのごっついエクシードのことよ」

「俺なら、ここにいる」

リリーの声かしてそつちを見ると、ハッピー達と同じくらいの大きさに縮んだリリーがいた。

「」「」「小つちやくつ?!」「」「」

「随分可愛くなったね…」

「どうやら、アースランドと俺の体格は合わなかったらしいな」

「あんた、身体なんともないわけ?」

「ああ、今のところはな」

合わなかったって…。アニマの幅にリリーが挟まりそうだから縮められたってこと? 確かにリリーってずっとこのサイズだったような…。まあ、大きさを変えられるって便利だしいいのかな? よし、本人が言い出さない限り気にしないようにしようつと。

「俺は王子が世話になったというギルドに入りたい。約束通り、入れてくれるんだろうな? ガジル」

「ギヒツ…。もちろんだぜ、相棒―つ!!」

「泣いた!?!」

ガジルさん、よっぽど自分だけエクシードのパートナーがいないの気にしてたんだな…。

「で、それとは別に、怪しい奴を捕まえたんだ」

「おお! 早速手柄か! さすが俺の猫!」

「ガジルさん、親バカみたいになってる…」

「言つてやるな、ゴーシユ」

エルザさんも思つたつてことですよね?

「来い!」

「ちよ、私、別に怪しくなんか…きやつ!」

リリーが持っていたロープを引っ張り、ある人物が僕らの目の前に連れてこられた。その人は…

「っ!?!」

「ちよつと…。私も妖精の尻尾フェアリーテイルの一員なんだけど」

「リサーナ…?!?!」

「なんなのこの猫？ていうかエクシード？」

「パンサー・リリーだ」

「なんだテメエ、俺の猫にケチ付けようってんのか、ああ？」

「ガジルさん、落ち着いて……！」

親バカと不良が合わさった感じになってきたよ。つていうか今大事な場面みたいだから大人しくしててください。

「そんな、まさか……？」

「リサーナ……」

「なん、で……？」

「もしかして、エドラスのリサーナが？」

「こつちに来ちやったわけ!？」

「どうしよう……！」

「……っ！ナツっ!!」

「うおっ!？」

リサーナさんがいきなりナツさんへと飛び掛かり、そのまま押し倒してしまう。リサーナさんは、涙を浮かべていた。

「また、会えた……！本物のナツに……！」

本物……そっか、このリサーナさんは……

「ハッピー、私よ！リサーナよ！グレイとエルザも久しぶりだね！うわあ、懐かしいわね！その子たちは新しいメンバーかしら？小さいウエンデイと、もしかしてルーシイ？」

「ちよつと待て……！まさか、お前、こつちのリサーナ……!!」

「……………うん」

「嘘!？」

「ええっ!？」

そうだ、やっぱりこつちのリサーナさんだったか。……この場面にならないと思いい出せない僕って……

「リサーナ、生き返ったのか!？」

「あいっ!!」

「二人ともストップ……！」

「お前は二年前、死んだはずだ……！生き返るなど、あり得ん！」

「……私、死んでなんかなかったの」

リサーナさんは語る。二年前にエルフマンさんのビーストソウルの暴走でダメージを受けたリサーナさんは、その時開いていた小さなアニメによって吸い込まれた。エドラスにいたりリサーナさんが亡くなり、世界がそれを補完するかのようになりアースランドのリサーナさんをエドラスへと連れて行ってしまったのだと。

エドラスの皆がリサーナさんをエドラスのリサーナさんだと思い込み、リサーナさんは記憶喪失ということにしてそのままエドラスのリサーナさんのフリをした。そして数日前、エドラスの妖精の尻尾にアースランドのナツさんたちがやってきた。その時はエドラスの皆を悲しませない為に、エドラスで生きていくことを覚悟していたそうだ。でも、最後のアニメの逆展開でリサーナさんもアースランドへと流された。……エドラスのミラさんとエルフマンさんには、エドラスのリサーナさんじゃないことはバレてたらしい。

「……行きましょう」

「え……?どこに……?」

「カルディア大聖堂。きつと、二人とも待ってる」

「そうだ!リサーナ、早く行くぞ!!」

「ナ、ナツ、ちよつと待ってよ!」

その後、カルディア大聖堂では、リサーナさんとミラさん、エルフマンさんが、三人揃って涙を流しながら互いの存在を確かめるように、抱きしめ合っていた。

天狼島編

第31話

S級魔導士昇格試験

エドラスから帰還して数日。リサーナさんが帰って来たときは皆すごく驚いていたけど、ちゃんと受け入れてもらった。リサーナさんの帰還祝いとリリーの歓迎会も行われた。大変だったのはガジルさん、かな。しばらくテンション上がりまくって大変だった…。リリーが仲間になった影響だろうか？リリー本人は大人なのでそのまま大事にならずに済んだから良かったけどね。

そうしてようやくいつも通りに戻ったかなと思ったんだけど、皆仕事熱心になり始めた。全員そうなのかと思えば、中には平常運転の人もある。まだギルドに入って日が浅いリリーはもちろん、ウエンディやルーシイさんも分からないみたいだ。

「ゴーシュ、雪だよ！きれいだね〜！」

「ホントだ…。道理で寒いと思った。積もらないといいけど…」
「もう、急にお年寄りみたいに…」

いや、大事だよ？雪が積もったら雪かきしないとイケないし。僕の家周りとか雪かき大変だろうなあ…。魔法がある分、前世より断然楽だからいいけど。積もれば積もるほどトレーニングになるから結果オーライって考え方もできる。

「でも、明日はギルドに集まれなんてなんだろうね？」

「さあ？マスターが重大発表するって言ってたけど…。ま、明日になつてみれば分かるわよ」

「シャルル、あんまり興味なさそうな言い方だね」

「だって興味ないもの」

「相変わらずだね、シャルルは」

ホント、はつきり言うエクシードだなと思う。思ったことをはつきり言うって、結構難しいと自分では思っているんだけど。

「ま、明日になれば分かるさ」

「そうだね。あ、私達これから買い物していくからここで」

「手伝おうか？」

二人ともよく僕の家遊びに来る。時々家事を手伝ったりしてくれるからこつちとしては大助かりだ。それにナツさんやグレイさんみたいに勝手に上がっていることなんて……いや、あったわ。勝手に上がり込んでくつろいだことが何度か。くつろいだのはシャルルだけど。鍵閉めてたはずなんだけど……どうやってるんだろ？

「ううん、大丈夫！それじゃまた明日！」

「うん、二人とも気をつけてね」

「ええ。ウエンデイ、気をつけなさいよ」

「…なんでシャルルまで私に言うの？」

「だってこのまま転んだら私が潰れるもの」

「本当にありそうだから怖い」

「そ、そんなことないもん！最近転ぶこと少なくなっただよ！」

「でもまだ一日一回は転んでるけど」

「もう、シャルルっ！」

うん、楽しい。やっぱり昔からの付き合いって大事だなと心の底から思う。今のところ、こんな風に軽口を叩けるのってこの二人だけだし。

——いつか、君の秘密も分かち合える時が来る。

「……………いつか、か」

「え？」

「あ、いや。なんでもない！それじゃあね、二人とも」

「あ、うん！また明日！」

ジェラールはそう言ってくれたけど、よく考えたら僕の秘密ってなんだろうか？

前世の記憶があること、この世界を前世で、漫画という形で読んで知っていること。それだけだ。でも、本当はもつとあるんじゃないだろうか。

僕は五歳より前の記憶がない。前世の記憶があるのに、生まれてからの五年間の記憶だけがない。そして以前、ダフネが評議員に連行される直前に僕に向けて言っていた言葉。

——…あの人形が、こんな感情豊かになるなんてね。魔法が解けたのかしら？まあ、もう関係ないけどね…

あの言葉を鵜呑みにするのなら、僕は以前にダフネと会っていた。そしてその時に何かしらの魔法をかけられた。でも、今はすでに解けている…？これも結局、彼女に聞くしか確かめる術はない。今度、面会に行ってみるのも手かもしれない。とにかく、現状分かっていることはこれくらいかな。

僕って、一体何者なんだろう……？

☆

翌日。妖精の尻尾のギルドに魔導士が集まっていた。今まで仕事に行っていてあまり面識がない人とかもいる。これだけ大勢集まるのって滅多にない。これでもまだ全員じゃないのかな？

「あ、マスターだよ！それにエルザさんやミラさんも！」

「ギルダーツまでいるわね」

マスターがステージの上で現れたことで皆がざわつき始める。これって、やっぱりアレなんだろうか。

「オツホン。これより、妖精の尻尾古くからのしきたりにより、S級魔導士昇格試験出場者を発表する!!」

「S級魔導士昇格試験?!」

「燃えてきたぞ!!」

やっぱりか…。これ、どうやって関わればいいんだろう？僕はまだギルドに来て日が浅いし、仕事はそれなりに行ってるつもりだけど、目立った活躍はしてないし…。頑張っつて誰かのパートナーになるしかないか。

「皆、静かにしないか！」

「マスターの発表の途中だろ」

「今年の試験会場は天狼島！我がギルドの聖地じゃ！各々の力！心！魂！僕はこの一年見極めてきた!!参加者は九名!!」

…ん？なんか今、違和感が…。気のせい？

「ナツ!!ドラグニル！」

「よっしゃ!!」「やったね、ナツ！」

「グレイ||フルバスター！」

「やっとこの時が来た！」

「ジュビア||ロクサー！」

「え？ジュビアが!？」

そういえばジュビアさんも幽鬼ファントムロードの支配者から移籍して間もないの
に選ばれているんだな。まあジュビアさんが強いことは分かり切っ
ているから当然といえば当然か。ガジルさんはまだ信頼度が低いか
ら選ばれなかったんだっけ？

「エルフマン！」

「漢たるもの、S級になるべし!!」「頑張つてね、エルフ兄ちゃん！」

「カナ||アルベローナ！」

「……………」

「フリード||ジャステイーン！」

「ラクサスの意志を継ぐのは……」

「レヴィ||マクガーデン！」

「私、とうとう……!」「レヴィが来たーっ!!」

「メスト||グライダー！」

「メストか!」「去年は惜しかったよな！」

「ゴーシュ||ガードナー！」

「……へ？」

「ゴーシュ、やったね!!」

「……………僕？」

しばらく僕の頭の中は真っ白になった。

☆

頭を切り替えるのに時間はかかったけど、何とか説明を頭に入れ
る。試験は一週間後。各自、一名パートナーを決めること。妨害役で
エルザさん、ミラさん、そしてギルダーツさんも参加するっぽい。集
合場所はハルジオン港らしい。

「大丈夫？ゴーシュ、聞いてんの？」

「え？あ、すみません。ちよつとまだ選ばれた実感無くって」

「そりやそうだ。俺だつて驚いたぜ」

「まだギルドに入ってからそれほど時間経ってないのにね」

「そういえば、マスターになんか聞いてなかった？」

「ああ、選ばれた理由を尋ねてました」

「なんだつたの？」

「えつと、最強チームについて行った時に建物の破壊を防いだ件数が多かったことと、それなりに場数もこなしていると判断したとか…」

つまり被害を最小限に留めることに貢献したからつてこと。あとはコツコツ地道に仕事をする直向きさが良かったとか。単純にお金を早く稼いで借金返済しなかっただけなんだけど。まあ、結果オーライだ。S級試験に出られるなら、原作に簡単に関われる。

「そういえばあんたたち、パートナーは決まってるの？」

「俺はもちろんハッピーだ」「あい！」

「ハッピーはずりいだろ！もし試験内容がレースとかだったら、空飛べるなんて勝負にならねえ！」

「別にいいんじゃない？」

「俺も別に構わねえよ。戦闘になったら困るだけだしな」

「ひどいこと言うねグレイ…。オイラはナツをS級魔導士にするんだ！」

「こればかりは、仲間と言えど絶対譲れねえ！」

「つてなわけで！」「修行だーっ!!」「あいーっ!!」

相変わらずだな、二人とも…。そういえば僕もパートナーどうしよう？ちゃんと考えないと駄目だ。でも急がないと他の人に強そうな人はパートナーに選ばれちゃうし…。

「あの、ジュビアはこの試験を辞退したい」

「え!?!なんで？」

「だつて…その…ナーが…その」

「なんだつて？」

「だ、だから…!!」

「あんたのパートナーになりたいんだつて！」

「ほら、やっぱりルーシイが狙ってる!!」「狙ってないわよ!」

ジュビアさん、積極的だなあ。その妄想癖がなければ 그레이さんと
もあつさりくつつけると思っただけだ。そういえば、この二人って結
局くつついたんだろうか? くそ、やっぱり原作を最後まで読めなかつ
たというのは悲しい。気になるな…。

☆

結局 그레이さんはロキさん、ジュビアさんはリサーナさん、エルフ
マンさんはエバーグリーンさん(睨まれていただけだったが)に決定
した。僕はまだ、決めかねている。僕に足りないのは攻め手だ。だか
ら攻撃力のある人をパートナーにした方がいいんじゃないかなって
思っている。

だけど、一番連携が出来るのはきつとウエンデイだ。一番付き合
いが長いし、互いの魔法のことも把握している。さつきは何となく誘
えなかつたけど、お願いしに行こうかな。

「……今どこにいるんだろ」

もうすっかり夜だし、降雪量も昨日より多い。これは積もるだろう
な…。もしかしたらもうフェアリーヒルズに帰ってるかもしれない。
よし、行ってみよう。

「それが人にものを頼む態度なの!」

「…? シャルルの声?」

ということは、ウエンデイも傍にいるかも! ということで声のした
方へと小走り気味で向かうと、川の傍でウエンデイとシャルルがメス
トと話している所を発見した。

「ウエンデイ、君の力があれば、俺はS級の世界を知ることが出来る。

頼む、力を貸してくれ」

「え、でも私なんか…」

「駄目に決まってるじゃない!」

「……知りたい。冬の川の中というものを俺は知りたい」

「こんな変態に付き合っちゃダメよ!!」

メストさん、変人過ぎる…。あの人、確か評議院に関係があつた人

物だった気がしたんだけど…。どうだっけ。妖精の尻尾フェアリーテイルのメンバー
だった気もするし…？

「あの、メストさん」

「はっ！すまない、気にしないでくれ」

「あ、はい。えつと…その、私もうパートナーになる人決まってるん
です」

…!!なんだと…!?え、誰だ…?カナさんとかか?他にパートナー決
まってる人誰かいたっけ…?

「そうか。ゴーシユのことかな?」

「えつと、その…はい」

「そうか。…話を聞いてくれてありがとう。俺はこれで失礼する
よ」

「誘っていたいてありがとうございました、メストさん」

「試験で競えるのを楽しみにしている。ゴーシユにもそう伝えておい
てくれ」

メストさんはそのままギルドの方へと歩いて行ってしまった。僕
は、混乱したまま動くことが出来なかった。そのまま、建物の陰に隠
れたまま動けなかったんだ。

「…初めてね」

「え?」

「あんたがあんな嘘をつくなんて。しかもギルドの仲間に」

「悪いことしちやったかな…」

「いいのよ。あいつは怪しすぎるわ。あんな変人よりゴーシユを選ん
で正解よ」

「でも、まだ選んでもらったわけじゃないけどね」

「あいつは慎重すぎるところがあるからね。多分、自分の魔法との相
性とか考えてるのよ」

…なんでシャルルには僕が考えてることがいつも分かっ
てしまう
んだろう。まさか、これも一種の予知能力?

「そうかもね。…私じゃ、力不足かな?」

「大丈夫よ、あんたは強いわ。それに…」

「それに？」

「愛に勝る力無しって言うでしょ」

「シヤ、シヤルル…!!」

「本当のことじゃない」

そこから先の会話は何も耳に入らなくなった。

☆

一週間後。ハルジオン港から出港した船があった。帆には妖精の尻尾の紋章が描かれている。S級魔導士昇格試験を受ける為、僕達九組の出場者とそのパートナーたちは天狼島を目指す。

「暑い……。冬だつてのになんでこんなに暑いのです…」

この辺は海流の影響で年中常夏らしい。冬だからと厚着して来なくて良かったけど、それでも暑い。ルーシイさんとかカナさんは水着を着ているし、 그레이さんに至っては全裸だ。フリードさんとかジユビアさんとかいつもの恰好なのに平気そうなのはなんでだ。

「ナツ、こつちに来ないでくれるかな…」

「ウエンデイがトロイアをかけてくれねえんだよ…ウツプ」

「しようがないよ、ゴーシユのパートナーなんだし」

「すみません、ナツさん…。」

そう、メストの誘いを断っている所を目撃してしまった日の次の日。朝早くギルドで会った時に僕はウエンデイにパートナーになってくれと頼んだ。だけど、まだウエンデイの気持ちに關しては何も答えが出ていなかった。あの日は全く眠れず、ずっと頭の中がグルグルと混乱して考えをまとめることが出来なかった…。

盗み聞きしてしまったという罪悪感もあり、パートナーになってもらってから何度か二人とシヤルルで特訓したりしたけど上手いかわず、あつという間に一週間が過ぎてしまった…。

「…ゴーシユ、大丈夫？」

皆から少し離れた場所にいと、目の前にウエンデイが現れた。

「っ！だ、大丈夫。ウエンデイは？」

「暑いけど、大丈夫だよ…。ねえ、ゴーシユ？なんか隠してない？」

「え？なんで？」

「何というか、困ってる、というか悩んでる？ように見えたから…」

「……いや、大丈夫だよ。ありがとう」

「なら、いいんだけど……」

なんでか、ウエンデイと前みたいに話すことができない。彼女が僕のことを好きって言うてくれたことは嬉しい。けど………

「見えてきたね」

ロキさんの声が聞こえ、皆が見ている方を見る。そこには、まるで海の中から一本の大樹が生えているように見える島、妖精フェアリーテイルの尻尾の聖地、始まりの場所——天狼島があった。

第32話 運がいいのは誰？

「着いたのか…！」

「あれが天狼島!？」

「すげえ形してんな！」

「島の上に、島？」

「すごい…。ここからでも、島のあたりの空気に魔力を感じますよー」

天狼島近海へと到着した僕たち。ここは、妖精の尻尾フェアリーテイルのメンバーにとつてはまさに聖地。確か、初代マスターのメイビスⅡヴァーミリオンに関係があつたようななかつたような…？

「ナツ、もうすぐだよ」

「ウツプ……………」

ナツさんがもうすでに瀕死に近い気がするけど、大丈夫だろうか…。陸に上がったら元気になるから大丈夫か。今更心配しても仕方がない。…今、ナツさんをカエル扱いしたような気がする。

「あの島にはかつて、妖精がいたと伝えられていた」

「マスター！」

「そして妖精の尻尾フェアリーテイルの初代マスター、メイビスⅡヴァーミリオンの眠る地！」

やっぱりそうだ。良かった、エドラスではほとんど覚えてなかつたから不安だつたけど、今回はちゃんと覚えてたよ。

「なんだよその服！」

「だって暑いんだもん！」

「服着てない人が言う？」

さすがツツコミ担当のお二人。まあ片方はポケも入ってるけど。マスターがアロハシャツ着ていることにツツコんでくれるとは思っていた。

「これより、一次試験の内容を発表する！」

「一次試験…」

「大体、毎年何段階かに分かれているんだ」

「そうなんですか…！」

メストさんがウエンディにそう説明している。：なんだろう、この気持ち。前はウエンディが誰と話していても別に何とも感じなかったのに…。

「島の岸に煙が立っておるじゃろう？まずはそこに向かってもらおう。そこには九つの通路があり、一つの通路に一組しか入ることができません。そして通路の先は、こうなっておる。ここを通過できた者が、一次試験合格じゃ！」

マスターの隣に表が現れる。闘が二つ、静が二つ、そして激闘が三つ。激闘にはそれぞれ、エルザさんとミラさん、そしてギルダーツさんの顔がある。

「闘のルートはこの九組のうち二組がぶつかり、勝った一組のみが通れる。激闘は現役S級魔導士を倒さないと進めぬ最難関ルート！静は誰とも戦わずこの一次試験を突破できるルート。一次試験の目的は武力！そして、運!!」

まあ、運も重要か。と思つたら、結構口を開けてポカーンとしている人が何人かいた。ウエンディもなっているし。

「運なら行けるかも！」

「静を引き当てる確率は、九分の二しかないのよ？」

「理論的には、最大七組が合格できるってことね」

「む、無理だ！ギルダーツやエルザのいる道は突破できねえ！」

「何弱気になつてるのよ！」

エルフマンさんって、たまーに漢らしくないこと言うよね…。でも、ちゃんといざって時には漢らしい一面を出してくれるからカッコいいと思う。

「最悪の場合は、四組しか突破できないのかあ…」

「面白れえ。どいつもこいつもボコボコにしてやるぜ！」

「あのねえ…」

レヴィさん、完全にガジルさんの肘掛けになつてしまつているんだけどそれはいいのか？

「さあ、始め！試験開始じゃあ！」

「はあ？」

「ここ、海の上じゃないか」

「ニヒヒ」

マスターが悪い笑顔をしている。まるでイタズラ大好きな少年のように見える。つまり、ここからあの狼煙の立っている場所までは競争ってことか。急がないと！

「そういうことか…。ハッピー！」

「うん！」

「先に通路を選ぶんだ！」「あいさーっ！」

「うおっ、ずりい！」

「ナツ、てめえ！」

「ディフェンド
ウォール防御結界・壁！」

「うぎやっ！」

「ナイスゴーシュ！それじゃあたしたちも…って痛！」

とりあえず飛んでいこうとしたナツさんとハッピーを壁で止めたのはいいんだけど、これはフリードさんにしてやられたかも。ルーシイさんが空中で何かにぶつかっていた。船を囲むように、文字が敷き詰められている。

「術式!?!」

「安心しろ、十分後に解けるようになってる」

「フリード！」

「てめえ！」

「ずっと閉じ込めとけばいいじゃねえか」

「それじゃ試験にやらん」

そっか、フリードさんとビックスローさんはそれぞれ空を飛んでいけるのか…。しかも十分って意外と長いし。ナツさんの妨害しなければもう少し短く出来たかもしれない…。やってしまった。

「jeeさん、あんなのアリかよ！」

「まあ、レースじゃないし」

でも、選択肢も静を選ぶ確率も上がるんだから先に行って損はないと思う。

「あいつを先に行かせたら、島を術式だらけにされちまうだろ！」

「クツソー！」

「そうだ、レビイなら！」

「うん、書き換えられるよ！」

あ、そうか。書き換えればいいんだ。これくらい簡単だったら僕に
だってできるはず！

「でも、私とガジルだけ！」

「れ、レビイちゃん!？」

「ごめんね、ルーちゃん！じゃあね、皆お先く！」

「この野郎！」

え、レビイさん早くない？まだ一分どころか三十秒も経ってないよ
？

「ウフフ、私もフリードとは付き合いが長いからね」

「エバーグリーン！」

「もつと複雑ならともかく、これくらいの術式の書き換えくらいなら
できるわ。さあ、行くわよエルフマン！」

「漢ーっ!!」

「よし、こつちもようやく終わった！浮遊結界！^{パル}ウエンデイ、乗って
！」

「うん！」

「ゴーシユ！お前もか！」

「すみません、皆さん！お先に行きます！……ウエンデイ、頼んでいい
？」

「うん！天竜の咆哮!!」

これで推進力もでるから、もしかしたらレビイさんやエルフマンさ
んの組よりも先に着けるかもしれない。あの二組、単純に泳いで行っ
たみたいだし。あとはどの通路に行くべきか…

☆

狼煙が立っている地点に到着した。塞がっていない通路は、七つ。

「もう二つ塞がってる！」

「一つはフリードさんたちだとして、もう一つは…?？」

僕らは二番手のはずだ。だって海面に二組いたのを確認したし。だから、まだフリードさんたちしか道を選んでいないはず。なのに通ったのは二組…？そういえば、ナツさんが飛び出そうとした時から、メストさんとパートナーのローブの人を見てない気がする。

「…もしかしたら、メストさんの組が通ったのかもしれないね」

「え!?でも…」

「メストさんかパートナーの魔法が空間移動系なんだと思う。瞬間移動できるなら、ナツさんを止めていたあの瞬間に移動したのかもしれない」

確か、メストさんがそんな魔法じゃなかったっけ。それにしても、あのローブの人は誰なんだろう？マスターがちゃんと分かっているみたいだけど…

「あ、そっか…。すごいね、ゴージュ！」

「…そ、それで、どのルートにする?」

か、勝手に声が裏返る…!やばい、思ったより意識しているじゃんか、僕!冷静になるんだ、冷静に…

「…?私はどこでもいいよ!運もそこまでないと思うし…」

「そ、そっか…。えっと、じゃあDルートにしようかな」

「理由とかあるの?」

「…いや、ただ何となくというか…」

確かナツさんが、エルザのEがどうかって原作で言っていたような気がする。結果ナツさんがS級の誰かに当たっていた気がするから、というのが理由。

「それじゃ、行こう!」

「あ、ウエンデイ!走っていくと転ぶよ…!」

ウエンデイを追いかける形で僕も後に続いていく。入口を潜って後ろを見てみると、入り口が塞がれてしまっていた。なるほど、地雷式の魔法ってことか。多分これも僕が使う結界魔法の一種。結界魔法は造形魔法と同じくらい自由な魔法だ。使う人によって様々な効果を作れる。

「きゃっ!」

「ウエンデイ！って、なんだ…」

「いたた……」

「ウエンデイ、ほら」

「あ、ありがとう、ゴーシュ」

「……それじゃ、行こうか」

「あ……。う、うん！」

転んだウエンデイを見て、安堵する。いつもので良かった……。何かあったのかと、必要以上に心配してしまった。

僕はやっぱり、ウエンデイのことが好きなんだろう。でも、他の思いの方がどんどん大きくなっていく。自分は本来ここにいない人間だとか、ウエンデイの想いを盗み聞きしてから告白するなんて卑怯だとか。

僕がもし、ウエンデイに想いを伝えたとして、その先は？正直言つて、僕は自分が好きになった人に隠し事をしたくない。つまり、ウエンデイに僕が異世界から来た人間だつてことを話すことになる……。そう考えると、怖くなった。ウエンデイなら受け入れてくれるかもしれない。それでも……。今だつて、ウエンデイに心配をかけ続けていることも分かっているのに、僕は自分が情けなくなる。

ジエラールが言ってくれた言葉通りになるのは、まだまだ先の話になるかもしれないなど思っていると、やがて少し開けた場所に出た。ずっと遺跡か何かのような通路が続いていたけど、そこから先は足元が浸水しており、所々遺跡の残骸のようなものが飛び出している。

「ゴーシュ、ウエンデイ。よく来たな」

「！」

「え、エルザさん……！」

離れた場所に、エルザさんがいた。…自分の半端な原作知識のせいで、こんなことになってしまった。ごめん、ウエンデイ。

第33話 立ちはだかる壁

「これより一次試験を開始とする。……お前たちの力を示すことが出来れば、試験は合格とする。さあ、全力で来い！」

エルザさんが換装し、黒羽の鎧を身に着ける。攻撃力重視にして僕の限界を破壊するつもりだろう。さて、勝てるのか？あのエルザさんに……いや、確かに攻撃は得意じゃないけど、僕らだって成長しているんだ！

「ウエンデイ、付加術を」

「うん！攻撃力、防御力、スピードをエンチャント！アームズ、アーマー、バーニア！」

ウエンデイは能力を上昇させることができる付加術士だ。彼女がいることで、戦いやすさも格段に上昇する。

「柱 百 烈 拳！」

「黒羽・月閃！」

この一週間での修行の成果の一つがこの技。一瞬で大量に作り出した柱を、一気に相手へと突き刺す技だ。それをエルザさんは容易く切り裂き、躲しながらこちらへと接近してくる。接近戦に持ち込まれるのは確かに危険だけど、こつちにはリスクを冒すだけの価値がある。でも、まだだ。まだ早すぎる。

「防御結界・壁！」

「無駄だ！」

「弾性結界・立方！」

「くっ……！」

「天竜の咆哮!!」

「換装！」

壁で行き先を限定し、予想した場所から飛び出してきたエルザさんを上から叩きつける。その隙を見てウエンデイが追撃するが、間一髪で金剛の鎧へと換装されてしまった。

やっぱり、エルザさんは換装が早すぎる……。速度のある攻撃じゃないと今みたいに攻撃される直前に防御されてしまう。でもこつちの

攻撃手段が僕は防御結界、ウエンデイは天竜の咆哮しかない。

「どうした。もう終わりか？」

「くっ…」

「来ないならこちらから行くぞー」

またエルザさんが赤い鎧を身に着ける。確か、あれは炎帝の鎧…？
なんでその鎧に換装したんだ…？ここは足場が水になっている。なのになぜ効果が半減するような鎧を…？

「ふっー」

「きやつ!？」

「…：…そういうことか！防御結界・円蓋！」

エルザさんは炎の斬撃を僕らへといくつも放った。でも、それらはどれも僕らから逸れたものばかり。囲むように放たれたそれらは足元の水にぶつかり、一瞬で水蒸気となって僕らの視界を遮る。それが目的だったということが分かり、僕らを包み込むように結界を展開した。その次の瞬間、雷撃が襲い掛かってきた。

「だったら…：…反射結界！」

「…：…ゴーシユ、ダメ!!」

「ぐっ…：…!？」

防御結界を反射結界に切り替えると同時、ウエンデイが叫んだ。結界に槍が突き刺さり、あっさりと打ち破る。自分の失策に気づいた時には、もう遅かった。

☆

「…：…やはり、そうだったか」

エルザがいつもの鎧に換装し、そう呟く。目の前にはまだ水蒸気による目くらましが広がっているが、二人の姿は視認することができた。

「ゴーシユ!!なんで…：…!？」

「ハア…：…ハア…：…!」

ゴーシユは水蒸気と雷撃を合わせた攻撃を跳ね返そうと結界を切り替えた。エルザは以前に仕事を共にした際、赤紫色の結界は相手の

魔法を跳ね返す効果があるというのは本人から聞いていた。その話を聞いた時に強い効果がある分、結界自体の強度はないのではと思っただ。少なくとも、普段ゴーシユが多用している青緑色の結界よりは脆いはずだと。

なので雷帝の鎧による雷撃の軌道が不自然になった瞬間に、巨人の鎧へと換装し槍による一点突破の投擲攻撃をした。その結果、水蒸気によって雷撃はその場に帯電し続けていた為、結界が破られた瞬間二人に襲い掛かった。が、ゴーシユは反射的に防御結界をウエンディだけを覆うようにして彼女だけを守り、自分は雷撃と槍の攻撃を食らってしまった。

「ゴーシユ。それがお前の欠点だ」

「……………欠点……………」

「お前は、仲間を守る為に自分を犠牲にしている。もつと仲間を頼っていいんだ」

これまでの彼の行動を思い出す。同じ最強メンバーであるルーシユに聞いた話だが、ゴーシユは自らを犠牲にしても仲間を守ろうとする。六魔將軍オラシオンセイイスと戦った時は敵の攻撃を魔力が無い状態で受けようとし、エドラスではナイトウオーカーを相手に相打ちを狙った。ウエンディの話では、他にも無茶をし過ぎて心配が絶えないとか。確かに、一緒に何度か仕事をしたこともあるが、自分を囮にするようなことをしたこともあった。

彼は、ナツやグレイと同じくらい無茶をする。自分を犠牲にしてでも仲間を守る。その勇気は評価に値するが、自己犠牲と覚悟は似ているようで違う。確かに肉を切らせて骨を断たなければ勝てない相手というのはいる。だが、自分を犠牲にすることは仲間に深い傷を残すのだ。それは、一生消えることはないだろう。エルザは楽園の塔での一件でそれを身をもって経験していた。

とにかく、そんな自己を犠牲にする彼が今咄嗟にどんな行動をしたのかは一目見て察しがついた。エルザはゴーシユがここに来た時、この欠点を直せば合格にしようと思った。性格は真面目で仕事熱心で、元々魔導士としての腕前は申し分ない。やや攻め手に欠けはする

が、魔導士の仕事とは戦うばかりではない。それを補って余りある防御能力と多様性があるし、S級魔導士だからといって一人で仕事をこなす必要はない。自分が出来ないことは仲間を頼ればいいのだ。

「でも……。ウエンデイが、仲間が傷つく所は、見たく、ないんです……!!」

「ゴーシュ……」

「ならばお前自身が強くなれ。仲間だけでなく己も守って見せろ。そうして初めて、お前は仲間を守ったと言える。……さて、もう一つアドバイスをしてやろう」

「え……?」

エルザは換装し、天輪の鎧を身に着ける。それに対してゴーシュとウエンデイが再度警戒態勢に入った。

「……………今の息の合っていないお前たちでは、私には勝てんぞ!」
「!!」

ヒントを出し過ぎたような気がしつつも、弟や妹のように感じている二人なのだから仕方がないとエルザは切り替え、改めて戦闘へと突入する。また、以前のような二人を見れることを期待して。

☆

エルザさんに言われて初めて気が付いた。自分は守るとい言葉の意味を間違えていたのではないかと。

要するに、自分がこれまでしてきたのは自分勝手な行動だった。安全を意識するあまり、仲間たちがそれを見てどう思うのかを考えることが出来ていなかったんだ。自己を犠牲にする姿を見て、心配になったり怒ったりしていたウエンデイの姿が頭に浮かんだ。多分、他の皆にも心配かけていたことが何度もあっただろう。なんで、こんな簡単なことに気が付かなかつたんだろう。命を救うことはできても、心を傷つけてしまっていたというのに。エルザさんは仲間と共にこれか
らを生きていく為に魔法を使えと言っていたんだと思う。……ジェ
ラール——ミストガンも言っていた。妖精の尻尾フェアリーテイルと共に助け合っ
ていけて。

「防いでばかりでは、戦況は変わらんど！」

あらゆる方向から飛んでくる剣を結界で防ぎ続ける。今はさっきの攻撃を食らってしまったせいでもともとに動くことができない。ウエンデイが治癒魔法をかけてくれているが、回復できるまでエルザさんが待つてくれるとは思えない。

「ゴーシュ、このままじゃ……！」

「分かっている。何とかしなきゃ……」

僕の判断ミスで不利な状況になってしまったんだ。何か、何か作戦を考えろ……！考えろ、考えろ、考えろ……！！

「……ゴーシュ!!」

「!?ウ、ウエンデイ……?」

突然、ウエンデイが大声を上げた。それにビックリして、思わずウエンデイの方を向く。……なんですか、泣きそうな顔をしていた。

「ど、どうしたのウエンデイ!?ま、待つて、今作戦を考えてるから、落ち着いて……！」

「ゴーシュ、変だよ……。一週間前から、私のこと、避けてるような……」

「そ、そんなこと……！」

「換装!煉獄の鎧!」

「ま、ま……」

「はあっ!!」

巨大な大剣を振り下ろし、一撃で僕の防^{ディフェンド}御結界を打ち砕く。このままじゃ、この流れのまま接近戦に持ち込まれる……!

「天竜の……!!」

「え、ちよっ、まっ……!?」

「咆哮……っ!!」

ウエンデイの渾身の一撃がエルザさんに向けて放たれる。すぐ近くにいた僕もあまりの威力に何歩か後退ってしまった。ウエンデイの魔力が、上昇しているような……?」

「惜しかったぞ、ウエンデイ」

「上!?!」

「換装！明星・光粒子の剣!!」

「うわあつ!!」

「きやあつ!!」

飛翔の鎧で上へと回避したエルザさん。またも換装で明星の鎧を装着し、両手の剣から放たれた光弾が僕らを襲う。距離が近かったせいで、結界を展開することも出来ずに被弾してしまった。

「ウ、ウエン、デイ……!」

ウエンデイの姿が見えない。さっき水に何かが落ちたような音がしたから、ウエンデイが落ちたのか? いや、まずは追撃されないようにしないと……。状況を立て直せるだけの時間を稼ぐんだ……!

「防御結界・壁……!」

よし、これで通路は塞がれた。エルザさんもさすがにこの大きさの防御結界を破壊するのは時間がかかるだろう。

「ウエンデイ、返事をしてくれ!ウエンデイ……ぐっ!」

思ったよりダメージが大きい……。そうか、今までこんなにダメージを受けたことなかったけど、よく考えたらまだ十二歳なんだよな、僕は……。前世に比べたら体の強度はあるかもしれないけど、まだ成長途中の体なんだ。これ以上のダメージを受けるのはまずいか……。ウエンデイも、かなりダメージを受けたはず……!

「ウエンデイ……そうだ!索敵結界!!」

多分ウエンデイは水の中のどっかに落ちたんだ。僕は運良く岩に叩きつけられただけだったけど、あの勢いで水中に落とされたら……。もしかしたら、気を失っているかもしれない。索敵結界を最大限10mまで広げる。水中でもこれなら……!

「……いた!ウエンデイ!」

僕以上に飛ばされていたらしく、さらに数m離れた場所の水中にいた。全然動く気配がない……。急がなきゃ……!

ふらつく体を抑えつながら、近くの岩まで飛び移り、そこから水中へと飛び込む。やっぱり気絶していたウエンデイを見つけてすぐに浮上する。結界を使って岩場の上に移ったけど……

「ウエンデイ!しっかりして、ウエンデイ!!」

「……………」
…少しの時間だったと思うけど、大分水を飲んでしまっているかも
しれない。」

……………

……………

……………

「……………ああ、もう!!……………ごめんね、
ウエンデイ」

命を救うためだから、勘弁してほしい。

ちゃんと、責任はとるから。

第34話 永久のキズナ

「……………ごほっ、ごほっ！」

「ウエンデイー！」

ウエンデイがむせ込み、少しずつ体を起こしていく。……良かった、本当に。

「ゴ……ゴージュ……？」

「大丈夫？気分は？」

「……うん、大丈夫。ちよつとフラフラするけど……。そうだ、試験は!?」

「まだ続いてるよ。あれの向こうにエルザさんがいるんだ。……多分、待ってくれてる」

あれから数分は経っている。それでも何もしてこないってことは、待ってくれているに違いない。結界があるってことが、僕がまだ諦めていないって意思表示だと思ってくれているのかもしれない。

「よ、良かった……。ごめんね、ゴージュ。途中で気絶しちゃって……」

「……」

「……？ゴージュ？」

「えつと、ウエンデイ」

「どうしたの？」

……言わないといけないことがある。目の前の女の子に。

「……………聞いてほしいことがあるんだ」

「……………いいよ」

「え……？」

「無理に言わなくて、いいんだよ。言いたくないんだったら、辛くなっちゃうんだったら、無理しないで「違うんだ……」……ゴージュ……？」
ウエンデイが気を遣ってくれている。でも、もうこのままじゃいけないんだ。

「……ありがとう。気を遣ってくれてるんだよね。でも、言つとかないと後悔するから……。こんな時だけど、言わせてほしい」

「……うん。聞かせて」

今までずっと、ウエンデイには助けられ続けてきた。この世界に來てから最初に出会ったのが彼女で、ナツさんたちと出会うまでほとんど仕事も一緒に行ったり、魔法の特訓をしたり、たまに普通の子供のように遊びまわったり。あの頃は僕がウエンデイを守らなきやって思つて、必死に魔法の特訓をした。

でも、オラシオンセイイス六魔將軍と対峙した辺りから、ウエンデイはどんどん強くなつていった。ナツさんがガジルさんと喧嘩しているところとかよく見ていて、技の参考にしようの特訓していたのも知っている。エドラスではあのドロマ・アニメと戦えるほどに成長した。ジェラールにも言われたけど、もう、ウエンデイは守られる存在じゃないと感じた。感じたんだけど………やっぱ、僕は。

「君が、好きだ」
「……！」

「ジェラールはもう、君を守る必要がないって言つてたけど……僕は、君を守り続けるよ。僕にとって、一番大切なのは、君だから」

どれだけ強いからつて、もしも僕より何倍も強いんだとしても、僕が守らない理由にはならない。大切な存在だということは、変わらない。

「ありがとう……。私もゴーシユのことがずっと前から、好きだったんだ。優しくて、いつも誰かの為に行動してて……ずっと尊敬してたんだ」

そう言われると、なんだかくすぐったい……。

「ゴーシユ」
「！」

ウエンデイが僕の胸に飛び込んでくる。前にニルヴァーナが発動した時もウエンデイを受け止めたことがあつたけど、あの時とは違う。あの時はただ恥ずかしさだけがあつたけど、今はそれに加えて、心が、温まるように感じる。なんだか、安心する感じ。

「……これからも、よろしくね」

「うん……！」

「あと………いや、やっぱいい」

「何？」

「今度話すよ。今はこれ以上、エルザさんを待たせるわけにはいかないし。それじゃ、作戦会議しようか」

「気になるなあ…」

この間の盗み聞きしちやったこととか……さっきのこととかは、話しておかないと怒るだろうな……。そしていつか、前世のこととかも話せたらいいな。

☆

作戦会議終了。上手くいったら、あのエルザさんからでも一本取れるはずだ。

「いくよ、ウエンデイー！」

「うん!!」

ウエンデイが走り出すと同時に、弾性結界バウンドで足場を複数作り出す。そして、今のうちにある程度の仕込みもしておく。

「天竜の咆哮!!」

結界を足場にしてウエンデイが加速し、攻撃のタイミングに合わせてエルザさんと僕たちの間にあつた防御結界ディフェンドを解除する。

「……さすがエルザさんだ」

でもそれを予期していたのだろう、エルザさんの姿はそこにはなかった。エルザさんなら金剛の鎧で受け止めてくるかなどか思ったんだけど、そんなことはなかったみたいだ。姿がないのなら、どこかに身を隠しているってことだから…

「索敵結界！」

弾性結界バウンドで移動しながら索敵を始める。エルザさんのことだから、水中とか岩をくり抜いて隠れるとかもありそう……っ！

「防御結界・匣！」

僕とウエンデイにそれぞれ結界を張って防御した瞬間、水中や岩に紛れていた沢山の剣が僕らに向かって飛んできた。索敵しといて良かった…。

「換装！」

「ゴーシュ!!」

「うん!!」

エルザさんが煉獄の鎧に換装して、僕の背後からさつきみたいに境界を破壊しにきた。ウエンデイの声で反応して僕とウエンデイの周りの防御結界を解除する。

「天竜の咆哮!!」

「換装!」

さつきより距離が短いから、当たると思ったんだけどな…：飛翔の鎧で躲かれた。

「なるほど。先ほどより動きが良くなったな」

「おかげさまで、ですかね」

まあ、あれだけ助言を頂いているから、少しは前に進めないかね。精神的に抱えていた問題が無くなったからか、何でも出来るような気がする。…：二人なら、頑張れる。

「ウエンデイ」

「大丈夫、やれるよ」

「それじゃ…いきますよ、エルザさん!」

「来い!」

「柱 百 烈 拳!!」

まずは先制攻撃をさせてもらう。一番最初に放って全部対応されてしまったけれど、今回はさつきまでと違う。

「天竜の咆哮!!」

「換装!」

ウエンデイの竜巻に乗せることで軌道を読まれにくくする。さつき話し合って考えた戦法だけど、これは僕が却下した攻撃方法だった。

だって、いくら打ち解けたからといっていきなり合体魔法なんてできると思えなかったから。そしてやったとしてもエルザさんからしたら付け焼き刃にしかならないんじゃないかと思ったから。

それなのになんで実践したか?それは、ウエンデイの狙いが攻撃ではなかったからだ。

「はっ！」

ウエンディの天竜の咆哮とそれに乗せた数本の柱トータルがエルザさんに突き刺さる。まあ金剛の鎧で防がれたからダメージはないだろう。それに、この攻撃の狙いも上手くいったから良しとしよう。

「防御結界・壁!!」
ウオール

「これは……！」

「天竜の……!!」

大量の柱トータルがエルザさんを囲うように壁に突き刺さっていて、今の壁ウオールでエルザさんは逃げ場をなくした。そこに、空気を食べたウエンディの一撃と、作戦を考えてる時に思いついた僕の新技。

「咆哮!!」

「柱百花槍!!」
ブルーム・トータル

イメージは砂の元人○力さんの技。周囲に突き刺さっている柱全てをエルザさんに突き刺す。これが、ウエンディと話し合っただけで考えた作戦だ。今の僕たちにはエルザさんの金剛の鎧を破ることなど出来ないけど、あの鎧は正面しか防ぐことが出来ない。だったらどうにかして、エルザさんを全方位から攻撃することが出来ないかと考えた。さっきの合体魔法ユニゾンレイド擬きは柱トータルを周囲に配置する為の布石。

まさかウエンディがこんな作戦を考えるととは思わなかった。思わなかったけど、聞いたと同時に納得してしまった。前世でゲームやっている時に感じたが、回復役やバフ・デバフ役っていうのは周りの状況をずっと把握していなければならぬと思う。ここは現実だから違うのかもしれないけど、今までサポートに回っていたウエンディには状況を把握する力が養われていったんだ。状況を把握できれば、作戦を立てるのにすごい役立つ。

とにかく、これでエルザさんはこの攻撃を避けることは出来ない、はず。ウエンディの天竜の咆哮を防ごうとすれば僕の柱トータルが襲いかかり、僕の攻撃に対応しようとするれば竜巻に飲み込まれる。これなら、いけるはず!

「換装」

「……!!」

エルザさんの声が聞こえた瞬間、竜巻が……斬られた。

「天輪・円輪の剣!!」

一瞬何が起こったのか把握できず硬直してしまったが、その次の光景を見て思考が再び加速する。天輪の鎧に換装したエルザさんが、周囲の柱を剣で相殺していた。僕の結界は剣で壊せるほど脆くない。でも、そこは物量の差で一本の柱につき何本か剣を当てて軌道を変えられた。さらに、剣を当てて弾く方向を調節して、別の結界にも当ててる。百烈拳とか百花槍とか言っているけど、今の僕には柱は精々五十が限度だ。

あの一瞬で、あれだけの攻撃を対応してしまった。これが、S級魔導士の実力か……

「天竜の……!」

「……防御結界・立方!!」

もう一つ、この攻撃の後の作戦も立てておいて良かった。

「な——」

「碎牙!!」

加速したウエンデイが、エルザさんのすぐ真横を通り過ぎていった。そのまま向こう側の水に落ちそうになったけど、弾性結界を展開したから問題ない。そのまま、ウエンデイがまた直接攻撃しようとしていたけれど、エルザさんがゆっくりと足下の岩場に降りて、たまに見る普段着に換装したのを見て中断する。

「……見事だ。お前たちにこんな攻撃手段があるとは。…私もまだまだだな」

エルザさんは右腕を押さえている。さっきのウエンデイの一撃が入った証拠だろう。よく見ると、血が流れていた。

「エルザさん、血が……!」

「大丈夫だ。負傷した敵に情けをかけるな」

「そんな……!」

ウエンデイがエルザさんの治療をしようとしたけど、制止されてしまった。僕たちがつけた傷だとしても、やっぱりウエンデイは治そうとしている。……敵によっては、ふざけるなど言われてしまいそう

だ。でも、今回の相手は敵じゃない。僕たちと同じギルドの、尊敬できる大先輩だ。……だったら、いいだろう。元々考えていたことだし。

「エルザさん」

「なんだ？」

「僕は――」

第35話 メスト

ここは、一次試験を突破してきた者たちが集まる場所。ほとんどの組がすでに試験を終えている。そしてまた、この場所にやって来た魔導士が二人。

「グレイ！ロキ！やっぱり一次試験を突破してきたんだね！」

「とりあえず、おめでとう」

長い長い洞窟を抜けてきたグレイとロキを、ルーシイとカナが出迎える。

「私たち、静のルートでラッキーだったね」

「どこが！誰も殴れなかったんだぞ！」

少し後ろの方に、レビイとガジルが岩の上に座っている。その近くにはフリード、ビッグスローの姿もある。

「一次試験を突破できたのは、これだけか」

「ん？ナツは？」

「あつちにいるよ！」

「……………」

グレイたちから少し離れたところにナツの姿もあったが、いつもの彼からは想像できないほど静かだ。何か考えているようにも見える。

「なんだ、アイツ？」

「どうしたんだ？」

「それがね……」

「さて、これで全員揃ったかな？」

「マスター！」

ハッピーが一次試験での出来事を話そうとした時、どこからかマスター・マカロフがやってきた。それに反応して全員がマスターへと視線を向ける。

「では、これまでの結果を発表する！まずカナとルーシイ、レビイとガジルは運良く静のルートを通り、突破！」

「運が良いだ?!」

「へへへん」

ルーシイとレビイは自慢げにしているが、ガジルは不機嫌だ。ガジルは誰かと戦うことを楽しみにしていたので、当然の反応とも言える。

「ナツとハッピーはギルダーツの難関をクリアし、突破！」

「嘘だあーっ!!」

「オイラ何にもしていないけどね」

ナツの思ってもいなかった結果に、グレイが叫ぶ。ギルド最強と言われているあのギルダーツのルートを選んで突破することが出来るなど、思ってもいなかったのだろう。

「グレイとロキはメスト組、フリードとビッグスローはジュビア組を破り、突破！」

本来、フリード組はカナ組と当たっていたが、ゴーシユ組が参戦していることよってルートが変化している。本来当たるはずの無いフリード組とジュビア組が当たってしまった、フリードらが勝利した。後にはゴーシユたちとエルフマンたちね……

「グモオっ!!」

「な、なんだよじいさん……」

「ゴーシユとウエンディは、あの手の抜けない女騎士に当たってしまったのだ……!」

「あゝあ」

「残るルートは……!」

「ミラジエーン……」

「可哀想に……」

「俺なら勝つてたけどな」

「待てえい!!俺らも姉ちゃん倒してきたぞ!!!」

「一次試験突破よー!」

ボロボロになりながらも、この地点に到達したエルフマンとエバーグリーン。これで合格したのは六組となった。ハッピーがどうやって倒したのか聞いても、二人とも話そうとしないので疑問に思っていた人が何人かいたが。

「これより、二次試験を開始する!!」

「ナツ、いつまで落ち込んでんの？」

「……………いや、ちよつと考え事」

「ナツがく、何かをく、考えるく!?」

「どんだけ見くびられてんのよ…」

ナツは今回の一次試験で、ギルダーツに立ち向かっていった。果敢に攻め続け、渾身の滅竜奥義でも傷一つつけることは出来なかった。それでも諦めること無く立ち向かったが、ギルダーツの全力を感じ取り、降参した。ギルダーツはその自身の刃を納める勇気を認め、合格としたのだ。

———またいつでも勝負してやる……………S級になってこい、ナツ!

「……………へっ、分かったよ、ギルダーツ」

誰にも聞こえないくらい小さくそう呟き、ナツが立ち上がった。そこには、いつもの彼の燃えるような瞳があった。

「グレイ、カナ、レヴィイ、エルフマン、フリード!!誰がS級魔導士になれるか、勝負だ!!」

「お前にだけは負けねえよ」

「私だって…!」

「その勝負、漢として受けて立つ!!」

「全力でいくぞ」

「あたしは絶対、カナをS級にするもん!!」

「たとえばルーシイでも、僕は手を抜かないよ」

「ギヒツ、吠えてろ屑が」

「漢たる者くく!!…ぐはっ!」

「エルフマン、しっかりしなさいよ…ぐふっ!」

「この二人はねえかな」

こうして、二次試験が開始された。内容は、初代ギルドマスター・メイビスIIバーミリオンの墓を六時間以内を探し出すこと。

☆

「疲れた…」

「ゴーシユ、大丈夫？」

ここは試験敗退者用のベースキャンプ。僕は用意された簡易布団で横になっていた。近くで、エルザさんやミラさん達が、エルフマンさんとエバーグリーンさんについて話している。結婚がどうか言ってるけど、ミラさんに隙を作る為の虚言だと思う……少なくとも今は。

「ゴーシユ、いつまでそうしているのだ。男として情けないぞ。試験での気迫はどうしたのだ」

「はは…辛辣ですね、エルザさん」

「二人とも、運が無かったね。エルザと当たるなんて」

「ここにいる人は運が無かった人だけだと思うんですが」

ジュビアさんたちもフリードさんたちとぶつかって敗北したのでここにいるわけだし。

「いや、私はお前たちの実力は認めていたぞ？」

「え？じゃあなんで？」

「僕が棄権したんで」

「え!?!もつたいない!エルザが合格にするとこなんて想像もつかないのに!!」

リ、リサーナさん…それは言い過ぎじゃないかな? いや、でも最初にエルザさんが見えた時に絶望したのは確かだから…いいの。あ、エルザさんの背後にオーラが見える気がする。

「だって、あれが今の僕たちの精一杯ですし」

「今回は僕が至らない点が多すぎたので棄権させて下さい、つて」

「至らない点?」

「……ノーコメントで」

エルザさんのアドバイスで分かったこととか、ウエンデイのこととか。言われて初めて気づいた点が多かったから、まだまだ未熟だなんて思った。だからちゃんと一人前になったと思えるようになってからS級になりたいって思ったんだ。ただの我が儘かもしれないけど。というか余計なことは言わなくて良いよ、ウエンデイ。

「別に良いと思うんだけど」

「僕の心を読まないでよ…」

これ、もう僕が分かりやすいってだけじゃないよね？ウエンデイが察しが良すぎるだけじゃないの？これは最早一種の魔法でしょ…ウエンデイ、いつの間にそんな魔法を…！

「…変なこと考えてるでしょ」

「そんなことないって！」

「お前たちは本当に仲が良いな」

「なんか前より仲良くなってる？」

「仲良くなるのは良いことですよ。……恋敵が一人減りますし」

ジュビアさん……まさか、ウエンデイもグレイさんの恋敵に含んだの？いや、まさか…ね？あり得るような気もするから恐ろしい。

「そ、そういうばメストさんの組はどうしたんですか？」

「あ、話逸らした」

「だが確かに遅いな」

「結局メストのパートナーって誰だったのかしら？」

「知っているのはマスターだけでな…グレイたちなら分かったかもしれないが」

原作だとメストさんのパートナーがウエンデイだから…誰か別のギルドメンバーってことになる。背はメストさんと同じくらいだったから、リーダーさんとかはないと思うけど…気になるな。

「メストから…彼とはエドラスで会ってないからよく知らないのよね。私のいない二年の間に入ったんでしょ？」

「……そうだった？」

「昔からいたような……」

「存在感ないのね…」

結局メストさんはギルドの一員なのかな…？それとも……やつぱり思い出せないけど、嫌な予感もする。これ以上、不安要素は取り除いておきたい。それに、確かこの後はあのギルドもここにやって来るはずだ。そんな時に勝手な行動は取らないでもらいたいし。

「ジュビア、探してきます。少し心配だし」

「ならば、私も行こう」

「僕もいきます」

「あ、それなら私も！」

「お前たちは疲れているだろう。ここで休んでいると良い」

「大丈夫です。さつきまでゆっくり休みましたし」

「……エルザさん、ちよつといいですか？」

ウエンデイがエルザさんに何かを耳打ちしている。その後エルザさんが少し赤面したかと思っただけに咳払いをして気を取り直す。……ウエンデイ、何を言っただんだ？

「で、では二手に分かれて探そう。見つけるか一時間経っても見つからないようなら一度ここへ戻るんだ。ミラとりサーナはここにいてくれ」

「了解」

「よし、行くぞジュビア」

「え？ちよ、ちよつとエルザさん！」

「ほら、ゴーシュも行くよ」

「え？あ、うん」

よく分からないけど、搜索に行けるならいつか……。エルザさんに引きずられていくジュビアさんが涙目になっていたような気がしたけど、気にしないようにしよう。

☆

キャンプを出てしばらくして。かなり森を進んだが、未だメストさんたちは見つけれられない。

「……ウエンデイ、今何か感じなかった？」

「え？ううん、私は何も。どうかしたの？」

「……いや、気のせいだと思うから」

何か寒気がするような感覚がして、誰かの魔力かかって思ったんだけど……ウエンデイが何も感知していないようだから気のせいなんだろう。今の僕が魔力感知に長けているとは思えないし。

「……それよりゴーシュ、聞きたいことがあるんだけど」

「ん？」

「あのね？一次試験の時に言ってたことなんだけど…」

「一次試験？………あ」

ま、まずい。そうか、この為にエルザさんに頼んでたのか…どうしよう？確かに後で言うからとは言ったけど、こんなすぐに聞き出しに来るとは思わなかった。

「聞いちゃ、ダメかな…？」

「いや、その……」

まだ前世のことは話す気はない。それ以外は…いい、のかな？でも盗み聞きしたことも一次試験であったことも、どっちを話しても怒られる気がする…いやいや、何を躊躇っているんだ僕は。後で話すつて言つたし、そのタイミングが今になつただけじゃないか。

「話すけど、とりあえず話し終わるまで怒らないでね？」

「……怒られるようなことしたの？」

「えっと……はい」

「ゴーシュく…！」

「ま、待って！どっちも不可抗力に近いんだって！せめて言い逃れだけはさせて…」

「どっちもつてことは、複数あるの!？」

「あ、えっと………すみません」

「……とりあえず、話だけは聞いてあげるよ」

一旦冷静になってくれたみたいだけど…これは一発もらうことも覚悟しておこう。

「えっと…「ウエンディく！ゴーシュく！」…シャルルに、リリー？」

「無事だったか、お前たち」

先ほどウエンディと話していた場所のすぐ近く、海を見渡すことができる場所にたどり着く。そこで、シャルルとリリーがこちらに飛んできた。

「二人とも、なんでこの島に？っていうか無事って…」

「見学で来たのよ」

「よほどウエンディのことが心配だったらしくてな。それに先ほど、

「ここからかなり離れた森の方で争っているような光景が見えた」

「あんたたちが無事で良かったわ」

「無事って、そこまで心配しなくても…ナツさんとかガジルさん辺りが怪物倒しながら進んでるだけじゃないかな？」

「これまで見たことが無いような生物が多く生息してはいるけれど、この試験に参加している人たちの中でそれらを危険と呼ぶ人は少ないと思う…まあ、ここにいるウエンディとかルーシイさんやレビイさんも言いそうではあるか。それでもウエンディのパートナーとして僕がいるんだからちよつとは信用してほしいんだけどな…」

「違うのよ」

「え？」

「違うって…」

「別に試験内容がどうってことじゃないの。ここにいるモンスターくらいなら、今のあんたたちなら問題ないと思う」

「だったらなんで？」

「メストだ。俺は、奴がギルドのメンバーではないかもしれないと思っっている」

「え…？」

リリーがそう言ったすぐ後、空に赤い光の球が出現した。この試験中に何か想定外の出来事が起こった場合の為にいくつか信号弾を用意している、という説明を試験前にマスターから聞いていた。あれは、その中の一つだ。

「あれは…！」

「ゴーシユ、あの信号弾って何の合図だっけ？」

「ウエンディ、あんた覚えてないの？」

「う…ご、ごめん…」

「赤の信号弾は警戒態勢。つまり、敵だ」

「敵って、まさか？」

「メスト、かもしれんな。もしくは奴の仲間が攻めてきたか」

「皆、あれ！」

シャルルが指さす方向を見る。ベースキャンプからここまで続い

ていた森をようやく抜け、海を見渡せる崖になっている。その先端に、探していた二人がいた。

「メストさん！」

「ウエンデイとゴーシユ？お前たち、どうしてこんな所にいるんだ？」

「帰ってこない貴方を探していたんです。……何してたんですか？」

「年甲斐も無く探検していたんだ。心配かけたようですまない」

そう言ってこちらへと近づいてこようとしていたメストさん。それを遮るように、シャルルとリリーが前へと出てくる。

「メスト、あんたは一体何者なの！」

「え…俺は、ミストガンの弟子で——」

リリーが元の大きさに変身し、メストさんのすぐ後ろにあつた岩を殴りつける。

「ミストガンがこの世界で弟子をとるはずがない。この世界からいなくなつた人間を使つたまでは良かったが…設定を誤つたな、メストとやら……お前は、何者だ！」

「…すみません、メストさん。あと、貴方も誰か分かりませんが動かないようにお願いします」

複数の防御結界・柱ディフェンド トーテムでローブを着た人を囲む。両手を挙げたのを確認した僕は近づいてローブを掴んで、取り払った。

第36話 悪魔、襲来

ローブを取り払い、相手の姿を確認する。黒い短髪、細身の体、左目の近くには古傷がある。姿を見て、僕は困惑した。

「え……？」

「メストが、もう一人……？」

「……これは、アースランドの魔法の一種か」

そう、目の前にはすぐ近くでリリーが動きを封じているはずのメストさんの姿があった。てつきりギルドの誰か、可能性は低いけどギルド以外の人物を想定していたけど、メストさんがもう一人……？ 確か、この魔法は……

「思念体ね」

「そんな魔法も使えるとはな」

「リリー……？」

「恐らくこいつは、人の記憶を操作する魔法の使い手だ。ギルドのメンバーに魔法をかけ、自分がギルドの一員であることを装った。ミストガンのことも含め、考えれば不自然な点だらけだ。お前と接点を持つ者の名も上がらない」

リリーの話の途中で、僕の目の前のもう一人のメストさんが消える。これ以上思念体を作っておく必要がないと判断したんだろう。

「……………」

「消えた!？」

「きや……！」

そして次の瞬間、メストさんが消える。が、ウエンデイの声で居場所が分かった。僕の後ろ、ウエンデイの目の前だ。

「ウエンデイ!!」

「デイフエント 防御結界・円蓋！」

「……広げろ！」

ウエンデイを結界で覆う直前に、すぐそばにいたメストさんはまた消える。でも消える直前、僕の方を見てそう言ったのを確かに聞いた。どうということかと思っただ直後。

「うわっ！」

「きゃっ！」

目の前で、爆発が起きた。僕は咄嗟にガードが間に合ったけどそのまま吹き飛ばされ、崖から身を投げ出してしまった。が、その後地面の上に立っているというか、地面に足をつけている感覚があった。腕を退けると、目の前には赤とオレンジの縦縞模様があった。

「メストさん…？」

それがメストさんの着ていた服の柄だと気づき、今僕はメストさんに守られていることに気がつく。

「大丈夫か？」

「あ、はい。皆は…」

ウエンデイは結界に守られている。リリーもシャルルを抱えて空に逃げていたようだ。既に近くに着陸する体勢になっている。

「無事か、ゴージュ！」

「うん…今のは——」

リリーが地に足をつけたその時、ある方向が光つたのが見えた。これがさっきの爆発攻撃と同じ物だと理解するのに時間はかからない。

「防御結界・円蓋…もう同じ手は食らわない」

「誰だ、出てこい！」

攻撃が来た方向には、一本の木。それ以外に何か隠れられそうな物はない。索敵結界をしようかと思っただが、すぐに止める。メストさんの声に反応したのか、木の一部が変形を始め、やがてそれは人の顔のように見える形になる。それを見て、僕はウエンデイを守っていた結界を解除、ウエンデイはすぐこっちに近づいてきた。

「…よくぞ、見破ったものだ」

「木から人が…！」

「何者だ！」

「俺の名はアズマ。悪魔の心臓、煉獄の七眷属が一人」

「グリモアハート…？」

「闇ギルドよ」

「それも、三大勢力の一角…」

「さっきの信号弾は、敵の襲撃を知らせる物か」

顔だけだったのが、さらに変形を続けやがて上半身の形になった。

「今更遅いと言っておこうか」

「くっ…一体、何がどうなっているんだ!!」

「フェアリーテイル妖精の尻尾の聖地に侵入すれば、きな臭い話の一つや二つ出ると

思ったんだがな…黒魔導士ゼレフにグリモアハート悪魔の心臓…こんなでけえヤマ

にありつけるとは、ツイてるぜ」

「あんた一体…!」

「まだ気づかぬえのか？俺は評議院の人間だ。フェアリーテイル妖精の尻尾を潰せるネ

タを掴む為に潜入していたのさ」

…やっぱり、評議院の人だったのか。ギルドのメンバーか評議院の人間か、よく分からなくなっていたけど、これでハッキリした。ハッキリしたのは良いんだけど…この状況、不味い。僕たちとグリモアハート悪魔の心臓、そして評議員の三つ巴…今の状況だと、メストさんが僕たちの味方をしてくれるとは限らない。

「評議員!」

「そんな…!」

「だがそれもここまでだ…あの所在地不明のグリモアハート悪魔の心臓がこの島にやって来るとはな…ハッハッハッハッハ!これを潰せば出世の道も夢じゃない!万が一に備え、評議院強行検束部隊の本隊、戦闘艦をすぐそこに配置しといて正解だった…一斉検挙だ!悪魔の心臓を、ひねり潰してやる!」

言われて気づいたけど、沖の方を横目で確認すると確かにそれらしき艦隊が見える。あんな大きな船が近くににいるのに気づかないなんて…いや、後から来たシャルルやリリーも気づいてなかったんだ。きつと隠蔽する魔法の一種を応用していたんだろうから、気づかなくても仕方ないか…

「戦闘艦…あれのことかね」

アズマも横目で背後の方にそれらがあることを確認する。すると戦艦の辺りが光り、先ほど僕たちを襲った攻撃の何倍もありそうな爆発が起こった。

「な……!!?」

「え……!?!」

「な、何をしたの!?!」

「船が……!」

「馬鹿な……!」

戦艦は全艦大破、と言った所か。海上で大火事が起こり黒煙を上げている……まだかなり遠いのに、ここから戦艦を破壊するほどの威力。今初めて気づいて攻撃したのか、今の会話で気づいたフリをしただけで元々爆弾か何かを仕込んでいたのかは知らないけど……この人の魔法はまともに食らったら不味い……!

「では改めて……そろそろ仕事を始めても良いかね? 役人さん」

「……全員、下がってろ!」

「リリー、援護するよ!」

「リリー、ゴーシュ!」

「うおおおおっ!!」

リリーが猛スピードでアズマに接近し殴りかかる。アズマはリリーが間合いに入る直前に右手をこちらに向ける。

「ブレビー」

「ディフェンド 防御結界・壁!」

リリーの目の前に壁をつくり相手の爆発を防ぐ。どうやらあの爆発攻撃にも規模の違いがあるようだ。接近戦だからなのか、威力がある戦闘艦を破壊したものは別物だ。おかげで防ぎきることができ、リリーにダメージはない。そのまま右下からのアッパーを食らわせる。

「……!!」

「うおっ!」

「きゃあっ!」

「リリー!」

「……大丈夫だ!」

だがアズマはまるで何ともないかのように、リリーにノーモーションで爆発攻撃を放ち、リリーは爆発に飲み込まれてしまった……そう

か、船を破壊した時は何も動いていなかったのだから、ノーモーショ
ンで繰り出せるのは当然。もつと、爆発する前の光を見るんだ…！

「二人とも！援護します!!」

「おお…！これがサポートの魔法というものか…！これなら！」

「ウエンデイ…」

ウエンデイが起き上がり、僕達にバーニアとアームズを付加する。
これでスピードと攻撃力が上昇。リリーは飛び出し、再度接近を試み
る。アズマも爆発攻撃を連発しているが、スピードの上昇したりリリー
に当たることは無い。

そして僕は、ウエンデイが領いたのを見て、この付加術をかけた意
味を理解した。これは、賭けだ。本当にまだやったことがない戦術。
だからエルザさんとの戦闘でも使えなかった。きつとウエンデイも
この攻撃が効くとは考えていないはずだ。

ハンドレッド・トレーティスト
「…柱 百 烈 拳!!」

「ブレビー」

結界の柱を、アズマが爆発でへし折っていく。その威力に改めて脅
威を感じるが、あれだけの威力を出すには一つの爆発にそれだけの魔
力を込める必要があるはず。アズマが僕の攻撃の対処に時間をかけ
てくれれば…！

「でやあつ!!」

「…メストさん、私に作戦があります！力を貸して下さい！」

リリーの蹴りがアズマにヒットする。僕は移動しながら、アズマを
囲むように柱を生み出していく。リリーが空中へ逃げられるように
配慮しながら。

「な、何を言っている！俺は評議院の人間だぞ！」

「今はそんなの関係ありません！私は妖精の尻尾を守りたい！力を貸
して下さい!!」

「ゴーシユ！その結界を、棒状に出来るか!?!」

「了解！デイフエント防御結界・柱！」

「よし、武器さえあれば!!」

「む…！」

リリーの手元に刀サイズの柱を生み出し、リリーがそれを掴んでアズマへと斬りかかる。剣とただの棒ではかなり変わるだろうけど、エドラスでは魔戦部隊隊長だったリリーの腕前なら問題ないはず。リリーの先ほどもと違う動きに、アズマも僅かに驚いたような顔をすする。その間に僕も残りの作業を進める。

「俺は出世の為に、お前たちのギルドを潰しに来たんだぞ！」

「構いません!!絶対、潰されたりしないから!!」

「リリー、今よ!空へ!」

「柱百花槍!!」
フルーム・トイェスト

背後にいるシャルルの声に合わせてリリーが飛んだのを確認し、アズマの真後ろに攻撃が行かないように気をつけながら、アズマの周囲の柱を一斉に突き刺す。

「天竜の……!!」

アズマの真後ろに瞬間移動してきたメストさんとウエンデイ。そしてウエンデイ自身にもアームズが付加されている。これで――

「つまらんな」

「!!」

ウエンデイの一撃よりも早く、アズマが両手を広げる。

「タワーバースト!」

戦艦を破壊したあの爆発の何倍、何十倍の規模の炎の塔が僕らを飲み込んだ。

第37話 竜と神

アズマの攻撃、炎の塔によって辺り一帯が崩壊する。その範囲だけ地面が崩落してしまい、抉られたかのようにも見える。

「……ふむ」

アズマは下にあった別の崖の方を見渡す。敵は全員自分の攻撃に飲み込まれたはずだ、ならば崩落と共に下に落ちてしまっているはず。

だが、そこに彼らの姿は無かった。

「逃げられた、かね」

それはつまり自分の攻撃を躲した、もしくは防ぎ上手く身を隠したということ。あの場にいた者でそれが可能だったとすれば、真つ先にかかるのは顔に傷のあった男。自身に瞬間移動で奇襲を仕掛けてきたのだ、同じく瞬間移動で回避したのかと考えるが。

「……全員が逃げ切るとは思えんがね」

自分だけならまだしも、全員同時に瞬間移動するのは不可能だ。恐らく、奴は自分に触れている者のみしか一緒に瞬間移動することができない。故に、あの男ではない。

だとするならば、残る可能性は。

「……あの少年か」

青緑色の髪をした少年。結界を生み出すあの魔法も空間系に含まれる。ならば結界にそういった能力を付与することも可能だろう。

「まあいい。本来の仕事に取りかかるとしよう」

アズマは、森の中に消えていった。

☆

「…上手くいったね、ゴージュ」

「本当…どうなることかと思ったわ」

「よく逃げれたよ、本当に…」

「全くだ」

僕らは今、森の中にいた。崖下の森の中を進んで、ようやく一息つ

くことができた。ここなら上手く隠れられる。

「ゴーシユ、あれはお前の魔法か？」

「あれ？リリーは弾性結界見るの初めてだっけ？」

「ああ、あのクツシヨンみたいな結界もそうだが…俺が言っているのは、奴の攻撃をお前が受け止めた時の方だ」

「……………え？」

シャルルが呆然としている。あれはこの一週間で新しく作った結界で、ウエンデイにしか詳しく説明していなかったので無理は無い。とりあえず、説明の為に小さめのものを展開する。

「これが僕の新しい魔法…水晶結界だよ」

「…？防御結界と一緒にじゃない？」

「いや、色が少し違うな」

防御結界は青緑色の結界で、水晶結界は水色の結界。そもそも結界自体は半透明なので、この二つは色の判別が難しいかもしれない。

「この結界は攻撃用で作ったんだけどね」

「攻撃用？」

「うん。普通に飛ばしたりとかね。他にも使い方は色々あるんだけど、リリーが言ったのは外装のことだね」

「アームド？」

「簡単に言うると鎧かな。外装中は身体能力が上昇するし、単純に鎧としても使えるんだ」

自分が近接戦闘出来るように考えた結界なんだけど、一次試験で他の人にも使えることが分かった。サイズとか考えないと駄目だけど。エルザさんとの戦闘でウエンデイが使った天竜の碎牙は、ウエンデイの手足にこれを纏い身体能力と切れ味が増したことで編み出された、疑似・天竜の碎牙だ。

「なるほど、その鎧であの攻撃を防いだのか」

「でも、その結界は攻撃用なのよね？なんであの攻撃を防げたの？」

「ああ、それはもう一つの——」

その時、ものすごい爆音が聞こえた。これは…近い。地響きもしている。これは、先程のアズマ以上…あの人は相当な実力者だ。煉獄の

七眷属でも、強者の部類に入るはず。それを超える存在…？

「…どうする？」

「…一旦引くべきだろう。俺たちだけでは戦力不足だ」

「でも、誰か戦ってるんだよね…？」

そう、あれは戦闘音だ。つまり、あれだけの魔力の持ち主とギルドの仲間の誰かが戦っている。

「…正直、行ったところで返り討ちにされるかもしれないけど」

「そう、かもしれないけど…でも！」

「はあ…ゴーシュ」

「うん、分かっている…行こう。ただし、無理だと思ったらベースキャン普を目指そう。援軍を呼ぶしかない」

「ありがとう、ゴーシュ！」

「全く、あんな目にあつたばかりだというのに…」

「本当だわ…ほら、行くなら急ぎましょ」

メストさんはいない。森の中を進んでいる途中でいなくなっているのに気がついた。だから、今は僕たち四人だけしかない。明らかに戦力不足だ。決定打が足りていない。格上の相手だったら尚更だ。それでも、仲間を、家族を見捨てるような行動を出来るわけがない。僕らは出来るだけ静かに、けれど迅速に動いた。緊張感が高まっているからか、誰も何かを話すこと無く。

そして進み始めて数分…開けた場所で、誰かが倒れているのを見つけた。辺りには…誰もいない。

「マ、マスター!?!」

「そんな…マスターがここまでひどい怪我を負うなんて…」

たった数分しか経っていないから、もしかするとまだマスターと戦っていた敵がいるんじゃないかと思っていたけど…それに、せいってんだいまどう聖十大魔道（大陸で最も魔力が高い者に与えられる称号）であるマスターを…敵のマスター、なのか？そんな化け物相手に、僕たちは勝てるのか……？

「気をつけろ、まだ周囲に敵がいるかもしれん」

「う、うん…。ウエンディは…」

「もう治療始めてるわ」

「…そっか。あ、皆まだ譲渡結界ランブル沢山あるから食べとこう」

気休めにしかならないかもしれないけど…ないよりはマシだ。そう思い、僕は皆に譲渡結界ランブルを配った。皆が口に含んだのを見て僕も食べるけど、全然回復しているように感じられなかった。どうやら、相当混乱しているみたいだ…

「防御結界・円蓋ディフェンド ドーム」

「ゴーシユ…？」

「ウエンデイ、見える範囲でだけどちよつと周りを見てくるよ」

「…うん、分かった。気をつけてね」

「うん」

ウエンデイとマスターを三重の結界で囲んで守りを固める。一旦、気持ちを整理するべきだ。少し歩くだけでも切り替えることは出来るはず。

今まで、確かに強大な敵というのはいた。でも、ここまで明確に力の差を見せつけられると…これまで戦ってきた敵の中に、マスターを倒すことが出来るほどの相手はいなかったと思う。それに、僕が対峙してきたのは六魔のエンジェルと魔戦部隊のヒューズとシユガーボーイ、科学者のバイロくらい。ゲーム風に言うなら、中ボス扱いのような人たち（失礼だけど）しか出会っていない。もしかすると、今回の一次試験でのエルザさんとの戦闘が、一番苦戦したかもしれない…。

「ゴーシユ。お前が考えていることは、恐らく俺と同じだろう…強大な敵を相手に、俺たちは勝てるのか、だろうか？」

「リリー…うん」

後ろに近づいてきたリリーが、そう尋ねてきた。

「そういうことを考えると、本来の力は出せなくなるもんだ。お前の場合は…そうだな、お前の守りたいものを考えろ」

「僕が、守りたいもの…？？」

「そうだ。お前は強者だと俺は思っている。強さがある奴には、そいつだけの覚悟というものがあるはずだからな」

覚悟…か。…僕は、ギルドの皆を、家族を…大好きな人を、守りたい。守るためにこの結界魔法バリアーという魔法を覚えた。

そして今回の一次試験で、心を護るということがどれだけ大切なのかというのを感じる事が出来た。

だから、僕は…

「僕は…僕が守れるものを、全部守りたい…っっていうのは、答えになってる?」

「…ふっ、お前は大人らしいと思っていたが、案外そうでもないようだな」

「…馬鹿にしてる?それ」

「いや。年相応で何よりだと思っただけだ」

つまり、返答があまりにも子供っぽくて笑った、と。でも…うん、さつきみたいなモヤモヤはなくなった。今更だけど、リリーってエドラスだと隊長だったんだよな…今はこんな小さい姿でもすごく頼もしく感じる。今度から、たまに相談相手になってもらおうかな?」

「…ありがとう、リリー」

「気にするな」

最後にそれだけ言って、リリーは周囲の探索を本格的に始める。僕も索敵結界サーチャを発動させながらウエンデイたちを目視できるように辺りを探索することにした。

☆

見える範囲で探索したけど、やっぱり誰もいない、という結論に至った。

「ウエンデイ、マスターの具合は…」

「…駄目、怪我がひどすぎて応急処置くらいしか…」

数分あれば、大概はウエンデイなら治せる…マスターほどの大怪我だと、治せても時間がかかる上に、多分ウエンデイの魔力が先に尽きてしまう。

「……………うう……………」

「マスター!」

「……ウエンデイ、と……ゴーシユ……か……?」

「動かないで……!傷口が開いちやいます……!」

「マスター……誰に、やられたんですか」

「……よく、聞け……二人とも……この、戦い……儂らに、勝ち目は……ない」

マスターが弱々しく、そう呟く……さつきまでの不安が、また押し寄せてくる。

「そんな……!」

「……そんなこと、言わないで下さい……」

「時には、引かねばならぬ時も……ある。皆を、連れて……逃げるんじゃない……」

……ここまで弱っているマスターを見るのは初めてだ。肉体的にだけじゃなく、精神的にも。マスターにここまで言わせるなんて……相手の底が見えない。

「……ゴーシユ、上だ!」

リリーの声に反応して、咄嗟にディフェンドドーム防御結界・円蓋を展開する。そして僕の真上に降ってきたそれは、結界に直撃した。

「ぐぎゃっ……!」

「……ナ、ナツ、さん……?」

ナツさんが大の字で結界に張り付いていたのを視認し、すぐに結界を解除する。なんでナツさんが……?

「ナツさん、大丈夫ですか……?」

「痛っ……ゴーシユ、無事だったんだな!」

「なんとか……それより、その怪我は?」

「……?っていうかあんた、ハッピーはどうしたのよ?」

落ちてきたのはナツさんだけ。パートナーと一緒に行動しているはずのハッピーの姿はなかった。

「そうだ、ハッピー見てねえか!」

「い、いや、見てませんけど……」

「ナ……ナツ……」

「……!?じ、じっちゃん!」

「ここで倒れてたんです。今ウエンデイが応急処置してくれています」
「信じられねえ……誰にやられたんだよ!？」

「ナツ……皆を、連れて、逃げるんじゃない!？」

「何言ってるんだよ、じっちゃん……!じっちゃんはマスターだろ!そんなこと言うなよ……!」

「……!ナツさん、あれ!」

黒い塊が上空から飛んできた。数m離れた場所へと着地し、中から金髪の、明らかに目がイカれてしまっているような印象を受ける男が現れた。

「へっへっへっへ……マスター・ハデスにやられたんだろ?そうだよなあ、マカロフ?」

「マスター・ハデス……?」

「貴様、何者だ!」

「俺たちは煉獄の七眷属が一人、滅神魔導士のザンクロウ」

「滅神魔導士……?」

「よせ、ナツ……!敵う相手じゃない……!」

「敵わなくなつて……!」

ナツさんが、震えてる……?あのナツさんが、恐怖している……?

「どうした滅神魔導士?全身から脂汗が出てるってよ!」

「これが……恐怖……?」

「フハハハ!!そうだ、それが恐怖だ!絶対なるものを前にした時、人は恐れおののくことしか出来ねえ!!」

「……ナツさん」

もしナツさんが戦うことが出来ないのなら、僕とリリーで……いや、ウエンデイとシャルルにも協力してもらわないと勝てない。あのアズマと同じ幹部クラス、上手く立ち回らなければ……やられる。

そう考え、一歩前に出ようとしたその時、ナツさんが右手で制止する。そして、ナツさんの全身から炎が燃え上がった。

「……大丈夫だ、ゴーシュ。これは確かに恐怖だけど、ギルダーツが言っていた恐怖とは別の恐怖だ」

「はあ?」

「この震えは…じつちゃんをこんな目に遭わせた敵を、俺以外の誰かに始末されちまうことへの恐怖！マスター・ハデスは、必ず俺の手で倒す!!俺はお前たちを、絶対に許さねえ…!!」

ナツさんの怒りの炎が、どんどんと燃え上がっていく。その剣幕に当てられそうになるけど、すぐにリリーを連れてウエンデイたちの所まで後退する。ナツさんなら…今のナツさんなら、きっと勝てる。だったら僕は、少しでもサポートに徹しよう。

「ディフェンド・ウォール」

「防御結界・壁!」

「マスター・ハデスを倒す?…そんなこと、冗談でも言えねえようにしてやるってよ!!」

「何あれ…黒い炎?」

「奴も炎の魔法を使うのか」

ザンクロウも全身から黒い炎を燃え上がらせ、ナツさんのすぐ目の前まで接近する。ナツさんは両手に炎を集中させ、ザンクロウを殴りつける。

「そんな炎、痛くねえってよ!」

威力を殺し後退するザンクロウを、足に炎を集中させたナツさんが接近し蹴りを食らわせる。ザンクロウはそれに反応し両手に黒炎を纏って防御した。

「竜の炎と神の炎じゃ、格が違うってよ!!」

「ぐっ…!」

吹っ飛ばされたのはナツさんの方。そしてザンクロウは両手に炎を集め、黒炎を鎌のような形状へと変化させた。

「神の炎は燃やすんじゃない…全てを破壊する、焰の薙刀だつてえ!!!」
「なっ…!!?」

次の一撃が強力だろうことは予想できていた。だからナツさんを守る為に、二人の間にディフェンド・ウォール壁を割り込ませた。けど、ザンクロウが放った一撃で、結界は元々何もなかったかのように切り裂かれ、周囲の木々も真つ二つにされていく。

ナツさんはちゃんとそれを躲し、斬られた巨木をザンクロウへと叩きつける。が、それも黒炎を纏ったザンクロウが粉碎し、ナツさんは

腹部に一撃をもらってしまった。そしてザンクロウはいち早く着地し、さつき以上の黒炎を両手に纏う。その炎は、まるで野獣のような牙が生えているように見えた。

「神の炎は魔導士を食うのが、好きだつてえ!!炎神の、晩餐!!」

「ぐおおああああああああああつ!!」

「この炎に包まれたが最後、灰になるまで出ることは出来ねえ!」

「ナツ……………!」

「ナツさん!!」

「こんなもん、逆に食ってやる…!」

「無駄だよ!竜の力じゃ神の炎は食えねえつてよ!」

ナツさんが黒炎に飲み込まれる。食べようとするけれど、逆にナツさんが苦しみ始める。

…さつきから、結界を割り込ませることは出来ているのに、それは無意味だと言わんばかりに破壊されてしまう。いや、焼かれてしまうと言った方が正しいか。僕が作り出せる結界では一番の堅さを持っているはずの防御結界が、全く通用しない…でも。

「…リリー!!」

「ああ!!」

仲間を見殺しになんて、出来ない。

「水晶結界・外装!!」

「うおおおつ!!」

「うるせえつてよ!!」

「ぐああつ!!」

「ううつ……………!!」

鎧を纏った僕とリリーの攻撃を、ザンクロウは全く動かずに、黒炎のみで防ぐ。噴火のように噴き出した黒炎により、僕たちはウエンデイ達の傍まで弾き飛ばされた。

「ゴッシュューリリー!」

水晶結界も通じない…これは結界が脆いとかそういうことじゃない。確かに強力だけど、これくらいなら防御結界でも防げるはず。あの炎に触れてしまうと燃やされてしまうんだ。こうなったら…!

「ぐっ……!?」ジャイアント「巨人…!?!」

「マスター…!?!」

「じ、じっちゃん…!?!」

「これ以上…これ以上親の目の前でガキ共を傷つけてみる!! 貴様を跡形もなく、握りつぶしてやる!!」

マスターが僕の結界を破り、ザンクロウを巨大化させた右手で握りしめる。駄目だ、そんなことしたら…!

「そんな力残ってんのかよ! ほれ、早く手を離さないと跡形も無くなるのはあんたの手の方だつてよ!」

「ぐっ………!?!」

「ぐあつ…!?! な、何だど? 逆に、力を入れやがった…?」

マスターは黒炎に右手を焼かれながら、さらに力を強める。このままじゃ、火傷どころじゃない…最悪、右手を失ってしまうかもしれない。

「止める、離してくれじっちゃん!!」

「家族の、力…なめんじゃねえぞ…!?!?!?!」

「…!! ぐううう…うおおおつ!!!」

「竜狩りか、マカロフか、俺っちか! 先にくたばるのは誰だろうなあ!!」

ナツさんも炎を滾らせ、黒炎を破ろうとしている。僕たちだって、このままじゃ終わらせない…!

「ホーリー聖結界!!…ウエンディ!!」

「う、うん!!」

「何を…!?!」

マスターの右手、つまりザンクロウの黒炎に包まれている部分へとウエンディと治癒魔法をかける。推測でしかないけれど、多分あの黒炎の破壊の力は状態異常の一種だ。じゃないと防御用の結界が破壊される理由が他にない。つまり、こうして状態異常を治す治癒の魔法と、同様の効果を持つ結界を展開していれば、マスターへのダメージも軽減されるはず!

「お、お前たち…!?!」

「小賢しい真似しやがって…！」

「…！あれを見ろ！」

リリーが指さす先、ナツさんの方を見ると…赤い炎がどんどん小さくなっていくのが見え、やがて…ナツさんの炎が消えた。それは、つまり。

「ナツの魔力が…！」

「消えた…！」

「ナツさん…そんな…！」

「ハツハツハ!! 竜狩りがまず墜ちたぜえ!!」

「…いや、違う！」

「っ!!？」

ナツさんの赤い炎が消えた直後、ナツさんを包んでいた黒炎が徐々に小さくなっていく。それは黒炎が解除されたからではなく、ナツさんの口へと吸い込まれているのが見えた。

「なぜ神の炎を食っている…!？」

「なるほど…食うのにコツがいる炎つてのもあるのか…！」

ナツさんは、わざと魔力を空にした。そうすることで、食べる事が出来なかった神の炎を取り込むことに成功したんだ…でも、それって下手したら死ぬんじゃない？

「…馬鹿たれが!!死ぬ気かぁー…っ!!」

マスターがザンクロウをぶん投げた。いや、やっぱり自殺行為なんだな、うん。そりゃあ敵の攻撃の中で魔力を空にするなんて、戦車に生身で戦いを挑むくらいの行動だと思う。

「死ぬ気はねえし、誰も死なせねえ」

ナツさんは右手に赤いいつもの炎、左手にザンクロウが使っていた神の黒炎を纏う。そして落下中のザンクロウを捉える。

「皆で帰るんだよ、妖精の尻尾に…フェアリーテイル…うおおおおおっ!!合わされ、竜と神の炎!!竜神の、煌炎!!」

ザンクロウは二つの炎に身を焼かれ…そのまま倒れ伏した。

「じっちゃん…戦おう」

「…！」

「引かなきゃならねえ時があるつても分かるよ…ギルダーツが教えてくれたんだ。でも、今はその時じゃねえ。妖精の尻尾を敵にした奴らに、思い知らせてやるんだ！全身全霊をかけた、ギルドの力を…！戦おう…じつ……ちゃん……」

「ナツ……」

ナツさんは右手を掲げた状態のまま、倒れた。ウエンデイがナツさんの元へと向かう。ふと、ザンクロウの方を見る。

「ありえねえ…俺つちが、竜狩り如きに…」

「…まだ気を失ってなかったんですね」

ザンクロウが動くこうとしているがダメージが大きすぎるようだ…気絶していてもおかしくないと思ったんだけど。でも、だったら少しでも情報を聞き出せば…

「…あなたたちの目的は、なんですか」

「…それを聞いたところで、何も出来やしねえ。お前らはもう、終わりだつてよ…」

「僕たちは…終わらない。相手が格上だとしても、絶対に妖精の尻尾は負けません！」

「…格上、ねえ……皮肉、だな…」

「え？」

その言葉を最後に、ザンクロウは気絶してしまったようだ。皮肉つて、どういうことだ？

「ゴーシユ！手伝って！」

「え…あ、うん！」

まあ、しばらくは目覚めることはないはずだ。今は、ナツさんとマスターを守らないと！

第38話 守る意思

ナツさんとザンクロウの戦闘後、僕はザンクロウを浮遊結界に乗せて浮上させ、水晶結界をいくつか浮遊結界に突き刺す。水晶結界の優秀だ思うところは操作性だ。例えばただ飛ばして攻撃する際、軌道を途中で変えることが出来る。その特徴を利用すれば、浮遊結界と併用して好きな方向に運ぶことも可能だ。

それを利用して、ザンクロウを海へ捨てることにした。目を覚ましたらまた襲ってくるかもしれないから。防御結界以外はあまり離れすぎると強制的に解除されてしまうので（と言っても天狼島の中なら大丈夫だと思うけど）、それまでに目覚めなければ溺死するかもしれない…という話をウエンディにしたら。

「敵だから、しようがないんだよね……」

と、落ち込んでしまった。甘いと言われるかもしれないけれど…正直僕もそれはさすがにやり過ぎかなと思ったので、ザンクロウを包み込むように防御結界を展開させておく。これなら目を覚ますまでは大丈夫だろうし、もし海底で目を覚ますことになってもこの人の魔力なら炎を噴射させて海上まで行けるだろう。水圧とか諸々他に問題があるかもしれないけど、そう思うことにした。ウエンディは気づいてないみたいだし。

で、ザンクロウを海の方へと輸送した後、ウエンディがナツさんとマスターの治療を再開したのだが、なぜかナツさんに治療魔法をかけても効果が見られない。僕も聖結界を使ってみたけど同じく効果なし。その様子を見たマスターが、ナツさんへの治療魔法を黒くなったマフラーが阻害している、と言っていた。それで、試しにマフラーに魔法を使ったら少しずつだけ黒から灰色に近づいた。

「そもそも、ナツのマフラーはなんで黒くなったのかしら」

「さあ…ハッピーがいたら分かったかもしれないけど」

本当に、ハッピーはどこに行ってしまったのだろうか？ 今回の試験でパートナーだったんだから、ずっと一緒にいるものかと思っていたけど…もしかして、崖の上でザンクロウと戦闘になってはぐれた？

「探した方がいいかもね」

「だったら一度、ベースキャンプへ向かった方がいいのではないかな？
ハッピーももしかしたら戻っているかもしれない」

「そうね…どこかで二人を休ませた方がいいわ。特にマスターはね」

「じゃあ、二人を浮遊結界に乗せよう。ウエンディも乗って治療を続けてて。あ、譲渡結界もちやんと食べながら、無理しないように」

「うん、分かっている」

「本当に、無茶しちや駄目よ」

「大丈夫だよ、シャルル」

というわけで、ウエンディとナツさんとマスターを浮遊結界に乗せて森の中を進んでいく。上空を飛んだ方が敵に見つかることもないかとも思ったけど、今の天気は快晴に近い。さすがにそんな中を黄色い結界が飛んでいたらバレるんじゃないかということでも却下した。マスターもさつき気を失ってしまったようだし、安静第一だ。

ベースキャンプは、さつき僕たちがアズマに奇襲を受けた崖の近くの森の中にある。今、ベースキャンプには…ミラさんとリサーナさんがいたはず。僕たちがザンクロウと戦闘している間に向こうでも遭遇してしまっているかも…急がなければ。最悪の場合、ベースキャンプ以外に休める場所を探しておいた方がいいか。

「ゴーシュ、ベースキャンプはこっちでいいの？」

「うん。この上にあるはずなんだけど…」

やっぱり岩壁がある。方角的には合っているはずだから、これを登らないといけないんだけど…

「このまま登るのは危険かもしれないわね。上に敵がいたら的にされるわ」

「だね…どうしようか」

相手が下つ端の軍勢だったら問題ないけど、もしまた煉獄の七眷属みたいな奴らがいたらと思うと、これ以上マスター達を危険な目に遭わせるわけにはいかない。

「俺が見てこよう」

「私も行くわ。ゴーシュは三人を守ってて」

「……分かった。二人とも、無茶はしないようにね」

「気をつけてね、シャルル、リリー！」

今はマスター達を早く安全な場所に運び、休ませることが最優先。サツと見た感じ、近くに登れそうな所もない。ここは、二人に頼むしかない。

「…ウエンディ、ナツさんの方は僕がやるよ」

「え？」

「ホーリィ聖結界でもマフラーは治せる。ウエンディはマスターの方を任せて良い？」

「…ありがと。じゃあ、お願いするね」

「了解」

これまでずっとウエンディは、マスターへの治療とナツさんのマフラーの修復を同時に行っていた。マスターの怪我は僕ではどうしようもないけれど、少しでもウエンディの負担を減らしてあげたい。ただでさえウエンディは無茶するし。

僕たちを包むようにデイフエンド防禦結界・ドーム円蓋を展開しておいて、僕もマフラーの修復へと取りかかる。二人が戻ってくる頃には終わるかな？

☆

数十分後、リリーとシャルルが戻ってきたので崖の上へと移動し、森の中へと進んでいく。ハッピーが崖下の木に引っかかっているのを二人が上空から戻ってきた時に発見した。気絶していたようだけど、特に大きな怪我はなかった。ただ少し焦げたような火傷があったので、ザンクロウとの戦闘に巻き込まれたのは間違いないだろう。無事で良かった……勝手にどっか行っちゃったけど。

ナツさんが崖の上に登るって時に目を覚まして、なんかよく分からないけどガルナ島で会った敵？の匂いがしたとかでどこかに走って行っちゃって…ハッピーもすぐ目覚めたから、そっちは任せることにした。確かに気になるのかもしれないけれど、今じゃなくても…って言おうとしたらもう姿が見えなくなっていた。

とにかく、マスターを休めることを最優先として行動することにし

た。そして、ようやくベースキャンプに到着した僕たちが目にしたものは…爆撃によって出来た戦闘の跡だった。

「…ゴーシユ、これって」

「うん……あのアズマって奴の攻撃の跡だ」

植物が爆発したような痕跡もある。これだけの戦闘があつて、よくベースキャンプが無事だったと思う。

「ミラさんーリサーナさんー!」

「ミラさんまでやられるなんて……」

「ゴーシユ、ウエンデイ……!」

やっぱり、アズマは強すぎる…奴に対抗できるのは、エルザさんかギルダーツさんくらいでは…? いや、確かギルダーツさんは先に帰つたつて言っていたから、エルザさんだけか…?

「ひどい怪我…早く治療しないと!」

「待ってウエンデイ!一旦休まないと!」

「でも……!」

「疲弊し切っていたら、治療に時間がかかりすぎる。少し休憩してからでも、十分間に合うよ」

確かにマスターもミラさんも深手を負っているけれど…二人とも、今すぐどうこうつてなるわけじゃない。マスターだつてここまですつと治療してきたおかげで、大分容態も落ち着いたように見える。ミラさんはマスターほどではないし、このままじゃウエンデイが倒れてしまう。

「マスター……!?!」

「リサーナさんは、大丈夫ですか?」

「う、うん……私は、ミラ姉が守ってくれたから……」

リサーナさんも休まないとまずい…軽傷だけど、痛々しく思えるほどボロボロだ。もしも今、敵に襲われたら…

「ウエンデイもリサーナさんも、一度休んで下さい。僕がここを死守しますから」

「そんな、ゴーシユだつて疲れてるのに…」

「……私は大丈夫。ウエンデイは休んで」

「駄目です！軽傷とはいえ、一度休んでいて下さい。僕はまだそこま
で消耗してないから、二人は少しでも回復しておいて下さい…また、
敵が襲ってくるかもしれないので」

讓渡結界ラシブルを入れた袋を投げ渡し、術式を書く準備に入る。フリード
さんほど早くは書けないけれど、時間をかけてでもここを守る為の術
式を書いておけば少しは安心できる。二人もシャルルやリリーの説
得でようやく休んでくれる気になったようだ。

ここの守備がある程度終わったら…一度、他の皆を搜索した方がい
いかもされない。今回の敵はあまりにも強大だ。他にも負傷してる
仲間がいるかも…探索でシャルルやリリーはずっと飛びっぱなしだ
から、あの二人も魔力を消耗しているだろう…だったら。

もうこれ以上、ギルドの皆を傷つけさせない。僕が全部、守ってみ
せる…！

第39話　　ゴーシユ V S. ラステイローズ

「よし、こんなもんかな」

術式もかなりの数を設置したし、ベースキャンプも結界で五重に覆った。さらに術式と併用して、この術式の中だけ「妖精の尻尾のギルドマークを持つ者は結界を通過できる」ようにした。これで万が一敵が襲ってきたとしてもかなり戦いやすくなるだろう。三十個近くあった譲渡結界のうち二十個は渡しておいたし…多分、今できることは全てやった。

「それじゃ皆、後は任せます」

「本当に行くの、ゴーシユ?」

「ええ。他の皆が心配ですし」

時間をかけてしまったので、もう日が沈み始めている。少なくとも近くでは大きな音はしなかったが、この天狼島はかなりの広さだ。あちこちで戦闘が行われているに違いない。

「レビイさん、後で術式の修正お願いしますね」

「ええ、任せておいて!」

あれからレビイさんとガジルさんも合流した。どうやら一番最初に敵と接触したらしく、あの信号弾は二人を見つけたエルザさんとジユビアさんが放ったものらしい。敵は煉獄の七眷属ではなかったものの息の合った連携で二人を追い詰め、ガジルさんがギリギリで勝利したようだ。レビイさんもかなり負傷しているので今は休んでもらっている。

「あ、それとシャルル…」

「分かってるわ。あの子が無理しないようちゃんと見てるから、あんたは自分の心配してなさい」

「うん。行つてきます」

残る気がかりもこれで大丈夫。ウエンディにはさつきちゃんと話したから問題ない。少し心配そうな顔をしていたけど、ちゃんと分かってくれたし…皆と無事に帰ってくるって、約束したから大丈夫。

とりあえず、浮遊結界と水晶結界を併用して空から探すでしょう。

森が多いから敵にも見つかりにくいし、そもそも普通は空を警戒すること自体少ないはずだ。

「……」

浮遊結界バルーンに乗り浮かび上がっている途中で、ふとウエンデイの方を見る。治療中だったウエンデイもこちらに目を向け頷いたのを見て、僕も頷いて返す。約束を必ず守るという意思を込めて。

☆

空を飛び始めて三十分くらいか。さつきマスターが倒れていた森から崖を登った付近、天狼島の中心の巨木（天狼樹というらしい）の根の一部が見える所から爆発が見えた。急いで方向転換し向かう。

目を凝らしてよく見ると…エルフマンさんとエバグリーンさんが倒れていた。他にもう一人…青いコートを着た眼鏡の男もいる。何か喋っているみたいだけど…

「あいつは…!?!」

その男はエルフマンさんたちの方へ歩きながら、左手で宙に円を描くように動かす。そしてその左手が通った後に、男にかけていた眼鏡がいくつも出現した。あの男を見た時に既視感があったからそうかとも思ったけど、間違いはない。煉獄の七眷属だ。あの魔法は確か…想像したものを具現化するとかそんなふざけた魔法だったはず。

男がエルフマンさんたちの間を通り過ぎ、ある程度距離をとる。そして男が振り返って何かを叫んだ次の瞬間、巨大な塔がエルフマンさんたちを飲み込んだ。

「間に合え…!?!」

塔はどんどん高く、感じる魔力も大きくなっていく。加速し塔へと接近するけど…多分、このままじゃ二人を助けることは出来ない。これほどの技、きつと本体を攻撃すれば…!

「防御結界・柱!!」
ディフェンド
システム

「何っ…!?!」

一か八かで男を攻撃してみたけど、やっぱり予想通りだ。攻撃は躲されたけど、塔は消え二人は解放された。すかさず弾性結界バウンドをクッション代わりに展開する。

「ゴーシュ!?!」

「二人とも、大丈夫ですか!?!」

「あ、ああ…すまねえ、助かったぜ」

二人はゆっくり立ち上がりうとしていているけど、まだ動けそうにない…ここは、時間を稼いでも二人を逃がすか休ませるかしないと。

「お前は…!?!」

「…?」

「待てよ…そうか、そうか…!!まさか妖精の尻尾フェアリーテイルにいたとはな!!」

「こいつ…いきなりなんなの?」

エバーグリーンさんが僕らの考えを代弁するように呟く。急に笑い出したら、確かにそういう反応になるだろう。

「ああ、すまないな。嬉しくなっついな」

「…変人に興味ないです」

「誰が変人だ!」

僕の発言にきつと後ろの二人も頷いていると思う。

「…まあいい。それより、貴様だ!」

「僕ですか…?…やっぱり」

僕が来た途端にこんな反応し始めたんだから分かってたよ、うん。

「それで、なんですか」

「あの研究者が評議員に捕らえられたという話を聞いて、一緒に捕まってしまったものだと思っていたが…こんな所で会えるとはな」

…この人、まさか…僕の知り合い?あの研究者って…思い当たる人物は、僕の中では一人しかいなかった。

「ちよつと、何の話をしてるのよ!」

「…あの研究者って、ダフネのことですか?」

「なるほど。どうやら記憶が混乱しているようだな?」

二人の方へと手を向ける。そして相手の問いに頷く。この人は、僕の過去を知っている。ダフネと悪魔グリモアハートの心臓に繋がりがあったことにも驚きだけ…僕のルーツを、知ることが出来るかもしれない。

以前ダフネが捕まった時は、皆がいたから聞けなかった。気にしないようにしようとしたけど、やっぱり気になるものは気になってしま

う。

「それにしても、随分とお喋りになったじゃないか？人形のようなだつたあの頃とは大違いだ」

「……僕は、ゴーシユルガードナー。妖精の尻尾の魔導士です。人形じゃない」

「…ふむ。名乗られたら名乗り返すのが礼儀か。俺は煉獄の七眷属が一人、ラスティローズだ」

「貴方を倒して…さっきのこと、詳しく教えてもらいますよ」

「ほう？この俺を倒せると？」

「変態には負けません」

アズマと対峙した時はもう駄目だと思った。正直に言うと、この人には勝てないんじゃないかと思つた。逃げに徹したのはその考えが大きかつたからだ。同じ煉獄の七眷属だとしても、この人にはなぜかそこまでの畏怖は感じない。確かに強い魔力は感じているけれど、アズマには劣っている。

それに、後ろの二人を守る為にはこうするのが最善だと思う。僕の昔話を聞けば答えてくれるかとも思つたけれど…敵同士だし、話している間に二人に危害を加えてくる可能性もある。だったら、先に倒す！

「防御結界・円蓋…二人は少し休んでいて下さい」

「だがゴーシユ、お前一人じゃ…」

「そうよ！三人がかりで戦うべきだわ！」

「大丈夫ですよ。そう簡単にはやられません」

「でも…！危ない!!」

「我が右腕に宿りしは、漆黒の剣！」

二人に防護壁を張り、会話の途中で鋭い爪をもった黒い魔物のような腕が僕に迫る。けど、その程度なら問題ない。

「防御結界・壁」

「俺の漆黒の剣が防がれるだと…!？」

「水晶結界・矢！」

「ちっ…我が左腕に宿りしは、黄金の盾!!」

いくつもの水晶の矢がラストイローズに迫り、それに反応して左腕から金色の盾のようなものを具現化させた。

「…やっぱり」

「どうだ、分かったか！お前の力では俺に勝つことなど不可能だ！」

「いえ…そんなことないですよ。多分貴方は、煉獄の七眷属でも弱い方じゃないですか？」

「なんだと!!人を馬鹿にするのも大概にしろ!!疾風の…ぐあつ!!」

ラストイローズが何かを具現化させようとしたその時、上から水晶の矢が降り注ぐ。ラストイローズは反応できず、体のあちこちを切り裂かれる。突然の痛みには耐えきれず、膝をついた。

最初から思っていたけれど、恐らく具現のアークの発動条件の一つが名称を唱えること、なんだと思う。もしくは名称を唱えることでイメージを固める為か…でなければわざわざ能力を発動しますよと言っているようなものだ。だから、さつき放った水晶結界クリスタルの一部の軌道を変え、上から落とした。意識の外からの攻撃であれば、さつきの金色の盾を具現化が間に合わない。

「いいんですか？まだ終わってませんよ」

「な、何を…がはっ!？」

膝をついた瞬間に作った掌サイズの防御結界ディフェンド・立方体スクエアで、ラストイローズを背後から攻撃する。そのまま、僕の方へと吹っ飛んできたので…

「はあっ!!」

鳩尾を狙って、思いつき殴った。

「あ、ああ…!!」

急所にヒットしたことで、ラストイローズは蹲ってしまった。

「す、すげえ…」

「ゴーシュがこんなに強かったなんて…」

「いえ。二人が戦ってるのが途中から見えていたからですよ」

情報が先に手に入っているというだけで、大きなアドバンテージになる。それに対してラストイローズからすれば僕の魔法は推測しにくかっただろう。結界魔法バリアは造形魔法アレイにも負けにくい自由な魔

法だと思う。

「お、おのれ……！おのれ、おのれ!!」

「……!」

「俺は、煉獄の七眷属!!妖精の雑魚などに負けるわけがない!!」

「あいつまだ……!」

「……!!ゴーシュ、上だ!!」

エルフマンさんの声で上を確認すると、数mはある巨大な魔物がこちらに拳を振りかぶりながら降ってきていた。防御結界・円蓋ドームを展開して身を守る。

「……くっ!」

が、魔物の拳が結界に罅を入れる。これは、まずい……!

「我が右腕に宿りしは、漆黒の剣!!」

「ぐうっ!!」

そこにラストイローズが攻撃を加えて結界を破壊し、その瞬間に魔物に押しつぶされてしまった。こ、こいつ……!見た目通り相当な重量……それに力が加わったことで通常であれば防げただろう一撃の威力が強くなったのか……!

「形勢逆転、だな?」

「いっ……!」

こちらに歩いてきたラストイローズが、僕の頭を踏みつける。

「どうだ、自分が痛めつけられる気分は?……ベルクークサス、やれ」

魔物ーベルクークサスは右腕を大きく振りかぶり……僕に向かって、振り下ろした。

「かはっ…………!」

「お前ごときが俺に勝つなど、不可能だったんだよ!!ハッハッハッハッハア!!」

ベルクークサスがそのまま、連続で僕を殴り続ける。攻撃の度に、体の中の空気が吐き出され呼吸を整えることも出来ない……!

「あ、あいつら……!!」

「子供相手にあそこまで痛めつけるなんて……!!」

「何とでも言え。戦争に大人も子供も関係ない……よし、ベルクークサス」

ラストイローズのかけ声でベルクークサスの動きが止まる。そしてラストイローズがしゃがみ、僕の髪を掴んで引っ張り上げる。

「ハア……ハア……!!」

「……さすがだな。ここまでベルクークサスの攻撃を食らって生きているとは。さすがはマスター・ハデス」

ラストイローズが僕だけに聞こえる声で、嘲笑うかのように囁いてきた。それに対して、僕は屈辱とかよりも疑問が真っ先に浮かんだ。

なぜ、そこでマスター・ハデスが出てくる……？

「どう、いう……こと」

「ああ、お前が俺を倒して聞き出すとか言っていたな……別に、教えてやってもいいんだぜ？」

「……………」

そのまま、ラストイローズは語り出す。

僕の……記憶がない5年について。

僕もそれを、ただ黙って聞いていた。

聞く人が………いないことを確認し。

口角が上がらないように気をつけ、ただラストイローズを睨めつけた。

第40話 ゴーシユの過去①

X772年。今から12年前。

闇ギルド三大勢力の一つ、悪魔グリモアハートの心臓にはいくつも拠点がある。本隊はマスター・ハデスがいる戦艦。他の拠点は戦闘訓練、魔導書の保管、傘下ギルドの拠点…様々な用途で用いられている。

ここは、その中の一つ。主に、失われた魔法ロストマジックについての魔導書が保管されている場所。そこに、老人と青年がいた。

「マスター・ハデス、ここは…」

一人は後の煉獄の七眷属となる男、ラステイローズ。この頃の彼は幹部クラスとまではいかないものの、エリートと呼ばれるだけの存在だった。

「主に授ける魔道書がこの中にあるのだ…」

そしてこの老人は、悪魔グリモアハートの心臓のマスター・ハデス。ハデスはこの日、ラステイローズを呼び出しこの拠点へとやって来ていた。二人は長い螺旋階段を降り続けている。

そして途中で、マスター・ハデスは立ち止まった。ラステイローズもすぐに立ち止まり、どうしたのかと窺い始める。

「これだ」

ハデスが持っていた杖をある方向へと向ける。するとビツシリと本棚を埋め尽くしていた魔道書の中から一冊が飛び出してきた。それがラステイローズの目の前で止まる。

「これが…」

「具現のアーク…主には、この魔法を授ける。今から、その魔法の会得に精進せよ」

「はっ…この魔法で、マスター・ハデスの手足として役立って見せませう。…しかし、これはどういった魔法なのですか？」

「この魔法は、己が思い描いたものを具現化させるといふものだ…私もこの魔法を会得している」

「マスター・ハデスが!!?」

ラステイローズは衝撃を覚えた。自分にとってはマスター・ハデス

は神に近い存在。そんな人物と同じ魔法を身につけられるとは、思ってもみなかったのだ。

「だが、複数の魔法を会得することは、それだけ熟練しにくくなるということ。並ならぬ時間がなければ不可能というもの」

「な、なるほど……ですが、俺に身につけることが出来るのでしょうか？」

ラストイローズはこれまで、所有系ホルダーの魔法しか使ったことがない。どんな魔導具でも、あっさり扱うことが出来た。だからこそ、エリートと呼ばれるまで成り上がることが出来たと思っっている。

しかしこの具現のアークという魔法は、間違いなく能力系アビリティの魔法だ。少々不安に感じるのも当然だった。

「心配ない……主に合っていると思っただからこそこうして託したのだ……ふむ、そうだな。一つ、私もこの魔法で試したいことがあった。それを、今ここで見せよう」

「ありがとうございますー！」

すると、マスター・ハデスは魔力を高め始める。やがて、この場所自体が恐怖で揺れていると錯覚してしまうほどの揺れが始まった。

「な、なんと……！」

「出でよ……輪廻の門!!」

マスター・ハデスの目の前に、禍々しい物体が現れる。ラストイローズには、それは門でも何でもなく……ただ、恐ろしい何かとしか言えなかった。確かに門のような形をしているが、これが繋がっているのが何処かなど考えることも出来なかった。この門を潜ってしまったらどうなるのか……そんなこと気にする余裕もなかった。

「我が声に耳を傾けよ……この地へとその姿を現せ!!」

マスター・ハデスの声に反応し、門が魔力をさらに高め始める。やがて、それは光を放ち始める。明滅を繰り返し、光は徐々に強くなり、稲妻が走る。そしてそれが止まったと思っただ瞬間に、強烈な閃光が周囲を飲み込んだ。ラストイローズは思わず両腕を交差するようにして目を庇う。

「……………ふむ」

「……!!こ、これは!？」

マスター・ハデスが小さく声を発し、ラストイローズは両腕を退ける。そして見たものは……生気を感じることが出来ない目をした、紺色の髪紺色の髪の赤ん坊だった。

その様子を、小さな黒い魔物が観察していた。

☆

「それからマスター・ハデスは、その赤ん坊に魔法を与えようとしたが、それは失敗したらしい。三年間様子を見たが……身体能力は高いものの魔法を一切使うことの出来ない子供と認識された。それは、ウチのギルドの戦闘訓練の代わりになり、挙げ句の果てにはドラゴンの情報と引き換えにある研究者へと売られたのさ」

「………それが、が」

「そう、お前だよゴシユルガードナー!どうやって魔法を使えるようになったのかは知らんが、髪の色を見る限りあの女に改造でもされたんだらう?」

なるほど……これで納得がいった。ダフネが僕を知っていた理由も、ラストイローズがあんな反応を示した理由も。今考えると、ザンクロウも僕を知っていたんだと思う。皮肉がどうか言っていたし。

元々、僕が本当は存在しない人間だっことは分かっていた。ここが、僕が生きていた世界とは違うってことも分かっていた。だからこそ、自分がどうしてここに前世の記憶を持ったまま生まれたのが気になる。記憶を持っていないなら、百歩譲って納得出来る。でも、僕には前世の記憶がハッキリと残っていた……少なくとも最初に意識を取り戻した時は。今は、大分忘れてしまったけど。

記憶を持ったまま生を受けていた時点で、そして五歳以前の記憶がない時点でまともな人生ではないとは思っていた。だから……あまり、シヨックを受けたりはしていない。

問題は……他にある。

「…これで昔話は終わりだ。さて、そろそろ始末させてもらおうとしよう。また見る事が出来て楽しかったよ、実験台」

今は、この人を倒すことが先決だ。と、ラスティローズの今の台詞で僕はあることに気がついた。

「……………ふふ」

「……………何かおかしい？」

「実験台……………そう、いうこと、か…。貴方は、僕に……………負けたことがあるってことか…分かりやすい人、ですね…」

「っ…黙れ、このクソガキ!!」

「ぐあっ…」

戦闘訓練の相手…ということは、昔ザンクロウともラスティローズとも僕は一度戦っている。その頃はまだ自分の魔法を使いこなせなかつただろうから、身体能力が高いだけの僕にやられたってことだ…案の定この反応を見る限り正解みたいだ。

ラスティローズは怒り、ベルクークサスに押えられた状態の僕の頭を踏みつけた。

「…いいだろう。お前に、俺の最強の攻撃魔法を食らわせてやる!!」

それにしても、もう痛みを感じることも出来なくなってきた…さすがに攻撃を食らいすぎたか。でも、時間稼ぎをした甲斐はあつた。ラスティローズは僕から少し距離をとつた。僕を押えていたベルクークサスは、僕がもう抵抗する力もないと判断したのか、ラスティローズの方へと戻っていく…これなら、行ける!

「出でよ…デインギルの——」

「妖精機銃、レブラホーン!!」

「何だ?!」

上から魔力弾が無数に降ってくる。ラスティローズはそれによつて体勢を崩し、逃げ場を封じられた。そして奴が何か動きを起こそうとした瞬間、地面から獣の腕が現れた。

「漢おおおおおお——————!!!」

「ぐほあっ?!」

豪快な一撃がラスティローズの顎にヒット。そのまま後方へと

吹っ飛んでいった。

「マックス・トリーティスト
大黒柱拳……!!」

「ぐ……なっ!」

ラストイローズが起き上がる前に、今の僕が作ることが出来る最大の防御結界・柱デイフエント
トータルが僕の真上に出現する。サイズは…通常の数十倍。これだけのサイズがあれば、多分ギルドも半壊くらいには出来る。ラストイローズはそれを見て、驚愕の声を漏らした。

巨大な柱の矛先が、ラストイローズの方を向く。

「べ、ベルクーサス!! 奴を攻撃しろ…!!」

「そうはさせねえ!!! うおおおっ!!!」

ベルクーサスをエルフマンさんが押さえ付ける。ここが正念場だと、その背中が語っていた。

「死に損ない風情がっ…!!」

「覚悟は、いいですね?」

「くっ……!! わ、我が左腕に——」

「させるもんですか! 妖精爆弾グレムリン!!」

「ぐっ!」

エバーグリーンさんの鱗粉爆弾…火薬のような鱗粉を相手の周囲に撒き散らして爆発させる技だ。見覚えはあるものの、多分一緒に仕事に行つてなかったらこんな技があつたことも覚えていなかっただろう。

とにかく、この隙を逃すもんか!!

「これで………終わりです!! はあ————っ!!!」

ラストイローズへと、巨大な柱が突き立てられた。地面を抉り、結界がラストイローズごと大地を穿った。

☆

「ゴーシュ、無事!」

「だ、大丈夫………ですよ」

エバーグリーンさんが地面に倒れた僕へと駆け寄る。魔力の使いすぎと体へのダメージで…しばらく動けそうにない。

「つたく、無茶するぜ。俺たちがあの文字に気づかなかったらどうしてたんだ」

「いやあ…お二人なら、気づくと思っていたので…」

エルフマンさんの言う文字とは、二人を結界で囲んだ時に書いておいた術式用の文字のこと。今回は戦いながら術式を仕込むなんてこと出来なかったので、メッセージとして残した。エバグリーンさんが読めるの知っていたし、敵に気づかれたとしてもなんて書いてあるか読めないんじゃないかと思っただけだ…ラスティローズは僕を痛めつけるのに夢中だったみたいだし、その心配はいらなかった。

内容は、奇襲の作戦。エバグリーンさんに上から攻撃してもらい、相手が上に気をとられている間にエルフマンさんが地中から一撃を与える。僕も奴を一撃で倒せるだけの魔力を込める為、ベルクースの攻撃をわざと防がずに食らっていた。

「それにしても、内容が無茶苦茶よ！あいつがああ技を出さなかったらやられてたじゃない！」

「ははは…まあ、倒せたから結果オーライってことにして下さい…」

いや、攻撃が全部効かないことを見せてやれば必殺技使ってくるかなと思っただけだ…ベルクースの落下からの一撃で結界が粉碎されると思わなかった。でも、結構こっちの口車に乗ってくれたから何とかなった…よほど、昔の僕に痛い目を見せられたらしい。

「はあ…全く、ゴージュがここまで無茶するとは思わなかったわ」

「とりあえず、ベースキャンプに戻りませんか？あ、エルフマンさん、すみませんが…」

「ああ。運んでいつてやる」

「ありがとうございます」

「ところで…ベースキャンプには今誰がいるんだ？」

「えっと…ミラさんにリサーナさん、レヴィさんとガジルさん、そしてウエンデイに…マスターです」

「マスターもいるのなら安心ね」

「いえ…マスターにガジルさん、ミラさんは重傷です。特にマスターがひどい状態で」

「そんな……」

エバーグリーンさんは驚愕を隠せない様子だ。…当然か。僕だつてマスターがやられるなんて、マスターを倒すほどの敵がいるなんてあまり考えたくない。

「…姉ちゃん!!リサーナ!!」

「ちよ、まつ……」

とか考えていたら、いきなりエルフマンさんが倒れていた僕を担いで走り出してしまった…あ、やばい。これ、吐きそう……

「ちよつとエルフマン!!ゴージュは怪我人なんだから——」

「待ってる姉ちゃん!!リサーナああ……!!!」

「…駄目ね、これは」

喋ったら吐きそうだ…エバーグリーンさんも諦めてしまった。ベースキャンプまで持つかな…僕。

ってどうか……

ウエンデイに、どう話せば……?

第41話 さらなる波乱

「うおおおっ!!! 姉ちゃん、リサーナあー!!!」

「エ、エルフ兄ちゃん!」

「エバーグリーンも、無事だったのね!」

「当然よ。まあ、この子は無事とは言えないけどね…」

「うっぷ……………」

「ゴーシュがナツみたいになってる!」

「え!? ゴーシュが帰ってきたんですか?」

「早かったわね。ほら言ったじゃない、あいつなら大丈夫だって」

「いや…とても無事とは言えなさそうだぞ」

ベースキャンプに到着して早々、このカオスな感じ。とりあえず、エルフマンさん下ろして…は、吐きそう……………」

☆

…ひとまず離れた場所に行つてスッキリさせた後、僕はガジルさんやミラさんと同じように負傷者用の布団の上で横になった。エルフマンさんとエバーグリーンさんには一度休んでもらうことになり、今はリサーナさんとレヴィイさんが見回りをしている。

「全くもう……………これじゃ、無事とは言えないよ?」

「はは…面目ない」

「本当に思ってる? それ」

治療してもらっているのはありがたいんだけど…これ、精神的に追い詰められている気がする。主に小言的な意味で。

「それで…何があったの?」

「え? いや、さつきエルフマンさんたちが言つてた通りで…」

「煉獄の七眷属と戦つたのは聞いたけど…なんか、それだけじゃない気がしたの」

さて、どうしたものか。別にウエンデイに話しても問題はない…と思う。前世のことは余計なことだろうから、話すとしても全部終わってからだ。でも、今は戦争中のようなもの。もし今話して

動揺させてしまったら、それが何の引き金になってしまいか分からない。

「…何かあったんだね」

「うん…それも、この戦いが終わったら話すよ。多分、ビックリさせちゃうだろうし」

「それもって…あ!」

「え?」

「忘れてた…私に隠してることがいくつかあるんだっけ」

それも今は駄目だ。ウエンデイが動揺すること間違いない。今は負傷者が多いから、ウエンデイが混乱して気絶とかしたらまずい。

「…話すこと、三つに増えちゃったか」

「全部後回しなんて…そんなにどれも重たい話なの?」

「えつと…二つは、ウエンデイにとっては、かな」

「……??」

「今は気にしなくて良いって…ウエンデイ、僕はもう大丈夫だからあつちの二人を頼みたいんだけど」

「う、うん…ちゃんと、この戦いが終わったら話してよ!」

ウエンデイは喧嘩していたエルフマンさんたちの元へと小走りに向かっていった。ウエンデイのおかげで受けていたダメージはほとんど回復出来たし、魔力も譲渡結果ラシブで回復中だ。やっぱり、ウエンデイの治癒魔法はすごいな…僕の聖結界ホーリーでは何時間もかかっているだろう。

「おーい!」

「あれは…フリードさん、ビッグスローさん!」

森の中から声が聞こえ、起き上がり聞こえてきた声の方へと向かう。そこには、フリードさんとビッグスローさんがいた。良かった、この二人が無事で…これで、ベースキャンプの守りは心配いらなだろう。他の皆は…エルフマンさんとエバグリーンさんが喧嘩しているから、聞こえてないのか。

「ゴーシュ、やはりここにいたか。ここにある術式や結界はお前が?」

「はい…少しでも守れるようにと」

「…やや文字の抜けがあったが、上出来と言えるだろう」

「あ、ありがとうございます…!」

フリードさんが褒めてくれるなんて、あんまりない。少し、自信がつくな…でも、あれだけ時間をかけて文字の抜けがあったとは。せめて抜けがないようにするか、もっと早く書ければ良いんだけど。

「それにしても…ミラにガジル、マスターまでここまでやられているとはなあ…」

ビッグスローさんが負傷者ベッドに目を向けて、そう呟く。

「…今は負傷者だらけです。マスターもこんな状態で、皆不安だと思います」

「だろうな…よし、俺たちもここを守るぜ。な、フリード?」

「ああ。さらに術式も増やしておこう」

「あ!フリード、ビッグスロー!」

ここでようやく他の皆も二人に気がついた。やっぱり、雷神衆ほどの実力者が味方につくことほど頼もしいことはない。

あとここにいないのは…ナツさんたち最強チームのメンバーと、カナさんにジユビアさんか…皆無事だったら良いんだけど…

「ゴーシユ!」

「リリー、シャルル…どうかした?」

「魔力が回復したことだし、私たちで皆を探してこようと思うの」

「そっか…さすがに、僕は今すぐ動くのは無理かな。大人しく、フリードさんたちとここを守ってるよ」

「ああ。俺たちも出来るだけ早く戻ってくるようにしよう」

「気をつけてね」

そう言っつて、二人は飛んでいった。さて、僕も何か出来ることをしようかな。

☆

一方その頃。

「お前は評議員を止めてくれ」

ナツとルーシイ、ハッピーは煉獄の七眷属の一人である華院Ⅱヒカ

ルを倒し、一度敵の本拠地を探す為にシャルルとリリーを探していたのだが、見つけられず彷徨っていた。その時、S級魔導士昇格試験に参加していたメスト、またの名を評議院諜報部所属のドランバルトが、彼らの前に姿を現す。

彼は一度アズマによって破壊された評議院検東部隊の船へと瞬間移動し今回の件を本部へ報告しようとしていたが、以前ジェラルを捕らえた評議員の眼鏡の男性——ラハールにエーテリオン投下の可能性を示唆されたことで時間をくれと頼み、通信用魔水晶ラクリマを持って再度瞬間移動してナツ達と交渉していた。今すぐ天狼島を放棄し、自分の魔法を使ってギルドメンバー全員を連れて逃げる、と。

当然、ナツ達はそれに応じなかった。ナツは、ドランバルトに妖精の尻尾フェアリーテイルに手を出す相手への報復を宣言した。

「…出来るわけない」

「じゃ、時間稼ぎだけでいいや。頼むぞ」

「違う！そっちじゃない！相手はあの悪魔グリモアハートの心臓だぞ!?お前たちが、敵うわけがない!!今お前たちが置かれている状況を、どうやったら打破出来ると言うんだ!!」

「全力でやる…それだけだ!!」

ナツ達は雨の中を進む。ルーシイの提案で、一度ベースキャンプを目指すことにした。

☆

時間は少し遡り、夕暮れ。ゴーシユがエルフマンらと協力しラスティローズを撃破した直後。悪魔グリモアハートの心臓戦艦内部にて、一つの動きがあった。ザンクロウ、華院||ヒカル、ゾルディオ、そしてラスティローズ。これで煉獄の七眷属の半数が倒された。

「まさか、煉獄の七眷属が半数を落とされるとは、予想しておらんかったわ：ブルーノート」

マスター・ハデスの声で帰ってきたのは静寂のみ。物音一つせず、それにマスター・ハデスは溜息をついた。

「やれやれ、手遅れか…悪いな、マカロフ。奴は使うまいと思っていた

が……………終わりだ」

☆

「雨、強くなってきたね」

「しばらくは降りそう…」

ウエンデイの天気予報(?)はよく当たる。雨が降っているだけで視界は悪くなるし。しかもこれでは、足場が悪くなって余計に戦いづらいかもしれない。

「……で、僕はこのままでいいんだよね?」

自分を含め、ガジルさん達重傷者をまとめて聖結界^{ホーリー}で覆う。軽傷者はウエンデイがほとんど完治させていたし、僕がここから離れる時に残した結界も術式も健在だったので、皆に後は何をしたらいいか尋ねると、この役割を言い渡された。

「うん、しばらく大人しくしてて。そうしてもらってるだけで治療しやすいから」

「…なんか、僕がナツさんみたいに落ち着きがないみたい」

「ふふ…そうなんじゃない?」

ウエンデイに笑われてしまった…なんか、納得いかない。僕ってそんなに落ち着きないかな…これでも前世と合わせたら三十路くらいなんだけど。まあ、精神年齢が下がっていることは間違いないとは思っているけどね。

「そ、そこまで落ち込まなくても…」

「…別に、落ち込んでないよ。っていうか、一回休憩しよう? ウエンデイが倒れそうだし」

「私は大丈夫だよ」

「はいはい、とにかく休憩! ……シャルルの大変さが分かるな、これ」
無理矢理だけど、とにかく休憩させることにした。こっちでペース調整してあげないと、本当に倒れる。

僕はテントから出て、辺りを見渡す。そこで、ようやく気がついた。

皆が、ある方向を見つめていることに。

第42話 瓦解の危機

「…どうしたんですか？」

「…あっちの方から、攻撃されたのよ。結界で弾かれたけど、その攻撃、見覚えがあるの…多分、ガジルが戦った奴ら」

レビイさんが僕の問いに答えてくれた。その方向を見ると、なんか…ドロツとした透明な液体と黄色い液体…というか、卵に見える。なんで卵…？

「…随分ふざけた攻撃ですね」

「でも、あのガジルをここまで追い込んだ奴らよ」

「それと、東洋の立体文字ソリッドスク립トを使っていた魔導士もいたはずなんだけども…」

レビイさんがそう言った瞬間、別の方向から何か飛んでくるのが見えた。その何かは設置してあった術式と、その先にあった五重に張ってあった防御結界ディフェンドの、一番外枠の結界を打ち消した。

「結界が…！」

「術式までも打ち消すとは…」

「今言った奴の攻撃だよ！」

「敵の数が二人だけなら、手分けして戦うか？」

「でも、ここで誰かが怪我してる皆を守っていないと！」

いや、まだ敵が二人とは限らない。これだけ人数がいるのだから、ここは役割を分担して戦うべきだろう。

「よし、俺とフリードで敵を倒しに行くぜ」

「それが得策だろう。まだどこに敵が潜んでいるか分からん、他の者は守備を頼む」

「私も行くわよ！」

「エバ、お前は手負いだ。今は休んでいろ…エルフマン、お前もだ」

動き出そうとしていたエバ・グリーンさんとエルフマンさんを、フリードさんが窘める。

「私たちは行ってもいいよね？相手の魔法知ってるの、私だけだし」

「私だって、まだ戦えるもん！」

「しかし…」

そう言つて、レヴィさんとリサーナさんがフリードさんへと詰め寄る。これは…早くしないと、またあの結界や術式を無効化してしまう攻撃が来てしまう。

「防御は僕に任せて下さい。もう少しすればエルフマンさんとエバーグリーンさんの怪我をウエンディが治してくれるはずなので、それまでは守り切ってみせますよ」

「…そうか」

「それじゃ、早速…！」

「いや、リサーナは残ってくれ。レヴィとゴーシユに来てもらう」

「え…？」

「なんで!?!」

「上手くいけば、すぐに敵を倒すことが出来る。この作戦には二人の力が必要なんだ」

「なるほど、ゴーシユが離れたら守る奴がいなくなっちゃうな。ほれ、行くぞ」

「ちよっ、もう少し詳しく…!?!」

フリードさんの言う作戦を詳しく聞く前に、僕はビッグスローさんに引きずられる形で連れて行かれた。その後ろにフリードさんとレヴィさんが続く。リサーナさんはまだふて腐れていた。

☆

やがて、敵の二人の姿が見えてきた。一人は武者のような姿をしているが、角のような物が頭に二本生えている。そしてもう一人は鶏のような姿で、もはや人とは思えない。もしかするとモンスター的一种…なわけないか。とはいえ、もう少しまともな格好は出来ないのかな…

「お前らか、うちのベースキャンプに攻撃してきた奴は？」

「フッフッフ…その通りナリ！」

武者の方がそう答える。うん、あれだけでキャラ作ってるのが分かる。そして、手負いの人達を襲うっただけで…性根が腐っている。

「では頼むぞ、ゴーシュ」

「了解」

奴らへと一歩ずつ近づいていく。それに合わせて敵も警戒するが、それもお構いなしに歩を進める。

「ペペペ……これでも食らうペロ！へビーエッグレイン！」

デイフエンド
ウォール
「防御結界・壁！」

鶏の方が上に向かって口から沢山の卵を乱射し、それが僕に向かって降り注ぐ。が、結界によってその攻撃は無駄に終わった。それを見て武者の方が反応を示す。

「む……奴があ魔法の使い手か！ならば……轟！」

武者が手をこちらに向けながらそう叫んだ、が。

「……な、何と!？」

「バリオンフォーメーション！」

後ろにいたビッグスローさんの周囲に浮いていた五体の人形が円を作るように配置され、人形達が回転を始める。その中心に魔力が収束され、ビームが発射された。

「ど、どうしたペロ!？」

「魔法が……ぐはあっ!？」

武者の方にビームが直撃し、大きく後方へと吹っ飛ばされる。それに気をとられている鶏の前にはフリードさんが距離を詰めている。

エクリテュール
「闇の文字・絶影！」

「ペロ……!!」

自身を強化したフリードさんの一撃で鶏が吹き飛ばされ、武者のすぐ横へと倒れ伏す。どうやら、今の一撃で鶏は気絶したようだ。武者の方も気絶こそしていないがあ魔法のビームをまともに食らってるんだ、立つのは不可能だろう。

「す、すごい……私とガジルが苦戦した相手をこんなあつさり……」

「ほんとですね……僕ら、いらないんじゃない?？」

「何を言っている?お前たち二人がいたから出来た作戦だぞ」

「ま、作戦勝ちってことだな」

僕がレヴィさんの魔法、ソリッドスク립ト立体文字に対して制限結界を相手二人が

見えた瞬間に発動する。そして他の結界を使えばあの打ち消す魔法の使い手が反応を示すだろうから、それをビッグスローさんが遠距離攻撃で倒す。上手くいったらそこから全員で残った方を倒す…っていう作戦だったんだけど、まさか一撃で倒してしまうとは。

「ぐ…お、おのれ…!!」

「よしゴーシユ、こいつらも結界使つて島の外へ投げちまえよ」

「了解…」

結界で二人囲い、そのままザンクロウを飛ばした時と同じ要領で浮かせる。一つ違うのは、フリードさんが結界の縁に合わせて魔法を少しの間使用出来なくしたとか。武者の方が途中で結界を打ち消したら意味ないし、立方体だから書きやすい。

「ま、まだだ！皆の衆、かかれー!!」

「囲まれた!？」

森の木々からゾロゾロと、悪魔グリモアハートの心臓の紋章のある鎧を着た人達が現れた。かなりの数がいるようだけど…今更、これくらいで手こずるわけにはいかない。

「フツフツフー！今この島にいる、悪魔グリモアハートの心臓全魔導士である!!」

「…ゴーシユ、今のうちに——」

突然、フリードさんの声が途切れる。それだけでなく、僕は足に力が入らなくなり膝をついてしまった。フリードさんも、ビッグスローさんも、レビイさんも同じような状態らしい。これは、一体…魔力が、吸い取られてる…??

「ち、力が…」

「入らねえ……」

「目も…霞んで……」

「くそっ……!」

まずい。今は戦闘中なんだ…!このまま魔力を失ってしまったら、周囲の敵にやられてしまう…こうなったら、残った全魔力を!

「防御結界……円蓋!!……あうっ」

「ゴーシユ……!」

防御結界は、作り出すときに魔力量によって出現時間や大きさ、距離が変わる。出現時間というのは、魔力を込めれば込めるほど長い間出現させていられるということ、距離はどれだけ離れた場所に出現させることが可能か。魔力を込めたからといって、強度が増したりするわけではない。

「ぐっ…なぜだ！なぜ拙者達を囲う結界が消えぬ!？」

例えば、エドラスの時に合図代わりで使った小さな防御結界は、大きさに魔力を割かずに出現時間と距離に魔力を注いだ物。自分の意思でオンオフも出来るけど、それ以外…破壊される場合はこの魔力量の分配が重要となる。そして、この魔力量というのが出現させた瞬間の自分の魔力量を指している。何が言いたいかというと、これで僕が魔力切れになってしまっても僕たち全員を守ることが出来るということだ。

今作った円蓋は、出現時間をメインに据えている。ベースキャンプにある結界や、あの武者と鶏を囲んでいるのもそうだ。この謎の脱力現象が何かは分からないけど…敵の魔導士軍団は平然としているから、敵からの攻撃か、もしくは敵によって何か特殊な現象を引き起こされているかだ。そしてこれがもし天狼島にいる妖精の尻尾のメンバー全員に起こっているのだとすれば、その敵というのは煉獄の七眷属だろう…でなければ、これほどの広範囲に影響を及ぼせるとは考えにくい。つまり…誰かがその敵を倒してくれることを信じて、待つしかない。

「三人とも…意味があるか、分かりませんが…譲渡結界を」

「わ、分かったけど…ゴーシユも、食べておかないと…!」

「魔力欠乏症になっちまったら…ウエンデイでも、きつと治せねえぞ…!」

「とにかく、全員回復に専念するんだ…!ゴーシユが作った時間を、無駄に出来ん…!」

確かに、魔力欠乏症は魔導士にとっては致命的なもの。ウエンデイが治療したり譲渡結界を全部食べたとしても、もうこれ以上戦闘には参加できなくなってしまうだろう。それは困るので、レヴィさんに僕

の腰についているポーチから譲渡結界ラシエンブルの入った袋を取り出してもらい、一つを口の中に放り込んでもらう。

今は、仲間を信じるんだ…誰か分からないけど、きっと、チャンスはやってくる…!!

第43話 逆転

「おい、いつまで時間かかってんだ！」

「もつと強力な魔法弾持って来い！」

敵の攻撃がずっと続いていくが、僕の結界が破られる気配はない。これくらいの攻撃なら、まだ時間は稼げるだろう。ただ…この結界を作った時の僕の魔力がどれだけ残っていたのかが分からないのが不安だ。それに譲渡結界を食べても魔力が回復しないということは、譲渡結界による自然回復作用よりも魔力吸収の方が上回っているということ。十分の一の魔力量じゃすぐにまたなくなっちゃうし…このままでは、誰も動くこともままならない。

「ねえ、このままじゃ…」

「誰か動ける奴、いねえのかよ…」

「くっ……………全員、伏せろ！」

フリードさんの声で全員がその場で伏せると、攻撃が頭上を掠めた。その攻撃は、さっきまで僕らが戦っていた相手…あの武者のものであったことに気づく。なんで、あの武者が攻撃出来るんだ…!?

「フリードさん……………術式は…」

「…どうやら、解除されてしまったらしい。敵に解除魔導士がいるんだろう」

解除魔導士…確か、封印や罠などを解除する魔法を扱う魔導士のこと、だったか。その魔法で武者達を捕らえている防御結界に書かれている術式を取り払ったことで脱出出来たということか。だから、またあの立体文字で結界を無効化されてしまった。

「フツフツ…さっきはよくもやってくれたな！貴様らの命、もらい受けるぞ!!」

「させ、るか……………!!」

ただ立とうとしただけなのに、意識が遠のきそうになる。やっぱり魔力が吸われているのか…それでも、仲間を傷つけさせないぞ…絶対に！

「ゴ…シュ、無茶だよ…!」

「くそっ、ベイビー達を動かせれば……!」

「ハツハツハ！よく立ち上がった！ならば貴様から始末してやるでしょう!」

何とか立ち上がった僕に対して、武者が攻撃態勢に入る。それを見て、結界を出した時にレヴィさんにとつてもらった譲渡結界ランブルを一つ口に入れる。

「ゴーシユ……逃げろ!」

「もう遅いわ!斬!!」

飛んできた攻撃を、僕は両手を伸ばして受け止めた。

「何!」

「うわっ……!」

よし、成功した!十分の一でも魔力が回復すれば一瞬だけ防御結界ディフェンドを出して一撃くらいは防げるんじゃないかと思っただけど、上手くいって良かった……威力殺しきれなくて尻餅ついたけど。

「!?」

「な、なんだ!」

「あの光って……?」

天狼樹がある方から、巨大な炎のような光が迸る。これは……ナツさん?いや、ナツさんの炎とも違うような気が……っていうか、天狼樹がない……?今まで何処にいても見えた巨大な天狼樹が、なくなっている。いつからだ……?

「ええい、静まれ!こうなれば……皆の者、一斉攻撃!!」

「まずっ……!!」

しまった、囲まれた……!まだ、まだ何か手はないのか……!!

「ぐあっ!!」

「!?」

敵の一人が、突然吹っ飛ばされた…!?

「…!皆!!」

「魔力が…!」

「戻ってきたぜ!!」

本当だ…魔力が戻ってきている。さっきの光と関係が…?いや、とにかくだ。魔力さえ戻れば!

「これまでの分、お返ししてやるぜ!ラインフォーメーション!!」

「闇エクリテュールの文字・絶影!」

フリードさんとビッグスローさんが敵を次々となぎ倒していく。

よし、この間に武者を!

「制限結界!!」

「そうはさせせん!轟!!」

「それはごっちのセリフ!静寂!!」サイレント

レヴィさんと武者の立体文字がぶつかり合い、真逆の効果を持つ二つの文字は互いを打ち消し合った。レヴィさん、ナイス!またあいつを制限結界の中に入れることが出来た!

「何と!?また同じ手に…!」

「レヴィさん!」

「もう中に入ったよ!」

「よっしゃ、今度は俺が仕留めてやるぜ!!バリオンフォーメーション!!」

「ぐわああ!!」

武者はビームに飲み込まれ、意識を失った。

☆

「あ、帰ってきた!」

近い場所で戦っていたからそこまで遠くなかったのに、ようやく帰ってきたって感じがする。

「皆、大丈夫だった?さっき魔力が…」

「ごっちは大丈夫だ。マスターたちは?」

「もう大丈夫です。さっきは危なかったですけど、容態は安定しまし

た」

ウエンデイがテントの中から出てきた。良かった…。魔力が吸収される現象はどうやら妖精フェアリーテイルの尻尾のメンバー全員に起こったらしい。フリードさんとビッグスローさんの話によると、天狼樹には妖精フェアリーテイルの尻尾の紋章を持つ者を加護する力があるんだとか。そして、その天狼樹が倒されてしまったことによって反対の効果が出たのかもしれない、らしい。どうして天狼樹が倒れたままなのにその現象が無くなったのか分からないけど…

「ゴーシュ…」

「えっと…ただいま」

「無茶しなかった？」

「結構危なかったけど、大丈夫だったよ」

まあ、結構賭けに近いこともした気がするけど。

「…本当に？」

「信用無いなあ…」

「仕方ないじゃない、あんたが無茶しないことの方が珍しいし」

「シャルルまで…そういえば、誰か目を覚ました人いる？」

「?…ううん、まだ誰も…なんで?…」

やっぱり違うか…光が収まった直後の、敵が一斉攻撃しようとした時に吹っ飛ばされた人がいたから、残った痕跡を見て誰かの援護かとも思ったんだけど…

「僕らが戦っている時に、誰かが助けてくれたみたいなんだ。これが手がかかりなんだけど…」

「これは…?…」

「鉄球…かしら」

敵を全員で空に飛ばした後に、この鉄球が地面に落ちていることに気がついた。

「ガジルさんかと思ったけど、鉄球を飛ばす魔法なんて見たことないし…」

「そもそも目覚めてないもの」

「誰だろうね…」

「おーい、皆ー!!」
その時、聞き慣れた声が聞こえてきた。

第44話 チーム分け

「どうなってるんだこりゃ…」

「皆！」

「ひどい…」

聞き慣れた声は、ナツさんとルーシイさんとハッピーのものだった。結界をすり抜けてベースキャンプに入った三人は、負傷者の皆が寝ている姿を見てそう口にする。

「ナツ」

「リサーナ！」

「リサーナ、良かった無事で！」

「ねえ、ウエンデイは来てないの？オイラ、探してくるよ！」

ハッピーが僕とリサーナさんにそう言った。姿が見えないから不思議に思ってたんだろう。僕とウエンデイが一緒にいたのは知っていただろうから。

「大丈夫、ウエンデイに皆治療してもらったよ。一段落したから休んでもらってるんだ」

「そっか、なら安心ね」

「じゃあ、シャルルとリリーは？」

「二人もウエンデイと一緒にだよ」

「リサーナ、ゴーシユ…何があった？」

「…ここが悪魔グリモアの心臓ハートの奴らに襲われたの。フリードやゴーシユたちが戦ってくれてただけど、よく分からないけど急に魔力が無くなってきた……何とか追い払ったけど、その前から、皆あちこち傷を負ってて……気がついたら……こんなことになって……！」

「リサーナさん…」

ナツさんの問いに、リサーナさんが説明してくれている。けど、途中から目に涙を浮かべ、声が裏返りそうになっていた。

「リサーナ、泣いちゃ駄目だ！元気なオイラ達が泣いちゃ駄目なんだよ！」

「ハッピー…」

「う、うん…そうだよね」

「…許さねえ…絶対に、許さねえ」

ナツさんが指を鳴らしながらそう呟いた。ナツさんがいてくれると、こつちまで心に希望の炎が灯ったような気になる…どんなに強大な敵が相手だったとしても、何とかなるんじゃないかと思わせてくれる。

「さらにマスターとカナが負傷か…」

「どうなってんだ一体…」

「グリモアの戦艦が、ここから東の沖にある。さつきシャルルと共に確認してきた。ここの守備を考えて、チームを二つに分けてみてはどうだろう」

「攻めのチームと、守りのチーム…」

「…」

ハデスのいる本艦へと攻め込むチームと、このベースキャンプを守るチーム。攻め込むチームの方は恐らく、いや確実にハデスと戦闘になる。マスターをここまで追い詰めるほどの強敵…魔法のバランスを考えて、現状で最高の攻撃を出せるチームにしておかないといけない。

「ナツさん、ルーシイさん!」

「ウエンデイ!休んでなくて大丈夫なの?」

「はい!もう大分休みましたし」

「シャルル!どこも怪我してない?」

「ええ、大丈夫よ」

「お前の方がボロボロだが…」

「…ゴーシユ、ちよつと来てくれ」

「あ、はい!」

ウエンデイ達が合流し、再会を喜び合っていると、フリードさんから呼び出されそちらへと向かう。フリードさんはそのままベースキャンプの結界の外に出たので、何だろうと思いつながら僕もそれに続く。

「よし、まずはここの結界を張り直してくれ」

「…？分かりました」

それはやるつもりだったので、言われた通りにする。さっきの武者の攻撃で結界が一つ消されていたので、ちゃんと五重に張り直す。まずは一度解除し…とにかく長く持続させられるように、さっきよりも魔力を込める。

「ディフェンド防御結界・ドーム円蓋！」

「…よし。では、これから周囲に術式を用いた罫を張る。レビイやビッグスローにも声をかけるとしよう。急がねばナツのことだ、突撃してしまいかもしれん」

「…？ちよ、ちよつと待って下さい！なんで…」

「ああ、雷神衆の二人には術式の修正を頼むことがあってな。あいつも術式の書き換えが出来る」

「いや、そうじゃなくて…なんでナツさん達が行く前にやっておくんですか？確かに急いだ方が良いけれど…」

「お前もナツ達と一緒に行くからさ」

と、後ろからビッグスローさんに肩を組まれながらそう言われた。

「え…？」

「さっきの戦いで分かっただろう。お前の魔法は攻撃の瞬間を作り出す為に必要だ」

「それに連携を考えりゃあ、ナツ達のチームとよく一緒に仕事してるお前とウエンデイが適任だろ」

「……」

…確かに、この二人がベースキャンプを守ってくれているなら、僕は攻め込むチームに参加した方がいいかもしれない。だけど…：僕がいても役に立つことが出来るんだろうか。

ナツさんとゼロが戦っている場所に向かおうとした時に、こっちのジェラールに言われた言葉が引つかかかってしまった。防ぐだけでも手一杯だったエンジェルとの戦いから、少しは成長したとは思う…思うけど、ハデスはゼロよりも強い敵だ。それを考えると…：まだ、力不足ではないだろうか…？

「ゴーシュ、どうした？」

「その……僕が行って、役に立てるでしょうか……？ マスターを倒すほどの相手なのに、勝てるでしょうか……」

「なーに、お前一人で戦うんじゃないからね」

「……」

「ハデスに単独で勝つことなど不可能だ。だからチームで戦うんだ：
フェアリーテイル妖精の尻尾は、家族で乗り越えるギルドだからな」

家族で……皆で、一緒に乗り越える……

「……分かりました。ナツさん達と、行つてきます！」

「それじゃ、早速とりかかろうぜ。レビイも呼ばねえとな」

「ああ、急ごう」

向こうで話しているナツさん達の様子を見ると、まだ余裕はありそうだ。今のうちに、少しでも多く防御の術式を設置しておかないと！

☆

少し時間が経って、術式の設置が大体終わった頃。

「さてと！ ハデスを倒しに行くぞ！！ ルーシィ、ハッピー！」

「あいさー！！」

「あ、あたし……!?」

どうやらもう出発するようだ。一度作業を止めてナツさんの元へと集まる。

「同じチームでしょ？」

「分かっているけど、フリードとかの方が……」

「俺はここで術式を書かねばならん」

「守りは俺たちに任せとけ」

「……私も、ナツさん達と一緒にいきます！」

「ちよつと、ウエンディー！」

「ナツさんのサポートくらい出来ると思うし」

ウエンディイがやる気……いや、好戦的と言った方がいいのか。ここまで戦う気満々なのは、普段を考えると本当に珍しいと思う。

「お、俺も行く……ガジルの敵をとってやらねばならん」

「……」

リリーがそう言っているけれど…何というか、いつもと違うような…？

「雷が怖いんだってさ」

「へえ…ちよつと意外」

「だからうるさいぞ！」

いつもはもつとクールな感じだから、今の雷に怯えているリリーはなんか可愛く思えるな。

「私は、フリードの術式を手伝う為に残る」

「私も…ミラ姉とエルフ兄ちゃんの傍にいるね」

「これで決まりだな…」

フリードさんが僕の方に視線を向ける。大丈夫…もう迷ったりしない！

「僕もナツさん達と行ってサポートします！」

「皆のことは必ず守るから、安心して行ってこい！」

「気をつけてね！」

「大分魔力が回復してきた！」

「残る敵は多分…ハデスのみ！」

「最後の戦いになりそうですね…！」

そうだ…これで、この戦いも終わるんだ。かなり手強い相手だったけど…ハデスさえ倒せば…！

「オイラ達も頑張るぞーっ！」

「分かってるわよ！」

「エクシード隊、出撃だ…！」

シャルルも不満そうだったけれど、結局行くことにしたようだ。ウェンデイが心配なら最初からそうすれば良かったのに。

「行くぞー…っ！！」

「！！」「おおーっ！！」「！！」

ナツさんに僕らも続…こうとしたら、ルーシイさんがリサーナさんに呼び止められていたので僕ら（ナツさん以外）は歩みを止める。

「……」

「…えつと…何？」

「あ、ううん。何でも無いの」

「…：僕がよく攻めのチームに参加したな、とか思ってるんでしょ」

「…：バレちゃった？」

「ウエンデイも分かりやすいんだよ」

「ゴージュほどじゃないけどね」

「なんだそれ…：まあ、守りに参加しようとしてたけどね…：あの二人に背中押してもらったから」

「…：そっか」

「なんで笑ってるの？」

「…：何でも無いよ！ルーシイサーン、ナツさん行っちゃいますよーっ！」

…：成長した、って言いたいのかな。今までの僕だったら守りを重視する考え方してたと自分でも思うし。今もしてるけど…：自分だけで守るんじや無く、家族全員で乗り越えるってことが優先になったからかな？

「お待たせーそれじゃ、行こう！」

「…：はい！」

☆

敵の本艦に向かう途中で、グレイさんとエルザさんがいた。

「俺は…：いつも誰かに助けられてばかりだな」

「私も同じだ」

エルザさんが顔を上げ、グレイさんも続けて顔を上げる。そこで、僕たちに気がついたようだった。

「皆…：」

「グレイ！」

「エルザさん！」

「…：俺も同じだ!!」

「…：！」

「二人とも、これが最後の譲渡^{ラシ}結果^{アル}です」

「ありがたい」

「助かる…：」

あれだけあったのに、もう残っていない。ベースキャンプにならま
だいくつかあるだろうけど、あれは負傷者の皆の分だ。だから、もう
魔力の回復は出来ない。

「行くぞ!!」

「おう!!」

「ああ!!」

これで、最強チームが揃った。もう、心配ない。皆でハデスを倒す
!

第45話 VS. ハデス 暴走

天狼島の海岸。そこには、悪魔グリモアハートの心臓の本艦がある。その先端、と言つて良いんだろうか…船首？のところに、人影が見える。

「まさか七眷属にブルーノートまでやられるとは…ここは素直に、マカロフの兵を褒めておこうか。やれやれ、この私が兵隊の相手をすることになるとはな。悪魔と妖精の戯れもこれにて終劇。どれどれ、少し遊んでやろうか…三代目妖精フェアリーテイルの尻尾」

船首にいる老人——マスター・ハデスがこちらを見下していた。その立ち姿が、強さと威厳を表しているかのように思えた。

「来るが良い。マカロフの子らよ」

最後にそう言い残し、船の中へと戻っていく。

「かぁーっ!! テメエが降りてこいーっ!!」

「偉そうに…!!」

「随分余裕ですね…」

「奴がマスターを…」

「あの人を懲らしめてやれば、この島から皆出て行つてくれますよね！」

「もちろん！全員追い出してやるんだから!!」

魔力も体力も大分回復している。いよいよ決戦だ…!

「ハッピー達に頼みがある」

「何？」

「この船を探つて、動力源みてーのを壊してくれ」

「万が一飛んだら大変だもんね！ナツが」

「分かったわ」

「そういうことなら、任せておけ」

リリー…いつまで耳を押さえているつもりだろう。雷が止むまでずっとそうしているのかな。

「一応、トロイアをかけておきますよ」

「そろそろ始めようか…行くぞ!!」

グレイさんが船の先端へと続く氷の階段を作り出し、全員で駆け上

がる。

「奴はマスターをも凌駕するほどの魔導士…開戦と同時に全力を出すんだ!!」

「はい!!」

「一気に決めましょう!!」

「持てる力の全てをぶつけてやる!!」

「後先のことなんて考えてられない!!」

「やつとあいつを殴れんだ!!燃えてきたぞ…ハデス…!!」

ナツさんが一番最初に階段を上りきり、ハデスと対峙する。右手には炎が燃え上がっていた。

「妖精の尻尾の力を、食らいやがれ!!」

その言葉と共に、マスター・ハデスを炎が飲み込む。

「妖精の尻尾の力…だと?」

ハデスは防いだようだが、全身を包み込むように広がった炎に隠れて、グレイさんとエルザさんが詰め寄っていた。

「換装!黒羽・月閃!!」

「コールドエクスカリバー!!」

二人の渾身の一撃が襲いかかる。このまま、さらに畳みかける!!
「柱百花槍!!」

「開け、金牛宮の扉!タウロス!!」

「モォー…レツツ!!」

僕が配置した柱をハデスに叩きつけ、タウロスの一撃によってハデスは宙を舞う。

「全員の魔法に攻撃力、防御力、スピードを付加!!アームズ、アーマー、バーニア!!」

さらにウエンディの付加術によって、全員能力が上昇する。そのままエルザさんとグレイさんが近接戦闘に持ち込むが、ハデスはそれをギリギリのところまで躲していく。

「ちよこまかと!」

「ぐっ!」

ハデスの手から魔法の鎖が伸び、至近距離にいたエルザさんを捕ら

えグレイさんにぶつけて追撃を逃れた。が、すでに上にはナツさんがいる。

「火竜の翼撃!!」

「ふっ!」

「ぐわっ!」

またハデスに躲され、ナツさんは首の後ろに鎖を受けそのまま振り回される…あれだけ近いと結界が間に合わない。だったら、次に繋げる策を!

「はあっ!!」

「!」

エルザさんがナツさんを繋いでいた鎖を断ち切った!そしてグレイさんがナツさんの飛ばされた先に待機している。ルーシイさんとウエンデイとアイコンタクトをとる。よし、行ける!

「ナツ!!」

「おう!!」

「行つけえっ!!」

グレイさんの氷の巨大なハンマーに上手く着地し、ナツさんは勢いよくハデスへと接近する。

「天竜の咆哮!!」

「スコープオン!!」

「クリスタル^{アロー}・
水晶結界・矢!!」

「ユニゾン^{レイド}・
合体魔法…!」

「火竜の、剣角…っ!!」

よし、決まった…!まだ倒せないかもしれないけど、今は確実に鳩尾に入った…相当なダメージになったはず!

ハデスはナツさんの一撃によって吹っ飛び、奥の壁まで飛んでいった。煙でよく見えないけど…どうなった…?

「人は己の過ちを経験などと語る」

「!!」

「だが本当の過ちには経験など残らぬ…私と相対したという過ちを犯した汝らに、未来など無いのだからのう」

「そんな…」

「化け物め…!」

「全く効いてないの!?!」

「…!」

「おい…こっちは全力出してんだぞ!!」

「魔力の質が、変わった…!?!」

傷どころか、羽織っていたマントが無くなっただけ。それ以外、砂埃すらついていないような…これまでの僕たちの攻撃が無かったかのような姿でハデスはこちらへと歩み寄ってくる。そして…ナツさんの、言う通り…魔力が、さつきまでと何か違う…!

「さて…準備運動はこのくらいで良いかな?」

その言葉の後、ハデスから得体の知れない魔力が僕たちへと発されているのを感じた。これは…何か分からないけど、まずい!!

「来るぞ!!」

「喝っ!!!!!!」

「ウエン——」

ハデスの目が、ウエンデイを捉えていたのに気づき結界を展開する。が、結界は一瞬で消え、後に残ったのは…ウエンデイが今まで着ていた衣服だけだった。

「ウエンデイーっ！！！！」

☆

「跡形も無く消え去ってしまったか…他愛も無い。このまま汝らを一
人ずつ消していくとするかな？」

「ウエ、ンデイ……？」

「そんな……」

「何をしやがった…」

「嘘だろ……」

全員が、ハデスが何をしたのか分からず困惑していた。ウエンデイにどんな魔法を使ったのかそれすらも分からず、仲間を一人失ってしまったという事実を徐々に理解していく……ただ、一人を除いて。

「……」

「な、なんだ!？」

「ゴーシユ…!？」

「ああ………ア、アア………!!」

船から彼らを見下ろした時すでに、ゴーシユが、以前ダフネにドラゴンの情報と引き換えに引き渡した、あの実験体の少年であることは気づいていた。魔力の質が普通の人間とは少々違う。大抵の魔導士は気づかないかもしれないが、あの門から現れた時の異質な魔力は今も僅かながらに感じる事が出来る。

その魔力が今、変化した。

「アアアア………!!!」

「ど、どうしたっていうの!？」

「ゴージュ!!しっかりしやがれ、おい!!」

「なんて魔力だ…!?!」

先程の戦闘時の魔力とは明らかに違う。精神面への影響によって、恐らくダフネに施されたであろう力が覚醒されようとしている。

「面倒なことになっておるようだな……童子わらしよ」

「アア……………ああああアアアア!!!」

せめてこの世に生を与えた者として、一撃で屠ってやろう。

ハデスが、ゴージュへとドメを刺そうとしたその瞬間、彼にとって救いの声が聞こえた。

☆

ウエンデイが……………消えた。

どうして…?!

僕のが、足りなかったのか…?!

力が……………足りない……………チ、カラ、が……………!

「アア……………ああああアアアア!!!」

「ゴージュ、止めて!!と、申しております」

「ホロロギウム…!?!」

「アア……………あ?」

ホロロ……………ギウム?それに、今……………微かにだけど、確かに……………ウエンデイの、声が…

「ご、ゴーシユ…?」

「あ、あれ……………僕…?」

「収まったようだな…」

「つたく…脅かすんじゃないねえ…」

……………?なんで皆グツタリして…?

「そうだ、ウエンデイは……………」

「ホロロギウム!あんだ、なんでここに?」

「自動危険察知モードが発動されました」

「あの……………あたしも、結構危険が一杯だったような気がするんですけど」

ウエンデイは、無事なのか……………よ、良かった…

「今回は危険のレベルが違いました…申し訳ありません。ありがとうございます
ございます、ホロロギウムさんと、申しております」

「相変わらずややこしいな…」

「てか、なんで服だけ落ちてんだ?」

「そうだ、確かにさつきまで着ていた服があるってことは…まさか。

「緊急事態でしたので、ご本人のみをお守りしました」

「ってことは、おい…その中でウエンデイは…」

「きやーつ!と、申しております。さ、早くお召し物を」

……………うん、まあ、無事だったならいい。ホロロギウムにはいつかお
礼しないとイケないな。無事に戻れたらルーシイさんに相談しよ
う……………謝罪もあらかじめしておかないとイケないか。機会があった
らお礼(物理)をしてやる。

「とにかく、助かった。礼を言う」

「私が守れるのはこの一回限りです。皆さん、くれぐれも気をつけて
下さい」

「ありがとう、ホロロギウム!」

天井に張り付いていたホロロギウムが消え、黒い衣装を纏ったウエ
ンデイが現れた。そして着地し、ハデスを――

「ゴーシユっ!!」

「ぐふっ!」

——気にすること無く、僕の方へと飛んできた。勢いのまま床に倒れてしまいそうになったけど、ギリギリ耐えることが出来た…でも、どうしたんだろう？

「ど、どうしたの？」

「だって、だって……！」

「ゴーシュ、覚えてねえのか？」

「え？」

ナツさんにそう言われるけど、よく分からない…何かしたっけ………？そういえば、さっきの記憶が曖昧なような………？

「そりや、ウエンディも心配するわよ！あたしたちだって——」

「待て。今はその話は後にしよう」

「だな……お待ちかねだぜ」

「！ウエンディ……」

「……うん。分かってる」

ウエンディが目元を袖で拭い、ハデスの方へと振り向く。よく分からないけど、ややこしいことは後回しだ。

「…これがマカロフの子らか。やはり面白い」

「お前…じっちゃんと同じ合いなのか？」

「何だ、知らされてないのか…今のギルドの書庫にすら、私の記録は存在せんのかね」

……知らせるも何も、あそこまでマスターを痛めつけたのはどこの誰だよ。

「私がかつて、二代目妖精の尻尾フェアリーテイルマスター…プレヒトと名乗っていた」

「「！？」」

「嘘つけ!!」

「私がマカロフを、三代目ギルドマスターに指名したのだ」

「そんなのあり得るか!!ふざけたこと言ってんじやねえぞ!!」

ナツさんがそう叫びながら、ハデスへと向かっていく。ハデスはそれを見て左手…正確には、左手の立てられた人差し指と中指の指先に魔力を集中していく。

「ナツさん！待って——」

「ぐあっ！」

「ナツ!!」

「くっ…ディフェンド防御結界・ドーム円蓋!!」

ナツさんがハデスから放たれた一撃に飲み込まれ、そのすぐ後こちらにも追撃をしてきた。咄嗟に結界を張って防御する。

「くそっ!!」

「ナツ!!」

「まだです！追撃、来ます!!」

「バン！」

「ぐっ!!」

鎖攻撃は防げたけど…ハデスはナツさんや僕たちに銃でも扱っているかのように魔力を弾丸にして打ち出してくる。ナツさんの方にも結界を張りたいけど…一発一発が、重すぎる…！このままじゃ…

「ディフェンドディ、ウォール防御結界・壁…！」

「そんな結界では、防げんよ…バン!!」

「うあっ!？」

「ウォールゴーシュ!!」

ウォール魔力を一瞬長く込めただけで、結界を貫通させてきた…!?!しかも、ウォール壁と円蓋を二枚抜きするなんて…なのに、僕を後方へ吹っ飛ばすほどの威力。実力が、違いすぎるのか…!?

「ハハハ！私は魔法と踊る！」

「…バウンド弾性結界!!」

「何っ!？」

「がっ！いてえじゃねえか!!」

「俺もいてえっての!!」

皆を一カ所に固める為に一人先行しているナツさんをこっちに戻そうとしたんだけど…上手いかなかったらしい。ごめん、ナツさん、 그레이さん。

「何のつもりだ？汝の結界は…」

「それでも、諦めない…！ディフェンド防御結界!!バウンド弾性結界!!クリスタル水晶結界!!」

ウォール壁、ドーム円蓋、ボックス匣を大量に作り出す。そして結界と結界の合間にクツ

シヨン材として弾性結界と水晶結界を作る……ここまでしても防ぎきれるか……

「氷造形・盾!!」
アイスマイク シールド

「換装・金剛の鎧!!」

「グレイさん、エルザさん……!!」

「守り切るぞ、ゴーシュ!!」

「ナツ達は少しでも休め! 私たちが攻撃を通させはしない!!」

「まだ、反撃のチャンスはあるはず……! その時を、待つんだ!!」

「良からう……! 汝らの足掻きを見せてみよ!」

第46話

V.S. ハデス 紋章を持たぬ男

「妖精に尻尾はあるのか無いのか。永遠の謎、故に永遠の冒険…ギルドの名の由来はそんな感じであったかな」

僕が作り上げた結界がいくつも消え、エルザさんの金剛の鎧やグレイさんの氷の盾すらも罅が入っている。その時…ハデスの乱射攻撃が止まった。

「ナツ…!」

「おう!!」

「ルーシィ…いけるか」

「任せて、エルザ!」

「ウエンディ…付エンチャント加かけ直しておいた方がいい」

「うん…!」

まだ、僕たちは戦える。どれだけ絶望的だったとしても…絶対に、倒すんだ…!皆でギルドに、帰る為に…!」

「…汝らの冒険はここで終わりだ」

「そんなこと、有り得ない…!!」

「汝を最初に仕留めるとするか、童子よ…バン!!」

「ぐっ…!!?」

「ゴーシュ…!!」

「あの野郎…!!」

一回攻撃を止めたのは、また魔力を込めた一撃を与える為か…!エルザさんとグレイさんが前に出て守ってくれているのに、鎧と氷の盾の間を正確に打ち抜いて僕の結界を破壊してきた…僕はその弾をまともに食らってしまう。痛みに蹲ってしまい、次の瞬間左腕に衝撃を受けたことに気づくのが遅れる。

「ふん」

「ゴーシュ!!」

ナツさんが手を伸ばしていたが、僕は掴めずにハデスの足下へと鎖で引つ張られてしまった。ハデスはうつ伏せに転がった僕の頭を踏みつける。

「メイビスの遺志が私に託され、私の意志がマカロフに託された…しかしそれこそが間違いであった。マカロフはギルドを変えた」

「変えて何が悪い!!ぐっ…!」

「くそっ…!!」

「きやあっ…!」

「ナツ、さん…皆…!」

勢いよく飛び出したナツさんを、ハデスは鎖で繋ぎ僕のすぐ横へと叩きつけた。さらにハデスは後方の皆にも先程の魔力弾で攻撃を行う。僕の結界が全て消え去り、グレイさんやエルザさんも魔法を維持出来なくなる。ルーシイさんやウエンデイも反撃する隙を見つけれない。

「魔法に日の光を当てすぎた」

フェアリーテイル

「それが、俺たちの妖精の尻尾だ!!テメエみてえに死んだまま生きてんじゃねえんだ…命懸けで生きてんだコノヤロー…!!変わる勇気がねえなら、そこで止まってやがれ!!」

「喧しい、小鬼よ」

「ぐあっ!」

「ナツ……!!」

この至近距離で、ナツさんを撃った…!このままじゃ、ナツさんが持たな——

「恨むなら、マカロフを恨めよ」

「やめっ……!!」

「マカロフのせいで、汝は苦しみながら死ぬのだ」

「よせっ……!!」

「ひぐっ……ううっ……」

「やめ、ろ……!!」

これ以上、仲間を…攻撃させて、たまるか……!!

「ほう、立ち上がるうとするだけの力はあるか。あの研究者の元で何をされたのか知らぬが、随分と感情的になったものだ」

「感情的……?」

「以前の汝ならば、感情を露わにすること自体稀であった。それが戦

闘中であろうとな」

昔の僕：ウエンディやジェラルドと出会う前の僕。僕がこの世界に生まれたのは、この男の具現のアークで作られた特殊な門が原因だ。だってラストイローズが言っていた…。その頃の記憶もなく、ダフネと一緒にいたという話も現実味がない。

「おい、どういふことだ……」

「……？」

「ゴーシュのこと、知ってるの……？」

「そうだ、皆にはまだちゃんと説明すらしていないんだ……！」

「この童子のことも知らぬのか？ 汝は知っておるのではないのか？」

「…僕も、七眷属のラストイローズって人から少し聞いただけです。

昔の記憶は全くありません」

「なるほど…では、改めて説明してやろう。汝は私が生み出した存在…具現のアークという魔法によって生を受けた存在だ」

「そんな……」

「ゴーシュが、生み出された存在……」

…そう明確に言われると心にくるものがあるけど、それ以上に皆が心配だ。明らかに、ハデスはこつちを揺さぶろうとしている。魔法の力は心の力：マスターの話といい、僕らを試そうとしているように思える。

「生まれた頃は兵士達との戦闘訓練をさせていた。ある時、竜を研究している者との取引にてこの童子を引き渡したのだ。それ以降はどうなったのかは知らぬが…何かしら実験をされているのだろう。汝らも先程感じたであろう、あの魔力を」

先程…ウエンディが消されそうになった時か。あのすぐ後の記憶が曖昧だから間違いないだろう。

つまり、僕はダフネによつて何らかの実験の被験体にされていたと思っただけのことか…そして、さっきはウエンディを失ったという精神的ダメージによって暴走し、それが引き起こされそうになった、と。そういうことなんだろう。

正直、どうして僕がこの世界に生まれたのかは分かっていなかった

し、前世の記憶を持ったままだったことから普通とは違う人生ではないかとは考えていた。だからあまりショックは受けていない、と思う…考えるのを後回しにしているだけかもしれないが。

「実験……そんなこと、どうでもいい」「何?」

「僕が誰に生み出されたとか、実験されたとか、どうでもいい……! 僕の名は、フェアリーテイルゴッシュユールガードナー……妖精の尻尾の、魔導士だ……!!」

「ゴッシュユール……!」

「…なるほど。随分と威勢が良くなったようだ」「ぐっ……」

立ち上がるうとしていたが、思いつきり踏む力を込められてまたうつ伏せに戻されてしまった…

「へっ、今の妖精の尻尾は自由なんだよ……」

「汝もか、小鬼よ」

さつきまで倒れたままだったナツさんが、また立ち上がった。けど、どう見てもフラフラだ……くそ、どうにか……ならないのか!

「お前は……じっちゃんフェアリーテイルの、敵だ……!! そう、だよな……ゴッシュユール」

「……はいっ……! この人は、僕達の大切な仲間を……家族を、傷つけた……倒す、相手です……! それ以外の感情は……ありません!!」

ナツさんはきつと、自分の生みの親とも言える相手に戦う覚悟はあるのかを尋ねてきているんだと思った。そして、僕は断言した。ようやく本当の意味で、フェアリーテイル妖精の尻尾の皆を家族と、心から言えるようになった気がした。

「もう良い。消えよ」

指先の光が一段と増した……さつきまでの、僕に撃ち込んできたレベルの比じゃない……! このままじゃ、ナツさんが……何とか、結果を……!!

「止めて……!」

ルーシイさんの叫びが響いたその時。

船に、雷が落ちた。

辺りは、光に包まれる。

「こいつがジジイの敵か…ナツ」

「ラクサス…！」

「小僧…!？」

「…ふんっ!!」

光が収まると…ハデスとナツさんの間に、金髪の男が立っていた。

「ラクサス………」

「ラクサスが、来てくれた…！」

「この人がマスターの…」

「……………」

「此奴…マカロフの血族か」

ラクサスさんの体には、電気が迸っている。聞いた話だと、確か滅竜魔法の魔水晶ラクリマを体内に持っているとかつて…でもずっとそれを隠してきたって話だから、魔水晶ラクリマの魔力を使わずにS級魔導士になったということなんだろうか…？

「ふっ…情けねえな。揃いも揃ってボロ雑巾みてえな格好しやがって」

「…だなー」

…てつきり、ナツさんのことだから怒るかと思ったけど。ナツさんは笑いながらそう答えた。

「なぜ、お前がここに…」

「先代の墓参りだよ…これでも元妖精の尻尾だからな」

収穫祭の時のバトル・オブ・フェアリーテイルでナツさんとガジルさんが共闘して見事撃退されて（ナツさんとガジルさんは認めていないんだとか）、マスターに破門されてしまったって聞いたけど。破門されてるのに聖地に入ったらマスター怒りそうだなあ…

「俺はメイビスの墓参りに来たつもりだったんだがな…こいつは驚いた。二代目さんがおられるとは…折角だから墓を作って、拝んでやるとするか…!」

…怖っ。あのハデス相手にそこまで言い切るなんて…。S級魔導士だから強いのは知ってるけど、この殺気…こっちまで萎縮してしまっそうになった。

「ふっ、やれやれ…小僧にこんな思い上がった親族がいたとはな」

ラクサスさんの魔力とハデスの魔力がぶつかり合っている。僕たちは、ただ息を呑んで見守ることしか出来ないけど…ふと思った。

僕、こんな至近距離にいて大丈夫なんだろうか…？今僕は、ナツさんよりもハデスに近い場所…というか、さっきまでハデスに頭を踏まれているわけで…ラクサスさんのほぼ足下に転がっている状態だった。

「…おい」

「は、はい！」

「投げるぞ」

「えっ」

次の瞬間、いつの間にか僕は投げられていた。何をされたのか分からなかった…そのまま、僕はナツさんの後ろの方へと転がっていく。

「ゴーシュ、大丈夫!？」

「だ、大丈夫…加減してくれたみたい」

ただ投げられたただけだけど…多分、雷を纏ったスピードでやられただろうから、上手く加減か何かしてくれていなかったらきつと、投げられた方向の壁に激突しているだろう。

「っっていうか…」

「うん…動きが、見えない」

ナツさん達は見えているのだろうか…僕とウエンディが初見だから目が慣れていないだけ？ラクサスさんの動きが止まった時しか見えないし、それ以外の移動中とかはただ電気が走っているだけにしか見えない。

でも、ラクサスさんが現状押しているのは分かった。と言っても、ハデスがまだ様子見しているだけなのかもしれないけれど。

「ふむ、中々の身のこなしにその魔力…小僧め、ギルダーツ以外にもまだこんな駒を持つておったか」

「ハッ、前にジジイが言っただけな…強え奴と戦うとき、相手の強さは関係ない。立ち向かうことの方が大事だつてな…だよなあ、ナツ」

「ラクサス…」
「下らんな…弱者の言い訳に聞こえるぞ。準備運動はもう良いだろう？かかってこい、小童！」
「面白え…！」

ラクサスさんが口から雷を放ち、ハデスはそれを避けながら鎖をラクサスさんに目がけて放った…が、それをラクサスさんは容易く躲す。鎖はラクサスさんの背後にあった巨大な地球儀のようなオブジェへと接続され、ハデスはそのままラクサスさんに当たるように操るがそれすらも躲していく。

「ちよ…嫌な予感がするんですけど……！」
「ルーシイさん！」

鎖は外れているようだが、勢いのついた巨大な球体が僕らの方へと転がってくる。が、境界を出そうにも魔力がなく…球体の転がる軌道上にいたルーシイさんの腕を掴み引き寄せる。

「あ、ありがとう〜」
「どういたしましたして…っ！ラクサスさん！」
「え…!？」

ラクサスさんがハデスの作り出した魔法陣に囲まれていた。これは…今までで、一番強い攻撃…！
「散れえい!!」

「しまっ——」

「うっ…くっ!」

「うわあっ…!」

あまりの威力に僕らは吹っ飛ばされてしまう。な、なんて威力だ!余波で壁まで吹っ飛ばされるなんて…思いつきり左肩ぶつけてしまった。こんなのもとに食らったら…

「これを食らった者は四肢の力を失い、まともに動くことは不可能。たとえ防いだとしても、その魔力の消耗は致命的…ぐわっ!」

ラクサスさんが雷を纏いながら飛び出し、軌道を変えながらハデスの背後へ回り込み蹴りを入れた。あれを躲したのか…!

「すげえ…!」

「こんなに強かったのか…!」

「今の威力で片足分だ。まだもう片方もある、両手もある…頭もあれば全身もある!全部一撃に込めたら何倍どころじゃねえ…:試してみるか?」

「言うわ!若さ故の自信か!魔の領域において必要な物は、若さとは違うのだよ!若さとは!!」

「ぬかせ!!」

ラクサスさんが、一步も引かない…!それどころか、ハデスと互角に渡り合っているなんて…!こんな相手を、ナツさんとガジルさんはどうやって倒したんだろう…:…?

「…:ゴーシユ、それ!」

「え?…あ」

ルーシイさんに言われて気づいたけど、左腕、というか肩から大量に血が出ていた。さつき吹っ飛ばされたときか…?そして気づいたことで、痛みがやって来る…!あれ、なんか、どこかに強くぶつけたとかハデスの銃弾にやられたとか、そんな感じじゃ無い…?

「ウエンデイ、ちよつといい!」

「あ、はい!どうしたんですか…:って、ゴーシユ!」

「さつき気づいたの…:治せる?」

「任せて下さい!」

「いや、ウエンディ、魔力はいぎって時に…!」

「それが今だよ!!こんな大怪我じゃ、戦うのも難しいでしょ!」

「ウエンディの言う通りよ。今はラクサスが戦ってくれているから、少しでも治療してもらいなさい」

「は、はい……」

確かにこれだけ血が出ていたら貧血になるし…仕方ないか。でも、いつの間に…?やっぱり、さっきラクサスさんがハデスの技を食らった余波で吹っ飛ばされた時だろうか…これだけ血が出ていたらさすがに気づくだろうし…くそ、こんなよく分からない怪我でウエンディの魔力を消耗させてしまうのかと思うと…

「あれ…?」

「どうしたの?」

「この傷…何か変です」

「変って…」

「何か鋭利な刃物で切りつけられたような…」

やっぱり。痛み方?が、そんな感じの痛みだったからおかしいと思った…でも、余計に謎だ。そんな攻撃、食らってないし…打ち付けただけど、どっかに引っかけたのかもなし…何でだ?

「ウエンディ、よく分からないけど止血だけ頼むよ。後は服千切って包帯代わりにしておくから」

「わ、分かった!」

「鋭利な刃物なんて…ゴージュ、心当たりは?」

「全くないですね…いつの間に来たんだか」

「そう…誰かの魔法かしら」

時間差で効果を発揮する魔法か…あり得る、か?そんな魔法があっても不思議じゃ無いけど…今は考えていても仕方が無いな。

「…うん、終わったよ!」

「ありがとう、ウエンディ」

「そうだ、ラクサスは…!」

ラクサスさんの方を見ると、ハデスはまだ立っていたけれど、ラクサスさんが片膝をついていた。

「くっ…」

「おやおや、どうしたね。大口を叩いた割には膝をつくのが早すぎるではないか」

「ラクサス!!」

「あいつまさか…!」

「さっきの魔法、食らってたんだ…!」

四肢が動かなくなる、とか言っていたか…あれだけの威力の魔法を食らって、身体をまともに動かせなくなっていたのにあれだけの戦闘を…

「ク、ククク…世界つてのは、本当に広い。こんなバケもんみてえな奴がいるとは…俺も、まだまだ——」

「何言ってるんだーっ!!」

「しつかりしろよ、ラクサス!!」

「やってくれたのう、ラクサスとやら。だがそれもここまで…汝はもう消えよ!!」

「立て!ラクサス!!」

ラクサスさんに向かって、ハデスは巨大な魔力の塊を放った。だが、ラクサスさんは動く気配がない。

「俺はよ…もう、妖精フェアリーテイルの尻尾の人間じゃねえけどよ」

「避けて!!」

「それを食らったらダメです!!」

「ラクサスー!!」

「くそ、くそ…結界を、何とか…!!」

魔力が残っていないのも分かっている…けど!無理矢理にでも、魔

力を……！じゃないと、ラクサスさんが…!!

「ジジイをやられたら……怒っても良いんだよな…?」

「!」

「当たり前だ……っ!!!」

ラクサスさんから雷が溢れ出し、雷光が視界を埋め尽くす。

光が収まると同時……ラクサスさんが、倒れる瞬間を目にした。

「ラクサス……っ!!!」

ラクサスさんがいた所の床が抉られ、その中に力なくラクサスさんが落ちていく。が、その表情は。

「俺の……奢りだ………ナツ」

ラクサスさんがそう呟いたのが聞こえた。その時、ナツさんから魔力を感じた。…炎ではなく、雷を纏っていた。

「えっ…!?!」

「ナツさん…?」

「帯電…?」

「俺の…全魔力だ」

「何…!？」

「自分の魔力を、ナツに…?」

「つてことは…」

「雷、食べちゃったの…?前はそれで寝込んだって聞いたけど…」

くっ…結局、結界を出せなかった。自分の無力さが腹立たしい…!

「なんで…俺に…:…俺は、ラクサスより…:弱え」

「強えか弱えかじゃねえだろ…傷つけられたのは誰だ?ギルドの紋章を刻んだ奴がやらねえでどうする…!ギルドが受けた痛みはギルドが返せ…百倍でな!!」

「…っ!!ああ…:…百倍返しだ!!!」

「炎と雷の融合…:…!」

「雷炎竜…:…!」

ここに今、二つの滅竜魔法を併せ持った魔導士が生まれた。

第47話 VS. ハデス 決着

「うおおおおっ!!」
「ぐっ!」

ナツさんが雷と炎を纏った雷炎竜となり、ハデスへと攻撃を仕掛けた。そのスピードは桁違いに上がっており、ハデス是对応しきれず顔面にナツさんの拳が直撃、そのまま壁まで吹っ飛ばされた。ナツさんはそのまま、空中で体勢を整えて逆さの状態での炎を纏った蹴りを食らわせる…が、ハデスも今度は防御し、体を覆っていた炎を振り払う。その直後、ハデスを雷が襲った。

「ぐああっ!」

「炎の打撃の後に、雷の追加攻撃!」

「すごい!!」

「俺たちのギルドを傷つけやがって!!」

これまでの戦闘のおかげか、ハデスにちやんと攻撃が当たっている…このままいけば、倒せる!

「お前は…消えろ!!」

ナツさんの炎と雷を合わせた一撃が、ハデスを飲み込んだ。

「はあっ!!」

「!」

ハデスが煙の中から飛び出し、ナツさんの両手に鎖を繋ぎ、手錠のように動きを封じた。

「両手を封じたぞ!」

「うろうろ…んぬうっ!!」

「なっ…」

ナツさんはその鎖を、魔力を纏わずに引き千切る…そんな馬鹿な。あれ、魔法使わなくても千切れるのか…?今のナツさん、火事場の馬鹿力状態なのか…?

そしてナツさんは…大きく息を吸い込みながら、魔力をどんどん高めている。これは…やばそうだ…!

「雷炎竜の…咆哮—————っ!!!!!!」

「ぐあつ……!!?」

その咆哮は、破壊力が今までの火竜の咆哮の比ではなく……ナツさんの前が全て消し飛んでしまっていた。穴の大きさも、これまで戦っていたこの船の天井に達するくらいの大穴。最早、戦艦は原型を留めていなかった。

「ハア……ハア……!!」

皆が桁違いの威力に驚いている中、ナツさんは一点を見つめている。壁際、もうすぐ海へと落ちてしまうギリギリの所で……ハデスが、倒れていた。

「倒、した……?」

「はは………やった、ぞ」

「……ナツ!!」

さつきラクサスさんがいた所よりも深い穴がいつの間にか船内に出来ており、そこにナツさんが落ちそうになる。ルーシイさんがギリギリの所でナツさんの腕を掴んだ。

「助………さす、がに……もう、魔力ゼロ、だ……」

「これで終わったな!」

「はい!」

「ふう……」

つていうか……ハデス強すぎないか。年齢的に言えばマスターより何十歳も年上なのに、なんであんなに動けるんだ……魔力も異常だ。僕たちと、さらにはラクサスさんが戦って、ナツさんのあの咆哮でようやく――

「大した若造共だ」

「っ!!?」

今………確かに、ハデスの声が……?

「マカロフめ……全く恐ろしい餓鬼共を育てたものだ」

「そんな……………」

「私がここまでやられたのは、何十年ぶりかの」

「くっ……………!!」

ハデスが立ち上がり、いつの間にか、ローブのようなものを羽織っている。

「嘘だろ……………!?!」

「このまま片付けてやるのは容易いことだが、楽しませてもらった礼をせねばな」

「あの攻撃が効かなかっただと……………!?!」

ハデスの左手が眼帯へと伸び……………そして、そのままゆっくりと外した。

「悪魔の目……………開眼」

「……………!!」

眼帯に覆われていた右目が露になった瞬間……………また、魔力の質が変わった。

「汝らには特別に見せてしんぜよう……………魔導の深淵!……………ここからは汝らの想像を遙かに超える領域」

「馬鹿な……………!!」

「こんなの……有り得ない」

「こんな魔力は感じたことがない……」

「まだ増殖していく……!」

「こんなの……アリアかよ……!」

「終わりだ、妖精の尻尾!!」

「ぐっ……!!」

「ナツ!!」

「くそっ……動く力さえ、残って、ねえ……!!」

ナツさんも……いや、僕たち全員、魔力を使い果たしているのに……! それなのに、これまで以上の、これまで感じたことがない魔力だなんて……!!

「魔導の深淵……」

「何という魔力だ……!」

「あ、ああ……!」

「ウエンディ、気をしっかり持って!」

「ナツ、しっかりして!お願い!」

「くっ……かはっ!か、体が……!」

ヤバイ……ナツさんは雷を食べた副作用が出始めたのかもしれないし、ウエンディは恐怖のあまり放心状態。このままじゃ……全員、やられる。

「魔の道を進むとは、深き闇の底へと進むこと……その先に見つけたるは深淵に輝く、一なる魔法!!あと少し、あと少しで一なる魔法にたどり着く……だが、そのあと少しが深い……!その深さを埋める物こそ、大魔法世界!ゼレフの世界!今宵、ゼレフの覚醒と共に世界が変わる……そして、私はいよいよ手に入れるのだ……一なる魔法を!!」

「一なる魔法…!?!」

話している間も、ハデスの魔力がどんどん膨れ上がっている。

「汝らに行けぬ! 大魔法世界には!! 汝らは足りぬ! 深淵へと進む覚悟が!!」

「何だ、あの構えは!?!」

「ゼレフ書第四章十二節より…: 裏魔法・ネメシス!!」

ハデスの周りから、異形の怪物が現れた。その辺に散らばっていた瓦礫の欠片から魔力が溢れ出す瞬間を目にした。生物なのか…: 無機物から、作り出した…: ?

「瓦礫から化け物を作ってるのか!?!」

「う、ううっ…: ー!」

「…こんなの、どうしたら」

「深淵の魔力を持つてすれば、土塊から悪魔をも生成出来る…: 悪魔の踊り子にして、天の裁判官…: これぞ、裏魔法!!」

誰一人、声を発することも出来なかった。

こっちは魔力もない…: 敵は、圧倒的強大な魔力を持っている。

死が、形を持って迫ってくるような、そんな感覚。

こんなの…: ー…: どう、しようも…: ー

「——なんだ、こんな近くに仲間がいるじゃねえか」

「弱さを知れば、人は強くも優しくもなれる」

ナツさんの声。すごく小さい、眩きのような声。ハデスの傍では、未だに怪物が奇声を発しているのに…まるで、世界が切り離されたみたいに感じた。

「俺たちは自分の弱さを知ったんだ…だったら次はどうする…？強くなる!!立ち向かうんだ!!」

「！！！！」

「一人じゃ怖くてどうしようもないかもしれないけれど…俺たちはこんなに近くにいる…！すぐ近くに、仲間がいるんだ!!今は恐れることはねえ!!俺たちは、一人じゃねえんだ!!!」

ナツさんの言葉が、想いの強さが、僕らの心に勇気をくれる。震えて動かなくなっていた手が、足が…全身が、力を取り戻す。魔力でも、身体的な力でもない。心の、力を。

「見上げた虚栄心だ…だがそれもここまで!!」

ナツさんが立ち上がり、皆も、少しずつ立ち上がっていく。仲間がいれば、恐怖はない…たとえ、魔力が無くても…最後まで、諦めない。それが、妖精の尻尾…!!

「行くぞー！！！！」

全員で、ハデスへと立ち向かい、走り出す。

「残らぬ魔力で何が出来る!!踊れ、深淵の悪魔!!」

魔力の弾丸と、悪魔達による攻撃が僕らを襲う。ナツさんが、足下を壊され倒れそうになる。

ルーシイさんとウエンデイが、ナツさんの右手と左手を掴み。僕は、ナツさんの後ろから足を支える。

二人が投げ飛ばすのに合わせて、斜め上前方へと、思いっきり押し出した。

その先にいる、 그레이さんとエルザさんがナツさんの右足と左足を、片足ずつ勢いよく押し出した。

「全てを闇の底へ!!日が沈む時だ、妖精の尻尾!!!」

☆

時間を少々遡り、グリモアハート 悪魔の心臓戦艦内部。

「これって…」

「動力源って感じじゃないわね」

「グリモアハート…悪魔の心臓…まさかな」

エクシード隊は、動力源を破壊する為に内部へ潜入していた。配管をくぐり抜け、たどり着いたのは…巨大な装置。その見た目と動き方から、心臓を思わせる物体が、目の前にあった。

「おい!中で声がしたぞ!」

「ここは俺が食い止める!お前たちはそれを止めてくれ!」

「止めるって言っても…」

「色々いじってみるしかないわね」

リリーは敵の足止めへと向かい、ハッピーとシャルルは機械をいじることにした。

「何だ、この小さいのは?!」

「ふんっ!」

「ぐわっ!?!」

リリーは持っていたドアノブをブーメランのように投げて攻撃す

る。続けて戦闘モードになり敵を殴りつけた。

「な、なんなんだこいつは!？」

「借りるぞ」

「ああ、俺の剣……」

敵が持っていた剣を奪い取るリリー。一振りし、敵を薙ぎ倒している。

「む……?」

「で、でかつ!？」

「大きさが変わる剣：我が剣、バスターマームのようだな……：気に入った。こいつを俺の武器にする！ギヒツ!!」

本来剣士であるリリーは、剣を持つことで本領を發揮する。エドラスにおいては、エルザと同等の役職にあつたほどの実力の持ち主だ。そんなリリーの前では、雑兵など相手にならず……なのだが、今回に限っては物量差が明白だった。しかも、リリーには戦闘モードになっていられる時間の制限もある。

「ちよ、ちよつと!」

「オイラ痛いのは嫌だ」

リリーの一振りで、剣圧が本来の出入り口である扉を破壊。ハッピーとシャルルは心臓を停止させる為に動くことすらままならない。

「おい、お前たち！あまり長い時間は持たないぞ!」

「あんたのせいよ！もうちよつと大人しく戦つて!」

「大人しく……?」

その時、甲高い金切り声のような……超音波のような音が、場を支配した。

「な、何……!？」

「耳が……!」

「くっ……!」

「う、うるせえ……!」

「な、なんだこりや!」

「頭が割れる〜！」

エクシード隊と、敵も含めた全員の動きが止った。しばらくその状態が続いていたが、突然その音が止んだ。

「な、なんだったの、今の…」

「シャルル、あれ！」

「機械が壊れてる？でも、なんで…」

「今は良い！急いで破壊するんだ！」

音が止まり辺りを見渡してみると、部屋の中の機械がいくつも破壊されていることに気がつく三人。そのことについて考える余裕は無いとリリーが叫び、ハッピーとシャルルはさらに破壊する方法を探した――

☆

ハデスの攻撃によって、さっきまでいた場所の屋根も壁も崩壊した。煙が舞い上がり、視界が悪い…

「ぐあっ!？」

「ナツ!!…:あつ」

ナツさんがハデスへと一撃を入れているのが見えた。ハデスは勢いのまま殴り飛ばされていく。

「よっ…って、落ちる〜!!」

「ルーシイさん危ない！」

「~~~~っ!!」

…あの二人は何しているんだろう?っていうか、今ルーシイさんの悲鳴というか…大丈夫かな?出ちやいけない声のような…

「ば、馬鹿な…!裏魔法が効かぬのか!?あ、あり得ん!私の魔法は…!」

ま、まさか…!」

「うおおおおっ!!」

ナツさんが連続攻撃を加えていく。ハデスはされるがままになつており、あの異質な魔力の悪魔達はボロボロと崩れ去っていった。

「土塊の悪魔達が…」

「消えていく…!」

なんでなのがよく分からないけど、ハデスが弱っているのは間違いない……!

「あれ……?」

「ん?どうしたのウエンディ?」

「え……!?」

「天狼樹が……!」

「元通りになってる!」

ウエンディの声で気がついた。天狼樹が、いつの間にか元に戻っている……いつから? 屋根とかが壊れていたから分かったけど……あれ、今さっき元に戻ったんだとしたら……!

「これって……!」

「紋章が……」

「光ってる……!」

「魔力が、元に……!」

「戻っていく!!」

「……!うおおおっ!!勝つのは、俺たちだ!!ぐあっ!!」

ハデス……まだ、力が残っているのか!?

「魔導の深淵にたどり着くまでは、悪魔は眠らない!!」

「はああっ!!」

ハデスが攻撃を仕掛けてくる前に、雷が目の前を横切った。

「ラクサス!!」

「行け!!妖精の尻尾!!」
フェアリーテイル

僕らは走り出す。ナツさんは、炎と雷をその身に纏い、魔力を高めている。僕もこの間に準備を!

「恐らくこれが最後の攻撃！」

「戻った魔力全部ぶち込むぞ!!」

「返り討ちにしてくれるわ!!」

まずい、あの構えは…また、あの悪魔達を呼び出すつもりか！

「契約まだだけど…開け、磨羯宮の扉！カプリコーン!!」

「仰せのままに、ルーシイ様」

「お願い!!」

「汝は!?!」

「ゾルディオではございませんぞ！私はルーシイ様の星霊、カプリコーン！」

タキシードを着た二足歩行の山羊——カプリコーンがハデスへと攻撃していく。その隙に、ウエンディがハデスの真後ろをとった。僕も…あと、もう少し！

「見様見真似！天竜の、翼撃!!」

「ぬわあっ！」

ウエンディの攻撃によって、ハデスはグレイさんの方へと吹き飛ばされる。よし、準備完了！

「うおおおおっ…!!氷魔剣…アイスブリンガー!!」

「ぐううっ!!」

氷で出来た、二本の魔剣によってハデスは切り裂かれ、そのまま空中へと投げ出される。その隙を、待っていた!

「降り注げ……! 水晶結界・光!!」

「ぐはっ!」

これが、水晶結界クリスタルのもう一つの使い方。魔法陣のように並べることによって、魔力収束砲ジュピターには遠く及ばないが魔力光線を発射できる。皆が攻撃している間に空に配置することが出来たので、すぐに発射できた。

「換装! 天輪・五芒星の剣!!」

そして未だ空中を舞っているハデスに、さらにエルザさんが追い打ちをかける。

「ぐうっ……!?!」

ハデスは、距離をとろうとしていたが……ナツさんが、すでに迫っている!

「うおおおおっ!!!」

「グリモア・ロウ!!」

「滅竜奥義・改!!」

「間に合わ——!!」

「紅蓮、爆雷刃!!!!!!」

ナツさんの、僕たち全員の、渾身の一撃。ハデスは……起き上がる様子はない。

「じっちゃん……奴らに見せてやったぞ……全身全霊をかけた、ギルドの力を……うおおおおおおおおおおおおお……これが、俺たちのギルドだ……!!!!!!」

天狼島を、僕たちを……眩しい朝日が、照らしていた。

第48話 世界を超えた出会い

「終わったな」

「ああ」

「私たち、勝ったんですね！」

「ギリギリだけどね」

「はい、マフラー」

「ありがとな」

エルザさんがいつもの鎧に換装し、ルーシイさんは戦闘中に飛ばされてしまったマフラーをナツさんへと手渡す。

やつと、やつと終わったんだ…それにしても、本当に化け物みたいだったな…よく勝てたと思う。年齢と魔力は関係ないらしいけど、さすがに衰えてくれて本気で思った。

「うわ〜ん!!」

「皆〜!」

「お前ら…」

「あれって…」

どこからともなくハッピーとシャルルがこちらに走ってきた。その後ろには…リリーと、そのすぐ後ろに悪魔の心臓グリモアハートの兵士が大勢いた。リリーが小さい状態で走ってきていることは、魔力が残っていないんだろう。

あれ、これヤバいんじゃないや…

「まずいぞ…」

「くそつ、さすがにもう魔力がゼロだ…」

「あわわ……………」

「すまん、俺も魔力が…」

「皆怒ってるよ〜…」

「そりやそうでしょうけど…」

万事休すって奴か…こ、こうなったら素手でどうにかするしか…!
「そこまでじゃ」

僕らが今向いている兵士達が向かってきている方と反対側、つまり

天狼島の海岸の方から聞き慣れた老人の声が聞こえてきた。僕らは期待を込めて後ろを振り返る。

「じっちゃん!!」

「皆!」

「マスターも、ガジルさんも!」

「良く無事で...!」

「そうか、天狼樹が元に戻って島の加護が...」

ベースキャンプにいた皆が、ここに勢揃いしていた。全員傷だらけだし、中には包帯だらけの人もいたけれど、不思議ともう大丈夫だと思えた。何となくだけど、島の加護を感じているのかもしれない。

「あれは、マカロフか!?!」

「つていうか、あそこ見ろ!」

「マスター・ハデスが...!」

「倒れてる!?!」

ここにようやく、マスター・ハデスが倒されたということを経験した兵士達は認識したようで、全員が狼狽え始めた。

「今すぐ、この島から出て行け!!」

「わ、分かりました~!」

「し、信号弾だ!」

「お、お邪魔しました~!」

凄んだマスターの圧に耐えられず、蜘蛛の子を散らすかのように兵士達はどこかへ去って行った。それを見て、僕らは勝利を確信し喜び合った。

「ふう.....」

「あれ...」

「どうした、グレイ」

「いや.....ジュビアは?」

「そういえば...いませんね」

「キャンプには戻っていなかったな」

そういえば、この時ってジュビアさんは何をしていたんだろうか...
思い出せない。

「グレイさん、ジュビアさんって今何をしているんですか？」

「煉獄の七眷属に、ウルティアって奴がいてな。そいつとその仲間の一人がゼレフをどっかに連れ出そうとしてやがったから、ジュビアに追わせただ。無事だといいいんだが…」

連れ出す…でも、この船はハッピー達が中を探索していたはずだし、会っていたら一緒に来るだろうし…もしかして、天狼島のどこかにいるのかな。

「早く探しに行った方がいいかもしれませんね…船にいないなら、まだ島にいるはずです」

「…だな。急がねえと」

「とりあえず、ベースキャンプまで戻りませんか？」

「少し休まないと、体が持たないわ」

「それもそうだな」

「帰ろ帰ろ！」

「え、ちよつと！あたしがナツ運ぶの!？」

…なんか、いつの間にか馬鹿騒ぎしている内にナツさんが気絶していた。まあルーシイさんに任せておけば大丈夫だろう。無理そうならハッピーが運ぶだろうし。

「あ、そういえばゴーシユ」

「ん？」

「あんたに伝言頼まれてたのよ」

「は？誰に？」

「誰…って言われると分からないわ。声が聞こえただけだから。ベースキャンプの近くの森で待つ…ですって」

「なんか、ちよつと怖いね」

伝言…誰だろう？しかも僕にとってことは、原作では起こらなかったことだと思っし…

「ねえ、それってなんで僕宛だって分かったの？…っていうかそれ、どこで聞いたの？」

「船の中を探索していた時。青緑色の髪をした子に伝えてって言ったから間違いないわ」

あの森…多分、フリードさんやレヴィさんと一緒に戦ったあの森だよな。ってことは、あの鉄球の…？」

「…分かった、とりあえず一度キャンプに戻ってから行ってみるよ」「私たちも行く?」

「…多分、敵じゃないと思うわ」

「…なんか、珍しいね。シャルルがそんなこと言うなんて」

「勘…なのかしら。予知かも知れないけど、そんな気がするのよ」

そういえば、シャルルって予知の力を認識してから少しだけコントロール出来るようになったって言ってたっけ。

「じゃあ、それを信じてみるよ。いざって時は何とかして知らせるなり逃げるなりするから」

「分かった…気をつけてね?」

「そっちなこそ、無理しちゃ駄目だよ」

まあ、そんなこと言っても結局治療で頑張っちゃうんだろうな…シャルルにストッパーになってもらわないと。ジユビアさんも探しながら行くとしよう。

☆

というわけで、皆が自由行動を始めた所で抜け出して、例の森へとやって来た。と言ってもそこまで距離離れてないけど。

「…さて、と。どうしたらいいんだろう」

相手の声も姿も知らないんじゃない、どんな相手かも分からない…待て。よく考えたら敵の可能性があるんじゃないか…?この島に人はいないし、僕らとグリモアの人達しか来ていないはずだし…どうしよう。一旦、戻った方が…

「———ありがとう、ここまで来てくれて」「っ—」

どこからか声が聞こえた。敵の可能性も考え、いつでも魔法を使うるように身構える。

そのすぐ後、一本の木がガサガサと音を立て始めた。どうやらあの木に潜んでいるらしい。僕は少しずつ、その木に近づぐことにした。

一歩ずつ慎重に近づく。

「…誰か、いるのか？」

もし攻撃が来ても対応出来るくらいの距離まで近づき、僕はそう呼びかけた。すると、木から三つの影が降りてくる…そこで、僕は驚いた。明らかに、人の姿をしていなかったからだ。さつき話しかけてきたことから、魔物と呼んだ方がまだしっくりくるかも知れない。

向かって右に居るのは、白っぽい犬のような魔物。耳が垂れていて、首輪のような物をつけている。

その隣、真ん中に居るのは紺色の魔物。尻尾が大きく、手足の爪がとても鋭利になっており、寧ろ猛そうな印象を受けた。額に赤い宝石のような物がついている。

そして最後、左に居るのは…なんだ？四足歩行なのは分かるんだけど、羽のような物が頭から伸びている。

そんな風に僕が観察していると、真ん中の紺色の魔物が一步前へと出てきた。

「いきなり呼び出してすまなかった。俺たちは——」

と、声をかけてきた。が、僕は最後まで聞くことが出来なかった。なぜなら…

「そりゃーっ！」

「うわっ!？」

犬の魔物が僕の方目がけて頭突きしてきたからだ。

「あ、ちよっと！」

「な、なんだお前…！やっぱ敵か!？」

「えく？遊んでくれるんじゃないのく？」

「…は？」

「隙ありっ！」

「ぐっ!？」

その犬のような魔物は、話している最中に見事僕の腹へと頭突きをヒットさせ、僕はそのまま地面に寝そべるような形になった。

「あくあ…」

「イエーイ、私の勝ち！」

「な、なんなんだ…」

「こら、プロットモン！初対面の相手にそんなことしたら駄目だよ！」
「おっと、捕まらないもんね〜！」

そう言っつて、犬の魔物と紺色の魔物が追いかけてつこを始めてしまった…なんなんだ、この魔物達は。天狼島に住み着いているモンスターにしては随分と言葉を流暢に話すし、随分と子供っぽいし…

「…大丈夫？」

「え？あ、うん…」

寝そべったまま考えていると、最後の羽の魔物が話しかけてきた。あつちは忙しそうだし、この子に色々聞いてみるか？

「ねえ、僕を呼んだのは君たち？」

「あ、ちゃんと伝言伝えてくれたんだね。怪しいから伝えてもらえないかもって心配だったんだ〜」

「えっと…要件を聞く前に、君たちのことを聞いてもいい？」

「いいよ、ちよつと待ってね。おーい、二人とも〜」

「ほら、そろそろ本題に入らないと！行くよ！」

「もう、分かったから怒らないでよ！ねえっつてば〜！」

紺色の魔物がプンプンしながらこつちに来ていて、それを犬のような魔物が追いかける。なんて言うか、すごく仲良しなのは分かった。とりあえず話を聞く前に体を起こしてそのままあぐらをかく。それを見て、彼ら（？）も座って話をすることにしたようだ。

「あー、ゴホン！それじゃ、要件を話させてもらおうよ」

「その前に、僕らが何者なのか聞きたいっつてさ〜」

「あ、そうか…自己紹介まだだったね。俺はドルモン」

「私、プロットモン！」

「僕がパタモン、いつもさつきみたいな感じだからよろしく〜」

紺色の魔物がドルモン、犬のような魔物がプロットモン、羽のよう

な物が生えた魔物がパタモン…なんか、聞き覚えがあるような気がする。この世界の魔物図鑑か何かで見たのか…いや、そんなの見たことあったっけ。

「…僕はゴーシューガードナー。魔導士ギルド・妖精の尻尾の魔導士だ」

「フェアリー…?」

「ギルドの名前だよ。フェアリーテイル…一応、この島は僕らのギルドの聖地ってことになってるはずなんだけど」

「え…ここ、誰かの縄張りだったってこと!？」

「まあ、そういうことでいいや」

「勝手に住み着いちゃったね」

「誰もいないから大丈夫だと思ったのに…」

ドルモンが落ち込んでしまった…魔物がそんなこと気にするものなのかな。

「ねえ、君たちってここに元からいたんじゃないの？」

「えっと、実は僕たちこことは別の世界から来たんだ」

「……………え？」

「あれ?それって言っていないんだっけ?」

「駄目だっけ?」

「パタモン…」

パタモンの言葉を聞いて思考が追いつかなくなった。つまり、この子達は元からこの世界にいた魔物ってわけでは無く…?

「もう、しょうが無いか…俺たちは、デジタルモンスター。デジタルワールドっていう別の世界から来たんだ」

「デジタル…ワールド」

その単語を聞いて、ようやく思い出した…デジタルモンスター、通称デジモン。前世にいた頃、アニメやゲームなどがあつた作品。僕もやったことがあるし…所謂育成ゲームの部類に含まれる。確か、アニメとかは全部見ていたような…いや、最新作は見てなかったっけ?まあもう使うことがないと思っていた記憶だけ…

「で、要件なんだけど…」

「友達探してるから手伝って！」

「それだけじゃないけどね〜」

「友達…?」

「ロツプモン…いや、今のあいつの名前はウエンディモンか。とにかく、そのウエンディモンを見つけるのを手伝ってほしいんだ」

「…詳しく、聞いてもいい?」から順を追って話してほしいんだけど」
勝手に話が進みすぎてよく分からない…とりあえず、話を聞かないと何とも言えない。

「じゃあ、まずは俺たちが住んでた所の話から…」

「…!プロットモン、それ…」

「ん?…何コレ!?!」

ドルモンが説明をしようとした時、パタモンがプロットモンの異変に気づく。本人は気づいていなかったようだけど、プロットモンの体のあちこちから何かが出ている…というか、粒子のようになっていくようにも見える。これ、よく分からないけど不味いんじゃない?…?

「これは…!」

「どうしよ!?!どうすればいい!?!」

「お、落ち着いて…!?!ドルモン、パタモンも…!」

「え…!?!」

「ホントだ…どうしよつか?」

続けてドルモンとパタモンも粒子化(?)が始まった。というか、パタモンがすごいおんきというか…その余裕はどこから来るのか。

「これ、大丈夫?」

「大丈夫じゃない…!そうだ、二人とも!早くデジヴァイスへ!」

「デジヴァイスって何!?!」

「ほら、こっち来る時もらったやつだよ」

「デジヴァイス…」

プロットモンはよく分かっているようだったが、パタモンが補足した。デジヴァイスって…何だっけ?聞き覚えがあるから何か重要な…アイテムか何かだったかな?

「急ごう!君も着いてきて!」

「え？あ、うん！」

そんな思考に入り込んでいる僕をよそに、三人はドルモンを先頭に
して何処かへ走り出した。僕は慌ててその後を追いかける。

「ねえ、そのデジヴァイスってどこにあるの？」

「そんなに遠くないよ」

「私、その場所分らないんだけど！」

「多分、僕らが最初に来た場所に落としたんだよ」

やっぱりデジヴァイスはアイテムらしい。でも、あまり重要な物で
はないのかな…重要だったら落としたの気づかないとか有り得ない
だろうしなあ…

「つていうか、パタモン遅くない…？」

「いや…速く飛ぶのは苦手だね」

だとしても遅くないか…？これだったら多分歩いた方が速い気が
する。ドルモンとプロットモンが大分先に行っていて、その後ろに
僕。最後尾をパタモンが頑張って飛んでいる。

「パタモン、僕が連れて行こうか？」

「じゃあ、お願い」

「ちよつと、早くしないと…きやつ！」

「プロットモン！大丈夫？」

「いったあ…！」

飛んできたパタモンをキャッチし、そのまま抱えて走る。前にいた
プロットモンがこつちを気にしたせいか、木の根っこに躓いて転んで
しまった。そこで、僕はあることに気がつく。

「プロットモン、足が…」

「光が…!？」

どうやらこの体から粒子が出る現象は、怪我した部分から起こるら
しい。今擦りむいたプロットモンの前足から粒子が強く出始めた。

「プロットモン、僕が抱えるから！」

「抱えるって…ちよつ!？」

右腕にパタモン、左腕にプロットモンを抱えて、前を進んでいるド
ルモンの後を追う。プロットモンは抱えられる直前に抵抗しようと

していたが、抱えられてからは急に大人しくなった。変に暴れられても大変なので、今は姿がもう見えなくなりそうなくらい離れたドルモンを追うことに集中する……っていうか速いな。一応気にしてくれてはいるのか、こっちを見て待っていてくれる。

ある程度進むとまたドルモンが進み始める。右に左にと、かなりクネクネと曲がりくねった道を進む……これ、僕は迷わずに帰れるのか？

「ね、ねえ……光が、強くなってる気がするんだけど……」

「……なってるね」

「二人とも、まだ……着かないのか……!」

「もうすぐだよ」

この現象、時間が経つにつれて勢いが増していくのか……特にプロットモンが一番不味い気がする。少し、体が透けてきているように見えるんだけど……

「おーい!こっち!」

「ドルモン……!着いたのか?」

「うん。あれだよ!」

ドルモンがようやくやく止まった。二人とも意外と重いから少し疲れた……ドルモンが見ている方向を見ると、何かが地面の上に落ちているのが見える。多分、あれがデジヴァイスだろう。

「君が拾って!」

「え?」

「デジヴァイスは人間じゃないと扱えないんだ!ほら、急いで!」

「わ、分かった!」

二人を地面にゆっくり下ろした後、僕は急いでデジヴァイスを拾いに行く。近くで見るとデジヴァイスはレンズが二つあって、それを紐のようなもので結んだ……まあ、要するにゴーグルみたいな形をしている。デジヴァイスってこんな形なのか……?

「これが……デジヴァイス?」

「それを使って、俺たちをその中に入れて!」

「中に入れるって……」

眼鏡の部分の縁にボタンがいくつあつて、それで操作するらし

い。レンズを内側から見ると、項目がスクロールしているのが見える。その中に、「デジモン」という項目があったので、それを選んで：あ、こっちのボタンか。で：？「リアライズ」と、「編成」、「セッティング」：なんだこれ？

「リアライズ」を選んで！」

ドルモンの声に従い、項目を選択：すると、「デジモンがいません。パートナーを登録しますか？」と出た。これで、「はい」を選択すれば…！

『ドルモン、パタモン、プロットモン、を確認。パートナーに認証：完了。計三体を収納します』

「…え？」

デジヴァイスから音声の流れ、次の瞬間ドルモン達が全員、デジヴァイスへと吸い込まれていった：デジモンってそんな感じだったっけ？収納とかそんなこと出来たんだ。好きなときに呼び出せるんだとすれば、結構便利だと思うけど：アニメとか、そんなことしてたかな…？

「これで、いいのかな…？」

『ふう〜！助かったよ！』

「…しゃべれるんだ」

『これで、大丈夫なのよね？ね?!』

『うん、もう安心〜』

デジヴァイスから三人の声が聞こえてくる。普通に話も出来るらしい。これ、ゴーグルとしてかけた状態だったら大音量でビツクリするだろうな：かけてなくて良かった。

「で、どうしてこれで安心なの？」

『デジヴァイスは、俺たちデジモンを収納したりリアライズして外に出したり出来るんだ。中に入っている間は回復出来るんだよ』

「じゃあ、さっきの粒子化は？」

『あれは、俺たちが消える前の兆候さ。あのままだったら消滅してたかも』

『危なかったんじゃない!!』

「なんでそんな状態に…？あんなに元気だったのに」

『僕たちはデジタルモンスター…デジタルな空間にいるはずの生き物だからね。何日もここにいたせいで、体が耐えられなくなったんだよ』

…やっぱり危ない状態だったんだ。そしてデジモンは、現実空間に長時間出しておくことは出来ないということか。さつきプロットモンが透けて見えていたのが、限界ギリギリだというサインかな…あのまま放置したら消滅…つまり、死んでいたのか。

「えつと…これからどうするんだ？」

『あ、説明の途中だったね』

『友達捜しを手伝ってもらえば大丈夫よ！』

「…つまり？」

『まあ要するに、俺たちの手助けをしてほしいんだ…俺たちデジモンは、人間とパートナーになることで何倍にも、何十倍にも強くなれるから…きつと君の助けにもなれるよ！』

「……………うーん」

『…駄目、かな？』

多分だけど、この三人は僕と一緒に行きたいってことかな…だとしたら、妖精の尻尾の皆にも説明しなきゃいけない。だけど説明するとしたら、異世界のこととかもちゃんと話さないといけない。そして、僕の前世のこととかも…ちゃんと説明するなら、話さなきゃいけないだろう。

メリットは、単純に戦力が増えること。デメリットは…前世のことが皆にバレてしまう可能性があること…か。どうしよう…

『ドルモン…』

『…分かってる。ねえ、ゴーシユ。これは俺たちの問題だ…僕らも誰かの助けを必要としている。でも、その誰かは君じゃなくてもいいんだ』

「……………」

『だから、断ってくれても構わない。何とかして、誰か他の協力者を探すよ』

『断るなら、断って。デジヴァイスがあれば私たちは自分で回復出来るだろうし、迷惑をかけるつもりはないわ』

『君の自由にしていいんだよ。僕らも自分で何とかするから〜』

三人は真剣な様子でそう言ってくれた。でも異世界から来るほどの事情を、他の誰かに言ってもそうそう受け入れてもらえないだろう。僕だって、前世の記憶があるから普通に接することが出来ているだけだ。何も知らない他の人からすれば混乱するし、悪い奴らの見つかればこの子達は珍獣として扱われるだろう。そうなったら…僕のことを気遣ってくれているこの子達を、僕は見殺しにしたようなものだ。

「…というか…そうか。僕は何を迷っているんだ。これは…依頼なんだ。」

「…分かった。僕で良ければ、手伝わせてもらうよ」

『ホント!?!』

「うん…僕ら魔導士は、依頼をこなして報酬をもらって生活するんだ。だから、三人からの依頼もすっかりこなしてみせるさ」

『でも、それだと報酬を渡さないとね〜』

『報酬なんて、どうすれば…?』

「報酬は、僕の手伝いをすることで良いんじゃないかな。結構僕のギルドって戦ったりすることが多いから、その手助けをしてくれたらありがたい…というか、結構ハードな報酬かもしれない」

ギルドにとって戦力が増えることは大きな利点だ。しかも、これから先強敵が現れ続ける…最終回は見る事が出来なかったけど、それまで戦っていた相手…ラスボスまでは、忘れたことはない。最終目標がああなんだ…戦力を増やしておけば、それだけ被害も少なくなるはず。ギルドの為なら、僕は…前世のことがバレることくらい、何の問題も無い!

『なんか、報酬になってない気がするけど』

「そんなことないって」

『絶対、損するタイプでしょ?』

「…自覚はしてるかな」

『…じゃあ、細かいことは後で説明するね』

「…後で？」

なんで後なんだろう…と思った瞬間、目の前に三人が突然現れる。あれ、これデジャヴな気が――

「うわっ！」

「ありがとーっ!!」

「まあ、こうなるからね」

「ハハハ…これからよろしく、ゴージュ！」

「…うん、よろしく」

僕はしばらく新しく仲間になった三人の下にいた。特に、プロットモンが大騒ぎで全然どいてくれる気配がなく…それが終わったのは、ウエンデイが僕を探しに来て見つけてくれた時だった。

第49話　デジモンの謎

「ゴーシュ〜！どこにいるの〜！」

「あ、ウエンデイ…とりあえず、皆はそのままデジヴァイスに入って大人しくしてて」

『え〜』

『ゴーシュ、ここで隠しても結局出ちやうと思う…』

『プロットモンがね〜』

ウエンデイの声が聞こえてきて、後で紹介すればいいかなと思っていたんだけど…まだ会って一時間も経っていないが、プロットモンが好奇心旺盛なのはよく分かった。最初とかいきなり僕に頭突きしてきたし…ウエンデイとか、他の皆に会った時にテンションが頂点に達するのが想像出来る。

変に隠そうとして、結局後から勝手に出てきちゃって混乱が起こるよりも、最初から出ていてもらった方が混乱しにくい…か？いや、そんなこともないような…

「っていうか、もう出てきても大丈夫なの？」

「うん、ほら〜！」

「…聞く必要、なかったか」

既にプロットモンが出てきました。続くように、ドルモンとパタモンも近くに現れる。本当に便利だな、デジヴァイスって…回復も出来るみたいだし。難点があるとすればデジモン達が長時間出ていられないってことかな？

「あ、いた〜！」

「随分賑やかね」

「ウエンデイ、シャルル」

まあ、そりゃ賑やかにもなるよね…プロットモンとドルモンがまた追いかけてっこしてるし、パタモンはなぜか僕の頭の上に乗っかってるし…バランス感覚が養われている気がする。

「この子、誰〜？」

「人間の方がウエンデイで、白い猫がシャルル。僕のギルドの仲間だ

よ…で、紺色のがドルモンで、白い犬っぽいのがプロットモン。僕の頭の上にいるのがパタモンね」

パタモンの問いへの返答も兼ねて、互いの名前を紹介する。デジモン達は何者なのかということを知りたいだろうけど、説明すると長くなってしまふ。そんな長つたらしい説明、今の僕はしたくなかった…ハデスとの戦いの後っていうのが、一番億劫に思わせているのかもしれない。

「ゴージュ、この子達って…」

「敵じゃないよ。というか、新しい仲間って言え方がいいのかな」

「俺たち、ゴージュのパートナーになったんだ」

「よろしくね、ウエンディ！シャルル！」

「よろしく〜」

「パートナー？」

「とりあえず説明は後でするよ…それより、何かあったの？」

「あ、いや…何かあったってわけじゃないんだけど」

わざわざ探しに来るってことは向こうで進展があったのかと思っただけ…ただ気になっただけらしい。まあ呼び出してきた相手が謎だったから、気になるのは仕方がない。

「他の皆にも紹介したいから、一旦戻りたいんだけど…道分かる？」

「うん、大丈夫だよ」

「迷子だったのね」

「まあ…ほら、三人は戻って」

「二はーい」

良かった、ちゃんと言うことを聞いてくれたようだ。特にプロットモンがまた好奇心のままに行動してしまっただろうでしょうか…？ウエンディとシャルルの様子がなんかおかしい。

「ね、ねえ…今の」

「消えた…わよね？」

「ああ、そういうことか…あの子達はデジタルモンスターっていう生物で、このゴージュ、デジヴァイスの中に入り込むことが出来るんだ。多分、機械なら何でも入り込めると思う」

この世界の機械つてすごく原始的というか…まだエドラスの方がそういう面では発達していたかもしれない。パソコンとかないし、古文書アーカイブのような魔法で代用していることが多い。デジモンはこの世界では生きにくいだろうな…

「デジタルモンスター…？」

「そんな生物がいるなんて…」

「ちなみに会話も出来るよ」

『聞こえてるしね〜』

「ちよ、ちよつと怖いね…」

「幽霊とは違うし…そこまで怖がらなくても」

戦っている時はあんなに勇ましいのに、普段の臆病さは変わっていないんだな…その内この環境にも慣れるだろう。そう考え、僕らはナツさん達のいるベースキャンプへと向かった。

☆

「二「な、何だとー！ーっ!!!」」

「今の声…ナツさん達？」

「何かあったのかな？」

「急ぎましょう」

ベースキャンプに大分近づいてきたのか、何人かの声がハモって聞こえてきた。何かあったのかと思い、少し急ぎ足で向かう。見えてきたのは、マスターに迫っているナツさん、グレイさん、ガジルさん、エルフマンさんの姿とそれを見守る皆の姿だった。

「皆さん、何かあったんですか？」

「あ、ゴーシユとウエンデイ」

「戻ったのね！S級魔導士昇格試験は、中止にするってマスターがね」
ああ、それであるの四人が駄々をこねているのか。僕はもう一次試験で落ちたから関係ないけど…二次試験に参加していた人からすればああなるのも無理はない。

「俺は諦めねえぞ！絶対S級になるんだ！グレイもエルフマンもレビイも諦めるんだな？だったら俺がS級になる！S級になるん

だーっ！」

「落ち着こうよナツ…」

他の皆は諦めたけど…ナツさんは言っても聞かないよな。

「しようがないのう…特別じゃ！今から最終試験を始めよう！儂に勝てたらナツをS級にしてやる」

「本当かじつちゃん!!よーっし、燃えてきたーっ!!」

マスターが手で挑発するようにして、ナツさんは真っ正面から飛びかかる。それに対しマスターは、右腕を巨大化させてナツさんを殴り、ナツさんは近くにあつた木と巨大な拳にサンドイッチにされた…うん、分かった。ナツさんはまだダメージ残ってるっぽいし。

「ま、参りました…」

「ホント、もういつも通りな感じだなあ…あれ、ウエンデイ?」

さっきまで隣にいたウエンデイがいつの間にかいなくなっている。辺りを見渡すと、二人は一本の木に隠れるようにして何かを見ている。僕も近づき、その方向を確認する。そこには、ラクサスさんをポカポカしているリサーナさんと、そのすぐ傍に雷神衆。やっぱりラクサスさんが戻ってきたことで、雷神衆の皆さんはすごく喜んでるようだ。特に、フリードさんが凄まじい。崇拜しているのかと思うほどだ。

「二人とも、どうしたの?」

「ラクサスって人に挨拶しようと思ってね。でも、ウエンデイがビビってるのよ」

「だ、だってえ…」

「…なんで涙目なの」

確かに、ハデスと戦っている時はちよつと怖いと思っただけど…今は、頼れるお兄さんって感じがする。そういえば、ラクサスさんって何歳なんだ?

「色々噂を聞いているだろうが、根は悪い奴じゃない」

「エルザさん!」

「ただ少し、不器用なだけなんだ」

不器用…確か、あのバトル・オブ・フェアリーテイルの一件。あれ

も、元々ギルドがなめられているのが我慢ならなくなって起こしたことでだつて聞いた。その言葉は、ピッタリかもしれない。

「はい！私、ちよつと挨拶に行つてきます！」

「あ、僕も行く」

「あんたは、先にマスターの所にそいつらのこと説明しなさい」

「あ、そつか…」

忘れてたわけじゃないけど、やっぱりマスターには一番に説明するべきか。ギルドの仲間が増えるわけだし。

「何の話だ？」

「エルザさんも、一緒に来て下さい。ちよつと紹介したい奴らがいるんで」

「ふむ、分かった」

「…」

「どうした？」

「いや、聞かないのかなつて」

「お前のことだ。変な嘘は言うまい」

エルザさんつて本当に懐が深いよなあ…。マスターとかに向いているんじゃないかって、最近思うようになった。なんでこんな人がナツさん達と一緒に町を破壊してしまうのか、ちよつと疑問に感じる。

とにかくエルザさんと一緒に、マスター達の元へと向かった。

「マスター、ちよつと話が」

「ん？どうしたんじや、いきなり」

「さつき、ちよつとある奴らと出会つたんですけど…そいつらを紹介しようと思ひまして」

「ほう…この天狼島でか？」

「はい」

「ふむ…そういえば、その頭の上の物はどうしたんじや？」

「これは、そいつらからの贈り物…って言えば良いんでしょうか。とにかく、もらつたんです」

「ちよつと見せてくれ」

「分かりました」

マスターにデジヴァイスを手渡す。マスターは、デジヴァイスをじっくりと観察し、突いたり軽く叩いたりした後、僕にデジヴァイスを返してくれた。何だったんだろう？

「よし、分かった。其奴ら呼び出してくれ」

「え……？」

「もう近くにいるのか？」

「いや、その……マスター、彼らのこと知って……？」

「うむ。と言っても、ギルドの文献でじゃがな。とにかく、先に紹介してくれ。話はそれからじゃ……一応、場所を移そう」

「分かりました……」

なぜマスターがデジモンのことを知っているのか。ギルドの文献に彼らのことが載っているのか。彼らのことを何処まで知っているのか……疑問はあつたけど、それらを押し込めて先に紹介することにした。

☆

「ゴーグルから出てきた……だと!？」

「やっと出れたく……ねえ、遊んできてもいい?」

「あ、駄目だつて!プロットモン!」

「よいしょつと〜」

「パタモン……はい、プロットモンも大人しくしてて」

「あ……ちよ、離してよ……!」

走り回るプロットモンを捕まえ、抱っこする形になる。プロットモンはなんでか分からないけど抱っこすると大人しくなるようだ。今はそっちの方がいいので、しばらくこのままでいよう。パタモンはすでに頭の上を陣取ってるし、ドルモンも僕の横に戻ってくる。エルザさんは驚き、マスターはまだ何かを考えているようだ。

「やはりそうか……デジモン、と言ったかな?」

「マスター……彼らのこと、何処まで知っているんですか?」

「儂も詳しくは知らん。ただ、初代が遺した文献で見たことがある。彼らデジモンは共に戦を乗り越えた戦友だとな」

初代：メイビスⅡヴァーミリオンが、デジモンと出会っていた…？
そんな昔からデジモンはこの世界に存在していたのか…？

「確か、デジモンはこことは別の世界から来たと聞いていたんじやが…」

「それは、僕も彼らから聞きました。どうやって来たのかは、まだ聞いてませんが」

「…お伽話のようですね。こことは別の世界とは」
「僕もその部分は信じておらんかったよ」

まあ、そうだろう。僕も転生してこの世界が本物だとようやく実感したし。漫画の世界があったら、なんて妄想は幾度もしたけど、実際に体験してみたらもちろん驚く。そしてそれらのことを経験しているなら、他の漫画の世界もあるかもしれないと考えるべきだったか…いや、そんな余裕はないな、うん。場所を移したのは、他の皆知つたときに混乱するかもしれないからか。

「ねえ、ドルモン達はどうやってこっちの世界に来たの？」

「あるデジモンとそのパートナーに送ってもらったんだ」

「デジヴァイスもその人からもらったの！」

「あるデジモンって？」

「マステイモンと、御神楽ミレイって人」

マステイモン、御神楽ミレイ…どっちも聞いたことがある、気がする。ゲームの方の登場人物だったかな…？

「そのデジモンと人間は、世界を越える力がある？」

「そう。マステイモンの能力さ」

「マスター、その初代が会ったっていうデジモンのことは知りませんか？」

「さすがに覚えとらんのか…ギルドになら、その書物があつたはずじやが」

これは帰ったら探す必要があるな…今のところデジモンに関する情報が少ない。確か、デジモンは進化という現象を起こす。姿形が全く別物と言っても良いほど変化し、力なんかも比べものにならないほど強くなるはずだ。彼らと共に戦うのであれば、せめて進化の条件く

らいは分かっておきたい。僕が覚えていたら話が早くて良かったんだけど。

あとは…彼らが目的を達成した時、どうやってデジタルワールドに帰るのか。これも調べておきたい。初代がいた頃は一緒に戦っていたのに、それ以降デジモンのことを知る人が今のギルドにいないのなら、きつとそのデジモン達は元の世界に帰ったということ。そうじゃなければ…そういうことだろう。とにかく、その辺も確認したい。

「ゴーシユ？」

「あ…ごめん、大丈夫。それでマスター…」

「うむ。ギルドの仲間にする件は問題なからう。ちゃんと世話するんじゃないぞ」

「良かったく…」

「これで安心だね」

「ふう…」

「何？どういうこと？」

「ギルドとかでも出てきて良いってことだよ」

「じゃあ、もつと遊べるってこと？やったく!!」

「あまりやんちゃしすぎると、そのエルザさんに怒られるからね？」

「覚悟しておけ…ふう」

「えく!!」

本当に良かった。もしかしたらデジモンは異世界の生物だから駄目とか、あり得るかなと思っていたけど…よく考えたら、このギルドがそんな差別的なことをするはずが無かった。このギルドで、本当に良かった。

「それじゃ、僕たちは早速皆に紹介してきます。行くよ、皆」

「はくい」

「それじゃ、競走ね！よいい、どんっ！」

「あ、待ってよ！」

「…あの二人、場所覚えてるのかな」

「多分、覚えてないと思うよ」

「やっぱり…おーい！」

「ゴーシユ！」

「はい？」

「紹介は良いが、異世界云々の話は今はせんで良い。儂がギルドに戻った時に、初代の文献のことと一緒に話そう」

「分かりました！」

僕は、走って行くドルモンとプロットモンを追いかけることになった…意外とパタモン、ずっと乗っけていると重いな。もしかして定位置になっっているのだろうか。ちよつと走りづらい。

☆

ベースキャンプに戻る途中で、何か…音が聞こえた。何の音なのかは分からないけど、地響きのような音。気のせいかと一瞬思ったけど、三人も聞こえたようで、前を走っている二人が立ち止まった。

「何、今の音？」

「さあ…」

「プロットモン、ドルモン！」

「ゴーシユ、遅ーいっ！」

「遅いじゃなくって…ベースキャンプの方向、分かっているの？」

「え…？あ、うん！だ、大丈夫、だよ？」

「ごめん、方向分からずに飛び出しちゃったよ」

やっぱりこの二人、分かっただけじゃなかったのか。まあ、元気が有り余っているようで何よりだけど。

「三人とも、皆に紹介するときは僕が紹介するから、デジタルワールドのことだけまだ話さないで」

「何で？」

「ほら、ミレイさんも言ってたでしょ。余計に混乱しちゃうから、あまり話さないようにっ」

「あ……って、ゴーシユに最初に話したのは、パタモンじゃなかった!？」

「そういえば…アハハ」

「と…にか…く！後でマスターがギルドに戻ってから話してくれるか

ら、今だけ内緒にしてて！」

もし話しそうになったら、上手く誤魔化そう。いつまでも隠すわけじゃないんだから、それで大丈夫だろう。

「あれ…今更だけど、皆体は大丈夫なの？」

「うん、ちよつとは休めたから」

「多分、戦うのは無理だけどね」

…じゃあ、まだ大丈夫とは言えないんじゃないのかな。後はギルドに帰るだけ…じゃ、ないんだった。

まずい…まずい、まずい、まずい。もしも今、アイツがこの島に来てしまったら…！

「三人とも、ごめん！予定変更、しばらくデジヴァイスの中に!!」

「え？ど、どうしたの？」

「説明は後！皆に紹介するのも後にする！今は急いで戻るよ！」

「よく分からないけど…」

「ただ事じゃないのは、分かった！」

「早く入るよ」

完璧に忘れていた…もしアイツがやって来るタイミングも違って
いるんだったら、皆が危ない。そして今やって来ていたら、そしてそ
のまま戦いになってしまったら…ドルモン達は消滅してしまうのは
間違いなかった。

三人がデジヴァイスに入った直後。

辺り全体に、凄まじい轟音が。

アイツの、叫び声が聞こえてきた。

『な、何!?!』

「三人は、そのまま…僕が良いって言うまで、出たら駄目だよ」

三人を今、出してはならない。

仲間を、失うわけにはいかない。

第50話 手をつなごう

「こ、この音…!」

さっきの地鳴りのような音も、アイツの叫び声か…!なんで忘れていたんだ。完全に、マスター・ハデスとの戦闘後で安心してしまっていた。

とにかく、もうベースキャンプは目の前だ。早く、皆と合流するところが先だ。

木々の間をすり抜けるように走る。少しすると、皆が見えてきた。それに違う方向からナツさんにルーシイさん、ハッピー、カナさん、ギルダーツさんもむかって来ているのが見える。

「皆!」

「ゴーシュ!」

「さっきの…!」

「分からないのよ…地鳴りかと思っただけだ」

「おーい!!」

「お前ら!」

僕のすぐ後に、ナツさん達も到着する。ギルダーツさんが途中で、左肩を押さえるようにして立ち止まる。その顔に…汗をかいているのが分かった。

「ちよつと、大丈夫?」

「古傷が疼いてきやがった…間違いねえ。奴だ…奴が来るぞ」

「おい、上を見ろ!何か来るぞ!」

「…!!」

「ナツ、どうしたのさ…って、うわ!?!」

リリーの声に反応して、僕らは全員空を見上げる。ナツさんは何かに気づき、ハッピーもそのすぐ後にそれに気がついた。

天狼島、遙か上空。雲の隙間から、徐々にこちらに降下してきている巨大な影。

「何だ、あれ…!？」

今ここにいる誰もが思っただろう。

「でけえぞ…」

巨大な翼。凶悪な爪。

「…これは」

その姿はまるで。

「ドラゴン!？」

あれが、そうなのか。

「なんなの…一体」

僕らが…戦うことになるだろう、真っ黒な竜——アクノロギア。

「マジかよ…」

ガジルさんは、驚愕に目を見開き。

「本物のドラゴン…」

ウエンディは、得体の知れない物を見るかのような、恐怖の混じった表情をしている。

「やっぱり……ドラゴンはまだ、生きていたんだ……」

ナツさんは、ようやくドラゴンに会うことが出来たのに……冷や汗をかいている。

「黙示録にある黒き竜……アクノロギアだということなのか!？」

マスターとエルザさん、そして僕とはすれ違いになったのか、ラクサスさんも一緒に戻ってきた。マスターの声に反応したのは、ギルダーツさんだった。

「ああ……奴だ」

「いたんだ、本物のドラゴン……」

「お前、イグニールが何処にいるか知っているか!?あと、グランディーネとメタリカーナも——」

「よせ、ナツ!!」

アクノロギアに話しかけるナツさんを、ギルダーツさんは正面に立ち言葉を遮った。いつものあの余裕は、今はどこにも感じられない。「奴を挑発するな……お前には話したはずだ。なぜ俺がこの腕、いや……この体になったのか!」

ナツさんはギルダーツさんの左の義手を見て、黙り込んでしまった。アクノロギアは少しずつこちらに近づき、体勢を整え始めた。

「降りてくるぞ!」

「あれは、ナツ達の大好きな竜じゃない!もつと邪悪な……ぐっ!」

アクノロギアがすぐ近くに着地したことにより、その巨体から起こった風圧に僕らは襲われ、よろめきそうになるのを堪える。

「ああ、そうさ……こいつは人類の敵だ!!」

「じゃあ、こいつと戦うのか!」

「いや、違う!!そうじゃねえんだよ、ナツ……勝つか負けるかじゃねえ

……こいつからどうやって逃げるか、いや、俺たちの内、誰が生き残れるかって話なんだよ！

「こんな奴に……俺たちの誰かがやられるって言うのかよ!!」

アクノロギアが、咆哮する。ただの声だと分かっている、はずなのに。体は、恐怖を感じてしまっていた。

「まずい……皆、逃げろーっ!!」

「…!!」

ギルダーツさんの叫びで、ようやく体が動かせるようになったが。

「っ
!!!!」

アクノロギアから、先程の風圧と比べものにならない風圧。それが、咆哮と共に僕らを襲う。僕は咄嗟に、すぐ近くにいたウエンデイとシャルルを庇うように動く。しかしそれも虚しく……後方へと、まとめて吹き飛ばされた。

「お、おい……何だこりや。森が……消し飛んでやがんじゃねえか……」

「嘘だろ……」

「なんて破壊力なの……」

「何なのよこれ……吠えただけでこんな……何なのよこいつ……」

「奴は……チツ。高見の見物かよ」

どうやら、皆無事のようにけど……周囲の木が無くなっている。何もない、殺風景な場所。ここが本当にさっきまで僕らのベースキャンプがあった場所なのか。別の場所に吹き飛ばされたと言われた方が納得出来そうだった。

「皆!!まだ生きてるな!?!ビビってる暇はねえぞ!!すぐにこの島から離

れるんだ!!」

「ウ、ウエンデイ…立てそう?」

「ゴーシュ…大丈夫、だよ…!」

庇うことが出来たのか分からないけど、どうやらウエンデイ達は大丈夫そうだ。僕は…うん、問題ない。ちゃんと動ける。

『ゴーシュ!僕らも——』

「駄目だ!!」

『なんで!?このままじゃ…』

「今の君たちは消耗してるんだ…そんな状態で、今出てきたら…消滅してしまう。だから、出てきちゃ駄目だ…!」

見ていられなくなったのか、ドルモンやプロットモンが話しかけてきた。パタモンは状況を理解しているのか、何も言わずに静観している。そうだ、それでいい…このまま、出てこないでくれ。

空中にいたアクノロギアが、また咆哮を上げながらこちらへと降下してくる。急いで森の中を駆け抜け、船を目指す。

「来るぞーっ!!」

「走れーっ!!皆で帰るんだ…妖精の尻尾へ!!」
フェアリーテイル

「…ウエンデイ!あんた竜と話せるんじゃない!?何とかならないの!?!」

「私が話せるんじゃないよ!竜は皆高い知性を持つてる!」

「あれに…知性なんてなさそうだけど——!!」

アクノロギアは何度か咆哮を上げながら飛び上がる。低い位置を滑空して僕らの向かう先へと回り込んで行く手を阻んだ。先頭を走っているのは…

「——っ!!!」

「ぐあっ!」

「ぐっ!」

「なんてことだ…」

「フリード、ビッグスロー!!」

「先回りだと…!?!」

二人はアクノロギアの攻撃を何とか回避したようだけど…当然だ

が、アイツの飛行速度の方が速い。このままじゃ、全員。

「どうして……！どうしてこんなこと!!答えて!!」

それでも、アクノロギアは何も話さない。何も言わず、ただ攻撃を繰り返す。

「…防御結界・壁!!」

結界を使い、防ごうとするが。

「ぐあっ!?!」

「ゴーシュっ…きゃっ!!」

「くっ…しっかりしろ!」

ただの腕の一振りで容易く破壊され、僕は殴り飛ばされる。ウエンデイが受け止めようとするが一緒に飛ばされることになり、ラクサスさんが受け止めてくれた。

「ぐっ!」

「エルフマン!!」

「よせ、エバっ!」

「エバ…すまねえ…っ!」

尻尾の一振りに弾き飛ばされたエルフマンさんをエバーグリーンさんが空中で受け止める。しかし、容赦ない腕の一振りが二人を襲った。

「やだ…やだよ、こんなの…!」

「うおおおおっ!!」

ナツさんも、果敢に攻め込むが…アクノロギアは、何の反応も示さない。そしてそのまま、ナツさんも殴り飛ばし、ナツさんはゴロゴロと地面を転がっていく。

「お前っ…!…!…!じっちゃん!!」

ようやく転がる勢いが止まり、ナツさんはアクノロギアに何か言おうとしたようだが、魔力を高めているマスターがそれを制止する。マスターは着ていたアロハシャツを脱ぎ捨て、徐々に巨大化していく。

「船まで走れ!!」

アクノロギアと同等…とまではいかないが、かなりの大きさまで巨人化したマスターは、真正面から抑え込む。しかし、マスターは手負い…アクノロギアに押され始めている。

「無茶だ…敵うわけねえ…!」

「マスター、止めて下さい!! 貴方に何かあつたら、ギルドは…!!」

「走れー！ー！ー！ー！つ!!!」

マスターはそれでも、意地で抑え続ける。

「……………」

「かくなる上は、俺たちも…!」

「妖精の尻尾を舐めるんじゃねえぞ!」

「当たって砕けてやるわ!」

「おうよ!!」

皆が、まだ諦めないで、その闘志を燃やし次々と立ち上がる。しかし、それは他ならぬマスターによって制止された。

「最期ぐらいマスターの言うことが聞けんのか、クソガキがー！ー！つ!!!」

「最期って……」

「つ!!……………くっ!」

「俺は滅竜魔導士だ!! そいつが敵っていうなら、俺が!!」

「走るぞ、ナツ!!」

「っラクサス!? お前っ……!!」

ラクサスさんがナツさんを掴み、撤退する。何かラクサスさんの

目の辺りで一瞬、光を反射したように見えた。

「マスター……………どうか、ご無事で」

皆、次々と撤退を始める。全員が、涙を浮かべながら。ただ、がむしやらに……………走り続けた。

☆

遠くに見える…まだ、マスターは戦っている。必死に走ったつもりだったけど、そこまで距離は離れていない…きつと、全員が心から望んでいないからだ。自分たちの「親」を、誰が心から見殺しにしたいと思うもんか。無力な自分が、更に憎く思える。

「……………くっそーっ!!」

「なっ…おい、ナツ!!」

その時だった。ナツさんがラクサスさんの手から逃れ、マスターの元へと駆け出した。しかし、そのすぐ後ろにいた人物に止められる。

「待て、ナツ!!」

「ギルダーツ…………」

「マスターの遺志を無駄にするんじゃないやねえ…」

「ジジイの覚悟が分からねえわけじゃねえだろ…ギルドに、帰るんだ」

ギルダーツさんやラクサスさんの言っていることは正しい…正しい、はずなんだ。けれど、この胸の痛みにも、僕は…覚えがある。

「ギルダーツ、ラクサス、皆…これじゃ、駄目だろ」

「ナツ…………」

「皆で、ギルドに帰るんだ…じつちやんだだけ、残して行けるわけねえだろ!!」

「…………」

「おい、待てよナツ!」

「待て、お前たち!!」

「…お前ら!!これは勝ち目のねえ戦争だ!死に行く覚悟があるか!!」

ナツさんが結局飛び出して行って、その後にグレイさんやエルザさんが続こうとする。その時、ギルダーツさんがそう叫び、皆のことを

見る。その時、僕はあの時のことを思い出していた………ケットシエルター化け猫の宿の皆との別れの時を。

マスターを…家族を失うのなんて、もう嫌だ。ギルドの誰かを、失う辛さを…このギルドの皆には、味わってほしくないんだ…！

「…ウエンデイ」

「ゴーシュ…？」

「もう、あの悲しみを…味わいたく、ないよね」

「………っ、うん…！もう、あんなの…嫌だよ」

ウエンデイの答えがそういう意味だということを理解して、笑った。恐怖はまだある。けれど…これ以上、誰も悲しませたりさせちゃいけないという思いが、それを上回った。

「行きましよう!!」

「ゴーシュ…」

「皆で、帰りましよう。あんな奴に、家族の時間を邪魔されてたまるもんか………!!」

「…ああ!!」

「うん!!」

「ギヒッ…!!」

「漢ーっ!!!」

結局、こうなるんだ。このギルドは、仲間の…家族の為なら何だろうと敵に回す。それがどれだけ絶望的に力の差が開いた相手だろうと、関係ない。それが…妖精フェアリーテイルの尻尾なんだ…!!

☆

巨人化したマスターを押し倒し、今にもトドメを刺そうとするアクノロギアが見える。そこに一番最初にたどり着いたナツさんは、アクノロギアの攻撃を掻い潜り、アクノロギアの体にしがみつく。アクノロギアはそれを鬱陶しく思ったのか、ナツさんを振り払おうと腕を動かし、マスターはその腕に弾き飛ばされる。マスターも限界だったのか、巨人化が解けてしまった。

マスターを守る為、ラクサスさんとエルザさんが庇うように立ちは

だかる。

「エルザ：お前まで」

「俺は反対したんだぜ。けどよ…老いぼれを残して逃げられるような奴らかよ、あんたのギルドは」

「かかれーっ!!」

全員が、アクノロギアに魔法を放つ。

「……馬鹿たれが……!」

「うおおおおっ!! テメエら!! ありったけの力を、これ以上はねえってやつをぶつ放せ!! 俺の電撃と合わせてアイツにお見舞いしてやれ!!
妖精の尻尾の底力ってやつを!!」

「ラクサス……!」

「おい、ナツ!! 上手く避けるよ!!」

「ちよ、ちよ、ちよと待て!」

「ラクサス、今だ!」

「うおいつ!」

まだアクノロギアに張り付いているナツさんだけど…多分大丈夫。ハッピーが向かってるみたいだし。二人もそれを分かって言っているんだろう…と、思う。とにかく、全力で攻撃だ!

「レイジングボルトローっ!!」

「天輪・繚乱の剣!!」

「スーパーフリーズアロー!!」

「水流昇霞!!」

「立体文字・ファイア!!」

「サジタリウス、今よ!!」

「イビルエクスプロージョン!!」

「久々の、雷神衆揃い踏み!!」

「派手にかますぜ!!」

「てやあっ!!」

「水晶結界・光!!」

「メタルキャノン!!」

「エアショット!!」

「パピーハウリング!!」

「…っておい!？」

全員が全力攻撃を放つ際、一瞬だけドルモン達が出てきて必殺技を放ち、すぐにデジヴァイスへ戻っていった。

「出てきちゃ駄目って…」

『俺たちだって、もう仲間なんですよ?』

『見てるだけなんて、出来ないもん!』

『一瞬だけだから許して〜』

「…分かったよ。ありがとう」

多分誰も見てない…と思うけど。ドルモン達も仲間として戦おうとしてくれたんだ、あまり怒らないでおこう。

全員の魔法が合わさって、アクノロギアに直撃する。凄まじい一撃ではあるけれど…アクノロギアは、ビクともしていない。少し痛がるような反応をしたように思えるけど…ダメージは全然負っていないかった。

「…化け物め!俺たちのありったけを受けてまだ笑ってやがる。最後はお前らで決めろ!!行けーっ、ナツーっ!!!」

ガジルさんとリリーが、ウエンデイとシャルルが、ナツさんとハッピーがアクノロギアに接近する。

「ラクサスの野郎、後でぶっ飛ばす…」

「はいはい、後でね」

すぐ目の前まで接近した三人は、攻撃態勢に入った。きっと、エドラスの時にやった合わせ技。

「鉄竜の咆哮!!」

「天竜の咆哮!!」

「火竜の…咆哮!!!」

三人の咆哮が合わさり、アクノロギアはその威力に耐えきれず後ろの岩壁に叩きつけられた。そのまま勢いは止まらず、岩壁を破壊し海へと落ちた。

「やったか…?」

「違う!!」

「ギルダーツ!!」

「奴は、俺と戦った時の力を出してねえ…遊んでやがるんだ」
「なっ…!?!」

アクノロギアはギルダーツさんの言葉を肯定するかのようには、海から勢いよく飛び出て空へと上がっていく。

「上昇したぞー!」

「くそ、アイツピンピンしてやがる!!」

「あの野郎…」

「精一杯だったのに…滅竜魔導士ドラゴンスレイヤー三人分の力を、ギルドの皆の力を結集したのに…!!」

「チツクシヨウ!!俺は何の為に、滅竜魔法を覚えたんだよ…!!」

「アイツ、何をやる気だ…?」

「帰ってきてくれるのかな…」

「油断しちや駄目よ…!」

アクノロギアは空中で体勢を整え、大きく息を吸い込んでいる。口の奥に、魔力が集まっているのが分かる。それはつまり、さつきナツさん達が放った技と同じもの。

「ブレスだーっ!!」

「島ごと消すつもりじゃないでしょうね!?!」

「マジ…!？」

「そんな…!」

「もう…:…どうしようもないのかな…:…? 私達、皆ここで終わりになっちゃうの…?」

…させない。絶対諦めない。

「防御魔法を使える者は、全力展開!!」

「:…僕が、全力で結界を張ります」

「文字の魔法にも、防御魔法は沢山ある! ゴーシユのサポートするよ!!」

「皆、ゴーシユ達に魔力を集めて!!」

「手をつなごう」

ナツさんが、泣きじゃくるルーシイさんに手を伸ばす。

「俺たちは、こんな所で終わらねえ!」

「:…:…うんっ! 絶対、諦めない!!」

「皆の力を一つにするんだ!! ギルドの絆を見せてやろうじゃねえか!!」

全員が手をつなぎ、輪になる。皆の魔力が、思いが、僕へと流れ込

んでいる。必ず、戻ってみせる。ギルドの家族達が待つ、あの場所へ。

「そうじゃ……皆で帰ろう」

——
フェアリーテイル
妖精の尻尾へ!!

X784年。12月16日。天狼島。

こうして、一つの時代が終わり——

——
新たな時代が、幕を開ける。

第51話 X791年、妖精の尻尾

フィオーレ王国にある港町・ハルジオン。どこまでも続く水平線を一望できる防波堤のある場所に、少年がいた。彼の左肩には、所属しているギルドの紋章がある。その赤い紋章は、彼が尊敬しているある人物と同じ場所にあった。今こうして彼が水平線を見つめ続けているのは彼を、いや彼らを思い浮かべているからだだろう。そのどこか寂しそうな少年へと、二人の男女が声をかけた。

「いつまで海を見てるんだい」

「仕事も終わったし、ギルドに戻ろう」

その二人の男女——アルザックⅡコネルとビスカⅡコネルは、その少年——ロメオⅡ

コンボルトと共に魔導士としての依頼を受けていた。その仕事が終わり、今まさにギルドへの帰路へ就こうとしていた所で、ロメオが一人ふらりとここまで歩いて行ったので追いかけてきたのである。と言つても、急ぎでもなくこの場所にいるだろうということも予想も出来ていたので、その足取りはゆったりしていた。

二人はロメオを連れて何度もハルジオン港から船に乗ったこともあるが、ロメオは必ず一度はこの場所から水平線を見つめている。これは、そう…もう七年も前からだ。最早癖とも言えるその姿を何度も見ているからこそ予想できていたのである。

「……………」

「やれやれ」

「早く帰らないと、父さんが心配するよ」

「マカオからあんたのこと頼まれてるのよ、ロメオ」

「うん……………」

「ロメオ、気持ちは分かるけどさ…」

「ビスカ」

ビスカが続けて話そうとしたのを、アルザックが止める。

何を言つても、気休めにもなりはしない。

心の傷は、簡単には消えない。

七年経ったとしても、それは。

ただ残酷に、彼の：いや、自分たちの心を蝕み続けているのだ。

☆

X791年。天狼島消失から、7年の時が経っていた。かつてフィオーレ王国最強と謳われていたギルド、妖精の尻尾フェアリーテイルは現在、最弱のギルドと呼ばれるまでに衰退していた。ギルドの場所も移り、マグノリアの町の中心部から離れた丘の中腹にひっそりと、現在の妖精の尻尾フェアリーテイルは佇んでいる。

天狼島の一件でS級魔導士昇格試験に行った受験者とそのパートナーである魔導士、当時のS級魔導士、そして三代目マスター・マカロフまでもが行方不明となったことが切欠となり、当時増加し続けていた魔導士が次々と辞めていった。現在のメンバーはほとんどが古参からのメンバー達である。

「ロメオはまだ帰って来ねえのか！アルとビスカの奴、ロメオをほつたらかしてイチヤイチヤしてるんじゃないやあるめえな！」

「うるせえな、いい年なんだから少しは落ち着けよマカオ」

「俺のことはマスターって呼べって言ってんだろワカバ！」

「こんな貫禄のねえマスター見たことねえよ！何が四代目だか！」

「お前もマスター補佐としての自覚をだな！」

彼らもその一人。現妖精の尻尾フェアリーテイルの四代目マスター——マカオ・コンボルト。昔から変わらず子供を心配する彼を窘めるマスター補佐——ワカバ・ミネ。七年前に主力だったメンバーが行方不明のため、現ギルド最古参の彼らが、ギルドのマスターとその補佐を担うことになったのである。

「それにしても…また人減ったかな」

「しょうがねえよマックス。俺ら弱小ギルドじゃ、良い仕事回しても

「ええええし」

「ウォーレン、見ろよこの依頼書の数！」

「七年も仕事行かねえお前には関係ねえだろ、ナブ！」

「あう……」

「見てほしい！このビジターⅡエコーの新しい舞が完成したのである
！名付けて、弱小の舞！」

「気分悪いからこいつ追い出せよ……！」

七年前は今と違って、人数も依頼書も増えていたものだ、昔を懐かしむマックスやウォーレン達。彼らも古くからいるギルドメンバーだ。ふと、彼らの目には大食い大会でも開催しているのかと思えるほどの皿が並べられているテーブルが映る。

「キナナちゃん、おかわり持ってきて！」

「はい」

「ねえドロイ、また大地への圧力が増えた？」

「太ったって言いてえのか、このヤロー！」

「ラキに当たるなつての！つていうか自覚ねえのかよ。リーダーを見ろよ、あんなにスリムになっちゃまって」

「ウイ、俺元々こつちが本当の体だよ」

「俺は鍛えてんだよ！分からねえのかこの筋肉！」

リーダーはマカロフの巨人化の魔法によつて体を肥大化させていただけであり、七年経った今では魔法が解け、以来細身の体のままである。

「キナナだつてすつかりお淑やかになつてよ……それに比べておめえは」

「うるせえ！食うことで魔力を高めてだな！」

「止めなよ二人とも」

「はあ……」

「つたく、レヴィが今のお前見たら、なんて言うかね」

「……レヴィは帰って来ねえ！」

思わず叫んでしまったその言葉によつて、雰囲気がより静まりかえってしまう。

「あ……」

ドロイも悪いと思ったのか、俯いて黙ってしまった。そんな時、ギルドの入り口の扉が開く音がした。

「おやおや……相変わらず、昼間つからしんみりしてるねえ。これだから弱小ギルドは嫌だよな」

金棒を背負った男性と、彼に付き従うように後ろに待機している四人。一見不良のような五人組が入ってきた。彼らを見て、マカオとワカバがすかさず前に出た。今の妖精の尻尾フェアリーテイルと繋がりのある魔導士ギルドのメンバーである。

「ティーボ……ここにはもう来んなって言うてんだろーが！」

「おいおい、俺たちにそんな口利いていいのかよ？マグノリアを代表する魔導士ギルド・黄昏の鬼トワイライトオーガによお……？かつてはファイオーレ最強だったか知らねえけどよ、お前らの時代はもう終わったんだよ。立っているのがやっとのこのボロ酒場と、新しい時代の魔導士ギルド・黄昏の鬼トワイライトオーガじゃ、どっちがマグノリアの発展と向上に貢献してるか、一目瞭然だろ」

ティーボが話している途中から、ギルド内にいた妖精の尻尾フェアリーテイルのメンバー全員がマカオの元へと集まる。彼の発言を聞き、マックスが声を荒げた。

「でけえだけのギルドが偉そうに！」

「そうだ、俺たちには魂があるんだよ！」

「魂じゃ飯は食えねえんだよ」

「……何しに来たんだ、ティーボ」

このままでは喧嘩になるだろうと考えたマカオは、本題に入ろうとする。

「今月分の金だよ」

「うっ……」

「まだ払ってなかったのか、マカオ！」

「マスターって呼べって言うてんだろー！」

「借金の返済が遅れてるぜ？あんたら」

「今月は良い仕事が回ってこなかったんだよ！来月まとめて払ってや

るから、待ってやがれってんだ！」

「おやおや？潰れる寸前だったこのボロ酒場を救ってやったのはどこの誰だったかなあ？」

「俺たちがテメエらの借金肩代わりしてやったんだろが！」

ティーボの取り巻き達の言うとおり、この酒場を運営していく上で金が足りなくなった。そこへ、当時から発展し始めていたこのトワイライトオーガ黄昏の鬼が肩代わりしてくれるという話が出たのである。しかし、これは一時の救いであったが、罨でもあった。

「あんな馬鹿げた利子だつて知ってたら、お前らなんか頼らなかつたのに……！」

「ああ？なんか言つたかあ!？」

「止めろ、ジエツト！」

「けどよ……」

「来月まで待つてくれや！ちゃんと払うからよ……！」

マカオのその言葉に、ティーボは口角をさらにつり上げる。そしてそのままマカオへと近づいていき、彼を右足で力強く蹴飛ばした。

「マカオ！」

「マスター……」

マカオは酒場のカウンターへと叩きつけられる。その姿を見て、五人組はその顔に嫌らしい笑みを浮かべていた。

「すつげえ飛んだ！」

「吹っ飛び方は一流だよなあ？」

「ハハハハハっ！」

「テメエら！」

「よくも……！」

「やんのかコラ？」

ギルドの仲間を傷つけられて、他のメンバーが黙っているはずがない。世界であろうと敵に回すという意志は、今このギルドの中にいるメンバーにも宿っていた。戦おうとするメンバー達を、マカオが止めた。

「手え出すな——っ!!!」

「聞こえたる…堪えろ」

その言葉を聞き、五人組の内の一人が手始めにとばかりに近くにあった椅子を壊そうして、思いつき蹴りつけた。

「ぎゃーっ!?!」

「どうした!?!」

「め、メチャクチャ固え…!」

「う、腕がーっ!?!」

他の奴らも他の家具を手当たり次第破壊しようとするが、あまりの固さに殴った腕や、中には武器が壊れているメンバーもいた。それを見ていたのか、外から一人の少年が入ってきた。

肩までかかる金髪を後ろで束ねているその少年は、以前ガルナ島でゴーシユが連れてきた人物。シルフラピリンス風精の迷宮というトレジャーハンターギルドにいた彼は、この七年でその肉体と魔法を鍛えることに集中し、今では立派な魔導士となっていた。

「今戻ったツス…!?!あれ、黄昏トワイライトオーガの鬼の皆さんじゃないツスか。どうかしたツスか?」

「なんだ、このガキ!!」

「イ、・イーロン…!」

「あ、もしかして椅子とかにぶつかりました?これ全部特注品なんで、相当堅いツスよ?ほら!」

イーロンは椅子を持ち上げ、机に向かって叩きつける。すると見た目が木製なのにどこからそんな音がしたのか、金属同士がぶつかり合ったような音が辺りに響き渡った。あまりにも不快なその音に、全員が耳を塞ぐ。

「…ってなわけで、ぶつからないようお気を付けて下さいツス」

「舐めた真似しやがって…!」

「ツチ、おい!忘れんなよ…来月だ」

ティーボがそう言い残りギルドから外へと出て行く。それに続くように他の四人も椅子をあらぬ方向へ投げたりした後退散していった。

「またいつでもお越し下さいツス」

まるで営業スマイルのような笑みを浮かべながら、イーロンは彼らを見送った。彼の元にジェットやマックス達が近づく。

「へへ、やったなイーロン！」

「ぎつとこんなもんッスよ！」

ジェットが肩を組みながらそう言い、イーロンはイタズラが成功したかのような達成感を覚えていた。

ご覧の通り、今ここにある椅子や机は金属製だ。リーダーダスのペイントマジックによって木製に見せかけており、黄昏の鬼の連中は木製の物だからと簡単に引つかかったのだ。

「デメエら…あんま舐めた真似すんじゃねえぞ。変な言いがかりつけられちやたまんねえ」

「でも、たまにはいいだろ？な！」

「そうッス！いつもはいいようにやられてばかりなんだから、これくらいやつとかないと！」

あの連中にどれだけ家具やら壁やらを破壊されたか。それだけでなく、ギルドのメンバーへの暴行等もあるのだ。仲間を傷つけられて黙っていられるわけがない。以前のイーロンは臆病で、相手に言い返すことすら困難に感じるほどであったが、今の彼はそんな過去など嘘であったかのように快活な少年へと成長していた。

「とりあえず、そこら辺片付けるか」

「マスター、大丈夫？」

「あ、ああ」

イーロンがタイミング良く入ってきたおかげで少しだけ雰囲気は明るくなったが、それでも少しずつ暗くなっていく。あんな連中、もし天狼島組がいたら簡単にやつつけていただろう。問題児ばかりだが、中心人物と言っても過言ではなかった。彼らが起こす喧騒の日々を、今は誰もが恋しく思っていた。

「あ…」

「これって…」

先程の投げられた椅子を戻そうと近づくと、すぐ傍の本棚から一冊の本が落ちてきた。表紙には、スケッチブックと書かれている。かな

り前の物なのか、中から何枚か絵が飛び出た。それを見て、全員が顔を歪める。

「あれからもう、七年か…」

「そんなに経つのか…」

「…懐かしいな」

「あれ以来、何もかも変わっちゃった…」

皆が話している中、イーロンは絵を拾い始める。当時の彼は、この絵の人物達とほとんど関わっていないかった。話そうと思えば話す機会はいくらでもあったが、いつもある人の後ろに隠れながらただ眺めているだけだった。自分を憧れの魔導士ギルドに連れてきてくれた、あの人の。

「……………」

あの人——ゴージュと、彼と仲が良かったウエンデイ、彼女に抱えられているシャルルの三人が描かれている絵を見つけ、何かが自分の中から込み上げてくる。それを精一杯抑えて、他の絵も全て拾って、本棚へと戻した。

「あいつらがいなくなってから、俺たちのギルドは弱体化する一方…マグノリアには新しいギルドが建っちゃおうし」

「……………昼むどきが来たのかもな」

「そんな話——！」

「あ、おい、イーロン！」

ワカバがそう呟いた瞬間、イーロンは入り口へと走り出し飛び出していった。

「…どうした、マカオ」

「…………俺は、俺は…心が折れそうだ」

「おめえはよくやってるよ…マスター」

「…あれ以来、ロメオは一度も笑わねえんだ…っ！イーロンの奴も…必死に明るくしようとしてやがるが…見てられねえ…っ」

イーロンの笑顔、あれが心の底からの笑顔でないということは見ていれば分かる。これならばまだ、ゴージュに隠れながらナツ達の喧嘩を見ながら浮かべていた苦笑いの方が自然な笑顔だった。

皆が涙を浮かべ、しばらく沈黙が続いた後……カウンターの奥にある酒瓶が揺れ始めたことにキナナが気づいた。

「な、何……？」

「何の音？」

「また鬼オーガが嫌がらせに来たのか……？」

全員がギルドの外へと出ると、空には……天馬の船があった。

☆

ギルドに青い天馬ブルーベガサスがやって来ていることに気づくことなく、イーロンは彼が七年間住み続けている家にやって来た。中に入り、適当に荷物を整理した後、エプロンを身につける。夕食と夜食を二人分用意する為である。向かう先は、いつも彼が使っている修行場。

家の近くでやつても良かったのだが、ここは本来あの人の家だ。自分はいくまで居候の身。魔法の訓練でもしてる最中に万が一家を傷つけてしまつては申し訳が立たない。なのでイーロンは、いつも少し離れた荒野で修行をしている。

簡単な握り飯を少し多めに作る。中の具は鮭やおかか、梅干しなど。こんな簡単でおいしい料理をどこで教わったのかとあの人に尋ねたこともあったが、東洋の人に聞いたとしか答えてくれなかった。てつきり彼とよく一緒にいた、イーロンが姉御と呼ぶ（本人は嫌がっていたが）少女から学んだのかと思つたので意外だとイーロンは感じた。

そうして彼は修行場へと向かう。少し暗くなつてしまつたが、いつも夜に行つている修行なので問題は無い。多分もう一人もまだ来ていないだろう。

まずは筋トレを一通り行い、少し休憩した後魔法の訓練を行う。妖精フェアリーテイルの尻尾に入る前、魔導士は肉体を鍛えないというのを聞いたことがあるが、そんなことはない。あの人も遠距離攻撃が主体の魔法ではあったが、毎日隙を見ては筋トレをしていた。この習慣は彼を見習つてのことである。最初はキツイと思つていたが、今では少しずつトレーニングを多くしようかと迷つているくらいだ。ここまで鍛える

ことが出来たのは、あの人へ追いつきたいという気持ちと、もう一つ。
「ふう…あれ、ロメオじゃないツスカ!」

「……よう」

「マスターが心配してたツスよ?ちゃんとギルドには行ったツスカ?
?」

「ああ」

まだいないと思っていたので、イーロンは驚く。ロメオのこの態度は、別に不機嫌だからとかではない。七年前からずっとこんな感じで、それはイーロンも長い付き合いだから分かっている。ずっとこちらに背を向けていたが、いつもこんなものかとイーロンは荷物をその辺に置いた。

ロメオとイーロンは5年ほど前から、ここで共に修行をし始めた。早く魔導士になりたいと願っていた二人は、早い内から鍛えておいた方が強くなれると考え行動し始めたのだ。たまに喧嘩もするが、二人はただの友達ではなくライバルと言い合える関係になっていた。

「…お前、あの話聞いたか?」

「あの話って、なんスか?」

ストレッチをしているからか間延びしたような声だったが、ロメオは気にせず続ける。

「今日、天馬の人達が来たんだ」

「へえ、俺は偶々会わなかったんスね」

「それで……」

「よつと……で、それがどうしたツスカ?」

ロメオが言葉を詰まらせたタイミングで、イーロンもストレッチが終わる。そこでようやくやくイーロンはロメオの顔をまともに見た。その瞳は、何かに揺らいでいるように思えた。そこでようやく、今日はいつもと違うということに気がついた。

「ロメオ……?」

「………天狼島は、残ってるって」

「!!」

ロメオの一言で大きく目を見開き詰め寄りそうになるが、我慢して

ロメオに話の続きを促す。

ロメオがギルドに到着すると、ギルドの面々は既に興奮しきっている人と気持ちを抑えようとしている人が半々くらいだった。何かあったのかと、一緒に仕事に行っていたアルザックとビスカが尋ねた。するとなんと、天狼島がまだ残っているのだという知らせを聞いたのだと言う。それを聞いたロメオは喜ぶことなく、ただ疑問に思っていた。

評議院の話によると、天狼島は、アクノロギアという黙示録に存在する大昔に存在したドラゴンによって消滅させられた。島が跡形も無く消え去り、周囲の搜索を他のギルドの面々とも協力して行つたが、誰一人見つけることが出来なかった。エーテルナノ濃度が異常値だとかそんな話も聞いたが、ロメオにはそんなこと気にする余裕もなかった。

なのに今更、天狼島が存在していると言われても、有り得ないと考えてしまうのが普通というものだろう。それに七年も経っているのだ、天狼島が存在したとしても皆が生きているかどうかは別問題だ。

「——つてなわけで、明日早速船で搜索に行くつてよ」

「……………」

「…イーロン?」

全て話し終え、ロメオもストレッチしながら話していたので一通りそれも終わったのだが、イーロンが俯き震え始めた。どうしたのかと、ロメオが近づこうとした瞬間。

「ロメオっ!!」

「うおっ!」

イーロンが一気に目の前まで接近してきた。さすがにロメオも驚き、身を引こうとするがイーロンが肩を掴んで離さない。一步下がると一步進んでくる。

「明日、天狼島行くツス!!」

「……………は?」

「兄貴達に会いに行くツス!!あれだけ、ナツの兄さんに会いたがつてたじゃないツスか!!」

「……………俺は、行かねえ」

ロメオがそう言うと、イーロンの動きが止まる。肩から手を離し、一歩下がった。

「…どういうことツスか」

「…ナツ兄達が生きてるかなんて分かんねえだろ」

「きつと生きてるツスよ!!だから——」

「なんで言い切れるんだよ!!」

「っ!？」

ロメオが声を荒げる。突然叫ばれたことに、今度はイーロンが驚いた。

「七年も連絡すらないんだぞ!そもそも、天狼島がまだ残ってるって話も信用できねえよ!お前も見ただろ!?!あの一帯の海域に、島なんて影一つなかったじゃねえか!!」

「……………それでも、今回でようやく見つかったのかもしれないじゃないツスか!ほら、姿を隠す魔法もあるんすから——」

「そんな高度な魔法、七年も持つと思うのかよ!!」

イーロンは俯き、ロメオは息を整える。この七年、ある一点において二人は真逆の思いを持っていた。

イーロンは、いつか天狼島組が帰ってくると。その時に彼らに恥じぬ魔導士になるためにこうして毎日修行に励んでいる。ロメオは、天狼島組が帰って来ることはない。だったら自分が妖精フェアリーテイルの尻尾の誇りを守る為に強くなろうとしている。

真逆の思いを持つ二人が同じ行動をとっていたのだ。

「それでも!!」

「……………今日はもう帰る。とにかく、俺は行かねえ」

ロメオがそう言ったすぐ後、イーロンは先回りしある提案をした。

「…じゃあ、一つ賭けをするツス」

「賭け?」

「今から全力の勝負をするツス。俺が勝ったらロメオには天狼島捜索に参加してもらおうツス!」

「何言ってるんだ…俺が勝ったら?」

「何でも言うことを一つ聞いてやるッス！」

ロメオは少しの間だけ考え込み：イーロンの目を見て頷いた。イーロンはそれを見てニヤリと笑い、ロメオに背を向けて離れていく。ロメオも同じように距離をとり、二人は向かい合った。

イーロンは、ロメオの中にもまだ自分と同じ気持ちがあったことを確認出来て安堵した。今の所、二人の勝率は6：4でイーロンに軍配が上がる。まだまだ発展途上の二人だが、イーロンの方が身体面で鍛え始めるのが早かったからだろう。何はともあれ、イーロンの方がまだ勝つ確率が高いのだ。なのに、この賭けを了承したということは――

「今度という今度は、容赦しないッス!!」

「それはこつちのセリフだつつの!!」

イーロンは両手合掌の形をとり、ロメオは両手に紫色の炎を灯す。ギルドのメンバーがいれば仲裁に入っただろう。しかしここは、二人しか知らない修行場。止める者は一人もいない。二人の戦闘は徐々に激しくなっていく、過去最長の喧嘩へと発展していった。

☆

「ロメオ、イーロン：ついて行かなくて良かったのか？」

「もし天狼島が見つかったても皆：生きてるか分からねえんだろ？」

「俺は、ロメオが行かねえなら残るッス」

「…何言ってるんだお前」

ロメオが少し驚いた様子でイーロンを見る。昨日と言っていることが真逆だったことにどうしたのかと。すると彼はニヤリと笑って言った。

「兄貴達が生きてないなんて、俺は信じてないッス。探しに行った皆がちやんと、連れ帰って来るッス！だったら、俺はロメオがその時どんな顔すんのか、間近で見てやるッス」

「…ハッ！勝手にしろ！」

「お前ら…また喧嘩したのか」

「喧嘩なんかしてねえ（ッス）！」

彼らは度々、昨日のような喧嘩をしている。その度にこうして傷をつくっては、二人揃って看病を受けている。ロメオは切り傷や青アザ、イーロンは火傷を喧嘩したときに必ずお互いにつくってくるので、喧嘩したことはバレバレである。ちなみにイーロンが作っていたおにぎりは、朝食として先程食べ終えたところだ。

「はい、これでいいわよ」

「いつもすみませんツス、キナナさん」

「……………ありがとう」

「謝るなら最初から喧嘩しなきゃいいのによ」

「いやいや、あれは男同士の真剣勝負で——」

イーロンが喧嘩について語ろうとしたその時、ギルドの入り口から誰かが入ってきた。イーロンは彼らを見て勢いよく立ち上がり、ロメオは読んでいた本に葉を挟んで閉じる。

「おいおい…今日はまた、一段と人が少ねえなあ。ギルドって言うより何コレ、同好会？」

「ティーボ…支払いは来月のはずだろ！」

「ウチのマスターがさ、そうはいかねえって。期日通り払ってもらわねえと困るって…マスターに言われちゃ、しょうがねえんだわ」

「…ふざけんな」

「よせ、ロメオ！」

ロメオは立ち上がり、ティーボ達へと近づいていく。

「お前らに払う金なんてねえよ！」

「何だクソガキ、その態度」

「こんな奴らにいいようにされて、父ちゃんも皆も腰抜けだ！俺は戦うぞーこのままじゃ、フェアリーテイル妖精の尻尾の名折れだ！」

「ロメオ、待つツス！昨日あれだけやって…！」

「……っ！」

昨日あれだけの喧嘩をして、まだ魔力が回復しているわけがない。当然だ、喧嘩が終わったのは今日の朝、天狼島を探しに行ったそのすぐ後にギルドに帰ってきたのだから。

「名前なんかとつくに折れてんだろ？」

「ロメオっ!!」

「止めるーっ!!」

「テメエら一生…俺たちの上には行けねえんだ!!」

ティーボはロメオへと背負っていた金棒を振り抜こうとする。

その時、イーロンは気づいた。

ティーボ達のすぐ後ろの扉が開け放たれ、誰かが入ってきたのを。

「……っ！」

その誰かに後ろから蹴り飛ばされたティーボは、そのままギルドの壁へと叩きつけられた。変な声を上げていたが、そんなことは全く気にする余裕がなかった。

なぜなら。

「……んだコラあっ!!」

他の四人が凍らされ、鉄の腕で殴られ、剣で切りつけられ、巨大な拳に叩きつけられる。

「へへっ……ただいまあつ！」

「皆様お待たせしました！」

天狼組が、ここに帰還したのである。

「皆!!」

「七年前と変わってねえじゃねえか！」

「どうなってんだ!?!」

興奮したマックス達がそう叫び、ルーシイが説明を始めた。

日常編 その2

第52話 空白の七年

「……っ……!!」

誰かの声で、彼の意識が覚醒を始める。眠っていた前の記憶が曖昧だった。仲間と共に戦っていたのは覚えている。が、最後のあの黒き竜——アクノロギアの咆哮が放たれた直後の記憶がない。

「ゴーシユ、しっかりして!!」

「んっ……?アルザックさんと、ビスカさん?」

彼——ゴーシユが目を開けると、そこには二人のガンマンがいた。ゴーシユはそこで戸惑う。まずどうして天狼島にこの二人がいるのか、そして気になったのは二人の容姿だ。ビスカはそれほど変化していないが、アルザックの方は髪が短くなっている。雰囲気も大分変わったように見えた。

「良かった……無事なのね!」

「君も無事だったんだね」

「……他の皆は?」

アクノロギアの咆哮を何とか防げたということを結果論で把握したゴーシユは、他の皆の無事を確認しなければと二人に尋ねる。二人はある方向を見るようにゴーシユに促す。

「まだ全員じゃないけど、何人かは見つけてるよ」

ナツ、ハツピー、グレイ、エルザ、ルーシィ、ガジル、レビィの姿を確認できた。いや、まだ他にも人はいて、今のゴーシユには誰なのか分からない人もいたが……後で教えてもらった方がいいかと、ナツ達の騒ぎようを見てそう思った。しかしまだ、ウエンデイが見つからないという事で不安が残る。全員が無事という確証はない。

「あの、ウエンデイって……」

「え?」

「え?……あ」

こっちの質問に対してビスカが疑問を浮かべたことで、何か変なこ

とを言っただろうか。とゴーシュが思ったその時だった。すぐ真後ろに、ウエンデイがシャルルを抱えて眠りにについているのに気づいた。「すう……」

「……ははっ」

「どうしたんだい？」

「いや……気持ち良さそうに寝てるなって」

彼女達の寝顔を見ながらそう言うゴーシュ。そこで彼はふと、頭の上に着けているゴーグル型のデジヴァイスへと意識を向ける。頭から外し、まだ扱い方が分からないのでとりあえず適当にいじって中に入るのは新しい仲間達の無事を確認しようとする。すると――

「ふあ……」

「あれ、パタモンだけ？」

「うん。まだ二人とも寝てるよ」

パタモンが自分の特等席であるゴーシュの頭の上へと乗る。その光景に、初めてデジモンが飛び出す瞬間を目にしたアルザックとビスカは呆然とした。

「あ、二人とも。こいつらのことは皆が集まった時に説明するんで、もう少し待っていてもらえますか」

「あ、ああ」

ちゃんと説明してくれるならそれでいいかと、二人も今はそれ以上聞かないことにした。

「それじゃ、他の皆を探しに行こう」

「だったら手分けした方が早いんじゃない？」

「いや、案内人がいるからね」

アルザックがナツ達のいる方向とは違う方向を指さす。そこには、白い服を着た裸足の少女がいた。少女は視線に気づくと、森の中へと進んでいく。ゴーシュには一瞬、少女の姿がブレたように見えた。

「あの人が、案内人？」

「ええ……あの子、自分のことをメイビスⅡヴァーミリオンと名乗っていたの」

「メイビス……って初代と同じ名前じゃ？」

「本当かは分からない。でも、彼女について行ったらナツや君が倒れている場所に着いたんだよ」

(あの人が、初代マスター……)

薄らとだが、彼女の姿には見覚えがあった。そういえば物語の中で、何年かタイムスリップのようなことが起きていたなど今頃になつて思い出す。もうほとんど覚えていない原作知識だが、大きな出来事は印象に残っている。

メイビスの姿が見えなくなつて行くのに気づいて、そんなことを気にしている場合じゃないと考え事を中断し、ウエンデイとシャルルの方を向く。アルザックとビスカはナツ達の方へと声をかけに行つた。

「ウエンデイ、シャルル。起きてよ、二人とも！」

「ん……んん……」

「ちよつと、早く起きないと行つちやうつて」

「ん……ゴーシュ……?」

「シャルル、起きた？」

「え、ええ……あの後、どうなつたの……?」

「何とか無事みたいだよ。まだ全員見つからないから、探しに行きたいんだけど……」

「……そう。よく無事だったわね、あの化け物から……ほら、ウエンデイ。起きなさい」

シャルルが目を覚まし、事情を簡単に説明する。そうして二人がかりでウエンデイを起こそうとするが、なぜか起きない。

「なんで起きないんだろう……」

「多分、魔法の使いすぎね。この子、あの黒い竜が来る前に調子に乗つて魔法をずっと使つてたから……疲れが溜まつてたんじゃないかしら」

「だから無茶するなつて言ったのに……仕方ない、背負つていこう」

実はS級魔導士昇格試験の準備期間の一週間、ウエンデイが、修行が上手いかならないのは自分のせいだと言つてほとんど寝ていないということ、シャルルは伏せておくことにした。二人の連携が上手くいかなかったのはゴーシュがウエンデイの気持ちを偶然知つてしまった為だったのだが、まだウエンデイとシャルルはそのことを知ら

ない。

この際しばらく休んでいってもらおうと思ったゴーシユは、出来るだけ起こさないよう慎重にウエンディを背負い、先に行ったナツ達を追いかける。パタモンはデジヴァイスの中にいる二人の様子を確認してくると言ってデジヴァイスへと戻っていった。頭に乗ったままでバランスを取りづらいたのでどいてくれたのだろう。ゴーシユはパタモンが気の利く子なのだとは認識した。多分パタモンが一番しつかりしている…のんきだから分かりづらかったりもするが。

「さ、行きましょ」

「うん」

他の皆が無事であることを祈りながら、ゴーシユは振動を与えない程度に小走りで進む。

☆

少女——メイビスの導きに従い、一人また一人と仲間達と合流していく。最後にマスター・マカロフと合流した所で、メイビスはこれまでのような遠目から眺める位置ではなく、すぐ目の前の空中に姿を現した。そして、この天狼島で起こったことについて語った。

「私は皆の絆と信じ合う心、その全てを魔力へと変換させました。皆の思いが、妖精三大魔法の一つ、妖精フェアリースライアの球を発動させたのです。この魔法は、あらゆる悪からギルドを守る、絶対防御魔法…しかし皆を凍結封印させたまま、解除するのに七年の歳月がかかってしまいました」

「何と…：初代が我らを守ってくれたのか…！」

「いいえ。私は幽体…：皆の力を魔力に変換させるので精一杯でした。揺るぎない信念と強い絆は、奇跡さえも味方につける…：良いギルドになりましたね、三代目！」

そしてメイビスは伝えるべきことを伝えた後、何処かへと消えていってしまった。

☆

「と、まあ…そういうわけじゃ」

マスター達が説明し終わった時、ナツのすぐ傍に一人の少年が歩み寄る。同じように、ゴーシユの傍にも。彼らは何かを言いたそうな顔をしているが、上手く話すことが出来ずにいた。そんな彼らに、二人は声をかける。

「…大きくなったなあ、ロメオ！」

「えっと…ただいま、イーロン」

「…お帰り…ナツ兄、皆」

「兄貴——っ!!」

ロメオは涙を流しながら笑ってそう言い、イーロンはゴーシユへと突撃していった。

それからは、皆は七年の時を埋めるかのように、宴会を始めた。

☆

「着いたツスよ！」

一旦家に帰ることにしたゴーシユは、ウエンデイ、シャルル、イーロンと共に自宅へと向かった。ちなみにウエンデイとシャルルも一度フェアリーヒルズへと帰って着替えやシャワーを浴びようとしていたのだが、その前にイーロンは彼女達にも来てほしいと言ったのだ。イーロンは天狼島でのゴーシユとウエンデイの関係が進んだという話を聞いて、今使っている家、正確にはゴーシユの家の現在を見てほしくなったのだと言う。デジモン達は紹介も兼ねてギルドに置いてきている。

「やっぱり、何にも変わってないね」

「手入れは欠かさなかったツスから！」

イーロンはいつでもゴーシユ達天狼組が戻ってきてきても良いように、また自分も魔導士として一人前になる為、修行だけでなく家事なども全てこなしていた。出来るだけ修行の方に専念出来るように頑張った結果、彼の家事をこなす速さは異常な位に速くなっている。

「どうぞ、入って下さいツス！」

「分かったって…」

「お邪魔しまー…す？」

ゴーシユは不思議に思っていた。なぜウエンデイとシャルルも一緒にこの家に連れてきたかったのか。しかも、彼女と一緒に来てくれと言ったのは、ゴーシユとウエンデイの関係が進展したという話を聞いてからだ。その時点で、ゴーシユには嫌な予感を感じていた。そしてそれは的中することになる。

「イーロン？ちよつと聞きたいんだけど…」

「はい？」

「なんで私達の荷物があるのよ!？」

そう、なぜか大きな見覚えのある鞆が、今はまだ使われていない部屋の一室に置かれていたのだ。その鞆を見て、ウエンデイとシャルルはどういうことかとイーロンに詰め寄った。

「それは兄貴達が帰って来なくなつて一年位の話になるツス。フェアリーヒルズって、一月10万Jの家賃があるじゃないツスか？まだギルドに入って間もない姉御とシャルルの姉さん達には、一年分の家賃を払わせるのは酷なんじゃないかって話が出たんす。そこで、俺は一時的に荷物をお預かりして、それ以上家賃が増えるのを回避したツス！」

ビスカヤやラキに手伝ってもらつたらしい。敢えて言わなかったが、最早天狼島に行く前の時点で端から見れば恋人レベルの関係だったので、この件で二人の仲を進展させようということも考慮しての行動だった。当事者からすれば、大きなお世話だが。

「良かったね二人とも、払わなきゃならない家賃が一年分だけになったよ」

「勝手に荷物まとめるとか、犯罪みたいなものじゃない!」

「…それに関しては、申し訳ないツス。でも俺もまとめられた荷物を開けたりはしてないツス。衣服や道具の管理はビスカ姉さんとラキ姉さんにお任せしてたツス」

「そういう問題じゃない!」

「……………」

確かに問題はあるが、おかげで七年分の家賃が一年分だけになった

のは嬉しいことではないかとウエンディは思い始める。それに、自分たちが同棲まで関係が進むのは何年先になるのかと考えていたウエンディにとっては――

「ウエンディ?」

「っ!だ、大丈夫!そ、それでイーロン君!私達の元いた部屋はもう使えないってこと?」

「まだ誰もお二人が使っていた部屋は埋まってないツス:なんせ、人がいなくなる一方だったもので:」

イーロンが目に見えて落ち込み始め、ウエンディも何か考え始めた所で、ゴーシユはふと思った。

「あれ、エルザさんも家賃七年たまってるとだよね:確か五部屋繋げているって聞いたけど:10万×5×12×7だから:4200万J!?)」

そこまで考えて、ゴーシユは顔を青くし現実から目をそらすように思考を止めた。もしエルザが困っていることがあったら助けるようにしようと考えていることにした。

「で、ウエンディとシャルルはどうする?」

「私は:」

「:…:そうね。しばらく厄介になっても良いかしら?」

「シャルル?」

「:…あんだ達の関係が進んだのなら、悩むことないでしょ」

最後の一言はウエンディにだけ聞こえるようにシャルルはそう言って、そっぽを向いた。

(ありがとう、シャルル)

親友からの後押しを受けたウエンディは、決心した。

「:…ゴーシユ!」

「:…ん?」

「えっと、その:…不束者ですが、よろしくお願いします」

「:…:…(こちらこそ、よろしく)」

顔を真っ赤にさせ、少し困ったような、だけどうれしきも混ざったような笑顔を見せながらそう言ったウエンディの表情を見て、ゴー

シユもまた顔を真っ赤にさせてそっぽを向きながらも、ウエンデイのその手を取っていた。そこでイーロンはまだ言っていなかったと、この二人にとつての爆弾発言を投下した。

「あ、俺はすぐ傍にある小屋で寝るんで、この家は皆さんで使つて下さいッス！」

「え!?!」

元々、彼の魔法の鉄造形アイアンメイクで作った小屋で寝泊まりしていた彼はそう言った。昨日、黄昏トワイライトオカの鬼の面々が怪我をしたあの家具類も、イーロンが作り出した物にリーダスが色を塗って木製に見せかけた物である。しかしその家具達は今頃、ガジルに全て食べられてしまっていることだろう。

イーロンの発言を聞いて驚いて固まる二人と、あることを思いついた白猫が一匹。

「…私もそっちに行つた方がいいかしら?」

「行かなくていいから!!」

「ふふ、冗談よ」

まだ顔を真っ赤にして少し変な汗もかいている二人が、シャルルを必死に止める。シャルルにとっては、これからの毎日が楽しみに思えた。もちろん親友がその恋人と同棲を始めたのも嬉しいことだが、主にかうかウネタが尽きないという意味で。

(どうしてこうなつたんだ…)

(なんでこうなつたんだろう…)

とりあえずウエンデイとシャルルは荷物を整理し始め、その間にゴーシユは着替えも兼ねてシャワーを浴びに、イーロンはミラやキナナから頼まれていた買い物済ませるため家を出た。

第53話　　デジモン達の過去

身支度を済ませたゴーシユ達がギルドへと戻ると、興奮冷めやらぬといった様子でギルドの皆が宴会を続けていた。家に戻る前にデジモン達を簡単にだが紹介し、皆と馴染んでもらおうと思いついてきたが、どうやら心配はいらなかったらしい。

「テメエ、サラマンダー火竜！人の飯の邪魔すんじゃないやねえ！」

「飯じゃねえだろ！」

「ドルモン、大丈夫？」

「お前はさっさと降りろっての！」

「駄目ですよ、グレイ様！まだ動かないで下さい！」

「貴様か…私のケーキを台無しにしたのは…許さん!!」

「ひい！お、お助け〜！」

「エルザ落ち着いて！」

「プロットモンも謝ってるんだし！ね？」

（……なんだこの混沌カオス）

ガジルとナツが喧嘩している横でドルモンが気絶して、グレイの頭の上に乗ったパタモンが声をかけている。グレイはパタモンを退けようとするが、絵を描いているリーダーダスの傍にいるジュビアに制止されている。少し離れた場所では、エルザが怒気を放っており、それに怯えるプロットモンと、彼女を庇うルーシイとレビイの姿。さらに別の一角では、もうこの騒ぎが日常と認識したのかマスター達が酒を飲み始めており、ギルダーツに関してはカナをお姫様抱っこして間拔けな面を晒している。

「あーっ！ガジルの兄さん、俺の作った椅子食べたツスね!？」

「これ、お前の魔法なんだってな？もつと作れや」

「先に謝ってほしいツス！」

イーロンは自分の作った椅子が虫食い状態になっていることに気づき、ガジルへと詰め寄る。ガジルはまだ食べ足りないと言わんばかりに、イーロンへとおかわりを要求し始めた。

「おい犬野郎！さっさとかかって来いやあ！」

「ナツ兄！そいつもう気絶してるって！」

ナツはまだ元気が有り余っており、気絶しているドルモンへと喧嘩を売るといふ行動に出た。ロメオはさすがに不味いと思ったのか、慌ててナツを止める。そんな様子を見ているゴーシユの横で、ウエンデイは裾を引つ張り尋ねた。

「ドルモンって犬なの？」

「…さあ？」

意外とマイペースな少女だと、彼は思った。

「ちよつと、あれ止めなくていいの？」

「あ、そうだった」

このままでは話が進まない。そう思ったゴーシユはこの混沌カオスを止めようとする。

話とはもちろん、デジモン達のことだ。彼らの事情について詳しく聞く機会がなかった為、妖精フェアリーテイルの尻尾のメンバーが集まっているこの時に彼らに説明してもらおうと思っていたのだ。

「ちよつと皆さん、聞いて下さい！」

「どうしたんだ？」

「デジモン達に聞きたいことがあるので、皆さんにも彼らの話を聞いてもらいたいんです」

「聞きたいことって？」

「ドルモン達がデジタルワールドっていう異世界から来たって話は聞きましたよね？」

「ああ」

「うさなくせえけどな」

「あたし達は異世界行ったけどね…」

ゴーシユ達が一度家に戻っている間に、そのことも話すように頼んでいたのだ。異世界云々の話をするべきかどうかゴーシユは迷っていたが：今ではないにしても、自分のことも打ち明けるつもりのは、仲間達に話すことにした。

「彼らには、何か事情があるみたいなんです。こつちの世界で、やらなければいけないことが」

「そうなのか？」

「ひ、ひゃい！—そうです!!」

エルザの問いに、プロットモンがビビりながらそう答える。この短時間でプロットモンの心に、エルザへの恐怖心が植え付けられていた。

「三人とも、話してもらえる？—どうして、この世界に来たのか」

「うん、いいよ。ちよっと待ってね」

パタモンがグレイの頭から降りて、まだ気絶しているドルモンの元へと向かった。グレイの頭から移動したことによりジユビアが残念そうな声を出したが、誰も気にせずにパタモンの行動を見守る。

「ドルモン、起きて」

「ぐふっ!？」

パタモンが羽でドルモンをビンタする。力加減が出来ていないのか、ドルモンは吹っ飛ばされてゴーシユの方へと飛んできた。それを見て、ゴーシユは弾性結界を展開しドルモンを受け止める。

「まだ寝てる？」

「起きた、起きたから！」

(…パタモンは怒ったら怖そうだなあ)

そんなことを思いながら、ゴーシユはドルモンに改めて説明し、事情を話してもらおうことにした。そして、ドルモンの傍にパタモンとプロットモンが来て、妖精の尻尾のメンバーに話し始めた。彼らの、もう一人の友人のことを。

☆

デジタルワールド。そこは、人間達の住む世界の影のような世界。決して混ざることが無いはずのその二つの世界はある時、世界の次元の歪みによってデジモンが人間の世界に、反対に人間がデジタルワールドにやって来ることがあったらしい。

ドルモンとプロットモンとパタモンの三体は、ロップモンというデジモンと共に、始まりの町と呼ばれる集落の近くで暮らしていた。元々、ドルモンは別の場所からやって来たデジモンであったが、パタモン達は快く受け入れてくれた。ドルモンは、見ず知らずの自分を受

け入れてくれた三体に感謝していた。しかし、他のデジモン達はそうではなかった。

「こんな怪しい奴、この町に入れるわけにはいかねえよ！」

「その子、変なウイルスにかかっているって聞いたわ！」

この町の一番の特徴は、デジモンが生まれる卵であるデジタマが集まる場所だと言うこと。この町に住んでいるデジモン達はそのデジタマを守る為、大昔に集まったデジモン達の末裔だ。そんな彼らからすればドルモンは不審者として扱われるのは当然、しかもドルモンはXウイルスと呼ばれるウイルスに感染しているという噂もそれを助長していた。

Xウイルスは、X抗体と呼ばれる特殊な抗体を持っていないデジモンにとつては猛毒のようなもの。X抗体を持つデジモンは総数で見ると圧倒的に少ない。Xウイルスを持つデジモンを入れるわけにはいかないというのが、町全体の意見だ。もちろんドルモンは、そのX抗体を持つデジモンのうちの一体である。

「ちよつと！何度も言ってるけど、ドルモンは悪いデジモンじゃないよ！」

「そうだよ、すごく優しいんだ」

「ドルモン…可哀想」

プロットモン達が弁護するが、それでも町の人達は受け入れるわけにはいかない。もちろん良いデジモンか悪いデジモンかは重要だが、ドルモンは例外…町に命を脅かす存在を入れてはならないというのが、この町のルールだ。

「もういいよ、皆」

「でも…」

「いつものことさ。入れないものは仕方ない…俺はいいから、皆で行ってきて。後で話聞かせてよ」

この日、彼らはこの町でイベントがあるという話を聞きつけてやって来ていた。ドルモンは通ることは出来ないということは分かっていたので、あつさりと引き下がる。が、プロットモン達はそれで諦めるつもりは毛頭無かった。

「じゃあ、行こうか」

「悔しい…：いつか仕返ししてやるもん！」

「ほどほどにね。二人も、後でね」

「え…？」

「了解…行こ」

パタモンとプロットモンは始まりの町へと入っていったが、ロップモンはドルモンと残り、そのままドルモンを入り口とは別の方向へと押す。ドルモンはわけが分からず、ロップモンに尋ねた。

「ロップモン、何処行くの？」

「二人はある場所に行ったの…ボク達が、入りやすいようになって…：皆で、話してたの」

「俺のために…ありがとう！」

「こつちに非常用の通路がある…見た目は、ただの井戸。二人は、その通路の出口に向かうって」

「分かった！」

ドルモンは元気にそう答えた。三体の思いやりを、すごく嬉しく思っていた。これまで迫害のような扱いを受け続けていた自分に、手を差し伸べ友達だと言ってくれたことに、出会うことができ良かったと、心から思っていた。

足早に歩いているドルモンに合わせるように、ロップモンも足早になる。しかし、ロップモンはあまり運動が得意では無かった。まだ緊急の出入り口には走っても数分かかる。ロップモンがそんなに長くこのペースを保つことは出来ず、少しすると息切れし始めた。

「ハア…：…ハア…：…」

「…ん？ロップモン？」

「ごめん、ちよつと…：…休ませて」

「あ、ごめん！嬉しくなっちゃってつい…：そうだ！」

「？」

ドルモンは何か思いつき、ロップモンに背中を向ける。

「ほら、乗って！俺が走れば速いしよ！」

「あ…うん…：…」

ロップモンは戸惑った様子だったが、すぐにドルモンの背中にしがみつく。ドルモンはそれを確認した後、井戸へと走り出した。

森の中はよく遊び場に使っていたからか、井戸の場所だけでなく湖や他のデジモン達の住処などの場所も把握していた。ドルモンがペーヌを落とすことなく走り続け、やがて目的の井戸が見えてくる。

「(ん)？」

「そう……この下……少し、水の中を進まないといけないけど」

「よし……それじゃ行こう！ロップモンはそのまま俺に掴まって！」

「分かった……！」

ドルモンはロップモンを背負ったまま、井戸の中へと飛び込む。暗さであまり見えなかったが、ロップモンがその大きな耳で方向を示してくれたので迷ったりすることはなかった。少し進むと、上に水面が見えてきた。

「ぷはっ！」

「大丈夫……？」

「あ、ああ。ロップモンは？」

「問題ない。ここを、道なりに進んでいくと……」

「町の中？」

「そう」

「それじゃ急ごう！」

「ボク、降りる」

「別にこのままでも大丈夫だよ？」

「ここ、狭いところある。多分、通れない……」

「なるほど……」

ロップモンはドルモンから降りて、ドルモンを先導して行く。言っていた通り、道は一本道ではあるものの天井が低い場所や、ドルモンがギリギリ通れるくらい横穴のような場所もあった。通りにくい場所に時間がかかってしまったが、ようやく真上に続く梯子が見えてきた。

「や、やっとか……」

「ボクがまず、見てくるね」

「ああ、出ても大丈夫そうだったら呼んで！」

「うん…待ってて」

ロップモンが梯子を登っていくのを、ドルモンは見届ける。いきなり自分が町に出て行ったとして、それで他のデジモンに出会ってしまつたら一大事だ。ロップモン達が上手くやってくれるのを待つことにしよう。

そう考え、ドルモンは待ち続ける。

音は何も聞こえない。そういう仕組みでも施されているのかもしれない。

数分、数十分。

体感ではあるが、大体三十分くらいは経ったか…さすがに、遅すぎるんじゃないか？そう思い、上の様子を確認しに行くことにした。梯子を少しずつ登り、一番上のマンホールを少しずつ開ける。そこに映った光景は。

「や、止めて…」

「うう……」

「ドル………モン………？」

荒廃した町と、ボロボロになった友達の姿だった。

それを見た瞬間、ドルモンは勢いよく飛び出す。

「皆！何があつたんだ！」

「ドルモン……！」

「ロップモンが、私たちを庇って…」

「ロップモンが!?!」

見たところ、ロップモンとパタモンが一番ダメージが大きい。プロットモンはまだ動いているので、自分たちが地下を進んでいる間に何者かに襲われ、パタモンがプロットモンを守っていたのだろう。ロップモンはその時に出て行ったので、パタモンの加勢に入ったということか。そこまで予想したドルモンはひとまず、どこかで休める場所を探すことにした。

「皆、急いで休める場所を探そう!」

「で、でも…お願い、ドルモン。あのデジモンも一緒に連れて行って!」

「あのデジモン…?」

ドルモンが辺りを見渡すと、少し離れた所に人型デジモンが倒れていた。白いボロボロの衣服を身に纏っており、その体には生傷がいくつも出来ている。ドルモンは一度もこんなデジモンを見たことがなかった。見知らぬデジモンということと警戒する。

「違うの!あのデジモンも、ロップモンやパタモンと一緒に戦ってくれたの!」

「戦ったって、誰とだよ?」

「なんか悪そうなデジモン!そいつが影みたいなの出してロップモンを攻撃したの!」

曖昧な説明で、ドルモンが疑問を浮かべる。そんな時、パタモンが異変に気がついた。

「…!待って、二人とも…!ロップモンが、変だよ…!」

「うう、ううう…!!」

ロップモンは先程から蹲ったまま動かない。それほど怪我がひどいのかとも思ったが、明らかに様子がおかしい。

「おい、ロップモン!大丈夫か!?!」

「だ、め…:…:来な、い…:で!」

「何言ってるんだよ!放っておけるわけじゃないじゃないか!早く、どこか休める場所に…!」

「もう、無……………うああああああっ!!!」

「ロップモン!?!」

「ドルモン、危ない!」

「うわあっ!」

ロップモンから突如として黒いものが溢れ出し、それによってドルモンが弾き飛ばされる。そのまま地面に転がるが、すぐに起き上がりロップモンがいた場所へと目を向ける。

「え…!?!」

ロップモンが黒いものに包まれ、中から出てきたのは…ロップモンではなく、茶色の巨人のような体軀をしたデジモン、ウエンディモンだった。

「ロップモン…!?!」

「……………ここ、これは!?!」

白い服を纏ったデジモン——サンゾモンが目を覚ます。ウエンディモンがパタモンとプロットモンに迫っているのが見える。悪しき力を感じ取ったサンゾモンはどうかして守ろうとするが、この町を襲ったデジモンとの戦闘で相当なダメージを負っており、咄嗟に動くことが出来なかった。その間にもウエンディモンは腕を振り上げ、パタモンへと攻撃をした。

「あうっ!!」

「パタモン!!」

「きやあっ!!」

「プロットモン!!」

ウエンディモンがパタモンとロップモンを殴り飛ばす。最後に、ドルモンの方へと向き、同じように殴り飛ばそうとする。

「メタルキャノン!!……………ぐあっ!!!」

ドルモンが口から鉄球を飛ばし攻撃したが、ウエンディモンはそれを生身で防御した後にドルモンへと攻撃を当てた。ドルモンは地面を何度も転がる。

「く、くそ……………まだ、だ…!」

だが、ドルモンは立ち上がる。ロップモンに何か起きたことは理解

できた。もし暴走しているのだとしたら、自分たちの中で一番誰かを傷つけることを嫌うロップモン自身が、今の行動を後悔するだろう。だったら…暴走を止めるのが、友達の役目だと自分を奮起させる。

「ロップモン……俺の、声が聞こえる、か……おい、ロップモン!!」
「お止めなさい!!」

「っ!？」

「この者達にはこれ以上、手出しはさせません!」
「……………」

ウエンデイモンは何も反応せず、ある方向へと目を向けた。そのままドルモンとサンゾモンを無視して歩き始める。サンゾモンは警戒をほんの少し緩める。今は無事に生き残ることが重要だ、このまま去ってくれるのであればそれで良しと考えた。

しかし、サンゾモンは知らなかった。そのデジモンはロップモンが暗黒進化したウエンデイモン。そのウエンデイモンはある特殊な能力を持っているということ。

「ま、待て……!」

「あの方向って……」

「デジタマが集められてる場所!」

「何ですって!？」

パタモンとプロットモンが、ウエンデイモンの進む先がデジタマの安置されている場所だということに気づき、ドルモンとサンゾモンもその言葉を聞きウエンデイモンの後を追おうとする。しかし、三体ともダメージがひどく、動くことが出来ない。ウエンデイモンに追いつくことは叶わなかった。

どうすることもできないまま、ウエンデイモンは大量の籠に入れたデジタマ、その一つに手をかけようとしたが、最後にドルモン達の方へと目を向けた。ドルモンにはその目が、悲しみに包まれているように感じた。

「ロップモン、止めて……!!」

「どうする、つもり…?」

「ロップモン、待っ——!!」

「っ!!……はあっ!!」

目線をこちらに向けたまま、ウエンディモンは時空を歪ませる。それを見た瞬間、サンゾモンが何かを投げつけた。それらはウエンディモンや抱えられていたデジタマに直撃する。しかしウエンディモンは特に反応せずに、デジタマがいくつか入った籠を抱えたまま……どこかへ、消えてしまった。

「ロップモoooooooooooo!!」

ドルモンの悲痛な叫びが、辺りに響き渡った。

☆

「そのデジヴァイスをくれたミレイさんとそのパートナーのマスターモンとは、その時知り合いでも何でも無かったんだけど、俺たちを助けてくれたサンゾモンが紹介してくれたんだ」

「そのサンゾモンって奴は何でこっちに来なかつたんだ?」

グレイがドルモンにそう尋ねると、隣のパタモンが答えた。

「えつとね、サンゾモンがウエンディモンに投げたのはサンゾモンの力の一部でね、それが無いとこっちの世界では生きていけないらしいんだ」

「それに、サンゾモンは力をほとんど使い果たしてたから…」

ゴージュはそれを聞いて一つ疑問を浮かべた。サンゾモンもデジヴァイスに入っ一緒に来れば良かったのではないかと。デジヴァイスに入れば回復機能があるのだから、それで力の回復も出来るのではないかと。

「サンゾモンは何でデジヴァイスに入らなかったの？それに入ったら回復するんでしょ？」

ルーシイも同じことを思ったのか、そうデジモン達に尋ねた。

「サンゾモンの力は特殊で、休むだけじゃ回復しないんだよ。それに、デジヴァイスの容量の問題もあるし」

「容量？」

「そのデジヴァイス作られたばかりだから、容量が無いとか何とか…」

「要するに、サンゾモンが入るスペースが無かったってこと？」

「そういうこと！」

「その容量とやらを増やすことは出来ないのか？」

「…ごめん、分からないんだ。そのデジヴァイスに書いておくとか言ってたけど」

ドルモンがそう言ったのを聞いてデジヴァイスを操作し始めるゴージュだったが、まだ操作が慣れていない為分からなかった。

「どうだ、ゴージュ？」

「ちよつと今すぐには出せそうにないです…」

「その内分かるってことで良いんじゃない？」

「それで、マスター…デジモン達をギルドの仲間として入れてもらいたいんですけど」

マカロフに再度確認の為に声をかけた。それによって、全員の視線がマスターへと集まる。

「そうじゃなあ…デジモン達だけで仕事を受けるのは無しで頼むぞ、依頼人が困惑するから」

「じゃあ…」

「新しい家族が出来た記念じゃあ！皆の者、飲めえい！！」

「！！！！おおうっ！！！！！！」

こうして宴が再開され、妖精の尻尾フェアリーテイルに新たな仲間が加わったのだった。

第54話 魔法舞踏会

日中から始まった宴会は時間を忘れるほど続いた。どこからか聞きつけたのか、途中からリオンさんやシェリーさんといった蛇姫ラミアスケイルの鱗の面々が押し寄せ、彼らなりに天狼組の帰還を祝ってくれた。

リオンさんがジユビアさんに一目惚れしたり、デジモン達を見てビツクリしていたり色々あったけど、他のギルドの皆にも心配かけていたんだらうと思う。リオンさんやシェリーさんは素直じゃないから憎まれ口しか言わないけど、ジユラさんは僕らの肩を叩きながら「よく帰ってきたー」と喜んでくれていた。

家に帰ってからはウエンデイとシャルルの荷物を出来る範囲で片付けるのを手伝った。その後はイーロンがデジモン達に「俺が兄貴分ツス！」とか言ってたけど、プロットモンは遊び相手としか思っていないようだった。最終的に鬼ごっこしてたし。

そして何日か経って昨日、簡単な依頼へと終らせて帰ってきた。

「ただ今戻りましたツス〜！」

「お邪魔しまーす」

「…お帰り、イーロン。ロメオ君もいらっしやい」

その依頼は今この家に暮らす三人とイーロン、ロメオ君を加えた五人で受けた。七年の間に魔導士として働きだしたイーロンとロメオ君が誘ってくれたことが切欠だった。内容はモンスターを何体か討伐するという簡単なもの。デジモン組からはドルモンが参加していた。

デジモン達をデジヴァイスから出したままにしていると粒子化が始まってしまう。今の所、6時間くらいが限度だ。仕事の手伝いをしてもらうつもりなので、三体を一度に出し続けて、タイムリミットが来たら全員が同時に休憩に入るのでは効率が悪い。

そこで一体ずつ三時間交代で外に出しておくことにした。これなら他のデジモンが休憩している間に仕事を手伝ってもらえるし、タイムリミットギリギリというわけではないので、もしもの時に他のデジ

モンも出すことが出来る。

と、余談はこれくらいで。本題はここからだ。

「で、ゴージュ兄。改めて確認しときたいんだけど」

「うん」

「昨日のあの話…マジなんスね？」

「…うん」

仕事帰り、ウエンデイと二人きり（イーロン達は隠れて見ていたことに後で気づく）になった僕は…例の二つの話をした。

一つは、メストさん…ドランバルトさんとウエンデイとシャルルの会話を偶然聞いてしまったこと。

そしてもう一つが…エルザさんと戦った一次試験の時、水に落ちて気絶したウエンデイを助ける為ではあつたが…所謂、人工呼吸を行ったこと。

この二つを話したことによって、ある問題が発生した。ウエンデイが僕と会話はおろか、顔を合わせることもすら避けるようになってしまったのだ。

僕は嫌われてしまったのではないか、と心中穏やかとは言い難い状態で次の日を迎えた。ウエンデイとシャルルはついさつき、一足先にギルドへ向かった…勿論、僕とは何も話すことなくウエンデイが飛び出していったのをシャルルが追いかける形で。

丁度その時の様子を見ていたイーロンが家に入り、僕が四つん這い

になって落ち込んでいる様を見て、これは不味いと思つたらしい。助け船を求めてロメオへと声をかけに行つた、というのが今朝の出来事だ。

「シャルルの姉さんも後から来てくれるそうツス」

「……………そう、ですか」

年下（今は年上だけど）に相談に乗ってもらつてこの姿を、誰にも見せたくないとは思ふのだけど……背に腹は変えられない、か。正直シャルルから何を言われるのかすごく不安……主に二つ目の件で。

「ウエンデイ姉、元気なかつたからなあ」

「どこか、心ここにあらずつて感じだつたツスね」

「……どうしよう」

『ウエンデイ、怒つてるの?』

デジヴァイスからドルモンの声が聞こえてきた。昨日は異様な空気を感取つたのか、ドルモンとパタモンは大人しくしてくれて、朝からは心配して声をかけてくれた。プロットモンは相変わらずだつたが。

「どうなんだろ……ウエンデイ姉つて怒ることあるの?」

「いや、あんまりないと思うけど……」

「それだけ今回は怒つてるつてことツスか……」

怒るといふより、ふて腐れる感じか。ケーキを買つてきたりしてご機嫌をとつて仲直りするというのが普通の流れだ。今回もマグノリアにあるケーキ屋で新作とやらを買つてきたんだけど……それを出す前に逃げてしまうから、お手上げだ。

「ゴーシユ兄、こうなつたら素直に謝るしかないつて!」

「そうツス!盗み聞きはともかく、人工呼吸の方は問題ツスよ」

「何度も謝ろうとしてるんだけど、逃げちゃうんだ。声をかけても無視だから……」

「うーん……じゃあ、今度の依頼の間に仲直りつていうのは?」

「依頼?」

ロメオ君がそう言いながら、一枚の紙を取り出す。それはよく見慣れた物、依頼書だつた。報酬の所を見ると400万Jと書かれてい

る。普通の依頼は大体5万J前後なのに…依頼人はどこかの金持ちか。お尋ね者を捕らえるという内容にしては、金額が異常だ。

「これは？」

「姉御が参加する依頼ツス。ナツの兄さん達と一緒に行くみたいで」

「でも、俺が参加するって分かったら…」

「ああ、だから俺とイーロンで参加してウエンディ姉を上手く誘導して、ゴーシユ兄と二人きりになれるようにするからさ」

「なるほど…」

単純に、400万Jもの懸賞金がかけられている賞金首を相手にするっていうのも心配だ。僕だけ隠れていればウエンディもちゃんと参加するだろう。

「あ、そうだ。ダンスの練習もしてよ！舞踏会に参加するかも知れないんだから」

「…いや、僕は出来ないから外で待機するから。あ、僕その依頼の日まで修行にでも行ってくるから」

「え、ちよつ、兄貴!？」

ウエンディなら踊れるかも知れないけど、僕は多分無理だ。ウエンディとシャルルが過ごしづらだろうし、どっか行つてるとしよう。

☆

数日後、依頼人であるバルサミコ伯爵の住むバルサミコ宮殿に、ナツ達妖精の尻尾の面々が集っていた。

「はあ…」

「ウエンディ、まだ落ち込んでるの？」

ウエンディが溜息をついたのを見て、ルーシィが声をかける。ウエンディの悩みも、ゴーシユと同じようなものだった。

「ゴーシユ、まだ帰ってきてないの？」

「そうなんです…このまま、帰って来ないんでしょうか…」

ウエンディとシャルルがゴーシユの家に住むようになったことは、既にメンバーのほぼ全員に知れ渡っていた。加えてゴーシユが数日間家出しているという話も、今回の依頼に参加している面々は全員

知っている。さすがに家出の原因となった話も詳しくは話していないが。

「何、そのうち帰ってくるさ。数日家を空けるとしか言っていないかったのだから?」

「そうなんですけど…」

（やっぱり、あの朝に謝るべきだったかな……でも、やっぱり恥ずかしいし…）

「なんか顔赤いけど…」

「な、なんでもないです!」

ゴーシユがイーロン達と話し合っていたあの日の朝。ウエンデイはゴーシユに、避けるような態度をとってしまったことを謝ろうとしていた。が、いざ面と向かってみると恥ずかしさが大きく上回り、話すら出来なかったのである。

「それにしても、ゴーシユもタイミング悪いわよね〜」

「え?」

「フツ、確かにな」

「ウエンデイが折角可愛いドレス着てるのに見れないなんてね〜」

「そ、そんなこと……!ルーシイさん達の方が綺麗ですよ!」

彼女達は今、舞踏会に参加するためにドレスを身につけている。今回の依頼のターゲットであるベルベノは、この七年に一度開かれる魔法舞踏会で披露される指輪を狙って現れる為、こちらも舞踏会に参加して捕らえるのが目的だ。あくまでただの参加者に成りすます必要があるので、最低限のダンスやマナーを学んで参加している。

「さあ、舞踏会の幕は上がった!私達もステージに上がるぞ!」

「エルザ、お芝居の時と同じくらいノリノリ!」

「…私も、頑張らないと!」

ウエンデイも今は仕事を優先しようと、気持ちを切り替えてルーシイとエルザの後に続いた。

☆

時は少し遡り、バルサミコ宮殿の屋根の上。

「ねえ、本当に参加しなくて良かったの〜?」

「いいんだって。今はベルベノに集中しよう」

舞踏会に参加しているイーロンとロメオの誘いに乗ったゴーシユは、パタモンと共にこの宮殿へとやって来ていた。

「折角ウエンデイがドレス着てるかもなのに〜」

「……いいから、今はお尋ね者のベルベノに集中して」

「今、想像したでしよ〜」

「してないって……!」

夜の暗闇で表情が赤くなっているのが分からないことが、ゴーシユには救いに感じた。パタモンやデジヴァイスに入っている他二人からすればバレバレだったが、敢えてそこは指摘しないでおく。

『でも、やることも特にないじゃん』

『そいつ、変身するんでしよ?』

「だったら、きつと正門から入っちゃってるよね〜」

「まあ、そうなんだけど……」

検問のようなものも作っているようだが、魔法自体を感知出来るというわけではない。万が一を考えてこうして外で警戒をしているが、無駄足で終わる可能性の方が高い。なのでゴーシユは建物内部を探る為、屋根の上から索敵結界^{サーチ}を展開……と言っても索敵結界^{サーチ}はゴーシユを中心に展開される。そして現在の索敵結界^{サーチ}の上限は20mほど。これほどの大きな建物だとたった20m、ほとんど中は探れていないも同然だった。

要するに、屋根の上に待機してはいるものの、ほとんど何も出来ないのだ。パタモンにこの宮殿の外を、かなりの時間をかけて飛んでもらったりしたが、何か分かる訳でもなかった。元々、屋根の上で待機するように指定したのはイーロンとロメオだ。そして自分は今回この依頼には参加していないことになっているので、多少自由に動いても構わないかと考え始める。

「いっそ、中に入っちゃう〜?」

『その方が楽しそう!』

「……そうだね。もうここについても仕方ないし。イーロン達が来たらそ

うしようか」

『プロットモン、中に入ってからだよ』

『え〜』

ゴーシユがそう言ったのを聞き、パタモンはゴーシユの頭の上から飛び立った。一度下に降りて、妖精フェアリーテイルの尻尾のメンバーであることを伝えれば中に入れるだろう。パタモンもそう考えたのか、玄関の方へと向かっている。

ゴーシユがパタモンを目で追っていると——視界に、人の影を捉えた。その人物は、すでにゴーシユの目前まで迫っていた。

「…！デイフェンド トーテム防衛結界・柱！」

「おっと、危ねえな！」

相手の突き出した拳を片手で受け止め、ゴーシユは攻撃を放つも相手はそれを難なく避け距離をとる。月明かりに照らされて見えたその特徴的な顔は、今回の標的である人物。

「お前は…ベルベノ!？」

「エアシヨット！」

「うおっ！」

空からの空気弾にも反応したベルベノは、青緑色の結界バリアで防いだ。ベルベノの扱う魔法については聞いていないゴーシユは、自分と同じ結界魔法バリアを使ったことに驚く。

「今の…!？」

「ゴーシユと同じ魔法だね〜」

「少し予定外だったが、良い魔法だな。わざわざ屋根に飛んできた甲斐があったってもんだ」

「飛んできた…まさか！」

ベルベノの飛んできたという言葉、そして使い手次第で能力や色すらも変わるはずの結界魔法バリアだが、ベルベノが自分と全く同じ結界バリア——デイフェンド防衛結界を使用したことから、魔法をコピーする魔法であることに勘づく。ベルベノのマジカルドレインは、一定時間魔法を複数コピー出来るというもの。コピーの条件は、対象に触れること。今回の舞踏会

のような魔導士が大勢集まる場所であれば、一気に複数コピーすることも可能だ。

「パタモン！」

「任せて〜！エアシヨット！」

「反射結界！」

「なっ…！防御結界・壁！」

パタモンが連続で放った攻撃を、ベルベノが赤紫色の結界で防ぎ、ゴージュの方へと跳ね返した。反射結界まで使われたことに驚いたゴージュは、一步遅れて防御する。その隙にベルベノは飛び降りていった。

「くっ…どこへ？」

「暗くて見えないね〜…」

恐らくハッピー、もしくはシャルルの魔法をコピーしたのだろう。わざわざゴージュを狙ったのは、孤立している自分から倒していく為。ベルベノは、一人ずつ妖精の尻尾のメンバーを倒すことではなく、魔法をコピー出来るように近づくことが目的だと予想したゴージュは、パタモンを一度デジヴァイスに戻して弾性結界を展開し、屋根から飛び降りた。

☆

怪しい者を調べながら舞踏会に参加しているナツ達。グレイが同じ氷の造形魔法を使う女性と戦闘を始めた時はどうなるかとヒヤヒヤしたウエンデイであつたが、怪しい男とダンス（男がただ回転させられるだけだが）を中断させ剣を手に持ったエルザが止めたことでホッと息をつく。

丁度その時、バルサミコ伯爵とその娘のアチエートが会場に現れた。華やかなドレスで着飾った彼女に、会場内の男性陣が目を奪われる。そのあまりの美しさに、誰もダンスに誘うことが出来ずにいたが、アチエートは自ら、男装したエルザを誘って踊り始めた。

「なんでエルザが踊っちゃってるの!？」

「知るか！」

「これ、旨いな！」

「本当ツスね！」

「アハハ…」

最早ダンスよりも食事がメインになりつつあるナツ、ロメオ、イーロンの三人。その様子を見てウエンデイは苦笑を浮かべる。そこに、一人の少年が彼女に近づいてきた。それにいち早く気づいたイーロンとロメオはアイコンタクトをして食事を中断する。

「あの、踊ってもらえますか？」

「あ、えつと…」

「ウエンデイ姉、ちよつとこっちに！」

「え？あ、ちよつとロメオ君!？」

「すいませんツス」

またか、とウエンデイは内心思った。この舞踏会が始まってから、ウエンデイがダンスに誘われると決まってイーロンとロメオが割り込んでそれを阻止するのだ。どうしたのかと尋ねると、「兄貴以外に姉御と踊らせる気はないツス！」と宣言された。元々、ウエンデイは今回ダンスに参加するつもりはあまりなかったのだが。

「全く、油断出来ないツスね！」

「だから、俺たちのどっちかが踊ってればいいんだって！」

「兄貴の留守は俺が守るツス！」

「話聞けよ！」

「ちよ、ちよつと二人とも！」

イーロンはどうかやら自分はもちろん、ロメオにも踊らせる気はないようである。ロメオが突つかかろうとし、ウエンデイは慌てて仲裁に入ろうとするが、お構いなしにイーロンの胸ぐらを掴んだ。

「…おい、まだなのか？」

「まだツス…もう時間が無いってのに、何処行つたんだか…」

喧嘩をするフリをしながら、ウエンデイにも聞こえないよう小声で話し合う二人。一度確認の為にイーロンが屋根の上を確認しに行つたのだが、そこにいるはずのゴーシユを確認出来なかった。これでは二人の考えた仲直り作戦が台無しである。その後、外にいるシャルル

に随時確認してもらっているが報告はない。

因みにだが、シャルルと同じように外にいるハッピーとウォーレン、そして舞踏会に参加しているルーシィとグレイにはゴーシュが来ることを伝えている。他の面々には、話がややこしくなりそうと考えたシャルルの判断で内緒にしている。それに関しては、話しを聞いた皆が同意していた。

そしていよいよ舞踏会が終了する十二時となり、会場内にある巨大な柱時計が鳴り始めた。

「なんだあ?」

「いよいよ始まるぞ!」

「何が始まるというのだ?」

「指輪の披露です。あの巨大な柱時計は、七年に一度だけ扉を開き、指輪を披露する仕掛けなのです」

「そしてその中にある指輪を手にした男が娘にプロポーズ出来るというのが、バルサミコ家の伝統なのだ!」

『指輪を手にした男が…!?』

柱時計の中から、宝石が取り付けられた指輪を納めた台座が現れる。伯爵とアチエートの話を念話で聞いていたウォーレン達が、自分たちの前にある監視魔水晶^{ラクリマ}から発された非常音に気づいた。これは何かを発見したという合図だ。問題の映像を確認すると、更衣室の中で誰かの足が動いているのが見えた。それを確認した三人は、急いでその場所へと向かう。

会場では男性陣がいても経ってもいられないといった様子で、指輪へと視線を集めていた。

「さあ!娘にプロポーズしたい者は、あの指輪を手にするのだ!」

「漢はプロポーズだ!!」

「あんたがプロポーズしてどうすんのよ!」

男性陣に混じって、今回の依頼についてきていたエルフマンが走って行く。その時、ウォーレンからの念話が妖精の尻尾メンバ^{フェアリーテイル}ー全員に届いた。

『皆聞いてくれ！最後にウエンデイを誘おうとしたガキがベルベノだ！！』

「何だって！」

「あそこッスー！」

イーロンがある方向を指さすと、少年が大きく跳躍して滞空していた。そして次の瞬間、少年からアフロヘアの特徴的な顔の男、ベルベノへとその姿を変える。ベルベノは大きく息を吸い込み始めた。

「紫の炎!!」

「え!？」

「もうコピーされてたのか！」

紫色の炎が男性陣の向かう先、柱時計の傍にある指輪へとくっつく。炎は収縮し、指輪が台座から外れベルベノの手に収まった。

「ハッハッハ！バルサミコ家の指輪は確かに、このベルベノ様ももらったぜ！」

「ベルベノ……」

「おのれ、指輪を返せ！」

宙に浮いているダンス用の足場へと着地したベルベノに、同じく別の足場に乘ったナツが接近する。ウエンデイのトロイアで、乗り物酔い対策は万全だった。

「やっと面白くなって来やがったぞ……俺が相手だ！火竜の鉄拳!!」

「フツ……火竜の鉄拳!!」

「何っ!？」

ナツの鉄拳を同じ魔法で相殺したベルベノ。二人の拳がぶつかり合い、その衝撃で大きく後退したナツは追い打ちを放つ。

「火竜の咆哮!!」

「火竜の咆哮!!」

そしてこれも同じ技によって相殺されてしまった。二人はそのまま会場の中央へと着地した。

「ハッハッハ……ダンスをしている間に、お前の魔法もドレインさせてもらったのよ！」

「ならば私が相手だ！グレイ、エルフマン、アチエート殿を頼む！」

「任せろ！」

「漢だ！」

アチエートを護衛するグレイとエルフマンを確認した後、エルザは換装を始める。

「換装、煉獄の鎧！」

「換装、煉獄の鎧！」

エルザと同じ鎧を身につけたベルベノは、エルザの大剣による攻撃を難なく受け止め、そのまま押し返す。

「無駄だ！ここにいる妖精の尻尾の魔導士はその嬢ちゃん以外、そして外に待機している奴らの魔法も既にコピー済みよ！」
「ここにいない奴ら？」

ベルベノはウエンディを指差しそう言う。また、エルザはその言葉に疑問を抱くが、すぐにそういうことかと納得する。ハッピー達の魔法である翼をコピーされていたとすれば、逃げるのは簡単だろう。逃がさないようにと策を考え始める。しかし、次のベルベノの発言がエルザを混乱させた。

「まさか、屋根にまで配置しているとは思わなかったがな」

「屋根？」

「まさか!？」

ルーシイ達が、ベルベノとゴージュが出くわしたことに気づく。そこで、イーロンが前へと歩み始めた。

「イーロン、待て！」

「奴は私達の魔法をコピーしている！一人では危険だ！」

「よくも、よくも…!!許さねえツス!!鉄造形・剣!!」

合唱し鉄の剣を二本生み出し、それらを両手に持ったイーロンはベルベノへと走り出す。イーロンは以前トレジャーハンターギルドに所属していたからか、武器の扱いに長けていた。その長所を活かす為、彼は魔法でその時に合った武器を作り出して戦うというスタイルをとっているのである。

「だから無駄だ！鉄造形・剣！」

「はあっ!!……くっ！」

同じく両手に剣を持ったベルベノはエルザと同じように、イーロンの攻撃を受け止め押し返す。

「まだまだあつ!!」

「…おい、いい加減に——」

あまりのしつこさに、ベルベノが反撃をしようとしたその瞬間、イーロンを橙色の結界が覆った。再度突っ込もうと既に駆け出していたイーロンはその結界に突っ込み、弾き返された。

「この魔法…!?!」

「イーロン、落ち着いて。皆さんも、少し待つてもらえますか」

どこから声がかかるのかと辺りを見渡すと、人混みの中から正装したゴーシユが現れる。

「ゴーシユ!?!」

「なぜお前がここに…」

「そこら辺は後で…今はこの人です」

(な、なんでゴーシユがここに…!?!ど、どうしたら…:どんな顔で会ったら…!)

ゴーシユがベルベノの方を向く。他の皆もそれを見て警戒を強め、後ろの方にいたウエンディは困惑していた。避けるような態度をとったことをずっと気にしていたのである。

「よう、また会ったな」

「さつきぶりです。単刀直入に聞きますが、貴方の狙いは何ですか?」

「なんでそんなこと聞く?」

「さつき貴方は、僕を倒そうとしなかった。フェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士である」と知っていながら。それで思ったんですよ、貴方は無闇矢鱈に人を傷つけるようなことはしないんじゃないかって…なので、こうして直接聞いてるんです」

ゴーシユの言葉を聞きながら、ベルベノは葉巻を口に咥えて火を灯す。一服しているその様子に、ナツ達は僅かに警戒を緩めた。

「とんだ甘ちゃんだな」

「自覚はしてますよ…それで、どうなんですか?本当に指輪を盗むことだけが目的なんですか?」

「いや、違う…それはただの過程に過ぎないのさ」

「過程だと？」

「そうだ。前は失敗したが、更に七年も辛抱強く待ったのは…アチエート、お前にプロポーズする為だ」

「えっ…？」

「プロポーズ!？」

ベルベノは指輪を見せるように持ち、アチエートを見つめながら話し始めた。

「お前とはガキの頃からの付き合いだったが、俺はずっとお前に惚れてたんだぜ」

「……………」

「使用人の息子だった貴様を、特別に娘の遊び相手にしてやった恩を忘れたか!」

「へっ…あんたに屋敷を追い出されてから、何度もアチエートに会いに行ったが…あんたは身分違いを理由に毎回門前払いしてくれたな」

「えっ…!? パパ、そんなの私聞いてない!」

「ええい、お前は黙っていなさい!」

バルサミコ伯爵は使用人の息子であるベルベノとアチエートを結婚させるのに反対していたのだろう。ゴーシュは三人の話を聞いていて、なんだか切ない気持ちになっていた。

「俺もそのご尤もな理由で勝手にアチエートのことを諦めた…だがそのせいで心が荒んじまって、いつしか悪事に手を染め、気がつきや刑務所暮らしよ…」

「あいつ、何をごちやごちやと…!」

「ナツさん、待って下さいって」

「ゴーシュの言う通りだ」

ナツが動き出そうとしたのを見て、ゴーシュとエルザは制止する。最悪、魔法を使っても止めようとゴーシュは思った。今は、ベルベノにとって…いや、ベルベノとアチエートにとって大事な時間だと考えたから。

「でもよ、刑務所の中でお前に気持ちを伝えなかったことをずっと後

悔してたんだ！だから俺は、脱獄してこの七年に一度のチャンスに賭けたのよ！しかも二度もな！」

ベルベノはゆっくりと、アチエートへと近づいていく。ゴーシュ達も警戒はしているものの、成り行きを見守ることにした。そしてベルベノはアチエートの目の前で跪き、右手で指輪を差し出し左手を自身の胸に当てて言った。

「アチエート…俺の嫁さんになってくれ」

ベルベノのプロポーズを聞いて、周囲の人々はそれぞれ反応を示す。それはゴーシュ達も同じくだった。

「そんなもの、断るに決まっておる！」

「……はい！」

バルサミコ伯爵が騒ぐ中、アチエートは満面の笑みでそう答えた。全員が一瞬固まって、それから驚きの声を上げる。

「えええええっ!?!」

「アチエートおお!!」

「ベルベノ、私もずっと貴方を待っていたのよ！」

「本当か！じゃあ、本当に俺の嫁さんになってくれるのか！」

「ただし…自首して、罪を償ってからよ」

「…！分かった…」

アチエートは左手を差し出す。ベルベノは、指輪を彼女の薬指へとはめる。その瞬間、周囲から拍手喝采が起こった。

☆

ベルベノは評議員に連行され、エルザさんの仕切りで舞踏会は朝まで続くことになった。一度脱獄しているから重くなっているだろうけど、早く二人が結ばれてほしいと思う。

「兄貴が無事で本当に良かったツス！」

「イーロン、ロメオ…心配かけてごめんね」

「本当だよ、かなり心配したぜ？報酬もパーだしさ」

ベルベノの捕獲は果たしたものの、バルサミコ伯爵からすれば指輪を守るといふ依頼内容を果たせず、さらには娘との結婚まで許すこと

になったのだから仕方が無い。身分が違うって、そんなに重要なのかな…

「でも、俺らの目的は果たせそうだな!」

「兄貴、こっちに来て下さいッス!」

「え、ちよつと…!」

イーロンとロメオに連れられて向かう先は、ダンス用の足場がある場所。その場所には、ルーシイさんに連れられたウエンデイがいた。

「あ……………」

「……………その、ウエン——」

「はいはい、続きは上でね!」

「うわっ!」

「きやつ…!」

「それじゃ、ごゆつくり!」

二人乗ると作動するようで、足場が浮上を始める。僕、踊りなんて出来ないのに…!

気まずい空気の中、ウエンデイが僕の両手をとった。頬を赤くしているし、若干その瞳が潤んでいるようにも見える。不覚にも、ドキッとしてしまった…

「ウ、ウエンデイ?」

「その……………踊って、ないと……………」

「あー…ウエンデイ、簡単に教えてもらえる?」

「あ……………うん!」

少し説明を受けて、他のカップル達を見習いながら何となくコツが掴めてきた…ような気がする。まあ、そこまで本気でやらなくても良いだろう…本題に入らなければ。

「あの…!」

「あ…!」

「さ、先にどうぞ…」

「いや、レディファーストって言うし…」

「…ぶっ…あははっ!」

何だか、こんな会話をしているのがおかしくなって二人して嘖き出

した。そのおかげか、今ならちゃんと話せる気がする。

「あの、ごめんねゴーシユ」

「何が？」

「その、避けちゃうような態度しちゃって…何日もいなかったのも、気を遣ってくれたんでしょ？」

「そうだけど…ちよつと違うかな。何だか恥ずかしくなってきたちゃつて、その…人工呼吸…のこととか」

「わ、私もただ恥ずかしかつただけなの…」

「うん、だと思った…だから最初話せなかつたんだよね」

「うう……」

何日も顔を合わせられなくなるほど恥ずかしがるとは思っていないかつたけれどね。

「盗み聞きしちゃつたのも、本当に偶然っていうか…」

「それ、何度も聞いたよ？」

「そうだったけ？」

「…一つ聞いても良い？」

「勿論」

「その…ゴーシユは、私がゴーシユのことが好きってことを知つたから、それに応えてくれたの？」

…確かに、切欠はそうかもしれない。ウエンデイの気持ちを知つてなかつたら、天狼島の一次試験で告白したりしなかつただろう…でも。

「切欠はそうだよ…でも、僕は遅かれ早かれ告白してたと思うよ」

「…！」

「確か、あの時言ったよね？君は僕が一番大事な人なんだって。これからも、君を守り続けるって」

「…うん」

「まさか同じ家に住むなんて思わなかつたけど…支え合つて、頑張ろう」

「うん、うん…！」

ウエンデイの目から涙が溢れた。一瞬心配になつたけど、これは多

分心配する方の涙じゃない。

「私、心配だったんだ…ゴージュユに嫌われちゃったんじゃないかって」

「…余計な心配させちゃったか」

「いいの。でも、今度からはちゃんとどこに行くのか言ってるね？心配しちゃうから」

「分かったよ。もう勝手にどこか行ったりしらないから——」

——気づいたら、ウエンデイがすぐ目の前にいた。

「……！」

「……えへへ…約束、だよ！」

「……………」

「……ゴージュユ？」

「……………」

「え…ちよ、あれ？ねえ、ゴージュユ!？」

そこから先は覚えていない。後日、あれからどうなったのか聞くと、どうやら気絶したらしい僕は、トロイアが切れて乗り物酔いで倒れたナツさんと一緒に、エルフマンさんに担がれて帰ったらしい。

第55話 真の悪、ケツプリ団

朝飯を済ませ、ゴーグル型のデジヴァイスを操作し始めて数時間。ようやくだけど、ちゃんと操作できるようになってきた。このデジヴァイスを受け取った人の為に、デジモンの生態が記録されていた。その中には進化や退化、凶鑑なんかもあった。

デジモンは成長の節目で強力な形態(場合によっては弱くなってしまふこともあるみたいだけど)へと進化する。生活の仕方や戦闘経験、住んでいる環境によっても進化先が変化するらしい。進化段階は幼年期ⅠとⅡ、成長期、成熟期、完全体、究極体：例外な進化によってアーマー体やハイブリッド体、超究極体に分類されることもあるらしい：これは、特殊な道具が必要だったりするみたいだ。他にもモードチェンジなんてものもあるみたいだけど今は無視。

デジモン同士の戦闘で重要なのがその進化段階と、属性。ワクチン、データ、ウイルスの三すくみと、無属性(フリー)というものもあるようだ。ワクチンはウイルスに強くデータに弱い、ウイルスはデータに強くワクチンに弱い、データはワクチンに強くデータに弱い、というようになってる。

で、以前話していたメモリ：デジヴァイスの容量についても記録があった。これは、パートナーとなったデジモンが進化、もしくは新たにデジモンがパートナーとなった時に拡張される、らしい。

「メタルキャノン!!」

「アイアンメイク シールド 鉄造形・盾！からの、スピア 槍！」

今、このデジヴァイスの中にはドルモンの姿はない。これらの記述を発見した僕たちは、早速イーロンやロメオ、ウエンデイと模擬戦をしてもらっている。プロットモンとパタモンはいるけど。さて、そろそろ僕も合流しよう。

「三人とも、調子はどう?」

観戦していたウエンディ、シャルル、ハッピーに声をかける。シャルルがいるからなのか、最近ウチにハッピーが遊びに来るようになった。シャルルも心なしか嬉しそうに見えなくもない。僕がジツクリとデジヴァイスを操作している間、三人にイーロンとドルモンの戦闘を見てもらうようお願いしたのだ。

「今のところ、イーロンの方がちゃんと戦えているわね」

「ドルモンも段々動きが良くなってるよ!」

やっぱりまだイーロンの方が上か。如何せんこの世界での暮らしが長いせいか、デジモンの成長期の強さの基準がいまいち分からない。きつと慣れない世界で、しかも魔法なんてものがある世界だから苦戦しているのかもしれない。

「そっちはもういいの?」

「うん、大体分かったよ」

余計な混乱を避けるために進化条件に関する説明だけして、進化段階や属性の話は後回しにすることにした。

「じゃあこの模擬戦もまんざら無意味ってわけじゃないのね」

「うん。きつと、少しずつ成長してるはずだよ」

デジモン凶鑑に関しては僕もあんまり見ていないんだけど、彼らがどんなデジモンに進化するのが楽しみだ。グレイモンとかの姿を見たときに既視感のようなものを感じたから、多分前世のアニメか何かで見たんだろうな…本当に、前世の記憶が全くないんじゃないかと思うほど薄れている。どうしてこんなに忘れてしまったんだろう? ?

まあ、忘れてしまったものは仕方ない。重要なのは、デジモン達の進化条件の一つに、環境というものがあることだ。この世界はデジタドルワールドには存在しない魔力というものが存在している。これがドルモン達にどう影響していくのか…それは分からない。魔力と言っても炎だったり氷だったり、様々な魔法が存在しているし。

「二人とも、そろそろ休憩しよう!」

「了解ッス!」

「あ、ああ」

やっぱりドルモンの方が消耗が激しいか。今後僕やウエンデイ、ロメオ君にも手伝ってもらおうと思っただけだ……この特訓をする時は短い時間でローテーションでやろうかな。それなら消耗しすぎて時間切れ、なんてことにはならないだろう。

「ドルモン、調子はどう？」

「魔法って凄いね……戦ってみると本当にそう思うよ」

「すみません姉御、ご飯まで作ってもらっちゃって」

「ううん、大丈夫だよ！簡素でごめんね？」

「ウエンデイのご飯、美味しいから大好き！」

「本当だよね〜」

「また勝手に出てきてる……」

ウエンデイの作った大量のサンドイッチを、デジモン達は凄い勢いで食べている。どこにそんな量が入っているんだろうか。そしてイーロン、君はなんで張り合っているんだ。

「そういえば、ウエンデイは明日ナツさん達と仕事だっけ？」

「うん、貨物列車の警護の仕事だね」

「兄貴も明日俺たちと仕事ツスからね！」

「分かってるって。多分僕らの方が早く終わるだろうから、先に帰って夕飯準備しとくよ……気をつけてね」

「うん！」

「それにしてもナツさん……乗り物関係の依頼受けなきやいいのに」

「それに関しては同感です」

「だったらハッピーも止めてあげてよ……」

☆

マグノリアから出て西に位置する場所に、鳳仙花村という村がある。小さくもの静かな村で、旅館や居酒屋などの東洋建築が立ち並ぶ温泉観光地だ。ナツ達は以前この村にある旅館に泊まったことがあり、ルーシイはロキとの契約の際に、この村で星霊王と謁見したことがある。

その鳳仙花村に到着したゴーシユ達。今回の依頼は最近村を荒らすようになった盗賊達の捕縛だ。この盗賊団も、以前ナツやルーシイがこの村に立ち寄り切欠となった依頼で捕らえられたが、七年の間に釈放され、以前と同じようなことを繰り返していた。依頼人のとある旅館の女将の話では、盗賊団のアジトはこの村の近くにある小さな洞穴らしい。早速ゴーシユ達はその洞穴へと向かった。

「あの洞穴がそうかな？」

「多分そうだね」

「プロットモン、勝手に行ったら駄目ツスよ！」

「分かっているって！さ、行こーっ！」

洞穴を発見し、そこに近づいていく。中はかなり荒れ果てているようだが、見張りを確認したゴーシユは予め決めていた作戦を実行することにした。

「プロットモン、頼んだよ」

「任せて！すうく…パピーハウリング！」

「な、何だあ!？」

「み、耳がく！」

「今だー！」

「了解！」

プロットモンの必殺技を受けた盗賊達が耳を塞ごうとした所を、ゴーシユ達は片っ端に攻撃し、一撃で倒していく。実力自体も七年前と同じか、年を重ねたことによって肉体的に衰えた者が多かったようだ。こうして、あつという間に盗賊達は壊滅した。

「これで依頼完了ツスね！」

「大したことなかったな、コイツら」

「ねー、これ持って行っていい？」

「それ盗品なんだけど…」

それから約1時間後、盗品や盗賊団を評議員に引き渡し、依頼人から報酬の宿泊年間無料券をもらった三人はギルドへ戻ることにした。プロットモンは温泉に入ってみたいと駄々をこねていたので、また遊びに来ると約束して連れ帰る。

(夕飯用意するって約束しちゃったし：今度ウエンデイ達も一緒に来よう)

「兄貴、帰りの運転は俺がするツス！」

「大丈夫だって、これも修行のうちなんだから」

「確かに修行になるだろうけど、やりすぎじゃね？」

「前ももっと長い距離移動したこともあったけど…」

「マジか！」

ゴーシユの自前の魔道二輪にイーロンが魔法で作ったサイドカーを取りつけ、数時間かけてここまで来ていたのだ。ゴーシユからすれば魔力を高める修行の一つだし、乗せる人数も増やせば修行の質も上がるというものだ。ロメオとイーロンが説得するも、結局は無駄に終わった。

「そういうえば、ウエンデイ達も仕事終わる頃じゃない？」

「どうせなら線路沿いに走ろうぜ！ナツ兄達に会えるかも！」

「姉御を迎えに行くツス！」

「これ以上乗れないって：まあいいか」

☆

同時刻、ウエンデイ達が護衛している金塊を乗せた貨物車両では問題が発生していた。ケツプリ団と名乗る三人組が金塊を盗もうと襲ってきたのだ。彼らはその独特な方法でルーシイ、ハッピー、シャルルを車両から吹っ飛ばすと、連結部を爆弾で破壊した。そして独特な方法——ガス欠トリプルエクスタシーによって進行していた方向と逆方向に進んでいた。

貨物車両に残ったウエンデイは、自分が何とかしなければと自身に言い聞かせる。ナツも残っていたが、彼は四時間近く列車に揺られていた為グロッキー状態である。何故かルーシイが出していた子犬座の星霊のプルもいたが、戦闘力は皆無である。

一時的に仲間になったフリをすることにしたウエンデイは、彼らと金塊を依頼主に分けてもらえるよう交渉すると言いくるめ、天竜の咆哮を推進力に車両を目的地へと向かわせている。その車両をゴーシユ達は目撃した。

「あれ、車両が一つしかないツスね…」

「あの魔力：ウエンデイ？」

「何かあったんだ！ゴーシユ兄、早く行かないと！」

まさか本当に合流するとは思わなかったが、何かあったのなら向かわなければ。ゴーシユはそう考え魔道二輪を発進させる。

「ちよ、ゴーシユ兄!？」

「速すぎるツス…!」

「ごめん、我慢しててくれ！」

付属のSEプラグのチューブが膨張するほど魔力を込めたゴーシユ達の乗る魔道二輪は、徐々に車両へと近づいていく…が、まだ距離がある。車両が推進力を失って停止したその時、誰かが車両へと着地した。

「今の、ルーシィ姉だ！」

「イーロン、後は任せる！」

「ちよ、兄貴!？」

弾性結界^{バウンド}を展開し、ゴーシユはSEプラグを外し運転席から飛び降りた。イーロンは慌てて運転席へと移る。イーロンはサイドカーではなくゴーシユの後ろに乗っていた為、すぐに移ることが出来た。

「あれ、楽しそう！」

「無茶するなあ…」

「さすが兄貴ツス！」

弾性結界^{バウンド}を伝って空中を走るように進むゴーシユを眺める三人。そしてようやく、ゴーシユは車両の屋根の上へと着地した。

「ゴ、ゴーシユ!？」

「な、なんでここに!？」

「依頼の帰りに、この車両が見えたので急いで来ました。ルーシィさん達は…ええ？」

後ろを振り返ったゴーシユは目を疑った。何故なら、ウエンデイが普段絶対に目にしない格好をしていたからだ。所謂、全身真っ黒のタイツ。猫耳のようなものが頭の上についている。一回目を擦り、もう一度確認する。見間違いはなかった。

「ウエンデイ……だよな？」

「こ、こつち見ないで〜…」

ウエンデイは座り込み、恥ずかしさのあまり泣き始めてしまった。ゴーシユは視線を前へと戻し、全身真っ黒のタイツをした三人組を視界に捕らえる。

「……………」

「お、おい！なんだこの坊主!？」

「な、なんか、怖いっす〜!!」

「おつかないでやんす〜!!」

その凄まじい怒気を魔力に変え、ゴーシユは特大の青緑色の結界を生み出した。それを見た三人は恐怖のあまりガタガタと震え始める。間接的にはあったが、ウエンデイを泣かせたということでゴーシユの怒りのボルテージは急上昇していた。

「全員……」

「ちよ、まつ——」

「吹っ飛べー……っ!!!」

「「ぎやあー……っ!!!」」

マックスストレート
大黒柱拳が野球のバットの要領でフルスイングされ、ケツプリ団の三人は星となった。

☆

ロメオやイーロンも合流し、結局車両が目的地に着いたのは夜。報酬は半分となり、ルーシイは肩を落とすのだった。ウエンデイは今回のことで恥ずかしさのあまり、また以前のようにしばらくゴーシユと顔を合わせることが出来なくなった。今回はどうして避けられているのか分かっていたので、ウエンデイが落ち着くまで待つことにしたのであった。

（思いつきり我を忘れて攻撃しちゃったけど……あんな格好、人前でさせてたまるか!）

ゴーシユは若干顔を赤くしながら、二度とケツプリ団をウエンデイと接触させないことを誓うのだった。

第56話 透明ルーシイの恐怖

「だらしねえな、ナツ！」

「ふーん、ルーシイ姉に叩き出されたのか」

「ああ、折角一緒に仕事行こうと思ったのによ」

「どうやら、またナツさんがルーシイさんの家に入り込んだらしい。懲りないなあ…ルーシイさんの家って鍵かかっていないんだろうか？確かグレイさんとかエルザさんもこの前入り込んでいたような…？」

シャルルの話だと、時々お風呂も使っているとか…それはさすがに怒られると思う。というかそこまでされているのに対策しないのはどうしてだろうか。

「でも、もう少し優しくしてくれても良いと思う！あんなだから、いつまで経っても彼氏が出来ないんだよ」

「そいつは言えてるな！」

「つか、彼氏が出来てもすぐ逃げられちゃうんじゃないか？」

「元がお嬢様でも、中身は逞しいからな」

「真の荒々しさを持つ漢でなければ、太刀打ち出来まい」

「ルーシイも我らがシャドウギアのレビイを見習って！」

「もつと可愛くすればいいのによ！」

「私も、そんなにお淑やかなタイプじゃないと思うけど…」

ルーシイさんが聞いたら怒りそうな内容だな…中身が遅しくない人なんて、このギルドにいない気がするけど。目の前の少女だって、礼儀正しくて良い子だと思うけどお淑やかかってわけじゃ…

「…ゴーシユ？また変なこと考えてない？」

「いやいや、そんなことは」

いい加減この感知能力どうにかしてほしいんだけど。心を見透かされているように感じる。

「テメエ、何すんだよこの野郎！」

「あ？何のことだよ」

「とぼけんな！今俺の頭から、酒ぶっかけやがっただろうか！」

「妙な言いがかりつけんな！」

「お前じやなきや誰がやるんだ！」

「知るか！」

急にマカオさんがワカバさんに怒り始めた…どうしたんだろう？
なんかいつもの喧嘩騒ぎとは違うけど…

「いてて、何だよいきなり！」

「何すんだ！」

「先にやったのはそっちだろうが！」

「なんだなんだあ！喧嘩かあ!？」

レビイさんの後ろにいたジエツトさんやドロイさんまで喧嘩し始める。グレイさんは服を一瞬で脱いで喧嘩に加わろうとするし…いつも思うけど、それどうやってるんだろう。一瞬だからどう脱いでいるのか分からないし。

「どうしたの、急に？」

「なんか酒をかけられたとか何とか…」

どんどん喧嘩の規模が大きくなり始める。…巻き込まれないようにカウンターあたりに待避しとこう。喧嘩に参加していないのは僕とイーロンとロメオ君と女性陣…あ、エルザさんが参加していった。というかなんでエルザさんにだけ椅子やらテーブルやらがピンポイントでぶつかるんだ。絶対誰かが意図的にやっただろ。

「エルザさんまで加わっちゃった…」

「こうなると思ったけど…」

「ハア…成長してないのはエルザも同じみたいね」

「これ、建物壊れませんか…？」

「そろそろ止めさせないと！」

「キヤーツ！どこ触ってんのよ！」

その時、吹っ飛ばされたナツさんの方から叫び声と乾いた音が聞こえた。今の声…ルーシイさん？

☆

どうやらさつきまでの騒動の原因は、透明になったルーシイさんの

イタズラらしい。さっきの会話を聞いて腹を立てたそうだ。何故透明になってしまったのかというと、七年前に自作した魔法入浴剤を使用したからなんだとか。で、今僕らの目の前には衣服だけが見えている状態で椅子に座るルーシイさんがいる。

「なるほど、こういうことか…」

「見れば見るほど妙な光景だな…」

「ちよ、ちよつとそんなに見ないでよ、恥ずかしいじゃない…」

「不気味だ!!」

「何よ!!」

その場にいたほとんどの人が口をそろえて言ったのに対し、ルーシイさんが怒る。だって表情分らないんだもんなあ…昼間だけどちよつとしたホラーだよ、これ。

「困ったことになったわね。とりあえず服を着せてみたは良いんだけど」

「元に戻れないんですか?」

「うん…それで皆に何とかしてもらおうと思つて」

「なーに、別に気にすることねえんじやねえか?面白いからそのまま一緒に仕事行こうぜ!」

「行けるわけないでしょ!誰か知らない?透明になる魔法を解除する方法!」

確かに、こんな服だけ浮いた状態で依頼人に会ったらビツクリしちゃうし…こういう時、ディスペラ解除魔導士がいてくれれば助かるんだけど。ウチのギルドでそんな魔法使える人いないし…困つたな。

「そんなこと言われてもなあ…」

「んー…:…よーし、良い考えがある!」

「何!?!」

「火で炙つてみれば何とかなるんじやねえか?」

…え?

「そ、それってなんか根拠あるの…?」

「確か前にも、石になった私にそんなことしていたな」

「でも他に思いつかないなら…:…しようがないんじやないか?」

「うむ：漢なら、あれこれ迷わずにやるべし！」

入浴剤ってことは、皮膚から浸入したわけだから：効果がないわけじゃない、か？でも、もうかなり時間経ってるし意味ないんじゃない？

「よし、行くぞルーシィー！」

「俺も手伝うよ、ナツ兄！」

「待って、まだ心の準備が：！」

「せーのー！」

「あちやちやちやちやちや、あちや、熱!!」

「うーん：効き目なしか」

「当たり前でしょ！」

炎で炙られてもツツコミは忘れないルーシィさん。まあ、こうなるだろうとは思ってた。

「元氣出してルーちゃん、きつと何か方法が：」

「ウイ、こんな時こそ俺の出番かな？」

「何か手があるの？」

「任せて、俺がルーシィの顔を描けばいいんだ！」

そう言つてリーダスさんがルーシィさんの顔を描き始める。そしてほとんど一瞬でルーシィさんの顔が出来上がった。ちよつと違和感あるけど、まあ何も見えないよりはマシか。

「に、似てるような似てねえような：」

「ホントのルーシィより美人だね！」

目の部分が急に透明になったので、ちよつと怖い。そりや瞼の上に描いたからそうなるのはしょうがないんだけど。

「なんか、複雑：」

「だったら、これなら！」

「こんなのやだ！」

そしてしばらく、お絵かき合戦が始まった。ハッピーみたいな顔になったり、エルフマンさんと同じ顔になったり：グレイさんが氷で顔を作ったけど、それが溶けて恐ろしいことになったのは言うまでもない。結局ミラさんが持ってきた週間ソーサラーの写真を切り取ってテープで固定することにした。

「ただいま」

「ウエンデイとシャルル、どこ行つてたの？」

「ルーシイの部屋よ。薬の瓶と…」

「星霊の鍵を持ってきました！」

「そうか、星霊に頼るつて手があつた！」

さつきから姿を見ないと思つたら、そういうことか。でも多分、ルーシイさんの星霊の中で解決出来そうなのはいい気がする。でも、魔法薬の成分が分かれば何とかなるかも！

星霊を試している間、僕は魔法薬をレビイさんとフリードさんの元へ持つて行く。

「レビイさん、フリードさん」

「うん、任せて！」

「やつてみよう」

二人にも伝わつたらしく、魔法薬の成分を解析していく。まあ、魔法薬のレシピみたいなのメモが瓶に貼つてあつたので時間はかからなかつたが。解析が終了し、フリードさんが術式を発動した。しかし、特に何も変わらさず。

「本当に効き目あるの!？」

「ある。ただし七年前の薬だから…」

「…解除するのも、七年かかるの」

「そんなに待つてられないわよ!!」

本当にどうしよう。多分術式で駄目なら制限結界でも無理。七年間展開し続ける?それこそ無理つてもものだ。

「つて、何コレ？」

「ルーシイさん!？」

直後、ルーシイさんが身につけている衣服や写真が薄くなり始めた…なんか本格的にヤバくないか？

「存在が消えかかつてるのよ!」

「何だと!？」

「透明になるだけじゃなく、元々いなかったことになるってこと！」

「じゃあ、今頃ルーシイさんの部屋は…」

「空き部屋になってるはずよ」

「そ、そんな！あたしはここに居るわよ！ねえ、皆——」

「あれ…私、何の話してたんだっけ」

「さあ…」

「何だ…この感じ」

「何か足りないような…変な感覚だ」

「俺もだ…」

何を話していたのか、思い出せない。何か大切なことを話していたような気がするんだけど…なんで集まっていたんだっけ？

「とりあえず、仕事にでも行くか」

「兄貴、次の仕事探すの手伝って下さいッス」

「え？あ、うん」

「あ、俺も一緒に行くよ」

何だろう。いつもと同じ会話、いつものギルド…だと思っただけ。何かが変わる。何かは分からないんだけど、異常なことだけは感覚で分かる…ような気がする。気のせいなのか…

クエストボードに近づこうとしたその時、カウンターでご飯を食べていたナツさんが立ち上がった。

「よーっし！腹ごしらえも済んだし、仕事に行こうぜ！ルーシイ、ハッ
ピー！」

「あいさーっ！」

「…!」

「そうだ、ルーシイ!俺(オイラ)達と同じギルドの、同じチームの!」

ナツさんが言ったその一言で、その名前で、徐々に記憶が戻ってきた。皆も同じようで、ルーシイさんのことを皆が思い出していく。そして気がつくのと、ルーシイさんが窓際に立っていた。レヴィさんがルーシイさんに駆け寄り喜ぶ。

「魔法が解けた!」

「ナツさんがルーシイさんのこと思い出したから?」

「ギルドの絆は簡単には消えねえってこった!」

「そういうことだぜ!」

「あんたたち、綺麗にまとめているけど…今回全く役に立ってないわよね?」

シャルルの言うあんたたちとは、マカオさんやワカバさん、その後ろでドヤ顔しているマックスさん達である。シャルルのツツコミを受けても彼らは無視することにしたようだ。凶星だったからかな…

「にしても、ただの魔法薬がこんな恐ろしいことになるなんて…」

「他の皆も、持ち物の管理には気をつけてくれ」

エルザさんが天狼組にそう言っつて、全員が頷く。もうこんなことは起こらないようにしないと。…もし、また同じようなことが起きてしまった時の為に、新しい結界魔法を考える必要があるかもしれない。今回はナツさんが思い出してくれたから良かったけど、下手すればルーシイさんは誰にも思い出されることなく存在が消えてしまっていたかもしれない。…いや、多分フリードさんの術式の効果で七年後には解けたと思うけど。

「…っつてハッピー!何する気——」

「うわっ!」

ハッピーが蓋の外れた魔法薬の瓶を何処かに運ぼうとして中身を溢す瞬間を見ていた僕は、結界を駆使して皆を守った…そしてエルザさんにハッピーがシメられたのは余談である。

星空の鍵編

第57話 父の遺品

「おはようございます」

「おはよう、三人とも！」

「皆、何か飲む？」

キナナさんに適当にジュースを頼んで、ウエンディとシャルルと共にルーシイさんが座っているテーブルに加わる。ルーシイさんが渋い顔をしていたのでどうしたのか尋ねると、どうやら新聞に載っている教会連続破壊事件のこのようだ。ニルヴァーナの時にジェラルを連れて行ったラハールさんの顔写真も載っている。どうやら今回の事件の担当らしい。でもまだ犯人すら特定出来ていないんだとか。

「いつの間にかそんな事件が起きてたんだね」

「私達、七年もブランクあるわけだし……」

「そのせいか、予知能力も調子悪いみたい。散漫なイメージしか浮かばないのよね」

そういえば最近、というか天狼島から戻ってきてからシャルルの予知の話を聞いていない気がする。予知能力も魔法の一種ってことなのだろうか……というか、予知能力が調子悪いつてどういう感じなんだ？

そんなことを考えていると、テーブルの近くで寝ていたナツさん（朝早くから外の畑仕事をして疲れたんだとか）が目を覚ます。

「何の匂いだ？」

「あ、起きた」

「ルーシイ姉、お客さんだよ」

「ん？」

「あそこにいるのがルーシイ姉だよ」

「ありがとうございます」

直後、玄関の方を見るとロメオ君が、お客さんだと思われる薄いピ

ンク色のドレスを着た大人びた印象の女性に説明していた。その女性がロメオ君に礼を言つて、こちらへと近づいてきた。

「あ？誰だ？」

「さあ…」

「貴女が、ルーシィーハートフィリア…」

「うん、そうだけど…あの、誰、ですか？」

「誰、って……………」

多分年上だろうその女性に対して、ルーシィさんは少し戸惑いながらそう尋ねる。しかし次の瞬間、ルーシィさんの戸惑いはさらに大きなものとなった。何故なら…

「ミツシエルハロブスターですよおおおっ!!うえくくくくくん!!!」

「はいいーっ?!?!」

突然涙目になったと思ったら、急に大泣きし始めたから。

「お知り合いましたか」

「いきなり泣かすなよ」

「え、ええ……………」

これはまた、ギルドが賑やかになりそうだなあ…とりあえず、泣き止ませて下さい。

「ごめんなさい、随分久しぶりだから分からないのも無理はないわね」

「あの…鼻が」

「これ良かったらどうぞツス」

「あ、ありがとう」

あまり女性に対して適した表現じゃないかもしれないけど、泣いた影響か鼻水が凄いことになっていたので、イーロンが気を利かせてティッシュを渡した。そういえば朝早くに特訓してくるって出て行ったけど…いつからいたんだろう？そして落ち着いたのか、改めて自己紹介をし始める。

「それでは改めて…私、ミツシエルハロブスターです。お久しぶりです、ルーシィ姉さん」

「ね、姉さん!?!」

あれ…ルーシイさんって確か一人っ子じゃなかったっけ？そういう
えば、妖精の尻尾フェアリーテイルで兄弟がいるの、よくよく考えたらミラさん達だけ
じゃないかな…？とにかく、他に兄弟がいるなんて話、聞いたことが
ないけど。

「驚きの真実！ルーシイパパに隠し子が!？」

「じゃなくて、ロブスター家はハートファイリア家の遠縁にあたるの」

「つまり、ルーシイの親戚？」

「そういうことね」

「でも、なんでお姉さん？」

「雲泥の差つてのはこのことか」

「よく分かんねえけど、お前ルーシイの娘つてことだな」

「なんでそうなるのよ!？」

「冗談だっつーの…」

ナツさん、冗談とか言うんだ…あとエルフマンさん、そんな失礼な
ことを言っていると後で仕返しされますよ、きつと。

「で、なんであたしがお姉さん？」

「だって、年上だから」

「でも、貴女の方がどう見たって年上でしょう？」

「それは…」

なるほど、この七年の間に年齢差が逆転してしまったということ
か。タイムスリップしたようなものだから、こういうことがあっても
不思議じゃない。実際、僕やウエンディよりロメオ君とイーロンの方
が年上になっているし。ナツさんはそこら辺の説明をしても頭が追
いつかずフリーズしてしまっただようだ。

「やつと、やつと姉さんに会えた…」

「ま、まあまあ…っていうか、その荷物は何？」

そういえば、入ってきた時から大きめのトランクを持っている。な
んか楽器でも入っていそうなくらい大きい。両手でずっと大事そう
に抱えている。

「これは…私はこれを、姉さんに…!」

「あ」

ミツシエルさんは感極まったのか、そのトランクを手放してルーシイさんに抱きつこうとする。当たり前だけど、この世界にも重力というものが存在するわけで。そのトランクの角がミツシエルさんの右足の親指辺りに直撃した。その瞬間、短い悲鳴が響き渡った。

「わ、私！どうしてもルーシイ姉さんに渡したくてずっと探してたの〜！」

「泣かすなよ！それでも漢か！」

「あたし女の子！」

「お、重いですよこれ…！」

「何が入ってるんだろう…！」

ルーシイさんがそのトランクに手をかけるが持ち上がらず、僕とウエンデイで支えてようやく床からはなれた。確かに、思ったより重い…。ミツシエルさん、意外と力持ちなんだな…。ずっと持っていたら腕が痛くなりそう。

「なんだ、アイツ…！」

「ルーシイの親戚っていうのも信憑性があるね。あのドタバタ感が…！」

それについては同意、だけどブルーが頷いているのがちよつと面白かった。ブルーもそう思ってたんだね…

なんやかんやあったが、とりあえず荷物をテーブルの上に置き、ミツシエルさんにこれが何なのか尋ねると、どうやらルーシイさんのお父さん…ジュードⅡハートフィリアの遺品らしい。ミツシエルさんは彼の仕事を手伝っていて、彼の最期の願いでこれをルーシイさんに届けるよう頼まれたんだとか。

「お父さんが、最期の時に…！」

「行方不明だった貴女をずっと心配していたけど…きつと何処かで生きているから、きつと帰ってくるから、見つけ出して渡してほしいって。…眠るような、穏やかな最期だった。それから今日まで、ずっと貴女を探していたの。やっと、会えた…これでジュードおじさんとの約束を果たせる」

「…何が入ってるの？」

「分からないわ。私はただこのケースを渡すよう言われただけだから……」

「お父さん……」

「開けてみるよ」

「え？」

「中、見たらどうだ？こいつ、お前のことすつげえ探してたんだろ。どんな大切なモン預かってたか、見せてやってもいいんじゃないか？」

「……うん」

ルーシイさんが早速ケースを開けてみる。中には、包帯のような白い布に巻かれた細長い何かが。

「えつと……」

「何だこりゃ」

「この布……」

「なんか魔法がかかってんな……さつきの匂いはこれか」

あ、さつき突然起きたのはこれを感じしていたのか。ナツさんの嗅覚、凄いな……。同じ滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーのウエンディも確かに嗅覚とか視覚とか五感が鋭いけど、ナツさんは異常な気がする。ドラゴンの育て方で変わるものなんだろうか。

「あ………」

「シャルル？」

「どうかしたの？」

「……うん、何でもない……」

後ろからだから表情は分からないけど……シャルルがあれを見て驚いているような気がする。予知が関係しているのかな。……内容によるけど、シャルルは言わないこともあるし。……特に、不吉な未来に關してはその傾向が強いだろう。

ルーシイさんは白い布を解き始める。中から出てきたのは、錆び付いた機械仕掛けの細長い鉄の棒……としか言えない。ルーシイさんも見覚えがないらしい。ナツさんは武器だと予測するが、恐らく違う。武器だったら持ち手の部分があるはずだし。この棒にはそれと思しき箇所が見当たらない。

「思い出した！」

その時、ミッシェルさんが手を合わせてそう言った。

「やっぱり武器だったのか？」

「いいえ…」

「それじゃ一体…？」

「私…：三日前から何も食べてなくて」

ギルド内に、大きな音が響き渡った。

☆

ギルドで三日ぶりの食事をとったミッシェルさん。三日ぶりだったせいか、凄い食べっぷりだったとだけ言っておく。その後、彼女の要望で、一度ルーシイさんの家を見に行った。

ルーシイさんの家に居候することになった彼女は今、ギルドで働いている。キナナさんやミラさんと同じようにウエイトレスのようなことをしたり、掃除や洗濯などの家事全般をこなしている。まあ、やっぱり失敗することはあるけれど。その度にルーシイさんが慰めている。

そして今日は、ルーシイさん達の上級退治の仕事について行っただい。最初はルーシイさんは危ないと言って反対していたけれど、結局了承した。本当は、僕やウエンデイも一緒に行こうと思ったんだけど…

「すう…：…」

「やつと寝てくれた…」

「凄かったね、アスカちゃん」

「お帰りなさい。遅かったわね」

「悪かったわね、二人とも」

「相手するのは大変だったろう？」

「いえ、これくらい大したことないですよ」

アルザックさんとビスカさんの娘のアスカちゃんの遊び相手に認定されてしまったのでついて行けなかった。まだ小さいの…：いや、小さいからか。元気一杯で、ただ遊びに付き合っただけなのに、もう

辺りが暗くなっている。シャルルはギルドでのんびりすると言っているがこなかったし、今日はプロットモンの日だったから追いかけてこが始まって子供が二人に増えたというか。

で、ようやく疲れが出てきたのか目を擦り始めたので、ギルドまで連れ帰ってきた次第だ。背負っていたアスカちゃんを起こさないように気をつけながらビスカさんに預ける。

「それで、どうだった？」

「ロブスター家はちゃんと実在したらしいわ。ただ、数年前の事故でミッシェルだけ生き残ったみたい」

「じゃあ、ミッシェルさんも家族が…」

「そんな…」

四代目マスター達がミッシェルさんのいない今のうちに身元を調査してきたらしい。評議員に忍び込まれたこともあったので、これくらい慎重になった方がいいとは僕も思う。シャルルはこの話を聞く為に残ったとも言える。

「ねー、ゴージュー！」

「ん？」

「そろそろ帰らない？私、ウエンデイのご飯食べたい！」

「ふふ、じゃあ帰ろっか」

「随分気に入られたわね」

「いやいや、今日は俺が担当ツス！姉御の手を煩わせるわけには…」

「えー、やだーっ！」

「大丈夫だよ、料理するの楽しいし」

今、ゴージューが振動したからドルモンも反応したな…まさかここまでウエンデイの料理を気に入るとは思わなかった。美味しいのは認めるけどね。そういうえば、デジタルワールドの食材ってどんな感じなんだろう…：そういうえば、弱肉強食みたいな記述があったような気がする。だったら、料理自体食べたことないのは当然か。今日はご飯の取り合いになりませんように…

第58話

怒濤の対決！ナツVS・ラクサス

ミツシエルとルーシィは、ジュードⅡハートフィリアの遺品を調べてもらうようギルドに依頼を出すことにした。それに名乗りを上げたのはナツやグレイといった最強チームにウエンディやゴーシユその他である。結局は、妖精の尻尾フェアリーテイルの全員が手助けするんじゃないかと思えてくる。

(これなら依頼にする必要ないんじゃない？)

と、ゴーシユは思ったが気にしないことにした。そんな中、ミツシエルは例の遺品を持ったまま転倒。遺品が地面に転がり、その衝撃が原因だったのか、得体の知れない魔力を纏ったままクルクルと回り始め、やがて直立する。すると徐々に何か文字が浮かび上がってきた。

マスター・マカロフはその魔力を感じ取り、ルーシィに対しこれ以上この件には関わらない方が良いと伝えるが、ルーシィはどうしてもこの遺品について知りたかった。父が自分に遺してくれた物だから。何か意味があるのなら、それを知りたかった。

「姉さんどう？古代文字見つかった？」

「ううん、全然駄目…」

「もつと他の文献があれば良いんですが…」

ゴーシユは今、ルーシィやミツシエルと共に古代文字の文献を漁っていた。シャドウギアで仕事に行っているレビィや雷神衆で何処かに出かけているフリードに代わり、この二人から文字魔法について多少学んでいるゴーシユが手伝うことになったのだ。しかし、ギルド内にある文献だけでは浮かび上がってきた文字を解読することが出来ずにいた。これが以前のギルドであれば、まだ文献の量が桁違いなので探しようがあったのだが、完全に手詰まりである。

「ルーシィ、仕事だ」

「金塊を奪った奴らを捕まえに行くんだとよ」

エルザとグレイがやって来て、依頼に誘ってくる。内容を聞いて、ルーシィはついこの前も同じようなことをしていた奴らがいたなど

思い出す。

「もしかして、またケツプリ団？」

「さあな…行きや分かんたら」

「ごめん、今回はパス！」

「鉄の棒から浮かび上がった文字の解読が進まないの」

「ナツは？」

「さあ？どこかに出かけたみたい」

依頼をやると言い出したナツがいないのはどういうことかとエルザは疑問に思い尋ねるが、ルーシイ達は知らないと言う。

「ゴーシユ、お前は どうする？」

「今回は解読を手伝うので、遠慮しときます」

「ウエンデイやロメオ達もいないが…」

「ロメオ君とイーロンならデジモン達と戦闘訓練してますよ。ウエンデイは分らないですが」

ゴーシユが頭の上を指さし、ゴーグルが無いことに二人は気づく。

「仕方ない、二人で行くぞ、グレイ」

「ああ…え？ちよちよ、ちよつと待て、二人つて俺とエルザだけで行くのか？」

「何か問題でも？」

「え？いや…ないなあ」

「上手くいけば、今日中に戻ってこられる。急ぐぞ」

（問題アリです、グレイ様!!大体、なんでジユビアを誘ってくれないんですか〜!!酷い〜!!）

（グレイさん…なんかごめんなさい）

その後、ジユビアが走って出て行く所を目撃したゴーシユ。そしてリクエストボードに謎の、何かに握り潰されたかのような箇所を発見し寒気を感じるのだった。

☆

その頃、マグノリア近辺の森の中。そこではナツとハッピーが釣りをしていた。中々釣れずに、ナツが飽き始め居眠りしそうになってい

た時、突如として謎の光が天へと昇っていった。それを見て、ナツはラクサスがこの近くにいと確信し、光の元へと向かう。ハッピーも慌てて追いかける。

途中でガジルに遭遇し、喧嘩し始める。そして現れたのは、案の定ラクサス。それと、この森で丁度バーベキューをしていた雷神衆だった。そんな中、ある人物がこの状況に遭遇する。

「どうするのよ、ウエンデイ」

「どうするって言っても…」

ウエンデイとシャルルだ。彼女達は一旦様子を見るべく草陰に隠れる。この辺に住み着いていたというラクサスに、勝負を持ちかけるナツとガジル。雷神衆は自分たちが相手をしようとするが、ラクサスがそれを止める。どうやら一対一で戦うつもりのようなのだ。最初はナツ、次にガジルが戦うらしい。

それを聞き、ナツとラクサスが戦い始めようとしたその時、何とかその場を納めようとウエンデイは飛び出した。

「そこまでです!」

「ウエンデイ?」

「こういうことは、ちゃんと段取りを踏んだ方が良いと思います!」

「段取り?」

「なんだそりゃ」

「勝負は、明日です!!」

ウエンデイの真剣さに、よく分からないながらもそれを了承する三人。場所をマグノリアの南口公園——以前、シャドウギアの面々がファントムロード幽鬼の支配者の奇襲を受け、磔にされていた場所——となった。

彼らが帰っていくのを見届けたウエンデイとシャルルは、大急ぎでギルドに戻るのだった。

☆

「…というわけなの」

「マスターは?」

「それが、何処にも見当たらないのよ」

ウエンデイとシャルルから一部始終を聞き、一旦読んでいた文献を閉じる。ギルド内：と言つてもそこまで広くないし、見渡せばいるかどうか分かるのだけど。マスター：三代目のマスターの姿は見えない。四代目の方はこの事を聞いて盛り上げようとしているようで、ワカバさんやミラさん達もノリノリだった。

「うーん：どうにもならないんじゃないかな」

「どうしよう：ここまで大事になるなんて」

それはマカオさん達に言うべきだ。いや、言ったからお祭り騒ぎになつたのか？既に戦いの場として指定されたマグノリアの南口公園は屋台が立ち並んでいるらしい。

「マスターが帰ってきたら何とかなるんだけどね：それかエルザさんかな、何とかしてくれそうなのは」

「気にしない方がいいわよ、ウエンデイ。こうなつたらとことん騒いじやうだろうから」

ルーシイさんがウエンデイにそう言うが、ウエンデイはまだ落ち込んでいる：なんか、頭の上にニルヴァーナが乗つていそうなくらいだ。闇に落ちないですよ？

「私達もお祭り行つてみない？お店もいっぱいあるみたいだし！」

「そうね、息抜きに良いかも！二人も行きましよ！」

「でも…」

「そうですね、折角なので！ほら、行くよ！」

ウエンデイの手を引いてお祭りに行つてみることにした。息抜きには丁度良いし、こういう時のウエンデイはしばらく落ち込んだりから、別のことに意識を向けさせた方が良い。

そうしてしばらくして、南口公園に到着する。既に夜だが、多くの人で賑わっていた。何だか、昔を思い出す。前世の学生時代もこうしてお祭りを友達と回つたつけ：っていうか、即興で始まつた祭りにしては本気過ぎない？

「じゃあ、ここからは別行動ね！ミッシェル、行くわよ！」

「はい、姉さん！」

そう言つて、ルーシイさんとミッシェルさんは走つて行つた：と

思ったら、ミッシェルさんが急に方向転換。片っ端に屋台へと回るつもりのようだ。数日過ごして分かったけど、どうやらミッシェルさんのあの食欲はデフォルトラしい。

「それじゃ、私達も行きましょ」

「うん。ウエンデイも、今は楽しもうよ」

「う、うん…」

やっぱり乗り気じゃ無いのか。まあ、ただその場を納めるつもりで放った言葉でこんなことになるなんて思いもしないよなあ…。でも、これほどの騒ぎになった原因は四代目だと思う。妖精の尻尾らしいっっちゃ、らしいけど。

「ウエンデイ、何をそんなに気にしてるの？」

「だって、こんな大事にするつもりなんて無かったのに…」

「ここまで大事にしてるの四代目だし、気にする必要ないんじゃない？多分、ナツさん達の決闘を肴に酒を飲もうとか、そんな風にしか考えてないと思うよ」

「そうかなあ…」

「そうよ。そういうギルドでしょ、ここは」

僕も、このギルドに入った当初だったら問題が発生したことに負い目を感じただろうけど、今となっては多少のことでは問題だとすら認識しなくなった。ただ馬鹿騒ぎしたいだけなんだと、気にする方が馬鹿らしくなって来たのだ。

「兄貴ーっ!!」

「イーロン！ロメオ君も」

「大変なんだ！プロットモンが…」

イーロンとロメオ君が慌ててこっちに来たことに、何故か嫌な予感がした。それと、二人の傍にドルモンしかいないこともその予感を強くする。そして、極めつけに辺りで叫び声が聞こえた。

「おい誰だ！犬を放し飼いにしてる奴はあつ!!」

「うう…ひっぐ……私の綿飴…」

…頭が痛くなってきた。最早予感から確信に変わったけど、イーロン達から詳しく聞くことにする。

「…イーロン、パタモンとプロットモンは？」

「プロットモンがこの祭りの中、どっか行っちゃったんス…すみませ
ん、兄貴！俺がついていながら…」

「パタモンは空から探してくれてる！」

「仕方ない…皆、手分けして探そう！見つけ次第ここに…」

「…！ゴーシュ、あそこ！」

ウエンデイが指さす先に、金魚すくいの目の前で綿飴と思われる物
を口の横につけたプロットモンがいた。まずい、あの目は捕食者の目
だ…！金魚食べるつもりか？

「デイフエンド 防御結界・ボツクス 匣！」

「うわあ!? な、何!?!」

「プロットモン、何やってるのかな〜？」

「観念するツス！」

「こうなったら…パピーハウリ——」

「ちよつとストツプ!!」

ロメオ君とイーロンに迫られたプロットモンが抵抗しようとして
技を使おうとしたので、大慌てで結界を解いてプロットモンを捕獲す
る。デイフエンド 防御結界でも音までは防げない。これ以上問題を起こされたら
さすがに困る！

「プロットモン、これ以上騒ぎを起こしちや駄目だつて！」

「良かった、心配したんだよ」

「ご、ごめんなさーい…」

丁度良いから、しばらくこのまま抱えておこう。後はパタモンだけ
ど…あ、見つけた。どうやら今の騒動が見えていたようだ、真っ直ぐ
こっちに向かってきている。

「パタモン、お帰り」

「良かった、ちゃんと見つかったんだね〜」

「ほら、プロットモン！」

「ご、ごめんってば！」

「それじゃ、プロットモンが迷惑かけた人に謝りに行かないと」
「ふふ、何だか親子みたいだね？」

「手のかかる娘って感じかしら？」

ウエンデイとシャルルが笑いながらそう言ってきた。そんなこと言っている余裕があるなら、もう大丈夫かな。よし、折角だからこのまま皆で回るとしよう。祭りは皆で楽しむべきだ。

「イーロン達はもう祭り回ったの？」

「いや、俺達もさつき来たばかりッス」

「着いてすぐにプロットモンがいなくなったんだよ」

「それじゃ、皆で祭りを回ろう。プロットモンは罰としてしばらくこのままだからね」

「えー…」

「じゃあ僕はここ〜」

「ゴーシュ、プロットモンは私が抱っこするよ。パタモンが乗ったままじゃ動きづらいでしょ？」

「それじゃ頼んだ」

何故か分からないけど、抱っこして大人しくできるのは、僕とウエンデイだけらしい。イーロンやルーシイさんが抱っこしようとした時は、技を使っても逃げようとしていた。これは前世のペットとかと一緒になのか？信用した人にしか身を預けないとか。

パタモンが僕の頭の上に乗る、プロットモンはウエンデイが抱っこしている。ドルモンはちゃんと僕らの傍にいてくれるので安心だ。

「それじゃ、レッツゴー！」

そうしてある程度屋台を見て回った後、簡素なステージがセツティングされていることに気づいた。そこではミラさんが歌おうとしたが喉の調子が悪く、代役でガジルさんが歌い始める。言っちゃ悪いけど、変な歌だと思った。綿飴やらチョコバナナやらを食べたりしている内にお腹が膨れてきたからか、デジモン達だけでなくイーロンやロメオ君も眠たそうだったので、今日はそこでお開きとなった。

☆

翌日、ウエンデイの頼みにより僕とシャルルはマスターを探していた。昨日は途中から気にせず楽しめていたようだけど、朝起きたら

やっぱりマスターに伝えなければと思いつたらしい。イーロンにギルドや町の中を探してもらおうように伝え、僕らは浮遊結界と水晶結界クリスタルを使って空から町外れの方を探す。

本来であれば今日も朝からルーシイさんの手伝いをするつもりだったのだが、昨日の夜にシャドウギアの三人が戻っていたらしい。レヴィさんに解説をお願いしたので、ハッキリ言って僕はもう必要ないということだ。文字魔法はかじった程度だったから、正直助かった。

今日の朝からルーシイさんの家でレヴィさんの部屋にあった文献を読み漁るらしい。レヴィさんって確か、自分の部屋が図書館みたいになってるって聞いたことがあるけど…っていうか、ギルドにある文献よりもレヴィさんの部屋にある本の方が圧倒的に多いとはどういうことだ。スペース的に収まるのだろうか？まさか、寝るところとかもないくらい本棚で埋め尽くされてるのかな…いや、まさかね。

「どう？見つけた？」

「いや、見当たらないね」

「本当、何処行っちゃったんだろう…」

それより今はマスターだ。今日戻ってくるってミラさんが言っていたんだけど…どこに行っていたかは分からないらしい。こんな時に、どこほつつき歩いてるんだ。そろそろナツさんとラクサスさんのバトルが始まってしまおう。

「ゴーシユ、あそこに人影が！」

「え、どこ？」

「とりあえず降りてみよう」

ドルモンの言う場所に向けて徐々に下降する。森の中で木に引っかけりそうだったので、その前に結界を全て解除し着地する。そこには、ようやくお目当ての人物が。

「マスター！」

「お前さん達、どうかしたのかね？」

「こんな時に何処行ってたのよ！」

「何かあったのか？」

「ラクサスさんとナツさん、ガジルさんが決闘するんです！」

「何じゃとーっ!!？」

「とにかく、来て下さい!!」

「ぬおお〜っ!!？」

ドルモンを一度デジヴァイスに戻した後、マスターを背負って弾性結界を展開し、全速力で空を翔けた。ウエンデイとシャルルはすぐ横を飛んで移動している。もう時間がないので、とにかく急ごう！

☆

一方その頃、南口公園では。

「いたツスカ？」

「いや、見つからない」

マスターが行きそうな場所を手当たり次第に探したが見つからず、イーロンとロメオは祭り会場であるこの場所に戻ってきていた。

「やっぱり、四代目をどうにかした方が…」

「駄目だよ、父ちゃん達もうノリノリだから聞いてくれねえって」

昨日までは祭りを楽しんでいた二人だったが、今朝ゴーシユに三代目を探すのを手伝ってほしいと頼まれた。喧嘩自体は楽しみにしていた二人だが、ゴーシユに「あの二人が考えなしに暴れたら、公園にいる人達に被害が及ぶ。もしそうなれば弱体化した今のギルドでは評議院に目をつけられて潰されるかもしれない」と聞き大慌てで三代目を探していた。ただ、ゴーシユが言ったのはあくまで考えなしに暴れた場合の話。ナツはともかく、ラクサスに限ってそんなことはあり得ないとゴーシユは考えているので、この二人は騙されたようなものだ。万が一問題でも起きた場合はそういうこともあるというのは本当である。

「どうすんだよ、もう時間が！」

丁度その時、週間ソーサラーの記者で今回の祭りの司会を務めているジェイソンの声がマイクを通して響いた。ナツ、ガジル、ラクサスの三人は既に揃っているようだ。

「…こうなったら、俺達で被害が出ないように何とかするしかないッ

ス！」

「…それしかねえな。行こうぜ！」

ラクサスの事を知っているロメオは既に諦め始めていた。自分たちでラクサスを、ナツやガジルを止めることは不可能だし、被害を及ぼさないようになって本人達くらいしか出来ないだろう。それでも賛同したのは、どうせ問題が発生するのなら、ラクサスとナツのバトルを間近で見たかったからだだった。

観客達を掻い潜り、ようやく一番前まで来た二人は魔力を高めているラクサスとナツの姿を目にする。その瞬間、二人は驚愕した。

(な、なんて魔力だよ……さすがナツ兄とラクサス兄!!)

(これが…ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士のカツスカ…!?)

彼らの魔力を肌で直接感じ取り、自分達との力の差を痛感する。七年のブランクがあるはずなのに…彼らのレベルまで到達するには、どれ程の年月がかかるのだろうか。

思わず息を呑み、この決闘の行方を見守る。ラクサスとナツは更に魔力を高め続け、全身に雷と炎を纏う。緊張感が場を支配する中、ついにナツが動き出した。

「うおおおおっ!!!」

ナツの全身全霊を込めた右ストレート。全身に炎を纏うことで高めた身体能力で距離を縮め、ラクサスの顔面目がけ放ったその一撃は

不発に終わった。

(!?)

『決まったーっ!!』

ナツの拳が届く前に、ラクサスの雷を纏った超高速のカウンターパンチによって沈められたのだった。その光景に誰もが絶句する中、ジェイソンの声が響き渡る。

「ハッハッハ！一撃で決まりか！」

「いつも通りの瞬殺だったな」

「ナツ」

「さすがね、ラクサス！」

「これが実力の差って奴よ！」

マカオとワカバは笑い、雷神衆は当然だと言わんばかりに誇らしげにしている。ロメオとイーロンは特に周囲に被害が出なかったことに安堵する。しかし、まだこれで終わりでは無い。まだガジルが残っているのだ。そう気を引き締め直してガジルがいた場所を見る。――しかし、そこにガジルの姿は無かった。

「次はお前だったな……ん？」

「…あれ？」

『NO!!ガジルが消えた!』

「あの野郎、まさか逃げたのか!!」

「何!？」

これには会場にいた男性陣も怒り心頭。特にリリーはガジルの逃走に人一倍怒っていた。そんな中、ラクサスの目の前にゴーシユ達が現れる。

「やつと着いた！」

「兄貴！」

「マスター、見つかったんだ！」

「ったく、少しは年寄りを労れい……」

「す、すみませんでした……」

そう言いながらゴーシユの背中から降りるマスター・マカロフ。そしてそのまま、無言でラクサスの顔を見つめた。そのまま数秒が流れた後、ラクサスは何処かへと歩き始めた。

「待てよラクサス！」

「このまま妖精の尻尾フェアリーテイルに戻ってきてよ！」

「マスター、いい加減ラクサスの破門を解いてくれ！マスター!!」

結局ラクサスは姿を消し、マスターもしばらく経った後ギルドの方へと向かっていったのだった。ゴージュ達はマカオやエルフマンの頼みで、ガジル探しを手伝うことになったのだった。

第59話 友の為に

ナツがラクサスに一撃でノックアウトされた日の夕方。次にラクサスと対戦するはずだったガジルが逃走し、エルフマンたちが山狩りを行ったが結局見つからず。現在は祭りも終わり、ほとんどのメンバーがガジルを捜索している。その為、ギルドにはエクシード隊がいなかった。

「…ガジルの奴が帰ってきたか!？」

誰かがギルドへと近づいてきている気配を感じ取ったりリリーは駆け足で外へと出る。それに続きハッピーとシャルルも外へ向かった。

「お前たち、何者だ!」

彼らが目にしたのはガジルではなく、三人の人影だった。その姿を見て、リリー達は驚く。

「な…お前は、ココ!？」

「何であんたがこっちの世界にいるわけ!？」

「えーっと…ココって確かエドラスにいた子だね？そっか、オイラ達がいけない間にアースランドに来てたんだ!」

「その割には年が…」

目の前にいる少女はエドラスでナツ達に味方してくれた少女、ココにそっくりだった。しかし、エドラスで見た彼女よりも背が伸びていて、大人びた雰囲気も感じる。

「一体どうなってるんだ、ココ?」

「馴れ馴れしい口をきかないで下さい。あなた方とは初対面です」

「何だと!？」

「えいやーっ!酷い物忘れ!」

「違うわよ!ひよっとして、コイツら…!」

シャルルが何かに勘づいたその時、三人組の後ろから、ナツ達が戻ってきた。

「腹減った〜」

「ガジルさん、どこ行ったんでしようね?」

「敵前逃亡など、漢のすることじゃねえ」

「お、誰だ？」

「お客様？」

「あれ？ナツさん、ゴーシユ、この人……」

「あ……クイーン・シャゴツト？」

「それはエクシードの女王様です。この子はエドラス王国で僕らを助けてくれた……」

「ココ!? 久しぶり! っていうかどうかやってアースランドに来たの?」

エドラスでココと実際に会っているナツ達は再会したことを喜び始めるが、ゴーシユは素直に喜べずにいた。エドラスでは既に魔法は使えなくなった。有限だった魔力を全てこつち側の世界——アースランドに解き放ったからだ。なのに空間魔法の一種であるアニマがまた使えたとは考えにくい。

「カハッ! どうやらウチらすつげえ人違いされてるみてえじゃん?」

「ン……構うことないよ、マリー||ヒューズ」

「早く仕事にかかりましょう、シユガーボーイさん」

他の二人の名前を聞いてゴーシユとシャルルはあることを確信した。シユガーボーイはほとんど変わっていないが、マリー||ヒューズの方はエドラスとは違う。エドラスにいたのは男性だったが、今日の前にいるのは女性だ。

「ってかお前男だったろ! なんで女装してんだよ!」

「……ウチこいつ嫌いじゃん」

いきなり男扱いされたマリー||ヒューズは青筋を立てながらそう呟く。いきなり見ず知らずの人に男性呼ばわりされれば、大抵の女性は怒るのは当然だった。

「ところで、あの……」

「あんたら何しに来たんだ?」

「ここは私達のギルドよ!」

「カハッ……!」

「ン……噂通りシヨボい魔導士達だね」

「何!?!」

「ウチらの要求はただ一つ。ルーシィ||ハートフィリアを渡してもら

おうじちゃん!」

「ええ!?!」

「渡せ、だなんて…」

「うわあ…初めて見たよ、生プロポーズ」

「違うわよ!」 「違うじゃん!」

ハッピーやミッシェルを含め他数人が顔を若干赤くしている。そんな中、ゴシユは警戒を始め、すぐ傍にいたドルモンも同じように警戒する。因みにだが、プロットモンは昨夜と同じように祭りではしやぎ回って一時迷子になり、その捜索の為にパタモンがかなり長い時間飛び回っていたので、この二体は既に活動限界の六時間を迎えている。

「隠しても無駄ですよ!」

「ルーシィー! ハートフィリアがこのギルドにいることは分かかってんじゃない?」

「ン…さっさと名乗り出る方が身のためだよ、ベイベ!」

ルーシィやレビィ、ミッシェルは小声で話し始める。しかしルーシィ本人も彼らとこの世界で会うのは初めてであり、狙われている理由なども分からずにいた。

「いきなり出てきて大層な口叩いてくれるじゃねえか」

「俺はこのマスターだ。理由も聞かずに仲間を渡せと言われて、はいそうですかってわけにはいかねえな」

「何処の誰だか知らねえが、さっさと帰りやがれ!」

「おやおや、怖い怖い」

「あちこちで教会が襲われている事件って…もしかして貴方達か!?!」

「ハア?」

「なるほど」

「確証は無くとも、タイミングが良すぎるというわけだな」

キナナの発言から何故か彼らが教会破壊事件の犯人にされているが、彼らは否定する。

「ン…スパイシー! なこと言ってくれるね」

「心外ですね」

「テメエらの与太話に付き合う義理は無いじゃん。ほら、さつさとルーシィーハートフィリアを差し出しな！」

「逆らうと言うなら…力づくで貫つていくまで！」

シユガーボーイは魔法で取り出した杖をマイク代わりに歌い始める。

「…？」

「何だ？歌か、これ？」

（ガジルさんと良い勝負かな…!?）

次の瞬間、その歌声に反応して、シユガーボーイが着ていた服の内側が盛り上がり、襟元や裾から緑色のスライムが溢れ出した。

「うわ…」

「色々キモいんですけど!?!」

「美味しそう…」

デイフエンド
ウォール

「防御結界・壁！」

「！へえ…」

スライムがナツ達に飛びかかる直前、ゴーシユは目の前に結界の壁を張る。

「ゴーシユ、ありがとう！」

「なんだコレ！」

「粘液？」

「…！ヤバツ!?皆さん、一旦離れて下さい！」

「え？」

防いだのは一瞬。スライムはどんどん大きくなっていき、結界を丸ごと飲み込んでしまう。それを察知し全員が回避に専念する最中、スライムへと突っ込んでいく人物がいた。

「うおおおおっ、漢ーっ!!!」

「エルフマンさん、それに触つたら…!」

「何じゃこりゃ!何処を掴んだら良いのか分かんねえ!」

エルフマンがスライムに掴みかかるが、反対に取り込まれ始める。リサーナとミラはエルフマンを助けようと動く。

「エルフマン!」

「エルフ兄ちゃん！」

「駄目だ、来るな！コイツは何かある…うおっ!？」

スライムが一気に膨張し、エルフマンだけでなく近づいていたミラとリサーナも取り込んでしまった。

「う、動けない…」

「思い出すなあ、昔は三人でこんな風に仲良く一つの布団で…」

「喜んでる場合じゃねえ！」

「何なのあれ…」

「粘液が意思を持っているのか？」

「この感じ…皆、触っちゃ駄目よ！」

「結界が消された…魔力を吸い取ってます！」

ゴーシユはそう言い、皆がスライム攻撃を何とか回避しているのを確認した。次に、囚われた三人を助け出す方法を考える。

(魔法を吸収する魔法…僕の結界とは相性が悪い)

「ゴーシユ！」

「ドルモン…そうか！任せた！」

「了解！メタルキャノン!!」

ドルモンが連続で必殺技のメタルキャノンを放つ。魔法以外での攻撃ならば、恐らくスライムに取り込まれることはないはずだ。

「ホワツツ!?!何だその生き物は！」

ゴーシユ達のその予測は正しく、ドルモンの鉄球によって三人が囚われているスライムに次々と穴を空けていく。まるで銃弾で壁をぶち破るように。そして穴だらけになったことで三人はまだ捕まったままではあるものの、大元のスライムから切り離すことには成功した、のだが。

「あ、また…！」

「ゴーシユ、ドルモン！俺達のことはいい！」

「早く逃げて！」

「ゴーシユ！」

「くそっ…！」

スライムがすぐに膨張し、またしても三人を取り込んでしまった。

「「うわーっ!」」

「イーロン! ロメオ君!」

「マスター達が…!」

「くっ…防ぐだけで手一杯だ!」

ロメオ、イーロン、ワカバ、マカオの四人の方にはココが襲いかかり、ギルドの壁を走ってイーロンとロメオの攻撃を躲す。マカオとワカバはこれ以上ギルドを壊すまいと二人を止めた所でスライムの膨張に巻き込まれてしまったようだ。

「何これ、どんどん大きくなってる!」

「ナツ…!どうにかして…!!」

一番離れた場所にいたルーシイ、ミツシエル、レビイの三人。彼女らの場所から見ると、もう既にギルドがほとんど見えない程にスライムが膨張していた。ルーシイが半泣きになりながらナツへ助けを請うが、肝心のナツは——燃え尽きていた。

「何か真っ白なんですけど…!」

「ナツさん!」

「まさか、今頃ラクサスとの決闘のダメージ!」

「凄い時間差…」

ウエンディはエクシード隊と共に櫓の上へと避難していたので、巻き込まれずに済んだようだ。

「すっげえコイツら面白すぎ…!アツハツハツハツハ!」

「スパイシーなスクリームだね」

「ギルドの魔導士なんて大したこと無いですね!」

「戻つといで、ハウ…ンズ」

シュガーボーイがスライムを服の中へと戻す。囚われていたエルフマン達やマカオ達はスライムから解放されはしたものの、全く動く事が出来ない。

「はい終了…!もう降参ですか?」

「ハア、ハア…くそっ!」

「魔力の消耗が…」

スライムから逃れるため魔法で防いでいたマックスやラキも消耗

がかなり激しく、肩で息をしている。

「どうなってるのさ〜?」

「コイツら、我々が知っているココ達ではない」

「アースランドに元からいた、ココ、ヒューズ、シユガーボーイってことね」

「そうか、エドラスにはエドラスの私達がいたように…」

「こつちの世界にも、ココ達がいたってことね」

エドラスとアースランドは瓜二つ、そこに住んでいる人々も似通っていた。それこそ、見分けがつかないほどに。ナツ達が知っている三人は、あくまでエドラスの世界の三人だ。アースランドにいる三人とは全く無関係の、赤の他人同士ということになる。

「ルーシィー||ハートファイリア、いい加減に名乗り出ないと仲間がもつと傷つくじゃん?それとももつとウチらに暴れてほしい?カハッ!」

「…駄目だよ、ルーちゃん」

「ここは堪えないと…」

と、ここでもうやく真っ白になっていたナツがよろめきながらも立ち上がった。

「まだ、誰がルーシィかはバレてねえ…お前ら一旦ここから離れて、じつちゃんを探してくれ。後は俺が何とかする」

「でも…!」

「フラフラだよ、ナツ…!」

「そのこの三人!すっげえ怪しいじゃん!」

「僕らもナツさんをサポートします…ウエンディだっていますし」

「ナツ兄…これを!」

スライムに取り込まれていたせいではほとんど力が入らない中、ロメオは最後の力でナツに炎を投げ渡す。

「サンキュー、ロメオ…あぐつ……………!くっせえく!!」

「ごめん、間違えた…」

「いや、色で分かったでしょうに…」

悪臭を発する黄色い炎を食べ悶絶するナツ。やや呆れ気味にゴーシユが言うも、これで魔力が一時的に回復した。

「とりあえずご馳走様……走れ、ルーシイ!!」

ナツが両手から炎を放ち、それを目眩ましにしてルーシイ達は走り始める。しかし、炎が眼前に迫ってきているにも関わらず余裕そうな三人を見て、ゴーシユは何か嫌な予感がした。

「ホット!」

「火の魔法ですか」

「カハツ……くだらないじゃん。指揮術!」

マリー||ヒューズがどこからか右手の形をした指揮棒を取り出し、それを一振り。すると彼女らの眼前まで迫っていた炎が急に逸れ、マックスとラキの方へと牙を剥いた。

「ちよ……! 防御結界・壁!」
ディフェンド ウォール

「危ねえだろナツ!」

「おろ!」

ギリギリで結界が炎を阻み、マックスがナツへとそう言い放つ。ナツ自身は何が起こったのか分かっていないようだ。

「仲間割れ!」

「なんで?」

「ひよつとして、あれ……!」

「にやろーっ!!」

「ほい」

「あが、が……うわ!」

ナツが今度は火竜の咆哮で攻撃するが、マリー||ヒューズが指揮棒を振った途端体の向きを180度回転し、ルーシイ達を襲いかかった。しかしこれもゴーシユが結界で防いでいた為、無傷で済んだのだった。

「……やっぱし。便利な魔法使うじゃん?」

「人を操る魔法……エドラスのヒューズとは反対ですね」

「わりい、助かった」

「どういたしまして」

エドラスのヒューズは乗り物や人形といった物体を操る魔法を使っていたが、このアースランドのマリー||ヒューズは人間を操る魔

法を扱う。人間……つまり、魔導士を操ればその魔導士の魔法すらも操ることが出来るのだ。

「さあ、罰当たりな魔導士ども！もっと楽しく踊るが良いじゃん？…
かっ!？」

マリー||ヒューズが魔法を使おうとしたその時、どこからか飛んできた小石が彼女の側頭部に直撃した。魔導士といえど、小石を頭にぶつけられれば怯むし痛い。彼女は顔を引きつらせながら小石が飛んできた方向を見る。

「キナナさん!?逃げて下さい!」

「ン…あの娘、魔導士ではないみたいだね」

「石…ウチに石を…すっげえ殺意湧くじゃん…!!」

このままではキナナが攻撃されてしまう。ウエンデイは咄嗟に櫓から飛び降り、リリーは高速で彼らに特攻する。

「もう止めろ!!」

「猫は引っ込んでなさい!」

「ぐっ…!」

「天竜の…翼撃!!」

「バーカ!」

リリーは上空に飛び上がったココによって蹴り落とされ、ウエンデイが放った一撃は——結界によって、防がれた。

「え…?」

「く、そっ…!!」

「しばらく操らせて貰うじゃん?」

マリー||ヒューズの魔法の弱点は、一度に一人だけしか操れないこと。故に、多対一の場合は不利になってしまう。そこで、彼女は防御魔法の使い手であるゴーシュに目をつけた。今の戦闘で、彼の魔法であればナツの攻撃も防ぐことができ、同時に複数防ぐことが出来ることも確認されていた。

エドラスでもやったように、結界で指揮棒を弾き飛ばそうとした直前に操られてしまったゴーシュは悔しそうに唇を噛みしめる。彼が徐々にマリー||ヒューズの方へと歩いて行くのを見て、ドルモンは困

惑していた。

(どうしよう……このままじゃ、ゴーシユが)

共に戦う訓練だつてこれまで何度もしてきた。自由気ままなプロットモンやマイペースなパタモンと違って常に冷静でいられるドルモンは、自分で考えながら戦つてみると毎回言われていた。ドルモンがどう戦うのかを見て、慣れて、それに合わせて戦う訓練をゴーシユはしてくれていた。自分の最大限の力を引き出す為に。

彼が敵に回るといふ初めての状況。彼と戦つたことのあるデジモンはまだいない。ロメオとイーロンとしか戦つたことがない。ゴーシユがいる時は連携の訓練ばかりだったのだ。結界魔法の種類と特徴については全部把握しているのだが、それ故に敵に回るといふことがどういふことがよく分かる。

「ゴーシユ!!」

「ウエンディ、来ちゃ駄目だ!皆……避けて!」

辺り一面に水晶結界クリスタルが大量に生み出される。矢アローと光レイを併用した攻撃が繰り返された。

「ウエンディ!!」

「はい!天竜の……咆哮!!」

「火竜の咆哮!!」

ナツとウエンディが同時に咆哮を放ち、混ざり合う。爆発的に威力が上がった攻撃で周囲を一気に吹き飛ばそうとしたその攻撃だったが、それを見てマリーマリとヒューズが指揮棒を振るう。

「……ドルモン、逃げて!!」

「なっ……ぐああっ!?!」

「そんな!?!」

ゴーシユを操つたマリーマリとヒューズは水晶結界を囿クリスタルとして使つたのだ。ナツとウエンディの合体魔法を見た瞬間に水晶結界クリスタルを消し、防御結界ディフェンド・柱トータルをドリルのように回転させて威力を分散させる。さらにその分散させた先に反射結界リフレクションを展開させ、反射。それはナツとウエンディの攻撃を目眩ましにして接近していたドルモンへと注がれた。

「ドルモン!!」

「カハッ！アンタらの作戦なんかお見通しじゃん？」

「ルーシィーハートフィリアを早く渡さないと、その子が死んじゃいますよ？」

「ぐっ……………かはっ！」

「ドルモン……！」

大ダメージを受けても尚立ち上がるようにするドルモンだったが、すぐに崩れ落ちてしまう。所々に焼け焦げたような跡が出来ている。これ以上戦おうとすれば…いや、攻撃を受けてしまったらどうなるかは、ココが今言った通りだろう。

「ルーシィをどうする気だ！」

「答える義務はありません」

「あと五秒だけ待ってやるじゃん」

「…分かったから、もう止めて！あたしが…」

「私が、ルーシィーハートフィリアです」

ルーシィが名乗り出ようとしたその時、彼女の後ろにいた人物——ミッシェルがそう言った。

「え…!？」

「ん…君が」

「大人しくこっちに来るじゃん」

「ちよつと…！」

「貴方達を探しているのは私です。一体どういうご用件でしょう？」

ルーシィがミッシェルを止めようとするが、彼女はルーシィの前に出てそう彼らに言った。元々ハートフィリア家は有名なハートフィリア鉄道を運営していた。つまり、大金持ち。上品に振る舞う方が信用させやすい。

「なるほど…ギルドの魔導士とはいえ、さすが元ハートフィリア・コンツェルンの令嬢」

「品がありますねえ…」

「もつとガチャガチャした奴かと思ってたじゃん？」

マリーーヒューズがミッシェルをルーシィと思い込み、こっちへ近づかせるよう言おうとしたその時、視界の隅でドルモンが動いたのを

捉えた。

「駄目…だ！」

「!?」

ドルモンが執念で立ち上がる。痛々しいほどにボロボロになっているドルモンのその姿を見て、誰もが仲間を守ろうとするその覚悟を感じ取る。ゴーシユはその姿を見て——笑った。

「ルーシィ、を…：…連れて、行くな！」

「はあ？そんなボロボロで、何が出来るって話じゃん」

「ン…：弱い君では、何も出来ないさ」

「そんなことない!!」

ゴーシユが声を荒げ、それに驚いたのかココは肩をビクンと震わせる。ウエンデイもまた、彼の顔を見て察した。あれは、仲間を侮辱されて怒っているんだと。

「ドルモンを…舐めるな！彼は、彼らは！フェアリーテイル妖精の尻尾の仲間…：そして、僕のパートナー達だ!!彼らのことを何も知らないお前たちが、馬鹿にするな!!」

「動けないままじゃ、格好もつかないじゃん？」

「そ、そうですよ。それに弱いから弱いつて言って何が…？」

ココはそこまで言って、首を傾げる。ふとドルモンの方に視線を戻

すと、心なしかドルモンの体が光っているように見えた。

ゴーシユは怒りの形相から、普段の彼からは想像も出来ないような、イタズラ小僧がするようなしたり顔になる。口角をつり上げながら、彼はドルモンに語りかける。

「ドルモン…まだ、いけるね？」

「当然………まだ、戦える!!」

ドルモンから放たれる光が一気に強くなり、ゴーシユの額にあるゴーグル型のデジヴァイスも同じく光を放つ。

「行け…自分を信じるんだ、ドルモン!!」

「ハアアアアツ!!ドルモン、進化………っ!!!」

全身が光り輝き、その姿が急激に変化していく。次第に光が収まっていき、ようやくその姿を視認するゴーシユ。彼の体は一回り以上大きく、逞しく。背中にあつた小さな羽は大きな翼となり、元々持っていた手足の爪はより鋭くなった。獣と竜が合わさった、獣竜型のデジモン。成熟期となった彼の新しい名は。

「——ドルガモン!!」

ついに、ドルモンがドルガモンへと進化した。

第60話 敗北

「な、何ですかこれ!？」

「翼が生えた!？」

「これが、進化…」

「…ドルガモン!」

マリー||ヒューズ達は驚愕し、デジモンの生態について予め聞いていた妖精の尻尾フェアリーテイルの面々は進化を目の当たりにして希望を見出す。敵のペースに乗せられてしまったが、今度はこちらが攻める時だ。

「パワー…メタルツ!!」

「チツ…!」

ドルモンの渾身の一撃を何とか躲したマリー||ヒューズ。それによつて後ろにあつた妖精の尻尾フェアリーテイルのギルドへと直撃、ギルドの壁に巨大な穴を開けた。

「やめろーっ!!」

それを見たマカオとワカバは、スライムに体力と魔力を吸い取られたにも関わらず大声でツツコミをする。彼らからすればツツコミでも何でも無く、ただ必死にこれ以上ギルドをボロボロにしてたまるかと奮起した結果であつた。

「ルーシイさん、逃げて下さい!」

「させないじゃん!」

「それはこっちのセリフだあっ!!」

ドルガモンは技を使わずに近接攻撃を仕掛けようとする。が、それはシュガーボーイがまたもやスライムを出し始めたのを見て、翼を羽ばたかせて空へと逃げる。

「シュガーボーイ、こいつ戦闘不能にするじゃん。この程度ならいらねえし」

「オーケー!カモン、ベイビー!」

「うっ…!」

「ゴーシュ!!」

「僕の話は、いいから…ドルガモン、ルーシイさん達を…」

「そんなこと、出来ないよ!!」

ゴーシユはスライムに完全に取り込まれ、魔力と体力を吸われ始める。ドルガモンは真上からスライムに向けて必殺技を放った。

「パワーメタル!!」

スライムが鉄球を飲み込もうとするが、ドルガモンの必殺技によって繰り出された、ボウリングの球程の大きさの鉄球がスライムに飲み込ませる隙を与えずに逆に弾き飛ばす。結果、スライムの下の地面に小規模なクレーターが出来た。

「ワオ…良いパワーだ、が!」

さつきとは比べ物にならない威力に、シュガーボーイは少し驚く。どうしていきなり姿が変わり強くなったのかは分からなかったが、鉄球を飛ばすという攻撃手段自体は変わらないと判断したシュガーボーイはスライムをさらに膨張させる。ドルガモンはそれに構わず再度必殺技を撃ち込む為、仰け反って力を溜める。

「パワーメタル!!」

「ン…この大きさなら、ノープロブレム!」

「なら、連続で撃ち込んで…!」

「ドルモン、危ない!!」

「ていやっ!」

「くっ…!?!」

ギルドの大きさを越える程膨張したスライムによって、鉄球が完全に飲み込まれる。連続で撃ち込もうとしたドルガモンだったが、ギルドの壁を伝って大きく跳躍してオーバーヘッドのような蹴りを繰り出したココによってそれは阻止されてしまう。何とかウエンディの声で避けることが出来たが、避けた先にはスライムが迫っていた。

「うあっ!」

「ドルガモン…!」

「くっ、力が…ごめん、ゴーシユ…皆…」

魔力だけで無く体力も吸い取ることが出来るスライムによって、ドルガモンは体力を失い、成長期のドルモンへと退化してしまう。ゴーシユはスライムに体力と魔力を奪われながらも、辛うじてデジヴァイ

スを操作しドルモンを回収する。

「ん〜…さて、話の続きをしようか」

「ルーシィー!!ハートファイア!早くこっちに来るじゃん!」

まだマリーー!!ヒューズ達はミツシエルのことをルーシィだと思い込んでいる。そのことを思い出したルーシィは、慌ててミツシエルの前に出る。

「ちよ、ちよつと待って!ルーシィはあたしよ!」

「え!?!」

「ミツシエルさん、私を庇ってくれる気持ちは嬉しいわ…けど、嘘は通じないと思うの!」

「何言ってるの!?!」

「誤魔化してもきつとすぐにバレてしまうわ!これ以上皆に迷惑はかけられない…本当のことを言います!」

「あの子…ルーシィを庇うつもりなのね」

「す、凄い熱演…」

「可憐だ!!漢だ!!」

迫真の演技を始めたミツシエルに敵が注目しており、ココが混乱し始めている様子を見てナツはあることを思いつく。それを実行するため、近くにいたウエンデイに向かってこう告げた。

「ルーシィ!下がってろ、お前には指一本触れさせねえ!」

「…!は、はい!分かりました!」

「はあ!?!」

「こっちもルーシィですか!?!」

他の仲間達にも意図が通じ、男性陣が女性全員をルーシィと呼ぶことで、相手を攪乱していく…何故かエルフマンも顔を赤くして自分もルーシィだと主張し、本物のルーシィがツツコミをした。

「どれがルーシィか分からないですよ〜!」

「こ、コイツら…!」

「すっげえ馬鹿臭いじゃん。全員とっ捕まえれば良いだけの話!」

「ん〜…レッツツゴ、ワンちゃん達!!」

「させるかよ!!火竜の煌炎!!」

炎すらも飲み込むスライムには、ナツの技は殆ど意味を成さない。そんなことはナツ本人にも分かっている。故に、これは目眩まし。

「ルーシイ、今だ!!」

炎から飛び出したスライムに捕らえられながらも、そう叫ぶ。続けて他の皆が次々と攻撃していくことで、注意をこちらに逸らす。全ては、仲間の為に。

「姉さん……」

「皆……ありがとう」

ルーシイとミツシエルは無事に町へと向かう道を進み、そこから町外れの森を目指す。

「！二人逃げたじゃん！追え、ココー！」

「はい！」

「行かせっかつての!!」

「フリーラン、解除！」

少しだけだが魔力が回復したマカオ達がココへと攻撃を放つが、ココは大きく跳躍。無重力かのように彼らの頭上を通り過ぎる。

「飛んだ!？」

「8点、9点、9点、10点!」

両手を横に広げ、岩壁に着地した後自ら点数をつけるココ。岩壁に垂直に立っているその姿に、マカオ達は目を丸くする。

「何だありや……」

「フリーランって確か……」

「競技用の魔法だったな……怪我人続出で禁止されたはずだぜ」

「崖登って逃げるつもりツスカ!」

「させない! ソリッドスクリフト アイアン 立体文字、鉄!」

「ほい」

「!!「ギャー!?!」!!」

ココの上に出したレイイの魔法だったが、マリー||ヒューズによって位置をずらされ、マカオ達が下敷きになってしまう。しかし、マリー||ヒューズの予想外の出来事が起きた。

「きゃあっ!?!」

「ココ!?なんで…!」

崖の上には、青緑色の結界が壁のように展開されている。ココは突然現れた結界を避けることが出来ず、落下してしまったのだ。

「ン…ワンちゃん達の中で、魔法を使えるとはね」

「はあ…はあ…!」

「このガキ、何度も邪魔を…!! シュガーボーイ、そいつ吐き出すじゃん!!」

ゴーシユはスライムの中から吐き出され、マリー||ヒューズの足下へと転がる。

「させつかよ!!」

「カハツ…ウチの指揮術の前には、何人であれ従順じゃん!」

「ぐ、ぬぬぬ…!!」

ナツがマリー||ヒューズに攻撃しようとしたが、操られ動きを封じられる。操られたナツは、ゴーシユの傍へと歩き出す。マリー||ヒューズは逆にゴーシユから離れた。

「さてと…あなたにはデカイの一発食らわせてやないと、ウチの気が済まないじゃん?」

「マリー||ヒューズ、俺達に残された時間は限られている」

「分かってるさ。だから…目眩ましのついでじゃん!!」

「チ…クシヨウ…!!」

「…!?兄貴ーっ!!」

イーロンや他の皆は、助けることが出来ず。

ナツの火竜の焔炎が無情にも、魔力も体力も殆ど吸い取られたゴー

シユにぶつけられた。

爆煙により、視界が遮られる。しばらくして、ようやく爆煙が晴れ目にしたのは…気絶するゴーシユだけ。

彼の近くにいたはずのマリー＝ヒューズ、シユガーボーイ、ココの三人は、何処にも見当たらなかった。

☆

僕が目を覚ました時ののは、もう夜明けが近い頃。既にマリー＝ヒューズ達——レギオン隊によって、ルーシイさんのお父さんの遺品は、盗まれた後だった。

レギオン隊とは、フィオーレ王国最大の宗教団体であるゼントピアに所属している最強部隊。人数は少数精鋭ながら戦闘力は確かなもの…実際、僕らが圧倒されてしまう程だ。彼らは教団の敵だと判断した者達を叩きのめすだとか、そんな噂があるらしい。

それにしても…ギルダーツさんも途中から参戦していたにも関わらず、逃げられるなんて。レギオン隊のリーダーのバイロ、そんなに強いのか。エドラスだと僕とルーシイさんが倒した相手なんて…ナツさんとハッピーによると見た目も全然違うとか。

「フィオーレ最大の教会組織が何で…」

「よくわかんねえが、聖戦がどうかぬかしてやがった」

「そんなこと関係ねえんだよ！ルーシイ、形見はぜってえ取り返すからよ」

「うん…」

「そんなに落ち込まないでよ、魔法に操られてたんだしさ」

ルーシイさんを操り、直接鍵を渡させて回収していったらしい…あのマリー＝ヒューズの魔法、正直に言って不快だ。したくないことを強制されてしまう。

「ごめんなさい、私何も出来なくて…」

「ううん、ミッシェルのせいじゃないよ。あたしが…あたしが、弱かつ

「だから…」

「…僕も、肝心な時に気絶してしまつて……」

「それは、ナツがやったんだけどね」

「わ、悪い……」

魔力が残つてない状態でナツさんの攻撃を受けたから、僕の体はロボロ：ウエンディに治療されて、何とか今こうして起き上がれるくらいだ。

「ゼントピア生誕祭を前にしての教会襲撃事件、謎の針と不吉な一節、それを狙つたレギオン隊、そして聖戦……か」

「気に入らねえ……あいつらに妖精の尻尾を舐められてるのも気に入らねえし、やられっぱなしでいられっかつての」

「追跡に行つた連中はどうなつたんだ？」

この場にはいないメンバーは皆、撤退したレギオン隊の行方を追つている。ウエンディやシャルルもそうだ。ウエンディは僕に応急処置をしてくれた後、捜索に出かけた。本当はちゃんとした治療をしたかっただらうけど、僕が止めた。

「ウォーレンによると、どのチームも見失つたらしい。だが終わりじゃ無い……始まつた、とも言える」

「おうよ！百倍返しの楽しみが出来たつてもんだ！だろ？」

「……うん！」

落ち込んでいたルーシーさんだが、ナツさんの言葉で表情が明るくなった。

「奴らの言う聖戦……レギオン隊は、何か大きな事を成し遂げようとしている。その為にあの針が必要だった。そして、そこに刻まれていた一節」

「へ時は刻まれ、やがて混沌が訪れる……でしたっけ」

「そう、それがあの針に浮かび上がった一節よ。きつと何処かにあの時計は本当にあるんだ……それが聖戦に使われるつてこと？」

「混沌が訪れるつて、その聖戦のことなんじゃないか？」

時計を巡つて争いが起こる……争いをへ混沌」と例えているならそう捉えることも出来る。けど、前半部分をそのまま時計と解釈しても良

いのかな…〈時が刻まれ〉ってというのが、時計が動いていることを表しているとしたら…その時計が作動したら、〈混沌〉とやらが起きてしまうってことなんじゃ？

「ナツ、大丈夫？ 話分かる？」

「うるせえよ…」

「ルール無用って奴だ」

「俺向きじゃねえか！」

ナツさん、そこで納得されても…法律とか規則を無視っていうなら、このギルドでは最早当たり前な気もしてくるけど。

「あのね、世の中ルールがあるから何とかなってるって部分があるでしょ」

「人の物を盗ったら泥棒、とか？」

「出かけるときは鍵かけて、とか？」

「どんな自由も、ある一定のルールの上で成立する。そうでなければただの無法だ」

「それ、聖戦とやらで勝ち取るものか？」

「また物騒なことになってきたなあ」

「そもそも、人の物強奪するってのは、聖なる行為とは言えねえよな」
「手がかりかあ…」

「もしかするとレギオン隊は、他の部品も探しているのかも…」

まあ、そう考えるのが妥当か。レギオン隊は何でそんな危険な時計を集めようとしているんだ？ 針の一節の内容からして、時計が動き出したら危ないことは間違いない…管理しようとしている？ だとしたら部品一つか二つだけ回収して、他は放置の方が良いのでは？ だったら、もう動かないこともあり得る。

「奴らの狙いを知れば、遺品の意味も自ずと分かる」

「調べるしかねえな。そうすりゃ奴らの居場所も…つか、俺らを嗅ぎつけて寄ってくるかもよ？」

「それ乗った！ 出発だ」

「でも、何から調べれば…？」

「私が占ってみるよ。多少は絞り込めると思うんだよね」

「聞いたか今の！さすがは俺の娘！」

「あー、はいはい！くつつくなー！」

ギルダーツさんがカナさんにくつつこうとして、カナさんがそれを足蹴にしている。なんか、初めて会った頃とは想像もつかない姿だな、ギルダーツさん。親バカ過ぎる。

と、僕はエルザさんの元へと向かう。言っておかないといけなことがあるから。全身が痛みを訴えるけど、何とか耐えながら進む。

「あの、エルザさん」

「どうした？」

「多分カナさんが占った場所に、皆で捜索に行くんですよ？」

「そうなるだろうな。人手は多い方が良さだろう」

「申し訳ないんですが、今回はパスさせてもらって良いですか？」

「…その怪我で動くのは厳しいか？」

エルザさんが僕の体を観察してそう言った。全身包帯ぐるぐる巻きだから、そう思われても仕方が無いかも。

「いえ、そうじゃないんです。他にやっておかないといけなことがあつて…それが終わってから合流します」

「やっておかないといけなこと？何だそれは？」

「少し、話し合いたいです。この子達と」

頭の上のゴーグルをコツンと突きながら、僕はそう告げた。

第61話 全力の訓練

ナツさん達最強チームにウエンディ、シャルル、ミツシエルさんが同行しルーシイさんの元実家——今は売りに出されているハートフィリア家の屋敷へと向かった頃、僕とイーロン、ロメオ君、そしてデジモン達は僕の自宅にいた。

「それじゃ、早速始めよう。時間が勿体ないし」

「兄貴、一体何をするんスか？」

「っていか何で俺も？」

「イーロンにも話があるから。ロメオ君は暇そうだったからかなあ」

「暇そうって…まあそうだけどさ」

これからはこの二人も戦闘に参加していくことになるだろう。レギオン隊と出会い、一対一では無いだろうけども強敵であることには変わりはない。もう一人前同然のこの二人だが、今の僕らと比べると

「まあ、ちょっと待っててよ。すぐ終わらせるから」

とりあえず、今はデジモン達と反省会だ。元々は彼らと話し合う為になんざわざり帰ってきたんだから。そう考えた僕は、デジモン達の方へと向き直る。

「レギオン隊のマリー＝ヒューズ達との戦いで、僕らの欠点がいくつか見つかった…そのことについて、こうして話し合いたかったんだ」

「欠点…」

「皆、思い至る点はある？」

僕の一言に、ドルモンとプロットモンは俯き考え込んで、パタモンは僕の方を見て言った。

「僕とプロットモンが動けなかったこと、かな？」

いつもの間延びした喋り方でないことに少し驚いた。普通に話すことも出来るんだ…まあ、今はそんなことどうでもいいや。

「そう。今まで交代で常に君らの中の一体を出していたけど…ハッキリ言って、意味ないよね？今回みたいに勝手に出て行っちゃって、限界時間を迎えてたんじゃさ」

「う、ごめんなさい…」

好奇心旺盛なプロットモンには酷なルールだったが、今までの行動を見返しているとはほとんど守れた試しがない。今回は、プロットモン搜索でパタモンも同じ時間飛び回っていたから、ドルモンしか戦闘に参加できなかった。

「それに、この交代制のルールではもう一つ問題があった…僕も、気づいたのは今回の戦闘の後だったけどね」

「もう一つの問題？」

「…敵を、甘く見すぎだったんだよ。僕たちは」

今までの敵は強敵揃いだ。僕が戦った人…六魔のエンジェルも、煉獄の七眷属のラスティローズも、僕は仲間と協力しないと勝てない相手だった…エドラスの時は不意打ちしたからカウントしないけど。

とにかく、これからもそんな強敵達が僕らと戦うことになるというのに、なぜ交代制にしてしまったのか。強敵だということの認識の弱さのせいだろう。

「僕とこの中の誰か一体だけじゃ、これからの敵には相手にもならないのはよく分かった…だから、単純に三体に増やそう」

「ということとは…」

「これからは基本三体ともデジヴァイスの中に入れてもらって、戦闘では僕と一緒にチームで戦ってくれってこと」

「うう…分かったあ…」

三体とも落ち込んでいるが、やっぱりプロットモンが一番ガツカリしている。それでも言うことを聞いてくれるのはちゃんと反省している証拠だろう…子犬が超落ち込んでいる姿を見ると、精神的にダメージが来るといえるか…次の話にしよう。

「…で、君たちに守ってほしいことがあるんだ」

「守ってほしいことって？」

「僕の指示の意味をほしんだ。今回ドルモンは僕がルーシイさんとミッシェルさんと一緒に逃げてと頼もうとしたけど、聞かなかったでしよっ…」

「だって、仲間を置いていけるわけ…！」

「その気持ちは痛いほど分かってる…でも、今回は一番危険に晒されていた仲間は他でもないルーシイさんだったよ」

僕の言葉にドルモンとプロットモンは疑問符を頭に浮かべている…ように見える。パタモンは何となく言おうとしていることを分かってくれたような反応をしている。やっぱりこの三体の中じゃ、パタモンが一番頭良いな。作戦考える時とか相談してみても良いかも。「今回の敵の三人はルーシイさんを…というか、ルーシイさんが持っていた遺品の針を狙っていたでしょ？だからあの時にドルガモンが二人を抱えて飛んで逃げていけば、他の仲間達はどうなっていたと思う？」

「んんん…！？？」

「えつと…」

「…目眩ましただけして、ルーシイ達を追いかけたんじゃないかな」

あ、話し方戻った。

「多分そう。だからあの時は、ルーシイさんを逃がすっていうのが全員にとつて一番良い行動だった」

「そ、そんな…」

「まあ、初めての戦闘だったからね…こうして振り返っているのは、次に活かす為だ。相手の狙い、こっちの目的、戦いの状況…その時の情報が最善の近道。僕も全部が正しいわけじゃないから…僕が出した指示が最善かどうか考えてから、各自行動してほしい。オツケー？」

「はい！」

「オツケー」

「…分かった！」

ここからだ。今回の敗北から、少しずつ学んでいけば良い。それが、僕達を強くする一番の近道だから。

さて、それじゃ…次に移ろう。

「イーロン、ロメオ君」

「何スか兄貴！」

「話は終わり？」

「うん。ここからは、君たち二人とデジモン達も交えて戦闘訓練をするよ。ただし…」

「ただし？」

「全員で、僕と戦って貰う」

「…は？（え？）」

全員の表情が固まっているのを見て、僕は少しおかしくなって笑ってしまった。

☆

今までまだ早いと考えてやって来なかった僕やウエンディとの戦闘訓練。それが仇となって、今回の戦闘では僕を相手に本気で戦うことが出来なかった。

今回のマリー＝ヒューズのように僕が操られた時、ベルベノのように僕の姿や魔力をコピーした敵と対峙した時、そしてあり得ないとは思うけど…僕自身が敵になった時。そんな場合に今回のような調子では不味い。

そして今回の敵であるレギオン隊がもう襲ってくるのではない今だからこそ、僕と全力で戦って貰うことにした。

「いい？僕に一撃でもいれたら君たち全員の勝ち。もちろん掠めただけでもクリアだ」

「でも兄貴、その怪我じゃ…！」

「心配されるほどの怪我じゃ無いよ。それに——全力で来ないと、怪我するのはそっちだよ」

「!?」

今まで彼らに、というか仲間に殺気を放ったことはない。だからか、全員が一瞬身震いしたように見えた。良かった、ちゃんと威嚇出来たようだ。今さっきああ言ったけど、まだ全身痛んでるんだよね。

「先手はそっちからいいよ」

「舐められたもんだぜ…！皆、行くぞー！」

一番最初に仕掛けてきたのはロメオ君。紫の炎——ディフエントパープルフレアを球状に打ち出したが、何の問題も無く防御結界で防ぐ。しかしそ

れでもロメオ君は連続で攻撃し続けていた。

「メタルキャノン！」

「弾性結界」

「うわつと!？」

横からのドルモンの攻撃は敢えて防がずに、弾性結界で上に回避。ドルモンと反対側から回っていたプロットモンは鉄球をギリギリ躲したようだ。そして僕が回避した先には、既にパタモンが先回りしていた。

「エアショット！」

「パープルネット！」

パタモンの空気弾に加え、下からはロメオ君が網状にパープルフレアを展開……ここまでは、ちゃんと連携出来ている。しかし、まだ戸惑っているのが約一名。

「…反射結界！」

「イーロン!!」

「…!ぐつ!？」

イーロンの方向へと反射させたことで、イーロンは紫色の炎の網に捉えられた後、パタモンの空気弾を食らい後方に飛ばされる。

「何やってんだよ！」

「す、すまねえツス……！」

「君に言いたかったことは今のだよ、イーロン」

「言いたかったこと……？」

デジモン達の攻撃を躲したり防いだりしながら、僕は話し続ける。「魔道舞踏会の時、君はベルベノに怒りに任せて攻撃したらしいね。君はどうやら戦闘に僕が絡むと、感情のコントロールが出来てないみたいだ」

僕がやられたと知れば仇を討とうと躍起になり、今のように敵として立ちはだかれば傷つけないという気持ちが優先されて咄嗟に動けなくなる。僕に依存しすぎているんだと思う。

「パピーハウリング！」

「くつ……」

「メタルキャノン！」

「エアシヨット！」

「ディフェンド ドーム防衛結界・円蓋！」

危ない危ない、イーロンへ話しかけるのに集中しすぎる所だった。プロットモンのパピーハウリングは相手の動きを止めるのに最適だなあ。耳を押さえたくなくなる。っていうか、話している最中でも容赦ないんだね？そう教えたの僕だけだよ。

「戦いの最中に余計なことを気にしちゃ駄目だ。僕がどんな状態になつたとしても、持てる力を出せるようにならないとね」

「でも、兄貴に何かあつたりしたら、俺は……！」

「イーロン、君の目標は何？」

「……俺の？」

以前、天狼島に行く前に一度だけ今と同じ質問を彼にした。その時の答えは「兄貴と一緒に戦うこと」だった。それが叶っている今、次の目標が必要だ。僕をではなく、その目標を最優先にする。そうすればきつと、イーロンは化ける。

「俺の目標は……兄貴に、いや、兄貴を追い越すことツス!!」

「よし！仕掛けてこい、イーロン！皆で、僕に一撃食らわせてみる！」

「はいツス!!」

ハッキリ言つて今の僕とイーロンが戦つたら僕が勝つ。そんなことはイーロンも分かっているし、だから今回は五対一にしたんだ。

「ドルモン、進化だ！」

「え、でも……」

「大丈夫、自分を信じろ！」

「……うん!!ドルモン、進化!!」

ドルモンが全身に力を溜めてそう叫んだのと、僕が額のゴーグルから光が発せられているのに気づいたのは同時だった。ドルモンも光に包まれ、獣竜型デジモンへと進化を遂げる。

「ドルガモン!!」

「バウンスド弾性結界！」

「ドルガモン、俺達を乗せてくれ！」

「ああー！」

デIFフェント 防御結界を解除して、もう一度上空へと跳ぶ。ロメオ君とイーロンはドルガモンの背に乗り飛翔する。

アイアンメイク チェーンハンマー
「鉄造形・鎖鉄球!!」

「パープルフレア!!」

鎖のついた巨大な鉄球と、さつきよりも大きさも威力も増した紫の炎が僕へと放たれる。もう一度弾性結界をその場に展開してさらに上へと回避。

「エア……！」

デIFフェント トIテム
「防御結界・柱!!」

パタモンが背後から攻撃を仕掛けてきたので、それに反応して柱を投げつけた。しかしパタモンの必殺技の予備動作はフェイントだったようで、柱をギリギリで躲して僕の顔へと急接近してきた。

「羽ビンター！」

「よっー！」

「まだまだあつ!!」

クリスタル アームド
「水晶結界・外装！」

体を仰け反らせてパタモンの攻撃を避けたけど、パタモンはそのまま縦回転で攻撃してきた。咄嗟に左腕にだけ水晶結界を纏って防ぐけど、ドルガモン達が待っている真下へと落下を始める。

「今だー！」

「頼むツス!!」

「せー…のっ!!」

ドルガモンの尻尾に捕まっていた二人が、遠心力で勢いよく僕の方へと飛んでくる。僕も水晶結界を右腕にも纏って魔力を放出させ、剣を模した攻撃を繰り出した。

「クリスタル ブレイド
水晶結界・刃!!」

「アイアンメイク シールド
鉄造形・盾!!」

両手をクロスさせて放った一撃は、イーロンの鉄の盾に阻まれる。その結果、盾は粉々に砕け散り、イーロンは地面へと吹っ飛ばされる。

「いっけえっ!!」

「うおおおっ!!」

ロメオ君が右腕に紫色の炎を宿し、僕の顔面へと一撃を入れた。

「や……った……」

「——いや、まだまだよ」

ロメオ君の全力の一撃だったけど、きつと彼なら真っ直ぐに來ると思った。だって、彼が憧れているであろう人なら必ずそうするだろうから。僕が小さく展開した防衛結界・デیفエント柱トータムに右腕だけを打ち抜いて腕を開かせ、僕は落下スピードを利用してロメオ君にラリアットを食らわせた。

「がっ……!」

そしてこの瞬間、僕は安心してしまった。刹那の、全力の僕らの攻防。これで彼らの手は尽きたと、思い込んでいた。

「——いっただきいっ!!」

「いてっ」

僕の背中に乗っていたプロットモンに、耳を噛まれた。

☆

ドルガモンがイーロンとロメオを投げた時、プロットモンはロメオの背中にいたらしい。ラリアットをした瞬間に僕へ飛び移ったんだとか。

「と、こんな風に勝ったと思った瞬間に逆転されることもあるから、最後まで油断禁物だよ…分かっているとと思うけど」

「肝に銘じとくツス!!」

なんで負けた僕が、負けた原因について教えなければならぬんだろう…イーロンやロメオが自信を持ってくれるんだったら、それでいいか。情けないことこの上ないんだけどね…僕も頑張らないと。今はまだ昼だけど、ウエンディ達が行ったのは朝早くだ。そろそろウエンディ達が戻ってくるだろうしギルドで待ってた方が良さ——

「皆…っ、何処にいるの…っ!」

「あ、ウエンディの姉御!」

「あれ…そういえばゴーシユ兄、安静について言われてたような…」

「…ロメオ、イーロン、僕は家に戻るから上手く誤魔化しといて。行くよ皆」

「え、ちよつと…」

ギルドの方からウエンディとシャルルが来ているので、家で安静にしているフリをしに行こう。さすがにこんなにも早く戻ってくるとは思ってなかった…デジモン達を素早く回収した僕は、身を隠しながら移動する。

『ねえ、ゴーシユ』

「何?」

『これ意味ないんじゃない?ゴーシユがロメオとイーロンを連れ出したの、皆知ってるでしょ?』

「……」

そうだとしても、戦闘訓練をするとは言っていない。言っていないんだ

けど：僕の直感が、ドルモンの言う通りだと告げていた。

そのすぐ後、ロメオとイーロンのどちらかが言ったのか分からないけどウエンデイに速攻で捕まり、ギルドに戻るまでの最中ずっと小言を言われ続けていた。

第62話 旅の仲間たち

僕らがギルドに戻ると、既に最強チームの面々がハートファイア家から戻ってきていた。しかし、一つだけ気になることが。

「ナツさん…?」

「ナツ兄、小さっ!」

「小さい言うなっの!」

「どうしたんですか?」

ナツさんがグレイさんの親指と人差し指で摘まれるほど小さく なっていた。話を聞くと、ハートファイア家にレギオン隊のダンとい う男とサミュエルというエクシードの二人組と交戦し、ナツさんはダ ンの持つ魔槍の効果によって小さくなったらしい。七年前にあった フィギュアに見えるくらい小さいので、抵抗しようと火を噴いてい ても可愛らしく思える。

「そろそろ話に戻って良いかしら…」

「あ、すみません。何か分かったんですか?」

「色々だね。あたしのお父さん、この本の内容をなぞっていたの」

「どういうことだ?」

ルーシイさんが手に持っている絵本、《星空の鍵》の内容を語り始 める。小さな女の子が全部集めると幸せになるという六つの鍵を探 して旅をする。その子が幸せになる代わり、周りの人達が不幸になる というオチらしい。

絵本ってことは、子供に読み聞かせる物なんだよね。こういうバツ ドエンドな物語って読まれることはあるんだろうか…? 僕が親の立 場だったら内容知った時点で買わないと思う。子供が泣いちゃうか もしれないし。

内容をなぞっていた、というのはもちろんあの遺品の針のこと。あ れが絵本に出てくる一つ目の鍵と同じように《旅》をした、というこ とらしい。確かにミツシエルさんが鍵を持って、ここに運ばれてきた のを《旅》と解釈出来る。

「あの、ちよつと良いツスか?」

「どうしたの？」

「そもそも、なんでその絵本になぞらえてたんスかね？」

「そっか、そこら辺はゴーシユ達に話してなかったね」

「ルーシイの親父さんが遺していた暗号を解読したら、ウイルⅡネビルって作家の出してた本に繋がったんだ」

「そのウイルⅡネビルが出していた本の一つが、今ルーシイが持っている絵本というわけだ」

「なるほど…すみません、話続けてください」

旅に出た少女は、様々な場所で“鍵”を見つけ集めていく。最後に聖堂にたどり着いたという話を聞き、エルザさんはこの町のカルデア大聖堂かと疑うが、ルーシイさんがそれを否定。小さい頃にこの絵本のモデルになった場所を探したことがあるらしい。

小さい頃って何歳くらいなんだろう？調べて場所を突き止めるとか、資料の多さもビックリだけどルーシイさんの行動も凄いと思う。なんていうか…小さい頃だったら、普通絵本の内容をそのまま信じちゃうんじゃないのかな？サンタさんとかそんな感じで。少なくとも前世の僕はそうだったけど…絵本の内容を創作っていうことを理解していることが凄い。

「お父さんは残り五つの部品を、その場所に分散して隠したんだと思う。そんな話、してなかった？」

「いいえ、特には…亡くなる頃、とても無口だったから…」

「…とにかく、星空の鍵のモデルになった場所に行けば、残りの部品は手に入れられるわ！間違いない！レギオン隊がどうして時計の部品を集めているのか分からない。でも、混沌が訪れるなんて言われたら、放っておくわけにはいかない！あたし、探しに行ってくる！」

「お前一人でか？」

「うん。マスターには止めておけって言われたけど、なんか気になるし…」

「そうですね…」

「ナツはこのままじゃ役に立たないしね！」

ハッピーの頭から飛び降りたナツさんに向かって煽るような一言

を言っていたけど…解除された時が怖そう。まあその辺は気にしないでおくとしようかな。

「どうするよ？レギオン隊もこのネタに勘づいているんじゃないか？だとしたら時間との勝負になるぜ」

「…残りの部品が全て集まった時、何が起こるのかは定かではない。じゃが、世界の混沌は避けねばならぬ」

「…チームを編成しよう」

☆

さすがにギルドメンバー全員でというわけにはいかないの、話し合いの場にいたメンバーを中心に五つのチームに分かれて部品を回収しに行くことになった。部品を回収しておけばレギオン隊と出会う可能性も高まるし、奴らの目的が分からない以上時計の部品集めを止めるしかない。

「こういう所で食べると、きつと美味しいわよ」

「僕達が混ざって良かったんですね…折角の三人で水入らずなのに」

「漢なら気にするな！何も問題ねえさ！な、姉ちゃん、リサーナ！」

「ええ、勿論！弟達が出来たみたいで楽しいし！」

「ハハハ…ありがとうございます」

「ご飯の時くらいはと思つてデジモン達を出しているから騒がしいかと思つたけれど、ミラさんにとっては弟妹の感覚らしい。エルフマンさんも気にせずシチューを煮込んでいます。しかしリサーナさんは顔が少し引きつっていた…これはデジモン達を出す前からだし、思っていることも何となく分かる。

「あの…ミラ姉？ちよつと、場所のチョイスが…」

「あら、そう？」

「漢だ！」

目的地に向かう途中で一度休憩をしようということで昼食をとることにしたんだけど、わざわざ崖の先端でやらなくても…とは確かに思った。でもリサーナさん以外気にしていないから僕も気にしな

いいことにした。このメンバーなら崩れたとしても問題ないだろうってことで。

「よし、出来たぜ！」

「ありがとうございます、エルフマンさん」

「皆、ご飯出来たわよ」

さすがミラさん、何か子供の扱いに慣れている気がする。デジモン達もちゃんと言うこと聞いてご飯を食べ始めたので、僕も早速頂くことにする。

「美味しい…！」

「エルフ兄ちゃんの料理、美味しいでしょ？」

「ちよつと意外だね。料理とかしない人だと思った」

「本当だね」

「漢たる者、料理を磨くべし！」

「漢は関係無いんじゃない？」

デジモン達の失礼な感想にも文句一つ言わず、寧ろ誇らしげにしているエルフマンさん。でも、本当にこのシチュー美味しい。何か、優しい味って感じがする。

「そうだ、ゴーシユ！デジモン達の話の続き、教えてよ！」

「良いですよ、どこまで話しましたっけ？」

「進化の話だったわね」

リサーナさんが特に熱心にデジモンの話を聞いてくるので、道中はその会話ばかりだ。やっぱり動物の接テイクオーバー収の魔法を扱うくらいだから、動物が好きなんだろう。それも今まで見たことも聞いたこともない生命体だから、余計に気になるだろうし。

「ゴーシユ、早く見せてよ！」

「はい、えつと…デジモン図鑑を見る限り、パタモンとプロットモンの進化先は…この辺りですかね」

デジヴァイスを操作して、ゴーグルのレンズから映像が照射されプログラムとして現れる。そこにはデジモン図鑑から引っ張り出された画像が何枚か映し出された。これは僕がこの前一人でデジヴァイスを操作していた時に気づいた機能の一つ。こうすれば周りの人に

も見せやすくして良い。

「なんだこりや?」

「天使…?」

「そうなんです。この二体は体内に聖なる力を秘めているらしくつて、だったら天使型とか聖獣型のデジモンになるんじゃないかなつて」

「へえ…:なんかカッコイイね!」

「パタモン達はどんな姿になりたいとかあるの?」

ミラさんがパタモンとプロットモンにそう尋ねた。二体は考え始め、パタモンは何故か上を見た。

「パタモン?」

「僕は、もつと気持ちよく空を飛びたいかな」

「なんか、パタモンっぽいね」

「そうかな?」

のんきというか、マイペースっぽい感じがパタモンらしい。でも空を自由に飛びたいっていうのは、もしかしたら鳥みたいなデジモンになりたいってことなのかな?

「プロットモンは?」

「うん…:なんか、しつくり来ないの」

「漠然とでもイメージないの?」

「聖なる力とかそんなこと言われても分かんないし」

「まあ、僕が予想したただけだしね。これが正解ってわけじゃないか」

その後もデジモンの画像を映し出して、リサーナさんやミラさんが動物のようなデジモンを見て可愛いと盛り上がったり、エルフマンさんが筋肉モリモリの漢というか、親父みたいなデジモンを見て反応したり。デジモンって沢山いるんだな…:確か、デジタルワールドからこつちに来たのはドルモン達とウエンディモン、そしてウエンディモンに抱えられていたデジタマ達。サンゾモンの力とやらがいつまで持つのか分からないけれど、早く探し出してあげないとな。

このデジヴァイスに備わっていた機能の一つに、転送というものがあつた。詳しく見てみた所、デジヴァイスの中に入ったデジモンを転

送するわけじゃなくて、デジモンに宿っているサンゾモンの力をデジタルワールドに転送することが出来るらしい。どういう原理なのかはよく分からないんだけど。

要するに、デジタマもしくはデジタマから孵ったデジモン達を回収しろっていうことだろう。そうして転送をしていけばサンゾモンは何体回収出来ているのか分かるだろうし、全てのデジモンを回収しきったその時に、きつとデジタルワールドから迎えが来るんだろうと僕は思っている。きつと、その時が……——

「ゴージュ……？」

「あ、ごめん……何でも無いよ」

今は気にしても仕方ない。とにかく、時計の部品集めに専念しよう。僕らは食事を終えた後に目的地へと進むことにした。

☆

「ちよつとりりー、全然方角が違うんだけど……」

「どこに向かってるんすか？」

「……………」

時間は少し遡る。チーム・シャドウギアの三人と一緒に行動していたイーロンは、りりーの案内で険しい山道を登っていた。

「アイツ、何考えてんだかよく分かんねえよな」

「うん……頼りにはなるんだけどね」

「ハアア……」

序盤から既に体力を切らし始めていたドロイが、地面に倒れ込んだ。

「大丈夫？」

「大丈夫じゃない……この体型でこの坂は……無理、デス」

「だから鍛えた方がいいって何度も言ったじゃないツスカ」

「おいりりー、目的地にそのまま行った方が……ドロイその内死ぬぞ？」

「ドロイは戦力外だ。もう一人強力な者が必要だ」

「ひどい……」

「強力な者って誰？」

「妙な笑い方をする男だ…ギヒツ、とな」

「それって…」

そのまま進み続けること数十分、リリーが大きな滝の前で歩みを止めた。

「すげえ滝だなあ…」

「水だ！喉渴いたく!!」

ドロイが真っ先に駆け寄り、水を飲み始める。リリーが目的の人物を探し始め辺りを見渡すので、イーロン達も探し始めた。すると、レビイが何かに気づいた。

「あ、あそこ！」

「ガジル…?」

「何してんだ？」

「修行じゃないツスカね？」

「その通りだ」

「ガジル〜！」

「うるせえ…今修行中だ」

滝行をしているガジルに向かって、レビイは手を振りながら声をかける。するとガジルは鬱陶しいとでも言うように片目だけを開いてそう言った。

丁度その時、空の暗雲が光を放った。その光は滝行中のガジルへと降り注ぐ。リリーは思わず両目を瞑り、耳を塞いだ。

「ぐ…！ううっ…」

「こ、怖くないぞ…！」

「だから、何してんだアイツ」

「あれで修行なのか？」

「ラクサス兄さんと戦う為ツスよ、きつと…」

「滝と雷！両方に打たれても大丈夫なように訓練してんだ！喧しい！」

「ど、どっちなにしなよ…！」

ラクサスとの決闘から逃げ出したガジルは、本格的に対ラクサスの特訓を始めた。鉄は電気をよく通す。どんなに強力な雷を受けても

平気な体づくりから始めたのだ。

「お、俺も修行だ…！恐れてなどいないぞ！」

「来い、リリー！」

「ああ！」

「ただ迎えに來ただけなんだろう!？」

「世の中には、克服せねばならぬものがある！」

「主旨が違ってきてるよ、リリー…！」

「…俺もやるツス！」

「え？ちよ、おい！」

イーロンもまた鉄の造形魔法を使う。電気の魔法を使用する敵と遭遇した時の為にと今考えた結果が修行に付き合うことだった。こうして、彼らはしばらくこの場所に留まることになったのだった。

第63話

計算をこえるもの

修行を終え、時計の部品の一つがあるとされる荒野へとやってきたガジル達。彼らは今、岩壁をよじ登っていた。

「本当にここで間違いないの!?!」

「テメエらのよこした地図にはここだって書いてあったんだ」

「普通の地面ならいくらでも走れるけど、こんな崖上りじゃ勝手が違うぜ…」

「リリーが俺達を乗せて飛んでくれりや簡単なんじゃねえのか!?!」

「それでは途中で手がかりがあった場合に見逃してしまうだろう。安易な手段を選んではいかん」

ウンウンと自分で言ったことに納得するリリー。現在一番上にいるガジルへとイーロンは声をかける。

「ガジルの兄さん、どっちが一番上まで行けるか競走ツス!」

「面白え、受けて立ってやる。テメエらもグズグズしてっと置いて行っちゃうぞー!」

「イーロンはともかく…アイツむかつく!」

「ってか、なんでアイツはガジルと張り合ってるんだ?」

「さあ…」

レビイ達の呟きはガジルとイーロンには届くことなく、二人は上へと進んでいく。拮抗していたが、僅かな差でガジルが先に一番上へとたどり着いた。

「ハア、ハア…!」

「まだまだだな、ギヒツ。罰ゲームで鉄よこせ」

「くっそー…次こそは」

自分は息を切らしているのに対し、ガジルは汗一つかいていないことに体力差を痛感するイーロン。罰ゲームとやらは寝耳に水だったが、大人しく要求に応じる。すぐに呼吸を整え、先程までいた崖下を見下げる。

「レビイの姉さん達はまだかかりそうツスね」

「さて、とりあえず飯だな」

「いやいや、部品探さないんスか!？」

早速イーロンが魔法で出したパンや骨付き肉といった食べ物の形をした鉄を食べ始めるガジル。仕方が無いので、イーロンは辺りを調べることにした。

「もしかして、隠しスイッチでもあるんスかね?」

「それらしい物は見当たらないが…」

後ろからついてきていたリリーと一緒に地面やその辺の岩を調べるが、ただの岩にしか思えない。地面も同じくだ。だが、人為的に何かをこの場所に隠しているのならばそういつた仕掛けがあるはずだ。「ま、まさか俺達が登ってきたのと反対の岩壁にスイッチがあつたりとかは…」

「考えられなくはないな」

リリーの一言を聞いて、若干顔を引きつらせる。ただでさえ時間がかかったというのに、岩壁全てを調べるとなるとさらに時間がかかってしまう。今いるこの場所は、岩山というよりも岩の塔と言えるような形状をしており、普通の岩山よりはマシかもしれないが、手間な事には変わらない。

「と、とりあえずもう少し調べてみるツス…」

「お前、さつきから何してんだ」

「え? いや、時計の部品が隠されていないか探してるんスよ!」

丁度その時、レビイ達三人がようやく頂上にたどり着く。

「レビイの姉さん達、お疲れ様ツス」

「やつと頂上…!」

「空気が薄い…」

「寒いく!」

「へばってる暇はねえぞ。さつきと時計の部品を探そうぜ」

「それ、アンタが言うんスか」

さつきまで食事をしていた人間の台詞ではないとイーロンは思った。実際に探索していたのは自分とリリーなのだから。

「ちよ、ちよつと休ませて…」

「もう一歩も動けねえ」

「腹減った〜」

「…いかん！山を間違えた！」

「…「ええ!」」

「部品があるのは向こうの山だ！もう一回、登り直しだ！」

「…「嘘お〜!!」」

あまりのことにレヴィ達三人は放心状態になり、イーロンも両手を地面につけて落ち込む。

「と言うのは冗談だ。ギヒツ！」

「…はい？」

「む…：愉快的ジョークで元気づけようとしたのだが。逆効果だったか」

「…：だって、リリーは冗談言うキャラじゃないツスよ」

すっかりしていて冷静な人（この場合エクシードだが）にいきなり冗談を言われても、周りの人は本当のことなのかと思ってしまう。今回のような現実味を帯びた話だったら尚更である。チーム・シャドウギアはしばらく行動不能になってしまった。

「と、とりあえず三人はその内復活するから良いとして…：どうするツスか？」

「周りにそれらしい物はねえんだろ？だったらやることは一つだ」

「何をする気だ？」

「ギヒツ…：オラララア!!」

ガジルは雄叫びを上げながら地面を殴り始める。イーロンとリリーはその行動を見て何をしているのかを理解する。一見仕掛けのような物は何も見当たらない。しかし、ここが目的の場所であることは間違いない。だったら、地面の中に埋められていると考えられる。仕掛けを探すよりも強引に掘り当てれば良いという発想がガジルらしい、というかこのギルドらしいが。

「俺もやるツス！リリーも道具作るから手伝うツスよ！」

「うむ、頼んだ」

アイアンメイ

鉄造形でツルハシやスコップを数本作り出し、辺りに置いておく。複数出したのは、後でレヴィ達にも手伝って貰う為だ。リリーも元の

体格に戻りツルハシを手取る。そうして二人はガジルへと近づき手伝い始めた。

☆

程なくしてシャドウギアの面々が復活して手伝い始めてから数十分。空はもう夕焼けで赤く染まり始めた頃、皆が黙々と作業を続ける中ガジルが突然作業の手を止めた。

「どうしたの？ガジル」

「…誰か見てやがる」

「え？」

「誰かって、誰だ？」

皆が辺りを見渡すが、人影は見当たらない。ガジルがふと空を見上げるとそこには、翼を持った眼鏡をかけている猫の姿があった。ハッピーやシャルルと同じようにこのアースランドに送られた百人のエクシードの内の一人で、レギオン隊に所属しているのがこのサミュエルである。ナツ達が先日ハートファイリア邸にて遭遇した敵。そのことを情報として知っていた為、気づくことが出来た。

「ああ…気づかれちゃったか」

「レギオンの一人!？」

「何しに来た！」

「決まっているだろ？欲しいものはお互いに、同じだよね？」

「アンタらも部品狙いってことツスね、やっぱり！」

「…君たちとは初対面だね。名乗っておこうか。僕はサミュエルだ」

「アンタが、ナツ達の言ってたエクシード？」

「そう、レギオン隊の頭脳と呼ばれているのはこの僕さ」

堂々とそう言い放つサミュエル、しかしこの言葉には偽りはない。ルーシイの鍵を奪いにやって来た時や、ナツ達との戦闘でダンに作戦を与え上手く立ち回らせたのもサミュエルなのだから。

「勝負してえなら、さっさとかかって来やがれサミー！」

「勝手に名前を略さないでくれ。僕の名前はサミュエルだ」

「…ここは俺が引き受けよう。お前たちは一刻も早く、時計の部品を

見つけろ」

「パンサー＝リリー…エクシードの先輩だね。僕にとっては、謂わば兄貴分のような存在ってわけだ」

「貴様に兄貴などと呼ばれる謂れはない！」

背中を構え、サミュエルと同じように空を飛び回り。

「つれないこと言わないでよ、エクシード同士仲良くやろうじゃないか、兄さん」

「嫌がらせのつもりか、サミー！」

「…」

互いに挑発し合い、相手を見据える。今すぐにも戦闘が始まりそうなる為、ガジル達は先程まで掘り進めていた穴の中に飛び込む。

「一気にぶち破るぞ！」

「はいッス！」

「鉄竜槍・鬼薪！」

「アイアンメイ鉄造形・ドリル！」

ガジルが両手を鉄の槍に変え高速での連続突きを放ち、イーロンは両手に鉄のドリルを持ち掘り進める。程なくして足下の地面に罅が入り、五人はそこを蹴破り目的地の遺跡へと侵入した。

「なんだこりゃ？」

「変な顔の遺跡だな…」

周囲には人の何倍の大きさもある謎の石像がいくつも並んでおり、その石像達はガジル達が降り立った場所を見つめていた。そして目の前には岩の壁のようなものがあり、石像達はこれを見つめているようだ。

「とりあえずその辺を探すぞ」

「うん！」

彼らはその辺を片っ端に調べ始める。こうしている間もリリーが戦っているが、彼の實力を一番理解しているガジルが全く慌てることがない。他の四人も多少なりともリリーの強さは知っていた為、ガジルが焦っていないのならば問題ないのだと信じることにした。

「気になるのはこの岩ッスね…」

「…おい、ここに何か書いてんぞ」

「えつと…お腹すいた、だつて」

「は?」

石像の一つに文字を見つけたガジルがレビイに知らせ、解読してもらったのだが意味が分からなかった。イーロンは岩壁の周囲をぐるりと一周し、形状を確認した。

「横に長い岩壁が三つ…? ジェットの兄さん、ちよつと高いところから見下ろして貰っていいツスか?」

「ああ、ちよつと待つてな」

ジェットは一瞬で近くにあつた石像を駆け上がり、岩壁の方を見下ろす。

「お、これつてもしかして時計の文字盤じゃねえか?」

「やつぱり。この岩壁、時計の針だつたつてことツスね」

「じゃあ…おやつの時間を指すとか?」

「それだ!」

「こいつを動かせばいいんだな?」

ガジルが鉄竜棍で岩壁を殴りつけると、岩壁が動き始めた。

「よーし、俺もやるツス!」

「でも、どの方角が三時なんだ?」

「…!この石像、数字が書いてあるよ!」

「レビイの姉さん、指示をお願いするツス!」

「任せて!」

ガジルとイーロンが協力し、レビイが指示を出すことでそれほど時間をおけることなく文字盤を三時の形に動かし終えた。すると、何か仕掛けが作動した音がした。文字盤は地面へと沈んでいき、入れ替わりで岩の柱時計のようなものが現れる。そこには目的だった時計の部品の一つが埋め込まれていた。

「やつと見つけた!」

「時計の文字盤だな」

「…」

ガジルはそれに近づき、文字盤を舐めた。

「な、何やってんだ？」

「コイツは鉄で出来てるようだな」

「他の確かめ方ねえのか…」

「なんか、持ち運ぶのが嫌になったツス…」

レビィはその文字盤の下に何かを書いてあるのに気がつき、解読を試みようとするがガジルがそれを無視して無理矢理文字盤を引つ剥がそうとする。

「ちよ、レビィの姉さんならすぐに…！」

イーロンの叫びも虚しく、ガジルが文字盤を引つ剥がしてしまった。その次の瞬間、遺跡全体が揺れ始める。

「な、なんだ!？」

「こう書いてある！警告、これを奪う者は岩の番人許さぬであろう！」
「つてことは…！」

地面から巨大な石像が現れる。その辺にあった石像と同じ見た目だが、一回り大きくその石像の足下からは触手のようなものが生えていた。ガジル達はその石像からの攻撃を紙一重で回避する。

「だから待つてつて言ったのに！慌て者、おつちよちちよい！」

「俺が悪いつてのか！」

「ガジルのせいでしょ！」

「ホントツスよ！巻き込まれる身にもなってほしいツス！」

「喧嘩してる場合かよ!!」

直後、触手による攻撃がガジル達を襲う。これも何とか回避に成功し、レビィは石像の頭の上に赤く光っている部分があることに気がついていた。

「あの光ってる所が岩を操ってるみたい…」

「つてことは、あそこが急所か！」

「よし、シャドウギアのチームワークの見せ所だぜ！」

「まずアイツの動きを止める！ソリッドスクリプト立体文字、オイル！」

石像はレビィによって足下に撒かれた石油に足を取られ、バランスを崩した。その隙をつき、ドロイが手に持っていた魔法の種を自分の足下に投げる。

「次は俺の番だ、チェーンブラスト!!」

魔法によつて急激に成長した種は蔓を伸ばし、石像へと絡みついていく。これにより動きは障害され、さらに頭の上へと続く足場にもなった。

「最後は俺だ!ハイスピード!!」

そしてジェットがドロイの放った蔓を一気に駆け上がっていった。

「おお!すごい連携ツス!」

「見た?シヤドウギアのチームワーク!」

「へっ、ちつたあやるじゃねえか」

レビイがガジルとイーロンに向かってそう言っている間に石像が僅かに動き、何本かの蔓が千切れる。ジェットが足場としていた蔓も切れたことで落下してしまった。

「ジェット!」

「任せる!」

ドロイが咄嗟にジェットの足下に巨大な葉を何枚も生み出し、それによつて衝撃は分散される。ジェットはそのまま石像の足下、つまりレビイの放っていた石油の中へと落ちてしまった。

「大丈夫?」

「うえゝ、油でベトベトだ!」

「…来るぞ!」

「何の、もう一度!」

石像が動き出し、全ての蔓が千切れてしまう前に駆け上がろうとするジェットであったが、油によつて滑りやすくなってしまいすぐにまた石油の中へと落下してしまった。それを見たドロイが今度は自分だと走って行くが、体力がなく途中で止まってしまいそこを触手でたたき落とされた。

「途中までは良かったんすけどね…」

「こうなったら、私が行くしか…!」

「邪魔だ、どけ!」

「アンタね、そういう言い方って…!」

「あいたっ!?!」

レヴィイが行こうとしたがそれよりも先にガジルが駆け上がり始める。その際、イーロンの顔面にガジルが持っていた文字盤がクリーンヒットした。ガジルはそれを気にせず、あと少しで切り切るといった所で触手に攻撃され、やむを得ずまたレヴィイとイーロンの傍へと退避する。

「ガジル！」

「ちよつと、投げるなら投げるって言ってほしいツス！」

「それより今は、あの頭の上まで何とかたどり着かねえと…くそ、腹が減って来やがった…おい、その文字盤を…」何言ってるの、駄目に決まってるでしょ！」本気にすんな、冗談だ！」

「冗談に聞こえないの、アンタの場合！」

触手による攻撃を躲しつつそんなやりとりを続けるガジルとレヴィイ。二人に対し必死になって攻撃を躲しているイーロンは叫んだ。

「いいから、早くどうにかするツスよ!!」

「ねえ、さつきからその文字盤を狙ってるんじゃない?」

「そういうことか…おい、ガキ！」

「ガキじゃなくてイーロンって名前があるツス！」

「チツ…イーロン、アイツを引きつけろ！」

「…！お任せあれツス！」

自分のことをようやく名前で呼んでくれたことが、自分を認めてくれたように感じイーロンは内心喜びながら、ガジル達と別方向へと走り出す。

「^{アイアンメイク}鉄造形・アンカー！今ツス！」

「うおおおっ!!滅竜奥義、業魔鉄神剣!!」

石像よりも上へと放たれたアンカーは壁に深く突き刺さり、それを確認したイーロンはアンカーを縮めることで突き刺さった場所へと高速で移動する。これにより石像は上を見上げる形になり、その大きな隙を突いたガジルの一撃が石像を一刀両断したのだった。

「こつちは片付いたぞ!・テメエもさっさとケリをつけろ!」

「あれは…」

「そんな馬鹿な…あり得ない!僕の計算が通じない奴がいるなんてーっ!!予定が狂ってしまった、もうどうすれば良いのか分からない!計算不能、計算不能ーっ!!」

上に登ったことでイーロンは、リリーとサミュエルがすぐ近くまで下降していることに気がついた。どちらもこれといってダメージはなさそうだったが、サミュエルは目に見えて狼狽えている…というより、駄々をこねていた。

サミュエルはガジル達があこの石像に倒されることを計算してリリーを足止めしていた。しかし全く違う結果になったことが原因で計算が狂い大きく動揺していた。

「戦いは生き物だ。何が起きてもその場に応じて対応せねばならん。まだまだ経験が足りんようだな、サミー」

「その呼び方をするなーっ!!」

「隙だらけだぞ」

サミュエルは爪でリリーに襲いかかるが、リリーは瞬時に背後に回り込みサミュエルの腕を掴む。そしてそのまま地面へとサミュエルを投げ、サミュエルは受け身もとることが出来ず目を回す。本人が気絶したことにより、リリーと同じく体を巨大化させていた魔法も解けた。リリーも魔法を解き、関節技を極めてサミュエルを無理矢理起こす。

「筋は悪くないようだ。その内また挑戦してこい、いつでも相手をし

「やる」

「確かに僕の負けだ…世の中には計算が通じない相手がいることが分かったよ」

「自分の未熟さに気づいたか」

「つまり、戦う前の計算が足りなかったってことなんだ！今回は負けたけど、今度はもっと緻密に計算して、きっと頭が筋肉の兄さん達を倒してみせる！そうだ、今戦ったデータをちゃんと書き留めておかないと…！」

「誰の頭が筋肉だ!!」

リリーはサミュエルを思いっきり蹴り上げ、サミュエルはそのまま天井の穴へと飛ばされていった。

「エクシードにも色々なタイプがいるのね」

「…リリーってその姿でも強いんスね」

「兄さん、だってよ。ギヒッ」

「兄になった覚えはない！」

こうして時計の部品を手に入れることに成功したガジル達は、合流地点である最後の部品のある聖堂を目指すのだった。

第64話 闇の力

ルーシイさんに渡された時計の部品の在処が描かれている地図に示された地点へとようやくやって来ることが出来た。巨大な湖が高い場所と低い場所に一カ所ずつあり、どちらの湖の上にもアーチ状に岩がいくつも連なっている。…恐らく、この二つの湖の何処かに時計の部品がある。

「リサーナ、大丈夫かしら？」

現在、リサーナさんには湖の中を探索して貰っている。かなり広大なものが二つあるので、しばらく時間がかかるのは仕方ない。それはミラさんも分かっているだろうけど、やっぱり心配になってしまいうだろう。エドラスでのことがあったのだから尚更だし。

「でも水中を自由に動けるの、リサーナさんしかいませんし」

「こうなったら俺が…！」

『まだ十分くらいだし、もうちょっと待ってもいいんじゃないかな？』

「そうね、もうちょっと待ってみましようか」

多分、エルフマンさんが飛び込んでもあまり意味が無いと思う。

☆

それからさらに数分経って、高い方の湖の水位が徐々に下がってきているのに気がついた。何かの仕掛けを作動させることが出来たらしい。やがて湖の水は最終的に全てなくなり、下の湖の水位が上昇した。高い方の湖の底だった場所に立っているリサーナさんの傍には、何というか…リサーナさんと同じくらいの大きさの、お風呂の栓みたいなものがあった。折角湖という自然にこんな人工物があると違和感が…。

「ねえ、あれ！」

全員で探索することになっていたのでデジモン達も出していたのだが、プロットモンが何かに気がついていたらしい。その方向を見ると、明らかに人工の巨大な石版に埋め込まれていた丸い物体があった。多

分あれが時計の部品だ。

「お手柄ね、リサーナ！」

「最近ちよつと存在感が薄かったから、良いアピールになったかなあ…なんて」

「どういう意味だそりや…」

「ねえねえ、私は!？」

「はいはい、プロットモンもお手柄だったね」

「さ、部品を回収してギルドに戻りましょ！」

僕はプロットモンの頭を撫でる。抱っこは落ち着かないから嫌らしいけど、頭を撫でられるのとかは嬉しいらしく今も気持ち良さそうに目を細めている。その間にエルフマンさんが埋め込まれている部品を掴み、難なく回収した…と思ったら、なぜかそのまま何処かへぶん投げた…あれ、なんで？

「ちよ、何処投げてんの!？」

「あれ…」

部品を再度回収しようと動こうとしたが、僕は部品が投げ飛ばされた方向に誰かいることに気がつき臨戦態勢に入る。その人物を見て、僕は思わず顔をしかめた。

「カハツ、ご苦労さん。おかげで何の苦労もなく部品を頂くことが出来たじゃん」

「あなたは…!？」

「レギオン隊のマリー||ヒューズ！」

「私達を付けていたのね」

「その通り。お前らに部品を探させ、それを横取りすれば楽ちんじやん!アツタマ良い〜!ま、考えたのはサミュエルだけどさ〜」

マリー||ヒューズ…ギルドを襲ってきた時は散々だったけど、今回はそうはいかせない。リベンジしたいと思っていた所だし!

「またテメエかよ!部品を返せ！」

「ふっ…」

エルフマンさんが右腕を接収して正面から突っ込んでいった。その時点でこの後どうなるのか分かった僕は、僕とミラさん、リサー

ナさんを覆うようにディフェンド防禦結界・ドーム円蓋を展開した。案の定、マリー＝ヒューズは指揮術でエルフマンさんを操り僕らを攻撃させた。

「わ、悪いゴーシユー！」

「大丈夫です！」

「そっか、お前もいたじゃん。ま、何度やっても同じこと。このタクトがある限り、お前らはマリー＝ヒューズの操り人形じゃん！」

また僕を操られてしまったらこっちの攻撃を防がれてしまうかもしれない…ってというか、僕がいたことに気づかなかったってどういうことだ。

と、丁度その時だった。目の前に転がっている時計の部品に何か文字が浮かび上がった。これは、ルーシイさんのお父さんの遺品にも同じ文字が…！

「共鳴か…そろそろそれを持ち帰らないと不味いじゃん」

「共鳴…？？」

「渡しはせん！それが漢！」

「んじや、兄弟同士で傷つけ合う？」

「貴女、間違ってる！男女混合の兄弟のことって、正しくは兄弟姉妹って言うのよ」

「へえ〜」

ってあれ？なんでこのタイミングで豆知識講座をやったんだろう？ちやっかりマリー＝ヒューズも聞いてるし。

「…って、んなことあどうでもいいじゃん！とにかく部品は貰っていくよー！」

…良かった、ルーシイさんみたいなツツコミ出来る人が目の前にいて。エルフマンさんとはかく、ミラさんとリサーナさんは結構マイペースだから話戻すの大変なんだよね…

「何故そんなことをするの？」

「何故？そんなの知るわけないじゃん。大司教様の仰る通りにすれば全てが上手くいくじゃんー！」

「は…？？」

「言いなりになっただけならー！」

「ただの操り人形じゃない！」
「っ！」

ミラさんの一言でマリー＝ヒューズは目を見開き、真っ直ぐミラさんを見つめる。なんか、雰囲気が変わった…？

「…あっそ。じゃあ、アンタも操り人形にしてやろうじゃん!!」

そう言つてマリー＝ヒューズがタクトを構える。が、今までと違ってタクトは異様な魔力を放っていて、その手みたいな形状が少し変化する。そして、彼女が僕らの方にタクトを構えた直後。

「うあ、ああ…!?!あ、ああああっ!!」

「姉ちゃん、どうした!?!」

「ミラ姉!?!」

「これは…!?!」

ミラさんが苦しみ始めた…だが、その苦しみ方が異常だった。やっぱり今までと違う指揮術なのか…!?!

「指揮術第二楽章…禁じ手にされてるけど、特別に見せてやるじゃん!!」

「ミラ姉の体から…!」

「サタンソウルが!?!」

ミラさんはそのまま倒れ込んでしまう。どうやら気絶しただけみ

ただけど…ミラさんから出てきたサタンソウルは、ゆっくりとこちらを振り向く。もし、あの第二楽章とやらがあのサタンソウルを操り、しかもミラさんと同等の強さなんだとしたら…！

「くっ…ビーストソウル!!」

「エルフマンさん!!」

こちらへと接近するサタンソウル。それに対抗する為、エルフマンさんも全身接テイクオーバー収を使用し肉弾戦を始める…が、エルフマンさんの攻撃は躲され、懐に飛び込んだサタンソウルが魔力を解放。それだけでエルフマンさん遥か上に位置するアーチ状の岩に叩きつけられる。間髪入れずに、サタンソウルは魔力の塊をエルフマンさんへと直接叩き込んだ。

「そんな…どうすればいいの!?!」

「すつげえ、最高じゃん…大司教様に逆らう奴は皆悪い奴。悪い奴には、罰を与えるじゃん!!」

「…皆…」

今のマリー||ヒューズはサタンソウルを操っている為、隙だらけだ。確かあのタクトは、一度に一人しか操ることが出来ない。禁じ手だとしても、恐らくそれは変わらない。だったら、エルフマンさんがサタンソウルを引き受けてくれる今がチャンスのはず！

僕の声に合わせて、ドルモンとプロットモンが正面から突っ込み、パタモンは低空で右方向へ向かう。

「パピーハウリングー」

「うるさっ…!!!」

「メタルキャノン！」

プロットモンの技で怯んだマリー||ヒューズに、ドルモンは僕が一瞬だけ展開した弾性結界バウンドを踏みパタモンと反対側、つまり左側へと一瞬で回り込みつつ鉄球を撃ち込んだ。マリー||ヒューズは咄嗟にしゃがみ込んで躲す。

「エアショット！」

「くっ…面倒じゃん！」

「…！皆、戻って！」

パタモンの攻撃も紙一重で躲し、タクトを振ったのを確認したので一度全員を僕の元まで戻す。そして、上空から僕の目の前に着地した影が一つ。僕はその着地の瞬間に合わせて攻撃した。

「柱 百烈拳!!」

「ゴーシユ、駄目!」

「くっ!」

柱トータルによる連続攻撃を叩き込んでいる最中に聞こえたプロットモンの叫び。その次の瞬間、柱トータルの内の一本が僕の方へと飛んできているのに気がついた。僕はそれを横に飛んで間髪を容れず成功する。しかし、攻撃はそこで終わっていなかった。

「水晶結界・外装…ぐはっ!」

「ゴーシユ!」

柱を両手で持ってハンマー投げの要領で回転し防いだサタンソウルが僕らへと投げつけてきたのだ。そしてそのままそれを目隠しにして急接近し、僕の鳩尾目がけて一発撃ち込んできた。水晶結界を纏ったけど、いとも容易く砕かれた…!

「うわっ!」

「パピーハウリング!」

サタンソウルは近くにいたドルモンを攻撃し、ドルモンはしやがんで回避する。その時、プロットモンが至近距離でのパピーハウリングで怯ませようとしたが…不味い!

「えいつ!」

「きやうっ!」

サタンソウルが怯むことなくプロットモンへと殴りかかろうとしたが、ギリギリ間に合った。パタモンがプロットモンを横に押しして二体とも回避に成功、ドルモンも一度距離をとった。

サタンソウルは人ではなく、マリー||ヒューズが操っている魔力そのもの。生物ではないのだから、怯むことはない。

「カハッ! すっげえ強えー! そんな小細工したって無駄じゃん?」

「あ、ありがとうパタモン…」

「どういたしまして」

「やっぱりミラさんの魔法を操ってるだけあって強い……！」

「ここは俺が進化して……！」

「……ヤバッ、皆散って……！」

サタンソウルの次の攻撃は近接攻撃ではないことに気がつき、デジモン達を散開させ自身は防衛結界ディフェンドで防壁を張る。避けるという選択をしなかったのは、僕の後ろには気絶したままのミラさんと彼女を守っているリサーナさんがいたからだ。あの両手の魔力……あんなのを食らったら一溜まりも無い。防衛結界ディフェンドでも持たないかもしれないけれど、せめてリサーナさん達が逃げる隙を……！

「ゴーシュ、避けて……！」

「メタルキャノン……！」

「エアシヨット……！」

ドルモンとパタモンの攻撃を物ともせず、サタンソウルは両手の魔力を一つに合わせてこちらへと放とうとする。その時だった。

「漢おおおっ……！！！」

「エルフマンさん……！」

「エルフ兄ちゃん……！」

真上からサタンソウルへと殴りかかるエルフマンさん。サタンソウルはそれも躲してしまおうが、そのまま立て続けにエルフマンさんが近接戦を持ち込む。さっきのように大振りではなく、防衛しながら他に注意を向けさせないようにする動き。それが時間稼ぎであることを察し、僕は急いでリサーナさんの方へと走った。

「リサーナさん、ミラさんを安全な場所へ移動させます……！」

「わ、分かったわ……！」

浮遊結界バブルゾーンにミラさんに乗せ、リサーナさんは接収テイクオーバーで鳥人間のような姿へと変身しミラさんを運ぶ。少しでも遠くへ、巻き込まれない場所へ。

「ぐおっ……！」

「エルフマンさ……！！？」

「チャンスじゃん！やれ!!」

サタンソウルに吹き飛ばされたエルフマンさんに巻き込まれる。そして先程と同じように両手に魔力を溜め、それを一つに合わせ放たれようとしている…ヤバい、このままじゃ二人一緒にやられる…!

「ダメーっ!!」

放たれる直前に、プロットモンがサタンソウルの両手へと渾身の体当たりをして軌道が逸れる。しかし、それは自殺行為に等しい。軌道を変えることは出来るのかもしれないが、プロットモン自身は自分から魔力の中に突っ込んでいるのだから。

「うあぁっ…!!」

「プロットモンっ!!」

こちらに吹っ飛ばされたプロットモンを抱きとめる。明らかに戦闘不能だ…早くデジヴァイスへ戻してあげないと…!

「プロットモン、デジヴァイスに——!」

デジヴァイスを操作しようとしたその時、ピシッ、という音がした。音がしたのは、プロットモンの首にあったホーリーリング。今の攻撃のせいだろう、大きな罅が入っている。罅は全体へと広がっていき、破片となって崩れ落ちた。

「うっ…!」

「プロットモン…?」

「くっ…ああ…!!」

そして、僕は気がついた。

プロットモンの体が、光を放っていることに。

第65話 光の聖獣

マリー||ヒューズの操るミラジェーンの魔力、サタンソウル。それの一撃を食らったプロットモンの首から、ホーリーリングは破片となって崩れ落ちる。その直後、プロットモンの体が光を放つ。数日前にも同じ現象を見たことのあるゴーシユには心当たりがあった。

「これは、まさか…!」

「な、なんだ!?!」

ゴーシユは頭にあるデジヴァイスを目元まで下げる。デジヴァイスもプロットモンと同じように光を放っており、ゴーシユの中での予想が確信へと変わった。抱きかかえていたプロットモンを地面に降ろす。

「プロットモンが、進化するんですよ!」

「何だと!?!」

「…!面倒なことになる前に…!」

ゴーシユだけではない。この場にいた者は全員、ドルモンの進化をその場で見ているのだ。進化と聞いて、敵であるマリー||ヒューズが黙っているわけがなかった。サタンソウルを操り、プロットモンに対し殴りかからせる。

「デイクフェンド 防御結界・ドーム 円蓋!」

時間を稼ぐ為、デイクフェンド ゴーシユは結界で防御の態勢に入る。サタンソウルであればデイクフェンド 防御結界など数発殴っただけで罅が入り、破壊することが可

能である。それだけの威力を持った攻撃であることはゴージュも理解していた。その数発殴るだけの時間、たったそれだけでマリー＝ヒューズの目的は潰せるのだ。

「プロットモン、進化——っ!!」

プロットモンとデジヴァイスの放つ光が更に強くなり、姿を視認できなくなる。サタンソウルはその光に怯むことなく、結界を難なく破壊しエルフマンやゴージュを無視して一直線にプロットモンを狙う。

デジモンは人間ではない。人間ではない以上、マリー＝ヒューズはその手に持っているタクトで操ることが出来ない。先日のドルガモンのパワーを敵として目の当たりに行っていることで、デジモンの進化がどういふものなのかよく理解していないながらも妨害に入ろうとしたのだった。

そしてプロットモンの放つ光は、空へと逃げているリサーナにも見えていた。それが進化の光だということに気づき、次に思ったのはどんな姿になるのかということだった。デジモンの進化先は一つではない。そのことを丁度この場所へ向かうまでの道中で話していたのだから、気になるのも当然といえる。実際、エルフマンやゴージュも同じ事を考えていた。

サタンソウルが、プロットモンがいる場所へ拳を叩き込んだ次の瞬間。

「な…!?!」

マリー＝ヒューズが驚きのあまり、言葉を失う。目にした光景を信じられなかった。

プロットモンとほとんど変わらないその小さな体軀。だというのに、サタンソウルの拳を簡単に躲し、カウンターの如くサタンソウルの腹部へと突進するかのようにその拳を撃ち込む。サタンソウルはその威力により、後方へと数メートル吹っ飛ばされる。両足を地面につけ勢いを殺したにもかかわらず、マリー＝ヒューズの前でようやく勢いを殺し切れたことに驚愕した。

サタンソウルを吹っ飛ばした、プロットモンが進化した成熟期。プロットモンとほぼ同じ大きさ、二足歩行を可能としたその黒猫の両手にはグローブのようなものが装着されている。その姿を見たりサーナはキョトンとした表情を浮かべ、エルフマンはそのパンチの威力に啞然とし、ゴージュは笑みを浮かべる。そのデジモンは、自身の名を叫んだ。

「——ブラックテイルモン!!」

☆

デジモン図鑑に載っているプロットモンの記述に、気になっていた点があった。まだ幼い為に神聖的な力を発揮することが出来ず、自らの使命も理解していない。それ故性質的に不安定な状態で善にも悪にもなり得る、というものだ。

「力が、漲ってる……これなら勝てるよ、ゴージュー！」

「待って、プロット……じゃなかった、ブラックテイルモン。確かに身体能力は上がったみたいだけど、単純なぶつかり合いじゃ——」
「行くぞぞーっ!!」

「あ、ちよっとー！」

僕の話も聞かずにサタンソウルへと突撃するブラックテイルモン。両者の拳が真正面から衝突する。

「ネコパンチ!!……うわっー！」

僕の予想通り、ブラックテイルモンが力負けしてこちらへと転がって来たので受け止める。だから言ったのに……進化したばかりだか

ら若干興奮しているのかな。

「大丈夫？」

「う、うん…」

「ねえ、前に言った約束のこと覚えてる？」

「ご、ごめんなさい！」

「分かればよし」

うん、進化前と変わらないようで何よりだ。ブラックテイルモンの凶鑑に確かウイルス種ってなつてたからちよつと不安だったけど：後でちゃんと確認しておこう。ウイルス種のデジモンは気性が荒いとかそんな感じの説明文が多かつたし。

とにかく、ちゃんと指示は聞いて貰わないと困る。ただでさえ手強い相手なんだから。

「ブラックテイルモン、少し下がって見てて」

「え、でも…」

「戦わないで、っていう意味じゃないよ…分かつた？」

「うくん…？…ん！分かつた！」

ブラックテイルモンは、ちゃんと僕が言おうとしていることを考えて、ちゃんと理解してくれた上で従ってくれたようだ。

「何ゴチャゴチャ言ってるじゃん！」

「水晶結界・外装！」
クリスタル
アームド

「俺もやるぜ！」

「エルフマンさん…！よし、ドルモンとパタモンは援護を！」

「ああ！」

「りようか〜い！」

今は少しでも時間を稼ぐ。ドルモンはまだ進化には慣れていない…恐らくパワーはドルガモンが上だけど、スピードを活かすならドルモンのままの方が良い。少しすればブラックテイルモンの準備が出来るだろうから、そうなれば…反撃のチャンスだ！

僕とエルフマンさんが一斉にサタンソウルへと駆け出す。エルフマンさんはさつきと同じように真正面から殴りかかり、サタンソウルも難なく躲し反撃しようと動くがドルモンのメタルキャノンがそれ

を阻止。その瞬間に身体能力を上昇させている僕がサタンソウルへと攻撃し、一度距離をとろうとしたのか大きく後ろへと跳躍し避けた。

「ちよこまかと鬱陶しいじゃん！こうなったらまとめて…
ハンドレッド・トリーティスト
「柱 百烈拳！」くっ!？」

もう魔力で攻撃させる隙は与えるつもりはない。僕の柱トリーテムの攻撃をサタンソウルは掻い潜り、一瞬で距離を詰め僕へと攻撃しようとした。そのタイミングで今度はパタモンがエアショットを放ち体勢を崩させ、そこをエルフマンさんが攻撃する。サタンソウルはそれも回避しサポート役に回って牽制しようとしていたドルモンを狙って接近しようとするが、今度は僕が両手を刃ブレイドに変化させて斬りかかり動きを止める。

「コイツら…!」

マリー||ヒューズも上手く攻め込めず苛ついているようだ。そう、今はただの時間稼ぎだ。相手を攻撃することよりも、こうして協力してサタンソウルの動きを阻害することに努めていけば、これ以上ダメージを食らうことはないしチャンスも生まれる。

「メタルキャノン!」

「エアショット!」

「くっ…!何!？」

サタンソウルを自分の元まで戻そうとしたようだが、今は僕とエルフマンさんが止めている。マリー||ヒューズは仕方なくその場から動く事で回避した。サタンソウルも魔力を解放して僕らを吹っ飛ばし、マリー||ヒューズの傍へ帰って行った。

「これなら行けるぞ!」

「…いや、多分こっちが消耗するのが先ですね」

サタンソウルの動きを抑える隙を作り、さらにマリー||ヒューズへと攻撃する。しかし相手は基本操り人形であるサタンソウルだ。マリー||ヒューズの魔力が尽きれば何とかなるかもしれないけど、それ以上にこっちの集中力がいずれ切れてしまう。そういう意味でも、これは短時間の時間稼ぎでしか使えない。

「…ウチは、もう力なき子羊じゃないじゃん」

「何…?」

「今は力持つ者として、大司教様に仇なす者を排除するのみ…ゼントピアを敵に回すことがどれ程の罪か、その身で知れえ!!」

「こ、これは…!?!」

マリー||ヒューズの魔力が急激に上昇し、タクトの形状がさらに変化する。魔力がマリー||ヒューズの周囲を渦巻いているのが分かる…まだ、何かある!?

「ああ、大司教様! マリーは禁を破ります…どうか、赦したまえ!!」

マリー||ヒューズの上へと移動したサタンソウルの姿が歪み、魔力に包まれる。次の瞬間、その魔力はマリー||ヒューズへと降り注いだ。

「今度はなんだ!?!」

「操った者を自分に取り込む、指揮術第三楽章…そう、自分自身を操る!…これこそが禁忌!! うおおお!!」

「ぐっ、がはっ!?!」

「エルフマンさ…ぐあっ!」

さらにスピードが上昇したサタンソウル…いや、マリー||ヒューズ。今まで遠くから操っていたのがこうして操った者と一体化することで指示がノータイムで伝わるようになったということか。

エルフマンさんが為す術無く連続攻撃を食らい、その傍にいた僕も

何発か攻撃をまともに食らう。見えるけど、反応するのが間に合わない……これじゃ、結界を使う余裕がない！

「ていやっー！」

「何!？」

このまま連続攻撃を受け続けて戦闘不能になつてしまう前に何か作戦を……と、思考を巡らせていたその時、小さな影がマリー＝ヒューズの顔面へと蹴りを入れ大きく仰け反らせた。僕はその隙に弾性結界でエルフマンさんと僕自身をマリー＝ヒューズから距離をとる為後方へと弾き飛ばす。

そして僕は、その小さな影に向かって話しかけた。

「…ブラックテイルモン、行けそう?」

「任せて! 思いつきり暴れてやるから!」

「叩きのめすのはウチの方じゃん!!」

自信満々にそう言ったブラックテイルモン。それを聞いて怒り心頭のマリー＝ヒューズは拳をブラックテイルモンへと振り下ろした。

「こつち、だよ!」

「なっ…チイ!」

紙一重で避けたブラックテイルモンはマリー＝ヒューズを攻撃…はせずに挑発する。そのままマリー＝ヒューズの攻撃をヒラヒラと避けて、避けて、避け続ける。

「な、んで! 当たらない!？」

「まだまだ、かかってきなさい!」

「こんな、猫擬きに…!!」

「み、見えねえ…」

「プロットモン、凄いやっー!」

ブラックテイルモンは力こそサタンソウルに負けはしたが、サタンソウルの攻撃をあつさりと躲すその動体視力とその身のこなしこそが真骨頂だ。進化直後のサタンソウルへのカウンターパンチでそう感じたんだ。ブラックテイルモンを後方に待機させていたのはサタンソウルの動きを観察させて目を慣れさせる為。マリー＝ヒューズがサタンソウルを取り込んでしまった時はヤバいと思っただけ…ど

うやらそれでもまだ対応は出来るらしい。

「このままで、勝てるんじゃない？」

「…多分、無理じゃないかな」

ドルモンの心の声を否定するパタモン。僕もパタモンと同じ意見だ。確かにマリー＝ヒューズの攻撃を簡単に躲せているように見えるけど、逆に攻め込むようなことは全くしようとしていない。あれは躲すことに専念しているからこそ出来ている芸当なんだ。だから、どうにかして攻撃する隙を作る手助けをしないと…

「…あれ？もうおしまい？」

その時、マリー＝ヒューズの攻撃の手が止まった。何か嫌な予感が僕の頭を過ぎる。その予感的中したことを次の瞬間確信した。マリー＝ヒューズの背中に、翼が見えたからだ。まずい、空にはミラさんとリサーナさんが…！

「防御結——くそっ…！」

「うわあ〜！」

結界で行動を止めようとしたが間に合わず、弾き飛ばされたかのように一瞬で上空へと跳んでいくマリー＝ヒューズ。その風圧でブラクテイルモンは僕の足下まで転がってきた。

「って、飛べるなんて聞いてないよ〜！」

ホント、ずっと地上戦だったから忘れてたけど飛べるんだよね、サタンソウルって…気絶しているミラさんとそれを守っているリサーナさんを倒しに行ったのか、空から魔力弾で一方的に攻撃するつもりか分からないけど…どっちにしろ不利になることは確かだ。

「…ねえ、ゴージュ」

「パタモン?どうしたの?」

何処かを見つめながら僕へと話しかけてきたパタモン。一体どうしたのかと、その視線の先を追う。そして目に入ったのは、プロットモンが攻撃を受けて外れてしまったホーリーリングの破片。

「あの画像、空飛べそうな多かったよね?」

「…パタモン、まさか」

パタモンが言う画像とは、きつとここに来るまでの間に休憩した時に見たデジヴァイスの画像のことだろう。

「出来そうな気がするんだよ」

何が、とは聞かなかった。しかし、これは賭けに近いやり方だ。外部からのデータを取り込んでそれをやろうとしているのだから、もしかしたら大きな負担がかかることだってあり得る。ナツさんが雷を食べて雷炎竜に目覚めたが、戦闘後に体調を崩していた時のような…いや、あれとは違うのかもしれないけれど。

「でも…いいの?こんな…」

「いいよ。僕も、負けてられないからね」

そう言いながら、パタモンはホーリーリングの破片へと歩いて近づいていく。そして、パタモンがそれに触れた瞬間。

「うおっ!?!」

「きた…！」

「パタモンも…!?!」

「進化するんだ…！」

今日二回目の、進化の光。パタモンと彼の足場にあったホーリーリングの破片は光に包まれていく。ドルモンは立て続けに進化が起きると思っていなかったようで驚き、ブラックテイルモンはどこか嬉しそうに進化を見守っている。

「パタモン、進化!!」

パタモンがその姿を徐々に変化させていき、やがて光が収まる。やはりホーリーリングという聖なる力を吸収したからか、それを扱う成熟デジモンになるとは思っていた。四足歩行なのはそのままに体躯が大きくなっていく。頭にあった羽はその体躯に見合った翼となり、頭部には鋭い角のような物が生えた。そして、パタモンは今の名前を叫ぶ。

「——ユニモン!!」

正直言つて僕の予想していたデジモンとは違った。前世の記憶からエンジェモンになるような気がしていたんだけど…どうやら違ったらしい。まあ、今必要なのは空を飛べるということだ。それに関しては何の問題も無いだろう。それどころか、エンジェモンより飛ぶスピードは速そうだ。

「ドルモン、君も進化してエルフマンさんに乗せて。上手く挟み撃ちにしよう」

「でも、俺じゃスピードで負けるんじゃない…」

「多分ね。大丈夫、二人は止めのタイミングで活躍してもらおうから…」

エルフマンさん、ドルガモンの接近のタイミングは任せます！」

「おう、任せておけ!!」

「ブラックテイルモン、悪いけど僕と一緒に…」

「やった〜!」

ブラックテイルモンは自ら僕の腕の中へと飛び込んできた…あれ？プロットモンの時は抱かれると大人しくなるようだったから嫌なんだと思ってたんだけど…

「ま、まあいいや。それじゃ…頼んだよ、ユニモン!」

「了解!」

ユニモンに僕とブラックテイルモン、ドルガモンにはエルフマンさんが乗りそれぞれ空へと飛ぶ。ここからは空中戦…作戦を練り直しておかないと。

☆

「ん……ここは…リサーナ?」

「ミラ姉!良かったあ!」

プロットモンがブラックテイルモンへと進化し、ゴーシユ達やエルフマンが連携してマリー||ヒューズと融合する前のサタンソウルと戦っていた時、浮遊結界バブルに乗っているミラは目を覚ました。リサーナはミラが気絶していた間の出来事を大まかに説明する。

「というわけなの…」

「そう、サタンソウルが…っ!この魔力は…!?!」

「な、何あれ!?!」

リサーナとミラは異常な魔力の高まりを感じ取り浮遊結界バブルから下を見る。そして、サタンソウルとマリー||ヒューズが融合を果たす。

「サタンソウルが…!」

マリー||ヒューズに取り込まれたサタンソウル、そしてゴーシユとエルフマンが攻撃された時すぐに飛び降りようとした二人だったが、それはブラックテイルモンが先に動いたことで中止する。

「あれって…?」

「多分プロットモンが進化した姿よ!さつきドルモンが進化した時と

同じ光が見えたんだ！」

ブラックテイルモンとマリー＝ヒューズが肉弾戦を繰り広げ、ブラックテイルモンはその攻撃を避け続ける。それを見たりサーナは啞然とする。仮にも自分の姉でありS級魔道士でもあるミラの力を前に、その攻撃を全て避けている。あの無邪気な子供と言葉が当てはまるようなプロットモンがあそこまで強くなる。デジモンの進化がここまで凄いものだったことに驚く。

「もしかしたら勝てるかも……！」

「……いいえ。このままじゃ負けるわ」

「え!？」

「確かに避け続けているあの子は凄いわ。でも、攻めに転じることが出来ずにいる」

ミラは冷静に戦闘を観察し、ブラックテイルモンの状況に気づくと、その時、サタンソウルがその翼を広げたのを見てこちらへ来るつもりなのだ と理解した。

「リサーナ、ここから離れるわよ！」

「え、ミラ姉っ!？」

ミラがやや強引にリサーナを連れ飛び降りる。その直後、一気に上昇したマリー＝ヒューズによってさっきまで乗っていた浮遊結界バブルが破壊されてしまう。そしてミラはサタンソウルとは別の姿へと変身する。

「み、ミラ姉……その姿……」

「マスターに禁じられた姿だけど……勝つためにはこれしかない」

いつの間にかミラに抱えられたリサーナは、今まで一度も見たことがないミラの姿に戸惑う。ミラが変身したのはマリー＝ヒューズが取り込んだサタンソウルではない。この形態の名は、魔神ハルファス。前回使用した時は町一つを壊滅させてしまった為、その強大過ぎる力の使用を止められたのだ。

「リサーナ、離すわね」

「あ、うん……」

「な、なんて魔力じゃん……！まだそんな力を持つてたなんて……!？」

「…私は、貴女を許さない。貴女は大きな罪を犯した」

「くっ!？」

リサーナは接テイクオーバー収を発動し、両手足を鳥へと変身させ戦いを見届ける。いや、見届けるつもりだった。ミラとマリー＝ヒューズの動きを、その目で捉えることが出来ないのだ。だが、さっきのミラの言葉から怒りが込められているのだけは感じ取れた。

「罪、なんて…罪深いのは、お前らの方じゃん!!」

「いいえ…貴女は私の目の前で、私の魔力で、弟やギルドの家族を傷つけ過ぎた!!」

「なっ…!？」

マリー＝ヒューズはギリギリの所でミラの攻撃を避ける。そしてミラの攻撃の余波によつて、二つの湖の上空にあったアーチ状の石柱は跡形も無く崩れ落ち、湖へと魔力の塊が降り注ぐ。それを見たマリー＝ヒューズ、そしてリサーナすらも恐怖を覚えていた。

「く、くそ…!…分かったじゃん」

「…?」

「アンタには勝てない、それは十分分かったじゃん…だったら、アンタが大切にしてるものを壊してやるじゃん!!」

「っ、リサーナ!」

魔力弾でリサーナを攻撃しようとするマリー＝ヒューズ。ミラはその攻撃の発動を止めることは間に合わないと判断し、リサーナを守ろうと動く。その時マリー＝ヒューズは気づいた。リサーナの後ろの方から、こちらへと何かが向かってきていることに。

「キャッツ・アイ!」

「な、か、体が…!？」

「ホーリーショット!!」

「水晶結界・光!」

「がはっ…!お、お前らは…!」

マリー＝ヒューズがユニモンの姿を捉えたその瞬間、その背に乗っていたブラックテイルモンの目が怪しく光る。キャッツ・アイは目を見た者を操る技、それを使いマリー＝ヒューズの動きを止めた。

続け様にユニモンの口から放たれた光の球とゴーシユの魔力弾がマリー＝ヒューズを襲う。そして、それで終わりではないとばかりに、マリー＝ヒューズの上から鉄球が高速で飛来した。

「うあっ……！」

上空で待機しようとしていたドルガモンは、ミラとマリー＝ヒューズの戦闘、そして追込まれたマリー＝ヒューズへと攻撃を仕掛けたユニモン達を確認した瞬間にドルガモンは鉄球を口から吐き出し、ドルガモンの背に乗っていたエルフマンが真下へと思いつき叩きつけたのだ。通常のパワーメタルよりも加速した鉄球を背に受けたマリー＝ヒューズが大きな隙を作るのは仕方の無いことだった。

そう、仕方の無いことだったのだ。その隙を突かれ、先の一撃よりも何倍も膨れ上がった魔力。怒りの込められたミラの攻撃を食らってしまい、先程まで地上戦をしていた場所へと叩きつけられることも。

「ぐああああっ!!？」

戦う力は最早残っておらず、元の姿へと戻ってしまうマリー＝ヒューズ。ミラは一瞬で彼女の目の前へと現れ、彼女の顔のすぐ横を殴り、岩盤を粉々に砕く。

「や、止め……！」

そして、ミラはゆっくりとマリー＝ヒューズの顔へと手を伸ばし――

「――めっ！」

まるで、悪いことをした子供に言い聞かせる母親の如く。あまりの気迫のせいなのか、緊張の糸が切れたせいか、その両方か。マリー＝

ヒューズは意識を手放したのだった。

第66話 動き始めた刻

マリー＝ヒューズとの激闘の末、時計の部品を回収することに成功した僕達は予定通りナツさん達がいる最後の部品があるとされている砂漠地帯へと向かうことになった。

『これ、時計のパーツなんだよね?』

『そうだけど…どうしたの?急に』

『これ、どの辺のパーツなの?』

デジヴァイスの中にいるドルモンがそう聞いてきた。そういえば、考えたこと無かった…こんな球みたいな部品、時計にあつたかな?僕達は揃って首を傾げる。

『そもそもこの時計って柱時計なのかしら?』

『さあ…?でも針が人の大きさなんだから、本体はもっと大きいですよ、きつと』

『うわ、運ぶの大変そう…小さくて良かったね、エルフ兄ちゃん!』

『いや、どれだけデカかろうとこの腕一本で運ぶ!それが漢!』

いやいや、多分無理。腕の長さに無理。もし本体部分を回収する班は大変そうだな…どうやって運ぶんだろう?ナツさん達の所が大きな部品だと楽だから、そうだといいな。

『つていうか、そっちはどうなの?』

『今の所大丈夫だよ』

今度はパタモンの声が聞こえる。プロットモンが話に参加してこないってことは…そういうこと?大丈夫かな…少し不安になる。

『それよりさ、あの人はそのままにして良かったの?』

『マリー＝ヒューズのこと?』

『気絶してただけで特にひどい怪我とかしてなかったし、良いんじゃない?』

『精神的に大丈夫かは保障しかねるけどね…』

僕が小声で言った内容に、エルフマンさんが何度も頷く。ミラさんのこと見たら絶対思ひ出すよ、あの光景。まあ、最後の方は戦闘に参加する必要無かった気がするけど…多分ミラさんだけで良かった。

起きてなかった場合しか考えていなかったから、仕方ないんだけどね。

「というか、マリー＝ヒューズがああ場所にいたってことは他の場所にもレギオン隊の誰かが向かっていた可能性が高いですよ。今は早く合流して情報を集めるのが最優先です」

「ああ…特にバイロとかいう奴はギルダーツと互角だったって話だしな」

そう、バイロが戦闘に参加した場合どの班であつても敵わないかもしれない…今は戦力がバラバラになつてしまつてしまっているんだから、回収できたなら急いで合流地点に向かうべきだ。

…そういえば、バイロつてどんな魔法を使うんだっけ。ギルダーツさんの話だと魔法を無効化するって聞いたけど、多分それだけじゃない。レギオン隊のリーダーなのだから、他にも魔法を扱えると考えた方が良い。

魔法を無効化というのも十分強いんだけど…当然だけど魔導士とは魔法を駆使して戦う。近接戦闘が主体のナツさんとかも、魔法を力の源として身体能力を底上げして戦っている。つまり魔法を無効化されてしまった場合は正真正銘、格闘だけで戦わなければいけない。勿論他にやりようはあるだろうけど…それは多対一の時の話が殆どだ。どのように魔法を使つたとしても、バイロの観察眼が優れていれば問題なく対処されてしまうだろう。

「ゴーシュ、焦り過ぎても良くないわ。確かに急いだ方が良いかもしれないけれど、皆そう簡単に倒されるほど弱くない、でしょ?」

「…そうですね。すみません」

焦つて行動して、急いで合流地点に着いたとしてもそこで体力が尽きていたら意味が無い、ということとは分かっているつもりなんだけど…何でか、落ち着かない。変にソワソワしてしまっているのが自分でも分かる。

どうして、こんなにぎわつくんだろう…?

☆

辺り一面が砂、砂、砂。そんな光景が広がる中、不自然にポカンと大きな穴が空いている。下を覗き、人工物らしきものが見えた。

「ナツ達、こんなところを降りたの？」

「随分深えな、こりや…」

「行きましょう。他の皆も中に入ってるはずよ」

「それじゃ早速…」

「ちよ、ゴーシュ!？」

僕は戸惑うこと無くその穴へと飛び降りる。確かに結構な高さではあるけれど、穴の底は砂みたいだし。まあ着地の衝撃で靴の中だけじゃなく服の中まで砂が入ったりするのは嫌なので、弾性結界を展開して着地する。

やっぱりそうだ。石の扉みたいな物がある。多分ここから入れるはずだ…にしても、この扉を潜ったら聖堂に辿り着くことが出来るのかな…今の高さから横に広がっているのか、地下に広がっているのか…どのくらい広いんだろ。

「もう！ビックリしたでしょ！」

「え？あ、すみません」

三人とも僕と同じように弾性結界に着地し、リサーナさんからいきなり小言を言われた…確かにこういう魔法を使えるとしてもちやんと言っておくべきだった。僕でも目の前で仲間が急に何の躊躇も無く飛び降りとかしたら焦って止めるだろうし。

「ふんっ…び、ビクともしねえ…!」

エルフマンさんが早速扉を開けようと押ししたり引いたり、上下左右にスライドしようとしたりと色々試してみたけど反応なし。何か特別な仕掛けがしてあるとか…？

「どうやったたら開くのかな、これ？」

「困ったわね…」

「……………そうだ、良いこと思いついた！皆さん、ちよつと離れていて下さい!」

全員が扉から距離をとったのを確認した後、人の大きさくらいの水晶結界を展開する。それを高速で回転させ、扉の真横の壁に突き立

てる。ドリルのように壁を抉っていき、扉の向こう側に当たるように軌道を曲げ調節する。それほど時間をかけることなく、狙い通り奥の通路と繋がった。

「考えたわね、ゴーシユー！」

「さ、行きましょう！」

「…良いのかな、これ？」

「良いんだよ、豪快さを持つてこそ漢！」

扉の向こう側には巨大な顔面の石像が四つと、部屋の中央にゼントピアの紋章のモチーフ…そして床にはまた不自然に開いた巨大な穴があった。

「さらに下りるのか…」

「これ、もしかしてナツ達？」

「きつとルーシイさんじゃないですかね」

「バルゴね」

これ、本当にどこまで広がっているんだろう…重力とか強くなったりしないよね？

つと、そろそろ戦闘準備しておかないといけないか。デジヴァイスを操作し三体を目の前に出現させる。

「あれ？もう出番？」

「そういうこと。ここから先は敵がいるのは間違いないと思う。だから今のうちに三体とも進化するよ」

「了解！」

「待つてました！」

「オツケ〜」

三体とも進化の光をその体から放ち、僕もデジヴァイスを目の所まで持つてくる。

「ドルモン、進化——ドルガモン！」

「プロットモン、進化——ブラックテイルモン！」

「パタモン、進化——ユニモン！」

「浮遊結界！皆さん、これに乗ってください！」

浮遊結界に乗り込み、防御結界を…馬車のあの、馬が引つ張って

る部分？名前が分からないけど、ユニモンが引っ張りやすいように部品の形に展開。

「ドルガモンとユニモンは僕らを引っ張って、ブラックテイルモンは――」

「すごい、毛並みがフワフワしてる〜！」

「ホントね〜」

後ろを見ると、既にリサーナさんとミラさんに撫でられているブラックテイルモンがいた。ま、まあいいや。

「それじゃ二人とも、頼んだ！」

「任せて！」

「ああー！」

バルゴが掘ったと思われる穴の中に入り、縦に広がった洞窟のような場所へと出る。多分ナツさん達の場合そのまま落ちただろうから、そのまま降下してもらおう。結構な速さで、まるでジェットコースターみたいで少し楽しい。

少しすると、棺のような物が左右の壁一面にズラツと並べられた広い空間へと出る。後ろの方には上へと続きそうな通路、その反対側には…またしても下に続きそうな巨大な穴が。

「まだ下があんのかよ！」

「どつちかしら？」

「うーん…」

と、その時だった。途轍もなく膨れ上がる魔力を感じたのは。

「これって…！」

「下の方からね…」

「…急ぐよ、ユニモン！ドルガモン！」

「ああー！」

さつきよりさらにスピードを上げ、一気に地下へと進んでいく。そして、辺りには地下都市のような場所へと辿り着いた。魔力を感じる方角を目で追うと、光を放っている部分がある。きつと、あそこで戦闘が始まっているんだ。

「あれ…？」

「感じていた魔力が…」

「消えたぞ…？」

光を放っていた場所から一直線上にある建物が壊れていく。これは…何らかの魔法が放たれたのは間違いないけれど、不発したのか？つていうか、外れた？

「あーあそこにナツ達が…!？」

ナツさん達を発見出来たが、すぐ傍にはレギオン隊のダンとココ、バイロがいる。けれど少し様子がおかしい。ダンはナツさん達のご傍にいるし、ココはバイロに何かを言っているように見える。

「…！まずいつ！」

直後、先程と同じ光がバイロの持つ杖から放たれる。あれ程の魔力をまともに食らってしまったら、ただじゃ済まない。でも、僕の扱える魔法の中にはあれを受けきれぬ結界はない。

最早直視することも困難な程に光が強まり、バイロとすぐ傍にいたココの姿が見えなくなる。そしてバイロの持つ光の槍が放たれる直前、どこかから現れた白い何かを視界に捉えた。

「貴様は…！」

「いつぞやは剣を交える暇も無かったが…ようやく会えたな、バイロ

「クラーシー」

テイターニア

「妖精女王…」

「気安く呼ぶな！逆上して仲間に矛先を向けるとはな。反吐が出る

！」

「弱い者いじめしてんじゃねえよ、ゴリアー！」

エルザさんが金剛の鎧で防いでくれたようだ…辺りを見渡すと、グレイさんやガジルさんといった他の皆も集まっていた。どのチームも、時計の部品を持つている。つていうか、何でグレイさん達の傍にリオンさんがいるんだろう…後で聞けば良いか。

「つていうかゴーシユ！その馬なんだ!？」

「説明は後でします！今はバイロを！」

他にも何人か気になっていようだったが、今はそれどころではないので注意をバイロに向けるように伝える。

「というわけで、我々は五つの部品全てを手に入れた。残るは、貴様達がルーシイから奪った針のみ。渡して貰おう」

「…ならば取り戻すのみだ、妖精女王^{テイターニア}」

「この人数を相手にか？時計は我らが全て集めて封印し、管理する。大人しくそれを渡せ！」

「渡すわけにはいかな。無限時計は元々ゼントピアの所有物、我々が管理する宿命にある」

「え!？」

「ほほう…」

「そうだったの!？」

「うんや。今初めて知ったぜよ」

「貴方はこれに深入りしすぎた…覗いてはならぬ闇を覗いてしまった。最早、生きて帰ることも許されぬ！」

「抜かせ！行くぞ!!」

「皆ちよつと待つて！アイツに魔法は——」

「…笑止！」

全員がバイロに向けて遠距離攻撃を放った。しかしバイロは慌て

ることなく右手に持っていた杖を振るい全ての魔法攻撃を無効化した直後…後方へと大きく吹っ飛ばされた。

「何っ…!?!」

「当たった!?!」

ルーシイさんや、他ならぬバイロ本人が驚愕する。僕はバイロに接近し水晶結界・刃クリスタルブレイドで攻撃するも、バイロはもう一度魔法無効化を行う。それによつて僕の結界は消されてしまう。

「ネコパンチ!!」

「ぐっ…!」

僕の背中にくつついていたブラックテイルモンがバイロに殴りかかるが、二度目の奇襲は通用せず受け身をとられてしまった。

バイロが無効化出来るのは魔法だけ。だったら魔法以外で攻撃すればいい。僕のパートナー達なら魔法では無い強力な攻撃が可能だ。さっきの全員での一斉攻撃は囷に使わせて貰って、本命はその遠距離攻撃の中に紛れていたドルガモンとユニモンの必殺技、パワーメタルとホーリーショットだ。そして今の近接攻撃も、無防備になったと思わせてブラックテイルモンに一撃を入れて貰う為だった。

「き、貴様…!!」

「キャッツアイ!」

「っ…これは…」

「パワーメタル!!」

「ホーリーショット!!」

ハンドレッド・トールテイスト
「柱百烈拳!!」

上からドルガモンとユニモンの必殺技が、そして正面からは僕の攻撃がバイロへと襲いかかる。ブラッククテイルモンのキヤッツアイで動けなかったはずだから、全て直撃したはず……これで、終わりだ。

終わった、はずだったんだ。

第67話 哀れな傀儡

ゴーシユと彼のパートナーデジモン達の攻撃に晒されたバイロ。ブラックテイルモンのキャッツアイによって動きを止められてしまったことで防御すらもままならず、バイロ本人も食らうことを覚悟していた。

しかしその攻撃がバイロに当たることは無かった。ドルガモンの鉄球も、ユニモンの光球も、そしてゴーシユの放った数十本の結界の柱も、バイロの直前で全てがあらぬ方向へとその軌道がねじ曲げられた。

「え!?!」

「今のは…!」

何が起きたのか把握できずにいる中、無限時計の部品六つ全てが淡い光を放ち始める。

「…!」

「何だ!?!」

「姉さん、見て!時計が…!」

「何が…何が起こってるの?」

異様な魔力を放ちながら、全ての部品が何処かへと飛んでいく。まるで、何かに吸い寄せられるかのように。そうして部品達は合わさって無限時計が組み上げられ、辺り一帯、否世界中に向けてその音を響かせる。

「うるせえぞアレ!」

「目覚まし時計?」

「墓所が崩れるぞ!」

「何なの…これ?」

「おい、ボーツとすんな!急ぐぞ!」

崩壊を始めた礼拝堂から脱出するべく、妖精フェアリーテイルの尻尾の面々は脱出しようと動く。そんな中、ウエンディはゴーシユとデジモン達の元へと歩み寄る。

「ゴーシユ、皆!大丈夫?」

「俺達は大丈夫！」

「何今の!? 攻撃が変なところ行ったよ!」

「何かの魔法かな？」

「…多分。でもあの魔法って…? ナツさん？」

ゴーシユは先程の魔法について考えていた。バイロが無効化したわけでも無いし、あの状況であんなことが出来る人物が今の場にいるとは思えない。だとしたら、あれは第三者によって割り込まれたということ。

そこまで考えた所で、ナツの様子がおかしいことに気がついた。彼はジツと無限時計の方を見つめている。いや、正確には無限時計の近くに立っていた者達を見ていた。

「何だ、この匂い…! 間違いねえ、アイツらが…いる!」

こちらから見て丁度無限時計の真下の建物。その中から、六人の人影が現れる。彼らの姿を見て、ナツやルーシィ等といった彼らと面識のあった者達が反応する。

「な、コイツら!」

「六魔将軍!」

「だよね…?」

「随分雰囲気違くなえか？」

「メンバーも違うようだな」

六魔将軍とは、かつてナツ達が参加した連合軍がニルヴァーナを巡り争った相手である。当時は妖精の尻尾フェアリーテイルではなく化猫の宿ケットシエルターに所属していたウエンデイ、シャルル、ゴーシユの三人も連合軍として戦った。六魔将軍は名前の通り、六人の魔導士のみで構成された闇ギルドであり、三大闇ギルドのバラム同盟の一角を担っていたギルドだ。それ即ち、たった六人だけで闇ギルド最強の一角となるほどの実力を持っていた。

しかし、エルザが言った通り七年前に相対した時とはメンバーが入れ替わっている。その入れ替わりであろう巨大な熊のぬいぐるみのような者が胴体に取り付けられたスロットを回し始め、スロットの目に六魔将軍のギルドマークが揃う。

「ニヨホホホホ！それ来た激アツ！正しくこれぞ六魔將軍！いえいえ
いえいえ、オランオンセイイス新生六魔將軍とお見知り置き下さいませ！」

〔オランオンセイイス新生六魔將軍!?〕

「そう、如何にも。我らがオランオンセイイス新生六魔將軍」

「お前、ミッドナイトか!?」

「その名は遠い過去の物。ブレイン二世と記憶して貰おうか」

ミッドナイトとは、リフレクターニルヴァーナにてエルザ、ジェラールと相対した者。彼の魔法である屈折はあらゆるものを屈折させることが出来る。光を屈折させて幻を見せることや、衣服などの身につけているものを屈折させて相手を締め付けること、また魔法を屈折させることも可能だ。

（そうか、さっきのはミッドナイトの仕業か…!）

「何が二世だ！のこのこ出てきやがって!どういうつもりだあ!」

「我が望みは一つ…父の望みを果たすこと。形あるもの全ては破壊されるべし」

「まだそんな寝言を言っているのか!」

「フェアリーテイルフン：レギオン隊、妖精の尻尾。お前たちの役目は今、終わった」

ミッドナイト、否ブレイン二世がそう言った直後、彼らの真上にあった無限時計の魔力が変化する。それぞれの部品にはオランオンセイイス六魔將軍のギルドマークが浮かび上がる。

「何じゃありや?」

「ダン、渡してはならん!」

「合点承知ぜよ!」

「冗談じゃねえ!そりゃこっちの台詞だ!」

「邪魔すんな!」

「蛆共が…群がりおつて。やれ」

ブレイン二世がそう言った直後、身の丈ほどの鎌を持った、マントで顔を隠している者が前に出る。空中で胡座をかいているその者の目の前に魔法陣が展開され、強烈な竜巻がナツ達に向けて放たれた。

「火竜の咆哮!!」

応戦するべくナツが口から炎を放つ。炎と竜巻はぶつかり合い、竜

巻が炎を打ち消した。

「なっ……！」

「そんなもん、効かんぜよ!!……ぐおっ!?」

「ぐああ!!」

ダンが魔盾リコシエを構え竜巻を跳ね返そうとする。しかし彼の目の前に現れた者によって攻撃され体勢を崩されてしまう。結果、ナツとダンは竜巻に飲み込まれてしまった。

「ナツ……くっっ！」

「こいつは……レーザー……！」

ナツ達へ駆け寄ろうとしたグレイとエルザだったが、先程の一瞬でダンに牽制し竜巻に飲み込まれる前に移動していたレーザーが二人の前に立ちはだかる。彼は七年前の戦闘では自分の周囲の範囲内のスピードを下げる魔法を使っていたが、現在はそれとは別の魔法を使っている。

「ダン、下がれ! 君もだ」

「んだとっ！」

「私が如何なる魔法も無効化し……!?!」

バイロの周辺の空間がねじ曲がった瞬間にドス黒い魔力がバイロ達を襲う。ブレイン二世がバイロの隙について放った攻撃だ。バイロの魔法が及ぶ範囲内をねじ曲げることで一瞬だけ発動を遅らせたのだ。

「よお」

「……お前は、コブラ……！」

「久しいな、天空の巫女に猫、そして結界魔法の小僧。ちよつと聞いたことがあるんだけどよ……何だ、知らねえか」

ゴーシユ達の目の前へとやって来たのはコブラ。彼は聴く魔法、遠く離れた人々の会話や戦っている相手の筋肉の動き等を聴くことが出来る魔法を扱う。それは人の心の声も同じだった。

「……何が目的ですか」

「いや、知らねえなら用は……！」

ゴーシユが背後で作り出した水晶結界クリスタルがコブラを攻撃するが、コブ

ラは真横に体を反らして避ける。

「テメエの声は聞こえねえんだったな。何の魔法だ？」

「…知りませんよ。こっちが聞きたいくらいです」

これはゴーシユの本音だった。自分の声を聴くことが出来ないのは好都合ではあったが、自分が何かをした覚えは全くない。ダフネが何かしらの魔法を使ってそうしているのではないかと思っただけだが、見当はまだついていない。

「まあ、良い。天空の巫女が知らねえならテメエもそうだとは思うが…念のためだ。キュベリオスを知らねえか」

「…キュベリオス？」

「その反応、やっぱ知らねえか…なら、消えろ」

「うっ!!」

「うるさっ…!」

「くっ…!」

「…!? 防御結界・円蓋!」

コブラがそう呟き指を鳴らした途端、轟音がゴーシユ達を飲み込む。轟音は今いる空間内にいる全てのものを飲み込み、超振動波となって攻撃する。妖精の尻尾やレギオン隊だけでなく新生六魔将軍もその攻撃の範囲内だが、ブレイン二世の屈折によって空気がねじ曲げられたことで新生六魔将軍は守られている。

コブラに気づかれないよう接近していたデジモン達だったが、真つ先にその超振動波を食らい吹っ飛ばされてしまう。ゴーシユも攻撃のタイミングを予測し防護壁を展開するも容易く破壊されるのだった。

☆

…強い。七年前とは比べものにならないくらいに。コブラも、レーサーも、ミッドナイトも、全員が圧倒的に強くなっている。

さっきのコブラの衝撃波によって皆ダメージを負い、天井からは岩やら建物の一部が崩壊し落ちてくるのでその対処に手を取られている間にレーサーが攻撃を仕掛けてくる。ミッドナイトも以前のブ

レインが使っていたあのドス黒い魔力による攻撃は、ダン魔法を弾く盾でも防げないみたいだ。ジャックポットとグリムリーパーもかなり強力な魔法で全体的に攻撃している。

でも、どうやってここまで強くなったんだ？全員評議員に捕らえられ、魔力も使えない牢の中にいたはず。そんな中で特訓など出来るわけも無い。それどころか、身体的には衰えてしまはずなのに。

「…エンジェル、待て」

「…？どうした。我々には成さねばならない事があつたはず。此奴ら相手に時間を無駄にしている暇はない」

エンジェルが何かの魔法を使おうとしたその時、ブレイン二世がそれを止めた。

「その通りだ。時間をこれ以上かけるつもりはない。ただ…」

「…なっ!？」

ブレイン二世が僕へと手を伸ばし、僕が着ていた衣服をねじ曲げ締めつけ始める。そしてそのまま徐々に空中へと連れて行かれる。ま、まずい、これじゃ身動きが…！

「ゴーシュっ!」

「ユニモン、行こう!」

「ああ!」

「私も行くっ!」

ユニモンの背中にブラックテイルモンが乗り、ドルガモンとユニモンが僕を助けようと翼を広げる。

「…！駄目、だ！み、んな…避け…！！」

「ほい来た！雷ボーナス〜！よいしょーっ！！」

「うわあっ！」

「皆…！！」

デジモン達が落雷によつて攻撃されてしまった。っていうか、僕を何処に連れて行こうとしてるんだ…!?

「テメエ、ゴージュを離せ！」

「君は下がれと言つたはずだ！」

「いいからどけタコ野郎！」

ナツさんが僕を助けようとして飛び出そうとしたが、バイロがまたナツさんに後ろに下がるように言っている。そうか、バイロの魔法ならタイミングを見計らつて僕を解放して奇襲みたいなことも出来るかも…！！

「グリムリーパー」

「ああ…」

「かはっ…！！」

ナツさんと新生六魔将軍との間に連れて行かれた僕へ向けて、グリムリーパーの竜巻が僕を飲み込み、斜線上にいるナツさん達にも再び襲いかかる。

「待て!!」

グリムリーパーの竜巻により視界が遮られ、竜巻が収まった頃には新生六魔將軍オラシオンセイイスは姿を消していた。

「くっ、逃がしたか……」

「おいおっさん!!ゴージュに何をしやがった!!」

彼がこうなる前に敵の攻撃に飲み込まれ、その後には目の前にいるバイロが何かをした途端苦しみ始め、彼から膨大な魔力が溢れ出したのだ。グレイはバイロへと近づき胸倉へと掴みかかる。

「……私は敵の攻撃を無効化させたまでのこと!攻められる謂れはない!」

そう、バイロはただ敵の攻撃とその渦中にいた彼に向けて魔法無効化を使っただけ。寧ろ先程まで敵対していた者を救おうとしたのだ。

「じゃあこれはどういうこった!?!どう見ても苦しんでるじゃねえか!」

「落ち着け、グレイ」

「離しやがれ、リオン!」

興奮しているグレイを蛇姫ラミアスケイルの鱗のリオンが鎮める。どこからか流されていた今回の妖精フェアリーテイルの尻尾の行動の目的、無限時計の回収に協力する為にグレイとジュビアの元へと合流していた。最も彼には別の目的もあつたのだが今は置いておく。

「こいつは確かに魔法を無効化しただけだ、それ以外の魔法は使っていない。そうだろうか?」

「……まさか」

その時、エルザが何かに気づいた。彼がああなったのは初めてでは無い。あの時も今程ではないが同じように魔力が溢れ出していたのだ。

「エルザ、何か分かったの?」

「お前も前に見たことがあるだろう……ハデスとの戦いの中で、ゴージュが今のような状態になったのを」

「……!」

ハデスの圧倒的な魔力によってウェンディが消されたと思われた

時、彼は自我を失いかけた。最愛の人が死んでしまったというショックで絶望した。その時の暴走はルーシイの星霊であるホロロギウムによって救われたウエンデイの声（正確には彼女の声を通訳したホロロギウムの声）で自我を取り戻した為収まった。

「ウエンデイ、ゴーシユが他にあなつたことは？」

「：私は見たことがありません。ゴーシユも何も覚えていないようでしたし：」

「なるほど：：ゴーシユも覚えていないのか」

「どういうことだよ！」

ナツがエルザに問いかける。ナツはここまでの話がほとんど理解出来ていないが、ハデスとの戦闘時にその場にいた最強チームとウエンデイは彼の異変を目の当たりにしているのだ。気になるのは当然だった。

「魔法が無効化された途端ゴーシユが暴走した：つまり、ゴーシユには暴走を抑える為の魔法がかけられていたということだ。本人も知らない内にな」

「：！皆、あれ！」

溢れ出していた魔力の中から彼の姿が現れる。だが、その姿は異形だった。彼の全身の皮膚は魔力と同じ緑色になり、彼の手足の爪は鋭く尖っている。髪は濃い緑色へと変化していた。

「ゴーシユなの：：？」

「おい、しつかりしろ！」

「やはり、あの時と同じ魔力：：！」

「ならば：：何!？」

バイロがもう一度ゴーシユに向けて魔法無効化を使おうとしたその時、ゴーシユは既にバイロのすぐ目の前に移動していた。ギリギリ反応したバイロは自身の武器である杖で辛うじて防ぐ。

「ゴーシユ、止めてー！」

ウエンデイの声でも彼は反応を示さない。バイロへとその爪で引き裂こうと攻撃を続けている。その二人の間に割り込んだ者がいた。

「おい！どうなってるのか説明しやがれ！」

「ガジル!？」

右手を剣に変化させたガジルがゴーシユの攻撃を受け止める。少したけ鏢迫り合いのように拮抗していた両者だが、鉄竜剣に罅が入ったことでガジルが徐々に押され始める。

「なっ…俺の鉄竜の鱗を…！」

「はっ！」

煉獄の鎧へと換装したエルザがゴーシユに斬りかかり、ゴーシユは大きく跳躍し回避する。

「ガジル！」

「問題ねえ…おい、サラマンダー火竜、ガキ！」

右手を押さえながらガジルは駆け寄ってきていたレビイを制止し、ナツとウエンデイに向かって話しかける。

「は、はい！何ですか？」

「お前ら…分かってんだろ？あれは、ただの魔法じゃねえ」

「え…？」

ナツはゴーシユに、ある既視感を感じていた。その既視感がいつ見たものなのか思い出した。それは、ファントムロード幽鬼の支配者との戦いでガジルと相対した時や六魔將軍オランオンセイイスのコブラと戦った時だ。この二人には、ある特徴があった。ガジルは滅多に無いが、腕や全身を竜の鱗に変化させる

ことが出来るのだ。

今日の前にいるゴーシユの皮膚は、正にそれだった。

「まさか、ゴーシユもなのか…?」

「…今まで何で感じなかったのか分からねえが、間違いねえ」

「あの、どういうことですか…?」

二人がある確信へと至っている中、ウエンデイは何が何だか分からなかった。だがそれも仕方の無いことだ、彼女は自分と同じ存在に相対した事は殆ど無いのだから。

と、その時。またもゴーシユは動き始めた。彼は自信の魔力を体内に溜め始める。その動きに既視感を覚えたのはナツ達だけではない。グレイやルーシィやエルザも、どういうことなのか分かっていなかった。ウエンデイも、ある事実へと辿り着く。

「そ、そんな…!」

「火竜の…!」

「鉄竜の…!」

「ちよつと二人とも…!きやつ!」

ルーシィがゴーシユに向けて攻撃しようとしていたのを見て慌てて止めようとした。二人以上の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーが同時に咆哮を放つ。同じ滅竜魔法だからなのか、その威力は一人の時とは比べものにならない程跳ね上がる。いくら暴走しているからといって、仲間に放つ威力の攻撃ではないからだ。

だがその制止の声は最後まで言葉にならなかった。ゴーシユが今目の前にいるナツとガジルと同じ動作で魔力を溜め、解き放つ。

「咆哮!!」

ゴーシユの攻撃を、ナツとガジルの二人の咆哮がぶつかり合う。やや拮抗し、ナツとガジルの咆哮がゴーシユのそれを押し返し始める。そしてついにゴーシユが押し負けて飲み込まれた。

「…やっぱりか」

「ナツとガジルの二人がかりでの攻撃に僅かだが拮抗したと…」

「間違いねえ。ゴーシユは…滅竜魔導士だ」
ドラゴンスレイヤー

ゴーシユは何事も無かったかのように起き上がり、右手に魔力を集め始めた。

今のゴーシユは身体能力が桁違いに上昇している。ガジルの鉄竜の鱗を傷つける程の攻撃力だ、まともに攻撃を食らってしまえば致命傷は間違いないだろう。魔力を一点に集めているとなれば、今まで以上の威力を持つ攻撃が放たれるのは明白だ。

「パワーメタル!!」

「ホーリーショット!!」

「とりやあーっ!!」

タイミングを狙っていたのか、いつの間にか空へと飛んでいたデジモン達。鉄球をゴーシユは跳躍して躲し、光球は体を反って躲す。しかしゴーシユの真下に潜んでいたブラックテイルモンの一撃は避け

きれなかった。腹部を思いっきり殴り、彼の服を掴んで地面へと叩きつける。

「よし、今だ！ゴーシユを拘束するぞ！」

「待つてください!!お願いです:!!」

「:すまない、ウエンデイ。急がねば時間が無いんだ」

ゴーシユとの戦闘中も崩落は続いている。急いで脱出しなくては、全員生き埋めになってしまう。

「でも、どうする?生半可な拘束じゃ破られるぞ」

「それに、意識もあるのか分かんないし:」

意識があるのであれば、ウエンデイの声に反応しないはずが無い。それに今いるメンバーでは彼を封じられる程の拘束魔法を使える者もない。

全員がどうすればゴーシユを止めることが出来るのかを考えている中、ウエンデイが動き始めた。

「ちよつとウエンデイ!?!」

「皆さん、私に任せてください。絶対に、何とかします:!!」

一歩ずつ、ゴーシユへと歩み寄るウエンデイ。仲間達はそれを不安そうに見つめる中、シャルルだけは信じていた。二人の絆があれば、きっとゴーシユは意識を取り戻してくれると。

「ウエンデイ:っ!」

最もゴーシュの一番傍にいたブラックテイルモンは気づいた。先程溜めていた右手の魔力が、消えていなかったことを。そしてそれが、目の前に近づいている少女に放たれるであろうことを。

「ダメーっ!!」

ブラックテイルモンが立ち上がりとうとするゴーシュへと飛びかかり、空からもドルガモンとユニモンがゴーシュの元へと降りブラックテイルモンに加勢する。ゴーシュは右手に溜めていた魔力を全身へと巡らせ力づくで振り払おうとするが、デジモン達は離れようとしな

「皆…!」

「ゴーシュは、俺達のパートナー、なんだ…!!」

「ゴーシュと、約束…したのっ!」

「最善だと思っ行動をしろ…ってね!」

「皆…ありがとう」

ゴーシュの目の前まで来たウエンディは、ゴーシュを抱きしめる。

「ゴーシュ、もう大丈夫…大丈夫だから」

「グ、アアアアア!!!」

ゴーシユは暴れるのを止めず、ウエンデイの両肩を掴む。彼の鋭利な爪は食い込み、ウエンデイの白い服は赤く染まる。

「っ……!」

「ウエンデイ…!!」

「待て。……ウエンデイを、彼女達を信じよう」

ウエンデイが痛みを耐える姿、その痛々しい姿に思わずルーシイが声を上げ止めようとするが、エルザがそれを止める。エルザもまた、シャルルと同じ期待を抱いていたのだ。

「本当は…傷つけたく、ないんだよね…? ごめんね、ゴーシユ…」

ゴーシユが、暴れるのを止めた。彼の両手がウエンデイの両肩から離れ、エルザ達からでも分かる程震え始める。

「これは、君のせいじゃないよ。私は大丈夫だから…」

ゴーシユの体に込められていた魔力が霧散していく。

「私は…もう守られているだけじゃ嫌なの。ゴーシユのことを、支えたいんだ」

ゴーシユの両手の震えが収まり、ウエンデイの背中へと触れる。デジモン達がゆっくりとゴーシユから離れる。

「…ありがとう。やっと、君を助けることが出来たね。今まで、助けられてばかりだったから」

ゴーシユの瞳から、一筋の光が流れ落ちる。

「デジモン達も、ギルドの皆も、大事な家族だよ…皆、君が戻ってくるのを待ってる」

ゴーシユの皮膚が緑色から、少しずつ元の色へと戻り始める。鋭く尖っていた手足の爪も、元に戻っていく。

「…お帰りなさい、ゴーシユ」

「…ただいま…ウエンデイ」

ゴーシユはゆっくりと目を閉じ、眠りについたのだった。

第68話 暴走の痕

ここは何処なんだ。体は動かせないし、声も出せない。自分の体は見えるのにその他は何も見えない。今どこに立っているのかも、そもそも地面があるのかどうかも分からない。それに…覚えていない。どうしてこんな場所に来たのかも、体の中から湧き出てくるものがないのかも…自分の名前すらも。

苦しい…全身が痛い。頭に霧がかかり思考が鈍る。そして全身を強い倦怠感が襲う。駄目だ…僕は、こんなわけが分からない所にいる暇はないんだ。早く、戻らないと…あれ、何で戻らないといけないんだっけ…どこに、戻るんだ…？

「……………れ……………ナー……………！」

「ゴ……………や……………つ！」

「さい……………どう…………………………！」

声が聞こえた。何を言っているのかは聞き取ることが出来ない。でも、この声達は聞き覚えがある。一体、誰なんだ…？僕を知っているのか。誰でも良い、出口を教えてください。そのまま声を出し続けてくれ。

「みん……………と……………」

さらに別の誰かの声が聞こえてくる。その直後、全身に温かい感覚が広がっていく。この感覚によって僕の心が少しずつ安らいでいくのを感じる。僕は、この感覚を…知っている。すぐ身近にあった…はずなんだ。もう少し、もう少しで思い出せそうなのに…！

「・・・ユ、もう大丈夫・・・から」

両手が何かに濡れたような感覚がする。一体何が大丈夫なんだろうか。苦しき痛みも消えることはない。何故かただの水じやないのは分かった：これじゃ、嫌な感覚が増えただけじゃないか。

「・・・とは、きず・・・たく、ない・・・よね？ごめ・・・、ゴー・・・」

：僕の体に傷はない。昔の傷跡はあるけれど、今の僕の体に生傷なんか見当たらない。この両手に広がるのは僕では無い別の誰か：きつとこの声の主のものだ。

これは、僕がやったのか：？

止めなければ。僕は誰かを傷つけることなんてしたくない。そんな誰かを苦しめてしまうような生き方は絶対にしたくない：！

「これ・・・君・せい・・・ないよ。わた・・・うぶ・から」

違う。君はいつもそうやって大丈夫、大丈夫って強がりを言うんだ。君が無理をしているのなんて、分かりきっている。僕が、しっかりしなければ。君を守る為に、僕は・・・！

「私は・・・もう守られているだけじゃ嫌なの。・・・のことを、支えたんだ」

：そう、か。僕は、また一人で頑張ろうと必死になってしまっていたのか。

出口を探す必要なんてない。この声に、この温かい感覚に全てを委ねれば良い。きつと、元いた場所へ連れて行ってくれる。

「…ありがとう。やっと、君を助けることが出来たね。今まで、助けられてばかりだったから」

少しずつ、今までの記憶を思い出す。次々と流れる記憶の奔流…その大半に出てくる、一人の少女。

君が、皆がいたから今僕は存在している。既に何度も助けられていたんだ。今回だけじゃ、ないんだよ。

「デジモン達も、ギルドの皆も、大事な家族だよ…皆、君が戻ってくるのを待ってる」

僕の大事な仲間であり、友人であり、家族である人達。その皆が…待っていてくれる。

気づけば、さつきまでいた何処でも無い場所ではなかった。崩壊が続く礼拝堂、そして心配そうに見ているギルドの皆、すぐ傍にいるパートナーデジモン達、そして…僕を連れ戻してくれた女の子が、僕を抱きしめてくれていた。

「…お帰りなさい、ゴージュ」

「…ただいま…ウエンディ」

極度の疲労と安堵から、僕は眠ってしまった。

☆

これが、僕が覚えている最後の記憶だ。問題はその後…あそこからどうやって脱出出来たのか、そして今はどういう状況なのか、だ。

「…誰か、来てくれないかな」

ここがギルド内にある休憩室なのは確かだ。でもカーテンがしっかり閉められているせいで誰かいるのかも分からない。全身痛くて起き上がるどころか寝返りを打つのも厳しいし…今は誰かが来てくれるのを待つしか無い。

「あ、そうだ…って、駄目か」

自分が動けないならゴーグルの中にいるデジモン達に頼めば良いじゃないかと思っただけ、今の僕はゴーグルをしておらず、首も動かすのが辛いので視線だけで周囲を見渡すとすぐ近くのテーブルにゴーグルが置かれているのが確認出来た。さすがに体を動かさないうんじや取れないや…最近ロック機能があることを見つけて、プロットモン対策で勝手にリアライズしないようにしたことが仇となるとは…

と、その時だった。誰かの話し声がゆっくりと近づいてきているのが聞こえてきた。良かった、これで状況が分かる。

「…遅いな」

声が大分近づいてきているはず…なんだけど、部屋に入ってくる気配がない。声が聞こえるくらいの距離ならもう部屋に入ってきてても良いはずなんだけど。声の主は…多分二人?というか、この二人は…「ほら、着いたぞ。いい加減元気出せよ」

「…分かってるツスよ」

やっぱりイーロンとロメオか。そしてようやくここまで来てくれたようだ。

「おーい…っ！ゴホッ」

呼びかけるように少し大きめの声を出そうとしたら咳が出た。これじゃ病人そのものだよ…でも、今ので気づいてくれたはず――

「…!」

「今の声…あ、おい!」

目の前のカーテンが凄いい勢いで開け放たれる。そして泣きそうな顔をしたイーロンと溜息をついているロメオがいた。

「お、おはよう二人とも…」

「兄貴!!」

「〜!?」

イーロンが寝ている僕に飛びついてきた。その衝撃で全身に激痛が走り、声にならない声が出る。ってか、ちよ、めっちゃ痛い!なんでこんな痛いのか!」

「目が覚めて本当良かったツス!俺兄貴が目を覚まさないんじゃないかって心配で心配で…!そうだ、傷の具合はどうツスカ?姉御が殆ど治してくれたはずツスけど、まだ痛むならもうしばらく休んでた方が…!」

「お、おいイーロン!ゴシユ兄さつきから意識飛んでるぞ!」

この時、僕はホントに一瞬だけ気を失っていた。仲間に殺されそうになるとは思いもしなかったよ…。

☆

それから数分後、今ギルドにいる他のメンバーも僕の元へ来てくれた。現在の状況を教えて貰う為にイーロン達に読んで貰ったんだ。

「兄貴が気絶した後、崩壊が激しくなったツス。その時丁度天馬のクリステイナーが降りてきて脱出は出来たんスけど、無限時計は新生六魔将軍オランオンセイイスに持つてかれてレギオン隊はいつの間にかいないし…で、手分けして新生六魔将軍オランオンセイイスを探して部品を取り返すってことになったツス」

「チーム編成と向かう場所はあたしの占いでね!」

「俺も行きたかったなあ」

なるほど。ロメオやイーロンがここにいるのはチーム編成で入れなかったからか。まあ、さすがに六魔が相手じゃこの二人はまだ力不足だ。カナさんの選択は間違っていないだろう。

「その…ウエンディは?」

「…姉御も残ろうとして下さっていたツス。でも、チームに選ばれていたら俺達に任せて貰うよう説得したんスよ」

「あ、そうじゃなくて、ほら…傷の方」

「そつちも何ともないぜ。派手に出血してたように見えただけで、大した傷じゃないって」

「そう…」

やっぱりあれはただの夢じゃなかったんだ…あろうことかウエンデイに怪我をさせてしまうなんて。この力、ちゃんと扱えるんだろうか。

六魔との戦闘、僕の中の何かが解放されたあの時に、ブレイン二世が哀れな傀儡がどうか言っていたのを僕はしかと聞いた。つまり、少なくともブレイン二世はダフネ本人に僕のことを聞いていたということになる。ダフネに何かしらの実験を施されていたことも、それが何らかの魔法によって封じられていたことも。それをわざと解放させる為、バイロの魔法を利用した。僕が暴走することも見越して。

一応だが僕も六魔討伐に直接関わっているし、これは僕に対する復讐の一つということでもあるんだろう。そしてそれは達成された。僕にとってはこの上なく屈辱的なことだ…自分の生き方に反した行動をさせられたようなものだから。

「イーロン、ちよつと肩を貸してほしい」

「ど、どうするつもり？」

「今の僕は爆弾を抱えているようなものなので…僕の状況を確認したいんです」

「でもそんな体じゃ…」

「今いきなり暴走することもあり得るんです…このままじゃ皆に迷惑をかけてしまいます」

「…了解ッス！でも、無茶だと思ったら止めるッスよ！」

「俺も行くぜ！」

「…ありがとう、二人とも」

僕のあの状態を見たからか、本当に若干だけど皆が怯えてしまっているような気がしてしまう。僕の妄想かも知れないけど、早くどうかしたいというのが本音だった。この二人だって僕を怖がっても仕方ないのに…こうして協力してくれたことに、改めてお礼を言った。

「あ、そうだ。デジモン達も…」

「ああ、ちゃんと持っていくよ」

ロメオがテーブルの上からデジヴァイスを取ってくれた。外に出

たらドルモンかパタモンに進化して貰って背中に乗せて貰おう。場所は…いつもの修行場にしよう。万が一僕が暴走してしまっても被害が少ない方が良い。ここで進化させられれば良いんだけど、狭くて動けないだろうからなあ…

二人に肩を貸して貰いながら、少しずつ外を目指して歩いて行く。やっぱり全身が痛み続けている…これも暴走のせいなのかな。

「くっ…：…うっ…：…」

「ホントに大丈夫かよ、ゴーシユ兄…」

「歩くだけでここまでとは…：…すぐ痛々しいッス」

「ご、ごめん。あまり心配しなくて良いから…」

歩く度に呻き声を上げていたら、そりゃあ心配されるよね。でも、ようやく痛み慣れてきた所だからもう少しだけ我慢してくれ…

一歩ずつ時間をかけてゆつくりと歩いて行き、そうしてようやく玄関から外に出る。ロメオからデジヴァイスを渡してもらい、デジモン達をリアライズさせる。

「やつと出れた〜!」

「ゴーシユ、大丈夫〜?」

「うん、何とかね…」

「いや全然大丈夫って感じじゃないよ!?無理しちゃ駄目だつて!」

ドルモンから興奮気味にそう言われた。無理をしている自覚はさすがにあるけれど、今はそうも言っていられない。今回は大目に見てほしい。これ以上誰かを傷つけるなんて耐えられない。

「パタモン、いきなりで悪いけど進化してもらっていい…?」

「大丈夫、話は聞こえてたよ〜」

「ありがとう…：それじゃ、頼むよ」

「は〜い!パタモン、進化——ユニモン!」

やっぱり乗り心地で言えばユニモンの方が良いと思う。ドルガモンも力強さはあるけれど、ユニモンはそれ以上に安定して飛んでいられるし。

「浮遊…っ!!?」

魔法を使おうとしたその瞬間だった。僕の体に異変が起こったのは。

「あ、兄貴!？」

「どうしたんだよ、ゴーシュ兄!」

「来るなっ!!」

急にしゃがみ込んでしまった僕の傍へ駆け寄ろうとするイーロンとロメオを止める。今僕に近づくのは危険だ。

「ゴーシュの腕が…!」

「それに髪の色も…これも暴走のせい?」

リサーナさんが言った通り、今僕の右腕は肩側から徐々に緑色に変色し始めている。ミラさんの言葉から察するに、髪の色も同様に変色し始めているようだ。

「ぐっ…皆、離れて…くっ!!」

右腕に注がれ続けている膨大な魔力をどうにかしなければと考えた僕は、皆が離れているのを確認してから地面に右腕を突き立てた。そして僕がいる場所を中心として半径数mの範囲にわたって地面が十字に切りつけられたように陥没した。

「な、なんて威力…こりゃ下手に近づいたら危険だね」

「はあ、はあ…っ!」

魔力を発散させることが出来たからか、僕の腕が元の色へと戻っていく。きつと髪も元の色に戻ったはずだ。

今の…止め方が分からなかった。抑え込もうとしていたのに、まるで右腕がどんどん体の内側から湧き上がる何かに浸食されてしまったような感覚だった。発散させれば元に戻るみたいだけど、体力をぐっそりと持つて行かれてしまうし…これじゃ戦いになったら足手まといだ。そして一番の問題は。

「ねえ、今の暴走ってゴーシュが魔法を使おうとしたから起きたのかな」

「…多分、そうだと思います」

レヴィさんの言ったように、魔法を発動させようとしたらこうなった。ということは、暴走しないようにしながら戦闘をするのは不可能だ。

「ゴーシユ、戦えなくなっちゃったの?」

「そんな…」

「何だって!」

その時、ギルドの中にいたウォーレンさんが突然大声を上げた。全員視線が彼へと向けられる。

「ミツシエルが偽物だつて…!」

『その可能性が高いわ。だつて、ここに本物がいるから』

今のは、ラキさんの声…確かラキさんはギルダーツさんと一緒に何かの任務に行つたつて聞いていたけれど…まさか、ミツシエルさんの身元調査だったのか?

「じゃあ、今ルーシイ達と一緒にいるミツシエルつて…誰なの?」

「連絡用のカードは?」

「各チームに一枚ずつ。エルフマンが持つてるよ」

ウォーレンさんがエルフマンさんにカードを使って連絡を取ろうとしたが応答はない。これはきつと何かあったんだ。もしかすると六魔の誰かと戦闘中なのかもしれない。

と、その時。ギルドに向かって走ってくるビジターさんの姿が見えた。

「大変である!カルディア大聖堂が六魔の襲撃を受けていると!」

「何!?不味いな…あそこには誰も行ってねえ!」

「僕達が行く。行こう、ビスカ」

「ええ」

こんな時に襲撃なんて…くそつ。今の僕じゃ行つても足手まとい…それは分かつてるけど、何か出来ることはないのか。

「…ゴーシユ、慌てては駄目よ」

「ミラさん?」

「もうすぐマスターも戻ってくるはず…マスターなら、何とか出来るかもしれない」

「…はい。皆、戻っていてくれ」

デジモン達をデジヴァイスの中へと戻し、僕はまたイーロンとロメオの肩を借りてギルドの中へと戻る。

せめて魔法が使えれば…無限時計を全て持って行かれてしまった今、オラシオンセイブス新生六魔将軍と直接戦うことになるのは間違いない。いざという時に役に立たないなんて、そんなの絶対嫌だ。

「…二人とも教えてほしいんだけど、僕が気を失っていた間、僕について六魔は何か言っていなかった？」

「いや、特に…兄貴が暴走したら全員逃げちまったんすよ」

「何でも良い…僕の中に何かがあるのか、少しでも情報が欲しいんだ」

「そういえば、ナツ兄がゴーシユ兄をドラゴンスレイヤー滅竜魔導士だと言ってたけど

…ホントなのか？」

「ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士…」

じゃあやつぱりダフネが関係してるのか。ドラゴンに関する魔法を僕に仕込んでいたとしてもおかしくない…きつと、僕の体の中にあるのは滅竜魔法の魔水晶ラクリマで間違いないだろう。所謂第二世代のドラゴンスレイヤー滅竜魔導士に知らない内になっていたと…ホントに厄介なことをしてくれたな。

…あれ？ちよつと待てよ。

…もしかして、何とかなる？

「…レビイさん！ちよつと来て貰って良いですか？」

「え？何、急に？」

「どうしたんすか、兄貴？」

「もしかしたら、また戦えるようになるかも知れない…！」

ロメオ、イーロン、レビイさんの三人に僕の考えを説明し、レビイさんからの「いけるかも!」との言葉で光明が見えてくる。そして僕は早速作業に取りかかることにしたのだった。

第69話 打開の策

ゼントピアの総本山、その上空に突如出現した無限城。ウイル＝ネビルの弟子の子孫達の生態リンクによって封印されていたそれは、新生六魔将軍がアンチリンクを行うことで解き放たれた。その反動で、生態リンクを施されていた者達は時間の感覚が遅くなり、蛹のような状態になってしまった。彼らは100年経つまでその状態から解放されることはない。

無限城の傍には青と白を基調としたある船があった。七年前の六魔将軍討伐の際に連合軍として、妖精の尻尾や当時の僕達のギルドである化猫の宿と共に戦った青い天馬。彼らが所有している魔導爆撃艇・クリスティーナ改だ。改、というのは七年前に一度大破したからである。というか、今も無限城の傍に不時着しているようだけど。

そのクリスティーナ改に乗り込んだのは、夢による洗脳から解かれたカナさんが占いで選出したメンバー。ナツさん、ルーシイさん、グレイさん、エルザさん、ガジルさん、ミラさん、エルフマンさん、ウオーレンさん、ウエンディ、そしてエクシード隊の三人…の、はずだった。「それじゃ、僕も出発します」

「うむ。使うタイミングはお主に任せるぞ」

「…はい！」

見送っている皆に声をかけ、マスターからそう声をかけられる。それはマスターから借りたある魔法についてのことだ。一度きりのチャンスだ、無駄には出来ない。

「それじゃ…頼むよ、ユニモン！」

「オツケー！」

跨がっているユニモンに声をかけると、翼を大きく広げ空へと飛翔する。急がないと、大変なことになるかもしれない。全く、あの二人は…七年前より成長して頼りになるのは良いんだが、今回はさすがにやり過ぎだ。帰ったら覚悟してもらわないと。

話は数時間前に遡る。

☆

オラシオンセイイス

新生六魔将軍と戦っていたメンバー達が次々と帰ってきている頃。どのチームも敵に有利な戦闘を強いられる形になっており、ほとんどのチームは敗戦：特に酷かったのは、ミツシエルさんが新生六魔将軍オラシオンセイイスのナンバー2であるイミテイシアであったことが発覚し僕らを裏切ったことにより、ナツさんとルーシイさんが敵に捕まってしまったらしい。唯一、ウエンデイとビッグスローさんが新生六魔将軍オラシオンセイイスの一人であるグリムリーパーに勝利したのは幸いだった。

こうして状況が刻一刻と進んでいる中…この時僕達が行っている作戦は、お世辞にも上手くいっているとは言えなかった。

ギルドの近くの森の中、地面に準備していた術式…と言っても、この術式は普通のそれとは違う。四角形ではなく円になるように文字が並べられ、その上に術式を中心に向かって直線が四本ほど引かれるように文字を配列させている。それとは別に、僕の体にも術式の一部をレイビイさんに書いて貰っている。

僕達がやろうとしているのは、制限結界リミットを僕の周囲にだけ展開し続けるというものだ。魔法を使おうとすると暴走が必ず起こってしまうのは間違いない。だったら、制限結界リミットに使われている術式を書き換え永続的に発動させ続け、滅竜魔法を発動すること自体を阻止するという考えだ。

僕の体に術式の文字を刻んだ状態で制限結界リミットを発動させれば勝手に縮小され、僕の意味に関係無く展開し続けるように調節される。レイビイさんやフリードさんのように術式を書き換えて貰えば解除は可能だし、この無限時計の一件が終わるまでであれば多少動けるようにはなるのではないかと思う。

しかし、これには問題があった。

「ゴーシユ、もう一回魔力を高めてみて」

「…分かりました」

術式の中に入り座り込み、目を閉じて集中…ほんの少しだけ魔力を高める。すると、自分の体に異変が生じているのを感じる。毎回浸食が始まる部分は違って、今回は右手からだった。皮膚が緑色に変色し

ていき、爪が鋭利になっていく。

さらに魔力を高め続ける。皮膚の変色が徐々に広がっていき、やがて全身が緑色になる。自分の魔力ではなく、魔水晶^{ラクリマ}から溢れ出ている魔力を精一杯抑えつけようとするけど、こうなつては制限結界^{リミット}を発動させることに集中することが出来ない。これでは、また――

「…ゴーシュ、駄目！」

レイビイさんの声で僕は目を開き、僕の体に書かれている文字が掻き消されていくのが見えた。これではもう作戦は成功しない。僕は魔力を抑える…が、魔水晶^{ラクリマ}からの魔力は止まらない。僕は術式から離れてから地面を殴りつけ、そうして合計十個目の、半径数mに及ぶクレーターが出来上がり、僕の体は元の状態へと戻っていく。

今ので十回目の失敗。全身が緑色になるまで魔水晶^{ラクリマ}の魔力が高まってしまうと僕の体に書いた術式の文字が掻き消されてしまう。

「また失敗かあ…」

「…すみません。失敗する理由は分かつてはいるんですが」

「…ねえゴーシュ、ナツ達に任せの方が良いんじゃない？ここまで無理しなくても…」

…確かにレイビイさんの言う通りかもしれない。ナツさん達なら上手くやってくれると信じられる。

でも、この時の僕は異様な胸騒ぎを覚えていた…悲しい出来事が起こってしまうような、そんな予感と共に。

「…レイビイさん、もう一回お願いします！どうしても、行かなきゃならない気がするんです！」

「…分かった。でも、これで失敗したらどつちにしろ時間がないからね！」

レイビイさんが僕の体に文字を書き込み終えたと同時に、僕は術式の中にもう一度入る。もう、形振り構ってられない…絶対、成功させ

る！

「すうーっ…はあーっ…！…！…！はああああつ！！」

深呼吸してから、一気に魔力を高める。今まで失敗していたのは、魔水晶ラクリマの魔力を無理矢理に抑え込もうと意識してしまっていたからだ。それで結局自身の魔力をコントロール出来ないまま暴走が進み文字が掻き消される。

ならば、全身の浸食が終わってしまいう前に…一瞬で魔力を高め制限結界リミットを発動させることが出来れば！

体が浸食されても、怖がるなど何度も自分に言い聞かせる。怖がっていないでは、魔力を上昇させる前に僕の浸食の限界が来てしまう。

「な、なんて魔力…！」

今まで以上の凄まじい速度で全身が魔水晶ラクリマから溢れる滅竜魔法に浸食されていくのが分かる…でも、これなら行ける！

「…制限結界リミット、発動！！」

紫色の結界が僕を覆い、僕の体に刻まれていた文字と地面に書かれていた術式の文字が結界へと流れ込んでいく。僕は何もしていないが地面に書かれた術式、そして僕の体に書かれた術式が制限結界リミットに干渉し、徐々に範囲も狭まっていく。やがて僕の体にピツタリと張り付くように制限結界リミットが調整されて文字は消え、僕の体は元の状態へと戻った。

「成功…ですよね？」

外見上は何も変化していない。が、文字が消えたといっても今までの失敗のように掻き消される感じではなく、少しずつ透明になってい

くような消え方だった。制限結界リミットに溶け込んだようにも感じた僕は、不安混じりにレヴィイさんに尋ねる。

「多分…ゴーシュ、魔法を使ってみてよ」

「は、はい。…防御結界ディフェンド・円蓋ドーム！」

僕を覆うように青緑色の結界が展開された。魔法を使うのにも何の苦勞も感じない。暴走する前と同じ感覚で魔法を扱えたのだ。

「上手くいったんだ！やったね、ゴーシュ！」

「はい！ありがとうございます、レヴィイさん！」

レヴィイさんがいなければ絶対に上手くいかなかっただろう。これで、僕はまた戦える…それが、本当に嬉しかった。

「そうだ、ロメオとイーロンにも伝えに行かないと…」

「そういえばあの二人、何処に行ったんだろうね？」

途中まで僕のことを見てくれていたんだけど、ギルドの方へ戻っていくのは見た。そしてさつき、クリスティーナ改がギルドから飛び立っていくのも。

…戦力として数えられてなかったんだろなあ…と、僕は少し落ち込んだ。ドルガモンかユニモンに頼んで無限城に向かえば問題ないはないのだけれど。とにかく一度ギルドに向かうことにして、十分程歩くとギルドの玄関へと到着した。

「すみません、遅れました！」

「おお、ゴーシュ！大丈夫か？」

「はい、レヴィイさんのおかげで」

ギルドに入ると四代目が声をかけてくれた。他の皆もこっちに集まってくれて、僕は皆に何をしていたかを説明する。

「なるほど…確かに可能かもしれないが、リスクが大きすぎる。下手をすれば暴走したままじゃぞ？」

「無茶し過ぎだろ！」

まあ、そこら辺はちゃんと見極めていたし問題ない。最初の二、三回は暴走して気を失わないでいられる段階はどの位か調べながら行っていたのだ。

「それに、結界魔法も使えるものが限られるじゃろ？」

「そうですね…今は防御結界しか使えないと思います」

元々制限結界リミットを使いながらだと防御結界ディフェンドしか使うことは出来なかった。常時制限結界リミットを発動させるようになったのだから、防御結界ディフェンドしか使えないのも変わらない。

「僕のこととはとりあえず大丈夫です…それより、今の状況は？」

その後何とか暴走する危険がなくなった僕は皆に状況を尋ねた。そして、ロメオとイーロンがギルドの中にいなかったことも気づき、無限城へと向かわせてもらうことにした。マスターも僕がそうすることを見越していたのか、秘策まで用意してくれていた。成功するかは分からないって言っていたけど。

というかあの二人、何で勝手にクリステイーナ改に乗り込んだんだ。あの二人じゃ力不足なのは否めない。ちゃんとした決意があるのなら別に構わない…力不足なのは今の僕も同じだろうし、思いこそが一番大事だ。けれど、ただの驕りで行ってしまったのであれば止めては。

「っていうか、何で四代目とか止めないかね…」

「きつと二人が遅しくなってる嬉しかったんだよ」

ユニモンの言うことも分かるけど、時と場合を選んでほしいよ…どう考えても危ないって。確かに二人とも将来は強くなりそうだけど、今はまだ七年前の実力である僕相手にも一対一じゃ勝てないんだから…それなのにクリステイーナ改に乗り込むのを黙って見てるんだもんなあ。

『にしても、何か魚みたいだね』

「ハッピーみたいなこと言うね、ブラックテイルモン…あれ？」

デジヴァイスの中のブラックテイルモンとそんな話をしていると、視界に何か動く物体を捉える。人型ではあるものの、水色の肌と白い翼が印象的だった。

「どうしたの？」

「頭みたいなお部分の少し上に誰かいるんだ。一体何をしてるんだ…？」

あれはレギオン隊の…確かサミュエルって名前だったっけ？そう

いえばさつき、ウォーレンさんからの念話で新生六魔將軍を全員倒せば無限時計の所有権が解除されるって言っていた。でもきつとレギオン隊：いや、あのバイロのことだからルーシイさんを殺して止める方が早いと判断するだろう。そしてサミュエルはバイロの指示で動いている可能性が高い。ということは、あそこに向かえばルーシイさんが…！

そしてサミュエルが魚の頭のような部分に急降下して突き破り、中へと突入していった。ヤバい、急がないと！

「ユニモン！」

「分かってる！」

こうして僕達もそこから無限城へと突入することにした。僕はふと自分のギルドマークが刻まれている左腕を見て、紋章が煌々と輝いているのを改めて確認する。絶対に、成功させるんだ。この魔法で、無限時計は取り返してみせる…！

第70話

ミツシエルの正体

無限城へと乗り込んだ妖精の尻尾選抜メンバー。彼らが無限城内を進みルーシイの元へと向かう最中、捕らえられていたナツやココ、ゼントピア内部に潜入していたギルダーツやラキと合流することに成功した。その合流した場所が大司教のいる部屋であり、そこでゼントピアの枢機卿であるラポワントが六魔将軍オラシオンセイイスのマスター・ゼロの髪の毛から生み出されたパペットであることが判明し、大司教を操っていたのも彼であることが判明した。

各人の時間に干渉し感覚を狂わせる魔法、リアルナイトメア。それを止める手段としてレギオン隊はルーシイの抹殺を、妖精の尻尾フェアリーテイルの面々はルーシイの救助を目的として動き、無限城の奥を目指す。バイロはギルダーツによって阻止されたがその場に居合わせたサミュエルがバイロの意思を継ぎ、ルーシイの元へと一足先に向かう。大司教の治療の為にウエンデイ、シャルル、ウオーレンはその場に残り、ナツとココが選抜メンバーと行動を共にする。

彼らの前に新生六魔将軍オラシオンセイイスが次々と立ちはだかり、一刻も早く進むためにグレイ達が彼らの打倒に挑む。そうしてルーシイの元へと辿り着いたのはナツ、エルフマン、ココの三人だった。先にルーシイの元へと向かっていたサミュエルは、イミテイシアによって無限城の外へと放り出されてしまっていた。

エルフマンやココが戦闘不能にされ、ナツは一人イミテイシアへと立ち向かう。ブレイン二世が途中から合流してはいたものの、戦いには参加するつもりはなかったただ二人の戦いを眺めていた。そんな時、この場に近づく二人の影。

「ロメオ、あそこー!」

「ナツ兄…ってことは…」

こっそりクリステイーナ改に乗り込んでいたロメオとイーロンは、念話でウオーレンやウエンデイの指示に従いナツ達と合流する為急いでいた。ナツ達とは違い敵に妨害されることもなく進むことが出来たおかげか、しばらく進むと少し開けた空間が見え、ナツや彼と

戦っているブレイン二世、そしてイミテイシアの姿があつた。二人は物陰に隠れ耳を澄ますと、ナツとイミテイシアが何か話しているのが聞こえてくる。

「ルーシイとずっと一緒にいたい、だと？ルーシイの気持ちはどうなるんだ？お前を信じて、裏切られたと分かつても…それでもまだ信じようとしてんだぞ。お前にはその声が聞こえねえのかよ」

「迷うことはない。お前は失われたものを取り戻そうとしているだけだ、イミテイシア」

「ミツシエル！うおっ！」

イミテイシアは再度ナツへと攻撃を再開する。左手に持った花のような形をした盾、茨が繋がれているそれを投げ、チェーンソーのように回転しながらナツを切り刻もうとする。ナツはそれを間一髪で回避していたが、それに気をとられイミテイシア本人が直接右手に持った剣で背後から斬りかかって来るのを気づけなかった。

「きつと姉さんだつて喜んでくれる！だって、私達は…いつも一緒だったもの!!」

「なっ…!?!」

一瞬反応が遅れたナツは炎を纏った拳で防御しようとしたが、イミテイシアに紫色の炎弾が直撃したことで行動を中止した。

「嘘つき！」

「ロメオ、イーロン！」

「何で今更そんな嘘つくんだよ…お前は、本物のミツシエルじゃねえんだろ!?!」

「俺達を騙して仲間達を…特に、家族だと思っていたルーシイの姐さんを傷つけたのは許せないツス!!」

イーロンが両手に持った鉄の剣でイミテイシアへと斬りかかる。それを盾で防御したが、ロメオの炎弾が次々と襲いかかる。彼女は二人の攻撃を難なく対処していたが、どうしてか二人へ攻撃することを躊躇っていた。

「ずっと一緒にいたっていうのも、嘘なんだから!?!」

「違う！私は——」

「家族を亡くしたルーシイ姉が、お前に会えてどんだけ喜んだと思うんだよ！どうして裏切ったんだ…どうしてそんな酷い嘘ついたんだよ！」

「俺達にとって、仲間…家族の証。ルーシイの姐さんだけじゃない、俺達皆…アンタをギルドの一員のように感じていた！」

「俺だって、お前のこと…チツクシヨーっ!!」

「ロメオ君…イーロン君……」

「動揺してはいけませんぞ、イミテイシア様。貴女様の邪魔をする者は全て敵」

ブレイン二世の持つ杖、クロドアがそう言い放つ。その間にも、ロメオがイミテイシアを直接攻撃しようと飛びかかっていた。

「何か言えよ、ミツシエル!!」

「やれ」

ブレイン二世の冷徹な言葉と共に…イミテイシアはロメオを盾で攻撃した。

「ロメオ！」

「チツ…クシヨー……」

ロメオは何度も地面をバウンドし、それを見たイーロンはイミテイシアに向かつて一直線に走り出す。

アイアンメイク
デスサイズ
「鉄造形・鎌!!」

「おい、イーロン！」

「ロメオの叫びを聞いても…アンタは何も思わないんスカ!？」

「……」

「何とか…言えッス!!」

自身の身の丈程の鎌を横に一閃。それを屈んで避けたイミテイシアに、イーロンはバク宙をしてそのまま鎌を縦回転させる。しかし、イミテイシアは一步後ろに下がり紙一重で躲し、ロメオと同じように盾でイーロンを迎撃する。

「ぐ、がっ!？」

鎌で防御したイーロンだったが砕かれ、吹っ飛ばされてしまう。その時、ナツは気づいた。ロメオの時もそうだったが、今イーロンを攻

撃した瞬間にもイミテイシアが苦痛の表情を浮かべていたことに。

イミテイシアと相対してからずっとそうだ。彼女の瞳に迷いのような感情が浮かんでいるのをナツはずっと感じていた。

「…わあーったよ、ミツシエル。お前が何者なのか…そんなことは後回しだ。とにかくぶっ倒して、ルーシィを助ける」

「……」

「あらら、これは面白い見世物ですな!」

「怯むなイミテイシア。お前の望みは私が叶えてやる。…忠誠を見せろ」

その一言を切欠に、再びナツとイミテイシアが動き出そうとしたその時だった。

「…警告。急速に近づく殺意を感知」

無限時計に取り込まれ、意識すらも取り込まれかけているルーシィが無機質な声を発した。

「殺意……?」

「うおおおおっ!!」

「サミュエル!?何をやる気…!」

サミュエルは翼^{エーラ}を負傷してしまった為しばらく飛行することが出来なかったが、ゴーシュが辿り着いた頃には殆ど回復していた。ナツ達がイミテイシア、そして後に合流したブレイン二世相手に苦戦していたが、サミュエルはそれを意に介さずルーシィへの注意が逸れるタイミングを窺っていたのだ。

これまでの戦闘でルーシィから離れナツやエルフマンと戦っていたイミテイシア。彼女はずっと敵の急所を的確に攻撃しつつもルー

シイを守ることを最優先にしていた。しかし、ロメやイーロンがナツ達と合流しイミテイシア：いや、ミツシエルに対して思いの丈をぶつけたことで僅かに感情的になり、今までルーシイに向いていた注意がほんの少し外れたのだ。そこを、サミュエルは見逃さなかった。

天井を突き破った彼は、そのままルーシイへと一直線へと迫る。

「ルーシイ!!ハートファイア!その血を持って、無限時計を停止させたまえ!!」

☆

僕が無限城に突入して最初に目に入った光景。それは、サミュエルがルーシイさんに攻撃しようとして迫っている所：そして、もの凄いスピードでサミュエルを追い越し二人の間に入り込むココの姿だった。サミュエルはココに直撃する寸前で動きを止めた。

「ココ…!そこを退いてくれ!」

「退きません!」

「言い争っている時間は無いんだ!!」

「それなら…私を先にその爪で貫けば良い!!」

ココの瞳には決意が込められていた。アースランドちでは敵としてしか彼女と接していないし、どういう経緯で考えを改めたのかも分からない。でも、世界は違ってもココはココなんだって感じた瞬間だった。

「この…!僕は、教義の為に決めたんじゃない!自分の心に従って――」

「間違えていると分かっているでもですか!!」

「…そうだ。この混沌を収める為には、選びがたきをも選ばざるを得ないんだ!!」

サミュエルの鋭い爪が無慈悲にもココを貫こうとしたその時、僕は彼女を守る為に動いた。彼女が生み出したこの瞬間を、無駄にはしない!

「ディフェンド 防御結界・円蓋!!」

「なんだって…!?!」

「この…!?!」

爪が弾かれ体勢を崩したサミュエル。彼が怯んでいる間に、青い影が彼の顔面へと突撃した。その青い影と殆ど同時に現れた屈強な猫。

「ハッピー!?!」

「貴方は…」

「ここは任せろ」

「お前ら!…ってというかゴーシユじゃねえか!もう大丈夫なのか?」

「ホントだ!ゴーシユ、いつ来たの?」

ただでさえ混戦状態なのに、僕が来ているとなったら更に複雑になってしまっていると思ってたから、今までずっと念話が聞こえていても会話に参加していなかった。だから二人の反応も仕方ない。

「今来た所だよ。ナツさん、僕はもう大丈夫です!暴走する危険はなくなりました!」

「うん、ゴーシユはもう大丈夫!」

「そういえば…その馬って、パタモンだったよね?」

「馬って言うより、天馬…?」

「今はユニモンだよ、ハッピー」

よく考えたらユニモンやブラックテイルモンをちゃんと紹介していなかったつけ…この一件が終わったらやっておかなくちゃ。

「とにかく無事そうで何よりだ、ゴーシユ」

「うん、ありがとうリリー。で、あれってサミュエルってエクシードで良いんだよね?レギオン隊の」

「ああ、そうだ…奴は俺に任せてくれ」

リリーが一步前に出て、サミュエルの方へ向き直る。彼はサミュエルに対して怒っているようにも見えた。

「辿り着いた答えがそれか!命を奪う選択など、お前の中から消してやる!」

「兄さん、ハッピー…!」

「サミー…!?!」

リリーがサミュエルに突撃し、二人は何処かへと行ってしまおう…リリーはエドラスではエルザさんと同じ階級である魔戦部隊隊長だったんだ。エクシードで彼より強い者は限りなく少ないだろう。きつと、大丈夫だ。今はそれよりもやるべきことがある。

「ルーシイさん！聞こえますか！」

「ルーシイ、起きて！ねえ、ルーシイってば！」

大きな水晶の中に体を取り込まれ、右目にも何か紋様が浮かんで見えるようにも見える。確かマスター達の話じゃ、このままだとルーシイさんが無限時計と同化して…！

「涙…？」

「オイラ達の声、聞こえてるんだ！」

「ハッピー、ココ、離れてて。ナツさん！敵の相手は任せても良いですか!?!」

「おう、任せろ！」

二人を少し下がらせて、少し離れた場所にいるナツさんにそう聞いた後、僕はデジヴァイスを操作してドルガモンとブラックテイルモンをリアライズさせた。僕もここに来る前に気がついたんだけど、デジモン達は進化した状態でもデジヴァイスの中で待機出来るようだ。

「皆、攻撃体勢！」

「了解！」

「…ルーシイさん、ちよつと手荒になりますますが勘弁して下さいね。
ハンドレッド・トードキャスト

柱百烈拳!!」

「パワーメタル！」

「ホーリーショット！」

「ネコパンチ！」

「うわーっ!?!」

ルーシイさんの囚われている水晶を破壊する為、全力で攻撃する。しかし水晶は傷一つ出来ない。デジモン達の必殺技も合わせたのに…これは、多分力じゃどうにもならないな。やっぱり、何か別の方法を考えないと。

「ちよ、ちよつと貴方達！ルーシイハートファイリアに当たったらど

うするんですか!」

「え、ちよ…ちやんと当てないようにしてるって!」

何でココに怒られなければならぬんだろうか…そんなハマしないように細心の注意を払って攻撃していったっていうのに。

さて、マスターから秘策を貰ってはいるもの…今はまだ使えない。アレは無限時計が近くにならないと意味がなくなってしまふ。となれば…無限時計の所有者から所有権を消すしかない。

「ハツピーとココはルーシイさんを頼んだよ」

「ゴーシユはどうするのさ?」

「僕達はナツさんの加勢に行く。新生六魔將軍を全員倒せばルーシイさんが解放されるんでしょ?この水晶が破壊できないんじや、そうするしかないし」

ナツさんの方を見ると、あくまで戦っているのはイミテイシアだけでブレイン二世はただその戦いを傍観している。あくまで高みの見物を決め込むつもりか…確かに、イミテイシアがナツさんと互角以上に渡り合っているようだから自分が出て行く必要がないということかも知れないけど。

「ブラックテイルモン、イミテイシアの動きを止められる?」

「む、無理だよ!せめてこつちを見てくれないと…」

キャッツアイはブラックテイルモンの目を見ている者にしか効果がない。ネタがバレていけば簡単に対処されてしまうし、そもそもイミテイシアほどの実力者なら目が怪しく光る時点で何かあるって気がつくかも。

「やつぱりそうだよね…よし、だったら僕らはブレイン二世に仕掛けよう。散開してイミテイシアとブレイン二世が重なったら仕掛けて!」

「了解!」

ドルガモンとユニモンは広い空間を利用して空中で待機、ブラックテイルモンは先行して辺りに散らばっている瓦礫の影に隠れながら移動する。

狙いがバレないように、最初はイミテイシアに攻撃するように見せ

かける。ただ、あれだけ動き回っているイミテイシアとブレイン二世が攻撃の軌道上に重なるのは殆ど一瞬で、そこを狙っているのなら自分が狙いであるとブレイン二世に気づかれる可能性が高い。

だから、僕がイミテイシアを誘導することにした。

「ナツさん、離れて！柱ハンドレッド・トイテム百烈拳！」

「うおっ!？」

ナツさんが盾で攻撃されそうになった所を弾いて防ぎ、そのまま柱トイテムでイミテイシアを攻撃していく。イミテイシアはそれを全て躲しているが、作戦通りだ。イミテイシアが次々と襲いかかる僕の攻撃を避け続け、最後にイミテイシアがジャンプして躲すようにやや低めに少し大きめの柱トイテムを放つ。案の定、空中へと回避したイミテイシアの前には、ドルガモンとユニモンがいた。

「ホーリーショット！」

「パワーメタル！」

「はあっ!!」

イミテイシアは右手の剣でユニモンのホーリーショットを真っ二つに斬り、ドルガモンのパワーメタルは左手の盾で斜めに受け後方へと逸らす。

空中であれだけの動きが出来るとは…あれがいろいろな場面でドジをしていたミッシェルさんと同一人物なんて思えないな。あの茨で接続されていることで鞭のような攻撃ができる盾なら、空中で回避行動は出来ると思っていたんだけど、茨を使わなくても対処出来るとは思ってなかった。

「ぐあっ！」

「くっ！」

「ドルガモン、ユニモン！」

盾で迎撃された二体は落下を始めるが、地面に激突する直前に体勢を立て直し着地することが出来たようだ。これじゃ、イミテイシアに当たると見せかけるのは難しいかも知れないな…あ。

「ドルガモン、もう一発！」

「え、でも…」

「大丈夫！全力で頼むよ！」

「…分かった！」

ドルガモンはきつと、地上戦の方が得意なんだろう。必殺技のパワーメタルはドルモンの頃よりも倍くらいに大きくなった鉄球を飛ばす技だ。今まで空中で使って貰う事の方が多かったけど、その威力の高さ故かパワーメタルを使った後に空中でバク宙して反動を殺していた。つまり、地面に足をつけて支えることが出来れば反動を気にせずに全力を出せる！

「パワー…メタル!!」

「…！くっ！」

先程よりも高速で放たれた鉄球がイミテイシアを襲う。盾で後方に逸らそうとしたが上手くいかず、鉄球を逸らすと同時に盾を持った左手が弾かれてしまった。その隙を狙っていたのか、一瞬で距離を詰めたのはナツさんだった。

「火竜の鉄拳!!」

「ぐはっ!？」

ナツさんがイミテイシアを殴り飛ばすと同時に聞こえてきたのは、彼女の苦痛の声ではなかった。確かにイミテイシアに当たったのだが、彼女は何の声も上げずに壁に埋め込まれていた。では、今の声は誰の者か。

「よっー。」

「やったあ！」

奇襲が成功した僕は小さくガッツポーズし、イミテイシアによって逸らされた鉄球の先にいたブラックテイルモンがはしゃいで喜んでいる。

イミテイシアを追い詰めたように見えたが、僕らの狙いはずっとブレイン二世だった。ドルガモンがイミテイシアの盾を弾く程の威力を出せるとは思っていなかったし、そもそもあれはナツさんが上手くイミテイシアの隙を突いたのであって僕の考えていた作戦にはなかった嬉しい誤算だ。

イミテイシアによって弾かれた鉄球をブラックテイルモンが思いつき殴り飛ばし軌道を修正、それが丁度ブレイン二世の死角となっていた。

「ホーリーショット！」

この隙を逃すまいとユニモンがブレイン二世とイミテイシアにそれぞれ光球を放つが、ブレイン二世の屈折リフレクターによって軌道が変化し二つの光球は互いにぶつかり合い霧散してしまった。

「許さんぞ…蛆共！常闇奇想曲!!」

「防御結界・壁！」

前に見たブレインダークロンドの常闇回旋曲ディフェンドと似ているが…違う。ブレインあの攻撃は僕の防御結界でも防ぐことが出来ていた。でも、この攻撃はまるで意思を持ったように動き僕へと襲いかかり、結界で防いでもなお勢いは止まらずにいる。これは…回転しているのか？

「無駄だ…貫通性のこの攻撃はその程度の防御では防げん」

「くっ…ぐあっ！」

「ゴーシュっ！」

結界が破られ攻撃を腹に受けてしまった僕は吹っ飛ばされ、ドルガモンに受け止められようやく勢いを殺せた。貫通性というだけあって、腹が抉られたように痛い…何度も食らったら持たない。

「ゴーシュ、無事か！」

「大丈夫です…！」

ナツさんもイミテイシアが復活していたようで攻撃されていたようだ。ブラックテイルモンとユニモンも僕の元へと戻ってくる。

「哀れな傀儡が…どうやってアレを制御した？」

「答える必要はないし…僕は傀儡なんかじゃない。心も、記憶も、感情も、僕が生きている証。ちゃんと生きているんだ！」

「造られた存在でありながら、傀儡ではないと？」

「ゴーシユ君が…造られた？」

イミテイシアが、この戦闘中に初めて動揺したような瞳で僕を見た。そこには何か迷いのようなものがあるような気がして…ちゃんと話しておかなきゃいけないと思った。別に隠すことでもないから、少し説明口調になりながら僕は語る。悪魔グリモアの心臓アハートのマスター・ハデスによって生み出された存在であること、ダフネに取引で引き渡され実験のようなことをされていただろうこと、それでもウエンデイ…多くの仲間、大切な人達と出会って今があるってことを。

「造られたとしても、元々生きていない存在だったとしても…こうして魂を持っているんだから、それはもう傀儡でも何でもない。生きているのは同じなんだから」

「生きているのと…同じ……」

「下らん」

「…！」

「所詮は戯れ言に過ぎん。貴様が語る事も、そういう風に造られたからだ。本物の魂があるなど、証明の仕様がなない」

「——ゴチャゴチャうるせえよ」

「…何？」

「ゴーシユは俺達の家族だ。ルーシイも、グレイも、エルザも、ギルドの奴らは皆家族なんだよ…元々生きてねえだとか、そんなことは関係ねえ！ゴーシユは俺達と同じ“人間”だ!!」

「ナツさん…」

『皆、聞いてくれ!』

その時、ウォーレンさんの念話が頭の中に響いてきた。ココも反応したことから、どうやらギルドのメンバーだけでなくレギオン隊やゼントピアの人達にも繋がっているらしい。

『皆、いいか！ルーシイと無限時計の融合を遅らせる方法があるんだ！大司教に説明してもらおうから聞いてくれ!』

「大司教様…?」

確かここに来るまでの念話で聞いた限りだと、大司教の所にウエンデイとウォーレンさんが残っているはず。そっちで何か進展があったのか？

『贅となる星霊魔導士と融合するには、時間をかけた精神嵌合とその者の持つ時間の感覚…つまり、記憶と一体化させねばなりません。その為に無限城から地上に打ち下ろされた鎖は、リアルナイトメアを伝播させると同時に地上の魔力とあらゆる記憶を取り込むのです』

『つまり、こいつを断ち切ればいくらか時間が稼げるってわけだ！バイロとゼントピアの僧兵達も向かった！皆、鎖をぶっ壊せ!!』

無限城から無数に地上へと伸びていたあの巨大な鎖が、そんな役割を持つていたのか…だったら、出来るだけそっちに戦力を行かせた方が良いか。

「へへ、まだチャンスは残ってたみたいだな!」

「薄い望みだ…やれるものならやってみろ」

「よーし、ゴーシユ。お前は鎖の方に行ってくれ」

「え、でもナツさん一人じゃ…」

「心配ねえ！俺も燃えてきた所だ!!」

「貴様らに選択肢などない。傀儡よ、貴様は逃がさんぞ…!」
「ぐっ…!?!」

ブレイン二世が僕の衣服をねじ曲げ、締めつけて拘束する。しまった、油断した…でも、確か屈折リフレクターは一カ所にしか使えないって前にエルザさんから聞いたっけ。今も二カ所以上同時に使うのは見ていない。皆は、鎖の破壊に、行って!」

「何言ってるの!ゴージュも一緒に連れてくよ!」
「待って、ブラックテイルモン。指示に従った方が良い」

僕の後ろにいるデジモン達だけなら、さつきサミュエルが開けた穴から外に出られる。逆に僕を助けようと近づいたら敵に迎撃され戦闘不能になってしまうかもしれない。デジモン達は攻撃を受ければ受ける程、粒子化が起こりやすいんだから。

ユニモン…パタモンは三体の中では一番頭が回る。普段のんびりし過ぎているから分かりづらいが、進化すると精神的にも成長するかそういう面が現れやすいのだと思う。他の二体もユニモンが言ったことが正しいのは分かっているんだろうけど、すぐには動いてくれなかった。

「僕は、後から…合流するから!ルーシイさんを助ける為に、急いで!」

「…了解!」

「絶対、後から来てよ!」

ブラックテイルモンがユニモンの背中に乗り、ドルガモンとユニモンが外へと向かう。

「言っただろう、貴様らに選択肢など与えん!」

「防御結界…壁!」

ブレイン二世の常闇回旋曲ダークロンドがデジモン達に襲いかかるが、僕の結界で何とか防ぐ。その間にデジモン達は穴を通り脱出していった。

「チツ…まあ良い。薄い望みであることには変わらん」

「…警告」

「ルーシイさん…?」

「刻印が一つ解放された。残るは二つ」

「やったあ!」

「コブラ様が!?そんなあ…」

ルーシイさんの言葉にハッピーとココが喜びを露わにし、ブレイン二世の持つ杖・クロドアが信じられないとばかりに頭を垂れた。

「よし、後は俺がお前らをぶっ倒せばいいだけだ!」

「…ホント、しぶとい男。でも、単なる時間稼ぎよ…大局に置いては影響なんてない」

「父上がやり残したこと…形ある物全ての破壊、そして無と混乱をもたらすこと。七年前のようにはいかん。今度こそ邪魔はさせんよ、ナツ!! ドラグニル」

その直後、僕は常闇奇想曲を食らって吹っ飛ばされ、ブレイン二世は屈折^{リフレクター}を解除。今度はナツさんの周囲の空間に発動させ、ナツさんもまた僕の方へと吹っ飛ばされてしまった。

「ゴーシユ! ナツ!」

「二つ教えてやろう。お前たちが救おうとしている星霊魔導士の小娘…あれを救うことは最早叶わぬ」

「…!」

「百年の眠りなど生易しいもの…ルーシイ!! ハートフィリアは無限時計と一体化し、その際に心も肉体も失うのだ。完全に時計の部品となって、人々の記憶からも消去される…その存在はこの世から消滅される」

…マスター達から聞いた話では、ルーシイさんが無限時計に取り込まれたら、百年間眠ってしまうって聞いたけど…それも間違っていたということか。

ルーシイさんが…いなくなる。元々いなかった存在として、消える。それがどれだけ残酷で非道なことか。七年間の凍結封印から解除された僕らは知っている。人が元々いなかったことになったら、何が足りないような虚無感がずっと続くことも…知っている。ほんの少しの間ではあつたけれど、透明人間になってしまふ一件ではそうだった。

「……………え？」

僕達が内心驚愕している中、イミテイシアもまた驚いたような顔を浮かべていた。

「な、に……………姉さんは…私と、一緒に……………」

「お前と離れることはないぞ？ただの『道具』になるから好きなのだ。傍にいればいい。良かったじゃないか、お前のような『モノ』にも、丁度似つかわしい相手だろ？」

「……………ちが、う……………違う……………！私の望みは……………私の祈りは……………そんなことじゃない!!」

絶望しきったような顔で右手に持っていた剣を落とし、イミテイシアは盾をハッピー達の前……………もう殆ど取り込まれてしまっているルーシイさんの傍へと投げ、茨を使って移動する。

「姉さんっ!!」

「何をする気ですか!」

「来るなーっ!」

「どけっ!!!」

ココとハッピーを一瞬で蹴飛ばし、すぐさまルーシイさんの方へと振り返るイミテイシア。そして盾を振り回し――

「姉さんっ……私!!」

――ルーシイさんの囚われている水晶へと攻撃を始めた。その瞳に、大粒の涙を浮かべながら。まるで、ルーシイさんを助け出そうとしているかのように。

「ごめんなさいっ……ごめんなさいっ!!わた、し……っ!!」

彼女は懺悔しているようにも見えた……その涙が本物であることも、理解できた。ギルドでの振る舞いも、僕達との時間も、彼女の名前すらも……僕は騙されていたけれど。今彼女が流している涙は心から流しているものだ、僕は感じた。

「アララ、こりゃ駄目ですな〜」

「下らん…イミテイシア、お前の役目は終わった！ゴミに戻れ!!」

「っ!!姉き、ん——」

イミテイシア——ミツシエルさんが何かの魔法をブレイン二世にかけられ、後ろ向きに倒れる。彼女の体は光に包まれ、その光は少しずつ小さくなっていく。そうして僕らの所まで転がってきたのは、少し汚れてしまった、女の子の姿をした人形だった。

「ミツシエル…さん……っ」

ふと、ルーシイさんの方を見る。もう自力で喋ることすら不可能な程に無限時計と一体化してしまっている彼女の両目から流れる涙は、止まる気配がない。ルーシイさんの悲しみが…伝わって来る。

ミツシエルさんだった人形を、ブレイン二世が強く踏みつける。コイツ…!

「ふん、哀れな小汚い人形めが」

「お止め下さい、お靴が汚れます…なあゝんて」

「いの…!!」

「ナツ兄————っ!!!」

いつから起きていたのか、ロメオはナツさんへと向けて特大の炎を投げつけた。彼の炎を食らったナツさんは、全力で駆け出す。

「来い——っ!?!」

ブレイン二世は顔面にナツさんの鉄拳を受けた。

「人が悲しむのをそんなに笑えるのか、お前は…だったら、笑えなくなるまで…ぶん殴ってやる!!!」

ついに、無限時計を巡る最後の戦いの火蓋が…切って落とされた。

第71話 呪いの解放

僕は痛みには耐えながら少しずつ、すぐ傍に転がってきたミツシエルさんだった人形を拾う為に這うようにして動いていた。ロメオやエルフマンさんもナツさんに加勢しようとしていたが、クロドアによってそれは阻まれてしまう。でも、それで良いんだ…ナツさんなら、あんな奴に負けるはずがない。

僕も最初は加勢するつもりでいたけれど、ふとミツシエルさんが目に入ったら…戦うよりも、彼女を守る為に動いていたんだ。

ようやく人形を回収したその時…後ろから、凄まじい魔力を感じた。振り向くと、ブレイン二世の異様な魔力が急激に高まり、彼の両手に集まり続けていた。その魔力はまるで、人の怨念が具現化されているかのような…そんな異様さを帯びていた。

「ジェネシス・ゼロ!!開け、被告の門!!」

「な…!?!」

「無の旅人よ、その者の魂を、記憶を!存在を食い尽くせ!!消えろ…ゼロの名の元に!」

「ぐあああぁっ!!?!」

「ナツさん!!」

ブレイン二世の魔法が発動され、ナツさんがその魔法に飲み込まれていく。やがて姿が見えなくなってしまう…その魔力がどんどん収縮していく。

このままじゃ、ナツさんが消えてしまう…?」

「仲の良いことだ。貴様は闇の中に囚われ、小娘は出口のない時間の中に…か」

「ナツさんを…返せ!!」

僕は、柱トータルを出るだけ大量に作り、それをガトリングのように連続で、高速でブレイン二世へと射出する。あれだけの魔力を使うには、相当な集中力を必要とする。僕の攻撃に意識を向けてくれれば、ナツさんを包んだあの魔法に綻びが生じて脱出出来るかもしれない。

「無駄だ」

「…!」

まだジェネシス・ゼロとやらの魔法が発動しているのに、僕の攻撃は屈折リフレクターによって全てねじ曲げられてしまう。

「まだ…:…:まだまだ!!」

一度攻撃に利用した柱トータルの軌道进行操作し、連続でブレイン二世へと攻撃を続ける。何度も、何度も、何度も。絶対に、攻撃を止めたりなんかしない。

「諦める。貴様の攻撃が当たることなどあり得ない」

そんなの…! そんなこと、お前に決められてたまるか…っ!!

「絶対…諦めたりするもんか…:はあっ!!」

「!」

もつと、数を増やすんだ。細くても、小さくても良い…:攻撃の手数を、もつと増やし続けるんだ…!!

今まで使っていた大量の柱トータルを消し、以前天狼島でラストイローズと戦った時のように防御結界ディフェンド・立方スクエアを小さく作り続ける。やがて、僕の視界が覆われる程にまで増やした後、ブレイン二世への攻撃を再開し

た。

「どれだけねじ曲げられようと、構わない…お前のその魔力がなくなるまで、攻撃し続けてやる！」

「チツ…ゴミ如きが」

出来るだけ全方位から攻撃するように操作し続ける。ブレイン二世も僕のいる方向へとねじ曲げたりするけれど、それらは他の立方をぶつけて逸らして再度攻撃に利用する。

しかし、この攻撃が長時間続かないことも理解していた。実はまだ魔力には余裕があるのだけれど、これだけの数を全てコントロールし続けられるだけの集中力が持たない。本当にギリギリな状態。もし今他の敵に攻撃されでもすれば、僕は防ぐことも出来ずに食らってしまうだろう。

そして、その瞬間は訪れた。

『ミッシェルに謝りなさいよ…ナツを返してよーっ!!!』

あまりの眩しさに、目を細める。この光は…ルーシイさんが捕らえられていた場所から？

「今のは…！」

「ルーシイの声…？」

「なんだ、これは…!？」

…ブレイン二世の様子がおかしい。急に狼狽え始め、その瞳には恐怖のようなものが宿っているようにも見える。

「まさか、ルーシイさんが…?」

「…兄貴、離れるツス!!」

イーロンの声に反応し、僕は咄嗟にブレイン二世から距離をとる。その時…ナツさんが飲み込まれた魔力の塊の中から、何かが嘖き出しているのが見えた。

「うおおおっ!!聞こえたぞ、ルーシイ!!」

やがてその空間に罅が入り、炎と共にナツさんが現れる。その勢いのまま、リアルナイトメアに囚われているブレイン二世へと渾身の一撃を叩き込んだ。

「大丈夫ツスカ、兄貴!」

「うん…声かけてくれて助かったよ、イーロン」

「…!はいツス!」

イーロンが声をかけてくれなかったら、ナツさんの攻撃に巻き込まれていたかもしれない…あの光で一瞬集中が切れたから聞こえただろうけど。っていうかナツさん、あの魔法からどうやって抜け出したんだ…?魔法自体を焼いたようにも見えた気がするけど…

「くっ…」

「兄貴、本当に大丈夫ツスカ!?!」

「だ、大丈夫…少しフラついただけ」

なんか、頭が重い。少し無茶し過ぎたのかな…?戦っている最中は何ともなかったんだけど。

「そうだ、ナツさん…!」

「今は休んどけ、ゴーシユ。後は任せろ!」

「…分かりました。頼みましたよ!」

「おう!」

…どうやらあの魔法に飲み込まれた影響とかはなさそうだ。こんなフラフラな状態じゃ足手まといになるのは確実だし、ナツさんに任せよう。というか、何かナツさんから一対一で戦いたいって感じの

オーラ？が見える気がする。

「で？何の話だったっけなあ…：そうそう、犠牲を払って魔力を高めただのどうのって話だ。魔力を高めてもあれかよ？」

「…：魔法は心だと言う。捨てる想いが大きければ大きいほど、得る力は強大だ」

「あん？」

「…人はいつか会えると思うからこそ、その者を想う！その思い、可能性を自ら断ち切り！犠牲にする程辛いものはない!!」

ブレイン二世は急に何の話をしているんだ…？ブレイン二世には、会いたいと想っていた人がいて…それを犠牲にして魔力を高めたってこと？会いたい想いを犠牲にするって…：どういうことだ？

「あー、そうかい…：それでお前は何を犠牲にしたっつうんだよ？」

「未来…：私が父上と再会する未来」

「これから起きるかもしれないことを起きないことにして力を得る…：つてこと？」

「前倒しな後ろ向き思考…：器用だね」

「なんだそりや…：意味分かんねえし。父ちゃんに会いてえなら会えばいいじゃねえかよ」

「私と父上を引き裂いたのは貴様らだ…：忘れたとは言わさんぞ」

「逆恨みかよ…：だからってルーシーを泣かすことねえだろ、まどろっこしいことしやがる。未来を犠牲だあ？まだ起きてねえことダシに大層なこと語りやがる…：気に入らねえんだよ!!」

ナツさんとブレイン二世が、拳に魔力を溜めぶつけ合う。

しばらく拮抗していた二人だが…：やがてブレイン二世の体に罅のような傷が腕から全身へと広がっていった。

「…：あり得ん…：私が、押されている!？」

「お前が父ちゃんを想うってこと、そこだけは俺にも分かる。でもよ、想いの力つてのは捨てて得るもんじゃねえだろうが！自分のどこか

に刻んで得るモンだ!!」

「違う…！捨ててこそ、失ってこそその大きさが輝くのだ！」

「この…！オラアッ!!」

ナツさんがブレイン二世へと掴みかかるが、ブレイン二世はナツさんを横に投げることで何とか躲す。しかし、明らかにブレイン二世の魔力が衰え始めていた。見たところ、あの体の罅からドス黒い魔力が流れている。多分、“力”を失い始めているんだと思う。

「ブレイン二世…貴方は、どうしてブレインに会いたいんですか？」

「何…?」

「あんな、仲間や家族すらも平気で切り捨てるような男だ…もし僕だったら、そんな奴に会いたいなんて思いません。それに、貴方だって脱獄した時にブレインを解放していないじゃないですか…本当は、貴方も——」

「黙れ!!傀儡如きが、分かったような口を利くな!!私は、未来を捨てた…父上と出会う未来を犠牲にしてこの力を得たのだ!!」

そう言いながらも、ブレイン二世は狼狽えている…駄目だ、こつちの言うことに耳を貸してくれない。まるで、本当のことに気づきたくないような…目を背けているようにも思える。

「何でもかんでも曲げやがって…ものの見方も感じ方も、ひん曲がってんだよお前は!そんなだから、過去にも未来にも…自分の心にも!真っ直ぐ向き合えねえんだあ!!」

ナツさんの言葉にも、ブレイン二世は大きく動揺している。そのせいか攻撃を連続でまともに食らってしまい、壁へと叩きつけられてしまう。

「くっ…私が、父上と向き合っていないだと…!?!」

「ルーシイは父ちゃんに、ミツシエルはルーシイに、真っ向からぶつかっていったんだ…お前にそれを笑う資格なんかねえ! 想いの力で、端っから負けてんだお前はっ!!」

ナツさんがブレイン二世を殴り飛ばし…それによって壁に出来た穴から、ブレイン二世は勢いのまま落下していった。

ブレイン二世…いや、六魔達は皆エルザさんと同じように楽園の塔に奴隷として働かされていたんだっけ。きつとその過去のせいで歪んでしまったんだ。言ってしまうえば、彼らも被害者のようなもの、か。ブレイン二世はそれが顕著だったということだろう。今までの悪行が消えることはないけれど…いつか、罪を償い終わったその時に、ちゃんと面と向かって話し合えると良いな。

「最後の一人を倒した!」

「ルーシイは?!」

そうだ…これで新生六魔^{オラシオンセイイス}将軍は全て倒した。これで無限時計に刻まれていた刻印は全て解除され、ルーシイさんも解放される…はずだった。

「そんな…!?!」

「どうしよう…遅かったんだ。ルーシイがいなくなっちゃった…!」

「何でだよ! 俺達は刻印を解除したぞ!! ルーシイを返せ!! 誰か答えろーっ!!」

ナツさんの叫びが無限城に響き渡る。さつきまで戦闘が繰り広げ

ていたのに、今は閑散としていて…虚しさだけがこの場に残っていた。

『え…？何それ…あたしがいなくなっちゃったって何？ちよつとちよつと！まさかこれって…イヤな予感が…!?!』

「何だ!?!」

「ルーシイ姉の声だ…」

「そこら中ルーシイの匂いがすんぞー!」

いや、ナツさん。その発言は色々まずい。今は普段ツツコむ本人が大変なことになってるしそれどころじゃないし、ナツさんも変な意味で言ったわけではないだろうけど。

多分これは念話とかじゃない…マイクか何かで声が響いているような感じ。きつと、さっきの戦闘でルーシイさんが無限時計を利用してリアルナイトメアをブレイン二世にかけたから、それで取り込まれるのが早くなつたんだ。っていうかルーシイさん、シヨックすぎるのかハッピーの餌になるとか言ってるし…さすがに不憫すぎる。

「ウォーレンさん、聞こえますか」

『ゴーシユか!?!お前、いつの間に…』

あ、そつか…念話では話さないようにしていたから、僕はギルドにいるものだと思われているんだっけ。

『ゴーシユがいるんですか!?!』

『ちよつとアンタ!何やってるのよ!』

『結構無茶するよな、お前…』

『ゴーシユ、もう大丈夫なのか?』

無限城にいるメンバー全員から心配されてしまった…グレイさんの一言にはあまり納得出来ないけどね。別に無茶はしてない…ただ最善を尽くそうとしているだけで。

「え、えつと…今まで喋ってなかったのはすみません。念話自体は聞こえていたんですけど、余計な混乱は避けようと思って参加していませんでした。で、ギルドに連絡とってもらえませんか?無限時計に

ついで何か分かったこととか聞けるかもしれない」

『そうなんだよ！さつきギルドから連絡あったんだ！皆も聞いてくれ！ジャンリユック達がルーシイを助ける別の方法を見つけたんだ！』

「ジャンリユック？」

「実は実はの人だよ」

説明によると、刻印の解除が間に合わなくて融合してしまった場合、ルーシイさんが無限時計で生態リンクとなっていたウィル||ネビルの弟子の子孫である星霊魔導士達にリアルナイトメアをかけ、蛹のようになっている彼らの呪いを解けばいいらしい。無限時計は星霊魔導士達から吸収した魔力で、無限城として顕現しているらしく、彼らが解放されれば無限時計はまた部品となつてバラバラに何処かへと飛んでいくらしい。

『それって…』

『おい、ちよつと待てよ！』

『ルーシイはどうなるのだ？』

『融合から解放されることは判明しているのですが…』

『下手したら、部品ごとどつかに飛んで行っちゃうのか…』

『そんな…』

「他になんかねえのかよ！」

…僕が無限城全体を結界で覆うことが出来れば…いや、無限城は天狼島よりも遥かに広い。こんな馬鹿デカイ物を囲むなんて、皆の魔力を借りたとしても無理か…

『…やってみる！』

…え？いや、もうちよつと考えてからでも…さすがに即決過ぎません？

「正気ツスカ!？」

『それで大勢の人達が、百年分の眠りから解放されるんだよね？何処かに飛んで行っちゃうかも、なんて…その程度のリスク！あたしは妖精の尻尾の魔導士だもん！ジュードとレイラの娘だもん！…ミツシエルのお姉さんだもん!!やってみせる!!』

ルーシイさんが意識を集中させ始め、無限城全体が先程のように光

を放ち始める。あそこまで言われたら、反対なんて出来ないよね。

：あれ、ルーシイさんがリアルナイトメアを成功させたら、無限時計がバラバラに飛んでいくんだから…ここにいたら不味い？

『総員、撤退するぞ！ルーシイ搜索の準備を急げ！』

「やっぱり…」

「けど、脱出つつつてもどうすんだ!?クリスティーナは墮とされたんだぞー!」

「とりあえず早く出るぞ！急がねえとルーシイがつ…!?!」

「ナツ兄!?!」

ナツさんの頭上から降ってきた瓦礫がヒットし、ナツさんは目を回して気絶してしまった。こんなタイミングで落ちてこなくても良いのに…

『妖精の尻尾の諸君!聞こえるか!?!』

『その声は、一夜か!』

『無事だったんですね!』

『カナロア君と友情の香りバルファムを結び、先程の突入口に待機している!全員速やかに脱出したまえ!』

ここから一直線に脱出すれば、そう時間はかからないはずだ。そうと決まれば、急がないと!

「エルフマンさん、ナツさんを!」

「おう、任せとけ!」

「皆は先に脱出して下さい!僕は——」

「おーい!」

どうやらデジモン達が良いタイミングで帰ってきてくれたようだ。ルーシイさんが何処に飛んでいくのが分からない以上、空で待機していた方が見つけやすい。

「兄貴!」

「イーロン、ドルガモンに乗って!空から探せば早く見つけられるはずだ!」

「了解ッス!」

「ゴーシユ兄、俺も!」

「ロメオとココはエルフマンさんと行って。可能性は低いけど、手負いでも六魔が襲ってくるかもしれない」

「わ、分かりました！」

「…分かった。イーロン、しっかりやれよ！」

「任せるツス！」

僕とイーロンはユニモンとドルガモンの背中に乗り、ブラックティルモンは念のためロメオ達について行かせることにした。皆が入り口へと駆け出したのを確認した後、僕らは上の勝手口から一足先に脱出する。

「イーロン達は向こう側へ！」

「了解ツス！」

「ユニモン、僕らはもう少し上へ行こう！」

「分かった！」

こうして改めて見ると、この無限城は異常なほどデカイ。さっきまで戦っていた場所から既にかなり高度を上げていると思うんだけど、それでも無限城全体を見渡すことは出来ない。まあ、イーロン達もいるんだから半分ずつくらいを見渡せば良い。

「ゴーシュ、無限城が…！」

「始まった…！」

そしてついに星霊魔導士達の呪いを全て解除することが出来たのか、無限城全体が光り始める。次の瞬間、光が弾け…まるで流星群のように夜空を光が駆ける。

想像はしていたけど、やっぱり空を覆い尽くす程の範囲だ…この中からルーシイさんを見つけ出すのは至難だぞ…。っていうか、ちよつと高度上げすぎたかな…たまに横を光の塊が通り過ぎるんだけど、当たっても大丈夫…だよな？

「ウォーレンさん！皆は脱出出来ましたか？」

『こっちは問題ねえ！全員無事だ！ロメオ達から話は聞いた、空から探索頼むぞ！』

「はー！」

弾性結界を壁みたいに展開すればルーシイさんが当たっても大丈夫

夫なんだけど…今の僕は防御結界ディフェンドしか使えない。頑張つて目で探すしかないか。

☆

かれこれ十分くらいになるだろうか…全然見つけることは出来ない。流星群のような光は消えないし、あちこち飛び回っているのに…光の塊にぶつかってしまふかもしれないから高度を下げてしまったが、これほど見つからないとなると危険を承知で探す必要があるかもしれない。

「ゴーシュ！」

「見つけた!？」

「いや、そうじゃなくて…」

「なんだ…すっかり探してよ、早く見つけないとルーシイさんが——」

「下でタコみたいなのが飛び跳ねただけど」

「…え？」

ユニモンの一言に理解が一瞬追いつかず、つい下を確認する。確かに赤い巨大なタコが空中にいるのを発見した。あれって確かレギオン隊のタコ…さっきの念話の通りなら、あれの上にナツさん達がいるはずだ。

「何処に向かつてるんだろう…」

タコの背中には、数人の人影がいる。そしてあのタコはある方向へと一直線に向かっていた。その先に、他の光とは少し違う光が見えた。

「ユニモン、あのタコの行き先に！」

「了解！」

それをルーシイさんと確信し、その光へと突撃するように飛行する。それはつまり、無限城があったのと反対側へと進むということ。そのせいか、僕らは気づくことが出来なかった。背後から光の塊が高速で迫ってきているのを。

「っ！ユニ——」

最後まで言い切ることは出来ず、次の瞬間僕は空へと放り出された。光の塊が僕に直撃しそうになり、何とか躲すことには成功した。しかし、癖で結界を使って防ごうとしたからしつかりユニモンに掴まっていなかったのでバランスを崩し、そのまま落下した…ヤバイ。やらかした。

「しまった…!? ゴーシュっ！」

ユニモンも自分のすぐ上を光の塊が通ったこと、そして僕が乗っていた感覚がなくなっただけでこちらへ向かおうとするが、ユニモンはさっきまで高速で飛行していた。そして急ブレーキをかけて止まっていたから、今からでは僕の元まで辿り着くにはギリギリ間に合わない。下を確認したけど、僕の落下先が標高のある岩山の上だし。

でも、今から防^{ディフェン}御結界を上手く使ってそれを足場に連続でジャンプすれば…!

しかし、ここで予想外の事態が起こった。

「…っ!?」

落下中の僕に、またしても光の塊が迫ってきていたのか…僕の視界は光で埋め尽くされた。

第72話 笑顔のまま

新生六魔将軍全員が無事評議員の検束部隊によって捕らえられた。無限時計は散り散りとなり、ルーシイさんも無事に発見されギルドへと帰ってくる事が出来た。今回の一件がどういいうわけか、妖精の尻尾が原因とされている噂も既に流れているようだけど、まあよしとしよう。

そして今現在、四代目と四代目補佐の二人がゼントピアで大司教様からのありがたいお言葉を頂いているであろう頃。

「ここに我らレギオン隊…妖精の尻尾フェアリーテイルに対して、深く謝罪する次第です」

「いずれにせよ危機は去った。頭を上げられよ。争ったとは言え、過ぎてしまえばそれはそれ…もう良いではありませんか」

「感謝の念に堪えません」

てつきりレギオン隊はそっちに行っていると思っていたんだけど、こうして僕らのギルドへと訪れていた。レギオン隊もただ騙されていただけだし、マスターの言う通りだと思う。

「ゴーシュよ、あの子を連れてきてくれい」

「あ、はいー！」

マスターにそう言われて、僕は一度ギルドの外へ出る。レギオン隊が来た時に連れてくる準備をするように元々言われていたから、彼女にはもう既にギルドの裏でイーロンと待機して貰っている。後は合図して入って貰うだけだ。

「マスター、あの子って？」

「今に分かるわい。さあ、改めて紹介するでしょう」

マスターの一言の後、僕とイーロンが彼女と一緒にギルドの中に入る。

「え……？」

「今日からギルドの魔導士となった、ミツシエルじゃ」

☆

彼女がギルドの一員となった経緯。それはルーシイさんが無限時計から解放されたあの夜に遡る。

ユニモンから落ちた僕は岩山へと激突する直前、光に包まれた。でもそれは無限時計から放たれた光の塊ではなくて、僕の腕の中から放たれていた光だった。光はやがて人の大きさになり、僕を横抱きにして地面へと着地した。

「ミツシエル……さん？」

「ゴーシユ君……わ、たし」

その時はミツシエルさんにも何が起こったのか分からない様子だった。それによく見ると服装も違う。さっきまでの黒い花のような戦闘服でも、僕らと一緒にいた時に着ていたピンク色のドレスでもなく……人形が着ていた、青と白を基調とした服だった。それに少し、幼くなったようにも見える。僕よりは年上だろうけど、多分ルーシイさん達よりは年下っぽい感じ。

「ゴーシユ!!」

「ユニモン！大丈夫、僕は無事だよ。それより……」

「なぜ、またパペットの魔法が……？」

そう、ミツシエルさんは僕がずっと抱えていた人形。ブレイン二世の物に魔力を与えて心を宿す魔法で、ミツシエルⅡロブスターとして行動していた。ブレイン二世によってその魔法は解除され、人形に戻ってしまった。よく思い出してみると、ミツシエルさんがイミテイシアとして戦っていた時に持っていたあの盾。あれの中央にあった六魔の刻印が刻まれていた。

と、そこまで思い出して僕はあることに気がついた。マスターから託されていた、秘策のことを。そして僕は再度、ミッシェルさんのことを観察する。そして胸元にある宝石のような飾りに、妖精の尻尾のギルドマークが刻まれていることに気がついた。

「…多分、僕がマスターから託された魔法のせいです」

「どういうこと…?」

「無限時計に刻まれた六魔の刻印を上書きすれば、無限時計の所有権を取り返すことができるんじゃないかって思って、マスターに相談してみたんです。で、僕のギルドマークを無限時計の部品のどれかに当てれば上書きできるようになっていたんですが、結局使わずじまいで…」

「それが私に、刻まれた…」

「パペットの魔法も、六魔の刻印が魔力源となっていたんじゃないですか? パペットの魔法が解除されて間もない今、不完全だけどこうして発動できたんだと思います」

無限時計、結局どこにあつたのか分からなかったし…そもそも、無限城に突入してすぐに戦闘が始まってしまったから探す余裕もなかったんだけど。まさかこの時になって発動するとは思ってなかった僕は啞然としてしまった。

「とにかく、ミッシェルさん…ありがとうございます、助けてくれて」
「そんな…お礼を言わないといけないのは、寧ろ私の方よ。またこうして、自由に動けるようになるなんて、思っても見なかったし…」
「…ミッシェルさん、ギルドに戻ってくるんですよね?」

六魔は既に壊滅、無限時計も何処かへ飛んでいった。ミッシェルさんを縛るものはもう何もない。ミッシェルさんもただルーシイさんと一緒にいたかっただけだ。だったら、また前みたいにギルドにいても問題ない。

しかし、ミッシェルさんの表情は優れない。その表情からは、後悔が感じられた。

「それは…無理よ。私は彼らに手を貸してしまった。騙されていたとはいえ、犯罪を犯してしまったの。これ以上ギルドにいたら、迷惑を

かけてしまうわ」

後ろめたい気持ちで一杯なんだろう。その気持ちは僕も何となく分かる。

「大丈夫ですよ」

「え…?」

「僕らのギルド、元々問題行動ばかりで…評議員に目の敵にされるのは今更です。それにミツシエルさんは犯罪を犯したって言うけれど、教会破壊には直接は関わってないじゃないですか。今回の一件で、ミツシエルさんが新生六魔^{オラシオンセイブス}將軍のメンバーだってことは僕らとレギオン隊とかのゼントピアの極一部の人達くらいです」

「それでも、姉さんを…ギルドの皆を裏切ったことには変わりないわ」

「元々敵対していたガジルさんとかジユビアさんもギルドに入れたんだから関係無いです。騙されていたのもあるんだから、二人の時よりも受け入れられやすいですよ、きつと」

「私は…人間ではないわ」

「僕らみたいな得体の知れない存在でもギルドに入れてくれるから、気にしなくて良いよ」

いつの間にか退化していたパタモンが、ミツシエルさんにそう言うてくれた。ずっと僕らの会話を黙って聞いてくれてたし、ここぞというタイミングでこんなことを言うてくれる…さすが、僕のパートナーの中で一番空気が読める子。見習わないといけないかも。

「…ほん、とうに……良いの?」

「ハア…ま、とにかく帰りましょう。ギルドの皆がいる時に紹介すれば、杞憂だったって分かりますから。それまでは僕の家にて下さい。いいですね？」

「わ、分かったわ」

ルーシイさんはナツさんが猛スピードで走っていたから大丈夫だろうと考え、僕らは一足先にギルドへ戻ることにした。

☆

「——僕からは以上です」

一通り事の顛末を話し終え、皆の反応を観察する。ギルドの皆はそれほどでもないけれど、問題はレギオン隊の面々かな。特にバイロさんがヤバい。何というか、オーラが。

「マカロフ殿、これはどういうことでしょうか」

「そのまんまじゃ。ミツシエルをギルドのメンバーとして迎える」

「此奴は新生六魔^{オラシオンセイイス}将軍！何をしでかすか分かったものでは…！」

「僕がマスターに頼んだんです。ミツシエルさんはただ騙されていただけで——」

「騙されていたからと言って無罪とは言えないのでは？」

…どうしよう。口じゃ勝てない気がする。っていうかもう、怒りますって感じがビシビシと伝わってくる。

「バイロ様、落ち着いて下さい！」

「そうそう、子供をビビらせちゃ駄目じゃん？」

「む…しかしこれではギルドにとって問題となるでしょう」

ココとヒューズがそう言って止めに入ってくれたおかげで、少しだけバイロさんからの怒りオーラが引っ込んだ。

「ギルドの評判がどうというのは気にせんで？昔から評議員の目の上の瘤なのは変わらん」

「ギルドマスターがそう言ってるんだから良いんじゃない？これはギ

ルドの人達が考えることだよ」

「えつと…サミュエルの言う通りです。それより一番話したいのは…」

この場にいる全員が視線を一カ所に集める。視線の先にいるルーシイさんは少し困惑しているようだ。

「皆…いいの？」

「そりやそーだろ。ミツシエルはお前の妹だし」

「そういうこつた」

「ミツシエルのことは、お前が一番良く分かっているだろう？お前が決めたことに私達は従おう。構いませんか、マスター？」

「うむー最初からそのつもりじゃ」

「…ありがとう、皆」

ルーシイさんはミツシエルさんの元へとゆつくりと歩き出す。

「ミツシエル…」

「姉、さん…わ、私…！姉さんに、皆に酷いことを…もう、許してもらえないって…それで…もう、姉さんと一緒には……っ！」

ルーシイさんがミツシエルさんを優しく抱きしめる。

「大丈夫だよ…誰も怒ったりなんかしてない。あたしも…また、ミツシエルと会えて、本当に嬉しい…！」

「ねえ、さき……っ」

「ねえ、ミツシエル…これからはずっと、傍にいてくれるよね？」

「……うん、うん…！ねえさん…ありがとうっ…!!」

こうして今回の騒動が解決した記念のパーティーは、僕らにとってはルーシイさんに妹が出来た記念パーティーとなった。

☆

その後は大食い競争とか決闘とか色々あったけど、それぞれ楽しい時間を過ごしていた。僕はヒューズさんやシユガーボーイさんからこの前のことを謝られたり、大食い競走で食べ残った肉を食べながら過ごしたりした。

「ゴーシユ君」

「バイロさん？」

何だかちゃんとしたご飯食べたの久々だなく…実際は二、三日前にミラさん達とご飯食べたのにな…とか考えながら味わっている、さつきまでギルダーツさんと酒を飲みながら話していたはずのバイロさんから声をかけられた。っていうかバイロさん、酒飲んでも顔色一つ変えないんだ…

「先程は怖がらせてしまったようですみません」

「あ、いえ…別に気にしてないですよ。わざわざそれを言いには？」

「いや…あの時、君からは凄まじい魔力を感じた。あれは何だったのか、気になってしまつて。答えたくなければそれでも構いませんが」

ああ、地下で僕が暴走した時の話か…バイロさんからしたら気になるよね。魔力を無効化させた相手が突然あんな暴走なんかしたら。

「あれは僕の中にある滅竜魔法の魔水晶ラックリマが暴走したんですよ。魔水晶ラックリマの魔力までは消せなかつたんじゃないですかね」

「確かに魔水晶ラックリマを体内に埋め込んでいる魔導士もいるが…私の無効化は、その魔水晶ラックリマの魔法ですらも無効化されるはずなのだ。しかし君の場合、そうならなかつた」

確かあの時、僕はバイロさんの魔法を全身で受けた。僕自体が魔法に飲み込まれてバイロさんが無力化で防いだんだから、それは間違いない。だとすると…

「…多分、滅竜魔法の特性か何かだと思います。今は何とか術式で封じることが出来たんですが、その過程で術式の文字を打ち消すことが

何度もありました。無力化に似た特性だったから、バイロさんの魔法と打ち消しあったんじゃないでしょうか？」

「なるほど…しかし、だとすれば君の中の魔水晶ラックリマは相当強力な物のようだ。どこでそれを？」

「さあ…?」

あ、ヤバい。今バイロさんの額に青筋が見えた気がする。はぐらかされたとかふざけてると思われたかもしれない。

「隠してるわけじゃないんです。本当に知らないですよ」

「それは一体どういう…?」

「僕、記憶がない期間がありまして…その間に埋め込まれたらしいんです。だからあの暴走の時まで魔水晶ラックリマを埋め込まれていたことは知らなかったんですよ」

「…幼子にそのような仕打ちをするとは。私がその者を捕らえよう」

「あ、いや、犯人の見当はついていて…もう評議員に捕まってる人なので、ご心配なく」

「そうですか…どうやら辛い話をさせてしまったようで、申し訳ない」「い、いえ…」

レギオン隊の誰か、バイロさんとの接し方を教えて下さい。天然なのか、たまに暴走しそうなんですけど。それも割と本気でやりそうな感じの。

「…そろそろか」

「…?何がですか?」

「ダン、シユガーボーイ。マリーとココを探して来てもらえますか」

「ん、了解せよ」

「お任せあれ、バイロ様」

そう言っただんさんとシユガーボーイさんが外へと出て行ってしまった。今気づいたけど、空が既に夕焼けに染まっていた。もうこんな時間になっていたんだ、気がつかなかった。

「我々はそろそろお暇するとしましょう」

「もう行くのか?」

「ええ。皆ゆつくり休めたことでしょうから」

一日くらいゆっくりしていけば良いのに。もう夜も近いんだし：いや、明日仕事だったらそれが普通か？前世では社会人だったのに忘れてしまった：このギルド、いつもお祭り騒ぎだからそれに慣れちゃったよ。

そんなことを考えている間に、ギルドにいた全員が外に出る。もう既にレギオン隊全員と、ルーシイさんやミツシエルさん、リリーがいた。

「本日伺ったのは他でもありません」

「気づいておった：別れの挨拶」

「え？」

「別れだあ？」

バイロさんの唐突な話に僕らは少し驚きつつも、彼は気にせずそのまま話を続ける。

「大司教様の命により我々レギオン隊は、各地に散った無限時計の部品を探し出し、より深い封印を施す為に旅立ちます。とはいえ、部品は魔力を蓄積するまで魔法での探知は不可能：各人が一生をかける仕事となります。恐らく、皆さんとお会いできるのは本日が最後：です」

「何言ってるやがる」

「最初から決めつけるなんて、つまんねえよなあ？」

「全くだ」

「ココ、色々ありがとう！マリーも次は遊びに来てね！」

「こちらこそ！お姫様も皆さんもお元気で！」

「絶対遊びに来る！じゃん！」

「改めて：この度はご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

「もう過ぎたこと気にしても仕方ないきに！せっかく可愛くなったのに台無しぜよ？」

どうやら暗い雰囲気なのはバイロさんだけのようだ。他のレギオン隊のメンバーはそれぞれ明るく別れを告げている。リリーとサミュエルのそれぞれの呼び名が変わっていたけれど、そこは気にしないでおこう。

「あ！そーいやタコ親父！すっかり忘れてた！」

「タコ親父って…」

「…何ですか？」

「ずっとムスツとしてて疲れねえか？たまには笑えよな！」

「これこれ！」

いや、この人にそれを求めるのは難しいと思うんだけど…現にレギオン隊の人達は殆ど苦笑いだし。

「…心で向き合えば、でしたね？ココ」

「…！」

「あの時君が言ったこと…私にもようやく分かりました」

バイロさんはそう言った後、すごくぎこちない笑顔をして…それを皆が逆に怖いとか言っつてバイロさんが怒って…そうして皆がまた笑い出す。笑い声を残したまま、彼らは旅立っていったのだった。

必ずまた会おうと、約束して。

大魔闘演武編

第73話　そして俺達は頂上を目指す

「ゴーシユ、朝だよー」

「……ん……ん……ん……」

朝の日差しと僕を呼ぶ声に抗って、寝ている間に蹴っ飛ばしてしまった布団をかけ直し二度寝の姿勢に入る。このままならまだ寝直すことも出来るだろう……とボーツとした頭で考えていると、僕のいる部屋の扉が開く音がした。

「ゴーシユ、起きて」

「……もう、ちよつとだけ……」

「もう……さつきも同じ事言つてたよ？今日は早く出かけるんだから、もう起きないと遅れちゃうよ」

「んー……んじゃ予定変更するから……それなら……」

「いいから、ほーらっ！」

毛布を外されて外側の空気に晒されたことで、僕はできる限り体を丸める。しかし既に頭がクリアになってきている為、寝惚けながら体を起こす。

「おはよ、ゴーシユ」

「……ん……おはよ……」

「もう朝ご飯出来てるから、早く顔洗ってきてね」

「あい……分かった……」

ウエンディはクスツと笑った後、部屋を出て行った。とりあえずパジャマのままではどうしようもないので、まずは着替えをする。

そして最後に、いつも頭の上にあるデジヴァイスを着ける為にいつも置いてある場所に手を伸ばして……デジヴァイスがないことに気づいた。

「……あー、そうだった」

別に盗まれたとかそういうことではない。昨日の夜、イーロンとロメオがデジモン達とも特訓したいからと言ってきたんで、デジヴァイ

スをイーロンに預けたんだった。進化は僕じゃないと出来ないけれど、まあ成長期で特訓すること自体は可能だし：今日の朝にギルドで返してくれるって言ってたし。しかし最近はずっと頭の上に着けていたから、何だか落ち着かないなあ…。

ないものは仕方が無いので、とりあえず居間の方へ向かう。既にシャルルは朝食のトーストと好物のダーズリンティーで朝の一時を楽しんでるようだ。

「おはよう、シャルル」

「ええ、おはよう。急がないと朝ご飯食べる時間、無くなるわよ」

「…？まだそんな時間じゃ——」

壁掛け時計を確認すると、出発予定時刻まで20分くらいしか無い。あれ…そんな寝てた？

「私、何度も起こしたからね？」

「あはは…ごめん」

「いいから早くしなさい。朝食抜きになるわよ」

とにかく急いで準備しよう。腹が空いては戦は出来ぬ：朝食抜きで出かけるのは御免だ。

☆

昨日、ナツさんとマックスさんがバトルした。マックスさんが七年間何もしていなかったわけじゃないと言ってナツさんを煽ったから始まったんだけど、まさかのナツさんの攻撃がマックスさんに防がれ、反対にマックスさんの攻撃が徐々にナツさんの体力を徐々に削っていくという、殆ど一方的な展開だった。最後にナツさんがモード雷炎竜を使いパワーで圧倒したことで勝利したんだけど、それもナツさんの魔力を殆ど持っていった為実戦ではあまり使えない手だ。

で、七年のブランクを手取り早く埋める方法はないかと考えた結果、僕らはマグノリアの近くの森に住んでいる薬剤師、ポーリュシカさんを訪ねた。勿論そんな都合の良い薬なんてあるわけもなく、ポーリュシカさんの人間嫌いもあって速攻で追い出された。

その後どうするかと話し合っていた時、ウエンデイがポーリュシカ

さんのことを知っていると。匂いも、声もウエンデイのお母さん：天竜グランディーネと同じらしい。話し方や雰囲気は全然違いうらしいけど。グランディーネは優しいっていつも言っていたし。

で、ポーリユシカさんがエドラスのグランディーネであることを本人が語ってくれた。そしてウエンデイはポーリユシカさんがグランディーネから預かっていた魔導書を受け取り、滅竜奥義のヒントを得ることが出来た。

「うーん…」

「ウエンデイ、少し休憩したら？」

「うん、もうちょよつと…」

今、ウエンデイはずつと魔導書と格闘中だ。結構な分厚さだし内容もビツシリなので時間はかかるのは仕方が無いけれど、かれこれ二時間くらい読み続けているとさすがに不安になる。三ヶ月で強くならないといけないから急ぐ気持ちは分かるけど。

話を戻すけど、ウエンデイが魔導書を受け取ってギルドに戻るとマスターがある発表をしていた。それは、マスターを引退するという話だった。かなり高齢で、元々次のマスターを選ばなければとは思っていたらしい。そして、五代目マスターとして選ばれたのはギルダーツさんだった：姿は見せなかったけど。

ギルダーツさんは手紙だけを残して旅立ったらしく、手紙にはギルドマスターとしての仕事が一っだけ書かれていた。一つはラクサスさんを正式にギルドに復帰させること、もう一つは六代目をマカロフ氏に任命するということだった。マスターを辞退した理由は、性に合わないからだった。

手紙の最後に、帰ってきた頃には妖精フェアリーテイルの尻尾がまたフィオーレーのギルドになつていていることを願うと締め括られ、それを聞いてロメオがあることを提案した。それが三ヶ月後に開催されるフィオーレーの魔導士ギルドを決める大会、大魔闘演武への参加だった。勿論天狼組はそれに賛成、それ以外のメンバーと六代目は反対だったけど優勝賞

金が三千万Jであることを知ったことで六代目は参加を即決。こうして僕達は優勝を目指していくつかのグループに分かれて各地で特訓することになった。

で、僕とウエンデイ、シャルル、ロメオ、イーロン、ミツシエルさん、キナナさん、レビイさんの計八人は浮遊結界パルレーンに乗ってある場所へと向かっていた。そこは世界図書館と呼ばれていて、先日の無限時計の部品集めの際にウエンデイ達が向かった場所だ。そこには魔導書が山のように保管されていて、強くなる為、新たな魔法を習得するつもりだ：多分、約一名は別の目的もあるだろうけど。魔導書をいくつか拝借した後、ドルガモンにキナナさんをギルドまで送ってもらって、他はナツさん達と合流して貰う予定だ。

「ここが、世界図書館：」

「すっげえ本の数：」

「探すだけでも一苦勞ツスね：」

塔の壁に沿って置かれた大量の本。外からでもかなりの高さがあることは分かっていたが、一番下からだ天井が見えない。それに何だか埃っぽい：ずっと放置されている証拠だろう。

「じゃあここからは自由行動、午後にはナツさん達に合流したいのでそのつもりでお願いします」

「よっしゃ、上まで行ってみようぜ！」

「あ、俺も天辺まで行ってみるツス！兄貴達は？」

「僕は下から見ていこうかな」

「私達も下から良いよね？」

「ええ、ウエンデイに任せるわ」

話し合った結果。ロメオとイーロン、ミツシエルさん、レビイさんはまず上の方へ登って行って、ウエンデイと僕、シャルル、キナナさんは下の方から順に回っていくことになった。

「三人はどんな魔導書が欲しいの？」

「私はこの魔導書が難しい言葉で書かれているので、参考書みたいなのがないかなって」

「私は目についた物を貰っていくつもり。いつまでも翼^{エーラ}だけじゃ力不足なのは否めないわ」

何か結界魔法について書かれている魔導書とか、滅竜魔法とか^{ラックリマ}魔法辞典的な物でも良いな。それなら結界で再現出来るだろうから。

「僕は探すの一杯あるので、とりあえず全部見て回ろうかと思えます」
「そうなんだ…じゃあちゃんと決まってるのは私だけかあ」

「やっぱりキナナさんも魔導士になるんですか？」

「…うん。今まで踏ん切りがつかなかったけど、最近決めたんだ」

そう話しているキナナさんは、どこか遠くを見つめているように見える。今のギルドは財政難だから、魔導士が増えて働き手が増えるのは良いことだ。出来るなら使い勝手の良い魔法が良いだろうけど…こういうのは魔法と使い手の相性が重要だ。つまりキナナさん自身の感性に合った魔法を習得してもらうのが一番だ。

「ウエンデイ、ここら辺じゃない？魔導書の用語辞典とかもあるよ」

「あ、ホントだ！」

「じゃあ私達はここにいますわ」

「あれ、シャルルも上に行かなくていいの？」

「いいのよ、私はそこまで急いでないから」

「まあ…ウエンデイ一人だと危ないかもだから、シャルルに任せるよ」

最近は少なくなっただけど、たまーにドジするからな…今回だったら本棚の本を崩すとか、そういうのありそう。

「え？それどういうこと？」

「アンタは気にしなくて良いの。それより、目的の本が見つかったら私の方を手伝ってくれる？」

「あ、うん。分かった」

「じゃあ僕ら上に行きますか」

「ええ」

本棚を眺めながら、螺旋状の階段を上へ上へと登っていく。イーロン達は先に上に行くって言うていたから、真ん中の吹き抜けを^{バルーン}浮遊結界で登って貰ったけど…これどこまで続いているんだろう？

多分まだ半分も登っていないような気がする。

「それにしても、魔導書ってこんなに沢山あるのね」

「でも古そうなのが殆どですね…ここまでの道も獣道同然だったし、ここに来る人つてもういないんでしょうか？」

「そうかもね…シャルルも言ってたけど、本当に勿体ないね」

「こういう場所って評議員では関与しないのかな…これだけの魔導書、ヤバそうな魔法とかもありそうなのに。」

「まあ、だからこうやって魔導書を拝借しに来れるんですけど…あれ？キナナさん？」

隣を歩いてきたキナナさんの姿が見当たらず、後ろを振り返ると本棚をジツと見つめていた。

「気になったの、ありました？」

「あ、うん…これなんだけど」

キナナさんが一冊の本を取り出し、僕はそれを受け取って中身を読み始める。因みに、ここに来ている人は風詠みの眼鏡をレヴィさんから借りている。風詠みの眼鏡とは、本を読むスピードが何倍にもなる魔法の眼鏡だ。品質によってスピードが違うけど、レヴィさんの持っているのは大体16〜32倍と高性能なので、多少分厚い物でも数分で読破出来る。

「この魔法って…」

「どうしたの？」

「いや…この魔法の使い手にちよつと心当たりが」

「本当!?どんな人？」

あ、しまった。これ正直に言っただ丈夫なんだろうか…これの使い手が犯罪者だつて知ったらショックなんじゃないかな…よし、言葉を濁すことにしよう。

「知ってるには知ってるんですけど…僕も今どこにいるのかまでは知りません」

「そっか…ちよつと残念」

「キナナさんはこの魔法、覚えたいんですか？」

「うーん…もうちよつと探してみようかな。ただ本当に少し気になっ

ただけだから」

「そうですか」

良かった、深く聞かれなくて…僕って分かりやすいらしいから気をつけないと。

☆

何とか午前中の内に目当ての魔導書を全員が探し出すことが出来たようで、僕も新しい結界魔法のヒントになりそうな物を見つけることが出来た。この後ナツさん達の三ヶ月間の合宿に参加する予定だったから、リュックはそれなりに大きい物を持ってきている。だから魔導書も各自荷物に入れることが出来ただけ…レビイさんは少し多すぎたようだ。っていうか一人だけ修行と関係無い物が多すぎた。

「じゃあ私はギルドに戻るわ。皆、頑張ってね」

「ああ！」

「はいッス！」

「キナナさんもお気をつけて！」

「それじゃドルガモン、任せたよ」

「ああ！」

ドルガモンとキナナさんがギルドの方角へと飛び立ったのを見送り、僕らもユニモンの後ろの浮遊結界パルジョンに乗り込む。ここからアカネビーチへと向かい海合宿が開始されるわけだけど…ナツさん達、ちゃんと特訓してるのかな？今向こうにいるメンバーだと、ツツコミがルーシイさんしかいないから暴走したら大変かも。

とにかく、これから三ヶ月間でどれだけ強くなれるか…出来る準備はした。あとはどれだけ修行できるかだ。

「ゴーシユ」

「ん？」

「私、もっと強くなるから。ゴーシユの、ナツさん達の力になれるように」

「俺達だって負けないぜ、ウエンディ姉」

「今は弱くても、この三ヶ月で追い上げてみせるッス！」

「私も：ギルドの一員として、頑張るわ」

「ミツシエルは十分強いんじゃない？」

「そんなことないわ、今の私じゃきつと足手まといだもの…もつと姉さんや皆の役に立ちたいの」

僕だって、大魔闘演武までに覚えておきたい結界もある。魔水晶ラクリマも使いこなせるようにしたいし、覚えたい魔法だってある。デジモン達だって、まだ成熟期までしかなれない…言い換えれば、もつと彼らも強くなれる。

「目指すは大魔闘演武優勝か：大変だけど、妖精僕の尻尾らなら絶対出来ます。皆で力を合わせて、他のギルドの人達に見せつけてやりましょう：家族の絆の強さを」

正直時間が足りるかどうかわからないが、頑張ろう。大魔闘演武で出てくる一夜さん達やジュラさん達は勿論、剣咬セイバートゥースの虎ともまともに戦えるように…そして今後の敵から家族や仲間達を守り抜けるように。

第74話 海合宿一日目

ユニモンに浮遊結界パルレインを引つ張って貰ってしばらく経って、ようやく視界に目的地であるアカネビーチが見えてきた。リゾート地として有名で、海の家も結構な数があるし観光客もかなりの数がいる。

「やっと思えてきたツスね！」

「ナツ兄達、どこにいるかな」

「すぐに分かるさ。ナツさん達はやる事が派手だから」

「皆、あれを見て！」

ミツシエルさんの指さす方向を見ると、海で炎の…何だろう。海を炎の帯が走っている…と表現すれば良いのかな？多分、ナツさんがあそこで炎出しながら泳いでいるんだろう。ということは、あの周辺を探せば合流できるはずだ。

☆

無事にナツさん達と合流し、三ヶ月お世話になる民宿（ギルドの状況から値段はお察し）に荷物を置いて水着に着替える。今日一日はオフラしく、ナツさんやグレイさんは早速海を満喫していた。結構遠くまで泳いでいたし。そんな彼らに追いつくため、先程イーロンとロメオ、プロットモンは飛び出して行ってしまった。デジモン達は基本外に出さないようにしているんだけど…最初の一時間くらいは大目に見てあげよう。

『皆元気だね〜』

「ごめんね、パタモン。ここまで運んでもらっちゃって」

『大丈夫だよ。でもちよっと疲れたからしばらく休んでるね〜』

ドルモンもその内戻ってくるだろうけど、疲れてるだろうな…今度二体には何か労いの品を贈ろうかな。

「おーい、ゴーシューっ！」

こちらに手を振っていたのはウエンデイ達。勿論、これから海で遊ぶわけで水着に着替えているわけだけど…

「あれ、ロメオ達は？」

「……」

「ゴーシユ？」

「…え？あ、ロメオとイーロンはもう海に走って行きました」

「じゃあ、私達も行きましようか」

「ええ。ウエンデイとゴーシユ、全員分の飲み物でも買ってきてくれる？」

「へ…？」

「そうだね、結構暑いし…行こっか、ゴーシユ」

「あ、うん…」

レビイさん達が海の方へと向かったのを見てから、シャルルの言葉に賛同したウエンデイに手を取られて近くにある海の家へと向かうことになった。来たばかりだからまだいらなと思うんだけど…

どうしよう…正直言つて落ち着かない。好きな女の子が水着で、ポニーテールも凄い似合っているし…っていうか、ウエンデイはどんな髪型も似合うし髪も綺麗だから余計可愛く見えるんだけど…って、僕は何を考えているんだろうか。

「ゴーシユ、ここはどうか？」

「ん…良いんじゃない？ジュースとかソフトクリームもあるし」

とにかく、今は変なこと考えていたらウエンデイに失礼だ。サツサと目的を果たすとしてよう…海の家つてやっぱり焼きそばとかビールとか定番なんだな。焼きそばって日本の文化では…？

「ねえ、ソフトクリーム食べていかない？」

「そうだね…味はどれにする？」

バニラ、チョコ、ストロベリー、抹茶…抹茶？えつと…あれ？また日本…？いや、きつと東の方の人達が焼きそばとか抹茶味とかの食文化を伝えたんだ。きつとそうだ。そうだと思ひ込もう。

「うーん…私はストロベリーかなあ」

「じゃあ僕は…抹茶にしようかな」

「抹茶って珍しい味だね…結構チャレンジャーなんだね」

いや、本当に抹茶味なのか確かめただけです、前世日本人として。一番好きなのはシンプルにバニラだけど、抹茶味とか転生し

てから初めて見たからつい…

とりあえずジュースを買う前にソフトクリームを二つ買ってみる。そして店員さんから受け取ってみると…確かに、抹茶色だ。僕の右手には抹茶色のアイスがある。とりあえずストロベリーの方をウエンデイに渡す…その哀れむような視線を止めて下さい。

「うわあ…」

「いや、そんな顔しないでよ」

「だって、何か、その…あ」

ウエンデイが次の一言を言う前にソフトクリームを一口食べる。

「……」

「ご、ゴージュユ…？大丈夫…？」

「…抹茶だ」

「え？」

「本当に抹茶味だよ、これ…」

凄く懐かしい味…！前世はそこまで抹茶味のアイスとかそこまで好きじゃなかったんだけど、ちよつとした感動が…！しかしウエンデイは僕の方を見て、コイツ大丈夫かって感じの目をしている。

あ、いいこと思いついた。

「ウエンデイ、ちよつと食べてみる？」

「え…」

「大丈夫だって、美味しいから」

「いや、でも…」

うん、目に見えて困ってる。スイーツ好きとしては食べたいだろうけど、得体の知れない物を食べる怖さで葛藤が生まれている。ちよつとした仕返しのもりだったけど、実際はただウエンデイにも食べてみて貰いたいだけ。

「じゃあ、ちよつとだけ…」

「ウエンデイもチャレンジャーだね」

「だって気になるもん…それじゃ、いただきます」

「どうぞ」

「あー…むっ」

僕の持つソフトクリームを一口食べるウエンデイ。恐る恐るといった感じだったけど、次第にその表情が笑顔になっていく。

「ホントだ、美味しい！」

「でしょ？意外と美味しいよね」

良かった、気に入ってくれたみたいだ。ウエンデイが甘いもの好きなのは知っていたけど、抹茶味ってどうなんだろうと少し思ってしまったし。僕も前世で抹茶味食べるようになったのは成人してからで、小っちゃい頃は少し毛嫌いしてた。

その後僕らはソフトクリームを食べ終えてからジュースを買ってシャルル達の元へと戻ることにした。そしてその事をシャルルとかハッピーにからかわれた。

☆

グレイさんが海を凍らせたり、それをナツさんが吹っ飛ばしたことで氷塊が海の家が並ぶ砂浜へと降り注ぎそうになったけれど、皆が特訓の一環として壊したり、取りこぼしを僕が結界で守ったり…途中から修行になったけれど、久しぶりに遊んだ気がする。明日からはちゃんと修行しないと。

『へー、そんなことがあったんだ』

『うん、明日ドルモンにもソフトクリームあげるね』

『えー、ドルモンだけ？』

『はいはい、ちゃんとパタモンとプロットモンの分も買うって』

『お前ら、飯行くぞ！』

『もう空腹で死にそうだぜ』

すっかり日も暮れて、僕らは民宿へと戻って来た。部屋に備え付けられている浴衣に着替えて、ジェットさんとドロイさんの声かけで夕飯を食べに行くことになった。因みに今僕らは男性7人、女性6人とかなりの大所帯なので食事は少し広めの大部屋を借りて一緒に食べることになった。ハッピーとシャルル、デジモン達は計算には入っていないけど、まあ問題ないだろう。

「しつかし、ボロい民宿だなあ」

「そーいや前にアカネビーチに来た時つて、すっげえホテル泊まったよなー!」

「忘れたのか? あれはロキがチケットくれたから泊まれたんだろーが」

僕らが加入する前の話か: 良いな、高級ホテル。一度でも良いからそういう所に泊まってみたかった: : : あ、そういえば思い出した。お花見の時のペアチケット、まだ家にあつたな: : : いつかのんびり出来るようになったら行ってみたいなあ: :

「まあ、今の内のギルドじゃ予算的にここでも一杯一杯だよ: :」

「んなことより腹減ったぞ」

「俺も!」

「同じくツス!」

「よっしや、食いまくるぜ!」

大部屋の襖を勢いよく開いたナツさんとグレイさん。しかしそこで待ち受けていたのは: : : 混沌だった。

「だ、誰だ: : : 女達に酒飲ましたのはあ!」

そう、酒。部屋に酒瓶が5, 6本は転がっていた。エルザさんは悪酔いしていて、ジュビアさんはずっと泣いている。反対にレビイさんはずっと笑っていて、ルーシイさんは: : : なんか喋り方が子供っぽくなっている。で、ウエンディは目を回して横になっていた。

「りよ、料理が: :」

「全部食ったのか!」

「し、信じらんねえ: :」

「何でこの部屋に酒が: :」

「女将い! 何でここに酒が——ぐはっ!」

その時、グレイさんの頭にお猪口が直撃。どうやらエルザさんが投げたらしい。

「うるさいぞグレイ: : お前もこっち来て飲め。そして酒を注げ: : つて

か酒を注げえい!!」

「超絶めんどくせえ…がつ!」

あ、今度はエルザさんが持っていた酒瓶がヒットした。

「駄目ですう!グレイ様はジュビアのもの、ジュビアのものなんですようー!」

既に女性達は出来上がってしまったっているようだ…そういえば、シャルルとミツシエルさんは?あの二人なら止めてくれるはず…!?

「ごらあ!ちゃんと走りなさい、アンタは馬なのよ!」

「オイラ猫だよ…」

まさかシャルルまで飲んでいるなんて…さては、エルザさんとかに飲まされたか?で、ミツシエルさんは…

「ムニヤ…姉さん、大好きい…」

「おい、ミツシエル!起きろつて!」

「こんなトコで寝たら風邪ひく…んぐつ!」

「ちよ、おい!」

「フフフ…幸せえ…」

寝ているミツシエルさんを起こそうとしたロメオとイーロンが、反対に彼女の抱き枕になってしまっている…ミイラ取りがミイラになるとはこのことか。

「ウエンデイ、大丈夫?」

「目が回る…」

…うん、ウエンデイが一番平和的だな。つていうか、まだ未成年(この国では15歳からお酒が飲めるが、ウエンデイは12歳)なのに飲ませたら駄目だよ…あ、もしかしたらウエンデイの魔法で酔いを覚ますこととか出来るかも…!

「ウエンデイ、ウエンデイ!」

「んあ…ゴ、シユ?」

「そうだよ、ゴーシユだよ。ちよつとお願いがあるんだけど…」

「うん…頑張、るう…」

「え、ちよつと…うわっ!」

ウエンデイは立ち上がりそうとしたがすぐによろけてしまい、今度は

僕のいる方へ倒れそうになる。咄嗟に支えようとしたが、自分の浴衣を踏んでしまったのか体勢を崩し、僕は背中から倒れウエンデイは僕の上に倒れ込んでしまう。

「ウエンデイ、怪我は…」

「クラクラする…」

…これはしばらく動かさない方が良かったか。無理させちゃったな…仕方ない、しばらくこのまま休ませてあげよう。僕動けないけど。

「ん……んう…」

「!?ちよ、ウエンデイ……!」

なな、な、何で僕の首に手を回して抱きついて……!ま、まさか抱き枕か何かと勘違いしている……!?この体勢、色々辛い……!

「だぁーっ!!これは妖精フェアリーテイルの尻尾存亡の危機だ!男共集まれ、作戦会議だーっ!」

…ごめんなさい、ナツさん。多分今無事なのはナツさんだけだよ…グレイさんはジュビアさんに捕まってるし、ジェットさんとドロイさんはエルザさんに伸されているし、ロメオとイーロンはミツシエルさんに捕らえられて、ハッピーはシャルルの乗り物扱いだ。僕も動きたくても動けないです。

「全…滅……!?!」

「おんぶして、おんぶ〜」

ナツさんの背後から抱きつくルーシイさん。ああ、遂にナツさんにも魔の手が…。

「い、嫌、だ…」

「おトイレ行きたい、連れてって〜」

「ナツ、いつそげーっ!頑張れーっ!」

「だぁーっ、くっそ!めんどくせえーっ!!」

結局僕らが解放されたのは、二時間ほど後のことだった。

☆

「気持ち良い〜!」

「はあく〜やつと目が覚めてきました」

「全然記憶に無いのだが…なぜ男共はあんなに怯えていたのだ?」

「さっぱり分からないわ」

ルーシイ達女性陣は酔いを覚ました後、温泉に入っていた。先程までのことは全員が殆ど覚えておらず、男性陣の怯えように疑問符を浮かべていたのは言うまでも無い。

「そういえばルーちゃん。さっきのナツとのおんぶ、なんか良い感じだったね!」

「おんぶ?…もしかして、ナツと!?」

「何今更赤くなってんの!」

「そういえば、ウエンデイちゃんもゴージュ君と良い雰囲気でしたね。二人とも顔を真っ赤にして可愛かったわ」

「い、言わないで下さい〜…頑張って、思い出さないようにしてるんですから!…なんで私、あんな恥ずかしいこと…」

ウエンデイは顔を真っ赤にして、温泉に顔を半分ほど沈めている。シャルルはその横で彼女を落ち着かせるように頭をポンポンと撫でる。

記憶が少しあるのはレビイ、ミッシェル、ウエンデイの三人。レビイとミッシェルは単に飲んだ酒が少なかつたから、ウエンデイは酔いが覚めたときにゴージュが自分の下敷きになっていたからである。

「はいはい、ご馳走様!それより今はルーちゃんだよ!」

「いや、別にあたしはナツとはそんな関係じゃ…」

「え?だってナツとルーちゃんって…」

「お互いに好き、ですよね?」

「はあっ!」

レビイとジুবアの発言に、ルーシイもまた顔を真っ赤にする。それからルーシイは必死に否定し、以前ナツの家まで仕返しにつけていったという話をしたが、結局は惚気を聞かせただけだとレビイに指摘されて何も言えなくなってしまう。

「ウエンデイは何か無いのか?」

「へ？」

「そうよ、あたしもウエンデイの話聞きたい！」

ルーシイは自分に向いている矛先をウエンデイに変えようと必死でそう言った。

「ルーシイみたいな話を期待しているのなら無駄よ？この二人、家でもいつもと同じような感じだから。それでいてこの子は今で十分幸せとか言うんだから」

「ちよ、ちよつとシャルル！」

「…それは問題だな」

「え…？」

「うん…好きな女の子と一緒に暮らしているのに、何も変わらないなんて」

エルザとレビイの言葉で、ウエンデイの心は不安で押しつぶされそうになる。その様子を見て、シャルルは慌てて弁解する。

「で、でも私やイーロンとか、ロメオにデジモン達もいるから、二人とも恥ずかしくてそんな雰囲気にはなりづらいのかも知れないわね」

「なるほど…：そういうえば、まだお前たちは同棲して間もなかったな」

「ま、まあそんな落ち込まないでウエンデイ！まだ二人は小さいんだし、これからだって！」

「は、はい…」

どうやら何とか持ち直したようだ。ウエンデイの表情を見てシャルルはそう思った。

「とにかく、明日からは特訓頑張るのみ！」

「そうですね、ジユビアも頑張ります」

「私も！」

「私も、もっと強くなります！」

「ああ、まだ合宿は始まったばかりだ」

「目指せフィオーレー、ですね！」

こうして女性陣は士気を高めつつ、各自部屋で休息をとることにしたのだった。

因みに、男性陣の暴走は一人の少年によって事前に食い止められた
ということは、彼女達は知らない。

第75話 修行開始

海合宿二日目。今日からは本格的な修行に入る為、僕らはそれぞれ別行動をとることにした。ロメオはナツさんと、イーロンはエルザさんとそれぞれ修行に入り、レヴィさんとウエンデイとシャルルは魔導書の解読を始めた。ロメオとイーロンは先に自身の強化から入ったようだ。デジモン達も僕の修行だと飽きるだろうということで、グレイさんとジュービアさんが模擬戦の相手をしてくれることになった。今頃彼らは人目を気にしなくて済む海の上で頑張っていることだろう。

「ルーシイさん、よろしくお願いします」

「ええ！って言っても、あたしもカプリコーンに見て貰うんだけどね」
そして僕はルーシイさんと一緒に魔力の総量を上げる修行をすることにした。魔力が高ければ高いほど、より強力な結界魔法を使えるようになる。最初の一ヶ月は魔力の底上げを重視して、残りの二ヶ月で新しい結界の発案と習得、そして滅竜魔法のコントロールを平行して行っていると思う。

「魔力の器そのものを底上げするには、精神を鍛えるのです」

「精神を鍛える…」

「大地を、風を、気を肌で感じるのです。そして自然と一体化するように呼吸を整えて下さい」

「分かりました」

ルーシイさんと同じように座禅を組み、目を閉じて集中する。大地の温度、風の流れ、周囲の気配…そして大気中の魔力を感じ取り、僕の中の魔力を周囲の魔力に馴染ませるように意識してみる。

「その調子です、ルーシイ様。ゴージュ様はもう少し肩の力を抜いて下さい」

カプリコーンさんの指示通り、深呼吸をして余分な力を抜く。……少しづつ、僕の周囲に魔力の流れが生まれているのが分かる。

「お二人とも、魔力をもう少し解放して下さい」

「ん……くっ！」

「……!?うわっ!」

ルーシイさんは魔力解放を維持させる事が出来ず、僕は自分の魔力の流れが突然変化したことによって乱れ、少し後ろへと弾かれる。

「今のは…」

「ハア、ハア…キツツ…」

「いてて…」

何だろう、今のは…途中までは安定していたのに、魔力を少し強くした途端に乱れてしまった。

「カプリコーンさん、今のって…」

「…恐らく、ゴージュ様の体内にあるという魔水晶ラクリマが原因でしょう。魔力を解放させようとすると魔水晶ラクリマも反応してしまうようです」

なるほど…つまり魔力底上げの修行をするには魔水晶ラクリマを完全に自分の物としてからじゃないといけないわけか。

「大丈夫?ゴージュ君」

ルーシイさんの付き添いでずっと傍で僕らの修行を魔導書片手に見ていたミツシエルさんが、僕に手を差し伸べてくれた。

「ありがとうございます…あ、そうだ!ミツシエルさん、僕と手合わせしてくれませんか?」

「私と?」

「戦いながらの方が早く魔水晶ラクリマをコントロール出来ると思うんです。ミツシエルさんも、戦ってみたら感覚的に何か分かるかもしれませんし」

「確かに…そういうことなら、分かったわ」

というわけで、ルーシイさんとカプリコーンさんから距離を取ってから模擬戦を行うことにした。早速魔水晶ラクリマの魔力を発動させ、両手の皮膚を緑色の鱗へと変化させる…うん、まだ見慣れないな。自分の手とは思えない。あれから少しは使いこなせるよう特訓してはいたけど、まだ変化させることが出来るのは両手両足が限度だ。

それから、ミツシエルさんにも変化があった。あの戦いの後、ミツシエルさんが今どんな状態かをマスターやレビイさんと調べてみたらいいんだけど、どうやらミツシエルさんの中にある魔力はあの時マ

スターから預かった分だけ。こうして擬人化しているだけでも魔力を少しずつ使うので、ミツシエルさんの魔力総量は減り続けていることになる。そこで、ミツシエルさんは大気に流れている魔力を取り込む魔法を習得することにした…まあこれは魔導士なら出来ていることなんだけど、魔法を一から覚えようとする人の為の、謂わば初心者用の魔法なのでミツシエルさんなら数日でマスター出来るだろう。

話が脱線したけど、ミツシエルさんがこうして戦闘服に着替えるのは無限時計の一件以来初めてのことだったので、今日の前で起こった変化に少し戸惑っていた。

「ミツシエル、服が…！」

「これは…」

ミツシエルさんの今の姿は、これまでの戦闘服の色違い。黒い薔薇ではなく、薔薇の赤と植物の緑を思い浮かべる色になっていた。これも妖精の尻尾のギルドマークを刻まれた影響かもしれない。戦闘時に装備していた剣と盾も色が変わってはいるものの、使い方は同じようだ。ミツシエルさんも簡単に動かして確認しているから間違いない。

「準備は良いですか？」

「ええ、問題ないわ！先手はどうぞ！」

「それじゃ、遠慮無く！」

両足も緑色の鱗に変化し、脚力を上昇させてから思いつき踏み込む。その最初の一步でミツシエルさんの懐まで飛び込んだ僕は、右手で引つ掻くように攻撃する。

ミツシエルさんは盾を使って僕の攻撃を防ぐ。その後も僕は立て続けに攻撃していくけれど、剣と盾で防いだり躲したり…僕の攻撃はミツシエルさんには一切当たらない。でも、ミツシエルさんも攻撃に転じることは出来ないはずだ。

「……」

「……」

僕の連続攻撃に耐えかねたのか、ミツシエルさんは大きく後ろへと後退する…けど、今の僕の脚力なら！

「そこっ！」

「甘い！」

「なっ…くっ!？」

そうだ、あの盾つて鞭のように使えるんだっ…！僕が一步踏み出した瞬間、横から盾による攻撃を与えられて体勢を崩されてしまう。

「しま——」

何とか体勢を整えた時には既に遅く、すぐ目の前までミツシエルさんの剣があった。どうやら寸止めしてくれたらしい。

「…負けました」

「…ゴーシユ君、どう？」

「うーん…まだ調整は出来ませんね。たまに力が強すぎて飛びすぎてしまうし、腕の方も少し力を弱めすぎたみたいです」

加減が上手くいっていない…まあ、模擬戦とはいえ初めての戦闘でこれだけ動ければ上出来か。

「もう一回、良いですか？」

「ええ、勿論」

「じゃあ、早速…あ、もしもの時は僕を気絶させるくらいのもりでお願いします」

「えっ？」

「それじゃ…行きますよー！」

今度は部分的にはなく、全身を変化させる。レビイさんこの魔水晶ラクリマを封じようとした時は、全身緑色の肌になっていたって後から聞いた。それがこの魔水晶ラクリマの魔力をフルで使った状態だ。つまり、その状態でも意識を飛ばさず且つ自由自在に魔力をコントロールすることが出来れば良い。

「ちよ…ゴーシユ、本気!？」

「…姉さん、もう少し離れて！」

「ぐ、ううウ…！」

しかし…これは賭けだ。あの時のような暴走を起こす可能性が高く…今まではそれが怖くて、全力で発動させることは躊躇していた。でも今は、僕よりも強く人間の急所を当てる事が出来るミツシエルさんがいる。ミツシエルさんなら一撃で僕を気絶させることも出来るだろう。

でも……これ以上、仲間を傷つけたくない。この一回で、絶対に成功させる！

「はああああアアアあああつ…!!」

「全身が…！」

全身が緑色の肌に変化し、髪が逆立つ。僕を包む魔力はどんどん高まっていつて、僕の意識は何度も飲み込まれそうになるがギリギリで耐え続ける。

「ゴーシユ様、先程の修行と同じです！魔力に抗うのではなく、自身の魔力と合わせるのです！」

…！…！そうか、確かに僕は意識を持って行かれないようにコントロールしようとしていた。でも、そうじゃないんだ…この魔力も僕の魔力なんだ。支配下に置くんじゃない、僕の体で共存させるんだ…！

全身の力を抜き、ただ魔水晶ラケリマから発せられる魔力を感じ取る。そして段々と僕の全身を駆け巡っているような魔力の流れが生まれているのが分かり、溢れ出ていた魔力が体に定着していった。

「これって、もしかして…！」

「…ええ、もう大丈夫」

「…：ありがとうございます。三人とも。これで、僕はもつと強くなれる」

こうして、僕は魔水晶ラクリマを扱えるようになった。

「やったね、ゴージュ！」

「はい！あの、ミツシエルさん」

「こつちは準備出来るわ。いつでもどうぞ」

ミツシエルさんが先程と同じように戦闘態勢に入った。どうやらまた先手を譲ってくれるらしい。

「ありがとうございます。では…行きます！」

僕も先程と同じようにミツシエルさんに一気に接近して攻撃しようとした…んだけど。

「え——」

「きやつ！」

先程とは段違いの身体能力で、僕は加減することが出来ずにミツシエルさんに突撃してしまった。

「ちよつと二人とも、大丈夫!？」

「…どうやら、自由に発現出来るようになったようですがコントロールはまだのようですね」

「いたた…ご、ごめんなさい！大丈夫ですか、ミツシエルさん？」

「え、ええ。でも驚いたわ、凄い身体能力ね」

「確かに、横から見ても全然見えなかった…それ使いこなすのは大変ね」

「しばらくは自主練ですね…」

まだまだ使いこなすには時間がかかりそうだ…でも、思っていたよりも早く制御出来るようになったから、これからは魔力の底上げや新

しい結界魔法の習得も問題なく出来るぞ…！

「とりあえず退いたら？ゴージュ」

「え？あ、すみません！」

「ふふ、ありがとう」

ミツシエルさんを押倒している状況だということを知りしに言われて気づいた僕は、魔水晶ラクリマの魔力を抑えて元の状態へと戻して、急いで立ち上がりミツシエルさんに手を貸す。こんな所、ウエンデイに見られたら大変だ…あらぬ誤解を受けそう。

「それじゃ、修行を再開しましょうか！」

「そうね、カプリコーンお願いね」

「お任せ下さい、ルーシイ様」

「姉さん、私も一緒にやって良いかしら？」

「勿論！」

「良いんですか、ミツシエルさん？効果無いかもしれませんよ？」

「ええ。何だか今ならうまくいきそうな気がするの」

というわけで、僕達は魔力強化の修行を夕方まで続けた。そしてミツシエルさんは少しだけ魔力吸収の感覚を掴むことが出来たのだった。

☆

海合宿三日目。昨日の夜は一昨日のように誤って酒が出回ってしまふなんてことも無く、普通に食事も温泉も満喫させて貰った。格安の民宿って言うていたけれど、普通に料理は美味しかったと思う。それに結構開放的で、外の景色が部屋からでも一望できるから人気があってもおかしくない気がするけど…お客さんは僕ら以外殆ど見ない。多分開放的過ぎて虫が入ってくるとかそんな理由かな。僕も虫は嫌いだけど、結界とか術式使えば入ってこないし。

現時刻はまだ朝日も顔を出していない頃。僕はデジヴァイスを持って海水浴場の端っこの、昨日の昼間に僕らが修行していた場所を目指していた。あそこはヤシの木がちらほらあって、人も殆ど来ないから隠れながら修行が出来る。変にデジモン達を見られて騒がれる

こともない。

「ふあ〜…」

「無理して来なくても良かったんだよ？」

「んーん、大丈夫…」

ウエンデイが目を擦りながらそう言った。まだ他の皆は起きていなかったから、こっそり抜け出そうと思っただけど…偶然ウエンデイと鉢合わせて、修行に行くことを話したら一緒に行くから待てるように言われ現在に至る。普段ならまだ僕達二人とも眠ってる時間だし、僕も正直眠い…朝ご飯までには戻ろうと思う。っていうかウエンデイとシャルルが一緒にいないのって珍しい気がするな。

「そういえば、何でこんな時間に修行するの？人目につかないようにするなら昨日のグレイさん達みたいに海上でやれば良いんじゃない？」

「ああ、まだウエンデイには言っていなかったけ」
「？」

「実はデジヴァイスの中には、ドルモン達以外にもう一体いるんだ」

「へ…？確か、ドルモン達以外のデジモンって…」

「そう、この世界に迷い込んだっていうデジモン達。この前無限時計の部品を回収しに行った場所で見つけたんだけど…その子、ちよつと恥ずかしがり屋でさ。僕ら以外にはまだちゃんと会話出来ないくらいだから、誰もいないこの時間帯に様子を覚えておきたくて」

マリー＝ヒューズとの戦闘でボロボロになったあの湖の中に住んでいたようで、戦闘後に伸びてました。デジヴァイスで回収した後、しばらくデジモン達に見て貰っていたんだけど…見事にパニック状態で落ち着いて貰うまで会話も出来なかった。最近になってようやく僕も会話させて貰えるようになって、そのデジモンの住んでいた場所が水の中ということで、海で伸び伸びさせてあげたいと思ったんだ。

「そうだったんだ…私ついてきて大丈夫だったかな？」

「多分大丈夫だよ。ナツさん達みたいに騒がしいのは苦手みたいだけどね…この辺でいいか」

デジヴァイスを操作し、デジモン達を全員リアライズさせる。昨日の夜にちゃんとこの朝練のことを言っておいたはずなんだけどな：案の定プロットモンだけ寝てる。他の三体はちゃんと起きてるのにな。

ウエンディは今まで見たことがなかったデジモンに目を向ける。ピンク色の貝殻のような体の中で、本体である緑色のスライムがこちらを涙目になりながら見ている。

「はじめまして、私はウエンディつていいいます。あなたの名前は？」
「……………しゃ…シャコモン…です」

シャコモンは成長期のデジモンで、凶鑑によれば体内で生成される硬玉を撃ち込むブラックパールという必殺技があるらしい。このシャコモンというデジモンは可愛い顔で相手を誘い込み、近づいた相手に攻撃を加えるズルい奴、という説明がされているけれど…このシャコモンは人見知りで少しでも刺激したら貝殻を閉じてしまう。その点、ウエンディはシャコモンの性格が分かったのか優しく声をかけて落ち着かせようとしているようだ。シャコモンもそろそろ落ちて着いて――

「ん…んん〜！おはよーっ！」

プロットモンの目覚めの声にビックリしたシャコモンが、ガチンツ！という音を鳴らした。台無しである。

「あれ、皆どうしたの？」

「いや…今のは仕方ないかな、うん」

寝ていたのに空気読めとか言えないよね…さすがに可哀想だ。

「おーい、シャコモン。僕達は砂浜で修行しているから、海でリラックスしてきて良いよー。一時間くらいしたら戻って来てね…よし、もう少し向こうへ行こう」

「え？でも…」

「一回貝殻を閉じちゃうとしばらくは開けてくれないんだ。声は聞こえてるはずだから、そっとしておこう」

ウエンディはシャコモンを一度撫でてから僕らの後ろをついてくる。目視出来るギリギリの距離で足を止め、早速修行を始めることに

した。今回は近接戦闘をメインに訓練するつもりだ…というのも、昨日の夕方に僕が魔水晶ラクリマの魔力を使えるようになったと言う話をしたら、ナツさんにグレイさん、エルザさんまで僕に決闘という名の戦闘訓練を申し出てきたんだ。断ろうとしたけど、半ば強引に決められてしまい…こうして急遽対策をしなければいけなくなつた。

偶然だつたけど、ウエンディについてきてもらえて良かった。今の彼女の攻撃方法は天竜の咆哮と天竜の翼撃のみだが、S級試験の一次試験でのエルザさんとの戦いの時は疑似的とはいえ天竜の碎牙という近接攻撃も行っている。前世の知識も絡んでいると思うけど、ウエンディは鍛えれば接近戦の方が得意なんじゃないかと僕は考えている。そんな彼女と特訓出来れば、僕も近接戦闘のコツというか…何かを掴めるんじゃないかと思うんだ。

「それじゃ、デジモン達は全員進化してもらおうとして…今回は近接戦闘の訓練だから、まずは一対一、ローテーションでやっていこう。全員が四回ずつ戦うことになるから、そのつもりで」

「ねえねえ、買ったなら何かご褒美とかないの？」

ああ、最近はそのようなシステムにしてたっけ…トーナメントとか総当たり戦で模擬戦して、一位の人が好きな食べ物をプレゼントっていうルール。今回もそれで良いかな。

「それじゃ、一番勝ち星が多かつた人がこちら辺の海の家にあるもので食べたいものを買ってあげるよ」

「やったーっ！」

「今回は負けないよ！パタモン、プロットモン！」

「僕だつて負けないからね」

うんうん、デジモン達は良い感じにモチベーションが上がってきているな。普通に修行するよりもやる気が違うんだよね。

「ウエンディもそれで良い？」

「えっと…何でも良いの？」

「え？うん、海の家にあるものならね」

「分かつた…私も頑張るね」

…気のせいかな、ウエンディのやる気の入り方がデジモン達以上な

気がするんだけど。え、なんでそんなやる気満々なの？

「ほら、早速一戦目やろうよ！」

「あ、うん…それじゃ最初は…」

「はい！私いっちばーん！」

「私も最初で良い？」

「わ、分かった…」

というわけで、最初の組み合わせはブラックテイルモン対ウエンデイ。ブラックテイルモンは身体能力がズバ抜けているから、ウエンデイはかなり苦戦しそう。ひよつとしたら今の二人だと、ブラックテイルモンの圧勝かも知れない。

——そう考えていたのが、三十秒くらい前の話。

「キュ〜…」

「ふう…」

「…え？」

一撃。たった一撃でブラックテイルモンは倒されてしまった。今、何が起こったんだ…？

「ゴーシユ、次は？」

「あ、え、えつと…じゃあ——」

その後、ユニモンとドルガモンが対一で戦ったが…どちらも同じく一撃でノックアウト。そして僕は、ウエンデイが何をしているのか全然見えなかった。

——このままじゃ、やられる。

「ハアアツ!!」

魔法水晶ラクリンの魔力を全開させる。身体能力が格段に上がったこの状態なら……!

「うおおおっ!!」

「——ふっ!」

数時間後。僕はある海の家へと続いている行列に並んでいた。どうやら、ウエンデイはこのアカネビーチにある海の家の中でも、女性に絶大な人気を誇るスイーツを食べたかつらしく、その思いが力に変わってあんな惨劇になったのだ。

この海の家の人気スイーツは、開店から僅か数分で売り切れるらしい。なので僕も開店まで何時間も前の早朝から並び始めたというのに……人数を見る限り、ギリギリ買えるかどうかというラインだ。中には無理だと諦め、行列から抜ける人も後ろの方で何人かいた。それでも並ぶ人は後を絶たないが。

因みに分かっているとは思いますが……デジモン達も僕も再起不能によつてウエンデイが優勝である。僕は腹部を思いつき殴られた為、朝食は食わずにデジヴァイスをウエンデイに預けて行列に参加することになった……今後、ウエンデイを怒らせることがないようにしようと僕は心に決めるのだった。

第76話 取り残された者達

僕が皆の元へと戻った頃には、太陽が真上にまで昇っていた。待ち合わせしていた場所には、何故かウエンデイとシャルル、そしてデジモン達しかいなかった。あれ？もう待ち合わせの時間過ぎてるよね…もう先に修行始めちゃったかな？

「あ、ゴージュ！」

「お待たせ、ウエンデイ。はい、約束のスイーツ」

「わあっ、ありがとう！ごめんね、並ばせちゃって」

「ホント、凄い行列だったよ…」

売り切れまで残り数個って所で買えたから、少しヒヤヒヤさせられた。もし買えなかつたら明日になっていただろうから、今日の内に買えて本当に良かったよ。さすがに二度も、何時間もかけて並びたいとは思えない…まあ、ウエンデイの為だと思えば何度でも並ぼうと思えるけど。

「それで、他の皆は？」

「それが…」

「分からないのよ。私達もさつき来たばかりで」

「さつき？てつきりもう皆、僕を待っていると思っただけど…何か用事？伝言は？」

待ち合わせ時間は二十分くらい前だ、元々遅くなることをウエンデイに伝言を頼んでおいたんだけど…

「あ、ちゃんと伝言は朝ご飯の時に言っておいたよ」

「俺達、さつきまで人気の無い浜辺の方にいたんだ」

「あ…なるほどね」

確かに待っているのも暇だろうから、デジモン達をウエンデイに預けたんだった。まだ海に来て三日くらいなんだが…まあ、たまには良いか。てつきりロメオとかイーロンも一緒にいるかと思っただけど。

「おーい！」

「あ、ジェットとドロイだ！」

走ってくる二人に向かって体当たりしに行こうとするプロットモンを、抱き上げることで中断させる。全くこの子は…知っている人全員に突撃するのは止めて欲しい。

「ジェットさん、ドロイさん、ナツさん達は？」

「そ、それが…」

「さつき、バルゴが来てよ…」

「バルゴって確か…」

「ルーシイの契約している、メイドの星霊よ」

さすがにデジモン達はルーシイさんの契約している星霊の名前までは把握し切れていなかったようだ。今度、訓練がてら紹介して貰おう。

「バルゴがどうかしたんですか？」

「星霊界の危機だとかで、ナツ達を連れて行っちゃったんだ！」

「ええ!？」

…話を聞いて今更原作知識を思い出す僕。以前にもこんなことがあったような気がする。そうだった、ナツさん達が星霊界で宴をする話ってあったな…あれ、じゃあ僕達って置いてけぼりにされた？

「ど、どうしようゴージュ…」

「…多分だけど、星霊界の危機っていうのはバルゴの嘘じゃないかな」「嘘？」

「だって、本当に星霊界が危機に陥っているなら僕らとか、ジェットさんやドロイさんも連れて行くはずでしょ？戦力が多いに越したことはないんだから」

「た、確かにな…俺らその場にいたのに除け者にされたんだ」

「もしかしたら、星霊界に連れて行ける人数に限りがあるのかも知れませんかね」

実際はどうかのかわからないけど。中途半端な強さで連れて行けないって言うのなら分かるけど、少なくともウェンディの治癒魔法は重要だしドロイさんやジェットさんはこの七年間で僕らよりも強い可能性はある。なのに連れて行かないってことは、人数が多すぎると連れて行けないってことなんじゃないかと考えた方が自然な気がする。

「他の全員が星霊界に連れて行かれたんですよね？」

「ああ、いや…ロメオとイーロンはいなかったな」

あの二人もどこかで別行動中ということか。そうなるはずは二人を探した方が良いかな。

「まあどつちにしろ、星霊界には行く手段がないのでこっちはこっちで修行するしかないですね」

というわけで、原作知識は殆ど覚えておらずいつナツさん達が帰ってくるかも分からず…僕らはナツさん達の帰りを待ちながら合宿を続けることにした。

☆

何日も、何日も魔力底上げと新たな結界魔法を生み出すことに集中し続けていた僕。この日ようやく新たな結界魔法が一つ完成し、その性能を確かめる目的で初めて他の皆との実戦訓練に参加した。

「パープルブラスト!!」

アイアンメイク
「鉄造形・大砲!!」

「天竜の咆哮!!」

「パワーメタル!!」

「ホーリーショット!!」

ロメオの巨大な紫色の炎弾と、イーロンが生み出した大砲から発射された砲弾。この一ヶ月での修行の成果がそれぞれ現れている。ウエンディや、デジモン達の技も威力がかなり増していた。それらが僕へと着弾した瞬間、砂煙によって視界が遮られてしまう。

「ど、どうだ…!」

「やったツスか!」

砂煙が収まり、僕の姿が露わになる。僕を覆っている結界を見てウエンディとユニモンは笑顔に、イーロンとロメオとドルガモンは悔しそうな表情を浮かべた。

「ゴーシュ、これって!」

「…うん、成功だ。これがようやく完成した新しい結界魔法の一つ、外殻シエルの結界だ」

防御結界ディフェンドや反射結界リフレクションのようにドーム状で展開する結界だが、その表面は殻のようにゴツゴツとしている。この青い結界は魔力量によって強度と範囲が変化させることが出来る。

今の僕の上限はまだ分からないが…少なくとも、今くらいの攻撃は防ぎきることが出来たようだ。今後は防御結界ディフェンドに代わって使用することが多くなるかも知れない。まあ防御結界ディフェンドのように形状を変化させることは出来ず、ドーム状にしか展開出来ないんだけど。

「くっそ〜!」

「俺達ももつと強くならないとツスね…ハードルは高いツス」

「いや、二人ともかなり強くなってるよ。正直驚いたくらい」

っていうかこの二人、おかしくない?ウエンデイやデジモン達と戦い続けて、砂が水を吸い取る勢いで強くなっている。大魔闘演武が始まる頃には、一ヶ月前の僕ぐらいまでなら追いつくんじやないだろうか。ロメオとイーロンでこれなら、デジモン達も相応に強くなっているということだろうし…これは僕も負けていられないな。

「あ、ゴージュ兄!まだ結界消さないでくれよ!」

「え?」

「そうツスよ!俺もまだ挑戦したいツス!」

「俺もやるよ!」

結界を解除しようとしたらそんなことを言われた。何でそんなやる気なんだよ…ウエンデイとユニモンは参加していないけどさ。まあ良い、存分に相手をしてあげようじやないか。この外殻シェルの結界ならば破られる気はしない。

「うおりやあーっ!!」

——十分後。

「どらあーっ!!」

——三十分後。

「パワーメタル、パワーメタル、パワーメタル!!」

……長い。体力だけあるんだ、この三人。ぶっ続けでもう一時間くらい経つぞ。一回結界の中から出ようとしたら怒られるし……まあ僕もこの結界の持続時間の実験が出来るから良いんだけど。

「ハアツ、ハアツ……どんだけ固えんだよ、その結界……」

「さす、がにつ……疲れたツス」

「パワー……メタル!!」

大の字で倒れ込んで言う二人。彼らに目もくれず、未だに僕へと攻撃を続けるドルガモンだって、既に体力が底をついているはずなのだが……

「ドルガモン、ここまでにしよう。これ以上は修行にならないよ」
「も、もう少しだけ……」

……?おかしい。確かに強くなる為に修行するのは分かるけど、これ以上は修行ではなくただの無茶だ。そんなに急いで強くなる必要は無いのに。

「何を焦っているの?普段冷静な君らしくもない」

「ゴーシユ……俺は、ちゃんと役に立っているのかな?」

「何言って……」

「俺達がゴーシユの力になれば、その代わりにゴーシユは友達のロツプモンを探してくれるって約束してくれた。知ってるよ、ゴーシユがいつもギルドの依頼が終わった後とか、手がかりを探してくれている事」

確かに依頼でフィオーレ各地へと向かった際は何か変わったことがないか聞き込みをしたりとかそれらしい痕跡を探ったりはしているけれど……ただ約束を守ろうとしているだけだし、今の所全て空振り状態なんだ。改めてそんな風に言われることではないんだが……

「なのに、俺達は本当に力になれているのかなって……不安なんだ。プロットモンとパタモンは、ちゃんと力になれていたと思う。マリー||ヒューズとの戦いに勝てたのはあの二人のおかげだ。でも、俺は……」

「……………」

ドルガモンもいてくれたから、これまで戦い抜いて来れたんだけれどなあ…足手まといだと思ってるのかな。だからか、さつきからオーバークワークになるくらいに修行しているのは。

「だから、俺はもつともつと強くなりたいんだ！もつとゴーシユの役に立てるように！」

「でもドルガモン、明日以降もまだまだ修行が続くんだ。今日特訓をし過ぎて動けなくなったら逆に予定よりも特訓出来なくなってしまうんだよ？そう言ってくれるのは嬉しいけど…」

「それは分かってるんだ…でも、何か掴めそうな感じがするんだ」

「何か？」

「うん。この特訓、俺が強くなる近道になっっているような…そんな感覚があるんだ」

…もしかすると、完全体に進化するにはそれぞれの個性に合った特訓が必要ということなんだろうか。デジモン達の本能でそれを理解しているのかも知れない。ただの勘違いの可能性もあるけれど、少し調べてみる必要があるな。

「…分かった。ドルガモンはいつもの特訓メニューにこの特訓も追加しよう。ただし経過を見て上手くいっていないと判断したら中止にするからそのつもりでね」

「本当!?ありがとう、ゴーシユ！」

「勿論、過度に特訓するのは禁止。だから続きは明日、分かった？」

「う、うん…分かった」

何か進化の手がかりが掴めると良いな、というそれくらいの軽い気持ちで、僕はドルガモンの特訓に付き合っただけでいいことにした。

☆

ということがあったのが、つい一週間前の話である。今、僕達はあんな話し合いをしていた。それは、修行場所を変えるべきか否かというものである。理由は…話の流れで分かるかも知れないが、今日の早朝にドルガモンが完全体に進化した。

大事なことなので二回言うが、ドルガモンが完全体へと進化することが出来たのである。彼の直感は正しかったようで、外殻^{シエ}の結界^ルに必殺技を撃ち込む特訓は彼の攻撃力を底上げし、限界を迎えようとしたところで完全体へと進化。気になる能力の上昇具合だが、外殻^{シエ}の結界^ルに罅を入れることが出来るほどの威力が出た。最低限の魔力で作ったとはいえ、素晴らしい成果だ。

しかし、問題点が二つ。完全体へと進化した状態での必殺技は規模がデカく、結界を攻撃した際に起きた余波は地震のように感じた。これではこのアカネビーチ周辺にいる人達は観光どころではない。ホテル等の施設でも商売あがったりになってしまう。

もう一つは、ドルモンの完全体の姿は想像以上に巨体だった。彼だけで今回の合宿メンバー（ナツさん達も含む）を荷物もまとめて乗せられるのではないかと思うくらいデカイ。これも一般人には怪物が現れたと思われてしまうだろう。

「ごめん、ゴージュユ…また迷惑をかけちゃって」

「全然迷惑なんかじゃないよ。ドルモンが頑張った成果なんだから、もつと胸を張っていいんだ」

「そうそう！それに明らかに強そうだったぜ？」

「うん、本当にカツコ良かったよ、ドルモン！」

「元氣出して〜」

「皆…」

というわけで、僕らは修行場所を移すことにしたのだが…中々良い場所が思い浮かばない。いや、正確には僕は一つだけある。あるにはあるんだけど…許可が下りるかどうか分からない。

「…ゴージュユ、あそこなら存分に特訓出来るんじゃないかな」

「ウエンデイ…僕も多分、君と同じ考えだ。だけど…」

「二人とも、心当たりあるのかよ！」

「何処ツスか!？」

早く修行を再開したいロメオとイーロン。この二人が僕とウエン

デイが思っている場所を思い浮かばないのはきつと、行ったことがないからなんだろう。ここで悩んでいても仕方ない。許可を貰ってくれば良いだけの話なのだ。

「パタモン、申し訳ないんだけど僕と一緒に一度ギルドまで戻るよ。皆は先に向かっついていてほしい」

「オツケ」

「ゴーシユ兄、ウエンデイ姉ももったいぶってないで教えてくれよー」
「行けば分かるよ。ジェットさん、ドロイさん。そういうわけで僕らは別の場所で修行します。ナツさん達のこととは…」

「ああ、それは良いけどよ…」

「何処行くつもりなんだ？」

「他に人がいなくて、デジモン達や僕らが全力を出しても問題ない場所です」

僕の言葉を聞いて、ウエンデイとシャルルは確信を得た様子。しかしそれ以外のメンバーは分からないのか、首を傾げている。

「そんな場所あるか？」

「さあ…」

「デジモン達は行ったことあるはずなんですけどね」

「え!?!ど、何処だろう…?」

「俺だって分からないよ…」

「またアンタはそんな風に言っ…実は楽しんでる？」

シャルルのツツコミに、僕は凶星だったのは内緒にしておこう。そう思った僕は適当に愛想笑いをする。

「ゴーシユ、マスターに許可を貰ってくるんだよね?先に向かって大丈夫なの?」

「多分…いや、やっぱり待ってて。僕が許可貰ってから向かおう」

勝手に入ったら僕がマスターに怒られそうだ。ナツさん達みたいに問題児扱いされたくはないし…うん。やっぱり待っていて貰おう。

これ以上もったいぶっているとキレられそうだったので、僕はこれから行こうとしている場所を伝えた。そしてデジモン達以外にはとても驚かれたのだった。

第77話 大魔闘演武に向けて

僕らは三ヶ月の修行を終え、大魔闘演武まで残り一週間という日にギルドへと戻って来た。

「皆さん、お久しぶりです！」

「久しぶり、ウエンディ！そっちも修行は上手くいった？」

たった三ヶ月だというのに、本当に久々な気がする。皆から感じる魔力も桁違いだし、充実した修行をすることが出来たようだ。こちらに駆け寄ってきてくれたキナナさんがそう尋ねてくる。

「そんなこと、聞かねえでも分かるぜ！」

「ゴーシュ達、なんかもうブランク感じないかも……」

しかしそんな修行の日々を送っていたのは僕らも同じ事。きつと他の皆より充実していたんじゃないかとも思っている。あまり無益な争いは好まないけれど、ちよつと力比ベを試してみたいが……マックスさんやラキさんはヘコんでしまっているし、見た所ここに戻って来ている天狼組は僕らと……って、誰も帰ってきてないし。

「お前ら、ナツ達も一緒じゃなかったか？」

「そういえば、見当たらないわね？」

「あ、そのことですか……」

事の経緯を完結に説明する。といっても、途中から別行動をしたということだけ言って、星霊界がどうのという話は伝えていない。余計な不安を与える必要もないし。

「じゃあ、お前らは何処で修行していたんだ？」

「天狼島です」

「天狼島あつ!？」

「俺達だって入ったのはあの時だけだったのに……ってちよつと待て。ロメオとイーロンも行ったのかよ!？」

「へっへーん!」

「その通りッス！」

そう、天狼島こそ僕らが新たな修行場所を選んだ場所だ。あそこならデジモン達や僕らが本気を出しても何の問題も無いし人目を気

にする必要が無い。修行をするにはうってつけの場所である。

「おい、どういうことだよ！」

「いや、そんなこと言われても…ちゃんと行く前にマスターの許可は取りましたよ？」

マックスさん達から集中砲火を受けそうになった…S級試験に参加したこと無い人達は羨ましがらるだろうとは思っていたけれど、ここまでとは…ロメオとイーロンが自慢するから、思わぬとぼっちりである。

「それよりさ、俺達と勝負してくれよ！」

「今なら良い勝負が出来ると思うツスよ？」

「ほーう、言うじゃねえか！」

この会話の後、ギルドの裏で僕らは模擬戦をすることになった。

☆

何でか分からないけどその後、マックスさん達…っていうかそれから次々と帰ってくる天狼組までもが模擬戦に参加し始め、数日に渡る喧嘩大会になってしまった。皆がどれだけ強くなったのかも知ることが出来たのだから、良しとするべきなのかも知れない。でもだからといって、総当たり戦みたいにする必要は無いと思う。絶対そうだ。

さて、ここで僕らの現在の戦力を確認しよう。

まずはイーロン。造形魔法が豊富になり、単純に作った物の強度も増した。元々武器を扱うセンスはズバ抜けていたが、さらに技術も磨きをかけることが出来たようだ。マックスさん達に勝利し勢いづいていた所を天狼組に敗北した。まあ十分にレベルアップ出来ているようだ。

次はロメオ。彼も七色の炎魔法、中でも紫の炎の扱いは既にマカオさんと同等かそれ以上だ。僕も全部は見たこと無いけれど、七色の炎全部を扱えるようになったのではないかと思う。模擬戦では青と黄色と紫しか使っていないけど。戦績はイーロンと大体一緒だ。

意外なのはシャルルだ。彼女は世界図書館で変身魔法に関する魔導書を手に入れ、秘密裏に習得しようとしていた。持続時間は今の所数秒程度ではあるものの、既に人型にはなれるようだ。今後は変身の持続時間を延ばすことが課題だと本人が話していた。確か、彼女が人型に変身できるようになるのはこの時期では無かったはずなので、これは喜ばしいことだと思う。もしかすると彼女は変身魔法の適性が高かったのかもしれない。

そしてウエンディ。いくつか攻撃用の魔法を習得し、付加術も強化されている。僕ら四人の中で接近戦が一番強いのは多分彼女だと僕は思っている。勿論、滅竜奥義も二つとも習得することにも成功したようだ。まあ、片方はまだ使ったことが無いので分からないと言っていたけれど。あまり模擬戦には参加しないようにしていたが、天狼組の皆にも勝利することが出来ていた。S級のミラさん相手には戦おうとは思えなかったように棄権していたが。怖がりな直ったわけではなかったようだ。

ついでに、デジモン達だが…天狼島での特訓により、全員が完全体へと進化出来るようになった。ちゃんと完全体の状態での戦闘訓練も何度もやっている。彼らも模擬戦に参加しようとしていたんだけど…人目につくから僕が止めた。必殺技の威力で余波が…っていう理由だったけど、そこは別に問題なかった。フリードさんの術式や僕の結界があったし。問題は姿が大きすぎることに。マグノリアに近い場所で戦っていたので、何度もクドいようだが町の人に見られてパニックになる恐れがある。過敏に反応しすぎと思われるかも知れないけど、本当に人に見られたら大変だ。高確率で討伐対象として依頼が貼り出されたりするかもしれない。

僕の予想では、天狼組の皆とも良い勝負出来るんじゃないかと思う。相性によっては勝てるかもしれない。

と、最後に僕。特訓の成果は、新たな結界魔法が外殻^{シエ}の結界^ルを含め六つ。そして“緑竜”の滅竜魔法をかなり高いレベルで扱えるようになったおかげで接近戦もこなせるようになった。実はもう一つ結界魔法を習得しようとしていたんだけど…完成するのが間に合わなかった。あと一歩で完成しそうなんだけど、失敗の理由が分からないんだよなあ…

出来ないのは仕方が無い。で、僕の模擬戦の結果は大体ウエンデイと一緒に。天狼組の皆にも何とか勝利することが出来た。ミラさん相手にも戦ってみたけど、攻め手が足りずこつちが途中で降参した。緑竜の滅竜魔法という攻撃手段を得たとはいえ、僕の本質はやっぱり防御なんだなと実感したよ…でも、加減されていただろうけれど全ての攻撃を防ぐことが出来たのは嬉しかった。

とまあそんな感じで、数日に及ぶ模擬戦という名の喧嘩大会はようやく終わった頃…ようやく、ナツさん達が帰ってきた。

「皆さん、無事だったんですね！」

「心配をかけたな、ウエンデイ。お前たちの修行は上手くいったか？」

「勿論だぜ、エルザ姉！」

「俺達、マックスの兄さん達なら勝てるようになったんスよ！」

「凄いじゃない！マックス達だって強くなってるのに」

「ロメオ君もイーロン君も、随分強くなれたのね」

「俺達だって強くなってる…はずだ」

「…？はずって？」

予想通り、バルゴの星霊界の危機という話は嘘だったらしい。七年の凍結封印からルーシイさんが帰ってきたことを星霊達も祝いたかったらしく、ナツさん達はその宴に行ってきたようだ。星霊界で宴会という、普通ならば絶対にしない体験。ルーシイさんが星霊に愛されていたからこそ出来た貴重な体験だが、その代償は大きかった。星霊界で一日を過ごすすと、アースランドでは三ヶ月経つのだ。というわけで、ナツさん達がアースランドのアカネビーチに戻って来たのは五日前。

絶望しかけたが、そこで思わぬ出会いがあり光明が見えた。ジェラルール：あ、勿論アースランドの方のジェラルールと、元悪魔の心臓グリモアハートのウルティアとメルデイが接触してきた。彼らはこの七年で牢から脱獄し、完全独立ギルド・魔女の罪を結成した。彼らはゼレフの手がかかりを探しているとのこと、ナツさん達にある調査を依頼し、その前払いの報酬として誰でも持っているという魔力の器、第二魔法源セカンドオリジンを解放して貰ったそうだ：かなり痛かったらしい。で、ある調査というのは、毎年開かれる大魔闘演武の開催中に妙な魔力を感じるそうだ。妙な魔力というのは、ゼレフに似た邪悪な何か。その魔力を探りできる限りの調査はしたが何も得られず、残るは大魔闘演武の会場のみ。目立つ場所は避けなければならぬ為、ナツさん達に依頼してきたということだ。

まあとにかく、ナツさん達もちゃんとパワーアップしてきたということだ。僕達と同じようにナツさんと戦ったマックスさんが秒殺されていたから間違いない。けど、どうやらまだ実感はないそうだ。「俺達も一度アカネビーチに戻った方が良かったんじゃないか？」
「そんな方法があるなら、俺達もパワーアップしたかったツス：」
「ここから、二人とも！楽しんでパワーアップなんて考えたら駄目だよ！」

「ああ、それにあれは：興味本位で受けるもんじゃねえ。生半可な覚悟じゃ耐えきれねえ痛みだ」

グレイさんに諭されて、ロメオとイーロンも馬鹿な考えは止めてくれたようだ。確かに第二魔法源セカンドオリジンの解放なんてウルティアさんじゃないと出来ないだろうし、一度解放出来れば格段に強くなれるのは間違いない。でも、こういう地道な努力を度外視した方法なんて本来はとるべきではないのだ。まだまだ強くなる余地があるなら尚更だ。

「おお、ナツ達も戻って来たか」

「お、じっちゃんー！」

「とりあえずギルドに集まってくれい」

マスターの呼びかけに答えて、僕らは全員ギルドの中へと移動す

る。そして遂に、大魔闘演武に出場するメンバーが呼ばれた。

「ナツ！」

「よっしやー！」

「グレイ！」

「当然だな」

「エルザ！」

「お任せを」

「そして、ルーシィにウエンデイ！」

「「ええ!?!」」

最後の二人が何故か驚いている。そしてウエンデイはマスターの目の前まで移動する。

「無理ですよ！ラクサスさんやガジルさんもいるでしょう？それに
ゴーシユだって…」

「だってまだ帰って来ないんだもん…」

「大丈夫だって、ウエンデイ。一緒に修行して、僕とウエンデイはほぼ
互角。だったらまだ攻撃用の魔法も習得しているウエンデイが出る
べきだよ」

僕は相手の攻撃を防ぎきる自信はあるけど、どうしても攻め手に欠
けるのは間違いない。

エルザさんの掛け声で他の皆も闘いの声を上げる。きつとこのチー
ムなら、勝ち抜いて行けるだろう。ウエンデイも最初こそ緊張した様
子だったけれど、やる気の方が勝っているようだし大丈夫だと思う。

「ゴーシユ、ちよつと来てくれる?」

「はい?」

他の皆は王都へと向かう準備を始める為解散したんだけど、ミラさ
んから突如呼び止められた。他に残っているのはマスターとジユビ
アさんくらいしかいない。

「どうしたんですか?」

「うむ、実はな…お主ら三人にも大魔闘演武に出て貰おうと思うの
じゃ」

「え?それはグレイ様やルーシィが出るのでは…?」

「ルールブックを見る限りだと、一つのギルドに対してチームを二つ出場させることが出来るみたいなの」

「まだガジルとラクサスは帰ってきておらんが、奴らが間に合うようであればお主らもBチームとして参加して貰う！」

僕がBチームに：エルフマンさんやカナさん、雷神衆の三人の誰かとかの方が勝てる気がするんだけど。本来は誰が出ていたっけ：カナさん？

「僕じゃ攻め手に欠けるのは間違いないと思いますが：」

「ゴーシユは十分強いわよ？私でも勝てなかつたし」

「お前さん達の模擬戦は見ておった。今のお前さんなら、S級魔道士を相手にしても十分戦えると判断したということじゃよ。ナツ達Aチームには内緒じゃぞ？」

「：マスターがそう言うなら従いますけど」

というわけで、僕も大魔闘演武に参加することになってしまった。こうなったら大魔闘演武までの間にもっと特訓しておかなければ！

第78話 空中迷宮

大魔闘演武が開催されるのが、ここ王都クロッカス。僕も妖精の尻尾Bチームとして参加することになったが、いつガジルさんやラクサスさんが帰ってくるのか分からないので、僕は一足先にAチームの皆に同行することにした。Aチームの五人は大魔闘参加登録チームが2チームということを知らないので、ただ単に僕は応援で来たということになっている。少し騙しているような感じがして、何だか申し訳ないような気がしてくる。

王都に着けば先に到着していたらしいマスターやチーム・シャドウギアの三人、そしてロメオとイーロン、ミッシェルさんが出迎えてくれた。何で先に出発したはずなのにギルドの皆がもう王都で待っていたのかというと：ナツさん達の調子が悪かったからだ。まだ第二魔法源解放の影響があつて、しかも途中で乗り物に乗ったからかナツさんが殆ど歩いてなかった。しかもそこで気づいたのが：まさか、僕も乗り物酔いするようになってしまったのだ。これも第二世代滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーとなった影響だろう：なので、今度僕の愛車である魔道二輪はイーロンにお下がりすることにした。とても残念だ：本当に。

つと、話が脱線してしまった。マスター達から聞かされたのは、大魔闘演武のルールについて。まあそこまで変わったルールは無い。ギルドメンバー以外の参加は不可とか、マスターの参戦を禁ずる、とか。注意すべきは指定の宿屋に深夜0時までにいるように、くらいだろう。そこで集まりは解散ということになった。

その後は皆それぞれこの王都を満喫。僕はウエンディとシャルル、イーロンにデジモン達と一緒に観光地巡りをした。結構夜遅くまで回ったが、多分王都の半分も回っていないんじゃないかと思う。それ程に広いのだ、このクロッカスは。

そして最後にクロッカス中心部にある、王が住む居城・華灯宮メルクリアスの庭園にも入らせて貰った。中は迷路みたいになっていて、かなり長いこと迷った。何で庭園をあんな迷路にしてみました

んだらうか？アトラクションというわけではないだろうに…王様とかは上から見下ろして楽しんでいるのかな？一般開放されているのって迷っている様を楽しんでいる、とか…さすがに無いか。悪趣味すぎる。

夜中に入ったのもあって、他に観光客はいなかった。一時ウエンデイ達ともはぐれてしまったのだが…そのおかげというか、思わぬ出会いもあった。わざわざ僕らに忠告するために来てくれたらしい。意外と面倒見が良いのだと思ったものだ。その人の助言に従って、僕は予定よりかなり早めて迷路を脱出。庭園の入り口で解散して、ウエンデイはイーロン達と一緒にAチームの指定宿へ。Bチームの指定宿は反対方向だったので、適当に理由をつけて別れた。

マスターの言いつけ通りに他の皆に内緒にしていたから、別れるのに凄く苦労したよ…最終的にどっかに財布を忘れたって言うて探しに行くフリをした。後から必ず来てって言われていたけど、気づかないフリして走り去ったのだ。今度、謝つとかないとな…それもこれもマスターのせいだ。

とまあそんなことがあり、あと数分で深夜0時。Bチームのメンバーもちゃんと全員この指定された宿に揃っている。僕らの他にはマスターだけだ。

「それじゃマスター、デジヴァイスをお願いします」
「うむ」

大魔闘演武の開催中、デジモン達はお休みだ。デジモン達は魔力すらないので、見方によれば僕の魔法の一部と判断されるかもしれないが、さすがにそれは反則だろう。彼らも魔導士ではないとはいえ、ちゃんと妖精フェアリーテイルの尻尾の一員なんだ。

「それにしても、こんな真夜中に開始されるなんて…」
「普通、万全な状態で公平にやるはずだけど…」
「俺あてつきりあそこでやると思ってたんだがな」

ガジルさんがクロツカスの西の岩山の上にあるコロツセオのような建物——ドムス・フラウを見ながらそう言った。それは多分他の皆

も思っていたことだろう。マックスさん達から聞いた話だとあそこでやってみたいだし…まさか、今年からルール変更とか？

「皆、そろそろ0時よ」

ミラさんがそう言ったすぐ後、0時になったことを知らせる鐘の音が壁掛け時計から鳴り響く。その鐘の音が鳴り響いている最中のことだった。

『大魔闘演武にお集まりのギルドの皆さん！オハヨウゴザイマース』

「今の…」

「外だな」

ベランダへ出て見ると、町の空中に超巨大な立体映像が映し出されていた。カボチャ頭の、小柄な人が。マスコットのなアレのかな…もう少し可愛らしいキャラにした方が良かったと思うんだけど。あれではただの怪しいコスプレイヤーだよ…ってか、挨拶が凄いやる気がない。

『これより、参加チーム113を8つに絞るための予選を開始します！』

「予選だと？」

「皆の話だとそんなのやってなかったはずですけど…」

「参加チーム113から8チームですか…」

「一気に減ったわね…」

いくつかのギルドは、僕らみたいにBチームを参加させているから参加数が多いんだろうな。でも、ここまで予定を達成しない大会って何なんだろう…これも一種のパフォーマンスなのかな。この映像、クロツカスにいれば全員見れるし。

『毎年参加ギルドは増えて、内容が薄くなつてくっ！とのご指摘を頂き、今回は本選を8チームのみで行うこととなりました！予選のルールは、カンタン！』

「ゆ、揺れてる…!?!」

「今度は何だつてんだ!?!」

僕らのいる宿が突然、巨大なタケノコのように高く伸び始める。いや、辺りを見るとどうやら他のギルドが指定されていたと思われる宿も全て同じように伸びているようだ。

『これから皆さんには競走をしてもらいます！ゴールは、本選会場ドムス・フラウ！先着が本選出場となります！魔法の使用は自由、制限はありません！早くゴールした上位8チームのみ予選突破となります！ただし、5人全員揃ってゴールしないと失格！それと、『迷宮』で命を落としても責任は取りませんので！』

カボチャ頭が説明している間に、ベランダから空中に向けて階段が出来上がっていき、いつからあったのか立体映像であるカボチャ頭の10倍以上の大きさの丸い建造物へと続いていた。どうやらあの中へ進めということらしい。

『大魔闘演武予選！空中迷宮、開始ーっ!!』

カボチャ頭その言葉聞き、僕らは顔を見合わせる。そしてすぐに目の前の階段を上り始めた。

「ドムス・フラウがゴール…だったら、町の西側に進めば良いわけですね」

「だな。絶対火竜には負けねえ」

「私はグレイ様の元へと早く行きたいです！」

「同じギルドの奴を標的にしてどうすんだ…」

「あらあら」

えつと…え？ちゃんと攻略しようとしているのって僕だけ？何か皆さん平常運転過ぎませんか？

数分走っている内に、空中迷宮スカイレビリンスの内部に入ることが出来た。中は重力がメチャクチャなようで、階段とか通路も真横にあつたり逆さまになっていたり…それに所々空や町並みが見えるので、そこから落下した場合失格になるんだと思う。

「で、真っ直ぐ会場を目指すのか？」

「でもこの構造だと真っ直ぐ行くのって難しそうね」

「だったら、一度中心を目指しませんか？下手に外側を迷うより、中心に入ってから会場を目指す方が速いと思います」

「確かに、その方が楽だな」

空を飛べたら最短で行けるんだけど…これだけ通路が立体的に入り乱れていると、浮遊結界バブルで飛んでいくには狭すぎるし。

「ミラ、一人頼む。俺が二人担いでいく」

「ええ、分かったわ」

「え、ちよ…ラクサスさん？」

「何しやがんだ！」

「どうするんです？」

ラクサスさんが僕とガジルさんを担ぎ、ミラさんはジュビアさんをしっかりと掴みサタン・ソウルを発動させた。ま、まさか…！

「こうすんのさ」

「ちよ—!?!」

ラクサスさんは帯電をし始め、足場を高速で移動しながら空中迷宮スカイレビリンスの中心部へと向かう。その後ろをミラさんもしっかりついてきていた。さ、さすがに速すぎて…酔いそう。これはさすがに僕が滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーになつていなくても酔いそうになると思う。

「でも、中心ってどこから入るのかしら？」

「さあな、どっかに入り口でもあんだろ。お前ら、近くの足場で一度降ろすぞ」

とりあえず中心部に一番近い足場で、僕とガジルさんは荷物のよう

に放り投げられた。ミラさんとジユビアさんは悠々と着地。僕らももう少しゆっくり降ろして欲しかったな…

と、その時だった。辺りに警告音のような音が鳴り響いたのだ。そして徐々に床が、というよりこの迷宮内部全体が動き始める。

「こ、これって…!?!」

「この迷宮自体が回転してんのか!?!」

「とりあえずどこかに掴まりましょう!」

幸い、回転スピードはそこまで速くない。多分最初にいた外側に近い場所だったらかなりのスピードになっていただろう。やつぱり最初から中心部を目指したのは正解だったようだ。

「と、止まりましたね…これでかなりの数が振り落とされたかもしれません。グレイ様、無事ででしょうか…」

「そうね。これが何度も続くと、方角も分からなくなりそう」

「方角…そうだ、水晶結界!」

水晶結界^{クリスタル}を六つ程作り出し、外の景色を確認して方角と上下を合わせて固定しておく。これで方角が分からなくなることはない。まだ景色が見える場所で良かった、多分中心部に入ったら分からなくなる所だったよ。

「これで方角と上下は分かるようになりました!」

「やつぱり便利だな、お前の魔法」

「それじゃ、中心への入り口を探しましょう」

それからは二回程回転が起こり、そこで運良く中心内部へ入れそうな入り口を見つけた。そのまま中に入ると、地面が空で上にのどかな街並みが見える。空に細い通路がどこかへと続いているようだ…

「おい、方角はどっちだ?」

「それが…どうやら、真上みたいなんです」

「真上って、どうやって行くんです?」

「さっきの回転を待つか、あるいは…」

「ゴーシュ、結界で足場を作ってくれない?そしたらまたラクサスが上っていけないし」

「了解ですー!」

やっぱり飛べるって便利だね。こういう競技だと圧倒的なアドバンテージになるし。

さっきと同じように上の街へと移動し、そのまま会場の方角へと高速で移動する。途中から海のようになっている場所もあったが、細長い通路もあったしラクサスさんが移動する分には困らなかつた。そしてついに。

「ラクサスⅡドレアー、ミラジエーンⅡストラウス、ガジルⅡレッドフォックス、ジユビアⅡロクサー、ゴーシユⅡガードナー。おめでとうございます！フェアリーテイル妖精の尻尾Bチーム、予選通過決定です！」

ゴール地点にてさっきの立体映像のカボチャ頭の人から、予選通過を言い渡されたのだった。

第79話 新規ギルド

『さあ、今年もやってまいりました！年に一度の魔法の祭典、大魔闘演武——!!』

実況の声が、ドムス・フラウ中に響き渡る。予選を勝ち抜いた8チームがこの本選に参加でき、僕ら妖精の尻尾^{フェアリーテイル}Bは予選2位だった。かなり効率よく進めていたと思うんだけど…どうやら上には上がいたらしい。

あの予選の内容、強さよりも魔法の応用力とか機動力を試されている気がする。地形や方角を把握したりとかマツピングに便利な魔法や、仲間を運んだりする移動系の魔法の使い手がいるチームが勝ち抜きやすいと思う。僕らは両方揃っていたけど、Aチームは殆ど戦闘メインのチームだから大変だったろうな…

案の定、Aチームは予選8位だったようだ。同じギルドとはいえ、今回はマスターから秘密にするように言われていたのでギルドの皆とも連絡を絶っている。だからAチームが勝ち残っているかどうかも分からない状況だった。ただ、マスターからある知らせは届いたので正直かなり不安だったんだ。

「良かった…ちゃんと勝ち残っていたようで」

「グレイ様なら当然です！1位もあり得たでしょうに…きつと、ルーシイとかが足を引つ張ったんでしよう」

「どうせ手当たり次第に喧嘩吹っかけたんだろ」

確かに、ナツさんにグレイさん、何気にエルザさんも喧嘩仕掛けやすいからなあ…一緒に仕事行ったら大変なんだよね。ルーシイさんの苦勞を、身をもって知った。で、その喧嘩の過程で色々壊れるし。

「大丈夫？・ゴージュ」

「ミラさん…大丈夫です。ありがとうございます」

どうやら表情に出てしまっていたようだ。気を取り直して、実況の声に耳を傾ける。

クアトロケルベロス、^{マーメイドヒール}人魚の踵、^{ブルーベガサス}青い天馬、^{ラミアスケイル}蛇姫の鱗、^{レイヴンテイル}大鴉の尻尾…多分

1位はあのギルドだろうから、やっぱり2チームとも本選参加出来るのは異例らしい。そもそも2チーム参加制度は今回からみたいだし、古株は知らないのかも。

そしていよいよ、僕らが本選会場に入場する番が来た。こんな大観衆の前に出るなんて初めてだ。でも、この緊張はそれだけではない。もしかすると、今回出場している魔導士で：僕らを標的とした奴がいるかもしれないのだ。

☆

時は遡って、大魔闘演武予選である空中迷宮スカイラビリンスが開始直前。

ゴーシュと別れた後、ウエンディとシャルル、イーロンの三人は真つ直ぐにAチームの指定宿に向かっていた所を何者かに襲われていた。イーロンが二人を庇うようにして前に出た直後、彼が倒れたのだ。

「イーロン君!?!」

「ちよつと、どうしたのよ!?!」

イーロンの傍には、黒い小さな生き物。真夜中の暗がりカゲに紛れ、自分達を襲ってきたということコトを認識した二人だったが、臨戦態勢に入る前に飛びかかってきた。この時、ある人物が助けてくれたのだ。

「ブレビー」

突然彼女達の目の前で爆発が起こった。小規模だった為、彼女達に怪我はなかったが、黒い生き物は爆発に巻き込まれ大きく吹っ飛ばされる。だがそれは決してやっつけたからではなく、その生き物は敢えて爆風をその身に受け、そのまま何処かに隠れ逃げおおせてしまった。

「大丈夫か?」

「アズマさん!」

「アンタ、まだこの辺にいたのね：助かったわ」

アズマ。元悪魔グリモアの心臓ハートの幹部・煉獄の七眷属の一人。ゴーシュ達が大天狼島にいる間に関わりを持った人物である。天狼島での一件で、彼はエルザさんと激闘を繰り広げた。その結果、魔法を過度に使いすぎ

た為に魔力に飲み込まれてしまった。彼の魔法は大樹のアーク。彼は天狼島で樹木となり生きていたのだ。

そのことをエルザから聞いていたゴーシユは、ある魔法を使った。世界図書館にあった魔導書を参考に解除魔法ディスペルについて調べ上げ、彼の結界魔法と組み合わせた新たな結界魔法・解除結界リムーブ。アズマはこの結界によってその呪縛から解き放たれたのだ。その後、ゴーシユはアズマに実戦訓練の相手をしてもらうよう頼み、それをアズマは恩返しとして受け入れた。その結果、彼らは想定以上に強くなることが出来たというわけである。

「そうだ、イーロン君！」

「恐らく今のが、俺が感じた『異様な魔力』だろう」

アズマはこの町でジェラール達を探していた。元々は闇ギルドに所属していたこともあり、どうするか路頭に迷っていたようだったのだ。ゴーシユが提案したのだ。ナツ達からジェラール達と接触した話も聞いていたし、マスターにもアズマや魔女クリムソルシエルの罪のことは報告済みしている。ゴーシユ達が王城の庭園にいた時に、異様な魔力を植物たちから感知したとのことで忠告しに来ていたのが幸いだっただ。

「…イーウンデイ、あれー」

その時シャルルが見たのが、予選開始前に出てきたあの巨大なカボチャ頭の人の立体映像。指定宿までまだ少し距離があったので、ウエンデイは予選参加出来ず…代わりに予選開始時偶々Aチームの宿にいたエルフマンが参加することになったのだ。

☆

ウエンデイを守ってくれたイーロンは魔力欠乏症——1度に大量の魔力を失った為に全身の筋力が低下する症状——になってしまった。今はウエンデイとシャルル、それと応援に駆けつけてくれていた妖精フェアリーテイルの尻尾の顧問薬剤師であるポーリユシカさんが看てくれている。

元々はウエンデイを狙ったのだろうか…恐らく一人になった瞬間を狙っていたのだろうが、ギリギリまで一人になることはなかったため人数が少なくなつたのを好機と見て仕掛けた、と言うところか。犯人

の目的も、多分だが僕らの戦力低下…その場合、本選参加ギルドの中に今回の犯人がいる確率が高い。一番確率が高いのは、マスターの息子・イワンのギルド、大鴉レイウンテイルの尻尾だ。元閨ギルドであり、注意するに越したことはない。

本当は本選開始の前に医務室に向かおうとしていたんだけど…マスターからイーロンの伝言を聞いたんだ。「俺は大丈夫だから、兄貴も頑張つて下さい」だって。昼間の王都見学で勘づかれていたらしい。Bチームの宿にどうやって行こうかと、かなりソワソワしてただろうし…マスターからも事情は説明したつて。ここまで言われたら、本選に集中しなきゃね。

『予選2位通過！おーっと、これは以外！墜ちた羽の羽ばたく鍵となるのか！まさかの、まさかのー、妖精の尻尾Bチームだーっ!!』

そんなアナウンスと共に、会場へ入場するBチームの5人。Aチームの皆を始め、他のギルドの面々や観客も驚いている。良かった、Aチームの時みたいに罵声じゃなくて。ブーイングなんてされたら萎縮してしまつていただろうから。

観客はともかく、他のギルドの面々はちゃんと2チーム制度を知っていたようだ。中には知らずにいた人達もいたようだけど。ちゃんとそこら辺は実況で説明してくれた。ドツキリに成功したマスターは高笑いをしている。他の皆も最初は驚いていたが、嬉しい誤算として盛り上がっていた。

「冗談じゃねえ!!」

実況で、個人競技でも手を組んで戦えるという話をしていた時にナツさんが声を張り上げた。別チームとして出場したのだから、正々堂々勝負すると。実況を聞いていてそれもアリだと思つていたけど、やっぱり勝負事でそんなことをしたりはしないよね。こっちも望むところである。

…というか、スルーしかけていたけど何で初代いるの？天狼島から出てきたのだろうか？別に良いけど…これは、無様な所は見せられないな。

良く見たら、ラミアスケイル蛇姫の鱗とかブルーベガサス青い天馬とか、知っているギルドでも見

たこと無い人がいる。シエリーさんに似た僕と同年代っぽい子とか、全身青いウサギの着ぐるみを着た人とか。

「エルザさんー！」

「ゴーシユ、お前もBチームだったとはな…イーロンの件だが」

エルザさんの見立てで…というか、やっぱり大鴉レイウンテイルの尻尾は黒だったよ
うだ。黒いマントを着た、肌の青い男。奴の肩の上に例の黒い生き物
が乗っているのを発見した。さつき、Aチームに直接喧嘩を売ってき
たらしい…でも、あいつだけは僕が直接戦いたい。イーロンにウエン
デイ…僕の大切な人達をを狙ったことを、後悔させてやる。

『さあ、いよいよ予選突破チームも残すところあと一つ…そう、皆さん
既にご存じ！最強、天下無敵、これぞ絶対王者！剣咬セイバートウズの虎だあーっ!!』

観客の盛り上がりも頂点に達しているようで、これまでとは比較に
ならない程の歓声だ。さすが、ファイオーレーのギルドというだけのこ
とはある。出場してきた面々も自信満々といった立ち振る舞い。威
風堂々、そんな言葉がよく似合う印象だった。

「出てきたか」

「楽しもうぜ、ナツさん？」

「何ガン垂れてんだゴラ」

「ガジル…」

早速、滅竜魔導士ドラゴンスレイヤー同士のにらみ合いが始まった。多分喧嘩を売って
いるわけではないんだろうけど、二人とも目つき悪いし絡み方が完全
に不良のそれだから喧嘩売っているようにしか見えないんだよな…

そしていよいよ、大魔闘演武七日間のプログラムが発表された。会
場のど真ん中に大きな石版が地面から競り上がってきたのだ。しか
し、発表されたとは言っても殆どが“???”で埋め尽くされており、1
〜4日は前半に競技名、後半はバトルと書かれているのみ。ここも1
日目以外の競技は分からなかった。これじゃ、プログラム発表とは言
わないんじゃないか…？5〜7日目は何をするのかも良く分からな

い。

ここで、大魔闘演武のルールを簡単に整理しよう。

まずは競技パート。これは成績を争うようなもので、1〜8位にそれぞれポイントが割り振られる。1位が10p、2位が8p、3位が6p、4位からは4pから1pずつ減っていく。つまり8位は0p、無得点だ。この競技パートは競技名だけ先に教えられて、出場者はこちらで自由に選べるらしい。

次にバトルパート。こっちは主催者側で出場者を決められている。ファン投票がどうか言っていたが、大体国王とかの意見通りになるんだろう。一日に一对一で4試合、勝ったら10p、負けたら0p、引き分けだったら両者に5pずつ入る。

問題なのは、競技パートとバトルパートの両方に出ることになる人もいれば、バトルパートのみに参加する人もいるということ。競技パートでは魔力温存も考慮に入れなければいけない。

『ではこれより、大魔闘演武オープニングゲーム、ヒトウン隠密を開始します！参加人数は各チーム1名、ルールは全選手が出揃った後に説明します！』

各チームが続々と参加者を決めていく。ヒトウン隠密か…これは、僕が参加するべきだろう。この中だったら一番隠れるのに向いているし。

『妖精の尻尾Aからはグレイ||フルバスター！』

「あくん、グレイ様が出るならジユビアも♡」

「ちよつと待って下さい！ここは僕に行かせて下さい！」

「…ま、ジユビアよりはマシだろ」

「頼んだわね、ゴーシュ！」

「もう決定ですか!?!」

やっぱり全員ジユビアさんが出ることになし不安があったようだ。グレイさんが出るのだから、ジユビアさんがそっちに気をとられるのは分かりきっているしね。

「それじゃ…行つてきますー！」

落ち込んでいるジユビアさんを皆に任せて、僕は競技に参加する為に歩き出した。

第80話 隠密

「各チーム、ヒドゥン 隠密の参加者は前へ！」

僕以外の参加者は、さつきアナウンスで言っていた通りAチームからグレイさん、フミアスケイル 蛇姫の鱗からはリオンさん、ブルーベガサス 青い天馬からはイヴさんが参加するようだ。他のギルドは関わりが無かったからどういう人達なのか分からないけど…なんか、レイザンテイル 大鴉の尻尾の参加者は人に見えないんだけど。他の種族だと言われた方が納得出来る。肌が紫色だし、背が低すぎるし。

「よう、ゴージュ」

「グレイさん…そういうえば、最強チームの皆さんと戦うって初めてかもしれないですね。エルザさんとはありましたけど」

「だな…ってか、お前エルザと戦ったのか？」

「はい、天狼島で一次試験の時に。言ってませんでしたっけ？」

「そういや、聞いたような…ま、まあお互い手加減はなしだ。全力で行くからな」

「はい！」

グレイさんは若干顔を引きつった後、気を取り直してそう宣言してくれた。エルザさんに対してそんなに怯えなくても…まあ、いつも武力行使で喧嘩を止められていたから仕方ないかもしれないけど。

「…っーか、予選の時から気になってたんだが…お前、何？」

「み、見ての通り、カボチャです」

「マスコット…何ですか？」

「あれ…質問した俺が悪いのか？」

予選の時に立体映像で映し出されていた、あのカボチャ頭さんを見てそう尋ねたグレイさん。マスコットでもっとこう…いや、止めておこう。カボチャを被った二頭身くらいの人でも、この世界ではマスコットで通じるんだろう。そう、思うことにしよう。

「毎年のことだからね。余り気にしてなかったけど…」

「多分、主催者側の役員だと思うの」

「「キャラ作り、ご苦労様です！」」

「ノンノン！楽しんでやってるから良いんだカポ〜」

「無理矢理キャラを濃くすんなよ…！」

「まあまあ…」

こういうことは暗黙の了解ってことで。着ぐるみとかの中身を気にしては負けだ。子供の夢を壊してはいけない。

「ちよつと待って下さいや。これから始まる隠密ヒドウンって競技、どんなモンか知りやせんがね…いいや、今後全ての競技に関してですがね？どう考えても二人いる妖精さんが有利じゃありませんかねえ？」

「あ？」

などと、大鴉レイヴァンテイルの尻尾の紫色の人がカボチャ頭さんにいちやもんをつけ始めた。この人…明らかに僕らの邪魔をしようとしているな。イーロンのことといい、手段選ばずに僕らを潰すつもりか。何だかやっていることが小悪党っぽいんだけど…どうも小物って印象を受けてしまう。

「仕方ありませんよ、決勝に同じギルドが2チーム残るなんて凄いことなんですから、カポ〜」

「良いのではないかな。私の記憶が謳っているのだ…二人いることが、必ずしも有利とは言えないと」

剣咬セイバートゥースの虎のルーファスがそう言う。他のギルドの人達も大鴉レイヴァンテイルの尻尾みたいな小物の考えではないようだ。流星は大魔闘演武本選出場ギルドのメンバーだ。

「流星だねえ…それが王者の余裕ってやつかい？」

「仲間は君にとつても弱点になり得る。人質、脅迫、情報漏洩…他にもいくつか不利的状况を構築出来るのだよ…記憶しておきたまえ」

「…忘れなかつたらな」

「…内のギルドに、そんな考えの人はいませんよ」

この人の考え方…仲間を足手まといとしか思っていないようだ。あまり好感が持てるものではない。

「フィールド、オープン〜！」

いよいよ競技開始の時間らしい。突然、カボチャ頭さんがそう大声を出したかと思いきや、僕らの周囲に次々と建物が出現し始める。この闘技場の中に町が具現化されているようだ。気づいたら、どこかさつきまでいた場所とは別の地点に転送されたらしい。

「…皆、別々に転送されたのか」

いつの間にか僕一人しかいない。それに、さつきまで観客の声で騒がしかったのに…町の中は静まりかえっていた。音の遮断もされているようだ。

町の具現化、しかも防音とかそういう特殊能力が付与されている…一体、どれだけ魔力を消耗するんだろう。そう考えると、主催者側にとんでもないレベルの魔導士がいることは想像がついた。出来れば、敵対とかしたくない相手だろうな。

『観客の皆さんは、町の中の様子を魔水晶^{ラクリマ}ビジョンにてお楽しみ下さい！参加している8名は互いの様子を知ることには出来ません！隠密^{ヒドウン}のルールは簡単、互いが鬼であり追われる側なのです！この町の中で互いを見つけ、どんな魔法でも構いません！一撃を与える！ダメージの有無を問わず、攻撃を与えた側が1p獲得です！』

さつきまで殺風景だったのが、周囲がいきなり光り出し…大量の、僕らのコピーが出現した。この中に紛れ、そしてこの中から他の参加者を探し出し攻撃しろということか。

『これは、皆さんのコピーです！間違えてコピーに攻撃した場合、1pの減点となります！さあ、消えよ！静寂の中に！闇夜に潜む黒猫が如く！隠密^{ヒドウン}、開始—っ!!』

何故か音を遮断しているはずのこの町に、開始の合図の銅鑼の音が聞こえた。

「さて、どうしようか…」

これだけコピーがいて、しかもコピー達は動作の途中…まるで写真をそのまま実体化させたような状態で固定されている。試しに自分のコピーを押してみると動きはするが…こんな中で動いたらすぐにバレてしまう。とりあえず、半径10mくらいで索敵^{サーチ}結果^チを発動させ

ておくか。それだけあれば結界の外から攻撃されても感知して防衛出来る。

これ、ジユビアさんが出てたらヤバかったな… 그레이さんがこんな
にいたんじや、間違いなく抱きつくなりしている。自分のコピー以外
は触るだけでも攻撃と見なされるかもしれないし。

この競技なら、魔法がバレることもないかも知れない。魔法がバレ
たら対策されるのは間違いないので、バレずに済むならそれが一番
だ。そう考えた僕は、ある魔法を発動させた。

『おーっとー！ 그레이がコピーへの攻撃で減点1です！この場合、10
秒後に他のエリアからリスタートとなります！また、他の魔導士に攻
撃された場合も1p減点され、他エリアから10秒後にリスタートで
す！時間があれば、リスタートは何回でも可能です！制限時間は30
分、一番得点を稼いだチームが1位です！』

どうやら、 그레이さんの方で動きがあつたようだ。この闘技場、凄
く広いから探し回るだけでも一苦労だ…30分で足りるかな。

つていうか思ったけど、この競技一日目に持つてくるには地味すぎ
ない？こんな競技だったらこの隠れている間の時間の方が長いよね
？こんな状況が殆ど動かない絵面なんて楽しくないよ、絶対。

「…」

結界内に魔力の反応を感知し、僕は真つ直ぐにそちらへ向かう…な
んてことはせず、浮遊結界で上を目指す。浮上している間に水晶結界
を石ころくらいの大きさで作り、周囲の建物よりも高くなつた所で感
知した場所を攻撃した。真つ直ぐに攻撃するのではなく、地上からコ
ピーの間を通過して、ターゲットに気づかれないように。そして、攻撃
する時は服とかを狙って——！

「え、あれ!？」

知らない魔力だったから、 그레이さんとかではないのは気づいてい
た。上から視認できたのは、人魚の踵の人だ。何が起きたか分から
ず、別の場所へと転移されたようだ。

とりあえず、これで1点！

☆

その後、同じような戦法を繰り返して順調に点数を稼ぐ。相手には一度も気づかれることなく、何が起きているのか分からないで転移させられる。反撃も出来ないのだから、減点は今の所一度もない。おかげで4pくらいにはなったはずだ。しかし：終了まで残り5分を切った所で状況が変化した。

「なんだ、これ…」

空が突然暗くなり、心なしか体が少し光っているように見える。これでは、他の参加者に攻撃されやすくなってしまおう。でも、こんな魔法は今まで一度も見えていない。今回参加している人達の魔法は大体確認出来たので、誰の魔力とも違っていったのだ。つまり、今まで一度も参加していなかったあの人：剣咬の虎のルーファスの魔法、なんだろう。

索敵結界を一瞬だけ全開し、ルーファスの居場所を突き止めた。思ったよりも距離があったが、このままでは格好の餌食。そう考えて、僕は浮遊結界から降りて、屋根を飛び移りながら少しずつ接近を試みることにした。

そう決めた瞬間だった。ルーファスから7つの光が飛び出し、その内の1つが僕の方へと向かって来た。

「外殻の結界！」

相手はフィオーレ最強ギルドの魔導士。防御結界では防ぎきれない可能性も考えて外殻の結界を発動させる。難なく攻撃を防ぎきった僕は、水晶結界を多数飛ばして攻撃した。

「ぐげっ!？」

「え…」

しかし、それは思わぬ形で阻まれてしまう。さっきの光の攻撃を躲した、大鴉の尻尾の魔導士であるナルプディングが大きく跳躍してルーファスを攻撃したのだ。距離的に僕の攻撃の方がほんの少し遅くルーファスに直撃するはずだったが、ナルプディングの攻撃はルーファスが霧のように消えた事で失敗。そして彼の後頭部に

水晶結界クリスタルが突き刺さった。

ま、まあ得点にはなつたから良しとしよう。問題はルーファスだ。本体はどこに――

「私ならここにだよ」

「っ……やられました。流石は王者、ですね」

声が届く距離にまで接近されているとは。しかも、僕は既に攻撃サッされていた。ちゃんと、索敵結界サッを常に発動させておくべきだったんだ。そう考えながら、僕は転移の光に包まれた。

僕の身につけていた服……というか、靴か。凄く小さな、本当に良く見ないと気づかない傷跡が足首の辺りについていて。これまでの僕のやり方を真似されたらしい。さっきの光の攻撃は囿で、何らかの魔法で気づかれないように攻撃されたんだ。正直、悔しいが……チャンスを窺うしかないか。

「……ラッキー……」

僕は思わず口に出してそう呟いてしまった。転移先で再度索敵結界サッを発動させると、運が良いことに、まだルーファスを捉えられる距離だったのだ。これなら、すぐに反撃できる。もう終了間近、急がないと！

「ふざけんな！ 隠密ヒドゥンつてルールを守りやがれ！」

「今のは……っ!!」

グレイさんの叫びが聞こえ、ルーファスの方を見るとグレイさんが彼に飛びかかっているのが見えた。そのまま攻撃しようとしていたグレイさんだったが、そこに第三者……ナルプディングが横やりを入れた。グレイさんを死角から攻撃してきたのだ。姿をさらしているルーファスよりも、グレイさんを潰すことを優先して。

「水晶結界クリスタル・光!!」

「ぐほっ!」

グレイさんを攻撃した直後のナルプディング目がけて、光線を発射。回避も出来ずに撃墜することが出来た。

こんな奴……普通の戦いだつたらグレイさんが遅れを取ることなんてあり得ないのに。本当に、忌々しい……!

『ここで終了——っ!!順位はこのようになりました!』

観客席の方を見ると、ランキングが映し出されていた。結果は——

1位	剣咬の虎 <small>セイバートウース</small>	10p
2位	蛇姫の鱗 <small>ラミアスケイル</small>	8p
3位	妖精の尻尾 <small>フェアリーテイル</small>	6p
4位	大鴉の尻尾 <small>レイヴンテイル</small>	4p
5位	青い天馬 <small>ブルーベガサス</small>	3p
6位	人魚の踵 <small>マーメイドヒール</small>	2p
7位	四つ首の番犬 <small>クワトロケルベロス</small>	1p
8位	妖精の尻尾A <small>フェアリーテイル</small>	0p

——となっていた。グレイさんは、ナルプディングによる集中攻撃のせいで思うように行動できていなかったので仕方ない。

周囲からの歓声は、Aチームへの罵倒が中心となっていた。こういう時、罵声を浴びせてくる連中ってちゃんと物事を見て、考えて発言しているんだろうか：僕はそれなりの順位だったのでそこまでではないけれど：やっぱり仲間が馬鹿にされるっていうのは不快だ。まあ良い。その内、目にももの見せてやる。

「ゴーシュ、お疲れ様!」

「すみません……1位狙ってたんですけど」

「気にする必要はねえさ」

「3位か……ま、上々ってとこだな」

「大鴉の尻尾……絶対に許しません!!」

ジュビアさんが燃えている……!もう他のことなんて眼中にないよ
うだ。ナルプディングって人、闇討ちされたりしないといけないだけ
……犯人候補には嚴重に注意しておかないと。

でもジュビアさんほどではないけれど、ホント……大鴉の尻尾許すま
じ。ここまで僕が怒ったのは初めてかも知れない。胸の中に渦巻く
怒りの感情を押し殺し、続くバトルパートへと意識を集中させること
にするのだった。

第81話　　ゴーシュVS. ジュラ

バトルパート第一試合は、Aチームのルーシイさんと大鴉レイヴンテイルの尻尾のフレアコロナ。ルーシイさんは二体同時開門が出来るようになり、星霊同士の力を掛け合わせてユニゾンレイドを発動させたりと善戦していた。

しかし、フレアは赤髪という炎の髪を操る魔法で姑息な手段…本選出場ギルド用の観客席にいるアスカちゃんを人質に取り、ルーシイさんを追い詰めた。

ナツさんが観客席に向かいフレアの髪を焼き尽くしたことで逆転し、ルーシイさんは大魔法を発動させる。六魔將軍のエンジェル戦で見た、星々の大魔法であるウラノ・メトリアだ。ルーシイさんはジェミニを呼び出すことで、二人分の魔力を掛け合わせて自力で発動が可能となったのだ。

だが、ルーシイさんの攻撃は外部からの干渉によって不発に終わってしまう。証拠はないが、十中八九あのイーロンとウエンデイを襲った奴だ。ウラノ・メトリアが発動直前に掻き消されたのだ。

今日一日で、大鴉レイヴンテイルの尻尾にどれだけ怒りを覚えたのか分からない。きつと、ギルドマスター達なら何が起こったか分かっただろうから、大鴉の尻尾の印象は最悪だ。しかし、観客達にはルーシイさんが自爆したようにしか見えなかったようで…ここでも罵声を浴びせていた。

第二試合は青い天馬VS. 人魚の踵ブルーベガサス、第三試合は剣咬セイバートウースの虎VS. クアトロケルベロス。両試合ともそれ程時間をかけることなく終了した。残るは僕らBチームと蛇姫ラミアスケイルの鱗だ。こっちには頼りになるメンバーばかりだし、あの人と当たらない限りは大丈夫だろう。ちなみに第二、第三試合の勝者はそれぞれ青い天馬ブルーベガサスと剣咬セイバートウースの虎だ。

『本日の最終戦！バトルパート第四試合！蛇姫ラミアスケイルの鱗、ジュラネエキVS. 妖精の尻尾B、ゴーシュガードナー!!』

「…え」

変な声が出た。マジか…ジュラさん以外なら何とかかなると思って

いたのに。しかも、僕が二連戦になる確率は低いと思っただけ
ど…。

「あらら…ゴージュ、無理しないでね？」

「こりや、負けたな」

「ガジル君、なんてこと言うんですか！」

いや、ガジルさんの言う通りだろう。流石に勝つのは無理だと僕も
思う。

「あのおっさんが相手か…勝敗は気にしなくて良い。全力で行ってこ
い」

「ラクサスさん…分かりました。行ってきます！」

勝つのは無理…だったら、引き分けを目指すでしょう。今の僕な
ら、それくらいいいけるかもしれない。

☆

ジュラさんは、この七年で聖十大魔導《せいいてんだいまどう》の序
列5位にまで上り詰めていた。聖十大魔導とは、このイシユガル大陸
で最も強大な魔力を持つ10人の魔導士のことを指す。七年前の時
点で既にこの聖十大魔導の序列10位にいたジュラさんなら納得の
強さだろう。

「ゴージュ殿、以前よりも強くなられたな」

「ジュラさん…ありがとうございます。よろしくお願いしますね…手
加減はなしで、お願いしますよ？」

「…本気で戦え、と？」

ジュラさんがその膨大な魔力を放ちながら、僕を威圧してくる。も
しかしたら、マスター・ハデスとも良い勝負出来るんじゃないだろう
か。経験の差で及ばないかも知れないけれど、多分一人でもハデスを
追い詰めることくらいは出来そうだ。

でも…何故だろう。これ程に圧倒的な魔力を全身で感じているの
に。三ヶ月前の僕であればきつと戦意喪失し逃走を決断するだろう
程に強大なのに。

「…はい。勝負というからには、全力でやりたいんです。相手がジュラさん程の方なら、尚更」

髪を緑色に変化させて僕はそう言った。これは緑竜の力を発動させると起こる現象。髪が青緑色だったのは、緑竜の魔力が微弱に漏れ出ていたことで元の紺色の髪を染めてしまっていたらしい。出来れば相手に気取られないように髪の色を変えないようにしたかったんだけど…どうすれば良いのか分からなかったので仕方ない。

「…了解した。では、真剣勝負といこう！」

戦いの途中まで出し惜しみなんてことはしない。最初から…全力で行く。一応、手はいくつか用意してあるんだ。

『蛇姫の鱗ラミアスケイル、ジュラ||ネエキスVS. 妖精の尻尾Bフェアリーテイル、ゴーシユ||ガードナー!! 本日の最終試合、開始——!!』

そのアナウンスから、さつきまで騒がしかった観客の声が殆ど聞こえなくなった。良い感じに集中できているのが分かった。

「緑竜の咆哮!!」

「岩鉄壁!!」

まずは初手で出来る最大の遠距離攻撃。緑色の竜巻がジュラさんの前に立ちはだかった岩の壁をドリルのように削っていく。しかし、このまま続けても何かしらのカウンターバウンターの準備をされる可能性がある。そう考え、僕は弾性結界バウンドを足場に大きく跳躍する。

「崖錘!!」

「外殻の結界!!」

地面から隆起した複数の岩の柱が、空中にいる僕に向かって一直線に伸びてくる。それを球体状に展開された外殻シエの結界ルで防ぐ。岩の柱が砕け散った直後、ジュラさんは巨大な岩の腕を使って連続で攻撃

を始めた。このまま防ぎ続けると、多分魔力量で勝負することになるが…その展開は望ましくないな。

「循環の結界!!」

「!」

朱色の手裏剣のような結界を手に持ち、外殻シエの結界ごと岩の腕を切り裂く。結界から落ちる僕を見て隙が出来たと考えたジュラさんが、岩の腕の向かう方向を変えて襲いかかってきた。それらを同じように真っ二つにしつつ、闘技場内を動き回って少しずつ接近を試みる。

ジュラさんの魔法は、大地を操る魔法だ。七年前もそうだったけど、遠距離でそれらを操作して戦うのが基本だ。その守りが強固だったこと、守りを破ったとしてもジュラさんの応用力の高さによって彼に攻撃を与えることすら敵わない。すぐに思いつく対策はジュラさんの守りを大幅に上回る攻撃力か、守りを追いつかせない程のスピードを持っていれば可能だろう。

「緑竜の咆哮!!」

緑竜の魔力で身体能力を高め、高速で縦横無尽に駆け回る。ジュラさんの攻撃を手裏剣で切ったり結界で防いだりしながら、何とか徐々に近づくことが出来ていた。そこから隙を見て遠距離攻撃を仕掛けるが…やっぱり咆哮じゃ、守りを一瞬で打ち砕く事も、守る前に攻撃が到達することも無理か…よし。

「…む」

『これはどういうことだ!?!いつの間にか、ゴーシユの姿が見えませんか!』

ここで、僕はある魔法を発動させた。周囲から姿を隠す魔法…即ち、隠匿魔法ヒドゥンだ。

覚えているだろうか、数ヶ月前…じゃない、七年前にマグノリアで起こったあのドラゴノイド事件。あの事件の犯人である研究者、ダフネが使っていた魔法だ。物体の姿を隠すことが出来るし、勿論自分を隠すことも可能だ。さっきの競技パートではこの魔法を使っていた

から、空に浮かんでいてもバレること無く攻撃することが出来ていたわけだ。

どうやら僕はこの魔法との相性が良かったようで…というか、これもダフネの実験体だった影響だろう。まさか、この三ヶ月の間に自力で習得できるとは思っていなかった。自力なので、多分音無の町の人達には及ばないかもしれないが、今でも十分活用できている。

ヒドゥン 隠匿魔法を発動させたままなら、僕の存在自体を感知することは困難だ。出来るだけ気配を消し、僕はようやくジュラさんの懐へと飛び込むことに成功した。

「…！」

「緑竜の…斬撃!!」

「ふっ！」

……………え？ 躲、された？ 暗殺に近い攻撃なんだけど…一体、どうやって…？

「ふん!!」

「くっ!？」

あぶなっ!?! 今、上から手刀が振り下ろされたんだけど！ あんなの食らったら、気絶じゃ済まない気がする…なんか、背が縮みそう。5センチくらい。

って、そんなアホな考えをしている場合じゃ無い。すぐさま僕はジュラさんから距離をとる。流石にあんな至近距離で攻撃が当たらなかつたからって、あの場面で思考している場合では無かつたな…反省。

「まさか、今の攻撃が躲されるとは思ってたませんでした」

「それはこちらの台詞だな。一撃も入れることが出来ぬとは」

いや、明らかに小手調べでしょ。本気で戦ってとは言ったけど、流石に最初から全力を叩き込まれるようなことはしないみたい。まだ僕のことを試しているのが分かる。

どうやって僕の居場所を探知したのか分からないけど……隠匿魔法を使った攻撃は探知されるような気がする。もう通用しないと考えた方が良さな……さて、どうしたものか。

「……」

「来ぬのなら、次はこちらから行くでしょう」

「……これは」

今までの巨大な岩での攻撃ではなく、無数の岩の礫のカーテン。緻密に操作しているその攻撃は、全方位から僕を襲う。

僕は咄嗟に外殻の結界を使おうとしたが、思い直してそれを中断した。この岩の礫は当然ながら大地を細かく砕いた物だ。結界の中の地面から攻撃することも可能だろうし、さつきみたいに空中で球体状に展開しようにも、空中に飛んだ時点で既に宙に浮いてしまっている岩の礫が、展開前に牽制される。そのまま結界を使う暇すら与えずに連続で攻撃され続けるだろうから。相手の防御を掻い潜る搦め手で、小さな一撃から絶え間ない連続攻撃に繋げる。それは、強固な防御力を持つような相手に有効な策だ。

だから、僕も同じ手を使おうと……していた。

「何と……」

パン!!という音が響く。ジュラさんが驚いたような、感心したような声を出した。ようやくしてやったっていう気持ちになるが、すぐに気を引き締めた。

会場の地面を砕いて出来た岩の礫による攻撃。仕込みが終わって……いなかっただら負けていたかもしれない。

縦横無尽に動き回りながら地面に小さな水晶結界を大量に埋め込んでおいたんだ。それがジュラさんの岩の礫の中に紛れ込んでいたので、内部から破壊させて貰った。本当はジュラさんが防御に回った隙を突いて攻撃するつもりだったんだけど、まあ結果オーライ。それにこれは攻撃に繋がられる。

「水晶結界・光！」

空中にある大量の小さな水晶結界を操作し、ジュラさんに魔力光線の雨が降り注ぐ。この三ヶ月の修行、主にアズマさんとの対人訓練の成果で水晶結界を使用した技の攻撃力も底上げされている。たとえ小さくとも、光を集中砲火させればジュラさんの岩鉄壁でも穴を開けられるはず！

「巖山!!」

と、思っていたんだけど…ジュラさんが岩の巨人のようなものに全て防がれてしまう。魔力光線が何十本もあったし、全て収束させて一点のみを攻撃してみたりしたが…それでも岩の巨人はビクともしない。こういう時の為に岩の内側を破壊するつもりだったんだが…まさか、水晶結界の仕込みがバレてた？

ジュラさんが腕を動かし、その直後僕の周囲をまた岩の瓦礫が浮かび始める。それに合わせて水晶結界を操作し、そのままぶつけるか光で粉碎していくが…一向に減る気配が無い。徐々に水晶結界を岩二つで砕かれ、さらに礫が増え続けていた。それに危機感を覚えた僕がジャンプするとジュラさんの攻撃が襲いかかるのはほぼ同時だった。

「霸王岩砕!!」

「外殻の結界《シェル》!!」

ジュラさんが合掌し、礫が僕を押し潰す。ギリギリ外殻の結界を球

体状に展開するのが間に合い、九死に一生を得る。しかし、正直現状は最悪に近い。

ジュラさんの攻撃は防ぐことが出来ているが、こちらの攻撃も殆ど通じていない。一進一退の攻防をしているように観客からは見えるかも知れないけれど、僕は殆ど手を出し尽くした。対してジュラさんはまだ余力が残っているだろう。あと残っている手は…あるにはあるんだが。

…いや、形振り構わっている場合じゃないか。

「円環殻!!」
リングシェルター

球体状に展開されている外殻シエの結界ルの表面に、全部で4つの循環サイクルの結界が展開された。これが、今の僕の使える最強の防御形態だ。つまり、奥の手。こんな観衆の前で見せるべきではないかもしれないが、これもギルドの為だ。

「ジュラさん、今の僕では貴方に勝つことは出来ないみたいです。ここからは、僕の得意分野で戦わせてもらいますよ!」

「成る程、それがゴーシュ殿の最強の盾ということか…では、僕も全身全霊の一撃を見せよう!!」

ジュラさんは合掌したまま目を閉じ、魔力を高め始める。やがてその魔力の高まりによって、大気や大地すらも振動し始めた。これが、ジュラさんの本気か…!でも、絶対に受けきってみせる!

そう覚悟を決めて、僕も魔力を高めて結界を更に強化させる。

そして。

「鳴動富嶽!!!」

巨大な爆発が、僕を飲み込んだ。

第82話 試合、決着

時間は少し遡る。

ウエンデイとシャルルは、医務室から妖精の尻尾Aチーム用の観覧席へと向かう通路を進んでいた。

「今、ゴーシユ兄がラミアのジユラと戦ってる！俺がイーロンについてるから、二人は観客席へ行ってくれ！」

と、ロメオが医務室に押しかけてきたからだ。その知らせを聞いた途端、二人は血相を変えて大急ぎで向かっていた。

「アイツも災難ね、ホント！」

「ジユラさんと当たっちゃうなんて…」

以前、六魔將軍との戦いで二人はジユラの強さを知っていた。ブレインの攻撃を一度も受けること無く完封してみせた実力の高さ。ゴーシユにはその時のことを話したりはしたが、百聞は一見に如かず。ゴーシユは本当の意味でジユラの強さを知らないのだ。

「ジユラさんって確か、聖十大魔導の序列五位になったんだよね？」

「確かね。強くなったとはいえ、それでもしあのジャガイモ頭の本気を出させたりしたら…！」

「ジャガイモって…失礼だよ、シャルル」

「それより、ゴーシユは大丈夫かしら…流石に勝つまではいけないでしょうけど、大怪我とかしそうで心配だわ」

そんな会話をしつつ、外の光が見える場所を見つけた。そのまま真っ直ぐ向かおうとした二人だったが、すぐに足を止めた。

「な、何…この魔力!？」

「大気が…震えてる！」

前方から途轍もなく巨大な魔力を感じ、歩みを止めてしまった。大気を振動させるほどの魔力を間近に感じて、本能で危険を察知したのだ。

「でも、この先って…」

「…ゴーシュ!!」

「ウエンデイー!」

感じていた魔力がすぐに消え、その直後にウエンデイーが駆け出しシャルルもそれに続く。そして、二人が目にしたものは。

呆然と立ち尽くしているAチームのメンバー達と、彼らの視線の先にある闘技場の中心。そこに立つジユラと、彼の視界全てを覆う程に広がった砂煙だった。

☆

「ゴーシュ!!」

静まりかえった闘技場内に、少女の叫び声が響いた。砂煙に視界を一切遮られた中、ゴーシュはピクリとその声に反応した。

(ウエンデイー…来てくれたのか。これは…無様な格好は余計見せられない、か)

ジユラの鳴動富嶽は、ゴーシュの外殻の結界を消し飛ばす程の威力を持つていた。

循環の結界の能力は、魔力の吸収と放出だ。結界に触れた魔法の魔力を一瞬で吸収し、放出させて魔力を回復させることも出来る。譲渡結界の強化版として考案されたこともあり、吸収時と放出時で色も変わる。吸収時は朱色、放出時は藍色という風に。

外殻の結界やジユラの攻撃を切り裂いていたように見えていたのは、触れた部分の魔力を吸収していたのだ。

その循環の結界が外殻の結界に張り巡らされている円環殻には、高い防御力と魔力吸収・放出の2つの能力が掛け合わされている。受け止めきれなかった魔力分を4つの循環の結界が全て吸収し、その余剰分の魔力を外殻の結界に放出して外殻の結界を更に強化させることが出来る。一瞬であろうと外殻の結界が持てば、相手の攻撃を利用して強化し受け止めることが出来る、そのはずだった。

そう、鳴動富嶽は、リングシエルター円環殻であれば防ぎきることが可能だったはずなのだ。しかし、ゴーシユは致命傷とまではいかずともそれなりに大きなダメージを負っていた。

(奴ら…また、こんなことを…!!)

鳴動富嶽を受け止めた瞬間、ゴーシユの全魔力が消えた。いや、消されたと言わべきだ。

魔力を失っても一定量の魔力を注いでいけば展開し続けられるディフェンド防御結界と違って、外殻の結界は魔力量によって強度を変える。つまり、ゴーシユの全魔力が消え去ったことにより外殻の結界の強度は最低値となつてしまいジュラの攻撃に耐えきれず消滅した。それでもディフェンド防御結界とほぼ同程度の強度はあるが、ジュラの渾身の一撃はそれを遙かに上回る威力だったのだ。

ゴーシユは魔力が消えた直後に全ての循環サイクルの結界を咄嗟に操作して攻撃を受け止めたが、受ける面積が足りず結界の隙間からゴーシユに降りかかりダメージを受けてしまった。循環サイクルの結界はゴーシユの魔力が消えてもある程度込められた魔力で持続させることが出来るので、生身で鳴動富嶽を受けるといふ最悪の事態は避けることが出来たが。

魔力が消えた理由…その最たる原因であるだろう人物、その人物が所属しているギルドの面々を思い浮かべ、ゴーシユは顔を歪めた。砂煙が視界を遮っていなければ、そのギルドのメンバーがいる場所を睨み付けていたことだろう。

魔力を循環サイクルの結界である程度回復させながら、砂煙が晴れるまでの間この後の作戦を考える。

(ダメージをここまで負うと、さっきまでみたいに動き回るっていうのは無理だろうな…ホーリー聖結界では毒とかは治せても傷は治せないし。となると、またリングシエルター円環殻を張り直す? 魔力を消すなんて強大な魔法、そ

う何度も使えないはず：でも、多少回復した今の魔力じゃ、外殻の結界がジュラさんの攻撃に耐えられない)

時間も既に残り十分を切っている。しかし、今のゴーシユにはそんな短時間でも耐えきる自信は無かった。循環の結界で回復したこと、魔力欠乏症にならずに済んだとはいえ、全快にはほど遠い。これ以上の回復は可能ではあるが、その前に砂煙が晴れてしまうのが先だろう。

とはいえ、今のゴーシユは勝とうとはしていない。負けないようにして引き分けに持ち込むつもりだ。しかし、このまま終わらせるつもりも無かった。

「隠匿魔法」

砂煙が晴れる前に姿を隠して、回復しながら移動を始める。他者からは見えないことは分かっているが、ジュラには先程の攻撃を防がれていることもある為、下手に近づかないようにして遠距離攻撃を仕掛けることにした。隠れ続けて時間を稼ぐという手もあるが、それをやるつもりは無かった。流石に反則だと思っっているからだ。

(ジュラさんの今の攻撃で循環の結界4つ分も充填完了するとは思わなかったけど、嬉しい誤算だったな)

「水晶結界・光！」

「！」

今の一撃で倒したと思っていたジュラは、四方からの魔力光線攻撃に反応が遅れる。それでも三方からの光線は防ぐなり躲すなりして対処したのは流石と言える。残る一方からの光線も衣服に掠める程度だった。

ゴーシユが次々と水晶結界を生み出し続け、ジュラは岩の礫で水晶結界を相殺しながら、闘技場の中心に移動してから巨大な岩の腕で全方向を攻撃していく。負傷したゴーシユでは躲すことは出来ない速度で、闘技場内に逃げ場を無くしていく。このままではゴーシユはまともに攻撃を食らってしまう。

「円環殻！」
リングシェルター

しかし、そうはならなかった。自分の周り：ではなく、自分のいる場所から少し離れた場所に結界を展開する。丁度、岩の腕がぶつかるように。魔力が吸収されたことによつて岩の腕はボロボロと崩れ、ジユラはその一点に集中攻撃を開始した。

ジユラの頭には、ゴーシユが鳴動富嶽によつて大なり小なり負傷したという考えがあつた為、この結界はゴーシユが逃げ遅れた為の苦肉の策であると勘違いするようにゴーシユが思考を誘導したのだ。そしてこれは、ゴーシユの最後の逆転のチャンスだった。

循環サイクルの結界の回復を続けていたことで、ようやく半分程度まで回復したゴーシユはこのチャンス逃すまいと、慎重にジユラの背後に近づく。

彼が持つ最大の遠距離攻撃は緑竜の咆哮だが、近距離ならばそれを大きく上回る技があつた。まだ未完成の域は出ないが、それでも八割近く完成していると言えるその技に彼は賭けた。

両手を祈るように合わせて、魔力を集中させる。最大まで溜まる前に、ゴーシユは円環殻リングシェルターの強度を弱めた。その次の瞬間に岩の腕が円環殻を粉碎した。ジユラに、やったという油断を持たせる為だ。
(今だ!!)

ジユラは背後に迫る強大な魔力を感じ取ったのか勢いよく振り返ったが、時既に遅し。隠匿魔法ヒドゥンを解除し、その分の魔力も両腕に集めたゴーシユが、勢いよく前に突き出そうとしていた。

「くっ…巖山!!!」

「——滅竜奥義!!万緑破断!!!」
ばんりよくはだん

巨大な山が作り出されたことで足場を崩され、その身を宙に投げ出されながらも、ゴーシユはその技を撃ち込んだ。

両手の爪が岩に食い込み、そこから緑竜の魔力が爆発的に流れ込む。岩の山が、水面に波紋が広がっていくかのように亀裂が広がっていき、岩の山自体が爆散した。

(よし!!)

ジユラの姿を捉えたゴーシユが彼に殴りかかったが、ジユラは半身になって躲す。そのまま方向転換をしようとしたゴーシユだったが、勢いを殺すことが出来ず倒れてしまった。

(あと、もう少しなのに:!!)

彼の想像よりも鳴動富嶽によるダメージが大きかった。ジユラの渾身の一撃を受けてもまだ動いていたのは、最後までゴーシユが諦めずに戦おうとする意志を失っていなかった為だ。動いていたといっても、歩くのがやつとの状態だった。ゴーシユは何度も立ち上がろうとするが、体を起こすことも出来なかった。

『タイムアップ!!そして、決着!!勝者、ジユラ!!ネエキス!!!』

という機械的な音声と、遠くからドラの音が鳴り響いた。

☆

負けた、かあ……いや、勝てるとは思ってなかったよ?それでも:あともうちよつとだったんだけどなあ。せめて一撃入れて、一矢報いたかった。

「はっ…はっ…はあ〜」

「大丈夫か、ゴーシユ殿」

大の字になって倒れ込んだ僕に手を差し伸べるジユラさん。息切れはしてるし溜息も出てしまったが、ジユラさんは呼吸も乱れていないし服に汚れすらもついていない。これが、僕とこの人との間にある圧倒的な力の差か。もつと強くないと…

「あ、ありがとうございます…」

ジユラさんの手を借りてようやく立ち上がる。何とか自力で立てることを確認していると、ジユラさんは右手を僕に伸ばしてきた。

「本当に強くなった。その歳でこれ程の魔導士になった君を、少し羨ましく思ってしまうな」

「いえ…やっぱり僕はまだまだです。こんなにダメージを受けたのは初めてですよ…」

「それも儂の本気の一撃でようやくだ。いずれ儂も越えられる日が来るだろうな」

「…その時は、ぜひまた勝負して下さいね」

「ああ。約束しよう」

僕も右手を出して握手に応じ、ジユラさんとそんな約束をした。そんな日はしばらく来ない気もするけどね。

「…どうやら、迎えが来たようだな。ではゴーシユ殿、失礼する」

「あ、はい。ありがとうございます」

ジユラさんが背を向けてリオンさん達がいる場所へと帰っていった。でも、どう見てもジユラさんに迎えなんか来てないけど…

「ゴーシユっ！」

「あ、ウエンデイ…はは、ちよつと、情けない姿見られちゃったね」

「全然そんなことないよ！その…カツコ良かった」

「…そ、そっか。あ、そうだ！ちよつと肩貸して貰っても良い？正直一人で歩くのも辛くてさ」

「じゃあ、真っ直ぐ医務室だね」

そのままBチームの皆にも労いの言葉をかけてもらいながら、真っ直ぐ医務室へと向かった。

1位	剣咬 <small>セイバートウ</small> の虎 <small>ウス</small>	20pt
2位	蛇姫 <small>ラミアスケイル</small> の鱗 <small>イル</small>	18pt
3位	大鴉 <small>レイウ</small> の尻尾 <small>テイル</small>	14pt
4位	青い天馬 <small>ブルーベガサス</small>	13pt
5位	妖精 <small>フェアリー</small> の尻尾 <small>テイル</small>	6pt
6位	人魚 <small>マーメイド</small> の踵 <small>ヒール</small>	2pt
7位	四つ首 <small>クアトロケル</small> の番犬 <small>ベロス</small>	1pt
8位	妖精 <small>フェアリー</small> の尻尾 <small>テイル</small>	0pt

大魔闘演武一日目、終了

第83話 一日目の夜

目を覚ましたら、目の前に知らない天井が広がっていた。

確かジュラさんとの試合の後、ウエンデイに肩を貸して貰いながら何とか医務室まで行って、ナツさん達も来てジュラさんとの戦いの感想やら労いの言葉を貰って…そこから先は記憶が無い。ああ、その途中で寝ちゃったのか。

今、何時だろう？随分長いこと眠ったような気がする。体も大分楽に…になってないな。肉体的には休めたんだろうけど、魔力は全然回復していない。だからだろうか、少し気怠く感じるのは。

「…？なんか重…あ」

体を起こすと、ベッドに突っ伏して寝ているウエンデイの姿があった。それに、デジモン達も彼女に寄り添うように寝ていた。

結構無茶な戦い方をした自覚はあるし…心配かけちゃったかな。

「…ありがとう。ウエンデイ、皆」

出来るだけ優しく、彼女の頭を撫でる。すると、少しだけ表情が和らいだような気がした。

試合内容としては、まあまあだろう。個人的には全力を出し切った、清々しい負け試合だった。あのジュラさん相手にあれだけ立ち回れば上出来…だが、思い返してみるとやっぱり反省点はある。

やっぱり防御がメインの戦い方をしてきたからか、こつちから攻めるってなるとやっぱり威力の低さが気になってしまう。循環^{サイク}の結界^{ケツガイ}で相手の防御を破り、隠匿^{ヒドク}魔法^{マジック}で攪乱させるのは良かったけど、よく考えてみれば攻撃力を重視して緑竜化して戦うんじゃないかと、遠距離^{ディフエント}で防御結界^{ディフェンシブ}とか水晶結界^{クリスタル}でジュラさん本人を攻撃する隙を作るように戦うべきだった。半端に滅竜奥義^{メツリウオウギ}を使えるようになってしまったから、不慣れな攻撃を選んでしまった。

そして良く考えたら…まだ使っていなかった手があったんじゃないか。それを使えばもう少し善戦できただろうに…まあ、後の祭りだね。戦闘^{セントウ}に使ってなかった

から忘れていたよ。

「ああ、起きたのかい」

入り口のドアを開けて入ってきたのは、顧問薬剤師のポーリユシカさん。彼女の手にはタオルケットが数枚。どうやらウエンデイ達に掛ける物を持ってきてくれたらしい。

「まだ本調子じゃないだろう。大人しくしてな」

「そうします。あの、今って何時ですか？僕はどれくらい眠ってたんでしようか？」

「丁度、日付が変わった所さ。かれこれ八時間くらいかね」

そ、そんなに眠ってしまったのか…まあそれ程消耗した戦いだったけど、やりきったって達成感もある良い試合だった。余計な邪魔も入ったし、次にジュラさんと戦うことがあつたら今度こそ一矢報いてみせる…そんな機会があるかは知らないけど。

「…その様子じゃ、まだ万全とはいかないようだね」

「分かるんですか？」

「舐めて貰っちゃ困る。それより、アンタに確認したいことがあるんだ」

「確認したいこと？」

「魔力欠乏症のとき。アンタ、魔力欠乏症に最近なつたことは？」

ああ、これはバレてるな…ま、元々隠すつもりも無かつたし別に良いか。

観念して、僕はジュラさんとの試合の最中に魔力がゼロになつたこと、それがルーシイさんの時と同じように大鴉レイヴンテイルの尻尾の魔導士によるものであること、そしてゼロになつた魔力を無理矢理回復させて戦いを続行したことを話した。

「魔力を回復させて戦い続けた…成る程、それなら症状が軽かつたことも、外傷が多かつたことも頷ける。おかしいと思っていたんだ、ウエンデイ達から聞いた話だとアンタは防御魔法が得意らしいのに、ここまで派手に傷を受けていることがね」

「ジュラさんの大技を受け止めようとしたら、防御用の結界が消えたんです。魔力吸収用の結界は残っていたので何とか耐えられましたけど」

「聖十のジュラの攻撃を受け止めたアンタの結界が優れているのか、そもそもその攻撃が大技じゃないのか…どうも、生身で受けて生きているのが信じられないね、全く」

大気が震える程に魔力を集中させて放った一撃。正直あれが全力でも納得するんだけど…試合終了後、ジュラさんはいつも通りの様子だった。あれ以上の技があるか、あれを連発出来るか…やっぱり、ジュラさんくらいの魔導士になると、本気を出したら僕ぐらいの魔導士じゃ死んでしまうだろう…もし、もしまたこんな風に手合わせしてもらえることがあったなら、その時は全力を出してもらえようになりたいな。

「あ、そうだ。イーロンもここにいるんですよね？」

「ああ、今はそこで寝てるよ」

ウエンデイの代わりに魔力欠乏症となってしまったイーロンもここにいることを思い出し、ポリーリユシカさんが指差した方を見ると、思っていたよりグツスリと眠っているイーロンが目に入る。大会が始まる直前に聞いていたから、お見舞いに来れなかったのが少し気がかりだったんだけど…大丈夫そうで良かった。

「彼の魔力も回復させようと思うんですが、大丈夫ですかね？急に魔力が増えて副作用とか…」

「そんなことも出来るのかい…そんなものは聞いたことがないよ。魔力が急速に回復することなんて殆どあり得ないことだからね、前例が殆ど無い。その前例も、この子達くらいさ」

そう言つてウエンデイに毛布をかけるポリーリユシカさん。確かに^{ドラゴンスレイヤー}滅竜魔導士は対応する魔力を食べて回復するんだし、ナツさんも前に神の炎だかを魔力がゼロの状態で食べてたっけ。彼らが特殊なのか、それとも魔力の急速回復による副作用など無いのか…どっちかは分からない。

元々、譲渡結界や循環の結界は自分や他人の魔力を回復させる方法を模索して考え出した結界だ。どっちも、一回作ってしまったら溜め込んだ魔力を出してしまわないとそのまま出現し続けるから、持ち運びが厄介だったけど。

ジュラさんとの戦いで吸収した魔力分はまだ手持ちにある。僕とイーロンを回復させるには十分だ。もしも副作用とかあったら怖いから、ゆっくり回復するでしょう。

「…にしても、安静って言葉の意味分かってるのかい」「え?」

「その魔力を回復させる方法だって魔法なんだ。魔力が全快じゃないアンタが使っても大丈夫なのかい」

「ああ、それなら大丈夫ですよ。自分が消耗しても問題ないように、いくつか僕の魔力から独立して展開出来る結界もあるので。これもその内の一つです」

あとは防御結界とか譲渡の結界とかかな。万が一僕の魔力がゼロになっても出していられる結界は。まあ枯渇する前に出しておかなければならないっていうのはあるけど、最低限の自衛や回復用の魔法くらいはいつでも使えないといざという時大変だし。

「それならいいけどね…ちゃんとウエンディ達の気持ちも分かっただけだよ」

「…それも、分かっているつもりです。今までもずっと、心配かけまくっているの…自分を犠牲に助けても、その人の心は救われない。もうこれ以上ウエンディに涙を…悲しい涙を、流させたくないですから」

元々泣き虫なのは知ってるから、泣かせないってのは無理かなと思った。だから、今後は嬉し涙だけにしたい。

「…どうやら、私が口出す必要はなさそうだ。さて、その魔力を回復させる魔法とやらを見せて貰おうじゃ無いか。ただし危ないと思っただら止めるからね」

「あ、ありがとうございます。では…循環の結界」

戦闘時は朱色だったが、今は藍色だ。循環の結界は、魔力を吸収す

る時に朱色、放出する時には藍色となる。この状態で対象に当てれば、さつきジュラさんとの戦いで吸収した分だけ魔力を回復させることが出来る。

まずは今出した掌サイズの物を、戦闘時使使用していた、藍色に変化した循環サイクルの結界ケイキに当てる。そうして吸収を終えた掌サイズの物を朱色から藍色に変化させ、次々とイーロンの体に当てまくる。これで一気に回復ではなく、魔力の回復が少し早いくらいまで回復速度を抑えられるはずだ。

「ほう…確かに、魔力が徐々に回復しているね。魔力欠乏症の治療には時間がかかるもんなんだが…これなら問題なさそうだ」

「もし良かったら、まだジュラさんの魔法から吸収した魔力が余分にあるのでお渡ししましょうか？今後魔力欠乏症の方の治療に使ってあげて下さい」

「なら、お言葉に甘えるところでしょうかね。アンタ達が今後無茶した時の為に」

「は、ははは…そんなことにならないよう、善処します…」

ポーリユシカさんの言葉について乾いた笑いしか出せなかった。

「……………」

この時の会話を寝ているはずの彼女が聞き耳を立てていたことは、僕は気づくことは無かった。

☆

あの後、イーロンは魔力が回復したことで目を覚ました。魔力が回復したとは言ったけど、実は魔力欠乏症って数日あればある程度回復するらしく…あまり循環サイクルの結界ケイキの恩恵は感じられなかった。多少でも早く回復出来たのなら良かったけど…うん。何だろう、この感じ。完全に不完全燃焼である…ややこしい言い方をしてるけど適当に流してくれ。

念の為今晚はそのまま休養することにしたイーロンを残し（彼は渋々だったが）、僕は程なくして目を覚ましたウエンディと一緒にギルドの皆がいる酒場へと向かうことにした。デジモン達はデジヴァ

イスの中で休ませておいた。どうやら遊び疲れたようだったから、起きた時に見舞いに来てくれたお礼を言おうと思う。

本当は僕も休養しろってポーリユシカさんに言われてはいたんだけど、幸い症状も軽いことだし、ウエンデイの「私が無理しないよう見張ってます」で許可を頂いた。その時少し寒気がしたような…気のせいだと思いたい。少し怖いとか、そんなことは思っていない。

「…ウエンデイ、道合ってる?」

「え?合ってるけど、どうして?」

「あ、いや…合ってるならいいんだ」

「??」

小首を傾げた後、前へと向き直ったウエンデイに手を引かれる。自覚はないみただけけど、今のウエンデイは少し様子がおかしい。心なしかはしゃいでいるというか、浮かれているというか。大方イーロンが無事に目を覚ましたことが嬉しかったのかもしれない。

ただ、彼女は何か考え事していると意識はそちらに向いてしまいがちだ。そんな状態だと、大体迷うんだよね…慣れていない町だと特に。以前…確か、化猫ケットシエルターの宿にいた頃、マグノリアに来たことがあったんだけど、確かその時も買物に夢中になりすぎて迷子になっていたことがあった。あの頃は殆ど余所の町に行ったりすることはなかったから、彼女は凄く浮かれていた。付き合わされていた僕が言うんだから間違いない。心配しすぎなら良いんだが…あの時は何時間迷ったっけな。

「あ、ゴーシユ!見えてきたよっ!」

良かった…あれからウエンデイも成長していたようだ。流石にこんな大都市で迷ったりしたら洒落にならない。最悪、索敵サー結界チを使ってマツピングを始めることになる所だった。

と、丁度酒場から小さな影が出てきた。

「あ、ウエンデイ!何処行ってたのよ…って、何でアンタもいるわけ!?!」

「シャルル!」

「大した傷じゃなかったし、寝たら動き回れるようになったからね。」

ポーリユシカさんにも許可貰ったよ」

「それ、ホントなの？ウエンデイ」

「うん。私がちゃんと無理しないように見てるから大丈夫！」

僕に確認しないでウエンデイと話し始めるシャルル。信用がないな…いや、ある意味信用なのかな。

「皆は中に？」

「ええ。さつき変な男オスがカナを負かして行つたわ。飲み勝負で」

「飲み勝負であのカナさんが負けたの？」

「ま、勝負の前に結構飲んでたけどね。そういうわけで、酔い潰れたカナを介抱してる所なの。私はウエンデイを探しに行く所だったのよ」

「分かった、急いでカナさんの所に行こう！ゴーシュも一緒に来てね！」

「あ、うん」

あのカナさんが酔い潰れる所なんて早々見れるもんじゃない。その男の人、どんな人だったんだろう。

「シャルル、カナさんを負かした男ってどんな人？」

「確か名前はバツカスって言ったわね。何でも四クアトロ首ケルベロスの番犬のS級魔道士らしいわよ。エルザも何度か戦ったことがあるけど、決着はついたことがなかったそうよ」

あのエルザさんと互角…滅茶苦茶強いな、その人。そんな人が四クアトロ首ケルベロスの番犬にいるなんて、知らなかった…って、よく考えたら僕、六魔討伐の時に関わったギルドくらいしか他のギルドのこと知らないや。今度しつかり他ギルドについて調べたりした方が良いかもな。

「…あ！ゴーシュ、ちよつと待ちなさい！」

「え、何シャルル？」

「カナさん、大丈夫ですか…!？」

酒場に入り、シャルルが後ろで僕を止めた。丁度カナさんを介抱している部屋に案内してもらったんだけど、ウエンデイが入った瞬間立ち止まり僕はウエンデイにぶつかってしまった。

「つと、ごめん。どうしたの？」

「ゴ、ゴーシュは入っちゃ駄目！」

「え？何で…」

「ウエンデイ、カナを頼む。ゴーシユは連れて行くが良いな？」

「はい…あ、私が戻るまで無理しないように見てて下さい」

「…仕方無いわね。私が見ておくわ」

「え、あの…？」

その部屋から出てきたルーシイさんとエルザさんに連行された。解せぬ。カウンター席に座らせられ、隣ではシャルルに見張られる始末…何というか、悲しくなった。

「つたく、アンタは…入っちゃ駄目って言ったでしょ」

「何で？酔い潰れただけなら、僕だって看病くらいは…」

「さつき話した男がね、戦利品だとか言ってカナのブラジャー剥いでったのよ」

…あ、それは不味いな。止めて貰って助かった…って、それを先に言つてよ。危うく理不尽な罰を受けるところだった…

「…ゴーシユ、ちよつと良いかしら」

「…？何、改まって」

「ちよつとね、予知を見たの。断片的でハッキリしないんだけど」

「…内容は？」

シャルルは、少し間を置いて…決心したように僕を見た。こういう時の予知は、多分…何か、良くないことだ。しかも、これは僕らに関係があること。そして、彼女がこんなにも悲しそうな顔をしているのは。

「…崩壊するメルクリアス。ううん、メルクリアスだけじゃないわ。何もかも…建物も、人も、抉り取られたような痕があるの。それで…」

「……シャルル？」

「……それで、その王都には……ウエンディと、赤いドラゴンがいたわ」

彼女の、一番の親友が関わっているからだ。

第84話 戦車

大魔闘演武の二日目の競技パート、種目名は戦車^{チャリオット}だ。クロツカス全体を巡るように並んだ大量の戦車の上を走るレースのような競技だ。僕はカナさんと交代し、出場ギルド用の観客席から観戦している。代わりにカナさんがリザーブ枠で参加した。僕が起きたの夜中だったし、念のためってことだね。

因みにイーロンは医務室。理由は、良く分からなかったんだけど：何か僕達が帰った後に無茶なことをしたらしい。競技始まる前に行ったら頭にデツカイ瘤があった。ポーリュシカさんの説教の影響かも知れない。見てるこつちが痛くなるほどの見事な瘤だった。

今回の出場者は、Aチームがナツさん。Bチームがガジルさんだ。何か昨日の夜に二人とも自分が出るって引かなかつたらしくて、その宣言通りに人選したわけなんだけど：今回は、戦車^{のりもの}の上を駆け抜けるレースである。つまり：

「うっぷ…」

「な、何で俺まで…」

「おえ…」

滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}の三人がダウンしている。残り一人は剣咬^{セイバートゥース}の虎のステイングだ。こんな競技だったら、グレイさんとかカナさんとかが有利だったかも知れない。トラップ仕掛けられるし。まあ、競技は事前^{フエアリーテイル}に知ることは出来ないから：いや、名前で分かるか。流星に戦車と戦うとまでは思わないだろう：多分。きつと。

っていうか、この競技って完全に滅竜魔導士潰しだよなあ：僕含めると、妖精^{フェアリーテイル}の尻尾には五人もいるし、全員チームメンバーに含まれているし。ウエンディは乗り物酔いしないけど：ガジルさんの様子から考えるに、いつかは乗り物酔いするようになるかも知れない。

「まあ：仕方無いよね。後で医務室に向かおうかな」

「そうだね…私も行くけど、シャルルはどうする?」

「……」

「どうしたの?何か元氣ないね」

「ウエンディ…そんなことないわよ。私はここで他の皆の応援してるわ」

「…まあ、シャルルが大声上げて応援しているイメージないしね。あってもウエンディの試合の時くらいでしょ」

「喧しいわね」

昨日の話は、とりあえず保留ってことにした。漠然としているし、どうすればそんな未来を回避できるのかも分からない。しかし、それ程の厄災と呼べる程の危機がこの王都に迫っていると言うことは確かだ。シャルルの予知はそう遠くない未来の出来事であるから、警戒も怠るわけには行かなくなった。このタイミングで僕がチームから外れたのは不幸中の幸い、というやつかも知れない。

ギルドの皆には大魔闘演武に集中して貰いたいので、これは僕とシャルル、そしてデジモン達だけの秘密となった。何でデジモン達も含まれたかという点、三体ともあの時の話をデジヴァイスの中で聞き耳を立ててたからだ。バレたからには、協力して貰うことにした。

それにしても、赤いドラゴン、か…イメージ的には炎のドラゴン、ってことなのかな。ドラゴンって言っても、どんなドラゴンなんだろうか?ドラゴンって言っても…どんな奴なんだろうか。手足無い奴とか二足歩行の奴とかもいるよね。しかし、炎のドラゴンって何か悪い奴って感じしないんだが…主にナツさんの印象で。荒々しい感じはするけど。

僕が対峙することになるのは間違いないだろう。というかウエンディが危険に晒されると聞かされて黙っていられるか。どつかのタイミングでシャルルに詳しく聞いておかないと。何かしら対策が思い浮かぶかも知れない。

「とにかく、二人とももつとしつかり応援しないと！」

「応援って言っても、ねえ？」

「…もう絶望的ね。この競技は捨てた方が良いわよ」

…正直、もう頑張らなくて良いですって言っただけだ。可哀想過ぎる…そんなこと言っても、絶対諦めないだろうけど。

つと、先頭集団の方は接戦のようだ。ナツさん達三人以外は、殆ど互角と言っても良いくらいの距離にいる。既にゴールは目前だから、皆温存していた魔法を使って来る頃だと思っただけ…って、トツプが大鴉の尻尾だ。昨日の連中のやり方だと姑息なのが常套手段なのかと思っただけ…ちゃんと実力がある人もいるんだな。

「波動ブースト！この衝撃波の中で魔法は使えんぞ！」

「ポツチャリ舐めちや、いけないよ！」

「魔法を掻き消す波動か…ならば！俊足の香り、ゼロ距離吸引！」

蛇姫の鱗のユウカさんが妨害と自身のスピードアップを凶った魔法を使うが、人魚の踵のリズリーという人が戦車の側面を重力操作で走ったり、青い天馬の一夜さんは鼻の穴に試験管を突っ込んで、香りの効果でスピードアップした。

三人の様子をやや後ろで見っていた、昨晚カナさんを飲み比べで制したというバツカス。彼が大きく四股を踏むと、あまりの威力に彼がいた戦車が真っ二つに大破。その余波で前方と後方の何台かの戦車も横転してしまった。

「な、なんてパワー…」

「ってか、速っ!？」

そのままバツカスは全速力で駆け抜け、戦鬪を走っていた大鴉の尻尾のクロヘビを抜き去り一位でゴール。二位から下はクロヘビ、リズリー、ユウカさん、一夜さんという順番だった。

「四つ首の番犬にこんな奴がおるとは…」

S級魔道士と言われるだけの実力はある。他のギルドのS級魔道士ってあんまり見たこと無いかも。一夜さんもS級だったはずだけど…あの人は、何というか特殊だから。後はジュラさんくらいか。

「うおおおおっ!!」

「ぐおおおおっ!!」

魔水晶^{ラクリマ}ビジョンはまた最下位争いの方へと切り替わる。ナツさんとガジルさんが少しでも前へと進み続ける中、ステイングはただ二人の姿を見ているだけだった。どうやら、この競技は諦めるつもりらしい。

「二つだけ聞かせてくれねえかな。何で大会に参加したの、アンタら？」

ステイングの疑問の聲が、会場中に響く。昔の妖精^{フェアリーテイル}の尻尾からは世間体とか気にするとは思えない。評議員に目を付けられても怯えることも無いようなマイペースなギルドが、何故この大会に参加したのかと。

「仲間の為だ…！七年も、ずっと、俺達を待っていた…！どんなに苦しくても、悲しくても、馬鹿にされても！耐えて、耐えて…ギルドを守ってきた、仲間の為に…！俺達は見せてやるんだ…！妖精^{フェアリーテイル}の尻尾が歩き続けた証を!!だから前に進むんだ!!」

そこからは、ステイングは何も話さなかった。ナツさんの言葉にギルドの皆は感動して涙を流し、二人の姿を最初は観客達も馬鹿にしていたけれど、ゴールした頃には罵声が歓声に変わっていた。

ナツさんが六位、ガジルさんが七位。ステイングは予想通り棄権した。

「ゴーシューー」

「うん。行こう！」

ただの乗り物酔いではあるが…あの様子では多分暫く動けないだろうし。ウエンデイがいればすぐに全快するだろう。

僕とウエンデイ、シャルルはナツさんとガジルさんを医務室に運んで治療する為、二人の元へと向かった。

☆

ナツさんは思いつきりグロッキーでダウンしていたんだけど、辛うじて意識を保っていたガジルさんはフラフラしながら何処かへ向

かっていた。まあ途中で回収したけど。すぐ倒れたから、無事に医務室まで運んできました。

「兄貴！そろそろ来ると思ってたツス！」

「ウエンディ姉、代わるぜ」

ロメオ、何処に行つたのかと思つていたら医務室に小型の魔水晶ラクリマピジョンを持ち込んでイーロン達と見てたのか。

ロメオがナツさんを、イーロンがガジルさんをベッドに寝かせて、僕とウエンディで治療を始める。まあ、ただの乗り物酔いだからそこまで時間はかからないとは思うけどね。

「イーロン、もう大丈夫なの？」

「勿論ツスよ！兄貴、本当にありがとうございましたツス!!」

「だからもう良いつて、多分僕が魔力を回復させなくても殆ど変わらなかつただろうし」

とりあえずこの二人の治療が先決だ。ウエンディにはナツさんの方をお願いして、僕はガジルさんを治療し始めるか。幸い、ここには二人の食料：同系統の魔力があるから、気分が良くなつたらすぐに腹一杯食べられる。

「ゴーシユ、ナツさんをお願いして良い？」

「え？僕よりウエンディがやった方が良いんじゃない？」

「それがね、前に私のトロイアが効かなくなつちやつたんだ…」

そういうえば、そんなことを聞いたような聞いていないような…どうしてだろう、思い出そうとするとこう…やり場の無い怒りが込み上げてくるような気が…？

いや、そんなことを気にしている場合では無い。ウエンディがそう言うのなら、僕がナツさんの治療に入るとしよう。

しかし、僕の治療法は聖結界ホーリィのみ。そしてこの結界はウエンディの魔法を参考にしてしているため、ウエンディの魔法の劣化版である。さらによく考えれば、ウエンディがナツさんを治療出来なかつたのは修行前の話だ。もう既に修行前とは桁違いに上達している。つまり、ナツさんが治るのは僕がその事に気づいた後だったとき。

第85話 エルフマンVS. バツカス

結局、僕はただウエンデイの治療を見ているだけに等しい状態だったな…二人とも彼女が治療してしまった。僕はただロメオやイーロンと同じように傍観していただけである。

「ふう…！」

「お疲れ、ウエンデイ」

タオルを手渡し、循環サイクルの結界を使つて魔力を回復しておいた。これでまたウエンデイは治療前と同程度まで回復したはずだ。

「うん、ありがと！もう大丈夫だよ！」

「お疲れ様ツス、お二方！」

「いや、僕は何も…」

「そんなことねえつて、ゴーシュ兄！それよりさ、二人ともバトルパト見てきたら？まだ本選出るかも知れないんだろ？」

確かに、ロメオの言う通りだ。僕達はリザーブ枠を使用しているわけだから、もしも今出ているメンバーが怪我をした時とかは僕らが代わりに出場することになる。そうなった場合の為に、他ギルドの情報を集めておくべきか。

でも、ウエンデイは残るつて言うだろうし…よく考えたら魔水晶ラクリマビジョンもここにあるんだから観戦は出来る。

「私はもう少し残るね。二人ともすぐ目を覚ますだろうし」

「…今から行つても途中から観戦になつちやうだろうから、このままここで観戦するかな」

「まあ、それもそっか」

というわけで、このまま医務室で試合を見ることにしたのだった。

☆

第一試合は大鴉レイヴァンテイルの尻尾が勝った。蛇姫ラミアスケイルの鱗のトビーさんも頑張つたようだが、相手の…クロヘビだったか。マックスさんと同じ砂魔法で戦っていた。トビーさんは近距離戦しか出来ないなので、遠距離攻撃で負けたようだ。

あのクロヘビという男、競技パートでも思つたけど中々強い。しか

し、試合後にトビーさんが首にかけていた靴下(?)をビリビリに破いた。トビーさんは三ヶ月程前から首にかけているのに気づいていなかったようで、見つかった時には大喜びしていたのだが…人が大切にしている物を壊すだなんて。やっぱり、大鴉レイザンテイルの尻尾にはまともな奴がない。

そして今行われている第二試合、エルフマンさんとバツカスさんの試合…なんだが、何か試合開始前に賭けをしたらしい。何でも…バツカスが勝ったらミラさんとリサーナさんを自分の物にするとか。エルフマンさんはそれに激怒した。

しかしエルフマンさんはただ冷静さを失うのでは無く、今までのパワーが主体の戦闘ではバツカスには勝てないと思っただのか、新たな接テイクオーバー収で素早さを使ったりして戦ったりしていたのだが、バツカスは全て紙一重で回避。打撃による多彩な攻撃をエルフマンさんに悉く当て続け…

そして今、片膝をついてボロボロのエルフマンさん。殆ど一方的な試合だ。

「エルフマンさんが…」

「あんなにボロボロで、相手は傷一つ無いなんて…」

今もまた、虎のような姿——ビーストソウル獣王の魂、ワータイガーで果敢に攻めるも、赤子の手をひねるようにバツカスは連撃を当て続ける。これでは、エルフマンさんが先に倒れてしまう。

実況席にいる週間ソーサラーの記者さんの話によれば、バツカスは劈掛掌という武術を操るそうだ。掌に魔力を収束させるといふ割とオーソドックスな魔法を最大限に生かせる掌打を得意とする武術。しかも、酔・劈掛掌という酔拳を合わせた武術も編み出しており、変則的で予測が出来ず、威力も倍増するという。

「あれ、でも…」

「うん。まだ、あの人は酒を飲んでいない」

酒瓶は持ち歩いているようだが、フィールドに入ってきた時に置い

たまたまだ。つまり、本気でも無いのにエルフマンさんを完封しているということ。流石はS級魔道士、と言った所か。

魔力の消耗も激しく、エルフマンさんはまたしても接収テイクオーバーが解けてしまった。

「エルフマンさん…」

『ほう？立つのかい…漢を連呼するだけあるじゃねえの』

『そーいや決めてなかったな……猟犬。賭け……俺が勝った場合』

『もう絶対むりだから。いいよ、何でも言ってみ』

『俺が勝ったらお前らのギルド名…大会中四つ首クアトロバビーの仔犬な』

「…え？パピーって…仔犬？」

「…どうやら、まだ何かあるみたいだね」

何か作戦があるらしい。エルフマンさんはその豪快な戦い方が目立つけど、機転が回るのだ。

そして、バツカスはついに酒瓶を手に取り、一気に飲み干す。ここからが本気…どうするんだ、エルフマンさん。

『ビーストソウル獣王の魂——』

『無駄あつ!!!』

バツカスが一瞬でエルフマンさんに掌打を当てた。ラケリマ魔水晶を通してでは完全には捉えることは出来なかったか、それとも僕の目には捉えられなかったのか…少なくとも、五発以上当てている。

「今、何が…えい！」

「これは…」

バツカスさんの両手に傷が出来ている。そしてエルフマンさんの体は全身が緑色になっていた。

『リザードマン!!当てられねえなら当てて貰えば良い!!』

恐らく防御用であろうその接収テイクオーバーを持ってしても、痛々しい傷が出来ているが…その固い無数のトゲのような皮膚によって初めてバツ

カスにダメージを与えた。

そして、ここからは我慢比べだ。バツカスさんの腕が果てるのか、エルフマンさんの体が壊れるのが先か――

「エルフマンさん……！」

「無茶だよ……こんなの」

「ウエンディ……見届けよう、エルフマンさんの覚悟を」

「……うん」

そして。

『ワイルドオオオー……っ!!!』

エルフマンさんのテイクオーバーが解け、バツカスも全身がボロボロになるまで攻撃を続けた。そして、バツカスは立ち上がり叫ぶ。

「そんな……」

「……いや、まだだ！」

バツカスはそのまま、後ろに傾く。そのまま、地面に寝転がるように。

『お前、さ……漢だぜ』

倒れた。勝ったのは、エルフマンさんだ……！

「やった！」

「これで、Aチームも10Pゲット。やったね！」

「これで俺達のチームは12Pだ!!」

「ギヒツ……すぐ追い抜くさ」

「ナツさん、ガジルさん！」

どうやら結構前から起きていたようだ。二人とも元気に喧嘩している。あれ？そういえばロメオとイーロンがいない……？

「兄貴ーっ!!」

「二人とも、その人達どうしたの!？」

「ゴイツら、武器持ってやがったんだ!俺達を襲うつもりだったんだよ」

「アンタ達、気づいてなかったでしょ」

「……何か、試合に集中し過ぎた？」

☆

「私は、エルフマンという漢を少々見くびっていたようだな。その打たれ強さと強靱な精神力は、我がギルド一かも知れん。お前が掴み取った勝利は、必ず私達が次に繋ぐ」

「エルザにそこまで認めてもらえるなんてね!」

「それだけのことをしたってわけだ」

「マジで震えたぞエルフマン!!」

「止めるよ……死者を惜しむような台詞並べんな」

試合後、すぐにこの医務室へと運び込まれてきたエルフマンさん。魔力の消耗は僕が回復出来たが、それよりも肉体的ダメージの方が酷く……全身包帯でグルグル巻きになっている。

あの医務室に侵入しようとしてロメオとイーロンに掴まった連中は、仕事を頼まれたただけと言っていた。雇い主は、大鴉レイウンテイルの尻尾。医務室にいた少女を攫おうとしたらしい。

ウエンディを狙ってきたのだと身構えたのだが、医務室にいた少女だから本当の狙いはウエンディじゃなく、競技パート後にナツさんを連れてきたルーシイさんだった可能性が高い。

とりあえずその連中は憲兵に引き渡しておいた。

「お前たちもお手柄だったみたいだな」

「ま、俺がいた時点でできっきの奴らの作戦も無意味だがな」

まあ、ナツさんとガジルさんもいるし……そもそもウエンディだけでもあの程度ならどうってことはないと思う。

「俺は情けねえがこのザマだ……後は頼んだぞ、ウエンディ」

「はい！任せて下さい！」

本当なら僕やウエンデイで治療しようとしたんだけど…エルフマンさん本人の希望だ。本選に出るかもしれない僕らに負担はかけたくないって。元々、ウエンデイの魔法は怪我の治療には向いていない。吐き気とかそういう内面的なものを治すのは簡単なんだけど。僕の魔法も言わずもがな。

「ほら、さっさと行きな。敵の情報を集めるのも勝利の秘訣だよ」

ポーリユシカさんの言に従って、僕らは観客席へと急ぐ。医務室には雷神衆の皆さんが警護に入ってくれることになったし、心配はいらないだろう。

せつかくエルフマンさんが流れを作ってくれたんだ。きっと、これからが逆転劇の始まり。気を引き締めていかなければ！

第86話

ミラジエーンVS. ジエニー

「ウエンデイ、大丈夫かしら…」

今僕は、観客席へとシャルルと一緒に向かっていた。ウエンデイはナツさん達とAチーム用の観客席へ、ガジルさんもBチーム用の観客席へと向かっていった。

「大丈夫だよ。流石にそう何度も人攫いなんて目立つことしないって」

「…気づいてなかったアンタとウエンデイには言われたくないでしょうね」

「うっ…」

いや、それは反省してます。これからはちゃんと警戒するから許して。

「それに、やっぱり気になるわよ」

「さっき言ってたこと？」

途中まで一緒だったナツさん達と、なぜ実行犯が魔力をゼロにする魔導士ではなかったのかということやシャルルが気にしていたんだけど、グレイさん達は選手が会場にいなければいけないからではないかと、シャルルの気にしすぎではないかという話になった。しかし、問題はそこでは無い。きつとシャルルは、予知の件が気になっているのだ。ウエンデイが関係していることで余計に。

「…正直、僕はシャルルが思っている通りだと思う」

「それって…」

「うん。犯人が、大鴉レイウンテイルの尻尾じゃないかも知れない。一度、さっきの憲兵さんに聞きに行くべきかもと思ったけど…あの人もグルかも知れない。正直、今出来ることは無いよ」

「…そもそも、何でルーシイが狙われているのかしら」

「そこは分からないけど…まあ、後で報告してくれるよ。今は試合の応援に集中しよう」

「…そうね」

「おーい！もう始まってるとみただぞーっ！」

先行していたロメオとイーロンが、手を振りながら知らせてくれた。確か第三試合はミラさんと青い天馬のリザーブ枠のジェニーブルーベガサスつて人だったはず。二人とも週ソラでモデルをやっている、ジェニーさんはミラさんを目標にしていたそうだ。

これ、対戦表決めてる人がファンだったのかな。明らかに狙った組み合わせなような…いや、ジェニーさんは競技パートでダウンした一夜さんのリザーブ枠だから、流石に無いか。下手をしたらミラさんと一夜さんが戦うことになっていたのかもしれないな。

「何、これ…?」

「…さあ?」

何か、二人とも水着なんだが…どういうことだ?

「ハッピー、これどういうこと?」

「あい…なんか、元グラビアモデル同士ってことで…」

「変則ルールでグラビア対決ということになったらいい」

「最低ね」

あれ、リリーここにいたんだ。ガジルさんが医務室に行ったのになかったからおかしいなと思っていたけど…まあ、そこまで心配しないか。ただの乗り物酔いだもんね。

『元グラビアモデル同士!そして共に変身系の魔法を使うからこそ実現した夢のバトル!ジャッツは私チャパティ||ローラとヤジマさん!そして週間ソーサラーのジェイソン記者が行います!』

『責任重大だねえ』

『どっちもクールビューティー!!』

『さあ、続いているお題は…「お待ち!!」なっ!?!』

大いに盛り上がっている実況を遮りフィールドに乱入してきたのは、人魚の踵の選手達。ちゃっかり水着に着替えて各々セクシーポーズをとっている。ちゃんとリズリーさんは痩せた状態で参加してるし。

これが引き金となったのか、別方向からは蛇姫の鱗ラミアスケイルのシェリーさん

と、彼女の従姉妹であるシエリアが乱入してきた。不味い、この流れだど…

「うわ、皆凄いなあ…」

「感心している場合じゃありませんよ！」

「え…まさか！」

「私達にも参加しろって!？」

「大丈夫!こんなこともあろうかと、全員分の水着を用意して来ちゃいました〜!!」

初代が凄いノリノリで、どこから出したか大量の水着が宙を舞った。そのまま初代はAチームとBチームの方へフワフワと飛んでいってしまった。これ、誰が片付けるんだ？

「兄貴、良かったツスね！」

「またウエンディ姉の水着姿が見れるぜ」

「…それは不味いな。止めないと」

「ちよ、兄貴!目がヤバいツスよ!？」

ウエンディの参加を阻止するか、もしくは競技自体を中止…否、大会自体を中断させるか。デジモン達の力も借りれば何とかなるだろう。急がなければ、ウエンディが恥ずか死するぞ。

「落ち着きなさい!アンタが暴走してどうするのよ!？」

「ハツ…!ぐ、ごめん。自分を見失っていたようだ」

かなり危ない方向に思考が持って行かれていたな…僕が暴走している間に、女性陣は殆どフィールドへと降りていったらしい。勿論、AチームとBチームの面々もいる。

でもウエンディ、大丈夫かな…最近は何年相応の明るい女の子って感じになったけど、元々は引つ込み思案な所もあったし…やっぱり心配だ。

『次のお題は…スク水!』

「何でいきなりマニアックな格好になるの?」

「ウエンディはあまり違和感ないね?」

「嬉しくないです!!」

確かに…っていうか、年齢を考えれば違和感が無いのは当然なので

は？ってか、スク水って概念があったことに驚きなんです。学校と
か見たこと無いけど…

その後も次々とお題が出されていった。

『次は…ビキニにニーソ!!』

「何か、水着だけより恥ずかしい気が…!」

『メガネっ娘!!』

「私はいつもと同じなんだけど」

『猫耳!!』

「私がしても意味なくない？」

「ボンテージ!!」

「これも一つの愛…」

「ハマりすぎ!」

「どう、エルザ？そろそろ負けを認める気になった？」

「ああん？何か言ったか」

「参りました」

エヴァグリーンさん、いたのか。今気がついたよ。

『次のお題は、ウエディングドレス!!パートナーも用意して、花嫁衣装
に着替えて下さい!』

「突然ごめんなさいね、マスター」

「これもマスターとしての務めじゃ」

「まあ、手頃な相手で」

「その方がハマったりしてね」

ミラさんはマスター、ジェニーさんはヒビキさんをパートナーに選
んだようだ。しかしマスターは通常モードだと背が低いので、角度に
よってはミラさん一人にいるようにしか見えないかも…

レビイさんはガジルさん、ジュビアさんはグレイさん（リオンさん

が誘っていたのを奪い取った)、ルーシイさんは何故か突然見計らったかのように現れたロキさん、リサーナさんはナツさんと一緒にいる。エルザさんは…ジエラール、さんと一緒に来たかっただろうな。

「ほら、早く行きなさい」

「え？…どうやったの、これ」

「良いから良いから！お待ちかねツスよ！」

イーロンに押されてフィールドに出てみたが…何故か緊張してしまふ。いつの間にかこんなタキシード姿に着替えさせられているし…良く見ればシェリーさんとレンさんとか、結婚式の予行演習みたいな感じになっているし。

と、辺りを見渡す僕の肩を後ろからトントンと叩かれた。振り返ると、そこには…ウエディングドレスを身に纏ったウエンデイがいた。

「ゴーシュ…あの」

「…綺麗だよ、すっごく」

「エへ…ありがとう。ゴーシュもカッコイイよ！」

何というか、可憐で…可愛らしくて、でも美しさもあって。見惚れてしまっていた僕にはそれしか言えなかった。

「でも、ちよつと大きいというか…何か違和感がある、気がする」

「あ、それは私も思ったよ。サイズは合わせてるけど、何て言うのかな…」

何か、馬子にも衣装って感じかな。やっぱりこういう服は着慣れていないからかもしれない。

「…あのさ」

「何？」

「その…いつかまた、お互いこの服を着ようね」

「それって…！」

「詮索は無し、だよ」

僕はそそくさとその場を後にした。気づいたら周囲の空気が凍り付いていて、どうやら原因は蛇姫ラミアスケイルの鱗のマスターだったことに少し遅

れて気づいたのだった。ウエンディは僕に追求したかっただろうけど、皆が帰っていくのに遅れてついていった。

今思ったけど、これ僕らが隅の方^{すみ}にいたから良かったものの、下手したら滅茶苦茶からかわれていたかも知れない。マジで、周囲には常に気を張るようにしなくては。

『予定を大幅にオーバーしたので、次で最後のお題にしたいと思います！』

「ミラ、これが最後よ！」

「うん、負けないわよ！」

「今までの試合の流れに沿って、私達も賭けをしない？」

「良いわね、何を賭けるの？」

「負けた方は週間ソーサリーで、ヌード掲載するのはどうかしら？」

何かヤバいこと言い始めたなあの人。ヌードって…あ、マカオさん達おじさん組が鼻血出してる。

でも、流石にそれは了承するわけが――

「良いわよ？」

…良いんだ。これ、負ける気がしないという自信の表れ？

『な、な、なんと！とんでもない賭けが成立してしまったーっ!!』

どうもあの人、何か小賢しいこと考えてそうな顔が時々出てるんだよね…隠し切れていない。あれじゃ何か企んでますよって言うてるようなものだ。ミラさんも、その事には気づいているはずだけど…？

『さ、最後のお題は、戦闘形態です!!』

そういえば、ジェニーさんも一接収^{テイクオーバー}《テイクオーバー》を使うみたいだ。鎧^{よろい}というか機械っぽいと言うか…そういう機械系を接収^{テイクオーバー}しているらしい。

「これが私の戦闘形態！」

「じゃあ、私も行くわね。今までの流れに沿って賭けが成立したんだから、今までの流れに沿って最後は力のぶつかり合いってことで良いのかしら？」

「…はっ。」

そしてミラさんは、これまで見たことも無いような姿へと変貌した。明らかに、今まで使っていた接収テイクオーバーとは格が違う…！これ、最初から普通に戦っていたら一瞬で決着ついていたのでは？

案の定というか、やはりジェニーさんは何か企んでいたようだ。大方、自分より注目性があるミラさんなら負ける確率が高いと踏んだのだろう。そして、その企みは音を立てて崩壊し始めている。

「私は賭けを承諾した…今度は貴女が力を承諾して欲しいかな？」

結局、ミラさんが勝利した。これでAチームが12P、Bチームは17Pだ。

「ごめんね！生まれたままの姿のジェニー、楽しみにしてるわね！」
「いやああん!!」

…暫く週間ソーサラーは読めないなど、僕は思った。

第87話 カグラVS. ユキノ

残る第四試合、剣咬セイバートウースの虎のユキノIIアグリアさんと人魚マイメイドヒールの踵のカグラIIミカツチさんの試合が始まった。が、初っ端からユキノさんの発言で辺りはざわめき始めた。

ユキノさんがこれまでの流れに沿って賭けをしようと提案したが、賭けとは成立した以上必ず行使されるものであり、それ故軽はずみな余興は控えたいと言う理由で賭けに乗り気で無いカグラさんに対して、

「では、重たく致しましょう。命を…賭けましょう」

どうしてそんなことをする必要があるのか分からない。ふと剣咬セイバートウースの虎の面々の様子を見れば、特に慌てた様子も無く…寧ろ、笑みを浮かべている者もいる。家族…ギルドの仲間とは思えないような、見下すような笑み。

相手は人魚マイメイドヒールの踵最強の魔導士…いくらフィオーレ最強のギルドに所属しているとはいえ驕りが過ぎるのではと思ったけど。ユキノさんの顔は、後が無いという必死さを感じさせるものだった。

「その覚悟が真のものなれば、受けて立つのが礼というもの。良からう、参られよ」

カグラも賭けに乗ってしまった…これで、負けた者の命は勝者のものである。やろうとすれば、試合後に死ねと言われたら死ななくてはいけないとなった。

「剣咬の虎の前に立ったのが、貴女の不運」

ユキノさんが懐から取り出したのは、金色の鍵。あれは、ルーシイさんと同じ黄道十二門の鍵…数多の星霊の中でトップクラスの能力を持つ星霊を持つ証だ。

「この七年で星霊魔導士はかなりの数を減らしてしまっただけ聞いてたけど…」

「ええ。それに残りの星霊魔導士も姉さんを除けば…星空の鍵の件で新生六魔將軍に狙われたウイル^{オラシオンセイイス}≡ネビルの子孫が殆どだったはずよ」
ミツシエルさんが少し暗い顔になりながらそう補足してくれた。
まだやつぱり気にしているのかな…もう終わったことだし、気にしないで良いのに。

「ほう…金の鍵、黄道十二門というやつか」

「開け、双魚宮の扉——」

「双魚宮、つてことはお魚さんだよね…」

「…ハッピー、まさか食べようとしてない？」

ヨダレが口から溢れ出ている。魚とはいえ星霊なんだから、食べるなんてそんな残酷なことを…でもどんな星霊なんだろうか。魚を大量に呼び出すとか、後は…

「——ピスケス！」

ユキノさんが鍵を上に掲げると、巨大なウナギみたいな魚が現れた。しかも、黒いのと白いの二匹。ジエミニと同じように、二匹で一对の星霊だったらしい。

ルーシイさんのアクエリアスは水が無いと呼び出せないのにあのピスケスとかいう星霊は関係無いんだな…まあ、あれだけ巨大だと呼び出せる水っていうのも海とか湖とかじゃないと無理だよな。

「やつぱり魚だ!!」

…あれを見てまだヨダレを垂らして喜んでるハッピーが凄いと
思った。

「でもあんな星霊、あの時はいなかったはずだけど…」

「そうか、ミツシエルもナツ兄達と一緒に行ったんだっけ、星霊界」

まあ…星霊界に行ったからって全ての星霊に会ったわけじゃないだろうけど。確か、星霊界の一日がこっちで三ヶ月って話だったっけ…まさか、三ヶ月間ずっと召喚していたとか…無いよね？だとしたらあのユキノさんって魔力量がルーシイさんの何倍もあることになるんだけど…

ピスケスは連携してカグラさんへと襲いかかる…が、華麗に避け

る。二体の背中を飛び移ったりして、ピスケスは上手く攻撃出来ない。その様子を見たユキノさんは、もう一本の金色の鍵を取り出した。

「身軽に躲すのであれば、その足を止めてしまえば良いだけの事」

「ルーシイ姉さんと同じ、二体同時開門…」

確かルーシイさんが黄道十二門の鍵を十個持っているから、ユキノさんが持つ物を合わせてこの場に全ての黄道十二門の鍵が揃ったことになる。世界に十二個しかないのに…そんなことあるんだな。

「開け、天秤宮の扉——ライブブラ！」

今度は人型…しかも、中々露出が高い女性のような星霊だ。さっきのグラビアバトルの熱が再燃したのか、実況や観客の男連中から野太い歓声が聞こえた。

「ライブブラ、標的の重力を変化」

「了解！」

「ぐっ…！」

ピスケスが周囲を取り囲むように動く事で動きを止めたカグラさんの重力が変化、重くなって動けなくなった所をピスケスが襲いかかった。その巨体に相応しいパワーも持っているらしく、地面を砕いた破片が辺りに飛び散っている。

「あんなの食らったら一溜まりも無いツス…！」

「…食らえば、だけどね」

「え？」

「上を見て」

そう、直撃していないのだ。今の一瞬で遙か上空に、しかもまだ上昇している。今のでカグラさんの魔法が何なのかは大体見当がついた。今の所二択だけ…

ユキノさんはライブブラに重力変化を再度使用させ、会場に聳え立つ石像にカグラさんをめり込ませる。そして、またしてもピスケスが襲いかかり——

「止まった！」

「それだけじゃないわ、あっちも！」

ピスケスが直前で動きが止まり、そのまま地面に倒れ込んだ。同じく、ユキノさんの傍にいたライブラという星霊も上からの圧力に抑え込まれている。

やっぱりカグラさんもまた重力変化の魔法を使えるんだ。しかも同じく重力変化の魔法を使うリズリーさんよりレベルが高い。あれだけの広範囲、しかもピスケスのパワーを持ってしても抗うことが出来ないでいる。

「ピスケス、ライブラ。戻って……私に開かせますか。十三番目の門」

「十三番目……？」

「…姉さんから聞いたことがあるわ。黄道十二門を凌ぐ、未知の星霊。存在すら噂程度のものだったけれど、実在したなんて」

そんな鍵が存在していたなんて…しかも、強力な力を持つ黄道十二門を凌ぐなんて、信じられない…しかし、ユキノさんの周囲に溢れ出ている異様な魔力。あれはハツタリなんかじゃないのは分かった。

「十三番目を開く…それはとても不運なことです」

「不運か…運など生まれた瞬間より当てにしておらん。全ては己が選択した事象」

「開け、蛇遺座へびつかいの扉——」

「それが私を未来へと導いている」

「——オファイウクス!!」

星霊を召喚する前に攻撃しようとしていたのか、カグラさんは真っ直ぐにユキノさんへと突っ込む。しかし、それよりもユキノさんが召喚する方が一歩早かった。カグラさんの目の前に突如出現した、超巨大な蛇。確かに、黄道十二門を凌ぐというのは本当かもしれないと思わせるだけの魔力を秘めている。

しかし、カグラさんはその巨大な蛇が突っ込んでくるのに合わせて自身も突っ込んでいった。

「怨刀、不倶戴天…抜かぬ太刀の型」

腰に携えていた刀を、鞘に収めたまま振るう。次の瞬間、オフイウクスが縦に真つ二つになってしまった。周囲を漂っていた魔力が消え、ユキノさんは無防備になり、カグラさんは――

「安い賭けをしたな…人魚は時に、虎を喰う」

――こうして、ユキノさんはカグラさんに敗北した。その場で倒れたユキノさんの命を奪うようなことはせず、命は預かったと言い残しカグラさんは去って行った。

☆

「例の魔力を感知出来ていない?」
「ああ」

二日目の夜、僕は宴会から抜け出してアズマさんと会っていた。クアトロケルベロス四つ首の番犬…じゃなかった、クアトロバビー四つ首の仔犬のバツカスさんが来て飲み比べをし始めたから簡単に抜け出せた。

アズマさんの話によれば、セカンドオリジンジェラルさん達が毎年感じていたゼレフに似た魔力。ナツさん達の第二魔力源を解放する代わりにその魔力を探るよう頼まれたらしいんだけど…今回はそれがまだ感じ取れないらしい。

「そもそも、人物なのか物なのかも分からないんじゃない、探るって言うても難しすぎますね」

「まだ参加していない出場者、観客…物体なら、まだ持ち込まれていないか、起動されていないか」
「お〜い」

「パタモン、お疲れ」

のんきな声が聞こえた方向を見ると、パタモンが飛んできていた。僕の頭に着地した。パタモンを撫でながら労いの言葉をかけた。

「どうだった？」

「うん。やつぱり、大鴉の尻尾レイザンテイルじゃなかったよ…本当の犯人は、王国に仕えている騎士さんみたい」

「犯人…先程言っていた誘拐未遂の事件かね」

「ええ。連行されていく実行犯の後を、パタモンについて行って貰っていたんです」

パタモンからの報告で、僕らは驚愕することになった。

エクリップス計画、それがどういった計画なのかは分からないが…ルーシイさんが狙われている確率が高くなった。ウエンデイのことも注意しないとだけど…ルーシイさんのことも守らなくては。後で、マスターにも報告しないと。

…マスター、バツカスさんとの飲み比べで酔い潰れてしまっていたけど、大丈夫かな。

第88話 伏魔殿

昨日の夜、マスターは見事に酔い潰れていたので朝一番に起きて貰って昨晚のことを話した。

「エクリップス…その計画にルーシイ、星霊魔導士が必要ということ、か…」

「どうしますか？このまま大魔闘演武に参加し続けるか、それとも…」

「このまま参加し続けるのは危険だ。仲間を守る為であれば、今すぐにも辞退すべきだと思う。今回の誘拐のような手段に出るといのであれば、こちらも形振り構っていらなくなる。」

「そうじゃのう…」

マスターとしては、七年間耐え続けてくれた皆の為でもあるし、優勝の三千万Jも欲しいだろうし…早くギルドも元の場所に戻りたいだろうから。体裁とかは気にしないけど、ようやく良い流れになってきた所なのだ。このまま辞退するのは出来れば避けたいはずだ。

「その必要は無いと思われませう」

「初代…」

悩むマスターに、初代が話しかけてきた。昨日は子供っぽい所があつて本当にマスターだったのかなつて疑問も持ったりしたけれど、今の凜とした姿を見ると只者では無いと納得出来る。

「どういうことですか？」

「相手が王国軍であるなら、これ以上強硬手段に出ることは無いでしょう。この大魔闘演武という大会はこの国の国王も楽しみにされています。言い換えれば、この大会に参加していれば王国軍は動く必要がなくなります。反対にここで辞退しようとするれば…」

「捕らえられるのもあり得るつてことですか…」

「成る程…」

「それに、優勝すればそのエクリップス計画とやらについて向こうから話を持ちかけてくることも十分にあり得ますね。もしも強硬手段に出たとしても、今の妖精の尻尾フェアリーテイルなら勝率は十分です！」

さらつと恐ろしいことを言うなあ…それ、下手したら闇ギルド認定されてしまうのでは？まあ、確かにその通りだと思うけど。

「な、何と…」

「分かりました…マスター、僕はそのままカナさんと交代ということの良いんですね？だったら選手以外で出来る限り警戒していきま

す」

「うむ。それと別件じゃが、大鴉の尻尾にも警戒は怠るな。奴らはあからさまに妨害してくるじやろう」

「勿論です。一日目のこと、忘れてませんよ」

とにかく、医務室にはフリードさんが妖精の尻尾のメンバー以外入れないよう術式を張ってくれているから、試合中の警戒を怠らないようにしないと。

☆

というわけで、僕らは警戒の為に各々出来ることをやってみることにした。観客席の皆とデジモン達で手分けして一般人用の観客席にばらけてもらったり、ミツシエルさんには一時的に人形化してもらってルーシイさんの傍にいる。因みに人形化しても動く事は出来るようになったらしく、ルーシイさんの腕の中で楽しそうに観戦している。そして僕は隠匿魔法でこっそり試合会場内にいた。選手達に怪しい動きが無いかは、会場内にいた方が良いからね。

さつきハッピーとシャルルから聞いたけど、ナツさんが昨晚剣咬の虎の宿に乗り込んだらしいし…ユキノさんが剣咬の虎を追いつけられたことが原因らしいんだけど、流石に問題だよな…よく普通に返してくれたな。夜はAチームの宿の見張りに行つた方が良いのかな。

つと、そろそろ三日目の競技パートが始まるらしい。

『本日、三日目の競技を発表します！競技の名前は、伏魔殿！参加人数は、各ギルド一名です！選手を選んで下さい！』

Aチームからはエルザさん、Bチームからはカナさんが出るよう

だ。

「負つけないよー、エルちゃん!」

「ああ」

あれ：確か、あの人はミリアーナさん：確か、楽園の塔でナツさん達と戦ったっていう：あまりそこら辺のことは聞いたこと無いな。あ、青い天馬からはヒビキさん、蛇姫ラミアスケイルの鱗からはジュラさんが出るよ。うだ。今回は知っている人多いな。

僕も選手が集まる場所に混じって、ルールを聞かせて貰う。どうやら今日の前に出現した巨大な空中要塞のような建造物には、全部で100体のモンスターがいるらしい。そのモンスターというのは主催者側で造り出した魔法具現体で、本物のモンスターというわけではない。そのモンスター達にはランクが設定されており、強さが変わる。S、A、B、C、Dの五段階で、討伐した数が多い順に順位が決まる、と：

問題は挑戦権のシステムか。一人ずつ中に入り、戦う相手の数も決めなくてはいけない。数取りゲームの要領で、順番もかなり重要だ。魔力の回復の計算とかもしてはいけないし、今見せて貰ったDランクの強さが大体以前戦ったワイバーンくらいな気がする：意外と長期戦が予想されるな。因みにエルザさんは一番、カナさんはラストの八番だ。これは、エルザさんが一番有利だろう。一番多く回数が回ってくるのだから。

「この競技、クジ運で全ての勝敗がつくと思っていたが：」

「クジ運で？いや、どうでしょう：戦う順番よりペース配分と状況判断の方が重要なゲームですよ？」

「いや：これは最早ゲームにならない」

エルザさんは伏魔殿バンデモニウムの入り口の前に立つ。そして、彼女は宣言した。

「100体全て、私が相手する。挑戦権は、100だ!!」

きつと、殆どの人はエルザさんを無謀だと言うだろう。しかし、間違ひなく出来ると思わせる心の強さをエルザさんは持っているのだ。「あのく…挑戦権1000つて、そんなの無理ですよ？一人で全滅出来るように設定されていません！」

「構わん」

まあ、彼女を知らない人からすれば止めたくなるのは当然だろう。審判であるマトー君も困惑しているし、他の選手達もそうだろう。

入り口からワープし、建物内に出現したエルザさん。この競技に關しては妨害を心配する必要は無いだろう。モンスターの設定を弄っているなら分からないが…それでも、エルザさんならきつと勝てる。

エルザさんの周りに次々とモンスター達が溢れ出す。見た感じだと、固そうな敵が多い印象を受けるけど…

「換装！天輪、ブルーメンブラット繚乱の劍！」

恐らく、まずは小手調べの一撃だろう。全方向に放たれた劍がモンスター達に襲いかかり、Dランクはかなりの数を倒したようだ。

続いては黒羽の鎧に換装し、殲滅していく。一撃の威力が上がる黒羽の鎧で、防御力が低いモンスターから倒していくようだ。

背後から炎を吐いてきた赤いモンスター。しかし炎帝の鎧に海王の鎧とセットの水属性の武器を装備したエルザさんには効果が無い。そのまま炎帝の鎧とセットの劍も装備し二刀流で、水の攻撃をしてきたら海王の鎧と雷帝の鎧の槍で応戦。飛翔の鎧と煉獄の鎧の武器を装備して一掃…次々と鎧と武器を入れ替えながら撃破していく。

『お、恐るべし妖精女王！ディターニア次々と換装を繰り返し、着実にモンスターを撃破!!ダメージ、魔力の消耗共に大きいものの、残すは何と、あと四体!!』

Sランクが一体、Aランクが一体、Bランクが二体。映像を見てみると、何回か黒い小さなモンスターがエルザさんの攻撃を紙一重で回

避しているが…まさか？

紅桜でSランク以外のモンスターが撃破され、やはり残り一体は黒い小さなモンスター。エルザさんが紅桜から二刀流に切り替え、モンスターの一つ目が光った次の瞬間、場所が切り替わっていた。

『さあ、バンデモニウム伏魔殿ラストの一体！しかし気づけば、バトルは決戦場へと移動しており、巨大化したSクラスのモンスターが襲いかかる!!』

今までのどのモンスターよりも屈強で、強固。消耗したエルザさんでは少し厳しそうだ。

しかし、それでもエルザさんは最後の力を振り絞って戦い続ける。その舞うような美しさを想わせる戦いはまるで、凜と咲き誇る…緋色の花。

そして、遂に。

『信じられません!!何とたった一人で、100体のモンスターを全滅させてしまったーっ!!!フェアリーテイル妖精の尻尾A、エルザ!!スカレット、圧勝!!文句なしの大勝利ーっ!!!これが七年前、最強のギルドと言われていた真の力なのかーっ!!!』

フェアリーテイル観客達は大興奮、七年前を知っている人からすれば、ようやくあの妖精の尻尾が帰ってきたと実感していることだろう。無茶苦茶だけど自由で、問題扱いされていただけど実績もあるギルド、それがフェアリーテイル妖精の尻尾なのだ。

そしてエルザさんに駆け寄って来たAチームの皆。早く治療してあげて下さい。エルフマンさん程ではないとは言えポロポロだから。まだ戦えそうな気もするけど、後に響かないようにしなければ。

バンデモニウム『伏魔殿完全制圧!!フェアリーテイル妖精の尻尾A、10P獲得ーっ!!!』

第89話 ラクサスVS. アレクセイ

さて、伏魔殿^{バンデモニアム}をエルザさんがたった一人で制覇してしまった。このままでは他の七人がOPとなってしまうので、即席のゲームが提案された。

それは、マジックパワーファインダー、略してMPFと言うらしく、これに魔力を当てることで数値化され、その点数で順位をつけていくということらしい。単純な力比べということだ。

これは、カナさんは少し不利かもしれない。ジユラさんが二位に来るだろうし、あの剣咬^{セイバートウリス}の虎のオルガとか言う人も見るからにパワータイプだ。良くて四位、という感じかな。

「それでは始めましょう！挑戦する順番は先程の通りでカポ！」

「じゃあ私からだね、キトウンブラスト！」

『数値は365！とは言ったものの、比べる基準が無いとこの数値が高いか低いかも分かりませんね…』

『MPFは我々ルーンナイトの訓練にも導入されています。この数値は高いですよ、部隊長を任せられるレベルです』

『おお！凄いいいことですね？』

「元氣サイキョー!!」

あのチューブでの攻撃、パワーより柔軟に応用できそうな所が長所だと思っけど…というか、ルーンナイトの部隊長って意外と楽になれるんじゃないや…？いや、魔導士ギルドに所属している人達から見たらそう思ってしまうだけかも知れないな。

『続いて四つ首^{クァトロバビー}の仔犬ノバリー！数値は124、ちよつと低いかな！』

「ウオ〜…」

「僕の番だね」

ヒビキさんの番になった途端、黄色い歓声が上がった。でも、この競技ってヒビキさんには厳しいだろうな…いや、前にウエンディを気絶させようとして攻撃しようとしてたし、それくらいの威力は出せるのかも？

『ブルーベガサス
青い天馬ヒビキ！魔力は95！』

「な、なんてことだ…」

そんなことは無かった…まあヒビキさんの持ち味はその分析力だから、今回は運が悪かったとしか言えない。

『続いては大鴉の尻尾オーブラー！』

『あいつ…！』

イーロンの魔力をゼロにした奴…例の黒い小さな魔物みたいな奴が懐から現れ、MPFに体当たり。ふざけたことに、威力はたったの4。あいつ、魔力を奪うという魔法が使えるけど単純な威力の高い魔法は使えないのか…？

というか、今の所最高点がミリアーナさんなだけ…これ、ナツさんとかだどどのくらいの数値なのか知りたいな。ミリアーナさんのあの攻撃、僕からしたら物足りないというか…全然威力が高いようには見えないんだよね。

『ここで剣咬の虎オルガ登場—っ！凄い歓声です!!』

『百二十ミリ…黒雷砲!!』

『さ、三千越え…!!』

『わ、私の十倍!!』

数値は3825。確かに今のは凄い威力だった…でも、あれくらいなら多分ナツさん達も出せる気がする。僕の外殻シエの結界ルでも防げるだろうし。

それより問題は次なんだが…

『さあ、それに対する聖十のジユラはこの数値を超すことが出来るのか、注目されます!』

「本気でやっても良いのかな?」

「勿論ですカポ」

魔力を集中させ始め、地鳴りが怒り始める。ジユラさんの最強の一撃がどれだけの威力なのか…MPF壊れないかな。何か、僕が食らった時より魔力集中させている気がするんだけど…

「鳴動富嶽!!」

『は、8544!!これは凄すぎるーっ!!』

うわ…やっぱ僕との試合の時は手加減してたのか。間近で見るとすぐに分かった。きつとジユラさんもあの瞬間に僕の魔力が消えたということに気づいて力を抜こうとしたのかも知れないな。

これ、カナさんはミリアーナさんの数値超えられるかな…カナさんもパワーでゴリ押しするタイプじゃ無いし、カナさんが使える魔法で威力が高いのは…祈り子の噴水とか？爆炎とかでもいけるかな？せめて酔っ払って威力の低い攻撃をしたりしないかが心配だ…あの人工ザさんが戦ってる時から飲んでて大分出来上がってるし。

そして、ついにカナさんの番が来て、上着を投げ捨てて…え？

「や、ぶちかますよ!!」

あ、あれつて…確か？観客席を見ると、初代が何やら三代目に説明していて、三代目は驚愕している。

あの時は確か扱いきれずにブルーノートに掻き消されてしまっていたけど…

「集え、妖精に導かれし光の川よ！照らせ、邪なる牙を滅する為に!!
フェアリーリッター
妖星の輝き——っ!!」

ジユラさんの一撃でも壊れることが無かったMPFが、完全に破損。9999という数値を残して跡形も無く消滅していた。

『何なんだ、このギルドは！競技パートワンツーフイニッシュ！もう誰も妖精の尻尾を止められないのかーっ!!』

「止められないよ！なんたって私達は、妖精の尻尾だからね!!」

☆

最高の結果で終わった競技パート。後半のバトルパート、その第一試合は人魚の踵マーマイドヒールのミリアーナさんと四つ首クアトロバビーの仔犬のセムスさん。巨体で回転しながらの攻撃に最初は手こずっていたミリアーナさんだったが、やがてその回転をチューブで巻き付け動きを止め、完封。人魚の踵マーマイドヒールに10P入った。

第二試合は剣咬セイバートウリスの虎のルーファスと青い天馬ブルーベガサスのイヴさん。一日目の隠密ヒドゥンでぶつかった二人だが、ここでまた直接対決となった。二人とも広範囲の攻撃をするから、巻き込まれないようにするのが大変だった。ルーファスの燃ユル大地ノ業によつて全身を焼き払われた。大火傷を負ってしまったイヴさんは立ち上がることが出来ず。剣咬セイバートウリスの虎に10P入った。

こつそり聖結界ホーリーで症状を少しでも緩和させておいたけど…あの怪我じゃ明日には間に合わないかな。明後日でギリギリ、って感じかな。

『続いて第三試合、妖精フェアリーテイルの尻尾B、ラクサス！対するは、大鴉レイヴンテイルの尻尾アレクセイ！』

…来た。ここが正念場だ。ギルドの皆も大鴉レイヴンテイルの尻尾の監視をしているし、もしもの時を考えてフィールド内に僕もいる。これ以上の不正はさせない。ラクサスさんなら心配はいらないだろうけど…念のため、だね。

試合開始の合図と共に、僕は気がついた。他の皆はアレクセイの攻撃にラクサスさんがやられている姿が見えているみたいだけど…隠匿魔法ヒドゥンを扱う僕にはもう一人のラクサスさんとアレクセイが見えている。

(ウォーレンさん、異常発生です)

(どうした、ゴージュ!?)

(今皆が見ているのは幻影…本物の二人は動いてすらいません)

(何だって!?)

(マスター、初代、幻影の解除も恐らく可能ですが…)

ラクサスさん達選手には負担をかけないように僕がフィールドにいることは知らないはずだが…どうやら気づいているようだ。小さく首を振ってこのまま続けるつもりでいる。

(このまま様子を見ましよう。皆も気づかないフリを続けて下さい)

ラクサスさんに接触してきたのは、ルーメンイストワールとやらの在処を聞き出す為。口の堅い三代目でも実の孫であるラクサスさんなら打明けているだろうと考えてのことだったようだけど…ラクサスさんは本当に知らないようだ。

アレクセイの正体はマスター・イワン。そして他の選手達もいる。どうやら観客席にいるのは思念体みたいだ…いや、五人だけではなかった。

「見せてやる、対妖精の尻尾特化型ギルド、大鴉の尻尾の力を!」

どうやら、大鴉の尻尾の主力メンバー全員を連れてきたらしい。選手達と殆ど変わらない魔力を感じる。やはり元閻ギルドというだけのことはある。奴らは妖精の尻尾のメンバーの苦手な魔法の使い手のみで構成されているらしいが…

(マスター、これ以上は…!!)

(うむ…任せたぞ、お前たち!)

(了解!)

隠匿魔法は、割と応用が利く。選手達五人はラクサスさんに近すぎるし、何よりラクサスさん一人でも何とかなるだろう。ここで僕達が暴れてしまって、僕らも不正扱いされては面倒だし…

「ドルモン、プロットモン、パタモン…行くよ。作戦通りにね」

「了解!!」

三体は光に包まれ、その姿を成熟期のものへと変化させる。それに奴らも気づいたみたいだけど…関係無い。

「ドルガモン、進化!!」

「ブラックテイルモン、進化!!」

「ユニモン、進化!!」

これが、お前たち大鴉レイヴァンテイルの尻尾の最後だ。

やはり、ラクサスさんがイワン含めた五人を相手に勝利。幻影もイワンの仕業だったようで、イワンがやられたと同時に解除されたらしい。

僕とデジモン達は力を合わせ、他の大鴉レイヴァンテイルの尻尾のメンバーを撃破：ついでに、奴らの本拠地も破壊しておいた。皆頑張ってくれた、っていうか大魔闘演武中は中々ストレスが溜まっていたらしく：久しぶりに暴れてストレス発散出来ただろう。

そして奴らのアジトで悪行の数々の証拠も手に入れているし、それらも分かりやすいように捕らえたメンバー達の近くに置いて来た。会場の近くだから、すぐ分かるだろう。暫くは牢から出ることも出来ないだろうね。

とにかくこれで僕らも次の試合に集中できる。次の、今日の最後の試合は：

『妖精の尻尾A、ウエンディーマーベル！対するは、蛇姫レイヴァンテイルの鱗、シエリアフェアリーテイルブレンディーっ！』

第90話 ウエンディVS. シェリア

ついに始まった、三日目バトルパート第四試合。ウエンディとシェリアの試合だ。ここからは僕も観客席で観戦をすることが出来るし、しっかりと応援しよう。

「ウエンディ！頑張れ！」

「うん！行つてきます！」

観客席から声をかけ、返事をしたウエンディを見送る…のだが、何も無いところで転倒。しかも何故か相手のシェリアという子まで転んでしまっていた。まさか、ウエンディ以外にそんなドジをする子がいたとは…

『実に可愛い組み合わせです！おじさん嬉しい〜！』

…実況の人が凄く気持ち悪いが、我慢するしか無い。

「行きます！」

「うん！」

「アームズ、バーニア、エンチャント付加！天竜の翼撃!!」

最初に攻撃力とスピードを上昇させた一撃を放つウエンディ。しかしシェリアは身軽に回避した。

「躲した!?!」

「北風よ！神の息吹となりて大地を駆けよ！天神の北風！」ボレアス

「ふっ…うわっ！」

地面を抉る黒い竜巻を躲したウエンディだったが、軌道を変えての二度目の攻撃は躲しきれず呑み込まれてしまう。

「ウエンディ！」

「大丈夫だよ、シャルル」

竜巻の中で竜巻と逆回転の風を起こして相殺、ウエンディはほぼ無傷だ。

「凄い、コレ避けるんだね！だったら…！」

無数の黒い風の刃。その全ての軌道を逸らし対処したウエンディ。シェリアはその間に真っ直ぐウエンディへと接近する。

「風よ、風よ！大地を抉り、空へ踊らせよ！天神の舞！」

「きゃあ!？」

黒い風に巻き上げられたウエンディ、シエリアもまた空中に飛び追撃を当てようとするが、ウエンディは風で体勢を立て直し逆にシエリアの後ろを取る。そのまま風を纏った蹴りを放った。

「天竜の鉤爪！」

「くっ！」

二人は着地と同時に遠距離攻撃を選択。殆ど変わらない魔力の高まり方、体勢。シエリアという少女の魔法は、ウエンディと殆ど同じだ。そして、滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーとよく似た魔法を扱う魔導士を、僕は知っていた。

「天竜の…！」

「天神の…！」

「駄目だ、ウエンディ！」

「咆哮!!」

「怒号!!」

風と風がぶつかり合い、視認が困難な程の風が巻き起こる。風が収まり、ようやく見えたのは…無傷のまま立っているシエリアと、ボロボロで座り込んでいるウエンディだった。

恐らくシエリアは、天空の滅神魔導士ゴッドスレイヤーなのだ。思い出されるのは、天狼島で対峙した火の滅神魔導士ゴッドスレイヤー、ザンクロウ。ナツさんと戦い、圧倒した男だ。魔力を空にして神の炎を食べるといふ荒技でようやく倒した相手だ。滅竜魔法より、滅神魔法の方が一撃の威力は高いのだろう…ザンクロウは楽々と天狼島の巨大な木々を切り刻んだりしていたし、何より。

滅竜魔法では滅神魔法を御しきれない。一度ナツさんがザンクロ

ウの炎を食べられなかったのがその証拠だ。

「驚きました…」

「リオンから聞いてたんだ。妖精の尻尾フェアリーテイルに私と同じ魔法を使う子がいるって。ちよつとやり過ぎちやつたかな？ごめんね、痛くなかった？」

「平気です…戦いですから」

「折角だから、もっと楽しもう？ね？」

「私…戦いを楽しむって、よく、分からないですけど…ギルドの為に頑張ります！」

「うん、それで良いと思うよ！私も愛とギルドの為に頑張る！」

…そういえば、ウエンディはこれまで敵としか戦っていないんだよな。せいぜい、やったのは修行した三か月で僕達と模擬戦くらい。好敵手ライバルと呼べる存在は、今までいなかった。戦いを楽しむという感覚が分からなくても無理はない。

接戦が続くが…ウエンディが押されている。このままじゃ、勝てない。シエリアの方が攻撃系の魔法に慣れているような気もする。

その事にウエンディも気がついたのか、一度シエリアから距離を取った。そして、周囲の空気を食べ始める。これは…あれをやるのか。

「あ、やっぱり空気を食べるんだね！じゃあ私も…頂きます！」

ウエンディと同じようにシエリアもまた空気を食べ始めた。彼女もまた大技で決めるつもりなのか…でも、先に食べ始めたのはウエンディ。先に仕掛けるのもウエンディだ。

「滅竜奥義!!」

「ウエンディが奥義だと?」

「勝ったわね」

「行け、ウエンディ!!」

「これは、風の結界…!?閉じ込められた!?」

「照破・天空穿!!」

閃光のような風の波動。風の結界に捕らえられた時点で、確実に決まる。これが今のウエンデイの全力の一撃だ。

マトー君がシエリアに近づいた。このまま気絶しているのなら、これ…!

「シエリア、ダウンっ！勝者、フェアリーテイル妖精の尻尾A——」

「あ、ごめんね！ちよつと待って！まだまだこれからだから！」

シエリアが立ち上がった。服はボロボロになってしまっているが…傷が再生している。まさか、自分の傷の修復…?ウエンデイでも無理なのに…シエリアは可能だというのは?これは、ウエンデイに勝ち目は…!

「ふう、やっぱ凄いな、ウエンデイ！」

「こ、これは失礼しました！試合続行ですカポ〜！」

「大丈夫？もう降参しとく？」

そう言っただけで心配そうにするシエリア。ウエンデイはフラフラで、今にも倒れそうにしている。息も絶え絶えで…

「ウエンデイ…」

シャルルは心配そうにしている…このままじゃ勝つどころか、大怪我することだってあり得るんだ、心配しないわけない。

僕だって、これ以上は無理して欲しくない。でも…ウエンデイは真つ直ぐにシエリアを見ている。ウエンデイが何を思っているのかが分かるから…止められない。

「私、戦うのは嫌いじゃ無いけど、勝敗が見えている一方的な暴力には愛が無いと思うの。降参しても良いよ？」

「…出来ません！私がここに立っているということは、ギルドの為に

戦う覚悟があるということですよ！情けはいりません…私が倒れて動けなくなるまで、全力で来て下さい!!」

「ウエンディ…!」

「ウエンディ!!!」

「っ！ゴーシュ…!」

「君なら、絶対出来る!!!滅竜奥義だって完成させたんだ!!まだ勝てないなんて決まってる!!!最後まで、力を振り絞るんだ!!!」

僕は大声でウエンディにそう伝えた。彼女がこの三か月どれ程頑張ってきたのか、一番近くで見えてきた。彼女の覚悟の大きさも、良く分かっている。だから、もう無理するな、なんて言わない。僕は、ウエンディを信じる。

「…倒れるわけには行かないんです。彼には、かつこ悪い所、見せられませんから!」

「そっか…それが貴女の覚悟、そして愛の力なんだね。だったら私も、それに全力で答えるよ!それが礼儀だし、これが私の愛!!」

シエリアの周りに黒い風が吹き荒れる。しかしそれはやがて黒い羽のようになり、美しさも感じさせる。

「全力の気持ちには全力で応える…それが、愛!!滅神奥義、天ノ叢雲!!!」

ウエンディにシエリアの大技が襲いかかる。が、シエリアの技は逸れていった。

「避けた!」

「いや、外れた!」

「どういうことツスカ?」

「ウエンディは傷の回復は出来ないけど、体力は回復出来る。今、ウエンディはシエリアの体力を回復させて勢いをつけさせて、外させたん

だ」

「なんて戦法!? 凄い…!」

「やあーっ!! 天竜の、碎牙!!」

「うあっ… 凄いよ、ウエンディ!!」

ぶつかり合う、二人の小さな拳。シエリアも大技を外したことで魔力が大幅に減少している。ウエンディもシエリアに必死に食らいつく。

「ウエンディ…!」

「頑張れ… 頑張れ!!」

そして。

『試合終了ーっ!!! この勝負、引き分け!! 両チームに5Pずつ入ります!!』

そのアナウンスが聞こえた瞬間、僕は観客席から飛び降りていた。

「ウエンディ!」

「ゴーシュ…!」

座り込んでしまったウエンディに手を出し、ウエンディは僕の手を取って何とか立ち上がる。またフラついて倒れそうになるのを、抱きしめるようにして支える。

「…頑張ったね」

「うん… 応援してくれて、ありがとう、ゴーシュ」

「うんうん、愛ってやっぱり良いよね!」

そう言っつて、シエリアは僕らに歩み寄ってウエンディの治療を始めた。既に自分の回復は終わらせているようだ。

「あ、あはは…」

「楽しかったよ、ウエンディ」

「私も、少しだけ楽しかったです!」

「ね、友達になるう? ウエンディ!」

「は、はい! 私なんかで良ければ…」

「違うよ、友達同士の返事」

「え？」

シエリアは一步下がって、僕はウエンディを自力で立たせる。

「友達になろっ！ウエンディ！」

「…うん！シエリア!!」

二人は笑顔を浮かべ、握手を交わす。同年代の女の子の友達はウエンディにはいなかった…本当に良かったね、ウエンディ。

…とりあえず気持ち悪いことを実況でさつきから言い続けてるあの人、どうしてやろうか。

第91話 リユウゼツランド

二チームともこれまでに無い最高の結果を残した、大魔闘演武三日目の夜。三代目に呼び出された僕とラクサスさんは、酒場を出て人気の無い場所へと移動していた。

「じじい、ルーメンイストワールって何だ？」

「イワンから聞いたのか？」

「聞いたも何も、異様に欲しがってるようだったな」

「全く、あのガキは…」

「僕も聞きました。妖精の尻尾の闇フェアリーテイルと言っていましたか…」

きつとこれは、本来ならただのギルドメンバーには伝えられないことなのかも知れない。けど、闇とかそんなこと言われたら気になってしまうのだ。どんなギルドでも闇の部分はあるとかイワンは言っていたけど、そんなのは偏見だと思うんだ。人柄や立場：様々な要因で考え方は人の数だけあるんだから。

「闇ではありません」

「初代！」

「光ルーメンイストワールの神話。これは我がギルドの光なのです」

「初代！いけませんぞ」

「分かっています。これはギルドのマスターとなった者しか知る権限が無いもの…ラクサス、ゴージュ。分かっていただけですか？」

「変なモンじゃねーなら別に詮索しねえよ」

「気にならないわけでは無いですけど…そういうことなら、僕も詮索しません」

「ありがとうございます」

光ルーメンイストワールの神話、か…初代に関係しているのは、何となく覚えているんだけど。イワンはそれを手に入れて何をするつもりだったんだろう。あのオジサン、どうも三代目とラクサスさんと血が繋がっているとは思えないほど小物臭がするというか…世界征服とか、そんな所だろうか？

「しかしイワンの奴はどこでその情報を掴んだのか…」

「二代目…プレヒトでしょうね」

「うむう、あり得ん話では無いな…」

マスターしか知り得ないんだったら、二代目しかいないよね。ここに初代と三代目がいるし、マカオさん四代目は代行みたいなものだからそれに關しては知らないだろうし、ギルダーツさん五代目は行方知れずだし。闇ギルドに關わっていたのは二代目だけだ。

「まさかプレヒトが闇に落ちるとは…私の浅はかな人選の結果が…」

「いいえ、初代のせいではありませんぞ」

「私のせいです…私が…ふぐつ…ひぐつ」

「初代がー!？」

「じ、じじい!どうすんだ!」

「な、泣いてなんか…いないですく!」

「ゴーシュ、ラクサス!あやせーっ!!」

「なっ!?ハードル高すぎんぞ、それ!」

ラクサスさんは子供の扱いとか分からないだろうなあ…しかも相手は子供じゃないし。寧ろ最年長だ…子供じゃないんだよね?何か、初代の年齢が気になってくるんだけど。確かに見た目は子供っぽいというか…とても大人には見えないと言うか。

とにかく、まずはあやすことが最優先だ。

「じゃ、じゃあ!どこか気分転換に良さそうな場所に行きませんか?」

「そうじゃ、それが良い!初代!ゴーシュが楽しい場所に案内してくれるそうですぞ!」

え、ちよつと?そこまで言ってますんよ?って、既に初代から期待の眼差しが…!

いや、今こそ大魔闘演武予選前に観光した前情報を役立てる時!どこか、どこか無いか…食事、にはちよつと遅い時間だし、こんな時間までやってる観光施設って…ん、待てよ?確か、ここからだ…あ。「あ、あそこなんてどうですか?」

☆

リュウゼツランド。ファイオーレ有数のサマーレジャースポットだ。

凄く大きなプールで、水族館なんかもあるってなんかの雑誌に書いてあった気がする。超有名らしく、夜遅い時間でもバリバリ営業している。

プールなので水着が必須。僕らは流石に持ち歩いたりはしていませんでしたが、そこは初代が持っていた物を借りた。前も気になったんだけど、幽霊なのにどうやってその質量ある大量の水着を：しかも女性物だけじゃなく男性用も混ざってるし。

今は大魔闘演武期間中だからか、夜にも関わらず観光客で超満員に近い。こんなに巨大な施設があるとは：七年で結構変わるものだなあ。七年前は王都のことなんて僕は気にしたこともないけど、もしこんな施設が出来ていたならウエンデイが気づいていたと思う。そういう特集の雑誌か何かたまたま読んでるんだよね。

「あれ？初代はどこに：？？」

「あそこだ」

ラクサスさんに指差された先を見ると、水の中に潜っている初代が見えた。さっきまですぐそこにいたのに：やっぱり初代も賑やかなのが好きなのかな。

「わーい！楽しいですね、プール！」

「な、何やってんの!？」

聞き覚えのある声が聞こえてきたと思ったら、ルーシイさんとエルザさんがいた。酒場にいると思ってたけど、皆で来たのかな？エルザさん、もう怪我は大丈夫なんだろうか：大丈夫なんだろうな。つていうか傷一つ見当たらないんだが。この人の回復力どうなってるの？あの頑丈が取り柄のエルフマンさんでさえまだ医務室で寝込んでいるのに…

「何って…」

「あやしておる」

「ははは…」

「はあ…？」

「あ！いつけない、大事なことを忘れてました！泳ぐ前には準備運動

ですよね！さあ皆さん、ご一緒に！」

「何で俺が…」

「黙ってやれラクサス。初代の命令じやぞ」

三代目、もう既に体操しているし。あれ、これ僕もやらなきや駄目な感じ？

体操している間に、フリードさんとビッグスローさんが合流。なんかどんだん大所帯になっていくな…

「はい！準備運動終わり！それでは泳ぎましょう！」

そう言って、また水の中へと飛び込む初代。本当に最年長なんだろうか、あの人…どうやらラクサスさん達は見守ることにしたようだ。

「ゴーシユ、ちよつと来なさい」

「何ですか？」

「これで飲み物を買って来ると良い。お前さんも色々見て回りたいたいじゃろ？顔に書いてあるぞ」

「あ、いや…じゃあ、お言葉に甘えて。ありがとうございます」

小銭をくれた三代目に御礼を言って、早速色々見て回ることにした。どこから行こうかな…目につくのは、凄い長いウオータースライダーと…あ、あの建物が水族館かな。魔法の世界の水族館…興味あるな。あのウオータースライダーは、ちよつと。名前がラブラブスライダーって、行きにくいし…よし、先に水族館の方に行こう。

それにしても、ルーシイさん達がいたってことは他の皆も来ているんだよね、きつと。つてことは…ウエンデイも来てるのかな。そう考え始めてから、つい目で探してしまう。変な男とかに言い寄られたりしていないかな…

「……つて、流石に過保護か」

これじゃ。いつかウザいと思われるかも…それも嫌なんだけど、ウエンデイが心配なのが正直な気持ちだし…どうするのが正解なんだ？影ながら見守れば…いや、それは最早ストーカーか。そもそもウエンデイは強いんだし、馬鹿なマネする男はいないはず…いや、でも――

「さつきから何してんの？」

「あ、皆…いつの間に」

「今！楽しそうだから、つい！」

「大丈夫、あまり離れたりはしないようにするよ」

デジモン達が普通に人前に出てきてしまっているけど…やっぱり、この世界の人はデジモンを見てもそこまで大騒ぎしたりしないみたいだ。まあ、ハッピー達を見ても普通に会話しているから、デジモン達もそういうものだと思っっているのかもな。

「そういえば、今までこういう所は連れてきたこと無かったつけ…よし！今日は思いっきり遊ぼう！」

「ホント!? やったーっ！じゃあ水泳競走しようよ！ドルモンとパタモンもー」

「僕は泳ぐの得意じゃ無いから、上から見てるよ」

「じゃあ、どこか広そうな場所探そうか」

これだけ広いんだ、それなりに広くて人があまりいない所だってあるだろう。

パタモンが見つ付けてくれた、人気が無い広いプールで早速ドルモンとプロットモンと一勝負することになった。僕はまだ子供だからそこまで体格に差は無いけど、流石に負ける気はしない。だって二体とも、犬かきしか出来ないでしょ。手足の長さ的に。

「それじゃ、位置について、よーい…ドン！」

パタモンの合図で同時に飛び込む。身体能力の高さもあるからか、そこまで引き離されること無く僕のすぐ後ろにつく二体。でもスピードはほぼ同じ、このままいけば勝てる！

「っ!?!」

そう思っていたら、急に耳が痛くなった。まさか…プロットモン、水中でパピーハウリング使ってる!?

「メタルキャノン！」

「ちよ…!?!」

ドルモンは真後ろに向かって技を放ち、反動で大きく前に出る。し

かも前に出てからも放つから、僕達に鉄球が襲いかかる。これ、妨害とかアリなの？ だったら、僕だって…！

まずはドルモンの鉄球でプールが壊れないように弾性結界を展開。バウンドそして二体を防衛結界の中に閉じ込めておく。

「こんなのアリ〜?!」
「ぐぐつ…!」

いや、先に妨害してきたのそっちだからね？ 文句を言われる筋合いは無い。ちゃんと十秒くらい経ったら解除されるから。

結果は僕、ドルモン、プロットモンの順でゴール。まあ当然の結果だ。そもそも妨害しない方が良い勝負できただろうに。

「ゴーシユの勝ち〜!」

「おーい!」
「ん?」

パタモンが降りてきて僕の頭の上に乗ると同時に、どこからか声が聞こえてくる。声が聞こえてきた方を見ると、そこには水着姿のシエリアとウエンデイがいた。良かった、探す手間が省けて…それにシエリアと遊んでいたのなら、心配する必要も無かったか。

「あ、ウエンデイだ〜」
「やっぱりゴーシユも来てたんだね。さっきマスター達もいたからもしかしてって思って探してたんだ」

成る程…互いに動いちやっつたから合流までに時間がかかったちやっつたのか。ずっとマスター達の傍にいたら良かったな。

「ウエンデイ〜、ゴーシユがいじめるの〜!」
「よしよし、大丈夫だよ」

プロットモンがウエンデイにダイブして、慰める。既に見慣れた光景となりつつある。プロットモンはふざけてやっているのは間違いないが、ウエンデイは…あれは天然な気がする。最初こそオドオドしていたけど、慣れたんだろうな。

「可愛い〜これがさつきウエンデイが言ってたデジモン?」

「うん、プロットモンにパタモン、あっちにいるのがドルモンだよ」「ねね、デジモンって姿が変わるんでしょ？私見てみたいな！」

そんなこと言われてもな…非常時じゃないと進化しても疲れさせちゃうだけだし。基本大きくなるから周りの皆がビツクリしちゃうから、そう言う意味でも却下だ。

「ごめん、それはまた別の機会にするよ」

「良いじゃん！私進化しても良いよ？」

「駄目。せめて場所を変えなきゃ」

「えー…」

「そっか、じゃあまた今度だね！今はプールで遊ぼっ！」

シエリアがそう言つて、ドルモンがいたプールの中に飛び込む。水飛沫で一瞬見えなくなったが、次の瞬間にはシエリアしかいなかった。その代わり、シエリアの近くの水の中から泡がブクブクとしていた。

「シエ、シエリア！下、下！」

「え？あ！ご、ごめんね！君、大丈夫？」

「ぶはっ…し、死ぬかと思ったよ」

「ウエンデイ、私達もゴーツ！」

「え!!」

「ほら、早くおいでよーっ！ゴーシユも早く！」

「え、僕も？」

「たまには良いんじゃない？皆で遊ぼうよ〜」

そんなやりとりの直後…なんか、バキツみたいな壊れる音が聞こえた。その音を聞いた僕とウエンデイは若干顔が引きつり、デジモン達とシエリアは疑問に感じたようだ。

「あれ？今何か聞こえなかった？」

「…ところでウエンデイ、ナツさん達ってどこに？」

「ごめん、はぐれちゃったから…やっぱり、今の？」

「あ！皆、あそこー！」

ドルモンが声を荒げ、目線の先を見る。あのラブラブスライダーと

やらの入り口に設置されている大きなハート型のオブジェの上にいるナツさん。そのハート型のオブジェが本来の設置場所から外れ、スライダー部分へと倒れそうになっていた。やっぱりナツさんか！

「ゴーシユー！」

「分かつてる！防御結界・立方《スクエア》！」デイフエンド

ナツさんごと覆うように展開された結界で、オブジェによってスライダーが破壊されるようなことは無かった…とはいえ、多分これ修理代はギルドに行くよね。まあ、オブジェだけで済んだのは良かった――

と、思った次の瞬間。

「きやあつ!?!」

「な、何?！」

「今度は…グレイさんか」

スライダー部分から広がるように、プール全体の水が凍り付いた。折角修理代が少なく済むと思ったのに…勘弁してよ。

凍り付く瞬間は見ていたから、大体の居場所は分かる。でも…まずは目の前をどうにかしないと。氷に呑み込まれたウエンデイとシエリア、そしてドルモンとプロットモンを救出しなきゃ。僕とパタモンは咄嗟に空中に避難した。

「ゴーシユ〜…さ、さぶい〜……」

「はいはい、今助けるよ。循環サイクの結界」

「ま、待って！それよりあっちどうにかしないと！」

「ナ、ナツさん!?!」

「え?…なつ!?!」

ハート型オブジェから飛び出して（防御結界は破壊されてた）、空中からナツさんが炎を纏った拳を叩きつけようとしていた。あれ、絶対全てを木っ端微塵にしちゃうよ！

「外殻の結界!!」

咄嗟だったから円環殻を展開する時間が無かった…!これじゃナツさんが本気だったら結界が持つかどうか…

「ゴーシュ、邪魔すんな!氷溶かせねえだろうが!」

「いや、駄目ですよ!それ、絶対プールごと壊しちゃいますって!」

や、ヤバい!ナツさん本気でやる気だ!こうなったら、こつちも循環の結界を…いや、ここからじゃ距離があつて間に合わない!

「面白え、勝負だゴーシュ!!火竜の——ごはっ!」

「馬鹿なマネしてんじゃねえ」

ナツさんの顔面に、ラクサスさんの右ストレートがクリーンヒット。よ、良かった…ナツさんの本気だと絶対外殻の結界で守り切れな気がする。っていうか、あれを破壊する勢いだと絶対そのままプールが壊れていたよね。

後はプールを凍らせた犯人^{グレイさん}なんだけど…って、既にラクサスさんに捕まっていた。何でか一緒にいたりオンさんも捕まっている…あ、これ共犯か。この氷で被害が出てなければ良いんだけど。

☆

グレイさんとリオンさん、ナツさんの暴走を何とか阻止した事によって、プール全壊を阻止することが出来た。マスター二人は涙目ながら警備員に捕まったけど、きつと賠償と嚴重注意で済むことだろう。多分、きつと、おそらくは。

ラブラブスライダーも入り口のオブジェが壊されたことによって、しばらく使用禁止されることになった。ライダー部分も水が凍り付いたせいで所々に穴が空いてしまっているので、再会されるのはか

なり先になつてしまふだろう。

「あくあ、残念だったねウエンデイ」

「え？それってどういう…」

「な、何でも無いの！」

「えく？だつて二人は付き合つてるんでしょ？別にこれに二人で乗りたいっていうのは愛がある証拠だと思うけどなく」

「もう、シエリア！」

ウエンデイが顔を真っ赤にしながらシエリアを追いかけていった。何かもうすっかり打ち解けてるなあ…

「…また、来ればいつか」

さて、明日からも頑張らないと！明日からならリザーブ枠でもいいけるし、僕もアップしておかないとね！

第92話 海戦

大魔闘演武四日目。僕は今、Bチームの皆が待つ選手用観客席へ続く道を歩いていた。リザーブ枠のカナさんと交代し、また試合出場メンバーとして参加することになったのだ。競技内容によつてはまた僕も出たい。一日目は正直微妙だったからな…競技パートはそれなりに良かったけど、バトルパートは負けたし。今度こそ頑張るぞ、と気合い一発両手で頬を叩く。

それにしても…昨日はホント大変だった。リュウゼツランドが壊れるということは無かつたけれど、それでも所々破損もあったので賠償は免れなかった。それでたつぷりとお叱りを受けた原因のナツさんとグレイさんだが、その程度のことでは最早慣れっこのようで…リュウゼツランドはしばらく休業となつたので酒場でまたどんちゃん騒ぎした。よくあれだけ騒げるなというも思うけど…楽しかったのは違くない。おかげで眠いけどね。

「お、来た来た！」

「お待ちせし…誰？」

てつきり誰かが待つていたのだと思つて反射的に受け答えしてしまつたが、目の前にいたのは知らない人物だった。僕くらいの背丈に、黒いシルクハットと黒いローブを身に纏っている。シルクハットを深く被つている為か顔は良く見えない。

何でこんな所に人が…？それにどうやら僕のことを待つていたようだけど…こんな人物を僕は知らない。そもそも僕と同年代なんてウエンディとかイーロンとか…大体が同じギルドの仲間だ。他のギルドで僕達くらいの魔導士は見たことが無い。そしてここは選手用の観客席へ向かう通路だ。一般人は勿論、ギルドの仲間くらいしか入れないはずなのだ。

「えつと…僕に何か用事ですか？ここ、フェアリーテイル妖精の尻尾のメンバーしか通

れないはずなんですが」

「あ、ごめんごめん！どうしても君に会いたくて、つい警備員の目を盗んで入っちゃったんだよね」

そう言つて笑いながら答える少年（少女？）。要するにこの子は不法侵入したつてことか…でもなんでわざわざ僕に会いに来たんだ？

「ボク、ゴーシュさんのファンなんだよね〜！一日目のジユラとの戦い、凄かったもん！」

「え…あ、ありがとう」

ファン…僕に？確かに一日目のバトルパート以降は妖精の尻尾への風当たりは多少なくなつたけど、実際にこうして面と向かつて言われるとは…嬉しいけど、なんか気恥ずかしさも感じるな。ファンなんて出来るとは思つてなかつたし。

「嬉しいけど、ちゃんと一般用の観客席に戻らないと駄目だよ。僕も一緒に行つて謝つてあげるから」

「え!?そんなことしなくて良いって！ボクだけでちゃんと行けるよ！それにもうすぐ競技パート始まつちやうでしょ?」

そうだった…でもこの子がちゃんと謝りに行くか少し不安なんだよな。気づかれずに不法侵入するくらいだ、気づかれずに戻ることも可能だろう。それになんかこの子、わんぱくつて印象が…

「…そんなに信用できない?」

「あ、いや…」

「じゃあ指切りしようよ！それなら安心でしょ?」

小指を立てて右手を出してきたので、僕もそれに応じて同じように右手を出す。

小指と小指を絡めた瞬間、僕は唐突に、激しい目眩と頭痛に襲われた。

「うっ…!?!」

「ゴーシユさん!?!」

くそっ…頭の中がグルグルと回ってる。立ってることもままならない…段々と意識が遠のいていく。早くしないと、時間が…

☆

『大魔闘演武、四日目!!本日の競技パートがまもなく始まるうとして
います!競技の名前はナバルバトル!海戦、海の戦いという意味です
!球場の水中競技場から外に出てしまったら負け!最後まで残った
者が勝者です!ただし、最後に二人だけ残ったときに特殊なルールが
追加されます!それは、五分間ルール!最後の二人になって五分!五
分の間に場外に出てしまった者は最下位となるルールです!』

『謂わば水中相撲といった所かねえ』

『楽しみですね、ありがとうございます』

司会が競技パートの説明をしている中、妖精の尻尾ではある問題が
発生していた。妖精の尻尾フェアリーテイルBチーム、カナと交代で参加すること
になっていたはずのゴーシユがまだ姿を現さないでいるのだ。

「兄貴が!?!」

「そう…こつちに寄るって言ってたから、アンタ達なら知らないかと
思ってたね」

「知ってるも何も…俺達さつきゴーシユ兄といたぜ?」

「真っ直ぐそつちに向かったはずなんすけど…」

ギルドメンバー用の観客席で、カナがロメオとイーロンの話を聞き
眉間にしわを寄せる。真面目なゴーシユが競技パートが始まる直前
までいないとは考えづらい。となると何かしらの妨害があったのか。
そう考えるギルドの面々。

しかし、妨害を行う者に心当たりが無かった。唯一の心当たりは

レイサントイル
大鴉の尻尾くらいだが、彼らは昨日ラクサスの活躍によって反則行為が露見し、評議員によつて連行されていったはずなのだ。

「…いないものはしょうが無い。このまま私がリザーブ枠で出場するよ」

「うむ。儂らはゴーシユを搜索しよう」

『各チーム、着水していきます！』

カナはBチーム用の観客席へ、ギルドの皆がゴーシユ搜索へ乗り出した。

そして遂に海戦の出場メンバーが各々着水していく。奇しくも女性魔導士が水中競技場に集まっていく。約一名、水中競技場にいる男性は解説者から舌打ちを受けていたが、そんなことは誰も気にもとめない。

『それでは海戦！開始です!!』

実況の声と共に競技開始のゴングが会場に鳴り響いた。Aチームから出ていたルーシィは開始と同時に金色の鍵を取り出す。

「早速だけど、皆ごめんね！開け、宝瓶宮の扉！アクエリアス！」

ルーシィの持つ最強クラスの星霊、アクエリアス。水のある場所では呼び出せないという条件はあったが、今回はアクエリアスが力を発揮するに相応しい場所だった。

「ウオオツ！水中は私の庭やーっ!!」

「させない！水流台風!!」

ジュビアとアクエリアスの魔法が互いにぶつかり合い、相殺されていく。両者の魔法は完全に互角だった。ジュビアも、アクエリアスを使役するルーシィも互いに第二魔法源を解放したことで大幅に魔力が向上したが、それでもまだアクエリアスがやや上回っているはずだった。それを互角にまでジュビアの実力を引き上げているのは、ジュビアの思いの力。グレイに無様な姿は見せられないという覚悟の力だった。

「な、なんて戦い…！」

「強敵同士が潰し合ってくれてる…だったら今の内に！」

ルーシイとジュビアの魔法に巻き込まれないように動いた
青い天馬のジェニー。迂闊にも二人の戦いに巻き込まれないように
と水中から体が出る手前まで離れていた唯一の男性、四つ首の仔犬の
ロツカーにこっそりと近づき蹴りをお見舞いした。ロツカーはあつ
さりと場外へと吹っ飛ばされた。

それまで動いていなかったルーシイとジュビア以外の面々も、それ
ぞれ戦闘を始める。そんな中、魔法を相殺し続けるルーシイに変化が
あった。

「このままじゃ拉致があかない：一旦戻るよ！」

突然アクエリアスがそんなことを言い出したのだ。

「え、何ですよ!? 水中じゃアンタが一番頼りになるんだから！」

アクエリアス以上に水中で力を発揮できる星霊は、ルーシイの契約
している星霊の中にはいない。いや、星霊界全体で見てもいない。黄
道十二門は、星霊の中でも最強の鍵なのだから。

アクエリアスは攻撃が殆ど全体攻撃に近い。それもルーシイすら
巻き込まれかねない程の高波で敵味方構わず攻撃してしまう。しか
し何だかんだ言ってもルーシイの中では最も頼れる星霊の一人であ
り、冷静な彼女のことだ、何かの作戦だろうか? そう考えたルーシイ
に対してアクエリアスは。

「デートだ」

そう言っただけで消えていった。

「ちよ、ちよつとく!?」

アクエリアスが消えたことで、ジュビアは隙ありと見てそのまま
水流台風でルーシイを攻撃する。ルーシイはそれをアリエス、バル
ゴの二体同時開門によりどうにか凌いだ。

「私も良いとこ、見せないとね！」

「やれるものならやってみな！」

「アタシのことも忘れないでよね！」

「シエリア！」

一方、ルーシイとジュビア以外に動いた三人が三つ巴の戦いを繰り

広げていた。ジエニーと人魚の踵マーマイドヒールのリズリー、そして蛇姫の鱗ラミアスケイルのシエリアだ。三人とも水中向きの魔法ではないが、それぞれ魔法を駆使して戦っている。それを観客席から見ていたウエンデイが身を乗り出す。

『妖精の尻尾フェアリーテイルのウエンデイたん！自分も戦いたそうです！』

「え？」

『昨日引き分けとるからねえ』

『今度こそ、この手でシエリアたんを倒したいと言わんばかり！』

「…そ、そんなこと思ってたませーんっ!!」

ウエンデイの叫びは、会場の盛り上がりによって殆ど無意味だった。

この瞬間、ギルドメンバー用の観客席ではイーロンがこの場になくて良かったと内心ホッとしていた。昨日のウエンデイとシエリアの試合中、司会に対して殺気をずっと送り続けていたからだ。まるで視線で射殺せるのではないかと錯覚させるほどの殺気だったのだ。要するにゴーシュが嫌がりそうなことはイーロンも嫌がるのである。

『ウエンデイたんの戦いを、私も見たかった…前にウチの劇団を助けてもらった節は、ありがとうございます』

『妖精の尻尾フェアリーテイルAよ！なぜウエンデイたんを出さなかったのか…！』

『今からでも交代しろっ！…ありがとうございます』

「うるさいっ！」

解説席にいるのは、以前ウエンデイが受けた心を癒やして欲しいという依頼の依頼主だ。それまで殆どゴーシュやシャルルらと一緒に依頼を受けていた彼女が、一人前になりたいと言って受けた依頼である。

ナツ達からすればあまり良い印象を持たれていない依頼主でもある。何かと人使いが荒いのだ。そのせいで劇団員が一時期ボーイコットしていたこともあったとか無かったとか。

「…全員纏めて倒します。水中でジュビアに勝てる者など、いない！
第二魔法源セカンドオリジンの解放によって身につけた、新必殺技…届け、愛の翼！グ

レイ様ラブ!!」

「止めろーっ!!」

ある一人の男性が放った叫びも虚しく、ジュビアの必殺技が放たれる。それによりズリ、ジェニー、シエリアの三人は場外へと弾き出されてしまった。水中に残っているのはアリエスとバルゴの力により持ちこたえたルーシィと…これまで全く動いていない剣咬セイバートゥースの虎最強の五人の最後の一人、ミネルバのみ。

(ジュビアを見て萌えてくれましたか、グレイ様…!)

ジュビアがAチームの観客席に目をやると、そこには真っ白になっているグレイの姿があった。どう見てもドン引きしている。それを見たジュビアは、いつの間にか場外へと出ていた。

こうして、水中に残ったのはミネルバとルーシィの二人だけ。ここから五分間ルールが適用される。ルーシィは一度星霊を戻し、魔力と体力を無駄に消耗しないようにする。

「妾の魔法なら、一瞬で場外にすることも出来るが…それでは興が削がれるというもの。耐えて見よ、妖精フェアリーテイルの尻尾」

「な、何、これ…ぐあっ!」

連続して何らかの魔法攻撃を続けるミネルバ。ルーシィはあらゆる方向から、あらゆる属性を付与された攻撃を受け続ける。

何とか体勢を立て直したルーシィ。すぐさま腰にあった星霊の鍵を使おうとしたが、いつの間にか腰に巻いていたホルダーごとミネルバに奪われていた。

「いつの間に…うあっ!」

場外まで吹き飛ばされそうになるも、何とかギリギリの所で持ちこたえる。しかし、状況は変わらない。また同じようにミネルバの攻撃に晒され、耐え続けるルーシィ。星霊の鍵だけでなく、星エトワールフルレダの大河も奪われてしまっているのだ。ルーシィはただ耐えるという選択肢しか

残されていなかった。

「あたしは…どんな攻撃も、うつ、あつ！耐えて、みせる…！」

「そろそろ場外に出してやろうか」

ミネルバがルーシイを確実に場外へと出す為、連続攻撃を仕掛けようとする。

「こんな所で、負けたら…ここまで繋いでくれた皆に、合わせる顔が無い！あたしは、皆の気持ちを裏切れない！だから、絶対…諦めないんだ!!」

ルーシイの覚悟を聞いた後、ミネルバは動きを止めた。五分間ルールも残り三十秒近く残っているが、ミネルバはそのまま固まり…五分間ルールが終了するその時まで動く事は無かった。

『五分経過！あとは順位をつけるだけとなったーっ！』

実況のその声が響いた後、ミネルバは先程までの攻撃とは比べものにならない程の魔法攻撃を繰り出した。

「うああっ!!」

「頭が高いぞ、妖精の尻尾！フェアリーテイル我々を何と心得るか！我らこそ、天下一のギルド、セイバートゥース剣咬の虎ぞ!!」

『これは流石に場が…消えた!』

「っ?ぐあつ…！」

場外へと飛ばされそうになったルーシイを転移させ、自身の目の前まで戻すミネルバ。無防備なルーシイに対し、思い連撃を叩き込む。ルーシイはされるがまま、水中である為受け身も、ダウンもなかった。サンドバッグにされている。

「止めろおおっ!!」

ナツの叫びを聞いてか、観客席にいた他のセイバートゥースの剣咬の虎のメンバー達が悪趣味な笑みを浮かべていた。それに対し、妖精フェアリーテイルの尻尾の面々はさらに怒りを募らせる。

「セイバートゥースの剣咬の虎に逆らうというのがどういふことか、その体に教え込んで——む？」

ミネルバが更に追撃をしようとした次の瞬間、水中競技場の中に青色の結界が突如出現し、ルーシイを守るように包み込んだのだった。

第93話 戻った記憶

くっ…やっぱり、遅かったか…!

「…これはどういうつもりだ？妖精の尻尾B、フェアリーテイルゴージュユールガードナー殿」

余裕そうな態度で…いや、実際余裕なんだろう。僕の方へ視線を向けるミネルバ。よくもまあ、あそこまで人を痛めつけられるものだ。どう見てもこの競技は決着がついている。問題は咄嗟に手を出してしまったことだけ…不味かっただろうか。奴もすぐに妨害した事実を明確に公言して追い詰めてきている。

「競技を中断させてしまったのは謝ります。でも、これ以上は戦いとは言えない、ただの暴力です。既に勝敗は決している…違いますか？」

そう宣言するように言い放つ。このまま続けるつもりとか運営側が宣言したらどうしよう…いや、原作を思い出すにそれは無いかとは思うけど、ちよつと不安にはなる。

『た、ただ今運営側からの通達によりますと、妖精の尻尾Aのルーシイは既に気絶している為、フェアリーテイルレフェリーストップをコールしようとしていた所だそうです！しかし、ゴージュユが競技の妨害をしたことも事実であり、罰則として妖精の尻尾Bはマイナス5ポイントとなります！』

良かった…実質、僕が手を出したことによる罰則は無いようなものだ。この後バトルパートからはAチームとBチームは統合され、それまでの点数が低い方の点数になる。マイナス5ポイントになっても、僕が初日に原作ブレイクで取った分の得点によってAチームのがまだ低い。

『よって、勝者！セイバートゥース剣咬の虎、ミネルバーっ!!』

「…ふん」

ミネルバがルーシイさんの頭を掴んで水中から出し、そのまま手を離した。それを見てすぐに僕は弾性結界でルーシイさんを受け止めた。ルーシイさんを物みたいに扱うとは…人をなんだと思っっているんだ。

「ルーシイ!!」

「ルーシイさん!!」

「手伝うよ、ウエンデイ!」

「ホーリィ聖結界…二人とも、頼む!」

ナツさん達が観客席から飛び降りる。ウエンデイがルーシイさんの傍に駆け寄り、治癒魔法をかけ始め、会場にいたシエリアもそれに加わってくれた。僕も多少手伝っておく。

そんな中、ナツさんとグレイさんとエルザさんはセイバートゥース剣咬の虎の奴らとにらみ合う。一触即発な空気で、特にナツさんとグレイさんが襲いかけりそうだ…多分大丈夫だろうとは思うけど、一応ね。

「デイフエンド防御結界・壁」

「…おい、ゴーシユ」

「言いたいことは分かります。でも、問題行為をしたのは僕です。彼らは…反則していない」

「よく分かってんじやねえか」

不満そうにするナツさんだが、僕の説明で何とか引いてくれようとしていたのに…オルガが逆撫でしたせいでまた睨み始めちゃったじゃないか。

「…それ、返してもらえますか?ルーシイさんの大切なものなので」

「…ふん」

デイフエンド防御結界を解除し、ミネルバから星霊の鍵を投げ渡された。すると、エルザさんが一歩前に出てこう宣言した。

「二つだけ言っておく…お前たちは一番怒らせてはいけないギルドを敵に回した」

エルザさんがそう剣咬の虎《セイバートゥース》に告げた後、僕らはルーシイさんを医務室へ急いで運ぶことにしたのだった。

☆

「ルーシイは無事ですか!」

「お前ら…」

「チームは違っても同じギルドでしょ」

「で、どうなんだ」

Bチームの皆が医務室へとやって来た。特に命に別状は無いことを伝えると、ひとまずといった様子で安心してくれたようだ。

「すみません、皆さん。勝手なことをして…」

「別に構わねえよ。この程度、すぐに取り返せる」

「スカツとしたくらいさ、気にしなくて良いよ」

「…はい」

あまり勝手な行動は控えないといけないな。こういうのはナツさん達に任せて、どっちかというところフォローするのが僕の立ち位置だったのに。

「あいつら…」

「言いてえことは分かってる」

「う…」

「ルーシイ！」

「皆…ごめん……」

「ああ？なんで謝んだ？」

「また、やつちやった…」

いや、ルーシイさんは何も失敗していない。五分間ルールで少し危なかったけど、無事に二位だったんだから。

「何言ってるんだ、ルーシイのおかげで二位だぞ」

「8ポイントゲットです！」

「ああ、よくやった」

「ルーシイさん、これ」

「あ…良かった…ありがとう……」

ルーシイさんの手の上に星霊の鍵束を置くと、安心したようですぐに眠ってしまったみたいだ。

「それにしても、何かモヤツとするねアイツら！」

「剣咬の虎《セイバートウス》…」

「気に入らねえな」

「Aチーム、Bチーム全員集まっとったか。丁度良かった」

マスターが僕らに伝えたのは運営側からの通達で、チームを統合し

て新チーム五人を選び直すこと、得点は僕の予想通りAチームに準拠するということだった。

そもそもなんで四日目の競技パートからこの統合をしなかったのか：チームが奇数になってるんだからこうなるのは分かりきっているだろうに。これ、妖精の尻尾が二チーム出てなかったらどうするつもりだったんだろう。レイヴンに関しては不足の自体ではあっただろうけど。

「しかし、運営側の判断なら仕方が無いか…」

「考えようによつては、さらに強いチームが作れるわけだしね」

「けど、今から五人決めても、残る種目はこれからやるタッグバトルだけなんだろう？」

「いいや…明日の休みを挟んで最終日、五人全員参加の戦いがあるはず。慎重に選んだ方が良いよ」

「俺は絶対にルーシィの仇を取る！仲間を笑われた…俺は奴らを許さねえ!!」

☆

どうやら、試合の組み合わせは変更は無いようだ。妖精の尻尾のメンバーも原作と一緒のままだし問題は無いだろう。

「ゴーシュ、ここにいたんだね」

「ウエンデイ…」

医務室から離れて、ドムス・フラウの入り口で一人休んでいたら、ウエンデイとシャルルが目の前にいた。

「なんでここに…ルーシィさんの治療はもう良いの？」

「うん。シエリアのおかげで外傷はないし、後は休んでいれば明日には動けるようにはなるよ」

「それよりアンタ、何処行つたのよ！皆で探していたのよ？」

「…長くなるけど、良い？」

今頃、青い天馬と四つ首の仔犬のタッグバトルが始まっているだろう。もしかすると、話し終える頃にはナツさん達の試合が終わってし

まうかもしれない。

「長くなるって…何があつたのよ？」

「…うん、良いよ」

「ナツさん達の試合、終わるかもしれないよ」

「ナツさん達なら大丈夫だと思うから」

そう、真っ直ぐ僕を見てウエンディは言った。まあ、原作云々関係無く、僕も今のナツさん達なら剣咬セイバートゥースの虎なんかには負けるとは思っていないけどね。

しかし、説明するには今まで黙っていたことも打明けなければいけない。今まで殆ど忘れてしまっていたが、全て思い出した。信じてもらえないかもしれないけど――

「…戻ったんだ」

「え？」

「記憶が…僕の昔の記憶が、戻ったんだ」

「ほ、ホント!？」

そう言った瞬間、ウエンディは僕に詰め寄った後、すぐにハツとして悲しそうな顔をした。

彼女はずっと、僕の昔の記憶が無いことを気にかけてくれていた。ハデスとの戦いで僕の過去について分かった時は、その奴隷や実験体としての過去が僕を苦しめていないかと心配してくれた。今までは僕の記憶が戻って欲しいと思っていたけど、ハデス戦以降は戻らない方が僕が苦しまなくて済むと考えていただろう。

「大丈夫だよ、ウエンディ。僕は思い出せて良かったと思ってる」

「そう…そっか」

「でも、なんで今なのよ？何か切欠とかあつたわけ？」

「まあね…今から話すよ」

☆

僕はあの、通路にいた謎の人物によって記憶を戻された。今も尚続いている目眩と頭痛は、前世の忘れていた記憶と今世の失われていた

記憶、そして僕が知らないはずの、僕が死んだ以降のアニメ、漫画の記憶が流し込まれたことによるものだ。

「あ、起きたか？」

目を覚ましたその時、僕は変な空間にいて…目の前にはあの謎の人物がいた。

「君は…ぐっ」

「ああ、無理しない方がよいよ。そのまま横になって」

最初、僕はこの子も僕と一緒に誰か敵の攻撃でも受けて拉致されてしまったのだと思っていた。変な格好はしていたけど、表裏がないような元気な子供みたいな言動で、一般人の子供だと思っていた。

しかし、その子供の肩に乗っていた黒い生き物を見て僕はその考えが違うことをすぐに理解した。

「そいつ…は、レイヴンの…」

「信じられないくらい頭痛いでしょ？ボクも経験あるから分かるよ」

「君の、仕業…なのか？」

「お、流星に気づいた？」

子供は僕に近づいて、無理矢理立ち上がりとしていた僕を支えて立ち上がらせた。

「そ、これはボクの仕業。ここは…魔法空間、ってどこかな？」

「魔法、空間…？」

魔法空間とは、エルザさんやビスカさんが使う、換装用の武器や防具を入れておく為の空間のことだ。しかし、人間が入れるという話は聞いたことが無い。

「ああ、ゴーシュさんが知っている魔法空間とは別物だよ。まっ、もうすぐ知ることになるだろうけどね。具体的には大魔闘演武が終わっ

て全部片付いた後、かな？」

「…君は、何者なんだ？」

警戒心を強めながら僕は尋ねた。今の言い方だと、この子供は大魔闘演武の後に問題が起こることを知っているような…

「言ったでしょう？ボクは君のファンだよ。別に取って食ったりはしないよ、今日はただ借り物を返しただけ！ちよつとした贈り物もね。あ、サービスに観客席の近くに飛ばしてあげるね！」

「なっ…待って！ちゃんと説明——」

良く分からないまま僕は光に包まれ…気づいた時には、一般人用の観客席近くの通路で倒れていて、ルーシイさんが痛めつけられていたのを見て咄嗟に結界で妨害したというわけだ。

で、それからはずっと頭痛と目眩を皆に悟られないように我慢し続けていた。ついさっきまでは今世の過去と前世の忘れていた記憶を思い出し、今流れ込んでいるのはあの子供が贈り物と言っていた知らない記憶だ。

これは僕が知らないはずの漫画やアニメの記憶ばかり。しかも何故か防御系の技がメインで思い出せる…これは、僕の結界魔法の参考にしろということなんだろうか？そして最後と言わんばかりに、あの子の言葉が浮かんできた。

『借りてたものは返したから、許してね！』

ただそれだけだった。いや、意味が分からないよ…戻って来た記憶の中で、僕の今世の過去の記憶であの黒い生き物(ゼレフの使い魔)に何かされているのが見えただけ。勝手に記憶奪ったってことだよね…しかも、本人には気づかれないように前世の記憶を少しずつ、このことを思い出せないように今世に生み出されてからの五年間。

結構大変だったよ？前世の記憶があつたら悪魔グリモアの心臓との戦争や無限時計の一件ももつと早く何とか出来たと思う。

あの子は転生者で間違いない。僕の知らない前世のアニメや漫画の記憶が流し込まれたことが証拠だ。問題は、あの子が僕の前世の記憶まで使つて何をするつもり、もしくは何をしたのかだ。今まで殆ど原作と変わっていなかったが…これからは、原作と大きく乖離するかも知れない。それ程大きな事をあの子はするつもりだと思う。しかも、あの使い魔がいたということは…いずれ、僕とあの子は敵対するかも知れない。もう、前世のことを知られることを怖がっている場合では無い。ギルドの皆知つてもらわなければと思つた僕は、まずウエンディとシャルル、そしてマスターだけに話すことにしたのだつた。

そしてこの内容を二人に伝えるのに、僕は三十分以上かかってしまった。頭痛と目眩するから仕方無い、と思いたい。

第94話 ナツVS. 双竜

「——大体、こんな感じかな」

全部話した。前世の記憶があること、知らない記憶もあること、そして僕がいない世界…この世界によく似た、本来の漫画の「FAIRYTAIL」の世界の知識があること。勿論、漫画とは言わずパラレルワールドの知識があるって言い方したけど、間違っではない。

ウエンディに初めて会った時にも前世の記憶は持っていたことも話した。それが何故かどんどん薄れていって、昨日まではもう殆ど残っていなかったこと、それはあの黒ローブが原因だったらしいことも伝えた。なんで話してくれなかったのかとも聞かれたけど、あの時五歳だったウエンディには未来にあたる知識を与えたくなかったと伝えたら、ちゃんと理解してくれた。シャルルも未来予知が出来るからか共感してくれてるみたいだった。

「ジェラルル…ミストガンには会った日の夜に勘づかれたよ。前世の記憶があるってことは話した」

「そうなんだ…」

「じゃあ、アンタはこの後何が起こるか知ってるわけ？」

「…うん。大魔闘演武がどうなるのかも知ってる。でもさつき話したように、僕以外の人にパラレルワールドの知識を話すべきではないと思ってるよ。参考にならないかもしれないし」

「どういうこと？」

「そのパラレルワールドは、僕がいない世界なんだ。だから違う点もあつたりする。例えば、僕が連れてきたイーロンは本来ギルドにはいなかったりね」

大体僕が関わってきたことで起こったことは原作と乖離してしまっている。イーロン、ミッシェルさん、あとロメオもそうか。原作以上には強いと思うし。

「その点で言えば、一番あり得ないのはドルモン達なんだけど…」

「そうなの？」

「デジモンに関する知識も前世の記憶にあつただけけど、この世界と

は無関係だったはずなんだ。それがどういうわけかデジモン達がこつちの世界に現れるようになってしまった…まあその理由は分からない。コレに関しては関係があるかも怪しいし…それより重要なのは、僕も全く知らない敵がいることだ」

「ゴージュの知識を盗んだ奴ね」

「アイツが何をするつもりか分からない。僕は今後、アイツの行う悪事を止めることを前提に動こうと思う。今は全く情報が無いけどね」
前世の記憶を持った転生者がすることって言ったたら、大体は俺TUEEか知識を悪用した良からぬ事だろうからね。下手したら、こつちが原作で起こったピンチに対応しているのに乗じて何かしてくるってことは大いにあり得る。

…あれ、僕はどつちもしてないような？別に魔法を覚えてから俺TUEEした記憶もないし…まあ、いつか。

「ゴージュ」

そこで、ウエンデイが真剣な表情で僕を見つめてながら僕の名前を呼んだ。僕も少し戸惑いながらも、真っ直ぐに彼女の目を見る。

目を見れば相手の言いたいことが分かる、というのを初めて実感した。彼女から感じるのは、僕が恐れていた軽蔑ではなく、信頼だった。これまでと変わらない…いや、これまで以上の信頼を僕は感じた。

信じて、くれてるんだ…今までこんな大事なことを黙ってたのに。理由があったとしても、こんな大事なことを隠していたら…普通、怒ったりするもんだと思うんだけど。

「…良いの？」

「何が？」

「いや、二人からしたら僕はただ変なことを言ってるだけだし…普通信じられないでしょ？」

「だって、ゴージュだから。それだけで、私は信じられるよ」

「ハア…私は色々言いたいことあるけど、ウエンデイが追求しないな

「何も言わないわ」

「ウエンデイ…シャルル…：ありがとう」

そう言つて微笑んだ姿が、凄く輝いて見えた。ホント、僕の幼馴染みがこの二人で良かった。

☆

さて、と。具体的にこれからどうするか。二人が僕のことを手助けしてくれるなら出来ることも多くなるだろう…とはいえ、今は特に何もすることは無い。というか、編に行動したら怖い。

原作と違う行動が出来るのはメリットが多いように思えるが、デメリットもある。例えば、今このタイミングでルーシーさんの部屋にウエンデイがないことで、王国軍が再び攫おうとする、とか。

まあ、これはあり得ないとは思っているんだけど…アルカディオスが攫う気がないと言つても、その部下までもやらないとは言えない。時間ループ…とは違うけど、そういう話を読んだことがある。つまり、原作を変える行動をした時に全ての人物がどう行動するかを考えなければいけないのだ。

そう考えると、二人に原作の展開を教えても良いものだろうか…とも思うんだけど、ここまで話しておいて黙っておくなんて出来ないと思う。未来に影響しすぎないように、小出しにして伝えるようにしよう。今から「もう少ししたらフェアリーテイル解散するんだよ」とか伝えるのは、ちよつと…僕が躊躇う。

フェアリーテイルは僕らの家だ。フェアリーテイルの皆は僕らの家族だ。もう家族と一時的にだとしても失うのは…辛い。特にウエンデイには酷だ。彼女にとっては、唯一の家族だから…あんな顔、もう二度とさせたくない。ただ、先延ばしになるだけだとしても。

とりあえず今、伝えた方が良いのは…ルーシーさん誘拐と、ドラゴン襲撃、その元凶であるエクリプス…くらいか。大魔闘演武の結果は言わなくても良いだろう。重要なのはドラゴン達の特徴と大体の出

現場所か…流石に、全部は分からないが、少しでも情報があるに越したことは無い。

「あ…そ、そういうえば皆が探してるって言ってたっけ？」

「質問攻めされるの間違いなしね」

「と、とりあえず体調が悪かったって言つとくよ…ウエンデイに治療して貰ってたって言えば信じて貰えると思うし。それより、これから起こることについて話しておきたいことがいくつもあるんだ」

「うん！」

「分かったわ」

それからしばらくして。突如、ドオオオオン!!という凄い音と振動が、会場からした…もしかして、いやもしかしなくても…：…うん、遅刻した。

☆

大急ぎで僕達三人はギルドメンバー用の観客席へと向かう。到着したときに目に入ったのは、中央に広がる巨大な穴と魔水晶^{ラクリマ}ビジョンに映ったナツさんとガジルさんの姿だった。

「ゴーシュ兄ー！」

「ゴーシュ、お前さん何処行つとつたんじゃ」

「お待たせしました…ちよつと体調が優れなかったので、外で休んでまして」

「大丈夫なのかい？」

「ウエンデイに治癒魔法かけて貰ったので、何とか。それで、これはどういふ状況ですか？」

ちよつと白々しいくらいの演技だったけど、気づくのはウエンデイとシャルルくらいだろう。何も知らない人からしたら当然の疑問だろうから。ここで会場の大穴に触れなかつたら違和感あるしね。

「ウチからはナツとガジル、セイバーからはステイングとローグだつてよー」

「さつき、凄い音がしましたけど…」

「ステイングの咆哮で、こんな大穴が空いちまったんだよ！」

「凄い威力ね…」

「最初はナツとガジルが押してただけど、途中から向こうが急に強くなつて…」

なるほど、あれが第三世代の力。自身の滅竜魔法と同じ属性の魔水晶ラクリマを体内に埋め込むことでいつでもドラゴンフォースが使えるっていうあれか。ここからでも膨大な魔力を下の方から感じる…この穴、どれだけ深いんだろうか。ステイングの滅竜奥義で地表だけ破壊したから内部が見えたのか、ここまで貫通させたのか…まあどつちにしろあれだけの力ならナツさん達相手に善戦出来ているのも頷ける。

「…ゴーシュ、この後どうなるの?」

小声で話しかけてくるシャルル。何で今そんなこと聞くんだ?

「話して良いの?」

「話して欲しいというか…ホントに知ってるのよね?」

「どういう意味?」

「気づいてないのね…汗、凄いわよ」

シャルルに言われて自覚したのは、手汗を強く握りしめていたことと額から滴るほどの大粒の汗が流れていたことだった。

「言い方悪いけど、結果が知ってるなら安心して見てられるんじゃない?それとも、私が予想する結果とは違うのかしら?」

「…多分、皆が信じている通りの結果だよ。でも、心配したり不安になつたりしないわけじゃないんだよ」

「…成る程ね、納得したわ」

何について納得したのか分からないけど…それは一旦置いておくことにする。目の前の映像に集中したい。

ナツさんとステイングがぶつかり合い、ナツさんが大きく吹き飛ば

される。ガジルさんも攻撃に加わり二人がかりでステイングを攻撃していくが、ステイングは防御し、見切り、全ての攻撃を捌いている。これが、ドラゴンフォース…！あのナツさん達が、二人がかりでも…。

やがて、ステイングがナツさんとガジルさんを地面にひれ伏させた。

「ナツう…！」

「ガジル…」

「どうした立て！お前はそんなもんじやないだろう！」

「ナツ達でも勝てねえのかよ…」

「悔しいぜ、チクシヨ…！」

「ナツ兄い！立ってくれよーっ!!」

「…ナツさん、ガジルさん」

セイバートゥース
剣咬の虎が勝利したかと思われたその時、二人が、立ち上がった。

「ナツさん…！」

「ホント、しつこいというか何というか…」

「意外と、元気そうだよね…」

しつかりと立っているし、準備運動が終わったかのような動きをしている。まあ、あの二人ならステイングの攻撃によるダメージを最小限に抑えるくらいは出来るだろう…ラクサスさんと戦った時の成果、なのだろうか？

その後、ナツさんとガジルさんがステイングとローグに向かって何か言っているが、すぐに喧嘩を始めてしまった。

「何をやっとするんじや、バカたれ共が…」

「元気が有り余ってますね！まだまだこれからということでしょう」

「流石だなあ…」

ステイング達からすればナツさん達の行動って煽りっぽいんだけど…それよりも驚愕が勝っているってことか。

…あ。ナツさんがガジルさんをトロツコに乗せて、ガジルさんが何

処かへ運ばれて退場してった。そしてナツさんはステイング達に対して手の炎でCOMEONの文字を作っている。

「もうすぐ、決着…かな」

「！」

「何でそう思うんだよ、ゴージュ兄！まだまだこれからだろ？」

「うん、そうだね…でもきつと、ナツさんが勝つよ」

「ああつ、だよな！」

ロメオが満面の笑みを浮かべる中、ウエンディとシャルルは僅かに反応した。どうしてもと言われてさつき教えたことを思い出したんだろう。これが、僕が未来の知識を持っている証明になる。

——もうすぐ決着。それが試合終了間近の合図。ナツさんが、ステイングとローグを打ち倒すよ。

ナツさんがステイングとローグの攻撃を全て捌く。しかもナツさんの方から仕掛けてステイングとローグは徐々にダメージを負っていつている。

追い詰められたステイングとローグは並び立ち、それぞれ左手と右手に魔力を集める。双竜を双竜たらしめたその魔法は、ナツさんへと解き放たれる。

ユニゾンレイド——聖影竜閃牙と対峙したナツさんもまた、滅竜奥義——紅蓮爆炎刃で迎え撃つ。

想いの力は、時に魔法の威力を何倍にも上げる。ドラゴンフォースを持って全力で放たれたであろう彼らの最高の一撃は、火竜の刃とぶつかり合った。

そして、余りの威力によつて一時的に破損した魔水晶^{ラクリマ}ビジョンが回復し、映し出されたのは……倒れるステイングとローグ、そしてボロボロながらも勝ち誇っているナツさんの姿だった。

第95話 改変への道

大魔闘演武もついに四日目の夜を迎え、それぞれが英気を養っている頃。ナツさん達はガジルさんの案内でドラゴンの墓場へと向かった。ウエンディ達にもそちらへ向かって貰っている。ミルキーウエイがないとジルコニスと話が出来ないからね。

「マスター、初代。お話があります」

「なんじやい、いきなり」

僕はこの二人にも僕の前世の話をしないといけないので残ることにした。

正直、ルーシイさんの危機に何もしないというのは思うところがあ
るのだけど…何も出来ない可能性が高い。というか原作でのナツさ
んと同じ結果になるとしか思えない。魔法使ったら魔力持つて行か
れるって、それなんてチートだよ。

勿論、作戦は一応考えた。成功すれば、ナツさん達に加えてユキノ
さんも一緒に来るはずだ。

「今日、僕の過去を全て思い出しました」

「何!?!」

「…確か、貴方はプレヒトの具現のアークで造られた存在、でしたね。
そしてウエンディとミストガンに出会うまでの五年間の記憶が無
かったと聞きましたが…それを思い出した、ということですか?」

マスターが話しておいてくれたんだろうか。話が早くて助かる。
初代が一瞬だけ苦々しい顔をしたのに僕は気づいた。

「いえ、それだけではないんです…長くなるのですが、聞いて下さい」

☆

「……俄には信じがたいですね。この世界の未来を知っているとは
…」

「正確にはパラレルワールドの知識です。もうこの世界の未来とは言
い難い」

「しかし、限りなく近いのは確かじゃ…それで、儂らに話しておきたいことはその事か？」

「え？は、はい…参考程度ですが、今から僕は未来に何が起こるのかを全て、これから話そうと思います」

…あの二人もそうだったけど、皆すぐ信じてくれるんだよね。もう少し疑っても良いと思うんだけど。

「その前に聞きたい…この話を他に知っている者は？」

「ウエンデイとシャルルだけです。まだ未来の知識は話してませんけど…いえ、敵も含めるなら僕の記憶を奪った者、その仲間も含まれるでしょう」

そうだ、あいつはゼレフと…アルバレスと繋がりがあある。これから先の展開…恐らく、冥府タルタロスの門から先の敵は原作とは違う展開になる可能性があある。どう動くかは未知数になってしまっているんだ。

「敵の話は良い。ガキ共には話せんのか」

「…まだ、今はまだ出来ません。大魔闘演武が終わった頃には、必ず「そうか…いや、急ぐ必要は無いぞ。お前さんが話したい時で良い」…ありがとうございます」

僕がまだ気持ちに整理をつけ切れていないのを察してくれている…この人のギルドの一員になれて、本当に嬉しい。

「それと、どうしても今すぐに教えて欲しい魔法があります…このままでは、明日…命を落としてしまう人が大勢出てしまう」

「命を落とすじゃと…!?!」

「話してもらえますか？明日、私達に何が待ち受けているのか」

僕はひとまずとして、大魔闘演武編の話をした。このままいけばどのような未来が待ち受けているのかを。今を取り巻く複数の未来の話。

ドラゴンの大群によって攻め込まれたクロツカス。滅竜魔導士が

七人では勝ち目などなく…その先に待っているのは、破滅だった。今現在このクロツカスにいる魔導士の大半は死んでしまうのだろう。それどころか、フィオーレは滅亡する。これが、一番最初の未来であり、未来ルーシイさんが辿ったであろう未来だ。

さらにややこしいことだが、未来ログが干渉した未来と干渉しなかった未来がある。干渉した未来というのはつまり、原作が辿った未来だ。

一方、干渉しなかった未来、つまり未来ルーシイさんがエクリップスを閉じたことで未来ログが生まれた未来だ。経緯は不明だが、この未来ログが生まれた世界線ではアクノロギアが世界を支配している。分かっているのは、グレイさんがログの相棒であるフロツシュを殺してしまうということ。それが原因で闇墜ちしたログが今の時間軸に来た。

僕が辿り着きたいのは、当然だが原作が辿った未来だ。しかし、これにはどうにかしなければならぬ問題がある。それは…未来ルーシイさんが殺されてしまうこと、そしてウルティアさんが寿命を使い果たしてしまうことだ。

僕が今やらなければいけないことの最優先、それはウルティアさんがそんなことにならないように代用の魔法を身につけること。実はこれは僕が記憶を取り戻す前から計画していたことだ。つまり、魔法の構想自体はもう粗方固まっている。その魔法を完成させる為の最後の一手、それが――

「…妖精の法、ですか」

「はい。正確には、妖精の法に組み込まれている、敵と認識した者を対象とする魔法術式の真逆…味方と認識した者を対象とする魔法術式です」

「…成る程。読めてきたわい」

「貴方の魔法を使って、クロツカス全域にいる者達を守るつもりですね。ですが、それは莫大な魔力の消費、加えて寿命を削ることにもな

るでしょう…」

「…覚悟は、出来ています。前々から準備はしてきました」

「…初代、ここはお任せ願えますかな」

マスターが僕の目の前までやって来ると…僕を真つ直ぐと射貫くような目で見つめた。同時に発せられたその膨大な魔力に、冷や汗をかき始める。

「お前の覚悟は分かった…が、認めるわけにはいかん。子供が命を賭けるなど、許す親がいるものか」

「…僕は本気です。これは僕がやりたいことなんですよ、マスター」
「命を捨てるのがやりたいことじゃと…!!」

マスターの魔力の放出が、一段と強まった。顔も…怒りに染まっていくようにも、その目は悲しんでいるようにも僕には見えた。

「違います、命を捨てるわけじゃない…守りたい人達がいる、それだけです。それに自己犠牲は…もう止めたんです」

僕の覚悟を示す為に、僕は全力以上の魔力を一瞬だけ放出した。それだけで、二人は目を見開き驚いた。

「何、じゃと…!?!」

「これは…!」

「これが、準備の成果です。この結界魔法…循環の結界を開発してすぐ、僕は毎日、自分の魔力が尽きるまで注ぎ続けました。こうして存在し続けている間、魔力はこの結界の中に溜めることが出来る…今のでも、ほんの一部です。これでも信用できませんか?」

三ヶ月間欠かすこと無く、限界ギリギリまで魔力を注いだ循環の結界を使えば、限界以上に魔力を使うことが出来る。約90人分の僕の魔力が使えるわけだ。

「これ程の魔力があれば、寿命を削られるとしてもほんの少しでしょう。さらに法と違い、敵を討つのではなく仲間を守る為の魔法…相手

の攻撃の威力にもよりますが、削られる寿命も限りなく小さく済むはずです」

「では……」

「ゴーシユ、こちらへ。早速魔法術式を構築しましょう」

「はい!!」

唾然としているマスターを置いて、僕は初代の後を追った。

「今ので一部じゃと……?確かに一瞬だけだったが……儂の魔力を上回っておったぞ……?」

☆

やがて、ドラゴンの墓場に行っていたナツさん達が帰ってきて……原作通り、ルーシイさんだけがいなくなっていた。今グレイさんとエルザさんがマスター達に事の次第を報告している所なので、僕も一旦休憩ということで、別室でウエンデイとシャルルに話を聞くことにした。

ジルコニスからの話で滅竜魔法を使いすぎるとドラゴン化してしまうことや、アクノロギアによってドラゴン達が滅ぼされた戦争の話……竜王祭のこと。そしてその後アレクセイという騎士とユキノさんによってエクリップス計画について聞かされ、そこに大臣らしき人物によって罠にかけられたこと。そこで……ルーシイさんとユキノさん、アレクセイが捕らえられてしまったらしい。僕が考えた作戦は失敗したということだ。

「ゴーシユ、ごめんね……」

「ううん、大丈夫。ウエンデイ達のせいじゃないよ」

言ってしまうと、今ルーシイさん達を助けてもあまり流れに影響は無いと思う。どの未来を辿るとしても、結局はエクリップスの元まで辿り着き、あの扉を閉じなければ待っているのは破滅なのだ。あそこまで向かうことには変わりない。

なので、ウエンデイが落ち込む必要は無いという意味で言ったのだが…しかしウエンデイは首を横に振る。

「違うの、そうじゃなくて…」

「違うって…？あれ、そういえば」

「気づいた？あの子ならきつと、今頃ルーシイの服のポケットの中よ」

若干ドヤ顔気味のシャルル、そして苦笑いしているウエンデイを見て、気づいた。これは多分…勝手に作戦変更したんだ。

「えつと…どうなったの？」

「今ルーシイ達を助けてもあまり変わんないじゃない？だったらいっそ、明日救出に向かう時に暴れて貰った方が簡単に合流できるんじゃないかしら」

「それに、あそこで暴れてたら大魔闘演武が中止になっちゃうかもって思っ…それでシャルルと相談してルーシイさんのポケットにこっそり入れておいたんだ」

二人にはもう大魔闘演武編の話はしてある。言っていないのは大魔闘演武の結果くらいだ。

ちよつとビックリしたけど…確かに、そっちの方が楽に事が進むと思う。臨機応変に変更してくれて良かった…無事、結果オーライだ。

「三体とも入れたの？」

「それが…一体だけなの。ルーシイさん達、牢屋に連れて行かれたと思うんだけど、他の子達は大きすぎて…」

「あー…確かに。地下どころか、城や町に被害出ちゃうかもしれないね」

「やっぱりその辺考えて無かったのね…どつちにしろ、一体しか出せなかったわね」

「そうだ、二体とも返しとくね」

ウエンディからサイコロくらいの大きさ・形状の黄色い結界を二つ手渡される。僕はそれを受け取り、デジヴァイスを準備する。

「コンプレッション 圧縮の結界、解除！」

二つの結界が大きくなっていき、中の二体が解放された瞬間にデジヴァイスへと吸い込まれていく。その直後、デジヴァイスから声が聞こえた。

『ふあゝ…ただいま』

『今戻ったよ、ゴーシュ』

「お帰り。パタモン、ドルモン」

これでルーシイさんの所にいるであろう残り一体は予想通りだということが証明できた。いや、この三体の完全体の姿を考えれば分かりきっていたんだけど。ホントにデカすぎるんだよな…特に、ドルモンはなあ。パタモンの方もそこまで大きくは無んだけど、牢屋…そして地下ということを考えてとミスマッチだ。

とにかく、後はタイミングを見て僕がルーシイさんの方のコンプレッション 圧縮の結界を解除するだけだ。

☆

ナツさん達の方は話が進んでいて、今は大魔闘演武のチームメンバーにジユビアさんが立候補している所だった。

漫画で読んでてもこの場面は少し予想外というか…ナツさんの離脱は予想できたけど、ジユビアさんだとは思ってなかった。ミラさんだと予想してたけど、まあそうだよな。ミラさんの魔法、潜入には持って来いだよな。

「お、ゴーシュ！何処行ってたんだよ！」

「今、ルーシイ救出組と、大魔闘演武に出る最後の一人を決めてるんだけどよ！」

「マスター、ここはジュビアに任せて下さい！」

「あー、えっと…」

…なんて言おう。まだ皆には僕の事情知らないし。何も考えて無かったな…そうか、僕がどっちかに加わるというのは考えられる話か。一応大魔闘演武にも出たし、ちゃんと戦力として役立てるのは嬉しいんだけど…

そんな風に僕が考えを巡らせていると、マスター達が助け船を出してくれた。

「ゴーシュには、別にやってもらうことがあります」

「何だよ、別にやることって？」

「それはまだ言えん。極秘じゃ」

「気になるツス〜！」

助かった…皆不満そうにしているけど、マスター二人がそう言うのならと渋々納得してくれているようだ。

僕はもう、修行に費やすことに集中するしかないんだ。どちらかに加わる余裕はない。大魔闘演武は原作通りジュビアさんに任せるとして…救出組ならまだ、戦力増強出来るかもしれない。

「マスター、提案が——」

「私を、救出組に入れて下さい!!」

僕の声が、叫ぶような悲痛な声で掻き消された。

第96話 潜入

大魔闘演武最終日。グレイ、エルザ、ジユビア、ガジル、ラクサスの五人がチーム全員参加の最終競技に挑んでいた頃。

ゴーシユが妖精フェアリーの法の魔法術式習得の為に、初代の指導の下修行に励んでおり、一方でまたナツ達救出組は王城へと向かっていた。

「ん？おい、何だお前…：ていうか誰だそいつ？」

「侵入者だ。あの妖精の娘を助けに来たんだろ」
妖精フェアリーの尻尾か！

「うーん…：今は陛下も国防大臣もいないしなあ」

「牢に連れて行くしかなかろう、連れてけ！」

「了解」

「ん？おいおい、牢はあっちだよ」

「え？ああ、すまない。ここに配属されたのは最近でな」

ミラが王国兵に変身し、ナツが捕らえられたフリをし忍び込んだ。城内へと続く道を聞き出し、周囲に人気がなくなった所でゴーシユから預かった圧縮コンプレッションの結界を取り出す。魔力を込めた右手でデコピンをすると、結界が壊れ中にいた四人と三匹が姿を現した。

「ふう〜！何とか成功ツスね」

「やっぱりゴーシユの魔法って便利ね〜」

「サイコロみたいな大きさなのにあんなに広いんだもん…：他にも結界沢山あるしな」

「とりあえず進むぞ！待ってるよ、ルーシィー！」

「姉さん…：絶対に、助けるから！」

ナツの後に続くのは、ウエンディとミラの他にエクシード達三匹。そして、本来ここにいない三人の人物がいた。ロメオ、イーロン、ミツシエルの三人である。

この三ヶ月の修行により大幅に成長した三人を見込んだゴーシユの推薦で、救出チームに加わったのだ。自分の代わりに、仲間を助け

てくれと頼まれて。最も、ミッシェルは自分から立候補していたが。「あそこだ！」

「ナツ兄、もうちょっと静かに！」

ナツの嗅覚を頼りにしながら進み、ルーシイの下へと辿り着いた。牢の中にはユキノもおり、二人とも気絶しているようだ。小声でルーシイにナツは声をかける。

「おい、ルーシイ！ルーシイ！」

「ん…ん？ナツ！皆も！私ね…んぐっ」

「シーツ！静かに！」

「ご、ごめん」

「皆様、どうやってここまで…」

「いいから、少し下がってろ」

牢の鉄格子をナツが掴み、熱によって形状を変化させ進入口を作る。

「着替え、持ってきたわよ」

「ご飯もあるよ！」

「ユキノさんの分もありますよ」

「いえ、私は大丈夫です」

「姉さん、無事で本当に良かった〜！」

「ミッシェル、分かったから着替えさせて〜！」

「二人とも、覗いちやダメよ？」

「何で俺達に言うツスか!？」

「それ、真っ先にナツ兄に言うべきじゃねえの!？」

「…あれ？ルーシイさん、ポケットに——」

ミラとウエンディが牢の中にあつた大きな布を持ち、ルーシイが着替えている最中にそれは起こった。突如地鳴りがし始め、牢屋内の床が抜けたのだ。

「うわあ!？」

「ちよ!?!着替え中なんですけど〜!!」

「確か…この辺りに…！」

ウエンディはルーシイが先程まで来ていた服のポケットを探る。その中には、ゴーシユのパートナーデジモンの一体が入ったコンプレッション圧縮の結界が入っていた。ゴーシユが解除する予定だったが、まだ予定していた時刻ではない為、ウエンディは魔力を込めてそれを叩く。すると――

「ん…やつと出番？あらか？」

中にいたのは、プロットモンが完全体まで成長した姿だった。成熟期のブラックテイルモンからさらに進化し、ミラと同じくらいの大人の女性のようにあり、しかしその姿は悪魔や吸血鬼、ゾンビを連想させるものだった。

「だ、誰だお前！」

「なんか出てきた!?!」

「酷い言われようね…プロットモンよ、今はレディーデビモンだけだね。貴方達も飛んだら？余った人は任せなさい」

「でもこの人数じゃ…」

「問題ないわ。ダークネスウェーブ！」

飛翔を可能としているレディーデビモンは、ロメオとイーロン、ミッシェル、ルーシイ、ユキノを自らが出したコウモリのようなエネルギーの塊を無数に出し、それらを足場にすることでゆっくりと下降する。

ナツ、ウエンディ、ミラはエクシード組が助け、しばらく下降し続ける広い空間へと着いた。

「ありがと、プロットモン…じゃなくてレディーデビモン！」

「呼びづらかったらそのままでも良いわよ？ルーシイ」

「それにしても…随分落とされちゃったな」

『ようこそ、奈落宮へ』

「あん?」

「誰?」

その女性の声は、この空間に反響しておりどこから話しているのか分からなくしているようだ。

「…近くには人はいないわ。私達だけ」

「そうなの?じゃあこの声って…」

「通信用魔水晶ラクリマか」

『見事に罠にかかりましたね』

「罠ですって?」

『辺りを良く見なさい。ここは死の都、奈落宮…罪人の行き着く最後の自由。しかしここから出られた者は一人もいない。そこで朽ちていくが良い、賊よ』

足下には白骨化した死体が、そこら中に転がっていた。声を信じるなら、これらは犯罪者達の成れの果て、ということになる。

「誰だよテメエは!」

『私はファイオーレ王国王女、ヒスイEファイオーレ』

「じゃあ、この城のお姫様?」

「こわっ…!」

「くっそー!出口どこだ、出口っ!!」

「…何も聞こえなくなったツスね」

「でも、出口は上だろ?落ちてきたんだから、また飛んで戻れば…」

「いくら私でも無理よ?さっきだって出来れば上に戻っていたわ」

ロメオの提案にレディーデビモンは小さく首を横に振る。出口と思われる場所は既に何かの仕掛けで隠されたようで、上は岩の天井が広がるだけ。もし出口が見えていたとしても、飛んで戻るには何度も往復して運ばなければならぬのだ。

「どうする?ナツ兄」

「オイラ達が辺りを見てくるよ!」

「それが得策だろう」

「そうね。アンタも手伝いなさい」

「ええ。勿論よ、シャルル」

「なんか、やりづらいわね…」

「いつもはシャルルのこと、お姉ちゃんみたいに懐いてるもんね…」

☆

「ハア、ハア…」

「ゴーシュ、大丈夫？」

「あ、ああ…まだ、大丈夫だよ」

僕は今、自分で作った^{コンプレッション}圧縮の結界の中で特訓をしていた。今頃、ナツさん達は…さつき、^{コンプレッション}圧縮の結界が解除されたのは分かったから、ルーシイさんとユキノさんの二人と合流したと思う。プロットモン、ちゃんと仕事してるかな…いや、完全体のレディーデビモンになっている時はシャルルに似た感じだから大丈夫だと思うけど。

「ゴーシュ、戻ったよ」

「ドルモン…どうだった？」

「やっぱり^{ラクリマ}魔水晶ビジョンで中継されてたよ。さつき 그레이 がルーファスを倒してた」

大魔闘演武最終日は、このクロツカス全域をフィールドとしたバトルロワイヤル。他のチームメンバーを一人倒す毎に1ポイント、チームに一人だけいるリーダーを倒すと5ポイントが加算される。最後に点数が高かったチームが優勝だ。

^{コンプレッション}圧縮の結界は本来、作った後に結界の中に入ることが出来ないんだが、術式を組み合わせれば特定の者だけ出入りすることが出来る。といっても、一名だけだが…^{ディフェンド}防御結界と同じく解除された際に僕が感知出来るし…作って良かったな。

それにしても…大魔闘演武も着々と終わりが近づいてきている。既に 그레이 さんがルーファスを倒したのなら…残された猶予はもう殆ど無い。

「時間がない。急がなきゃ…」

「妖精の法は習得出来たの？それが出来れば何とかなるんでしょ

く？」

「いや：それだけじゃ不可能だ。クロツカスにいる皆をドラゴンから守る結界魔法を完成させなきゃいけない」

「え？それってもう完成してるんじゃない？」

「構想は、ね。ただ、今実験してみても分かった。やっぱり問題なのは消費魔力量と持続時間：それに、発動に時間がかかりすぎる。問題が山積み過ぎるんだ」

消費魔力と持続時間に関しては大量に用意しておいた循環サイクの結界グルを使って、それでもようやく発動が可能なレベル。持続時間も：今のままなら数十秒くらい。そもそもこの持続時間にしても、対象毎に変化する。

数値化させると分かりやすい。例えば今この場にいるドルモンとパタモンにそれぞれ耐久値が100のバリアを展開すれば、当然二人のバリアの消耗は変わる。ドルモンが10ダメージを受けた時に、パタモンが20ダメージを受けていることもあるのは当然だ。

僕が今言った結界の持続時間は、何も攻撃を受けてない状態での持続時間という意味だ。

「どうも、魔法展開が上手くいかない：何が足りないんだ」

「単純に魔力が足りていないんじゃないか？まだゴーシュの今ある魔力しか使わないで五分以上発動できていたんだよね？」

「いや：君たち二人だけなのにしたった五分だ。さっきパタモンだけだったら、大体十分くらいだった：消費魔力も対象の数によって倍々と考えて……僕達や他のギルドメンバー全員となると……」

計算は間違っていない。今の妖精フェアリーの尻尾テイルのメンバーはかなり少ないが、他のギルドは昔よりも増えているだろう。しかも、恐らくドラゴンとの戦闘に参加する魔道士はまだ大勢いる。何せ、脱落した沢山の魔導士ギルドのメンバーもいるのだから。

術式によって補正があるのに、今の実験の結果だと大勢いる魔導士

達を守ることが出来るのは本当に一瞬だ。どうやら耐久値に関しては変わらないようだ。…これではたった一撃防いだけで解除されてしまうことになる。

「ゴーシユも魔力量上がってるはずなのにね」

「でもさつき、術式で補正しても大して変わらなかったんでしょ？」

「…術式の補正が、効かない？外からの魔法を、受けつけていない…それって——」

それって、僕の中の問題ということになる。心当たりがあるとすれば…一つしかない。

僕の中の魔水晶ラクリマ。それは、滅竜魔法の魔水晶ラクリマのこと。緑竜の滅竜魔法を使う力の根源だ。

確かに、あり得る。緑竜の力はまだその全てが分かったわけじゃない。最初は、魔法を切り裂く特性を持っているのかと思っていた。以前、バイロさんと戦った時に魔法を全て無効化されたにも関わらず緑竜の力が暴走したのは、バイロさんの無効化の魔法そのものを切り裂いたからではないかと。

でも、違った。ジュラさんとの戦いで僕は気づいた。緑竜の特性は、魔法を切り裂くのではない。緑竜の魔力は、ジュラさんの魔法を分解ぶんかいしていた。

「まさか…僕自身が発動する結界魔法にも作用しているのか」

「何か分かったの？」

「…うん。でも、どうすれば良いのか分からない」

僕の体内の魔水晶ラクリマを取り出す？そんなことが出来るなら最初からやっているんだけど…ここにきて緑竜の滅竜魔法が障害になるとは思わなかった。

封印とかも…いや、結界魔法バリアーで作るにしても時間が足りなさすぎ

る。誰か、封印系の魔法を使える人、もしくは僕の中の魔水晶ラクリマを取り出せる空間系の魔法を使える人がいれば……

「…仕方無い。もう少しここで術式の改良に努めよう。二人とも、実験に付き合ってくれ」

「分かった」

「りようかい」

この後、僕は何とか魔水晶ラクリマの力を完全に抑えることが出来ないか色々試して見るも失敗に終わってしまうのだった。